
アルティロイド 究極の生命体

XL エクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルティロイド 究極の生命体

【Nコード】

N48470

【作者名】

XL エクセル

【あらすじ】

第一部～理想郷～それはアルティロイドの少年ティータと、人間の少女ティオの、出会いの物語。

第二部～覚醒スル命～それは悪魔の覚醒と、勇者誕生の物語。

第三部～星屑の光のように～それは全ての決着と、全ての幸せを掴む為の物語。

PV20000達成できました！

「アットノベルズ」様にて、転載中。

第一部 プロローグ

シャングリラキングダム。天空高くそびえ立つような塔のよ
うな城国。かつては理想郷への階段と呼ばれ、人類の希望となり得
ていた。人類の発展を願って建設された王国は、天空つまりは理想
郷を目指す為に国王が創ったものである。人々は国王に賛同し、共
に理想郷へ歩むべく力を合わせ天空を目指す。

しかし、いつしかそんな時代の国王も病で倒れた。国王の死に人
々は嘆き悲しんだ。しかしそんな悲しみも一瞬のものだったのだ。
国王には子供がいた。人々はそんな国王の子供達が、国王の、いや
人々の願いを継いでくれると信じていたからだ。だが新たな世界の
国王は、父親と人々の意志を継ぐ事は無かった。新たな国王は、今
までに築きあげた国力を使い、世界を掌握しようとして企んだのだ。

理想郷への階段は止まった

それから数十年、数百年に渡り、世界にたった一つしかない人々
の希望の詰まった城国は、人々を支配し、掌握し続けたのだ。人々
はこの支配から戦い続けた。元々いた人口は、既に半分以上が死滅
し、世界と呼べるものがあるものは、シャングリラキングダムだけ
と言っても過言ではない。

城国から兵隊達を相手に、今日もレジスタンス達が命を散らして
いく。

この世界に理想郷は無い

人々は今日も、いつ終わるともしれない日常を生きている。

1 漆黒の空を舞う

漆黒の天空。雲の上遙か上空にまで伸びる城国。地上にいる人間には想像もつかない場所で、たった一つの轟音が鳴り響く。建物内部からの爆発、そして人影が姿を現す。

「これが、世界、か」

再び轟音が鳴り響く。今度は建物の中そのものが爆発したようだ。黒煙が行く場所を求めて、壊れて空いた穴から勢い良く飛び出していく。

「行くか」

黒煙が静まると、その人影が姿を現す。腰には不思議な紋章の刻まれた剣が下ろされている。腰にまで届く長い漆黒の髪を首もとで束ね、鋭い眼光と黒衣が天空に現れる。その見た目から十代半ばの少年であろう。その少年は躊躇いもなく、天空の夜空に舞う。

「元気で暮らせよ。願わくば、理想郷へ……むっ!？」

少年の周りが突然、赤い球体に包まれる。その瞬間、少年を包んだ球体は大爆発を起こす。間違いなく死んでしまうであろうその爆発の中から少年は、剣を盾にするようにして爆発を防ぐ。

「この能力……ラティオか!？」

「爆ッ発ッ!」

「チィ……!」

黄色の法衣を身に纏うラティオと呼ばれる少年は、掌から黄色い光弾を飛ばす。その光弾は黒衣の少年に向かっていくと、次々に爆発していく。その光弾を鞘で弾き返していく。どうやら少年の武器には、強大な衝撃すら吸収あるいは受け止めてしまうような、特殊な素材でできた武器であるようだ。

「兄貴ッ、どうしてだ、どうしてこんな事をするんだ!？」

「ラティオ、お前は戻れ!」

黒衣の少年は、ラティオに戻るように指示するが、ラティオは説

得を聞くどころか、手にはめた特殊な紋章の刻まれたメタルナツクルを、拳と拳を合わせる事により、激しい金属音を鳴らし一気に間合いを詰めてくる。

このラティオの接近に、黒衣の少年も鞘で受ける姿勢を取る。この少年の鞘に刻まれた紋章と、ラティオのメタルナツクルの紋章はどこか似ているが、少しばかり紋章の形が違う。黒衣の少年の紋章は、剣と炎を合わせたような紋章。ラティオの紋章は悪魔のような手に、爆発そのものが描かれたような紋章がついている。

「ウオオオオオオオオ！」

気合いと共に、拳を繰り出してくるラティオ。その攻撃を鞘を盾にして受け流していく。金属音に似ているが、少し違う音が空に反響していく。

「ぜ、全部防いだか！」

「お前には無理だ、ラティオ」

少年は、ラティオに向かって蹴りを繰り出す。油断していた為か、ラティオは腹部に蹴りを受け、大きく後退させられる。少年は蹴った衝撃で、更に落下速度を上げて落ちていく。

「兄貴、待てえ！ 絶対に連れ戻す！」

「その通りよ、兄さん。絶対に連れ戻してみせます」

「……っ!？」

突如、上空から一人の少女が身の丈以上の大きさの槍を、少年に突き立てながら落ちてくる。

「デュアリス姉え！」

「デュアリスか、クソッ！」

デュアリスと呼ばれる少女は、青い法衣を纏い、青い三つ又の槍を備える。この槍も同じくして、不思議な紋章が刻まれている。槍を中心として、水と氷の紋章が刻まれている。

突き立てた槍と共に急接近し、落ちてくるデュアリスの攻撃を、ラティオと同じく鞘を盾にして捌ききる。ラティオの際と同じく、特殊な金属音が響く。あまりの衝撃に、漆黒の夜空に火花が散る。

「デュアリスも退けっ、無駄な戦いはするな！」

「兄さん……どうして……？」

「デュアリス姉えの言う通りだぜ、兄貴！ 何でなんだよ！？」

「……世界が見たい。俺達は生まれた時から与えられたルールを歩かされている。それで良いのか、俺達は？ 何で俺達のような存在がいるんだ。俺は知りたい、世界をつ！」

少年は暴風が荒れ狂う天空で叫ぶ。ラティオとデュアリスは黙ってそれを聞いている。

「でも、でも、それならそれで王に頼めば良いじゃねえか！」

「王は、聞き入れはしない。俺達に世界は見せない。俺達は何の為に存在しているのか知っているのか？」

「……兄さん。私はその理由も知りません。でも私は兄さんに一緒にいてほしいです、兄さんお戻りください」

「そうだけ、兄貴！ 理由はいらねえ、俺達は俺達で、兄貴を連れ戻すだけだぜ！」

ラティオとデュアリスは、揃って構えを取り、攻撃姿勢を作る。

デュアリスは冷静に物事を見ているように見えるが、ラティオは今にも襲いかかってくるようだ。

「行くぜ、兄貴！ 初弾装填、一撃目の衝撃！」
ファーストインパルス

ラティオは右手に力を込め、左手で右手を支えるように構える。

すると、支えられた右手が黄色の閃光に包まれていく。その閃光は少しずつ強さを増していき、まるで火花のように爆発し始める。

「ラティオ……本気のような……」

ラティオの閃光を、静かに見つめるデュアリス。ラティオの攻撃力を知っている為、デュアリスは巻き添えを食わないように、軽く後方へと移動する。

「ラティオ、援護する」

「おうよ、デュアリス姉！ そして、行くぜ兄貴！」

右手に閃光を纏い、躊躇う事無く接近してくるラティオ。そのラティオの動きに合わせるように、盾にする鞘を構える。

「兄貴、俺のインパルスはそんなもんじゃ防げないぜえ！」

「来い、ラテイオ！」

「アクアウィップ
水の鞭！」

少年とラテイオのやり取りを冷静に見ていたデュアリスは、隙を見て技を繰り出す。手に持つ槍の先端から、水の線のようなものが伸び、少年に向かっていく。

「アクアウィップ!? ……デュアリス」

デュアリスの放った水の鞭は、少年の持つ剣に巻き付いて離さない。それどころか、水の鞭を使いデュアリスは少年の剣を奪おうとする。

「これで盾にはできないわ。兄さん、早く投降してください」

「そんな必要はないぜ、デュアリス姉！ 兄貴は殴ってでも連れ帰るぜ！」

「ラテイオ……！」

ラテイオの閃光拳は確実に、少年を捉える。放った拳からは、今までの爆発の比ではない程の大爆発が起きる。あまりの爆発ぶりに、その技の使用者でさえただでは済まないであろう。

「ラテイオ、大丈夫？」

「ああ、デュアリス姉。だがさすが兄貴だ、まだ止められないぜ」
爆煙の中から、少年は姿を現す。今の爆発により、少年が着ていた黒衣は完全に燃え尽き、代わりにラテイオやデュアリスのような赤い法衣が外に出てくる。何よりも今まで鞘の中に収まっていた、刀身が現れている。刀身にも鞘と同じく、特殊な模様が刻まれている。

「チツ、兄貴が剣を抜いた。マジイな……」

「ヴェルデフレイン……兄様……」

少年の持つ剣　ヴェルデフレインは刀身が赤く、まるで炎を纏った剣のように見える。そしてその刀身が抜かれた瞬間から、漆黒の少年の眼が、深紅の光を帯びている。

「ヴェルデフレインを抜いてしまった。……こうなってはある程度

の力を放出しなければ、力は収まらない、死ぬなよ……ラティオ、デュアリス！」

少年は自分の左手を、右から左に振り払う。すると少年の目の前の空間に炎が発せられる。その炎により、漆黒の夜空は、深紅の夜空へと変わる。

「グワツ!?!」

「キヤア！」

炎の波を咄嗟に防御するラティオとデュアリス。その炎は二人にとっては目隠しにもなり、少年の姿を一瞬で見失ってしまう。

「ラ、ラティオ、気を付けて、あの状態の兄さんは、力が暴走してるわ。私達相手にも攻撃を仕掛けてくるわよ！」

「わかってるぜ、デュアリス姉! ……兄貴!?!」

炎のブラインドの向こうから、一瞬で間を詰める少年は、ラティオを標的として捉える。鋭い斬撃を、ラティオに向けて放つ。その斬撃をメタルナックルで防御するが、大きく後方へ弾き飛ばされてしまつラティオ。吹き飛ぶラティオに容赦なく、左掌から火球を飛ばす。

「ウ、ウワアアアアア！」

「ラティオ！」

火球はラティオに直撃する。炎が爆発し、その爆煙でラティオの姿が見えなくなる。

「キヤアツ!?!」

間髪入れずにデュアリスに蹴りを放つ。その蹴りを槍で受け止めるものの、蹴りの攻撃力が凄まじく、その衝撃で、ラティオと同じくデュアリスも飛ばされる。

「……うう、兄さん……?」

少年はデュアリスに、左手を向けそこに力を集約させ、赤い球体を作り出す。

「消えろ、デュアリス! 今からでも撤退するならば、攻撃はしないでおいてやる!」

「兄様……！」

更に力を集約させ、球体を大きくさせる。間違いなく当たれば、大きなダメージ、あるいは死に至る威力を持つているだろう。

「デュアリス姉……」

ダメージの残る体を押しして、デュアリスに合流するラティオ。その二人もろとも、滅ぼしてしまわんばかりの気迫で、球体を更に大きくしていく。

「終わりだ……ラティオ、デュアリス！」

そして集約させた球体を、無情にもラティオとデュアリスに放つ。二人は逃げられないと悟ってか、死を覚悟し、何もしないままに身を強張らせる。しかしその炎の球体は、二人に当たる直前に真っ二つに割れる。二人から逸れるように、割れた球体が地上へと落ちていく。その炎の球体が地上に激突したのだろう、着弾したと思われる場所から巨大な火柱が、雲を突き抜けて姿を現す。

「さすがだな、ティード。僕達の中で最強の戦闘能力を備えているだけはある」

「……ジューク」

目の前で火球を斬った男が、深緑の法衣を纏い現れる。その法衣と同じく、深緑の刀身の剣を持つ。その見た目から、恐らくは四人の中では最も歳は上であろう。冷静でいて無表情な顔つきで、ティードと呼ばれた少年を見つめる。

「ジューク兄さん！」

「ジューク兄貴、何をしに来たんだ！俺達に任せておいて大丈夫だって言っただろ！？」

安心した表情を見せるデュアリスに対し、ラティオはどこか気にくわれないといった表情で、ジュークと呼ばれる男を見る。そんなラティオの怒気を浴びせられながらも、全く動じずに表情を崩す事がないジューク。

「……フツ。その割に随分とポロポロにされたものだな、ラティオ？」

「う、うるせえよ！ これから本気になるところだったんだ！」

「仮にラティオが本気になってもティーダには勝てない。……あいつは僕達の中でも特に戦闘能力において高く創られたアルティロイドだ」

ジュークの説得に応じたのか、納得するようにおとなしくなってしまうラティオ。

「デュアリス、まだ動けるな？ ラティオを連れて先に戻るんだ」

「ジューク兄貴、俺はまだやれるぜ！」

「ラティオ！ ……でも兄さんはどうするのですか？」

「……フツ。知れた事、僕がティーダを連れ帰る。だから先に戻れ。ラティオもデュアリスも、雲の向こう側をまだ見てはいけない」

デュアリスはともかく、ラティオは渋々納得する。デュアリスの手を借りながらも、城国へ帰還の軌道を取る。

二人がある程度離れるのを確認したジュークは、改めてティーダと向き合う。ティーダを見るジュークの瞳は、何を考えているのか全く読めないものがある。

「ジューク……俺はお前の説得にも応じる気はない。俺は世界が見たい」

「それは構わない。僕はラティオとデュアリスと違い、ティーダを個人的には止めるつもりはない」

「……！？ では何の為に、お前自らが来た？」

「個人的には止めるつもりはない……が、王が命令している。僕達アルティロイドにとって、王の命令は絶対なのだ。僕は王の為に、ティーダを連れ帰る」

ジュークが深緑の剣を構える。風をイメージされた紋章が刻まれている。まるでティーダの剣 ヴェルデフレインと対を成しているかのような剣である。

「……しかし個人的な感情もあるさ。久々にティーダと全力の戦い

をしてみたい」

「……………。俺は手加減をするつもりはない」

「……………フツ。それで構わない。……雲を突破するまで残り千メートルといったところか。その雲までだ、そこまでに僕が勝てばおとなしくティータは城へ戻るんだ。もしも僕が負けたら地上へ降りると良い」

「お前はそれで良いのか？」

「ああ、良いのさ。何よりも深緑の剣　フルーティアが戦いに飢えている……………さあ、無駄話はここまでだ。行くよ、ティータ」

「……………来い！」

誰も知り得ない雲の上。暗黒の天空。ティータとジュークの戦いは静かにその幕を開ける。

先に攻撃を仕掛けたのはジューク。ラテイオとは比べものにならない速度で、あっという間にティータとの間を詰める。逆袈裟の斬撃を、深紅の刀身ヴェルデフレインで受け止める。

「さすが風の術者であるジュークだ。風を使い攻めてくるか」

「風はいつでも僕の味方だ。僕は生まれた時から風と友達だ。……

そしてこれからも……………行くよ、フルーティア！」

「……………っ!？」

まるで突風に飛ばされるかのように、ティータは吹き飛ばされる。追撃を防ぐ為に、火の球をジュークに向け放つ。

「無駄だよ、ティータ」

放たれた火球は、まるでジュークに当たる事を、意志を持って避けたかのような動きで逸れる。

「風は僕を裏切らない。その程度の攻撃は、僕の纏う風の障壁が全ウインドウォールてを流してしまうよ」

「　ならば、その風の障壁もろとも、叩き斬るまでだ！」

今度はティータから接近戦を仕掛け、深紅の刀剣をジュークに向け斬りつける。その斬撃は風の障壁を斬り伏せ、ジュークに向かうが、深緑の刀剣を以てその斬撃を受け止める。二つの刀剣からは刀

身がぶつかり合う度に、火花が散りあう。

「さすがだティード。その強さ……本物だ」

「……。もう雲の突破が近い、お前も戻れ！」

「フッフ……わかつているよ。しかしティード、世界を見て何をするつもりなんだ？」

「なんだと？」

「君は下界……いや地上に、この世界で生きる生命体にとっての理想郷シケリラがあるとも思っているのか？」

「……俺は理想郷そんなものに興味はない。昔の人々の望みなんてものにも興味はない。……だが、もしもあるのか、無いのかわからないものならば、創れば良い」

「フッフッフ！ それでこそ、ティードだ」

ジュークは一足先に、深緑の刀剣　フルーティアを鞘に収める。ティードも同じくして深紅の刀剣　ヴェルデフレインを鞘に収める。刀身を鞘に収めるとティードの深紅の眼は、元の漆黒の眼に戻っていく。

「……このまま行けば、地上に激突するだろうな……ティードが決めた事、僕は助けはしないぞ？」

「構わん。落下の衝撃で死ぬようなヤワな体はしていないつもりだ」
「……フツ。そうか……ラティオとデュアリスは僕に任せておけば良い。お前は世界を見てこい。何を見て、何を感じ、どう動くかは、地上では自分自身が決める事だ。……そして、次に会う時は、地上で会う時は、僕達兄弟は、殺し合う運命だ。……下界は夜明けだ、一日という新世界が始まる」

「さっさと行け、鬱陶しい！」

「……フツ。また会おう、ティード」

それを別れの言葉にし、ジュークは雲の上の天空へと飛びさつていく。ただ落下していくだけのティードは、そんなジュークの後ろ姿が消えるまで見ているだけである。

「ウツ。……あれが、太陽か」

雲を突破した先には、自然界の王である太陽が、その眩しいばかりの光を、ただひたすら照りつけていた。

2 少女ティオ

この体は造り物だ

我が真実の肉体は既に無く。

この心には気高き獣が宿っている

我が真実の心の片割れは世を彷徨う。

この世に生まれ落ちた使命がある

それは人類を抹殺せしめる事。

辺りがとどころ荒野となりかけている山岳地帯。残された緑よりも、荒れ果ててしまった大地が多い、戦地の山岳地帯。その名をカザンタ山岳地帯。別名、白の戦荒野。

「あ、あれは何だろう?」

雲の更に向こうより、深紅あかき閃光が地上に落ちる。少女はその光を不思議そうに見つめる。

「ティオさん、いくら目的のものが近くにあるかもしれないからって、勝手にどんどん進まれては困りますよ」

恐らくは付き人の兵士だろうか、口髭が特徴の老兵である。腰にはそれなりに鍛えられた鋼の剣が備えられている。ところどころが錆びついているものの、まだまだ現役で使いこなせる剣であろう。

その兵士の声を聞いているのか、聞いていないのか、ただひたすらに落ちてくる深紅の閃光を見つめるティオという名の少女。

「……うん、ごめんなさい。ねえソリディア兵士長」

「何ですか?」

「貴方には、あの深紅の閃光が見えて?」

ティオの問いかけに、ソリディア兵士長は目をこらして見てみる。ティオはひたすらに、深紅の閃光が落ちてくる方角を指している。

「……いやティオさん、私にはそんなものは全く見えません。もう

夜明けです、もしかしたら太陽と間違えたのではないですか？」

「いいえ……あんなに真つ赤な閃光です。太陽が真つ赤に見えるはずがありません！」

「いえ、そりやそうですけど……。でもテイオさん、本当にもうじき夜明けで明るくなります。いつ城国軍に見つかってしまってもわかりません。そろそろ戻りましょう！」

いまだに閃光の見える方角を見つめるテイオ。周りも明るくなってきて、危ないと判断した為か、ソリディア兵士長はやや強めの口調で説得を試みる。

「テイオさん、急いで！ 気になるのなら、また今日の夜にでも探しに行きましょう！」

「あ、うん……。そうね。護衛を頼みます、ソリディア兵士長」「了解しました」

周囲を警戒しながら、ソリディア兵士長はテイオを護衛しながら森の中へと歩いていく。

ソリディア兵士長はやや錆びついている鋼の剣を構え、ゆっくりと辺りを見回しながら少し離れた位置を先導している。これも城国軍の暴力という名の支配から逃れる為なのだ。

城国軍はテイオが生まれる更に前には、下界の人々と共に理想郷を目指す、人類の希望の城だった。しかし国王がいつの代からか、その国王の子供が城の圧倒的勢力を使い、下界の民を弾圧し始めたのだ。下界に住む人々は、いつしかレジスタンスとなり、城国軍に微弱ながらの反抗をするようになる。しかし風の噂を頼りにすれば、刻一刻とレジスタンスの集落が、灰にさせられているという事実が届く。人々はいつしか協力する事も無くなり、ただ自分達が生き延びていく事だけが精一杯となっていったのだ。

「ねえ、ソリディア兵士長？」

「……何ですか？ できるだけ不必要な会話は避けていただきたいのですが……」

普段は優しい表情と、穏やかな口調が絶えないソリディア兵士長も、こと任務中だけは鬼のような形相で周りを警戒している。その声もどこか怒気のようなものを感じられる。

「……ごめんなさい。後で良いです」

「……ふう。よし、ではここいらで一息つきましよう。少しの休憩です」

振り向いたソリディア兵士長には、優しい表情が戻っている。

「ふむ……思い詰めた顔をしていらっしやる。何か考え事ですか？」

「あの、ね。どうして城国軍は私達を弾圧しているのでしょうか、同じ人間同士、それにかつては力を合わせて理想郷を追い求めたというのに……」

「城国軍が何を考え、我々を支配しているのかはわかりかねます。

城の連中は話をしようともせず、一方的に支配の手を回しているのですから……」

「……そうですね……」

しばらく沈黙が続いた。ソリディア兵士長は荷物を漁ると、小さな水筒を出し、ティオに勧める。ティオも喉も渴いていた為、その水筒を手に取り少量を口に含ませる。何よりも一度、頭の中の曇りを振り払いたかったからでもある。水は温く、お世辞にも美味しいとは言えない。しかしそんな水しか、今の大地には流れていないのが現状なのだ。

「私達は、人類は、早くこんな愚かな戦いを止めなければいけません……！」

「ティオさん……！？ その通りです。その為に我々レジスタンスは、城国軍との和平に向けての対談を成す為に、その抑止力となる軍力が必要不可欠なのです。残念ながら今の戦力では自分の命を守る事で精一杯です……」

ソリディア兵士長は、悔しさから錆びた鋼の剣を、力一杯に握りしめる。

「さあ、もう休憩もお終いにしましょう。これ以上周りが明るくな

ると、城国軍に見つかってしまいましたからね」

「そうですね。……何!？」

「どうかしましたかっ!？」

テイオの突然の驚きの反応に、疾風のような速さで剣を抜き、身構えるソリディア兵士長。

「いえ……何か大きな、そう爆発、のような音が、遠くから」

「爆発のような音? 私には聞き取れませんでしたか……」

ソリディア兵士長は、テイオの前に出て、音がしたと思われる方向に意識を集中している。

(なんだろう? さっきの深紅の閃光といい……まさか今のは閃光が地上に落ちた音かしら。でもとても大きな音がしたのに、ソリディア兵士長には聞き取れなかった? ソリディア兵士長ほどの方が聞き逃すなんて事……)

テイオは心の片隅でしまっておこうとした、深紅の閃光の事が無性に気になり始めている。音がした方向は、先ほど深紅の閃光が落下していた方向と合っているからだ。

「むう……、異常は無さそうですが、しかしテイオさん。見に行こうなんて考えてはいけませんよ?」

「えっ……!? も、勿論ですよ、だって危険ですもんね」

「その通りです。さあ、急いでベースキャンプへ戻りましょう」

ソリディア兵士長は、テイオの考えがわかっていたのだろうか。

テイオにしてみれば内心を的確に付かれた為、心臓が脈打っている。だが半分は、閃光と爆音への好奇心が含まれている。だがこれ以上ソリディア兵士長を困らせるわけにもいかず、テイオはおとなしく兵士長の後に続いていく。

城国軍の兵士に見つかからないように、わざと森林地帯を歩いていく。それに気配を殺しながら歩く為、移動速度は早いとはいえず、拠点となっているベースキャンプにたどり着くまでに一時間を要した。

拠点となっているベースキャンプには、百人ほどの人々がお互いに支えながら暮らしている。勿論、レジスタンスは世界にテイオのいるキャンプだけではない。何十、何百あるのかは知り得ないが、大小問わず、数々のキャンプがある事は、テイオ達のキャンプも確認している。大きいものでは千人を超える人々がキャンプで暮らしている例もある。

「おかえりなさい、兵士長、それにテイオさん」

見張りをしている兵士が、テイオ達の帰還を暖かく迎えてくれる。「ただいま戻りました！」

「変わりはないか？」

見張りの兵士と、ソルディア兵士長は何やら小さな声で、引継を済ませているようだ。まだ子供であるテイオにはわからない事である。

「ごめんさない、ソルディア兵士長」

「ああ、テイオさん。すみません、ほつたらかしてしまい……」「いいえ、気にしないでください。兵士長は立派にお仕事をこなしてくれているんですから。私は自分のキャンプへ戻ります。……少し眠くなつてしまいました」

「ええ、お疲れ様です。ゆっくりお休みください」

テイオはソルディア兵士長と別れ、自分の部屋となっているキャンプへ戻っていく。ソルディア兵士長と見張り兵は、そんなテイオを暖かく見守っている。

「それで話の続きなんだが……。道中でテイオさんが深紅の閃光と爆音を聞いたというのだ」

「深紅の閃光に爆音、ですか。何です、それは？」

「私にもそれはわからん。事実、私にはそんな閃光も見えなかったし、爆音も聞こえなかった。テイオさんは我々と違い不思議な能力ちからを持っていて、本人は気づいていないが……。とりあえず閃光と爆音が気になる。見張り兵を増やすから少し注意深く警戒をしてくれ」

「了解しました、兵士長殿！」

二人は背筋を伸ばし、お互いに敬礼しあう。ソルディアも深夜からの護衛で疲れている為、仮眠をとる事にする。

自分のベースキャンプに戻ったティオは、一週間ぶりにシャワーを浴びる為に、その用意をし始める。水は今となっては貴重な為、毎日のように水浴びはできない。一般人は一週間、兵士は二週間の猶予で、水浴びをする事に、このベースキャンプでは決めている。

外は既に明るい。今まで眠りについてたキャンプ地が、人々の活気に満ちてきている。そんな人々とすれ違うように、ティオはシャワールームを目指す。このシャワールームはガラクタをかき集めて作った、ティオのお手製のシャワールームである。シャワーを浴びる前に、馬の尻尾のように束ねた髪を下ろし、服を脱いだ。

「みんながんばってくれているのに、私だけこんな風にシャワーを浴びるのは気が引ける。……お前、もうそろそろ限界なのかい？」
ティオが話しかけたのは、水を湧かす為のボイラーである。ティオは生まれつきモノの声が聞けてしまうのだ。それは機械でも植物でも心の声を聞ける。但し、例外として人間の声だけは聞く事ができない。

「今までがんばってくれたもんね。そろそろお別れになるね……」
降り注ぐ暖かい水が、全てを包み込んでくれるようで、ティオにはそれが心地良いものを感じられる。胸を締め付けられるような痛みも、この瞬間だけが少しだけ癒される、そんな気さえするのである。

簡単に頭と体を洗い、シャワールームから出る。そこで体を拭き、鏡に映った自分の姿を見る。そのまま鏡に映る自分の胸に触れてみる。時折走る胸の痛み、いや心の痛みが、ティオに呪縛を与えている。

「どつして命って、こんなにも儂いのだろう？」

鏡の中の自分に自問自答するように呟く。

「お前は知っているんだろう、テイオ」
「……えっ!？」

鏡の中のテイオが、一瞬薄気味悪く笑い、そう呟いた気がする。気を落ち着けて再び鏡を見ると、何の変哲もない自分が映っている。だが鏡の中の自分は少し疲れているようにも見える。シャワーを浴びた事により目が覚めていたが、暖まった体はすぐに、テイオに睡魔をもたらしてくる。

「ふわあ……。朝の八時か、寝よう。今日は二時まで寝て、夜の支度もしないと……」

夜の支度の事を考えると、先ほど見た深紅の閃光を思い出す。テイオは自分の中からわき上がってくる好奇心を感じる。

「だめだめ、ソリディアさんに迷惑はかけられない。……でも、うん、だめだったらテイオ!」

自分の頬に軽く張り手をし、無駄な好奇心を痛みで消そうとする。「寝よう、寝れば忘れられる!」

シャワールームの更衣室で、自分の荷物を整え、自分の住むテントへ向かう。テントの中にはいると、予め自分で用意したベッドがある。テイオは吸い込まれるようにベッドに倒れ込むと、睡魔に抗う事もなく、眠りについていった。

テイオは夢を見た気がする。何の夢だったのかは覚えていないが、夢を見た事は確かだった。まだ覚醒しきっていない意識と戦いながら、枕元の置いてあるお気に入りの時計を見る。針は十二と三を示している。

「ううん……三時……? ……って三時だ、いけない寝過ぎちゃった!」

ボサボサになった髪の毛をとかし、赤いゴム紐で馬の尻尾状に髪の毛を束ねる。急いでテントを出ると、朝方の活気以上にベースキャンプは賑わっている。

(何だかんだ言っても、こうやってみんなが元気に過ごしている光景を見ると、嬉しくなるなあ)

いまだに意識は完全に覚醒しきってはいなかったが、ティオは自然と暖かな笑みがこぼれる。天気も晴天であり、非常に爽やかな陽光に包まれている。

「うーん……っと！ よし、夜の為のお買い物しよう！」

力一杯の背伸びをすると、ティオは商品が置いてある場所へ向かい歩き始める。

この世界では既に金貨は意味を成さない。キャンプ内の人々はお互いに役割分担し、自分の仕事をこなしてくる。食料などもその役割に携わった人間が、調達管理しているのだ。

「お、ティオちゃん。今朝もご苦労だったね、そんな若いのに働いてるなんて大したもんだよ！」

赤いねじりハチマキをした中年の男性が、ティオを大きな声で呼ぶ。ティオのお気に入りゴムの髪留めも、この人からもらったものである。

「そんな、好きでやってる事ですから。それよりもヒビキさん、今日は何か良い食料はありますか？」

「おうよ、今日はほら！ どうだい、この立派な梅干しはよ？」

ヒビキと呼ばれる中年が、壺の中からも大きな梅干しを取り出す。

「うわ、本当に大きい！」

「ティオちゃんは育ち盛りだし、頑張ってくれてるから、サービスで五個あげちゃうよ！」

「ありがとうございます、ヒビキさん」

ヒビキは葉で作られた袋のようなものに、梅干しを五つ入れる。

「ほらよ！ ……今日も深夜の宝探しに行くのかい？」

「……はい。この土地には、昔使われた武器の多くが眠っています。城国の方々と対等に話せる抑止力となる武器が発見できれば良いのですけれど……」

「うむ……オレサマツチにはヨクシリヨクとかつて言葉はよくわからないけどよ、何とか大昔に伝えられる、城の人間と下界の人間が、お互いに共存してる平和な世界が作られれば良いやな」

「はい、そうですね！ では、ヒビキさん。私は次に行きますね」

テイオはいつも元気なヒビキさんと別れる。次に行く場所は、武器を扱うキャンプ地である。と、いつても一つのレジスタンスリーダーの持つ剣が、錆びた剣を所有している現状。この錆びた剣も元々は、この地方に落ちていたものを、砥石や、特殊な錆落としを使い、現在のものに復元させたものである。中には剣ではなく、木の棒で戦おうとする人もいるのだ。

武器が置かれているキャンプ地に着くが、やはりここには食料品の場所ほどの活気はない。ここにいる人間も、レジスタンスとして戦っている兵士の人が多い。

「……やあ、テイオじゃないか。生憎だが武器の仕入れは無いよ。あるといたら原始的だが最近作られた石の斧程度の物だ」

武器の管理をしている女性が話しかけてくる。名前はビオ。腰よりも長い髪を、馬の尻尾にまとめている。テイオの髪型はビオの真似をしたものである。

「いえ、ビオさん、今日は砥石をもらいたくて……ありますか？」

「……砥石？ ああ、それならあるよ。いくつほしい？」

「一つで良いです」

「……じゃあ二つやるよ、取っておきな」

ビオは砥石を、テイオに向かってぶつきらぼうに投げる。それをテイオは上手く掴んだ。ビオは親しい間柄の人間には指定した数よりも一つ多い数を渡してくれるのだ。

「……その砥石……ソリディア兵士長にかい？」

「はい、何か最近はまだ切れ味が弱まってきているみたいで……私がかやらないと、ソリディア兵士長はやらないですから」

「……うむ、あの兵士長は良い人だし真面目だが、いかんせん面倒臭がりなのが玉に瑕だな」

「あははは……。それじゃあ、私は行きます。これから剣を砥石で磨かなければいけないので……」

ビオとも別れて、ティオは兵士達の武器保管庫となっているテナトを目指す。色々な準備をしている内に、時刻は五時を回り、辺りは再び漆黒の闇に包まれようとしていた。

3 運命の出会い

外から漏れてくる太陽の光は、次第に薄れていき、松明による炎の明かりがキャンプを包んでいく。城国軍に見つかからないように最低限の明かりだけを使い、大半の人間は、キャンプの本部となつている一際大きなテントに集合し、そこで睡眠をとったりする。最もこれは戦わない一般の人の為のテントであり、レジスタンスで兵士に該当するものは、別のテントで見張りをしながらの休息場が用意されている。

そんな兵士用テントの片隅にある武器保管庫で、ティオは昼間に買ってきた砥石で兵士の武器を、一つ一つ丁寧に研いでいく。だが事実上は、鉄を使った立派な武器に該当するのは、兵士長の鋼の剣と、一本のみ完全に錆びついた鋼の剣しかない。その他、木の棒や、投擲に使う石ころがあつたりするぐらいである。確かにこれらの物でさえも、立派な武器にはなるのだが、城国軍の立派な武具の前には、どうしても心許ない。

「ふう……、これでお終い。全く、どうしてここの兵士さん達は、みんな揃つてめんどくさがりやさんなのかなあ」

額にうつすらと出てきている汗を、手ぬぐいで拭き取る。ほんの数分だけ休憩した後、保管庫から出した武器の数々を丁寧にしまつていく。小柄で運動神経も良くないティオにとっては、少ない武器をしまつていく事でさえ重労働である。

（うわあ、もう夜になつてたのかあ。全然気が付かなかつた……ソリディア兵士長は起きてるかな？）

ティオは今朝見かけた、あの深紅の閃光と爆音が気になり始めていた。何か、もしかしたら抑止力になり得る武器が見つかるかもしれない、あるいは逆も然りである。何にしても調べてみなければ、全ては始まらないのである。

ソリディア兵士長のテントは、他の兵士達とは別に小さなテ

ントがある。ソリディアいわく小さいテントの方が、周りの音が聞こえ、いざとなった時に咄嗟に動けるからという事である。

「ソリディア兵士長、起きていますか？」

テイオはテント内に向かって声をかけてみるが、返事はない。しかし人の気配はある、ような気もしている。失礼だとは思いながらも、テイオはテントの中に入ってみる事にする。

「兵士長……入りますよ？」

静かにテントの中に入り、明かりを点けてみる。すると確かにソリディアはベッドの上で横になっている。

「兵士長、どうしたんですか、こんな遅くまで寝ているなんて……具合でも悪いのですか？」

「ん……ああ、テイオさんか。……いやね、今朝戻ってきた後、急に具合が悪くなってきた……多分、風邪だとは思いますが、今日の探索は行けそうもありませんね。申し訳ないですが……」

「あ、いえ……安静にしてください。いつも無理を言っています……」

あまり長居をするのも、ソリディアには辛いだろうと判断し、飲み水だけ用意してテントから出る。

(そっか……今日はいけないのか……)

不謹慎だとは思いつつ、落胆する心を落ち着かせる為に、夜空に浮かぶ星空を眺めてみる。こうして空を見ていると、聞こえてくるのはキャンプで暮らす人々の生きる呼吸と、虫の鳴き声。あまりの静けさに、城国軍の支配から逃れる為の、戦争をしている事を忘れそうにもなる。

「アハハ……植物の、虫の、動物の音が聞こえる……」

テイオは自然に生きる声を聞いた。嬉しくて、悲しくて、切なくて、そんな声を聞いている内に、テイオは決心してしまう。

「よし、一人で今朝の場所まで行ってみよう。もしかしたら戦いを終わらせる為の、何かが見つけられるかもしれないもんね！」

湧き出てくる好奇心を抑えられなかったのだ。何よりも、早くこ

んな戦いだけの世界を終わらせる為に、じつとしていられなかったのである。テイオは自分のテントに戻り、手製のランプを持ち出す。「ごめんなさい、兵士長……でも、私はどうしても閃光と爆音の正体が知りたい……！」

幸いな事に、出入り口で見張っている兵士は一人もいない。テイオは人に見つからないように、静かにベースキャンプを出ていく。物音を立てず、気配を殺しながら歩くのは、普段ソリディア兵士長と共に歩いた事で、少しは自信があったのである。それに体格が小柄な為、いざとなれば草むらに隠れば、早々見つかる事もない。

小一時間ほど経過する。やや急ぎ足気味で歩いた為、予定よりも早く目的地周辺までたどり着く。

「……この辺が今朝歩いて場所のはずだから……閃光が落ちていたのは確かあつちの方角のはず」

今いる場所から北を指す。このまま北に進むと、やや高い山岳地帯に入る。山岳地帯は城国軍の兵器により、緑がほとんど無いといつてもいいハゲ山と化している。つまりは身を隠す場所が皆無に等しい。この状態で敵に見つけられたら、戦術を持たないテイオが生き残る事は無いだろう。

（閃光は確かに山岳地帯に向かって落ちていた……。でも、もしも見つかったら……）

テイオはこれ以上進む事に躊躇する。ここから先は命綱の無い綱渡りである。仮に渡りきれても、何かを得られるという保証もない。今朝の深紅の閃光は、もしかしたらただの隕石の可能性だってあるのだ。

（どうしよう、戻るべきかな。でも多分、戻ったら怒られるだろうなあ……。どうしよう……）

終わりのない思考と戦っていると、後方から物音が聞こえてくる。テイオは咄嗟に草むらに隠れる。

「……………なのか？」

「……本当だとも……」

(誰だろう、ソリディア兵士長かな？ それにしては足音に、聞こえてくる声が数人いる気がする……)

姿勢を更に低くし、気配を殺す。呼吸をする事もできるだけ抑える。

「確かにこつちの方で音がしたんだ。今さっきだつて音がしたぞ」

「何かの動物じゃねえのか？ ったく、お前は本当に小心者だな」

「もしも下界のゴミクズだったら手柄は、俺が独り占めしてやるからな！」

どうやら人数は二人。暗くて人影の詳しい判別はつかないが、重々しい装備品の音を聞く限りでは、城国軍の兵士がティオに接近しつつある。

(……下界のゴミクズ……。私達の事？ ……どうして同じ人間なのに、そんな事が言えるの……)

恐怖と、悔しさの二つの感情が支配する。その二つの感情は、ティオに力強い握り拳を作らせ、体を震わせる。

「ほら、誰もいないぜ。やっぱ小動物か何かだろ？ 疲れてるんだから、いちいちこんな事で動かさなくてくれよ、ったく……」

諦めてくれたのか、二人の兵士は来た道に戻っていく。その様子を安心しながら眺める。

「つくつそ……！」

納得のいかない一人の男は、八つ当たり近くに近くの草むらを腰に携えた剣を使い、思い切り薙ぎ払う。

「……ひっ！？」

ティオは少し油断していた。一人の兵士の突然の行動に、驚いて一瞬だが声をあげてしまう。

「お、おい、今の……？」

「ああ、俺にも聞こえたぜ。どう聞いても人間の、しかも女の声だ……へっへっへ」

兵士二人は、ゆっくりと、しかし真っ直ぐにティオの隠れている

草むらに前進してくる。心なしか、二人の兵士の顔はいやらしい笑みを浮かべている。

「さあ、ゴミクズの子猫ちゃん。おとなしく出ておいで、へっへっへ」

近づくにつれ、そのいやらしく笑う顔が見えてくる。とてもじゃないが、生きた人間の顔ではない。欲と本能の支配する外道の顔である。

(どうしよう……このまま隠れてても、きっと見つかる……。でもどうする、山の方に逃げても、逃げ切れる自信はない……。やだ、やだ、やだよ、誰か……。誰か助けて……。！)

冷静に思考しようとしても、自分自身のうるさく脈打つ心音がそれをさせない。呼吸が知らない間に、荒くなっている。これでは見つけてくださいと言っているようなものである。事実、二人の兵士は、既に狙いを済ませ、狩りを楽しんでいるかのような優越感に浸っている。

(駄目だ……。ここにいたって捕まえられて殺される……。なら、イチかバチか山に……。逃げよう……。)

震える心と体が、思った通りに動かず、這いずるように少しずつ後ろに下がっていく。すると、足に何かが当たり、それが倒れる。

「……っ!？」

見ると持ってきていたランプが倒れ、それが転がる度に草むらが揺れる。それを合図に、テイオの体は何も考えず、山に向かって走り出していた。一瞬見えた二人の兵士は、悪魔のような笑みで、テイオめがけて走ってくる。

「……っこの、馬鹿者共があ!」

「うぐっ……!」

ソリディア兵士長は、見張り番の兵を全員、素手で殴り倒していた。全ての兵士を殴り倒したソリディアは風邪による高熱の為、足

下が定まらない。

「一体何で門の見張りが一人もいなかったのだ！」

ソリディアは急いで装備を調えながら、見張りの兵士に厳しく問いつめる。

「ハ、ハイツ、兵士長とテイオさんがお出かけになられるのは、もつとお時間が経つてからの事だと思ひまして……」

「誰がその時間に入り出すかは問題ではない！ お前達はこのキャンプの門を守備する兵士だぞ、その守備兵が守備をしていないとはどういふ事だつ、貴様ら私が戻るまでそこで立っておれ！」

鬼に形相で兵士を叱り終えると、ふらつく足を気迫で抑え、走っていく。

(……テイオツ、無事でいてくれ……！)

目指すはカザンタ山岳地帯。しかし、そこは大人が走っていても三十分はかかる距離である。まして暗闇の山道とあっては、更に時間がかかる事は必至である。だがソリディアは力の限り走った。

元々走る事が得意ではないはずだったが、思いの外早く走れる事に驚く。体力のある人でさえ、登りの山道を走るの辛い。肺に激痛が走り、穴が空いてしまったのではないかと錯覚する。

「……ハアツ……ハアツ……ハアツ……！」

とにかく全速力で走る、もしかしたら次の瞬間には、捕まえられて殺されてしまうかもしれない、そんな恐怖が、頭の思考を停止させ、ただひたすらに体を走らせる。山をとにかく登るが、宛ての無い、助けの無い走行である。だが走らずにはいられなかったのだ。

だがそんな状態も長くは続かない。体が限界を訴え、ついにはテイオは動かなくなってしまう。呼吸が間に合わなく、軽い酸素欠乏状態になっている。肺だけではなく、内臓全てに激痛が走っている。意識が遠ざかる中、懸命に意識を繋ぎ止める為に戦う。

軽く後ろを振り返ると兵士の姿は無い。

「う……うう……。……ふ、振り切れ、た？」

しかしそう思ったのもつかの間、兵士は少しずつ向かってきている。予想外にテイオの逃げ足が速かった事、そして夜の闇が予想以上に視界を悪くしていた事が幸いする。しかし、このまま止まっていなくても、また見つかってしまう。そうなつてはもうテイオに逃げる余力は無いだけに、今度こそ捕まってしまうだろう。這いずる力も無くなってしまっているテイオは、転がるようにして少しでも逃げる。

すると、途端に落下していく感覚に体が包まれる。いや、正確には転がり落ちている。

「キヤツ……アアアアアア……！？……ウグツ！」

一体どれぐらいの高さから落ちたのかはわからないが、体の外も中も激痛が走り続けているのは確かである。何かにぶつかる事により、その落下は止められる。痛む感覚を精一杯抑えつけながら、その障害物に触れてみる。

「う、うう……。……え、これって……人！？」

テイオの体を止めたもの。それは驚いた事に人の体であった。周りの暗さと、激痛による意識の薄れで、生きているのか、死んでいるのかの判別は見てわからなかったが、その体つきから男であると判断する。特にテイオが見て判断できたのは、見た事もない深紅の服を、身に纏っている事だけである。

「見いつうけたあ」

「はっ……。……痛う……。……！」

気が付いた時には遅かったのだ。城国軍の兵士はテイオを捉える。兵士はテイオの髪を乱暴に鷲掴みし、後方へ思い切り投げ飛ばす。

「うっ……。……ああ……。……」

「このゴミクズが、こんな夜中に手こずらせてくれやがって！」

兵士の一人は、鬱憤を晴らすかの如く、倒れるテイオの背中を蹴り飛ばす。数発蹴り飛ばし、テイオが動かない事を確認すると、腰

に下げた剣を抜き、テイオに突き立てる。

「安心しろ、痛みは感じないぜ。首を一発で斬ってやるからな」

「……おい、待てよ」

「何だ、この手柄は俺の独り占めだって言っただろっが！」

「ああ、手柄はくれてやるさ。だがな……男は即殺、女は略奪、それが俺のポリシーなんだ」

「ふん、勝手にするが良いさ」

兵士達は、テイオの事も考えずに己の欲望を吐いている。兵士が一人笑っているのが見える。だが、もうどうがんばっても体が動かないテイオには、どうする事もできなかった。

「……………けて」

「ああ、まだ何か言ってやがるぜ？」

「……………がい……………助けて……………」

「へっへっへ、助けてか……………、バツカじゃねえのか、ここにはお前を助けてくれる奴もいなければ、来もしねえんだよっ！」

兵士はわざと唾を吐きかけるような、強い口調でテイオの言葉を遮る。

(音声識別……………音声タスケテ。 たすけて。 助けて。 身体損傷率68%強。簡易戦闘は可能。……………やれやれ俺とした事が、どうやら随分と大きなダメージを受けたらしい……………)

ゆっくりと目を開けると、そこには無数の星の天井が見える。素直に美しいと感じられる。

「……………助、けて……………」

「ちいつ、いい加減に止めねえか、ウザってえ！」

ふと視線をずらすと、倒れた少女に男が馬乗りで激しく張り手を見舞っている。どこかその光景は気に入らない、と考えさせられる。

「この女ア！」

「騒がしい」

あまりの気にくわれない事に、気づいたら男に言葉をぶつけていた。

その場にいた男二人は、驚いた顔で声のする方を振り向く。

「な、何だお前は、いつからそこにいたんだ!？」

「さあな、いつからだろうな。恐らくは昨晚あたりからじゃないか?」

「テメエ、良い気になってるんじゃないやねえっ!」

近くにいた男は、手に持つ剣を振り回してくる。お世辞にも達人とは言えない。その剣を素手で掴む。

「な、何!? ……うっ、っく、な、何で動か、ねえんだ……!」

男は掴まれた剣を引き離そうと力を込めるが、その剣は微動だにしない。

「ふん、愚かだな……」

掴んだ剣に力を込めると、その剣は一瞬で紅蓮の炎が包み込み、刀身を溶解させる。

「な、何なんだ、お前はあ!？」

「……これから死ぬ奴に名乗っても仕方がないだろう?」

それが男の聞いた最後の言葉になる。男の首はわずか一瞬で、漆黒の夜空に舞い、その後を追うように、鮮血が噴き出していく。そして少女に馬乗りになって呆然としている男に歩みよる。

「……本当に何なんだ、テメエは……?」

「……実のところ、俺にも自分がよくわからない」

再び首と鮮血が夜空に舞い散った。

血の雨の降るその場所から、少女を抱え一足飛びで飛翔する。どつやら隕石などが衝突した際になるクレーターのようになっていたようだ。

「さて、助けてやったぜ。後はお前の好きにするんだな?」

「……………」

少女は意識が無くなっているのか、虚ろな目で見ている。死んでいるのかとも思い、脈をとってみるが、動いているところを見ると、かろうじてまだ生きているようである。

「まあ良い、俺もこの世界の事が知りたい……助けてやるさ。俺の

名はティータだ。……といっても今のお前は口もきけない状態か
ティータは少女を背負い、漆黒の荒野を歩き始める。

4 ソリディアの決断

「しかし、どこに行けば良いんだ？」

ティータは少女を背負い歩き出したまでは良いが、行き先の宛ても無ければ、この少女がどこから来たのかもわからない。夜の力ザンタ山岳地帯で、一人で途方に暮れている。

(……しかし暗いな……。こんな場所まで一人で来たコイツの気がしれないな……)

立ち止まっただけでも仕方がない為、現在の状況確認について整理しようとする。東西南北のどこを見ても、明かり一つ見えない。唯一ある明かりといえば、星と、月の光ぐらいである。

程なくすると、荒々しい息づかいと足音が、ティータのいる場所へ向かってくる。その音から察するに、相当切羽詰まっているようにも感じられる。

「くっ……、ここにもいないか。ティオ……無事でいてくれっ！」
見たところ、それなりの手練れの老兵のようである。城国軍の兵士のような装備の充実はしていないが、その一つ一つの洗練された身のこなしから、剣術にかけては自信があるのだろう、と推測する。
(ティオ……女の名前……？ この子の事が、だとしたら連れれの剣士か……)

「おい、そこのお前っ！」

「むっ……！？」

ティータは思い切って剣士に話しかける。暗闇からの突然の声に、剣士は咄嗟に抜刀の構えをとる。周囲を警戒しているのがわかる。迂闊に間合いに入り込んだら、その剣で斬り伏せられてしまうだろう。

(……まあ、斬られるつもりはないがな)

「どこだ、どこにいる！」

剣士はよく目をこらして、声の主の姿を探す。ここまで来る際に、

暗闇に対して目が慣れていいのか、剣士はすぐにティータの影を捉える。

「どうやら見つけたようだな。良いか落ち着いて聞けよ……」

「なっ、ティオ……!?!?」

どうやら剣士はティータよりも、倒れているティオに目がいつたらしい。明らかに怒気をティータに向けているのがわかる。視界が良ければ、既に斬りつけられているだろう。それぐらいの気迫を感じる。

「貴様、ティオに何をしたっ!」

凄まじいまでの怒声をはき出す剣士。並の人間ならばすぐみ上げる程である。

「何をした……? おい、ちょっと待て俺は何も……」

「問答無用!」

どうやら我慢の限度を超えたようだ。剣士として、人間として見ればなかなかの者だとティータは思っていたが、その割に意外と短気のようなもある。剣を抜き、怒りのままに突進してくる。

「チッ……!」

ティータもヴェルデフレインの納められた鞘を構える。

「ハアッ!」

気合いのかけ声と共に、鋼の剣による一撃を見舞ってくる。ティータも難なくその一撃を受け止める。絶妙な力加減に、気迫のこもった一撃だ。

(ほう、人間として見れば大したものだ)

そのまま剣と鞘が交差し、わずかながら膠着状態となる。

(この状態はまずいな……ヴェルデフレインの鞘は、それ単体でも業物の剣並の攻撃力を持っている。人間の使うような剣では、長くは持たないぞ)

ティータにとって、この剣士は殺してしまうわけにもいかない。

もしかしたらティオと関わりのある人間であり、ここからどう進むべきかは、まさにこの剣士にかかっている。しかしティータから見

れば、半端に強すぎる為に、力加減の難しい相手となっている。

(殺す戦いよりも、生かす戦いがこんなにも難しいとはな……)

しかし、老兵の為か、力による膠着合戦は少しずつ均衡が崩れてくる。

「くっ……、この私が押し切れないとは……」

「おい、少し落ち着いたか。聞け、この子をこんな風にしたのは俺じゃない！」

「何、なら誰だというのだ！ ここには責様しかおらんではないか！」

まだ頭に血がのぼっているのだろうか。冷静な思考に至らないようである。

「少し行つた場所にクレーターがある。そこに兵士が二人死んでいゝる、そいつらだ」

「兵士、だと……城国軍か……？」

ようやく老剣士の剣から力が抜けていく。しかしその表情はいまだにティーダから、疑いの念を晴らしていない。当たり前の話だ。

ティーダからすれば本当の話でも、老剣士からすれば嘘かもしれない話なのだ。

「……まずはティオの安否を確認する。事実確認はそれからだ」
「構わない」

老剣士は剣を抜き、ティーダに向けたままゆっくりとティオに近づいていく。ティオの元までたどり着くと、手に持っている剣を地面に突き刺し、寝かせてあるティオの安否を確認する。

「ティオ、ティオさん……私がわかりますか？」

「……うう……、ソ、リ、ディア……？」

「そうです、ソリディアです。よくぞ、ご無事でいてくれました……」

ソリディアという老剣士は、ティオの無事を確認すると涙を流した。余程の心配をしていたのだろう。安堵の溜息をつくとき、ソリディアはこちらに向き直す。

「では、その場所まで案内してもらおうか？」

「こつちだ、ついて来い」

ティータは先ほど、兵士二人を一瞬にして斬首したクレーターへ向かって歩き出す。ソリディアもティオを背負い、その後続く。数歩歩くと、クレーターに戻る。改めて上からクレーターを見ると、相当な大きさになっているのがわかる。現在は暗すぎる為、詳細な大きさは把握できない。

「あいつらだ、ここから見えるか？」

「……ああ、見えるとも。確かにあれは城国軍の防具に間違いない。君はこいつらから、ティオを守ってくれたというのか？」

「くだらない、目障りだったただけだ」

その言葉に嘘偽りは無い。確かに目障りであり、良い気分はしていなかったのだ。

「うむ……。理由はどうあれ、ティオを救ってくれた事には感謝をする。しかし君の正体がわからない以上、このまま野放しにしておくわけにもいかん。私達のベースキャンプまで来てもらうぞ？」

「良いだろう。俺もこんな所で放置されても、困っていたからな」
ティータにとって、まずは世界の情報が知りたかったのだ。右も左もわからない場所では、何よりも情報収集が最優先事項である。ティータはソリディアの提案に従う。

カザンタ山岳地帯からの帰り道。あれから三十分は歩いたかどうか。夜という名の漆黒は、いまだに終わる事ない世界を構築している。

「……ハア、ハア……」

ティータの少し後ろを、ティオを背負うソリディアが歩く。息も相当荒くなっており、その体調不良が見てとれる。

「どうした？」

「……何だね？」

「体調不良が見てとれる、単純明快にそいつを背負っているからで

はないだろうか？」

ソリディアは見ず知らずの男に、自分の状態を見抜かれた事に一笑する。こう見えても、表情による騙しは得意分野でもあったのだ。ソリディア自身、歳をとったと実感した瞬間でもあった。

「元々、体調を崩しててな……。だからといってティオを置いていくなど以ての外だ……」

「……そうか。それをするのは、お前の勝手だ」

ティードは歩くのを再開する。ソリディアも後に続く。そんな出来事に、ソリディアは軽く鼻で笑った。

それから三十分ほど歩いていくと、ティオとソリディアの生かしているベースキャンプへと着く。うっすらとした明かり、松明を数本燃やしているのだろうか。数人の男達が、キャンプの出入り口に待機している。

「お前達……!?!」

「ソリディア兵士長！」

ソリディアの姿を確認すると、男達はソリディアの元へと駆けてくる。倒れるソリディアからティオを保護し、数人で二人を介抱する、

「ティオさんは打撲が酷いです。……まさか、そこのお前が！」

ティオを介抱している男が、ティードを睨み付ける。ソリディアはその行為を止めさせる。

「いや完全な事実確認はしていないが、その者はティオさんを助けてくれたようだ……」

ソリディアの言葉に、男達は緊張を解くが、それでもまだ疑念は振り払えないようである。

(やれやれ地上の連中は、どうも人の話を聞かない傾向にあるな……。まるでアイツのようだ……。アイツ……。？ アイツとは誰だ……。?)

ティードの中に、一人の人物が現れるが、その人物の正体に整理がつかない。

「……そういえば君、名前は何と言ったか？」

「ティータだ」

「ティータ……か。私の名前はソリディア」

「ああ……」

既にこの老兵の名前はソリディアだという認識があった為、ソリディアの自己紹介を適当に流す。

「今日は私のテントで休息を取ってくれ、カルマンよ」

「ハッ……！」

カルマンと呼ばれた男、恐らくはこのキャンプの兵士だろう。何故か左頬が大きく腫れている。

「ティータを私のテントまで案内してやってくれ。正直な話、まだ信用できない部分はあるが、立派な客人だ、丁重にもてなしてくれ」

「……は、はい」

ソリディアの言う事の為、渋々従っている、という事がわかる表情をしている。納得できないという事だろう。いやカルマンだけではない。その場にいる兵士が、不満の表情を露わにしている。

「ティータ、とか言ったな。ついてこいよ！」

カルマンはぶっきらぼうに言い放つ。ティータは気にも止めずに、カルマンの後に続く。

「……っ！」

「……」

道中は二人とも無言。カルマンの不満な感情は、背中越しからでもわかる。ソリディアのテントまで、およそ一分ほど歩いただろうか。見た目の割に広いベースキャンプのようだ。

「……ここだよっ！」

「そうか、ご苦労だったな」

「……、ソリディア兵士長のテントを使えるんだっ、ありがたく思えよ！」

「ああ、わかったわかった……じゃあな」

苛立つカルマンを相手にせず、ティータはテントの中に入ってい

く。中には寝る為のベッドがある。いや正確にはベッド一式があるだけなのだ。ここは睡眠を取る為だけにあるようにも見える。(ソリディア、といったか……熱い面を持ち合わせているが、なるほど……奴はプロだ……)

ティーダは素直に、ソリディアという男の事をそう感じた。

「……良いか、俺はお前の事を疑っているし、認めないからなっ！ どうやら外でカルマンが騒いでいたらしい。ティーダの耳には全く入っていなかった。足音が遠ざかっていく音がする、ようやくソリディアの元へ戻ったみたいだ。

「……ふう。騒がしい奴だ……」

だがティーダは不思議と悪い気はしていなかった。見知らぬ天井を見ていると、すぐに睡魔が襲ってくる。まどろみの世界へ行くのは一瞬の事であった。

目が覚めるきっかけになったのは、小鳥のさえずる声。テント越しても、太陽の存在を認識できる。

「最後に太陽を見たのは……。まあ良い……」

ティーダは気分が良かった。たまには小鳥の声で優雅に起きてみるのも良いと思える。

「おい、ヨソ者！ とつとと起きろ！」

その気分は一瞬にぶち壊される。声から察するに、カルマンだろう。放っておいてもうるさいだけなので、仕方がなくティーダはテントの外へと出る。

「……っん？」

「今度は何だ？ 朝から怒鳴ったり、不思議がったり忙しい奴だな(このヨソ者……昨晩は暗くていまいちわからなかったが、この服、そしてこの剣……一体こいつは……)」

ティーダの深紅の剣ヴェルフレインと、赤い法衣は、地上では到底見られないものだ。

(と、なると城国軍？ まさかスパイか……。いや早計は良くない、いつもソリディア兵士長が言っているではないか……)

「おい、人を呼び出しておいて、何を呆けているんだ？」

「ほ、呆けてなどはないっ！ 信用ならない貴様を警戒しての事だ！」

「わかったから……。何の用なんだと聞いているんだ」

ティーダに言われるのが気に入らないのか、カルマンは頭に血がのぼっている。

「事情聴取だ、怪しいヨソ者の正体を暴いてやるのさ！」

(事情聴取……。その言葉を聞くまでが長い……。めんどくさい男だな)

「さあ、ヨソ者！ 早く来い！」

カルマンは歩き出す。反抗してもやはりうるさいだけなので、ティーダはおとなしく従う。連れてこられた場所はソリディアのテントより大きなものだ。中に入ると、確認できるだけで五人の兵士とソリディアがいる。

「こらっ、カルマン！ 遅いぞ、何をやってたんだっ！」

「は、はいつ、すみません！」

カルマンはテント内にいた兵士に怒られる。見る限りカルマンよりもベテランの兵士のような。

(……。何だ、やはり下っ端か)

ベテラン兵士から外に出ているように指示されるカルマン。その納得いかないといった感情のはけ口は全てティーダにくる。

(何で俺なんだ……。めんどくさい奴)

ティーダとカルマンはお互いに、横目で見合う。

「……。ゴホッ、ゴホッ、失礼。さて、ティーダ君……。だったね？」

「君、はいらない。そういうアンタはソリディアだったか？」

ティーダの態度に、横に付いている兵士達は、ティーダに対して睨みを利かせてくる。

「その通り、私はこのベースキャンプのリーダーであり、兵士達を

まとめる兵士長でもある。……さて私の事は簡潔ながら話した。次は君の事を教えてくれないか？」

「……何が聞きたい？」

「そうだな、ではまず最初に……何故、君はカザンタ山岳地帯にいたのだ？ そしてあそこにいた城国軍の兵士との関係は？」

「そこにいた理由はたまたま落ちたからだ、それ以上は言えない。あの兵士達も偶然あそこにいただけだ」

「貴様、あまり調子に乗るなよっ！」

兵士の一人が、大声をあげティータを威嚇する。それをソリディアは手で制する。

「部下が失礼をする。あとこれだけは言っておきたい、私は君を信じたい、と」

「……？ 疑いは無いのか？」

「当然、疑いの念はある。しかし私は一瞬たりとはいえ、君と剣を合わせた。君の剣に邪念は無い……そう感じたのだ」

「ふん、おめでたい頭だな……」

ティータの一言に兵士は反応する。しかしソリディアは全く表情を変えず、努めて冷静である。

「そうだな、おめでたい頭かもしれん。……話を戻すが、山岳地帯にいたのも、城国軍との兵士の関連も全ては偶然であると、そういう事だな？」

「ああ、その通りだ」

「……わかった。……私は君をこのキャンプに置きたいと思うのだが、どうだろうか？」

突然の、そして意外な申し出に、騒然となる兵士達。誰もが反対の声をあげる。

「兵士長、自分達は反対です！ こんな得体の知れない奴を、ここに置くだなんて」

「確かにティータ君は得体の知れない要素が多い、いや多すぎる。

しかしここは、そんな者達でさえも、暖かく迎えてやるつもり主

旨でやっているはずだよ。それにティード君は腕がたつ、戦力が増える事は、大いに結構な事ではないか」

「しかしっ……!!」

兵士達はなおも反論するが、ソリディアの表情には一変の曇りも無い。その表情を見ると、兵士達は反論の声を弱め、次第に無言になる。

「ふんっ、こいつらの言う通りだ。俺なんかをここに置いて、何かあっても知らんぞ?」

「……そうだな。この決断は早計すぎたかもしれん。しかし、私は君に不思議な何かを感じるのだ」

「……勝手にしろ」

ティードは睨みを利かせられながらも、そのテントから出ていく。元々、宛てのない旅路である。一時的とはいえ、ここに留まるのも良いかもしれない、ティードはそう考える。

5 騎士の使命

汚れ一つない白の壁。何者にも犯されない聖域のような間に、薄布のヴェールに包まれた場所がある。そこからは並々ならぬオーラが漂う。シャングリラキングダム、王の間である。

そこにはヴェールに向こう側にいる王と、ジューク、デュアリス、ラティオの三人がいる。

「ジューク、貴様がいながらティータの愚行を許したというのは……?」

「……はい、力を尽くしましたが、我ら三人では『火の騎士ティータ』を止める事は叶いませんでした」

「……フン。まあ良い、ティータ一人いなくなるかと、我が理想の世界を構築するのは容易い事だ。お前達三人がいればな」

王の言葉に、ジューク達は軽く一礼をする。しかしこの、半ばティータを諦めている王の発言に、ラティオは噛みつく。

「王よ、俺にティータ搜索の命を与えてください!」

「ラティオ……!」

ラティオのこの行動を、咄嗟の反応でジュークは止める。そんな二人の行動すら、ヴェールの向こうで表情が見えないにも関わらず、不敵な笑みを浮かべている、そんな事を想像させられてしまう。

「ほう……ラティオ。ティータ搜索の命を与えてどうするつもりだ?」

「決まっています、兄貴……いやティータを必ずや、連れて帰ってみせますっ!」

ジュークはこの発言に無表情を貫くが、デュアリスは明確ではないが賛同する。

「ティータを連れ帰ってどうするつもりだね?」

「……えっ、いや、四人で王の理想を叶えんと……」

「……必要ない」

王は無慈悲に、そう言い切る。その言葉だけで、ラティオとデュアリスは圧倒される。

「ティーダはこの王から逃げ出した、出来損ないのアルティロイドだ。仮に地上で見つけたら迷わずに殺せ。この王が創造したモノに出来損ないは必要がない」

王の発言に、ジューク達三人は、ただ沈黙する。そのまま王の話は終わり、ラティオとデュアリスは外に出されるが、ジューク一人だけが呼び止められる。

「ジュークよ。あの高さからの落下だ、ティーダは生きていますか？」

「……いえ、間違いなく死んだでしょう」

「……うむ、では奴の落下地点で最も、確率の高いのはどこだ？」

「はい、あの落下向き、風向きなどを考慮しますと、カザンタ山岳地帯が最も近い答えかと思われます」

「ふむ、ではジュークよ。お前がカザンタ山岳地帯へ赴き、ティーダの生死の確認をしる」

ジュークにとっては願ってもない言葉である。表情には出さなかったが、ティーダの安否を最も考えているのは、他でもないジュークなのだ。王には「間違いなく死んだ」と言ったが、同じアルティロイドだからこそ、ジュークはティーダの生存を信じている。

「シユネリ湖はデュアリス。サルバナ森林地帯はラティオに、それぞれ攻撃を開始するように伝えるのだ。いよいよ以て、アルティロイドをこの大地に放ってみせようぞ」

「……はっ！ 王の命ぜられるままに……」

王に一礼をした後、ジュークも王の間を後にする。

ジュークが王の間から出ると、そこにはデュアリスとラティオが待機している。

「兄貴、王はあんな風に言っていたが、俺は……!!」

「わかっている。ティーダ搜索の命は、僕に与えられた」

デュアリスは静かに安堵の溜息をもらす。しかし、ラティオは解せないといった顔つきで、自分の拳を見ていた。

「……フツ。そう不満を出すな、ラティオ」

「いや、俺はただっ！」

「ラティオは納得いかないかもしれないが、ティーダの事は僕に任せるんだ。……デュアリスもね」

この話題で時間を割きすぎるわけにもいかないの、ジュークは速やかに、王から命じられた事を話す。シャングリラキングダムから北の大地にあるシュネリ湖はデュアリスに、南の大地にあるサルバナ森林地帯はラティオに、それぞれ進軍するように伝える。

三人はそれぞれの持つ武器を、掲げ力強く言い放つ。

「風の騎士、ジューク」

「水氷の騎士、デュアリス」

「爆炎の騎士、ラティオ！」

そして、三人は同時に言う。

「我らの使命は、王の為に……！」

アルティロイドを実戦に初投入する第一号作戦の開始となる。

人間にして人間にあらず。この体はあらゆる手法によって生まれた究極の体である。内面も外面も生きた人間と見た限り大差はない。しかしその身体能力は、生身の人間の比ではない。全てにおいて人間の想像を遙かに超えるボディポテンシャルを持つ。

人間にして人間にあらず。この心臓、いや核となる部分は、人間と高名な聖獣とで核融合させられ生まれた、この世に存在する造られた命である。

人間にして人間にあらず。望む事のなかった、超強化された身体。核融合させられた生命。それが究極なる生命体。アルティロイド

ソリディア兵士長に、一応のベースキャンプ滞在の許可をもらったティーダ。しかしキャンプ内は、ティーダからすると異様な活気

に溢れている為、それを嫌って一人、近場の小さな川の流れる場所まで移動する。小さな土手があるので、そこに腰を落ち着けて座り込む。

「……………」
だが何をするわけでもなく、ただ無言のまま、流れる川を見続ける。

「あ、ここにいたんだ」

上の方から声がする。辺りを見回しても、誰もいなかった為、この声の主は自分を呼んでいるのだ、と判断する。とりあえず上を見てみると、顔中に包帯やら薬草を巻き付けた少女がいる。太陽の光を浴びた、桃色の髪の毛が美しいとさえ感じさせる。

「……………誰だお前は？」

「あれ、私の事、覚えてない？」

ティードは一応、簡単に頭の中で過去の事の検索をかけてみるが、やはり少女の事に記憶はない。

「……………知らん！」

「……………覚えてないのかあ……………」

少女は包帯越しからでもわかるぐらいに、寂しそうな表情を見せる。しかし途端に気を取り直したのか、明るい表情でこう言う。

「じゃあ、自己紹介しましょう！」

「自己紹介？」

ティードは明らかかな嫌で、面倒だと言わんばかりの顔をするが、目の前の少女は全く気にする事もなく、勝手に自己紹介を始めだす。「私はティオです。機械いじりというか、工作が得意な十五歳です！」

「……………ティオ」

その名前で思い出す。ティードが一応助けた少女の名前はティオである。

「もう怪我は良いのか？ 随分と暴力を受けていたみたいだが？」

「はい、何でかわからないけど、私って回復力が凄いらしくて……………」

ティーダの問いに、ティオは何故か照れた表情で返事をする。確かにティオ本人が言うように、昨晩は相当な外傷も目立ったが、今は見る限りそうでもない。手当ての際の包帯が、大げさすぎると言えるようなものになっている。あるいは手当てした人間の腕が良いのか。

「……それです」

「何だ？」

「いや貴方の自己紹介」

適当にはぐらかして誤魔化そうとしたが、ティオは鋭く指摘してくる。これ以上は誤魔化すネタも無いので、ティーダは仕方がなくティオの言うとおり、自己紹介をする事にする。

「……ティーダだ」

「うん」

「……………」

「あの……、他には？」

「無い」

これは事実の話だ。ティーダは理由はどうあれ、事実上の扱いは、城国軍の兵士である。本人は思っていないなくても、敵対するレジスタンスでこの事を言うわけにもいかない。そうなるとティーダにとって、まだ得体のしれないティオに、話せる事は良い所で名前くらいである。

「むう……、じゃあ年齢は？」

「……年齢？」

ティーダは自分の年齢を思い返してみる。普段から全く年齢の事など、関係のない毎日を送っていた為、自分が生まれてから何年経ったのか、咄嗟に思い出せないでいる。

「……十六だな」

「十六歳？　じゃあ、私の一つ年上だね！」

「ああ、これからはティーダ様と呼んで良いぞ」

「それでティーダ君は、何か趣味とかは無いんですか？」

「……。お前、毎日が楽しいだろうな。……趣味は無い」
「……ふうん」

それでテイオの聞きたい事は終わったのか、しばらく無言のまま二人で川の流れを見つめる。川の水が流れる音。水の勢いに耐えきれず、転がった石と石がぶつかる音。風が通り抜ける音。草が揺れる音。その全てがティータは心地良いと思っていた。そんな自分自身の意外な好みに、自分自身が最も吃驚びっくりしていたのだ。

「……よいしょっ!」

そんな感慨に浸っていると、テイオが急に立ち上がる。

「私、もう行きますね」

「……ああ」

「寂しくはないですか?」

「……早く行け!」

テイオはそのまま土手の斜面を駆け上がっていく。

「この川、私のお気に入りなんです。良かったら毎日見に来てくださいね。夜にはホタルがまだ見れるめずらしい場所なんですよ!」

「ホタルって何だ?」

そう問いかけた時には、既にテイオの姿は無かった。

(………ったく。言うだけ言ってどっかに行っちゃまうのかよ)

心の中で悪態をつきながらも、どこか悪い気はしていなかった。

そのまま、土手の斜面に体を預ける。空を見上げると、青い空と白い雲、そして雲に隠れながらも、太陽が見える。しばらく風景を楽しんで、ティータはベースキャンプへと戻っていく。

ベースキャンプに戻ると、相変わらずの騒がしさがある。良い言い方をすると活気があるのだが、ティータにとってはただ騒がしいだけである。

「おい、ヨソ者!」

後ろから何者かに呼ばれる。だがティータはその相手が誰なのか、薄々とわかっている。振り向くと案の定、カルマンが不機嫌な顔で

立っている。

「何だ？」

「何だ、じゃない！ お前ヨソ者なんだから、少しはキャンプのみんなの手伝いでもしろよ！」

「必要ないんじゃないのか？ 見ると、別に手が欲しいわけでもなさそうだが、それに素人が下手に手を出せば、逆に迷惑がかかる」

「……むっ！」

もっともらしい意見を言われ、とりあえず黙るカルマン。言いたい事も無さそうなので、ティーダはカルマンから離れるように歩く。(奴につきまとわれると、ただでさえキャンプが騒々しいのに、余計にうるさくなる……)

「お、おい待てよっ、こういうのはな、できるできないじゃなくて、気持ちが大切なんだよ！」

「……そうだな、一理ある意見だ」

ティーダはベースキャンプ出入り口を目指し、歩き出した。

「おい、どこに行くんだ！？」

「気持ちが大切なんだろ？ 俺は俺の仕事をしてくる」

「あつ、おい！」

構っていたらキリがないと判断し、ティーダはカルマンを相手にせずに、ベースキャンプを出ていく。行き先は昨夜のカザンタ山岳地帯である。夜に見られなかったクレーターの規模、そしてそこに何かの見落としが無いかを確認したかったのだ。

人間の成人男性なら、ベースキャンプから三十分、あるいは四十分で行ける距離だが、アルティロイドとしての身体能力を使えば、約五分でカザンタ山岳地帯まで行ける。まるで物語に出てくる忍者のような動きで、木と木の間を抜け、大地を蹴り、あつという間に山岳地帯へたどり着いた。

(……夜では明かりが全く届かない為か、見通しの悪い場所だと思っただが……。なるほど、昼間に来ると見通しが良すぎるな。ここからでもクレーターの規模がわかる……。しかし乾燥しているからか、

砂埃がひどいな……)

ティータが城から抜け出した際に、落下してできたクレーターは今いる場所から約30M程の距離の場所にある。クレーターの中も確かめる為に、ティータは歩いていく。昨夜殺した兵士二人も、どこかに隠さなければ、城国軍から戦力を送り込まれてしまう可能性もある。そうなってしまうっては、この山岳地帯から恐らく近い場所にあるティオのいるレジスタンスは真つ先に襲われ、キャンプは全滅してしまう可能性もある。勿論、今こうしている間にも、キャンプが襲われている可能性もあるのだ。

(……って、おいおい。何を真面目にレジスタンスの兵士をやっているんだ、ティータ)

クレーター内部にあるはずの、兵士二人の死骸を確認する。するとそこには二つの死骸の他に、何者かが一人立っている。見た感じでは剣士のようなのである。砂埃のせいで、細かい確認ができない。

(……しまった、先に発見されたか。どうする、口封じの為に殺すか……?)

ティータは腰に備えた、深紅の剣ヴェルデフレインを、いつでも抜ける気構えをする。

「フツ。いるんだろ、ティータ？ 隠れていないで出てくるんだ」

「……っ!? その声、ジュークか？」

そこにいたのは、ティータと同じアルティロイド、風の騎士ジュークである。ジュークはその場で、浮遊し始めると、真つ直ぐにティータの目の前まで来る。

「生きていたか、良かったよ、ティータ」

「一体何の用だ。お前一人で地上を攻めに来たわけでもないだろう？」

「僕がここに来た理由は、ティータの生存確認さ」

「……生存確認？ 王の命令か、冷静なお前一人の判断ではないし、王は俺達アルティロイドを決して地上に出させはしなかった。……」

まさか！

「そう、そのまさかだ。王は理想郷実現に向けて、我らアルティロイドを地上に放ったのだ」

ジュークの言葉が本当だとすると、非常に厄介な事になるとティードは考える。何故ならアルティロイドの戦闘能力は生身の人間の比ではないからだ。

「……それで、お前は俺の生存確認をしてどうする？俺を城へ連れ戻し、一緒に地上の支配をさせようっていうのか？」

「いや、残念ながら王の意志は違う」

「……何だと？」

「王はティードの事を出来損ないのアルティロイドと言った。

そしてその生存を確認したら始末するように伝えられている」

その言葉を聞いて、ティードはヴェルデフレインに手をかける。

「早まるな、ティード。僕はお前を殺そうなど考えてはいない」

「……では何だと言うんだ？」

「僕には僕の考えがある。だが今はまだその時ではない。……だが僕にも王への立前がある、剣を構えてくれ、ティード！」

風の騎士ジュークは、その腰に下げた深緑の剣フルーティアを鞘から抜き構える。

「結局はそれか、わかっているとは思うが、俺は手加減はしないぞ？」

「わかっているよ、僕も手加減されるのは好きじゃない」

同じくティードも、深紅の剣ヴェルデフレインを鞘から抜く。ティードの漆黒の瞳が深紅へ変わる。

「ティードの中の、火の聖獣エンドラがヴェルデフレインの封印から解かれる為だ。相変わらず美しい深紅だ……」

「くだらん美意識は、戦いの中に持つてくるものではないぞ、ジューク！」

「わかっているさ、ティード。さあ行こう、風の妖精フーガ！」

ジュークと妖精フーガが作り出した一陣の風が、荒れ果てた

大地に吹き荒れる。

6 白の戦荒野

「おい、どこに行くんだ!？」

傷の手当てに、テイオ達の住むベースキャンプ唯一の医者である、ラルク医師の元から帰る途中に叫び声が聞こえる。この声の主は、聞き慣れた人である。カルマンだ。

「気持ちが大切なんだろ？ 俺は俺の仕事をしてくる」

「あつ、おい！」

どうやらカルマンがティータに突っかかっているらしい。

(ソリディア兵士長に聞いたけど、本当に仲が悪いのね、あの二人……ティータ君、どこに行くんだろう?)

カルマンとの喧嘩が終わったのか、ティータはベースキャンプから出ていく。悔しさからか、カルマンは足踏みをその場でしている。

「カルマン君」

「あ、テイオツ……ちゃん!？」

「どうしたの、そんな大声だして？」

「……あのヨソ者が、協力しないからさ……。それに……いや、何でもない」

無愛想な顔で言うカルマン。心なしか顔が少し赤い。

「……協力？ カルマン君、駄目だよヨソ者なんて言っちゃ。レジスタンスとして動いている以上は、みんな仲良くしないと！」

「そ、そうなんだけど、あの野郎がつ！」

「カルマン君っ！」

カルマンはテイオに睨みを利かせられ、そのうるさい口を閉じてしまう。

「……わかったよ、仲良くするよう努力する」

「うんっ！」

「じゃあ、俺は見張りの仕事に戻るから」

「うん、がんばってね！」

渋々といった感じで、自分の仕事に戻っていくカルマン。ティオはカルマンの姿を見えなくなるまで見送ると、出ていったティードが気になり出す。歩いていった方角から、カザンタ山岳地帯だと予測する。

「カザンタ山岳地帯？ …… 一体何があるんだろ。ちょっと気になるなあ」

昨晚、嫌な目にあっただけで、ティオはカザンタ山岳地帯に畏怖の念がある。しかしそれ以上に、ティオはティードに興味があったのだ。

（怖いけど……行ってみよう。また怒られちゃうかもしれないけど……）

ティオはベースキャンプを出て、再びカザンタ山岳地帯を目指す。

「ハアツ！」

カザンタ山岳地帯。白の戦荒野に、ヴェルデフレインとフルーティアの弾き合う金属音が響く。風の騎士ジュークは、自身の風の能力を使い、体を浮遊させ襲い来る。その動きはまるで重力を感じさせず、縦横無尽の攻撃方法を持つ。

「ティード、腕が鈍ったのではないか？」

これはジュークの、ティードに対する安い挑発だ。勿論、ティードも挑発には応じない。鬱陶しく地上を浮遊し、高速で移動するジュークに当てる為、ティードは腕を大きく振るい、火の閃光を発生させる。まるで爆弾が爆発したように、大地の砂が舞い散る。

「そうだ、ティード。もっと本気で来い、それじゃ僕は倒せない！」

「……いちいち口数の多い奴だ」

ティードは空いた左掌から火球を放つ。恐らくはジュークの風の障壁が、軌道を逸らすだろう。しかしこれはただの牽制弾である。案の定、火球は風の障壁でかわされてしまう。ティードは放った火球を目隠し（ブラインド）にして、一気に接近戦を仕掛けに行く。

「フツ、ハアツ！」

一気に懐へ入り込み、左薙ぎから右薙ぎへと横の連携で攻めていく。それを軽やかな旋回速度で、華麗に捌いていくジューク。しかし二つの斬撃は、紙一重の差であった。

(チィ、すばしっこい奴だ……)

二人の距離は、再びジュークよって大きく開く。後方へ逃げようとする相手は、本来ならば追い足で追撃を与えたいところだ。だが常に浮遊状態で移動するジュークに、例えば後方へ飛んだ際の、着地の硬直などは無い。隙の全くない逃げ方では、下手に追撃をする
と危ない。

「……フツ。空気スラッシュエアの刃！」

ジュークはフルーティアを振るう。その剣から放たれた斬撃は、空気を切り裂くかまいたちのようになり、ティーダに向かっていく。風と同等の速度で襲ってくる刃は、目にも見えぬ速さで、ティーダを切り刻みに来る。

「クツ……！ ジュークめ、障壁だけではなかったのか！？」

襲ってくる空気の刃を、深紅の剣ヴェルデフレインを用いて、一つ一つ丁寧に迎撃していく。厄介なのは、空気が刃のように襲ってくるかまいたちだが、目には見えない為、迎撃、回避が容易ではない。(……ティーダ。これも避けるか、面白い。それでこそ最強のアルティロイドだ)

「これは避けられるかつ！ 空気刃エアウェイブの波！」

まさしく空気刃の波を発生させるジューク。その空気の波は、地面もろともえぐり取ってしまうように、突風のような真空波がティーダに迫り来る。

「エンドラ、力を貸せ！ 炎気フレイムオーラ！」

対するティーダは、自身の中に宿る火の聖獣エンドラの力で、体を炎に包み外壁を作り出す。ジュークのエアウェイブが、無情な程にティーダを飲み込んでいく。その空気刃の波の威力は凄まじく、防御壁をはったティーダに、無数の切り傷を与えていく。

「さすがだな、ティーダ。まさかあの真空波を強引に突破するとは

……。最もそんな事ができるのは、ティーダぐらいのものだ」

「……俺を本気で殺そうとしておいて、勝手に感心するな！」

「……フツ、すまない。これで満足した、僕は剣を納める」

言葉通り、ジュークはフルーティアを鞘に収め、戦闘の意志は無い事を見せる。しかしティーダはヴェルデフレインを納めようとはしない。

「どうした、戦いは終わりだ」

「ふざけるなっ、いきなり戦闘を仕掛けて、いきなり終わらせるといふのか？」

「悪いが、その通りだ。僕には僕の考えで動いている。今はこれ以上、ティーダと戦うのは得策ではないと思った。何よりも重要な話がある」

「……重要な話、だと？」

ティーダは仕方が無く剣を下ろし、地面に突き刺す。シュークもとりあえず、それに納得し話を始める。

「ティーダは、命の騎士ティアナの事を知っているかい？」

「……命の騎士？ 何だそいつは、聞いた事もないぞ」

「現存する四人のアルティロイドの元祖、プロトタイプとなった最初のアルティロイドだ。我々は遺伝子の改良により、後の世に自分の遺伝子を残す事は不可能だ。しかしアルティロイドの中で、唯一後生に遺伝子を残せる存在。……命の騎士は数年前に破棄された、だが最近独自に掴んだ情報によると、命の騎士は生きている」

「……そんな事を俺に教えてどうする？ 俺に見つけて保護してほしいとでも言うのか？」

ティーダの言葉に、ジュークは不敵な笑みで返す。

「そういうわけではない。だが地上で生きるお前に、生きる目標を見せつけてやるうというだけの事。別に保護してほしいとは言わないさ」

「……何か引つかかる言い方だが、俺自身も地上にいる理由が必要だ。とりあえずは覚えておいてやる」

「……フツ。ティアナは当時の年齢から計算していくと、恐らく現在で十五、六歳の少女だろう。勿論、生きていければの話だ」

ジュークは空中に浮遊し、空を飛び始める。

「お互いの幸運を祈る。死ぬなよ、ティーダ」

そう言い残し、ジュークは空を飛翔し、城国へと帰還していく。

ジュークが完全に視界から消えるのを確認し、地面に突き刺したヴェルデフレインを鞘に戻す。

（命の騎士ティアナ。……俺と同じ歳ぐらいの女、か）

考えてみても、ティーダの中に命の騎士ティアナに関する情報はない。立ち止まっても仕方がないと判断し、クレーター内部に残っている死体を、砂に埋め隠す事にする。

（防具を持ち帰るのは無理だが、武器ぐらいは持ち帰っておいてやるか）

ティーダは兵士二人が装備していた鋼の剣を手に取り、死体に砂をかけ完全に見えないようにする。あらかた砂を慣らし、見た目も不自然ではないように繕うと、一足飛びでクレーターから出る。

「あつ!?!」

クレーターから脱出し、着地した場所には見知った顔がある。

「お前、ティオ？ 一体なぜここにいる？」

「あ、えと、その……」

ティオは困惑した表情をする。心なしか目を合わせようとしない。

（まずいな……、まさか聞かれたか）

「……ごめんなさい。ティーダ君がキャンプから出るのを見て、気になって……」

「一体、どこから見ていたんだ？」

「……えと」

「隠さないで良い、別に怒りもしない」

ティーダの言葉に決心したのか、勇気を出してティオは告白する。
「見たのは途中から、本当に。……アルティロイドって、命の騎士

「ティアナって……」

（……命の騎士の存在はともかく、アルティロイドの存在を知られたか。……どうする、ここでティオを始末するか、あるいは……）

ティオをこの場で殺してしまうのは、ティーダにとって容易い事だ。但し、それをやってしまうと地上で行動する際に、後々面倒な事になってくる。それともアルティロイドの存在を、ティオに必要な最低限で打ち明けるべきか、ティーダは迷っていた。

「あのね、ティーダ君。……私、アルティロイドって何なのかかわからないし、命の騎士も知らない。ティーダ君が話したくないのなら、無理には聞かない。でも、その命の騎士って人をティーダ君が探すのなら、私も手伝いたい！」

「……おめでたい奴だ。お前もソリディアも。何故、得体の知れない俺をそこまで信用できる。俺は城国軍のスパイかもしれないんだぞ、そうなたらお前達は城国軍の兵士に皆殺しにされるんだぞ？」

「そうかもしれないね。……でも私達レジスタンスは、常に命懸け、生き残る為には協力して信頼する事が大切なの。……だから私はティーダ君を信じたいな。……ソリディア兵士長に教わった事だけど、駄目かな？」

ティオは上目使いで、ティーダに問いかける。

「……っふん。だから甘いんだ。帰るぞ、ティオ」

「うんっ！……ってうわっ!?!？」

ティオは突然、ティーダに抱きかかえられ素っ頓狂な声を上げてしまう。

「おとなしくしている。下手に動くと落ちるぞ」

ティーダはティオを抱えたまま、高く飛び上がり風のように走り抜けていく。その常人を超えた動き方に、ティオは実感する。ティオは人間ではなく、アルティロイドというものなのだ。

（……それにしても、これってお姫様抱っこだよ!? ……でも、良いか。なんか、暖かいなあ……）

ティオはティーダに身を任せる。どこか不思議な感覚を抱かせる

心音を耳に刻みながら。

テイオが落ちないように、それなりの考慮をした結果、カザンタ山岳地帯からベースキャンプまで、約十分前後で到着する。

「ティーダ君。もしも、もしもね。話してくれる気になったら、アルテイロイドの事を聞かせてもらえないかな？」

「……別に構いはしないが、そんな事を聞いてどうするつもりだ？」「どうするつもりも無いよ。ただ……知りたいだけ、ティーダ君の痛うつ！？」

テイオは突然、胸元を抑え、膝をつき苦しみます。息もできない程の痛みが、テイオの体を走る。

「おい、どうした？ どこか怪我でもしたのか！？」

「……はあ、はあ。大丈夫、ちよつと痛みが走っただけだから……」「だがお前、その痛みが方はただ事じゃないぞ」

わずか一瞬で出来事にも関わらず、テイオの額には汗が滲んでいる。

「本当に、大丈夫……。ちよつと昨日の傷が開いただけだよ、きつとつ……。私、疲れたから休むね！」

ふらつく足で、自分の部屋となっているテントを目指すテイオ。その足取りは端から見ていると、明らかに状態がおかしい。

（……大丈夫なのか、あいつは。しかし、命の騎士ティアナ、か。現存する四人のアルテイロイドの元となった少女……。だが何で破棄され、ジュークはその情報を持っていた？ 何を企んでいるんだ、ジューク）

考えたところで仕方ない為、ティーダは持ち帰った剣を、ソリディアに預けに行く事にする。新品同然の鋼の剣、武器の取り揃えに困っているレジスタンスには、貴重な戦利品となる。そして当面の目的は、命の騎士ティアナを探す事に定める。

最初にソリディア専用のテントに向かってみるが、ソリディアの

姿はない。次に隣にある兵士専用の大きなテントに向かう。中に入ると数人の兵士と共に、ソリディアを発見する。どうやら何かの作戦会議だろうか。手元にある紙と睨み合いをしている。

「うむ……。武器が足りん、せめてもつと戦力になるちゃんとした剣があれば……」

「武器ならここにあるぞ、ソリディア」

悩むソリディアに、声をかける。ソリディアはともかく、他の兵士はやはりティーダを信用していないのか、どこか警戒をした表情で睨みつけている。

「ティーダか！？　しかし武器とは一体……？」

ティーダは手に持つ剣を、会議に使っていたであろう、大きな木製の机の上に放り投げる。新品同様の剣を二本見ると、今まで睨みを利かせていた兵士達も、その剣に釘付けになっている。

「一体、これはどうした！？」

「昨日の兵士二人の剣を拾ってきた。ついでに死体を隠しにな、見つかっては色々と面倒な事になるだろう？」

「……そうだったな。しかし、大収穫ではないかティーダ！」

良い案が出ずに、苛立ちが見えていたソリディアの顔も、いつの間にか表情が明るくなっている。

「くだらない。少し考えればわかる事だ」

「うむ。これで現在考えている作戦が実行に移せそうだ」

ソリディアの士気が高まると同時に、兵士達も士気が高まっているように感じられる。

（単純なものだ。これが人間か……）

盛り上がるテント内から逃げるように、外へと出て行くティーダ。その歓喜の声は外に出ても、騒々しく聞こえるぐらいに大きくなりつつある。

（ふん、だが……悪い気はしない）

ティーダもソリディア達と同じく、自分の心が躍動しているような感覚を覚える。ティーダは、やはり自分も馬鹿だと、一人実感し

ていた。最初に見た時よりも、キャンプの活気がやはりつるつると感じたが、どこか心地よさを感じる。

7 サンバナの町(前書き)

名前 ティーダ

種族 アルティロイド

性別 男

年齢 16

階級 火の騎士

戦闘 3000

装備

E 深紅の剣ヴェルデフレイン

E 火の戦闘法衣(赤)

E 火の聖獣エンドラ

名前 ティオ

種族 ヒューマン

性別 女

年齢 15

階級 一般

戦闘 100

装備

E 赤いゴム紐

7 サンバナの町

「ではソリディアさん、お願いします」

「いや、困った時はお互い様ですよ」

見知らぬ人間が、兵士用テントから出てくる。見た目は戦いをする人ではない。三人ほどの警護兵を従え、その人間はキャンプを出ていく。

「……うむ」

「どうしたのですか、ソリディア兵士長？」

心なしか悩み顔のソリディアに、カルマンは話しかける。所詮、見習い兵であるカルマンは、テント内の話に立ち会えなかったのである。

「うん、カルマンか。さっきの人は、サルバナ森林地帯にある町の町長さんだ。どうやら最近になって城国軍からの進軍が激しくなっている為、救援要請が出た」

「サルバナ地帯の町っていうと、世界に数カ所しか残っていない町の一つ、サンバナの町ですよな？」

「うむ、よく知っているな、カルマン。そのサンバナの町に、最近になって人智を超えた兵士が出てきたらしい。その兵士を前にすると、ほとんどの者は何もできずに倒されるという……」

得体の知れない城国軍の兵士。サンバナの町はその兵士の軍団に、攻め落とされそうになっているという。

「で、でも兵士長。そんな化け物のような人間が、はたして常識的に考えているでしょうか？」

「うむ……」

（確かに、そんな一人の存在で、戦況が変わる人間などいるはずはない。それは過去の戦いの歴史が証明している。人智を超えた、人間の力を超えた存在？）

ソリディアには心当たりがあった。いやその心当たりは確かなも

のではない。つい最近、体に染みついたものだ。

「とりあえず自分はいつでも出撃ができるように、万全に準備をします！」

カルマンは勢い良く走り去っていく。その若い背中をソリディアは、嬉しそうに見つめていた。

「……新しい時代は確かに育っている。私の役目は、少しでも早く支配の時代を終わらせる為に、全力を注いでいく事だけだ……」

時代は城国軍の王による支配の時代。地上で戦う者達は、自由という名の理想郷を求めて、戦い続けているのかもしれない。

「えへへ、これも使えそう！」

「……一体何なんだ、このガラクタは？」

ティードはティオに付き合わされ、ベースキャンプから少し離れた森林にきている。カザンタ山岳地帯に比べ、緑の量が圧倒的に多く、まるでジャングルのようにもある。意外にも人の手が入っていないのか、旧時代の兵器の残骸などが転がっている。その中から使えそうな物を、ティオが選別しティードが持つ。

「私達のキャンプのシャワー用のボイラーが、そろそろ壊れちゃうから修理用のパーツとか取り揃えないといけないからね」

「好きにしる。俺は興味がない」

「うん、だから荷物持ち、よろしくね！」

ティオは嬉しそうに前に進んでいく。大木が折れたものがあるなど、進行に難があるのだが、ティオはそれに関係なく進んでいく。

「……何で俺が荷物持ちなんて。おい、あまり先に行くと危ないぞ！」

「大丈夫だよ！」

少し遠くからティオの声が聞こえてくる。好きな事になった際の、運動神経の高さは特筆すべきものがある。

「何が大丈夫だ、良いからあまり先に行くな！」

「だつてティードダがきつと助けてくれるもの！」

わずか数秒で、ティオの声が更に遠くから聞こえてくる。

「ん、つたく……。全くな、俺は一体何をしてるんだ？」

ティオに追いつく為、ティードダは一足飛びをしながら、ティオとの距離を詰めていく。木々の間から溢れてくる太陽の光が美しく感じられる。だが森林の中の生命の存在が少なく感じられる。

（これも城国軍の支配のせいなのか？ 幼き日より、地上に生きる人間は大地の生命を食いつぶす、生命のクズだと言われ続けてきたが……。だが、本当にそうなのか？ 少なからずこの馬鹿^{ティオ}を見ている分には、そうは思えない）

少し急いでみると、すぐにティオに追いつく。遠いように感じたが、そこまで距離は離れていなかったようだ。洞窟のように育ちきった森林地帯が、声を反響させ遠く感じさせたのだろうか。

「はい、ティードダ。これもお願いね！」

「おいティオ。いい加減にしておけよ、こんなにガラクタ拾ってどこに置くんのだ？」

「どこかに置いておけるよ、きつと！ それにこの子達はガラクタじゃない、まだ生きてるんだよ？」

「……はいはい。相変わらずマイペースな奴だな」

飽きる事無く、馬の尻尾にまとめた桃色の可愛い髪を揺らし、弾むように歩いていく。まるで森林の中に生きる、命の鼓動と会話を楽しんでいるようにも見える。ティオを見張っているのも楽しんでないが、明るいティオを見ると、ティードダ自身もくすぐったいような気持ちになる。他人との関係に無関心だったティードダにとって、この経験は初めてのものだった。

「ねえ、ティードダ！」

「どうした、そんなに慌てた声を出して？」

楽しそうに弾んでいたティオが、急に身を隠すように、体を小さくする。ティオが見る先には、数人の人間がいる。とても楽しんでいる雰囲気ではなく、三人は城国軍、二人の内一人は兵士、もう一

人は一般人だろうか。いや、その周囲に注意してみると既に二人の兵士が殺されている。三人の警護兵がいたが、内二人は殺されている。最後の一人も、既にどこかを怪我させられたのだろうか、動きが心なしに鈍い。

「お願い、ティータ。あの人達を助けてあげて」

「……そうだな。お前はここに隠れている！」

ティータは疾風の如き速さで、一気に間合いを詰めていく。

「くそつ、俺の命に代えても、町長の命はとらせはしないぞ！」

町長を守る警護兵は、利き腕である右腕を斬りつけられている。

その為、腕に力が入らず、剣の重さに腕を振るわせている。

「へっ、そんな偉そうな格好をしちゃってよ。生意気なんだよ、地上の人間共が！」

「良いから、斬られてしまえよ。大地を食いつぶすお前達は死んだ方が良いんだよ、実際」

好き放題に、城国軍の兵士は、町長と警護兵を言葉で^{なぶ}蹴っていく。既に人を殺す事を快楽としている顔である。

「き、君達も同じ人間なのだぞ、一体何故、君達は私達を見下すのだ!？」

町長は、城国兵士が与えてくる死の緊張感を振り払おうと、必至の形相で声を荒げる。

「大地を食いつぶすクズのような地上の人間と、天に伸びる誇り高き我ら城国の人間を、一緒にしようと言うのか？ 愚かな……、我らとお前達とは人間としての品格が違うのだ！」

「ば、馬鹿な、何だその理不尽な理屈は……」

町長の顔からは、みるみる生気を失っていく。城国兵士の言葉に、絶望しきっている。

「理不尽はどつちだ！ ゴミのような人間が、我々高貴なる人間と対等になるうとはっ！」

「人間のクズめっ、死をもって償うが良いっ！」

城国兵士は、その手に持つ剣を振り上げる。その行動に、人を殺すという迷いは微塵も無い。

「う、うわあああ、町長逃げてええ！」

警護兵は、震える腕で剣を構えたまま、後ずさりしてしまう。それでも町長の盾になり、命を散らせる覚悟を見せつける。

「死ぬがいいつ、地上に生きるゴミめ！」

「お前がな」

目にも止まらぬ速さで、走り抜け剣を抜刀する。剣を振り上げた城国兵士の腕を、両腕とも一刀両断してみせる。はじけ飛ぶ鮮血。

「うっ……あああああ……っ……！？」

轟く断末魔。そして断末魔の途切れと共に、その兵士の首が宙を飛ぶ。噴水のように血を降らせる。そのままの勢いで、一番近くにいる兵士に向かう。

「何者だ、貴様！？」

相手兵士も容赦なく、鋼の剣をティーダに振るう。

「……ツハア！」

攻撃を仕掛けてくる兵士の剣と、その本体を紙切れのように、真つ二つに斬ってみせる。兵士の胸部から上が、大きく後方へ吹き飛ばす。その兵士は声を出す暇も無い。即死だった。

「ぎ、斬鉄を、いとも容易く……！？」

電光石火の速さで、最後の兵士の首を斬り飛ばす。この兵士も、声を出す事もなく即死する。緑に包まれた大地は、赤き鮮血を浴び、鮮血化粧をする。

ティーダは、二人の安否を確認する為、振り向き近づいていく。

「や、やめろっ、町長には手を出すなっ！」

警護兵の手には、剣は無かった。しかし無い事にも気が付かず、剣の構えをとる。

「……それだけの根性があれば兵士として合格だ。安心しろ、俺は多分、お前達の味方だ」

「……み、味方？　しかし、これは……、これが人間のできる事な

のか？」

町長も警護兵も、その惨劇の大地を見て、意識が途切れそうになるのを、必至で堪えている。

「目の前に敵がいるのなら……斬り殺すまでだ」

「そ、そんな……」

警護兵は、自分とは全く違う次元の男を見て、頭の中が真っ白になる。

「ティード、二人は無事！？……うっ！」

赤く染まった森林を見て、ティオは体からこみあげてくる物に耐える。

「ああ、兵士の方は腕を怪我しているらしい、手当てしてやってくれ。……どうした？」

「うっ……気持ちが悪い……」

相当に気分が悪くなったのだろう。ティオは座り込んでしまう。

(……やれやれ、やはり人間というものは面倒なものだな……)

「森が……泣いている……」

気分も悪そうだが、ティオは悲しそうな表情で、鮮血に染まった木々や草を見ている。

「泣いてる？ そうかもしれないが、自分の感性でそういう事を言うものではない」

「うっん、泣いてるよ。木も草も……貴方の心も」

「……」

ティオは真っ直ぐにティードを見つめる。その目は何か惹かれるものがあり、ティードは一瞬ながら、ティオに全てを奪われていた。

「あ、あの……申し訳ないのですが、お二人は一体……？」

護衛兵を休ませ、町長自らが話しかけてくる。既に落ち着きを見せている。もしかしたら、このような事態に陥る事は慣れているのかもしれない。

「あ、ごめんなさい」

気持ち悪さを堪えながら、町長の問いかけに答えようとするティ

オ。話し合いにおいては、最初からティータは当てにしていない様子である。

「私達はここから少し北にある、ベースキャンプのレジスタンスグループ『パーシオン』の者です」

「おお、君達はパーシオンの方達なのか。実は私達はパーシオンからの帰り道だったんだ」

町長にとっては知った言葉が出てきた為か、少しばかりだが顔つきが明るくなる。

「何か重要な用件があったのですか？」

「いやな……最近になってサンバナの町の周辺が城国軍に襲われてね……。被害は我が町にも出てきているのだ。そこで城国軍の侵攻を食い止めようと、サンバナ周辺のレジスタンスグループに救援を求めていたのだよ。まあ詳しい話は、パーシオンに帰ったらソリデイアさんに聞いてもらいたい」

自分で話しておいて現実に引き戻されたのか、町長の顔は再び思い悩み、暗い顔へと変わっていく。随分と切羽詰まっているようにも見える。

「そんなに凄いのか？ いくら軍力に勝る城国軍でさえ、レジスタンス達を陥落させるのは苦労するはずだ」

「……いえ、軍力自体は大したものでもないので。ただ……、恐らくは軍団長なのでしょうが、一人だけ異常なまでの強さを持つ者がいるのです。見た目は年端もいかぬ少年なのに、レジスタンス数人をものの数秒で皆殺しにされてしまいました……」

町長は悲しそうにそれを言う。後ろで休んでいる護衛兵も、恐らくは同志を失ったのだろう。悔しそうに握り拳を作り嘆いている。

「そんなつ、そんな人間がいるはずが……！」

「……………」

ティータには城国軍の、その存在に思い当たる節がある。城国軍の兵士でそこまでの強さを誇っているのは、十中八九アルティロイドだ。

(数日前にジュークは地上に降りた、こいつがサンバナを攻める確率は低いとみて良い。と、いう事はデュアリスか、あるいは…)

そこまで考えたが、ティータの思考は停止する。

(地上に降りた際の、落下衝撃の影響か。一部、記憶の欠損が見られるな。……まあ良い、その内思いつけるだろう)

「……とりあえず、ここからサンバナの町までもう少しです。宜しければ、立ち寄ってみてはいかがでしょう?」

サンバナの町はここから南に数百メートルの位置にある。ここからベースキャンプに戻るより、距離は近いのだ。

「良いんですか!? ……あ、でも、どうしよう?」

ティオは興味津々な顔をするが、護衛してくれているティータに悪いと思い、町長の誘いを辞退しようとする。

「……ごめんなさい。やっぱり……」

「 良いんじゃないか、ティオ」

「 えっ、ティータ!? 」

「 後日、戦闘になるかもしれない。地形の把握の為に、見ておくのも良いかもしれないしな。そのついでにでも、お前はお前の用件を済ませれば良い」

「 ありがとうございます、ティータ! 」

町長の誘いを受け入れ、ティータとティオはサンバナの町へ移動する事にした。

自然と人が一体化している町、サンバナの町。中には大木をくり抜いて、家になっているものもある。ティオ達のベースキャンプよりも明らかに規模は大きく、その人口は恐らく三倍はあるだろうと思われる。

「この宿屋をお使いください。お食事から入浴まで完備してありますので」

「ありがとうございます。町長さん!」

「それと……これは我が町で使われている通貨です。ここでは買い物ショッピングという形で、その通貨を使います。具体的な事は現地の店で……。それでは私はここで」

町長から1000マーネを貰う。ティードもティオも、通貨というものを持った事がない為、アイテムを貰っても素直に喜べないでいる。

「とりあえず、お買い物……してみようよ！」

ティオは今日一番の笑顔を見せる。明らかに楽しみでしょうがない表情だ。

「ティオ、遊びに来てくれるわけでもないんだぞ」

「あ、うん……。そうだよ、ね」

顔には出さないが、その声は非常に寂しげである。

「……だが元々はお前のガラクタ集めの付き合いだからな。今日いっばいはお前に付き合っつてやるよ」

「……っうん！ じゃあ早速見て回ろうよ！」

無邪気な子供のように、町中を駆け回っていく。

「ふっ、やれやれだ……」

二人はサンバナの町を歩く。町の活気を見ると、城国軍との戦争が嘘のようにも思えてしまう。だからこそ人々は全力で今を生きている。いつこの生が尽きてしまつともわからない、だからこそ悔いを残したくないのだ。いつかくる平和を信じている。

8 二人の喧嘩

「アハハ、あ、これかわいい。これも良いなあ」

ふとしたキツカケで、サンバナの町の町長を救出。ティータとティオは、サンバナの町へ招待され、数日間の滞在を許される。そして滞在一日目。

「あ、この機械使えるかも……」

ティオは昨日から今まで楽しそうに、はしゃいでいる。まるで子供だな、とティータは鼻で笑った。

（しかし、何の連絡も無しに一日滞在してしまったな。……あまり長居もできない、か）

「……おい、ティオ！」

「どうしたの、ティータ？」

「思えばキャンプに連絡も無しに来てしまっている。今日の明るい内にはここを出よう」

「今日、随分と急な話だね……」

ティオは納得するが、やはり寂しそうな顔をする。こんな時代でもなければ、本当ならば同年代の友達と、こんな風に楽しく買い物を楽しんでいたのだろう。

「うん、みんなを心配させちゃいけないもんね。護衛よろしくね、ティータ！」

無理をしている、ティータはその小さな背中を見て感じた事だ。

「……やれやれ。……んっ!？」

ティオを追おうとしたティータの目に、一つのアイテムが目に入る。そのアイテムはワセシアの花飾りである。

（……つたく、本当に俺は何を考えている。だが、値段だけ、値段だけだ！）

その店には、少し歳のいった女主人が店を経営している。植物に関連した定番の、薬草や毒消し草といった商品が並んでいる。

「いらつしやい！ ……おんや、アンタ見ない顔だね？」

「ああ、訳あつて立ち寄つてな」

「はあー、旅人さんかい？ こんな時代に旅をするなんて凄いな
ね」

ティードは女主人の言葉を無視し、ワセシアの花飾りの値段を確
認する。持ち金は1000マーネ。ワセシアの花飾りは1200マ
ーネだった。

(……ま、そんなもんだよな)

「おや、ワセシアの花飾りかい？ さすが旅人さん、お目が高いね
え」

「いや生憎とマーネが足りてない。諦めるさ」

「ありや……それは残念だね。他の商品なら値切つても良かったの
だけれど、残念ながらこのアイテムはちよつとねえ……。この価格
だつてかなりの良心価格なんだよ？」

女主人は本当に申し訳ないと思つたのだろう。悪くもないのに深
々と頭を下げてくる。

「いや、良いんだ。別に絶対ほしいわけでもなかった。ただそれだ
けさ……」

依然として謝り続ける女主人を尻目に、ティードはティオを追い
かけていく。人混みの中で、完全にティオとはぐれてしまった。

「あ、ティード。ようやく見つけたよ、駄目だよ迷子になつち
や！」

「……迷子、俺が？」

相当探し回り心配していたのか、どこか安心したといった様相で
ある。そしてティードの手を強く握りしめた。

「とりあえず町を出るなら町長さんに挨拶してからね。せつかくお
世話になつたんだから」

ティオは強引に、ティードの手を引き先導していく。既に町の地
図でも暗記したのか、人をかき分けてすらすらと進んでいく。しば
らく歩いていくと、他の建物とは違い、明らかに豪華に作られた家

がある。扉を軽く叩くと、中から「どうぞ」と声がしてくる。

「失礼します。町長さん、お時間の方は大丈夫ですか？」

「ああ君達は……。どうしたのかね、我が町は楽しんでくれているかね？」

「はい、とつても……。それで突然なんです、私達は今からキャンプへ戻ろうと思ひまして……」

ティオは申し訳なさそうに、そして心残りがあるといった表情で話している。

「なんと……。本当に突然だねえ。しかし君達には君達の理由があるだろうしね、それに数日後にはまた来てもらえる事だろう」

「はい、その時はよろしくお願いします」

町長は笑顔で二人を見送る。軽く一礼して、ティードとティオは町長宅を後にする。

「本当に良いんだな？ 自分で言い出した事だが、もう少しはいても良いんだぞ」

「ううん、大丈夫。早く帰ってソリディア兵士長の指示を聞こうよ！」

「おい、あまり先に行くとは危ないぞ！」

「大丈夫、ティードがいるからっ！」

こうしてティードとティオの二人は、サンバナの町を出てパーシオンのキャンプ地へ戻っていく。

キャンプ地。レジスタンスパーシオン。

「二人は戻ってきたか、カルマンよ？」

「あ、ソリディア兵士長。……。いえ、全く戻ってくる気配はないです」

ティードとティオの二人を案じるソリディアと、ティオを案じるカルマン。

「まあティードがいるはずだから大丈夫だと思うが、さすがに連絡が無いのは心配だな……」

「全くです！……あのヨソ者め、ティオに何かあつたら……！」

「……ん、はっはっは！ カルマン、ティオが心配か？」

「え、ええっ！？ い、いや、そんな事はないですよ、俺はただ兵士としてですなっ……」

「うむうむ、青春だのう、羨ましいのう」

顔を真つ赤にするカルマン。それを見て大笑いするソリディア。

「まあ何にしても、この心配が一時のものである事を望む。二人が帰ってきたらすぐに知らせてくれよ」

「はいっ、了解しました！」

一言返事をして、ソリディアは兵士のテントへ戻っていく。見えなくなるまで敬礼をして見送る。

（ ティオ、無事でいてくれよ。そしてティード、てめえはぶつとばすっ！ ）

ざわめく気持ちを無理にでも抑えて、カルマンはティオと、一応ティードの到着を待つ。

一方、兵士用テントに戻ったソリディア兵士長は、椅子に深々と座り、深々と溜息をついた。

「はあ…………。いやはや、年寄りには荷が重い心の負担だな」

「はっはっは！ 兵士長殿はそんなに老け込む歳ではないですよ」

言葉をかけたのは、パーシオン兵士団の事実上の二番手でもあるハリス副兵士長である。ハリスはまだ若いにも関わらず、一気に副兵士長にまで上り詰めた凄腕の剣士である。

「私だつてもう四十五だよ？ いい加減に一線は退かねば新時代の若手の邪魔になるさ」

「そんな悲しい事を仰らないください。兵士長殿には、まだまだ私達の良き手本、良き目標であつてほしいのです！」

「こいつめ……嬉しい事を言ってくれるもんだ。目頭が熱くなつてしまつてはないか。……だがな、やはり心配は尽きんよ」

目に溜まつた心の汗を、指で軽く拭き取ると、感慨深くそつ口にした。

「……あの二人、特にテイオさんの安否ですか？」

「まあな……。良いか？」

「どうぞ」

「ふむ……。テイオはな、十五年前に偶然的に私が拾った子なのだ。その当時の任務を命からがら遂行し、キャンプへ戻る途中の私の耳に、赤子の声が聞こえてね。その時に拾った子がテイオだ。暇があればテイオの両親を捜したりもしたが、いまだに見つかりはしない。何故、あんな所に赤子がいたのかは定かではない。その赤子の情報は全く不明でね、唯一は首から提げられたドッグタグ、か」

「ドッグタグ、ですか？」

ソリディアは、自分の首から提げているドッグタグを、ハリスに見せる。

「これがそのドッグタグだ。見てくれ、既に削れてしまっていた為、全部は読み取れないが、テイという文字はかるうじて読み取れるな？」

「はい、確かにテイがありますね……」

「うむ。恐らくはテイオの本名が書かれていたのだろう。だから私はせめて親が名付けた、テイから始まる名前を付けてあげたかった……」

「それでテイオ、ですか？」

ソリディアは静かに首を縦に動かし、その事を肯定する。

「私は結局は実子が誕生する事はなかった。だからテイオを我が子のように、カ一杯に育てたつもりだ。血は繋がっていないくても、あの子は私の娘だよ……」

「兵士長……。大丈夫です、きっとテイオちゃんも兵士長の事を、実の親のように慕っていますよ！」

ゆっくりと目を閉じ、再び深い溜息をつく。心の中の鬱憤のようなものを、吐き出したような溜息。ハリスはそれに合わせて、物音一つ立てずに、静かにそこにいる。その時、外から大きな声で、何かを叫んでいるのが聞こえてくる。

「 帰ってきたぞお！」

その声に、ソリディアは椅子を蹴るような勢いで立ち上がる。

「ま、まさか……!?!?」

「ええ、きつとそうですよ、兵士長！」

ソリディアとハリスは、兵士テントから出て確認に向かう。

サンバナの町から約一時間半。仮に敵に見つかっても、戦闘で勝てる絶対なる自信があったティードだが、ティオの可能な限りの殺生は行わないようにしよう、という言葉により、ゆっくり歩いた結果がこれである。代わりに敵に合う事は一度も無かった。

「 ……おお、ティオ」

「ソリディア兵士長、ごめんなさい……、何も連絡をしないで……」

「うむ、怒ってやりたいところだが、今は無事に帰ってきた事を喜ぼう。まずは休みなさい、話はそれから良い。ハリスよ、ティオをテントまで送ってやってくれないか？」

「了解しました。さあ、ティオちゃん」

キャンプ地なので心配する事はないが、念の為に護衛させ送らせる。

「 ……さてティード。一体、どうしたというのだ？ ティオの探索の護衛を任せて、それっきりだったではないか？」

「ああ、偶然的にもサンバナの町長が、襲われているのを発見してしまつてな。町に招待され、そこで一晩だけ休ませてもらった」

「何と……。では交渉のすぐ後にか、不運なものだ」

「町長から交渉の事については、ある程度の情報だけ聞いた。戦場となる現地の状況の確認も含め、サンバナの町へ立ち寄っていたんだ」

「ふむ……。わかった、この件に関してはお咎め無しとしておこう。お前もゆっくり休んでくれ」

ソリディアは兵士用テントへと戻っていく。ソリディアが戻ると、その場に集まっていた兵士達も、四方へと散っていく。だが一人だ

け、睨みを利かせている男がいた。

「おい、ヨソ者っ!」

「……ふう。別に名前に愛着は無いが、いい加減にその呼び方もしつこいぞ。喧嘩売ってるのか?」

「ああ、テメエみたいな奴相手にいくらだつて喧嘩売つてやるさつ、だがな、テイオを危険な目に合わせるんじゃないやねえ、コノヤロー!」

感情をそのまま吐き出す大声をあげるカルマン。その声はキャンプ地全体どころか、外にまで聞こえる勢いである。それを聞きつけ、離れていった兵士達も集まりだし、テイオを送っていったハリスも来る。

「お、喧嘩か!? 良いぞ、やれやれっ!」

「さあどつちが勝つかな? ティーダとカルマン、ティードとカルマンだよ!」

集まった兵士達は、睨み合うティードとカルマンを見て、好き放題な事を言っている。

「こらっ、お前達、何をしている! 喧嘩なんて馬鹿げた事はやめないか!」

戻ってきたハリスは、大声でその余興を止めるように大声を出す。「いいや、ハリス副兵士長。いくら副兵士長のお言葉でも、これだけは譲れねえっす!」

「カルマンッ!?」

「いちいちうるさい奴だ。簡単な話、鬱憤を晴らしたいんだろ?」

「ならとつとと来たらどうなんだ?」

「……ティードも、やめないか!」

一人止めようとするハリスを差し置き、ティードとカルマンは勿論。集まりだした兵士達もすっかり、頭に血が上ってしまっている。既にお祭り騒ぎになっている。

「^{ゲンコッ}拳骨で来いっ! タイマンはれや、コノヤローが!」

カルマンは腰に下げていた鋼の剣を、地面に放り投げる。

「上等だ。顔が変形してもしらんぞ?」

同じくティーダも腰に備えたヴェルデフレインを投げる。

「へっ、いくぜヨソ者がっ！」

先に仕掛けたのはカルマン。駆け引きも何もない、利き腕の右手に力を込めてのストレート。しかしそれを難なく避けてみせるティーダ。

「馬鹿が、そんな大振りがいきなり決まるか、このド阿呆」

「っんだと、コノヤロツ！ ウラツ、ウラウラウラツ！」

ティーダの挑発に乗ったカルマンは、両の拳を振り回すようにけしかける。だがそんな大振りは当然のようにティーダは避けてみせる。

「ちっ……。そんな攻撃だから、お前はいつまで経っても二流なんだよ！」

「これは喧嘩だぞ、馬鹿野郎！ それにテメエこそ避けてばっかじや、戦いには勝てないの知らねえのか、タコ！」

「ほお……。上等だ」

ティーダは左ストレートをカルマンに放つ。あまりの鋭さの拳に、カルマンは反応できずに直撃を受けてしまう。一発当たった事により、見物している兵士達の興奮は絶好調になっている。

「……。うっ、があっ……。よ、ヨソ者めっ！」

ティーダもそこまで馬鹿ではない為、最低限の手加減の拳をぶつけた。当たったカルマンも鼻血が気持ちいい程に出ている。

「よく顔面がくっついてるな。防御能力のタフさだけは誉めてやる」

「て、テメエのクソ拳なんて屁のカツパだってんだっ。俺は、テメエのクソ拳を何発も耐えるが、テメエは俺の拳一発で終了だっ！」

再び大振りの一撃をティーダに見舞うが、やはり難なく避けられしてしまう。

「だから馬鹿なんだよ、お前は。高い攻撃力も当たらなければ意味がない……。そんな事もわからないのか、だからお前は三流なんだよ」

「二流や三流ってうるせえんだよっ！ この四流があっ！」

再度、大振りの一撃を繰り出すが、今度は逆にその一撃を反撃カウンターされてしまう。カルマンの歯が何本か吹っ飛ぶ。更にそれと共に鮮血も飛び散っている。

「俺が四流ならお前は五流だ、この最強の六流が！」

「……もう許さねえぞ、ティードァッ！」

気が付くと、周りにいるのは兵士だけではなかった。パーシオンに暮らす一般の人々まで、集まりだしていた。それを楽しそうに見ている者は良いが、ハリスは一人腹痛を伴っていた。

「馬鹿者っ！ やめんかつ！」

大歓声と熱気溢れる喧嘩場に、ソリディアの声が地鳴りのように響く。その瞬間、熱気と歓声は面白い程にぴったりと止まった。兵士達は全員が敬礼し、一般の人々は静かに去っていく。

「つたく、貴様ら……。ここで一体何をしていたんだ？」

「……………」

ティードァ、カルマン、ハリス、その他兵士達も皆が沈黙を貫く。

「貴様ら……何をしていたのかと聞いているんだあっ！！！」

まるで鬼が叫んだかのようなその声に、さつきまで頭に血が上っていた兵士達全員が震えている。埒わちが明かないと判断し、ソリディアはハリスに睨みを利かせる。

（ や、やつぱ僕かよお ）

極度の緊張による腹痛が、ハリスに襲いかかっていた。

「ハリス、何をしていたのだ？」

「は、はいっ、兵士達による親睦会であります！」

「……ほお、親睦会か、それは結構な事だな。連携を上手く行う為には、兵士達による親睦は必要不可欠だな。なあ、ハリス副兵士長？」

「は、はい、仰る通りであります。ソリディア兵士長！」

「……うむ。……さて、貴様達、手を後ろで組み、胸を張って、齒を食いしばれ！」

ハリス含め、以下全ての兵士がソリディアに言われた通りの格好をする。そして最初にハリスの目の前に立つ。

「……いくぞ？」

「い、いいい、いつでもっ！」

「……馬鹿者オ！ ……馬鹿者オ！ ……馬鹿者オ……！」

ソリディアはその馬鹿者という言葉と共に、兵士達に鉄拳をぶつけていく。そして殴られていく度に、兵士達の断末魔が空へ舞っていった。最終的にはティードとカルマン、つまり文字通り全ての兵士に鉄拳をぶち込む。

「 以上っ！」

「ありがとうございますっ！」

その夜、ティード以外の全ての兵士は、殴られた顔面の激痛により眠れなかったという。

9 左胸の痛み

翌日。兵士達による騒動は、瞬く間にパーシオン内に広まった。その日は、全ての兵士が左頬を腫れ上がらせており、それを見た人達が密かに微笑している光景がある。そして今日の見張り当番であるカルマンは、ティーダに殴られた二発と、ソリディアに殴られた一発で、顔に凹凸おうちくができている。同じくそこには、殴られたにも関わらず、少しも顔を腫らさず平然としているティーダがいる。

「 どうだ、少しは落ち着いたか？ 」

「 落ち着く！？ 馬鹿言うな、俺はいつでも冷静だ。そして悪いのはお前だ 」

「 だが喧嘩を売ってきたのは貴様だ 」

朝からこのように、お互いに譲らず膠着状態を保っている。そして何故この二人が一緒の位置にいるのかというのは、昨晚の会議にまで遡る。

「 どうだ、二人共。少しは頭に上った血も冷めただろう？ 」

「 はいっ！ 」

「 …… ああ 」

ティーダとカルマンは、ソリディアの問いに、自分なりの返事で答える。返事には答えるものの、二人のお互いに、いがみ合う態度に、何度目になるかわからない溜息を漏らす。

「 はあ……。とりあえずハリスに聞いたが、昨日の馬鹿騒ぎの原因は、お前達二人のようだな？ お前達は若い、だから喧嘩するなどは言わん。むしろどんどん喧嘩しろと言う。だがな、今は戦時下であって、お前達の喧嘩騒ぎにより、もしかしたら城国軍に見つけられていたかもしれない、それはわかるな？ 」

「 はいっ！ 」

「 …… ああ 」

カルマンは真面目にソリディアの話を聞き、ティーダは全く耳に

入っていない。それもまた個性と、ソリディアは割り切り、話を進めていく。

「まあ幸いな事に、特に何も起きていない。だからといって、これで、はいお終いというわけにもいかん。お前達二人は、サンバナの町へ出撃する日まで、見張り番だ。わかったな？」

「はいっ！」

「……ああ」

このようにして、二人はキャンプ地の門を二人で見張っている。

「……おいつ！」

「何だ、うるさい奴だな。静かに見張れ」

常にティードを睨むカルマンと、全く目を合わせようとせず、常に無視を決め込むティード。この辺りが二人の温度差だろう。

「昨日の事は悪かったと思ってる。……でもティオを、危険な目に合わせるのは許さねえぞ！」

「……むしろ危険な目に合わされているのは俺だ。お前はあいつ（ティオ）の護衛をした事は無いのか？」

「いや……無い……」

「そうか、幸せな奴だな」

「何い……！？」

俯き、空を見上げ、そして結局はティードを睨み付ける。だが結局は、ティードは無視を続ける。だがカルマンは、睨み付けるだけを止めて立ち上がり、体全体をティードに向ける。その行動に、一応ちらりと目線をティードは向けてみる。

「俺は……俺は、ティオが好きだ。俺にもっと力があれば、俺はティオを守ってやりたい。この命が尽きるまで……、それは俺のワガママかもしれない。でも、でも俺の、正直な気持ちだ！」

「……そんな事は俺じゃなくて、あいつ自身に言っただけだ。俺に言っても何の進展も無いぞ」

「そ、そんな事はわかってるよっ！……俺はお前が羨ましいし、

妬ましい。俺は、兵士としては落ちこぼれた。だからソリディア兵士長にも一発で気に入られる、お前の実力が……。ベテランの兵士長とならまだしも、何で同じ歳で、同じ人間の俺とお前に、こんな差があるのか、それが悔しいんだよ……」

カルマンの静かな叫びが終わると、それから数時間は、お互いに無言のまま時間が過ぎていく。太陽が昇り明るかった空は、いつの間にか暗くなり、綺麗な月が姿を現している。

(……同じ人間、か。望んでもいない究極の生命体として、この世に生を受けた俺にとっては、お前達カルマンのような、自然体の人間の命が羨ましいよ)

その月を見ながら、ティードは思う。そして空を見ると、シャングリラキングダムから、王から離れて、空から落ちた日の事を思い出していた。

(……ジューク。命の騎士ティアナの存在を、俺に教えてきた。一体お前は何を考えているんだ？ ……デュアリス。誰よりも優しいデュアリス。お前みたいなのが、本来なら生命を殺すなんて事はやってはいけない。……そして、ラ……。いまだにコイツの存在が思い出せない。だがカルマンのように、うるさい奴だったのは覚えている)

人間が人間を案じるように、アルティロイドもまたアルティロイドを案じる。

「……んがっ……があ……」

突然のいびきで、考え事が中断させられる。いびきの元はカルマンである。

「ちっ……、寝てやがる。……いびきも声と同じで、うるさい奴だ……」

こっして見張り生活初日を終えていく。月と静けさに彩られた世界は、太陽と共に、再び活気に満ちた世界へと変わっていく。人々の新しい世界が、構築されていくのだ。

最初に感じたのは、左胸を締め付けるような激痛。そのあまりの痛みは、呼吸する事はおろか、正に心臓を締め付けられ、その動きを止められてしまったかのような、錯覚さえ感じさせる。

そして次に覚えたのは、胸だけではなく、体全体の痛み。悶絶なんてものではなく、意識が完全に断ち切られる。体のどこが痛いのかは、本人にもわからない。ただただ、体全体に死に値する痛みが走り抜ける。

最後には体の中から、何かが体を裂いてくる。その中から出てくる何かのせいで、皮膚は引き裂かれ、その裂けた箇所からは、ゆっくりと楽しむように、赤い液体が垂れ落ちる。そう、血だ。まだ痛みは続く。まだ体は裂かれていく。まるで体の中から、何かが生まれようとしている。そしてゆっくりと体を裂いて出てきた。それは

死んだ。

「……いやああああああつ……！……はっ、はっ、はっ……！？」

ティオは絶叫と共に目を覚ました。悪夢を見たのだ。体中から吹き出るように汗をかいている。自分でも信じられない程に、息が荒くなっている。何よりも意識が混濁していて、はたして今ここにいるのは、自分^{ティオ}なのかも定かではなかった。そして、左胸が痛かったという錯覚が、あるような気さえするのだ。いや、事実痛みはある。

「どうしちゃったんだろう……私の体。痛くて、痛くてしょうがないよ……」

自分の胸を鷲掴みにするように、乱暴に掴んで離さない。左胸の痛みを、他の痛みで消そうと試みる。しかし痛みは消えず、中と外の二つの痛みが、数分の間にティオを支配する。痛みが完全に引いたのは、それから十五分ほど経つてからの事である。今では乱暴に掴んだ痛みだけが、残っている状態だ。

しばらくすると激痛を耐える際に、自分でも気が付かない内に、目に溜まっていた涙を拭い、今では冷たくなった大量の汗を拭き取

る。汗を吸い、重くなった衣服を取り替えて、ティオはテントを出ていく。行き先は、パーションの唯一の医者であるラルク医師の元である。

このラルク医師も、専用のテントが用意されており、本人の熱烈な希望により、ラルク医師のテントは真っ白な生地で作られたテントとなつている。更に騒がしい事が嫌いな為、ラルク医師のテントは少し歩いた場所に位置する。近づいていくと、強烈な消毒液と薬品の匂いの他に、得体のしれない匂いがしてくる事がある為、一般の人間も兵士も、あまり近寄りたくはないというのが本音である。しかし唯一の医者である事と、医者としての腕は非常に良い為、やはりお世話になつていくというのも事実である。

「あの……ラルク医師、いますか？」

ティオはテントの中に向かい話しかける。しばらくすると返事が返ってくる。

「いるわよお、具合が悪いのなら入つてらっしゃあい」

その返事は妙に粘り着く喋り方である。男なのか女なのかも判別できない中性的な声。

「入ります、ラルク医師」

「良いわよお……、つてあら、ティオちゃんじゃなあい。どうしたのお？」

そこには地面に着きそうなくらいの、綺麗な茶色い髪、そしてやはり男か女か判別できない中性的な顔。そして美しいとさえ感じさせる足の長さを持つ。しかしそんな綺麗な印象の見た目とは裏腹に、左目には物騒な眼帯をしている。ラルク医師がいる。

「あの……。本当に最近なのですけど、私の左胸を中心に信じられないくらいの激痛が走るんです」

「ふむう、左胸の激痛ねえ？ 最近になつて左胸を強打したとかは無いのからしらあ、もしかしたら骨折……、酷い事になると心臓に異常があるのかもしれない？」

ティオは思いつく限りの記憶を探り寄せる。手痛い出来事にあつ

たのは、カザンタ山岳地帯で、ティードに助けられたあの時のみ。
しかしその後、ラルク医師による処置を受け、その際の診断には
内部の損傷は見られなかった。

「いえ……、無いと、思います」

「ふうむ、そうよねえ。と、なると、もしかしたら内臓に異常がある
可能性もあるわねえ。ちよつと見てみるわあ、ティオちゃんお洋
服を脱いでくれるかしらあ？」

素直な返事をした後、ティオは言われた通りに上着を脱ぐ。その
間にラルク医師は、人が入ってこないように、完全立ち入り禁止の
文字が書かれた板を外に設置する。そしてその中性的な顔には似合
わない、物騒な眼帯を取り外す。そこには人の目玉とは明らかに違
う目玉がある。

この目は、全てを透けさせる眼スケルトンアイという。数年前まで、城国軍の専
属医師として活躍していた頃に、自身の左目を改造し、内部構造を
見る為に目に植え付けた。眼帯を外していると、全ての物が透けて
見えてしまうという欠点がある。その為、診断の際に内部を見る時
以外は、眼帯をしているのだ。

「……ふむう。骨は正常、むしろ見本にしたいぐらいの美しさねえ。
肝心な心臓への異常も見られない。その他臓器の異常も見られない。
つまり役立たずな診断だけど、原因不明ねえ……」

ラルク医師も、こんな事は初めてだ、と言わんばかりの表情で困
っている。

「原因不明、ですか……」

「随時原因を探ってみるわあ。それにしてもティオちゃん……、良え
え体やわあ……」

「ちよつ、何を嫌らしい目つきで見てるんですかっ!？」

ティオは急いで服を着る。しかしラルク医師のスケルトンアイの
前に、服の壁などあつて無いようなものである。

「あらあ、人としての発育を見るのもあ、医者としての立派な仕事
よあ? 決してセクハラなんてもんじゃないわあ、ウエツヘツヘツ

へッへ……」

「だから笑い方が、非常に嫌らしいですってばっ！」

「又フフ……。まあ真面目に話すけどお、発育に関しては問題無しよお、むしろテイオちゃんの年齢を考えるとお、年齢の割に発育は良い方よお？ ……あ、なるほどお、そういう事もありえるわねえ」

ラルク医師はまた勝手に、嫌らしい笑いを一人でしている。その笑いを見る度に、テイオは一步ずつ引いていく。

「テイオちゃん、貴方もしかして恋をしているんじゃないかってえ？」

「こっつ、恋っ!？」

突然飛んできた質問に、素っ頓狂な声で返答するテイオ。

「誰かしらあ、こんな可愛いテイオちゃんが好きな相手ってえ。年上のハリスちゃんかしらあ、それとも同い年のカルマンちゃん？」

あ、それともそれとも、最近見かけるようになった、あの黒髪のかっこいい子かしら、名前は確かあ……」

「……ティードです」

「ティードちゃんも可愛いわよねえ。あの無愛想なくせに、実は優しいだろお前、つてところとかあ！」

「う……」

言いかけた言葉を、咄嗟にテイオは飲み込んだ。しかしそんな反応を見逃すラルク医師ではなかった。

「うふふ……。良いのよ。若いんだから、いっぱい恋をきなさい。いえ恋に年齢は関係ないわ。人間は感情の動物よ、好きなら好きって感情をはき出す事に意味があるのよ」

めずらしくまともな言葉が来たので、テイオは静かにそれを聞いていた。ラルク医師の口調もこの時は非常に穏やかで、暖かい声だったとテイオは後々に思い返す。

「さあさ、診断はお終いよお。とりあえず気持ちは常に前向きでいなさいねえ。もう一度言うけどお、随時原因は調べておくからあ」

「はい、お願いします。ラルク医師」

テイオはそそくさと、ラルク医師のテントを後にする。原因はわ

からなかったが、ラルク医師との会話により、少しだけ胸が軽くなつた気もしていた。あるいはラルク医師の言う通り、左胸の痛みは心の問題だったのだろうか。

（でも感情をはき出すって、そんな事はできないよ……。だってはき出して、もし駄目だったらその後、どういう関係を保つていれば良いのかわからないもの……）

それを考えると、再び左胸に小さな痛みが走った。ティオはラルク医師に言われた通り、前向きでいる事にする。いずれにしても後ろ向きに考える事は、良くはない事なのだ。

一方、兵士用テント内では、ソリディア兵士長が現在の戦況から、一つの決断を下そうとしていた。そこにはハリス副兵士長以下、数人のベテラン兵士が参列している。

「突然だが、明日にはサンバナの町を目指そうと思う。どうやらサンバナの町を攻めている城国軍が、また最近になり攻撃を強めたという風の噂を聞いてな」

「……では兵士長殿。私、ハリスもお供致します！」

ハリスの言葉に続き、兵士達は、ソリディアと共に戦場へ赴く意向を示した。

「いや、気持ちはありがたいのだが……。サンバナの町へ行くのは少数精鋭で行く。あまりサンバナの町に、戦力を入れすぎても、私達パーシオンの守りが手薄になってしまう。それにサンバナの町に助力するレジスタンスグループは他にもたくさんいる。そこで明日、サンバナの町へ行くのは私とティダ、それに兵を五人ほど連れて行く」

最終的に決まった事は、ハリス副兵士長にカルマン、そしてその他数人の兵士は、パーシオンの守りを固める。ソリディア兵士長にティダ、残りの兵士は、サンバナの町へ赴き、連合レジスタンスとして戦う。

「ハリス、留守は任せたぞ」

「はいつ、お任せください！ このハリス、必ずやパーシオンを守り抜いてみせます！」

「……うむ。いよいよ戦いが始まるぞ、今回の戦いはレジスタンス合同の大規模な戦闘だ。誰が死に、誰が生きるかは全くわからん。だからこそ全力で戦おう、生き残る為に！」

ソリディアの言葉に、兵士達は呼応し、激励の雄叫びをあげる。

その雄叫びに合わせて、兵士達の感情が高ぶっていく。いよいよサンバナの町を主軸に、大規模戦闘が切って落とされる。

10 剛力丸のバース（前書き）

（サンバナ攻防戦主要メンバー）

名前 ティーダ

種族 アルティロイド

性別 男

年齢 16

階級 火の騎士

戦闘 3000

装備

E 深紅の剣ヴェルデフレイン

E ティーダ専用戦闘防護服

E 火の聖獣エンドラ

名前 ソリディア

種族 ヒューマン

性別 男

年齢 45

階級 パーシオン兵士長

戦闘 1000

装備

E 鋼の剣

E 戦闘用防護服

E 鋼の肩当て

名前 タムサン

種族 ヒューマン

性別 男

年齢	21
階級	パーシオン兵士
戦闘 装備	500
E 鋼の剣	
E 戦闘用防護服	

10 剛力丸のバース

「 それではな、後を頼んだぞ、ハリス副兵士長」

「 お任せください。みんなの帰る場所は、必ずや守り抜いてみせます！」

昨日の会議の結果、サンバナの町への救援の為に、ソリディアとティード以下数名の兵士達は、まだ空も暗い内にサンバナの町を指す事にする。兵士達は装備の点検をし、家族のいる者は、挨拶を済ませている。援護と言いつつも、立派な戦闘になる事に変わりはない。次にこの土地を無事に踏める保証は、どこにもないのだ。それ故に、今生の別れになる人間も事実上いる事になる。

「 ティード、私は行けないけど……無事に帰ってきてね？」

「 ……とりあえず、了解したと言っておこう」

だがティードには、生きて帰る確証がある。第一にアルティロイドは、人間の起こす戦争ではどうあっても殺されない。アルティロイドを殺すには、同等の力を備えたアルティロイドぐらいのものなのだ。

「 では行くぞ、全員四方の確認をしつつ、気配を殺して進んでいくのだ！」

ソリディアを先頭に、レジスタンスグループ「パーシオン」の兵士達は、サンバナの町救援の為に、命を賭けた戦場へと歩いていく。パーシオンから南に進んでいくと、まるで洞窟のように鬱蒼と茂る森林地帯に出る。朝方であり、少しずつながら光が漏れてきているが、サルバナ森林地帯に入り込むと、途端に真夜中のように暗くなる。

ティードは、共に進む兵士達の顔を見ているが、その表情はどこか思い詰めている。無理もないだろう。若い兵士達は、いまだに大規模戦闘を経験した事は無い。命を賭けて平和を勝ち取るうという、覚悟はあったかもしれないが、いざその状況になると、やは

り畏縮してしまうのが普通であろう。言葉には出さないが、ほとんどの兵が死の恐怖を感じている。

「ソリディア、他の兵士は大丈夫なのか？ 全員が畏縮してしまっているようにも見えないぞ」

「うむ……。ティードは大丈夫なようだな、さすがだ」

「アンタは怖くはないのか？」

「私は若い頃に、こいつらと同じように戦いを経験した。怖くないといえば嘘になるが、ある程度は大丈夫だと言えるさ」

その口ぶりから、ソリディアの心境は非常に落ち着いているように見える。さすがはベテラン兵士といったところだろうか。

「ティードが教えてくれた情報に頼ると、ここでサンバナの町まで半分といったところか……。兵士達も緊張からか疲れが見える。そろそろ休憩するでしょう」

まだ急ぐ時間でもない判断し、ソリディアは休憩するように伝える。やはり死の恐怖という緊張が、兵士達に取り憑いていたのか、兵士達は疲労困憊の様子が伺える。普段からの訓練で、この程度の事で疲れるようなヤワな鍛え方はしていない。やはり死の恐怖は、生きた人間では鍛えようのないものなのだ。

「ティード、すまないが城国軍の兵士が来ていないか、周囲の警戒をしてもらっても良いか？」

「構わない。アンタも少し休んでおくべきだ」

「いや私は良い。それよりも警戒しつつ、私はティードと少し話したい事があるのだが？」

ソリディアとティードは、休んでいる兵士達の安全を確認できるぐらいの距離を保ち、且つ話の内容が聞かれない場所へ移動する。

「それで、一体何が聞きたいんだ？」

「……単刀直入に聞きたい。君は一体何者なんだい？ こんな時にすまないと思うが、こんな時だからこそ聞いておきたいのだ」

「それを聞いてどうするつもりだ？」

ティードのこの問いに関する返事は、すぐには返ってこない。テ

イーダはソリディアの表情を伺うが、森林地帯の薄暗さで、はつきりとした表情は見る事はできない。

「……どうもしない。ただ君は普通の人間とはどこか違う。例えば今もそうだ、君はまだ十五、六歳といった歳だろう。どんなに冷静な性格だったとしても、死がつきまとう戦場へ行く事に、恐怖しい人間はいないはずなのだ。現に私も死の恐怖は拭い去れない」

「なるほどな、だが人間のアンタがこれから言う事を、理解し納得できるとは限らないぞ？」

「理解はしないといかんとと思うが、納得する必要はない。私は君を信頼している」

ソリディアの言葉を聞き、ティーダはゆっくりと話し始める。

「……俺は、城国軍の兵士だ。今となつては元城国軍というべきかもしれないがな」

「やはりか……。その特殊な法衣と剣は、どう見ても地上の物ではないからな。いつしかティーダと剣を交えた時に感じた事だが、その剣は鉄とは違う材質が使われているのか？」

「ああ、アルティロイドの使う武器は、全てオリハルコンという材質を使っている」

「……オリハルコン。かつて何かの本で読んだ事がある、神が人類に与えた最強の材質オリハルコン。神話のような代物だと思っただから実在しているとは、まさか思っていなかった」

最強の高度をもつオリハルコン製の剣、それがティーダの持つヴェルデフレインである。地上に住む人間には、まずお目にかかれないう武器に、ソリディアの目は輝いている。

「しかしオリハルコンは良い。だがアルティロイドとは何だ、そんな言葉は古い書物を見ても、一切聞いた事は無かったが……？」

「そうだろうな。ここ数年の間で、王が現在の科学力を使い誕生させた、違法な生命体だ。体のほとんどに強化骨格に強化筋肉を用いている上に、生き物としての核の部分に、幻の聖獣の核を融合して作られた命だ」

「せ、聖獣に、強化骨格!? そんなオカルトめいたものが、実在するのだろうか!？」

「信じられないかもしれないが事実だ。地上の人間は、自分達の頭の中の科学で納得できないと、何かと文句を付けたがる傾向にあるらしいな。この世界には、そんな既存の常識などで解明できないものが、そこら中にあるというのに」

「む、むう……、確かにそうかもしれないな。しかしこれでやっとわかったよ、ティーダから感じた異常なまでの強さの秘密がね。……

今は何故ティーダが地上に味方しているのかは聞かない、だが今は仲間として信じて良いのかな？」

「それは構わない。今は城国との縁は切れた身でね、別に躍起になつて地上を守りたいという気持ちは無いが、今は地上の住人だ。地上に生きる者として戦つては良いと思つている」

そのティーダの発言に、ソリディアは手を差し伸べる。ティーダもそれに対して手を伸ばし、二人はお互いの手を強く握る。

「理由や、元々どこにいたのか、種族の違いなど、今は関係ない事だ。今はアルティロイドとして生きているティーダも、人間として生きる私も、共に戦う同志であり仲間だ」

「ソリディア……」

握手した二人の手は、更に強い力で握つていた。

そのまま二人が、周囲の警戒を兼ねて休憩を取っていると、向こうで休んでいた兵士の一人がやつてくる。準備は完了した為、いつでも出発できるという旨の内容であり、それを聞いたソリディア指導の下、パーションの兵士達は、再びサンバナの町へ向けて歩き出していく。この休憩時に、太陽も大分昇つたようで、その木漏れ日が木々の間から優しく降り注いでいる。

そこから明るくなつた事により、更に周囲を警戒しつつ、四十分ほど歩いていくと、いよいよサンバナの町が見えてくる。ティーダ達と同じく、サンバナの町を目指したレジスタンスグループが

多数集結しつつあるようで、以前サンバナの町を訪れた時よりも、雰囲気は重々しくなっている。

「……こ、これは凄いな。パーシオンからこれ程あるいた場所に、こんな凄い町があったとは……。それにこれ程の兵士の数、まだ私達と同じく城国軍と戦うレジスタンスはこんなにもいたのだな」

ソリディア含めたパーシオンの兵士達は、全員がその集結した圧倒的な人員と軍力に、ただ圧巻のままに見据えているだけだった。

「見取れている場合ではないな。タムサン、私は町長に挨拶をしてくる。お前は全員分の宿を確保しておいてくれ」

「ハッ、了解しました、ソリディア兵士長殿！」

タムサンという兵士に、宿屋の確保を命じて、ソリディアは町長の元へと歩いていく。

「よ、よし、宿屋の確保だ、全員行くぞ！」

あまり指揮する事に慣れていないのだろうか。タムサンという兵士は、やや緊張しているのがわかる。他の兵士もそれがわかっていく為か、タムサンを補助するように、迅速に行動していく。ティーダもタムサン任せにして、とりあえずついていく。

「イ、イテツ……！？」

「このガキ、気をつけて歩きやがれ、馬鹿野郎！」

先頭の方が騒がしくなる。どうやらタムサンが、どこかの兵士とぶつかった挙げ句、大声で怒鳴られ文句を言われているようである。文句を言ってきた相手は、かなり大柄な男のようで、非常に威圧的な態度で怒鳴り散らしている。

「で、でも、当たってきたのは、そちらではないですか」

「何だどつ、ガキがあ！ テメエらはこのレジスタンスだ、この仕事片づいたら真っ先に、ぶっ飛ばしに行くぞ、コラッ！」

どうやら注意深く歩いていたタムサン達と、大柄な男がぶつかったらしいのだが、ぶつかってきたのは、完全に大柄な男らしい。男のかなりの喧嘩腰に、パーシオンの兵士達は、大分気圧されているようだ。

「で、でもですね……」

「でも、も、へちま、もあるかってんだっ！ それ以上ゴチャゴチャぬかすんなら斬り殺すぞっ！」

大柄の男は、その体躯に見合った大きな剣を構える。周りにはサンバナの町で暮らす一般の人間もいるが、そんな事は関係ないと言わんばかりの大振りをする。その場にいた男女問わず、思わず悲鳴を上げてしまう。幸いな事は、その大振りな抜刀で怪我人が出なかつた事である。

「ふう。やれやれだな……」

それを黙って後ろで見ていたティータだが、男も抜刀して穏やかではない為、タムサンと男のいる前に歩いていく。

「オラッ！ 今なら土下座と持つてる武具を、置いていけば許してやるって言っただよ、馬鹿野郎！」

「ど、どど、土下座をしろというのなら、いくらでもします……」

し、しかし武具は置いてはいけません。この武具は兵士長と僕達の結束の印です。どんな事をされても渡す事はできませんっ！」

「そうかいそうかい、ならここでお前と後ろの兵士もろとも切り伏せてやるっ！」

「……っ！」

臆病者だが、タムサンは必至に勇気を振り絞った。パーシオンの兵士として、ソリディアと培ってきた兵士の魂を明け渡す事の方が、もつと辛い事だと判断しての事である。

男は言葉通り、タムサンを切り伏せる為、その大剣を振り下ろす。しかし大剣はタムサンに当たる事はなかった。

「それで良い。こんな野郎に武器を渡す必要は無いぜ？」

男の大剣は、男よりも圧倒的に小柄なティータに止められている。どんな屈強な男が使う大剣でさえも、オリハルコンで作られたヴェルデフレインの前では、鉄屑も同然である。

「ティータ、何で……!？」

「お前の勇気が、俺の魂を動かした……。いや俺だけじゃないか」

「えっ……！？」

タムサンが後ろを向くと、そこにはパーシオンの兵士達が、タムサンを守る為に徹底抗戦しようと構えていた。

「み、みんな……？」

「兵士長は、今、タムサンに指揮を任せてる！」

「いわば、今のリーダーはタムサンだ！」

「タムサンが戦うのなら、俺達も戦うぞ！」

恐竜と蟻のような構図だが、兵士達の気合いは凄まじいものがある。その気合いだけで、大男を倒せそうな勢いさえ漂っている。

「雑兵共が、団結したところで、この俺に勝てるものかっ！」

「それはどうか、ここにいる奴等は、みんな簡単にやられる程の命タムじゃないぜ？」

「何をっ……、うう……！？」

男は対峙したティータから、圧倒的な何かを感じた。それはソリディアが対峙したティータに、何かを感じ取ったように。

「こ、小僧……！ 貴様、何者だ！」

「何者でもないさ。ただ神に愛されていない命を持つ程度のものさ……チツ！」

男は今までティータに止められていた大剣を、背中に担ぐように納める。それと共に、ティータもヴェルデフレインを腰の位置にまで戻す。

「小僧、名は……？」

「……ティータだ」

「ティータ……。俺はレジスタンスグループ『コロセオン』のバーズだ。この大きな相棒、剛力丸じつりきまるのバーズと言えばちつとは知れた名よお」

その「剛力丸のバーズ」という名を聞き、周辺にいた人々はざわめき始める。その反応から、良くも悪くもそれなりの有名人であるようだ。

「雑兵共、命拾いしたな！」

バースはその捨て台詞だけを残し、その大柄な体で町中へと消えていく。

「す、凄いな、ティード！ あの剛力丸のバースを戦いもせずに退けるなんてっ！」

「そんなに有名なのか、あいつは？」

「そりやそうだ。剛力丸のバース　その巨体と、体躯に見合う大剣剛力丸を利用して、一騎当千の強さで、城国軍の兵士を退けたっていう。その圧倒的な強さから、軍神なんて別名もあるって噂だぞ」
ティードは、人は見かけによらない、という人間の言葉を思い出していた。

「しかし、あの剛力丸のバースまで来ているとは……、今回の戦いは予想以上のものかもな……」

兵士達は今まで脅されていた事も忘れ、バースの存在に心躍らせている。

（　だが確かに、あの男からは単純明快な強さを感じた。本当に単純な戦闘力であれば、ソリディアの能力を圧倒的に超えているだろうな）

ティードは冷静に、バースという人物を分析する。

「おお、全員いるか？　早く見つかって良かったぞ。さあ、宿屋に行つて休もうか！」

いつの間にか、ソリディアが戻ってくる。やる事を終わらせて、気分も軽くなったソリディアの表情は、非常に晴れやかである。

「……ああっ、しまった、忘れてたあっ！」

突然の大声を出すタムサンを、みんな揃って見ると、一人で青ざめている。そうソリディアに頼まれた宿屋探しは、全く進んでいなかったのである。

「何と、まだ見つけていなかったのか？」

「は、はいっ、申し訳ないです、兵士長……。その、色々とありまして」

「ふむ……。これだけ人が増えてくると、空いてる宿は無いかもし

れんな。そうなる今日は野宿か」

パーションの兵士達は、全員が一致団結して宿屋を探す。これもパーションの団結力なのだ。

しかし、楽しい野宿の時間が始まってしまった。

まさかの野宿の夜を過ごし、翌日の朝。森林地帯とあってか虫が多く、若い兵士達の大半は、血を吸われて痒い思いをする事になった。これもタムサンのせいだ、と冗談めいて兵士達は言うものの、責任感が強かったタムサンは、真に受けてしまい励ます事に、朝から時間を使ってしまう。

その後、ソリディア兵士長の言葉で締めくくられ、タムサンも元氣を取り戻す。決戦は近いが、早めにサンバナの町に到着した事もあり、しばらくは自由時間が設けられ、兵士達は初めて訪れる「町」というものを堪能する。再集合時は、宿泊している宿屋である。

「さて……、私は戦場となる地形でも視察してくるか」

「さすがだな。だがアンタも少しは、遊ばないと気が滅入ってしまうんじゃないのか？」

「当然、全ての事が終わったら私も遊ぶよ。ティータにはわからんかもしれないが、大人の時間、というものが世の中にはあるのだよ」

普段の真面目な顔つきが、一瞬ながら締まりのない顔が出たようにも見える。

「……そういうものなのか？」

「そういうもんだよ。ティータもどこかに行くのなら、今の内に用件を済ませておけよ」

ソリディアの言葉に、軽い返事で返す。そのままソリディアは、戦地を確認する為にどこかに歩いていく。今更ながら気づいた事だが、こんな町でさえもソリディアの存在感が伺える。どこか気品のあるその姿は、どこかの皇族だったのではないかと連想させる。

（まあ仮にそうだったとしても、今のソリディアとは何の関係もない。無論、俺とも……）

ティータはソリディアの言う通り、サンバナの町にある用件を片づけに行こうとする。その用件というのは、唯一心残りになってい

た「ワセシアの花」の存在である。前回この町を訪れた時は、手持ちの金額が不足していて購入に至らなかったのである。

（確かあの時の道具屋は、この辺りにあったはずだが……。どうも町というのは、無駄に大きくて好きになれないな）

臆おぼろげ気な記憶を頼りに、ひたすら歩き回っていると、目的の道具屋が見えてくる。相変わらず女主人が威勢良く商売をしている。周辺の店の中では、一番の活気があるのではないだろうか。

遠目にワセシアの花の値段を確認する。しかし金額は変わらず、相変わらずの1200マーネである。しばらく見ていると、女主人がこちらに気づき大声でティータを呼ぶ。

「旅人さん、また来てくれたのかい！ そんな所で突っ立ってないで、こつちへおいでよっ！」

あまりの大声で呼ばれた人はどの人だろう、と興味本位の視線が、ティータに直撃する。その痛い視線が耐えられずに、仕方がなくティータは女主人に近づいていく。

「アタシはパーチャ。アンタは？」

「……ティータだ」

「そうかいティータ。人が二回も会えば何かの縁ってね。相変わらずワセシアの花かい？」

「っ……！」

ティータは、この女主人パーチャが苦手である。どこが苦手なのかは本人もわからない。

「ティータは良い人そうだから、この花を売っても良いんだけどねえ……。でもアタシも商売だからね」

「それはそうだ。それに俺はどうしてもほしいとは」

「しかし花がほしいなんて野郎の趣味じゃないでしょ？ もしかしてコレかい？」

ティータが喋る暇もないぐらいの早さで、パーチャの会話が進んでいく。おまけにパーチャは自分の小指を立ててティータに向けた後、例えようのない嫌な笑いを浮かべている。会話速度は商売柄と

しても、この笑いはいただけくない、ティーダの率直な感想だ。

「……俺にそんなものはないっ！」

立てられた小指に、軽い苛立ちを感じて、ティーダは小指を叩くように視界から消す。

「ならアンタの趣味か。……かつこいい顔してお花とは、漢おとこの時代も流れたねえ……」

「……もう知らん」

勝手に遠い目になっているパーチャに挨拶もせず、ティーダは道具屋から離れていく。何よりもあのペースに巻き込まれている自分が、酷く嫌になってくる。

（そうだティーダ。パーチャの言う通り、あの花をどうしたいっていうんだ？ アイツとは別に何も無いはずだぞ）

心の中の不思議な葛藤と戦いながら、ティーダは死でも無く、サンバナの町を歩き続ける。

その頃、ソリディアは一人戦地を見ていた。今見ている所も、かつては森林地帯と呼ばれていた場所であるが、その面影は全く無いといっても過言ではない。まるでカザンタ山岳地帯の白の戦荒野のように、木も草もなく、植物や動物、あらゆる生命がそこには存在していないのではないかと、考えさせられてしまう。何よりもその光景で奇怪な点がある。それはただ荒野になっているだけではなく、まるで何かが爆発したような後が、多々見られるという事だ。

「これは……、一体人間が何をしたら、大地がこんなに歪んでしまうというのだ……？」

ソリディアはその光景を見て、ただ絶句する。

「問題点はそこだ、ソリディアよ」

「……その声、バースか？」

「ああ久々だな、ソリディア。確か十年ぶりぐらいだな」

ソリディアのすぐ後ろに、剛力丸のバースは立つ。二人は若い頃に、共に大きな戦争を戦った、いわば戦友である。大戦を生き延び

た後、ソリディアはパーシオンを、バースはコロセオンを作り、今も終わる事のない、城国軍との戦いを続けている。

「……十年、か。私達も歳をとったものだな……」

「そりやそうだ。鬼神のソリディアも、軍神のバースも、歳には勝てねえやな……」

バースとの会話を、悲壮感溢れる表情で聞く。今までの戦いの全てが、疲れとなって押し寄せているようにも見える。

「こんな大地の姿を見る度に思う。私達は一体何をやっているのだろう、と」

「実際の所、城国軍の支配戦争は、俺達が生まれる前から続いていたが、俺達は二十年前の戦争で、かけがえのない大地の生命を奪っていったな……。いや俺達だけじゃない、先人達も、そしてこれらの若者も、この長い人間の戦いの連鎖を断ち切らない限りはな」

「……私は今度こそ、終わりにしたいと思うよ。この美しい自然溢れる大地は、人間が壊して良いものではないのだ」

ソリディアとバースは、ただ黙ってかつて森林地帯だった場所を見つめる。

「しかしバース。お前は大地をここまで歪める事ができる武器を知っているか？」

バースは少し考えた後、静かに口を開く。

「……いや、俺のベースキャンプの近くで、タイホウという兵器が見つかった事があってな。そいつの威力と、この荒野の状態を計算してみたが、全くといって威力の計算が合わねえ！」

「計算が合わない？ ……と、いうのは？」

「つまり森林地帯を無茶苦茶にした武器の方が、タイホウよりも圧倒的に火力で勝ってるって事だ。タイホウの数が五十、いやもっと必要か。……とりあえずそんなぐらいの数で、次々にぶっ放さないとこんな状態にはならないんじゃないか」

見た目通りの大ざっぱな計算だが、長居付き合いのソリディアは、一応その言葉の意味を理解する。簡単な話、城国軍が持つ武器は、

バースの持つタイホウという武器よりも、圧倒的な火力を持つ武器を所持している。

（　だが一体どんな武器だ。これ程の荒れ果てようは、大戦の終結に匹敵する）

そこまで考えて、ある答えがソリディアの頭の中に、蘇ってくる。

最近になって人智を超えた兵士が現れた。

この話は直接、被害を受けているサンバナ町長から聞いた話である。

そして、ここにきてソリディアは、もう一つの話思い出していた。それはティードから聞いたアルティロイドの存在である。

（　王が現在の科学力を使い誕生させた、違法な生命体だ。体のほとんどに強化骨格に強化筋肉を用いている上に、生き物としての核の部分に、幻の聖獣の核を融合して作られた命だ）

サンバナの町に来る前に、ティード本人から聞かされた一つの事実である。

（人智を超えた兵士、アルティロイド。私がティードに会った時期、そしてサンバナの町が襲われた時期、ある程度の辻褃は合う。……しかし、しかしこの有様が、アルティロイドの力だと言うのか！？）
ソリディアは再び、その荒れ果てた大地を凝視し、顔を青ざめさせる。

「おい、どうしたソリディア？　一人で真っ青な顔しやがって。いくら歳をとったといっても、戦いの前でびびるんじゃないぞ」

「……い、いや、大丈夫だ」

恐らくは、第三者が見ても、ソリディアの表情は大丈夫に見えるいだろう。事実、ソリディアの脈は、信じられない早さで、鼓動を刻んでいる。気づかない間に、額からも汗が流れている。

「そっぴや、サンバナの町で先の楽しみなガキを見つけてよ。長く黒い髪に、見た事もない赤い服を着てたな。おまけに特殊な紋章

の刻まれた剣を持った奴なんだ。……つたく、どこのグループがあいつを所持してるんだろうな、俺が直々にしごいてやりたいくらいだぜ！」

(……ティータ、か。この光景を見る前には偉そうに、信頼している、なんて言うてはいたが……、君の見る目が変わってしまったいそうだよ、仮にこれがアルティロイドの仕様だというのなら、同じアルティロイドのティータも、その気になればできてしまうという事だからな……)

「じゃあ、俺はもうちょっと町を堪能してくるぜ。この戦いで仮にも死んだら、浮かばねえや！」

バースは大きな手で、軽くソリディアの肩を叩き挨拶すると、サンバナの町へと戻っていく。

「仮にも死んだら、か。そうだな、この戦いが私の死に場所になるかもしれない……」

ソリディアは首から提げた、いくつかの飾りの内の一つを手に取り、それは兵士が持つには、気品があるペンダントである。そしてペンダントを開けると、中には小さな写真が入っている。写っているのは、若い頃のソリディアと、一人の女性である。

「……マルシャナ。この戦いで私も、お前の元へと行けるのかな？ 一つの間にか、空は暗くなりつつある。その中の一つの小さな星が、ソリディアの問いに答えるかの如く、力強い光を放っていた。」

再びソリディアが、サンバナの町へ入った頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。次の戦いで町が攻め落とされ、死ぬかもしれないという気があるのだろうか。町の民も、レジスタンスも、悔いを残さないように、精一杯に生きている様が伺える。

ティータは、そんな中で一人たたずんでいるソリディアの姿を確認する。

「ソリディア、一体どこに行っていた？ 全員がアンタの事を心配

していたぞ」

「あ、ああ、ティードか。……いや何、旧友に出会ってな、少しばかり感慨に耽ってしまっていた」

ソリディアが何をしようかと、気にしていないティードは、特に問いつめる事もしなかった。ティードが宿屋に戻ろうとすると、後ろからソリディアに話しかけられる。

「敵は、君と同じアルティロイドの可能性がある。戦地を見てきて、私はそう予想した」

「……それで？」

「もう一つだけ聞きたい事がある。君達アルティロイドは、その強大な力で何をしたいのだ？」

「……別に何も、王が命令したからそれに従うまでだ」

ティードの淡々とした口調と、その内容に怒りを買ったのか、ソリディアは声を荒げる。

「王の命令で、誰かの命令があつたから、それ程の力を振り回すというのかっ!？」

「そう怒るな。俺達アルティロイドは、そもそもそういう目的で王に造られたんだ。俺達だって、元々そんな力を望んでたわけではないんだ」

「……すまなかった、ティードの気持ちも考えないで」

「別に気にしてないから、気にするな」

その言葉に冷静さを取り戻したのか、ソリディアは静かに話し始める。

「だが、そう造られたのなら、何故ティードは地上の味方をするのだ？ 本来の目的ならば、私達の敵になるはずだったのではないか？」

「……現存するアルティロイドは四人。俺はその内の一人、俺の性質は四人の中で最強の戦闘能力を持っている事、代わりに四人の中で最低の精神力である事だ」

「精神力が弱いと、一体どうなるというのだ？」

「精神力とは、王からいうところの精神コントロールだ。俺はこの精神コントロールの値が、戦闘力を高めた代わりに大幅に低くなった。だから偶然的にも、王に反逆する道を選んだのかもな」

ソリディアは、ティードとの会話で貴重な情報を手に入れた。現存するアルティロイドは四人。内一体はティードである事を考えると、敵になりえているアルティロイドは三体。そしてサンバナの町を襲っている兵士というのも、この三体中の一体と考えて良いだろう。

だがティードはもう一つの情報を教えなかった。それは最近になってティード自身も知った、命の騎士ティアナの存在である。もしもティアナが今も生存しているのなら、現存するアルティロイドは五人になる。だが当然の話だが、生存しているのかもわからない上に、敵か味方になるのかもわからない。あるいは、敵にも味方にもならず中立の立場でいる可能性もある。いずれにしても、今は余計な混乱を招くだけだと判断しての行動だった。

「……ティード。私は自分から君を信頼していると言った。だが、あの戦地を見てアルティロイドの力の凄さを知ったつもりだ。だからこそ聞きたい、私達はティードを信頼して良いのか？」

「はい、とも言い難いが、俺は俺なりの正義をアンタ達から学んだつもりだ。それが今の質問の答えだ、都合が悪いか？」

ティードの問いに、ソリディアは微笑を浮かべて答えた。

「……いや、十分だ」

ソリディアの返答に、ティードは鼻で笑う事で返した。

そして日が昇ろうとしている早朝。

無数の爆音が、サンバナの町一帯を包み込んでいた。町から周りを見ると、まだ遠く的位置ながら、燃え盛るような赤い閃光が大地を走っている。雇われたレジスタンス達は、各々が武器を装備し、戦いに備えている。

そう、開戦である。

12 爆炎の騎士ラティオ（前書き）

レジスタンス連合

名前 ソリディア
種族 ヒューマン
性別 男
年齢 45
階級 パーシオン兵士長
戦闘 1000
装備
E鋼の剣
E戦闘用防護服
E鋼の肩当て

名前 バース
種族 ヒューマン
性別 男
年齢 42
階級 コロセオン兵士団長
戦闘 1200
装備
E鋼鉄大剣・剛力丸
E鋼鉄の鎧

名前 タムサン
種族 ヒューマン
性別 男
年齢 21

階級 パーシオン兵士

戦闘 500

装備

E 鋼の剣

E 戦闘用防護服

12 爆炎の騎士ラティオ

最初の爆音は、サンバナの町から遠く離れた位置からのものだ。早朝であり辺りも薄暗く、視界が悪い。現在の時点で敵の位置を判断する材料は、その轟く爆音のみである。

城国軍の兵士は、サンバナの町の南側と東側から、集中的に攻めてきている。特に爆音が大きく聞こえてくるのは東側であり、南側でも爆発はしているようだが、東側のそれは比にならない。サンバナ護衛兵及び、雇われたレジスタンス達は、各自の行動で城国軍を迎え撃つ構えである。

「いかな……、敵は城国軍だぞ、一致団結しなければ勝てる戦も勝てなくなるぞ！」

かつて大戦を経験したソリディアは、今の防衛網では負けると判断する。しかし兵士達の行動は、ソリディアの言う通り、滅茶苦茶に移動しているだけである。東と南、どちらが兵士が多いのかもわからない。

「ソリディア、これだけの数の兵士達だ。まして他のレジスタンス達が、言う通りに動いてくれるとも思えない。仕方がない話だが、俺達は俺達の作戦で動いた方が良い」

「うむ……。ティード、私はお前に、敵軍のアルティロイドの相手をしてもらいたいと思っている。正直に言っただけで勝てる見込みはあるのか？」

「确实……、とは言い難いが、真っ向勝負すればまず勝てるだろうな。俺は最強のアルティロイドだ」

軍力に勝る城国軍。いくらレジスタンス連合を用いても、城国軍に勝てる確証はどこにもない。いや、むしろこれだけの戦力を整えても、負ける可能性の方が高い。それに戦力が集中した場所で、運悪く敵のアルティロイドと遭遇してしまい、一気に戦力を奪われたら、それこそ敗北の道を辿るのみである。だからこそ、同じアルテ

イロイドであるティータと敵のアルティロイドを、早期にぶつけて被害を最小限に抑えなければいけないのだ。当然の話だが、あわよくば敵アルティロイドを倒す事ができれば、今後の城国軍との戦いを、少しは優勢に進める事ができるであろう。

「どうするソリディア。俺はどちらに行く？」

東か、南か、ティータの初期配置により、戦況は大きく変わると言っても過言ではない。

「うむ、みな」

その時、東側から慌ただしさと共に、兵士がやってくる。見るとその兵士の防護服は、どんなやられ方をしたのか、と問いただしい程に、ボロボロになっている。さらにその兵士の、左腕は無惨にも吹き飛ばされている。

「お、おい、お前、大丈夫なのか!？」

「お、俺の事は良いっ、相棒を、相棒を助けてやってくれ！」

話している男は、兵士の指差す方を見ると、一気に落胆の表情へと変わる。

「は、早く、この兵士を手当てしてやってくれ……」

「何でだよ、早く相棒を助けてやってくれよ、俺の事は後で良いよっ！」

衛生兵らしき男がやってくる。あまりに殺伐とした前線で、困惑しているのか、その行動にはどこか落ち着きがない。

「い、良いんですか、この方が先で……?」

衛生兵は、兵士の言う相棒を見ると、こう問いただしていた。

「良いんだよっ、早く飛んじまった腕の止血をしてやれ！」

「は、はい……!」

「……ったく。あんなミンチになっちまった人間を、どうやって手当てしようってんだよ……」

片腕を吹き飛ばされた兵士は、衛生兵だけでは抑える事ができず、数人の屈強な男達が運んでいく。

「あのバケモノめ、……なんであんな奴が東側にいるんだよ、ちく

「ちよう……」

ソリディアもティータも、その兵士の言葉を聞き逃さなかった。

「ティータ！」

「ああ、俺は東側に向かう」

「うむ。私達は南側の敵戦力を削る。辛い戦いになるかもしれないが、武運を祈るぞ」

ソリディアとティータは、お互いの拳と拳をぶつけ合う。そしてティータは、全速力で東側にいるであろう、敵軍アルティロイド討伐へと向かう。そんな中、タムサン達パーションの兵士は、先ほどの死体を見て完全に畏縮してしまっている。

「へ、兵士長……。あれが、人の死に方なのですか……？」

「タムサン……。いや、あれは人の死に方ではない。あんな風に人は死んではいけないのだ」

「……でも、どうやったら人は人を、あんな風に殺せるのですか……！？」

タムサンの悲痛な叫びが、戦場となったサンバナの町に響いた。

タムサンの後ろにいる兵士達も、同じ心境なのだろう。明らかに士気が下がっている。

「私は私なりの答えで、それを知っている。だが、それをお前達に教える事はできん。……今言える事は、あのような人達を、これ以上出さないようにする為に、少しでも早く支配戦争を終わらせなければいけない。その為に兵士達わたくちの力が必要なのだ」

ソリディアの言葉と、自分の心の中で恐怖と戦っている。その二つの葛藤が、タムサン達をただ沈黙させた。

「へっ、だから貴様達は雑兵だって言ってたんだ！」

突然の大声に、その声の主を見る。大柄な体を揺らし、その声の主は近づいてくる。

「バース！？ まだ出陣していなかったのか？」

「何、今から出陣しようと思ったら、こんな戦場の前線で泣き言ほざいてる雑兵がいるじゃねえか。他の兵士の士気を下げかねんから、

喝を入れに来たんだよ」

軍神と呼ばれるだけあり、鎧に身を包んだバースの姿は、否応無しに兵士の士気を高めていく。そんな戦友の姿に、ソリディア自身の士気も高まっていくのを感じる。

「貴様等、いちいち御託はいらんのよっ！俺達兵士は、戦う気があるのか、無いのか、ただそれだけだ！俺達兵士に、正義も悪も必要無え。己の信じる道を進むまでよ、どうだ、貴様等は何を信じる！？」

軍神バースのその叫びに、パーシオンの兵士はただ、がむしゃらに言葉を返す。

「じ、自分は、キャンプにいる家族を守りたいっ！」

「安っぽいかもしれない、好きな女を守りたいんだよ！」

「早く戦いの無い世界を作る為に、俺は兵士に志願したんだ！」

「……守るんだ、絶対につ！」

バースは、恥も外聞も捨てた兵士達を見て笑った。決して馬鹿にしているわけでもないのは、明確な事実である。バースもまた兵士達の必至の声に、己の士気の高ぶりを感じたのだ。

「ようしつ、ならば迷うな！貴様等のその思いの丈をぶつけてやるんだ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

バースの一声で、パーシオンだけでなく、それを聞いていた全ての兵士が雄叫びをあげる。城国軍の爆撃さえもちっぽけに聞こえる程の、大きな雄叫びは燃え盛る空にこだまする。

「さすがだな、バース。私も年甲斐もなく熱くなっちゃったよ」

「へっ、鬼神のソリディアが、そんな弱腰でどうするんだよ！それじゃあタムサン達あいつらが可哀想つてもんだっ！」

「……そうだな。ならばその非礼を詫び、この戦いに私の全身全霊を注ぎ込んでやる！」

「それでこそ、鬼神のソリディアだ。……よっしゃ、行くぜ！」
若い兵士達の後を追うように、ソリディアとバースも、戦火吹き荒れる戦場へ走る。

その戦場の凄惨さは酷いものだった。まだ普通に死体が転がっているのなら、戦場故に仕方がないものがあるが、問題はその死に方である。まるで至近距離で高火力の武器を当てられたように、その死体は上半身が、あるいは下半身が吹き飛び、特に凄いものは、体のほとんどが吹き飛び、肉塊と鮮血が至る所に飛び散っている。

地獄より酷い地獄。間違いなく、真つ当な人間がこの光景を見たら、そう答えられるだろう。

(間違いない……、単騎でこれだけの事をやってのけられるのは、アルテイドロしかいない。そして死体から推測するに、これをやったのは爆炎の騎士。……もしも奴なら、この地獄は更なる地獄を見る事になるだろうな)

その光景をみたティータは、率直な感想を思う。しかしこの惨劇を作り上げた張本人の事を、知っているからこそ思える事なのだ。

(……しかし、爆炎の騎士である事。その戦法とかは思い出せるが、どうしてか名前が浮かんでこないな)

移動しながら、そんな事を考える。しかし出かかっている事が、思い出せないティータにとっては、何ともむず痒い事である。

直後、そう遠く離れていない場所で、再び爆発が起きる。恐らく爆発した場所では、また数人の兵士の命が失われたのであろう。ティータは爆発した場所へ急ぐ。

その場所まで、わずか数秒。だが予想通り、そこには爆炎の騎士にやられたのであろう。既に無惨な肉塊と化した人の死体が転がる。即死かどうかを判断する必要もない。むしろこんな姿になっても、まだ生きているというのなら、そちらの方が地獄である。

「……ううー！」

しかし、そこにいたのは死体だけではなかった。運良く直撃を避け、何とか生き延びた人もいる。

「生存者か。……おい、大丈夫か？」

ティードが話しかけた兵士も、生きてはいるものの無事とはいえず、左腕左脚といった左半身に、ダメージを負っている。吹き飛ばされた腕と脚では、残念ながら兵士としての活動は、断念せざるを得ないであろう。

「……ち、く、しょう……！ 城国軍め……、あんな、化け、物を……」

「喋るな、容態は酷いが、おとなしくしていれば、しばらくは死ぬ事はない！」

兵士は余程悔しかったのだろう。目には涙をため、残った右拳は固く握られている。

「 やつと見つけたぜ、兄貴！」

後ろからの自分を呼ぶ声に、ティードはそつと振り向き、その姿を確認する。そこにいたのは爆炎の騎士。

「お前……」

「久々だな、兄貴。地上に降りてからも、元気でやってたか？」

「……そこそこにな。お前こそ何をしている？」

「王の命令だ。兄貴も知っているだろう？ 地上にいる人間は、大地をただ食い潰すゴミだって、だからこの地上から完全に消し去らないといけないんだって。王は俺達アルティロイドに……、いや城の人間達にそう教えてくれたはずだ」

「まだ……、そんな王の言葉に狂わされているのか？」

めずらしくティードの言葉には、怒気が入り交じっている。鋭い眼光で、爆炎の騎士を睨み付ける。

「狂うとか狂わないとか、そんな事はどうでも良いんだ。……兄貴、今からでも遅くはない、城に帰ってこいよ！」

「……断る。それに王は俺を見捨てたのだろうか？ 今更俺が戻ってどうなるわけでもない」

「俺も一緒に王に頼んでみるさつ、ジューク兄貴も、デュアリス姉も、兄貴の帰りを待つてるはずさ！」

ほんの一瞬だが、沈黙の間を作った後、ティーダは口を開く。

「断る」

「……兄貴、どうしても戻って来ないんだな。……なら、ならつ、俺が兄貴をぶつ飛ばしてでも連れ帰ってやるっ！」

ティーダの返答に、業を煮やしたのか、爆炎の騎士は一気に力を開放する。力の開放と共に、辺り一帯が小規模な爆発に見舞われる。恐らくは並の人間達は、この力の開放だけで為す術無く殺されていったのだらう。アルティロイドの力は、敵意を以て放てば、人間程度を殺すには造作もなくてしまふ。

「唸れっ、陽黄の鉄拳！　　ダイナアクス！」

ダイナアクスと呼ばれる、ラティオの両拳に装備されたオリハルコン製のメタルナツクル。いや、オリハルコンナツクルにより用いて、拳と拳を叩く。

突風爆破。そんな言葉が似合う程の、風と共に唸る爆音の嵐。ラティオが力を開放していく毎に、その爆発は更に激しさを増していく。

(……チッ！)

凄まじいとしか例えようの無い、その力の開放に、ティーダも同じく能力を開放していく。ラティオの爆発と、ティーダの烈火が、全てを飲み込んでしまわんばかりに、大地を覆い尽くす。

「叫んでるんだよ、俺の中で！　爆炎の幻獣ヴァルサスがよお！」

「……俺の中の、火の聖獣エンドラも言っているぜ。お前を倒せとな！」

一瞬、お互いの心臓部が光る。ティーダは赤い光、ラティオは黄色の光。それは生命の核を融合させられた、ティーダとエンドラの、ラティオとヴァルサスの色である。命が光る。

「爆炎の騎士ラティオ！　正々堂々、真っ向勝負で兄貴を連れ帰ってやるぜえっ！」

「連れ帰られるつもりは毛頭無い。天空の攻防戦（あの時）同様、また退いてもらうぞ、ラティオ！」

ティードはヴェルデフレインを、鞘から出し、ラティオ迎撃の体制を取る。対するラティオは、真っ向勝負の言葉通り、小細工無しに、一直線にティードめがけて突進する。先制攻撃は、駆け引きも何も無く、ラティオの拳が先に出る。当然、小細工の何も無い攻撃を、ティードが当たるはずもなく、受け止める事もせず、単調な攻撃を避ける。

「まだまだ行くぜ！ オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」
目にも止まらぬ高速パンチの連打。まるで石でも投げられているのではないかという、錯覚さえ起きるその攻撃の鋭さ。ただタチが悪いのは、石ならまだしも、投げてるのはオリハルコンの拳をいう事だ。剣でも拳でも、当たれば致命打なのは変わりがない。既に武器の種類による、攻撃力の差などという領域ではないのだ。

（まるでカルマンだな。いやカルマンがラティオか！？ だが実力の方は、カルマンとは比較にならないな）

天空攻防戦の時とは、比較にならない程の、拳のキレを以て攻撃を仕掛けてくる。ラティオは足を踏ん張り、カ一杯に攻撃する癖を持っている為、足の踏ん張れない天空戦では、実力の半分も出せていなかったといっても過言ではない。つまり地上で戦うラティオは、実力を全開で戦う事ができる。

「どうした兄貴！ 攻撃しなけりゃ、俺を退ける事はできないぜ！？」

細かくも鋭い高速拳を牽制打に、一気に大振りの右拳を出しにかかる。その攻撃を避けきれないと、判断したティードは、ヴェルデフレインでダイナクスを受け止める。それでもラティオの攻撃を止めきれず、衝撃は背後へと突き抜けていく。

「……くっ！？」

ティードの意志とは関係なく、後方へと吹き飛ばされる。ティードを突き抜けた遙か後方に、その衝撃の余波が出る。そしてその衝

撃は、爆発という形で現れる。

アルティロイド最強の戦闘力を持っているのは、ティードなのは事実だが、アルティロイド最強の攻撃力を持っているのは、事実上ラティオである。更に得意地形での戦いというのも相まって、現在の総合能力は、ラティオがティードを超えているといっても過言ではないのだ。

「兄貴、まだだ。兄貴は俺が連れ帰るが、その前に俺は兄貴と本気マジな真剣勝負がしたかった！」

「……興味は無いな」

「さすがクールな兄貴は違うな。でも俺は、兄貴と戦うと考えると、うんつと燃えるんだよ！」

気迫はラティオが上回っている。わずかこれだけの攻防だが、アルティロイド同士の戦い、そして力の開放をした戦いは、地上を破壊するのは十分すぎる威力を秘めていた。

火の騎士ティード。爆炎の騎士ラティオ。二人のアルティロイドの戦いは、命懸けの攻防戦となる。

13 サンバナ攻防戦終結（前書き）

レジスタンス連合

名前 ティーダ

種族 アルティロイド

性別 男

年齢 16

階級 火の騎士

戦闘 3000

装備

E 深紅の剣ヴェルデフレイン

E 火の戦闘法衣（赤）

E 火の聖獣エンドラ

城国軍

名前 ラティオ

種族 アルティロイド

性別 男

年齢 13

階級 爆炎の騎士

戦闘 2800

装備

E 陽黄の鉄拳ダイナアクス

E 爆炎の戦闘法衣（黄）

E 爆炎の幻獣ヴァルサス

13 サンバナ攻防戦終結

「オラオラオラア！」

周りにお構い無しに、ラテイオは黄色い光弾を放つ。その光弾は着弾すると爆発する性質があるようだ。その性質から、天空攻防戦にてラテイオが使用した技と同じか、あるいは近い性能を持った技だと推察できる。

ティーダとラテイオによる、アルティロイド同士の戦闘。ティーダは他の兵士の事を考え動いているのに対し、ラテイオは敵味方関係なく、その爆発する光弾を投げつけている。いや敵味方の判別というよりも、その目にはティーダしか映っていない。

「ラテイオ……！ それ程の力を、何も考えずに使用するなっ！」
「何を言ってるんだ兄貴、地上に降りてから考えが甘くなっちまったんじゃないのか！？ ただ己の力を開放し地上の人間を、完全に大地から消し去るのが俺達の使命だろう！」

ティーダの言葉は、火に油を注いでいるようなものであり、ラテイオはティーダの言葉に強く反発し、その能力開放をより顕著にする。

(……俺が戦わない事に、ラテイオは怒っている。そしてその怒りを、八つ当たりにして発散する事によって晴らしているな。……やはり、戦うしかないか)

「ラテイオ！」

今まで防戦一方で、攻撃をする事が無かったティーダは、ようやく一撃目の攻撃を繰り出した。ヴェルデフレインを持つ右手とは反対の、左手から火の聖獣エンドラの力を借りて、火球を放つ。

「ようやく兄貴にも火がついたかっ！ 兄貴、最高の戦いにしようぜえー！」

ラテイオも同じく、右手から黄色い光弾を繰り出す。二つの弾は、二人の中心でぶつかり合い、激しい爆発と火の粉が辺り一帯に降り

注ぐ。この際に発生した熱風でさえ、生身の人間にとっては、致命傷になりかねない程の高温である。

「う、うわああああ！」

「邪魔だ、どかないと貴様達もぶち殺すぞお！」

ラテイオは自分の進行に邪魔だと判断した兵士を、傍若無人に薙ぎ払っていく。その勢いのまま、ラテイオはティードに向かい、再び高速の拳の雨を浴びせてくる。衰える事のないラテイオの拳は、やはり非常にコンパクトかつスピーディであり、ティードでさえも長くは避けきれない。

「ハアツ！」

避けていくのは、これ以上は無理だと判断し、ティードもいよいよヴェルフレインを振るう。油断していたわけではないが、この鋭い剣撃をラテイオは咄嗟に避けられず、ダイナアクスを用いヴェルフレインの一撃を、固く強固な防御で受け止める。

「何だかんだ言いつつ、その殺す事に躊躇いが無い攻撃。やっぱり俺が尊敬する兄貴だぜ！」

説得しても、戦っても、ラテイオにとってはどちらも火に油らしく、ティードの鋭い一撃は、ラテイオの闘志に火を点けた。大きく後方へ吹き飛んだラテイオは、大地を蹴り飛ばし、吹き飛ばされた距離と同じ、いやそれ以上の飛距離で飛んでくる。その蹴り足の速度は、既に生身の人間の目に追いつく速度ではない。

「……す、凄え、あれがシークレットウェポン『アルティロイド』の能力だったのか……」

「この戦い見るとさ……、俺、むしろ怖くなってくるよ……」

そこにいたのは、城国軍の偵察兵である。ラテイオのアルティロイドとしての性能を確認する為に、現地に送り込まれた兵士である。しかし味方であるはずのラテイオを見て、兵士二人は何故か、背中に悪寒が走り、死を覚悟させられる。ティードとラテイオの戦いが、いやアルティロイドの戦いがそう感じさせたのだ。

「爆っ発っ！！！」

ラティオは右手と左手をティードに向け、通常の光弾よりも圧倒的に大きいものを放ってくる。地面に着弾したその光弾は、地面そのものをえぐり取ってしまうのではないかとも思える程の威力であり、その衝撃の余波だけでもティードに僅かながらのダメージを与える。

「くう……、ラティオ！」

火のオーラを体に纏い、その衝撃に耐えようとするが、ラティオの技の衝撃は、展開した防御網さえも突破してくる。その隙をラティオは見逃さず、一気に攻勢に出て行く。

「兄貴、俺は勝つぜ！」

一気に懐に入り込み、その自慢の高速拳を連打するラティオ。ティードもヴェルデフレインで、できる限りの迎撃を試みるが、その適正距離から攻撃の回転率は、どうやってもラティオが有利。いよいよ迎撃行動が追いつかなくなり、ラティオの拳はティードの左頬を、力の限り殴りつけた。

「ぐっ……!？」

「まだだ、まだまだまだだあ！」

その一撃から活路を見出したラティオは、そのまま左拳による返しの一撃、腹部などに容赦のない連打をティードに浴びせていく。そして両拳を組んだ状態で、そのままティードに振り下ろす。為す術なく攻撃を喰らい続けたティードは、そのまま地面に激しく激突する。

(……くそつ、まさかラティオにこれ程まで苦戦するとは)

ラティオの攻撃は、ティードにダメージを与えた。その攻撃力はやはり侮れないものがあり、ティードはすぐには動けない程のダメージを負ってしまう。

「どうした兄貴？ 兄貴は俺達アルティロイドの中でも最強だ。この程度でくたばるはずは無いよな？」

「……当たり前だ」

「立ってこいよ、兄貴。兄貴はまだ本気じゃねえ、そんな兄貴と戦

つて勝つても、俺は全く嬉しくねえんだ！」

「……つたく、この戦闘馬鹿が。人をこれだけ殴っておいて言う事か」

ティードは剣を支えにして、何とか起きあがってみせる。しかしラティオとの戦いの優位性は明確である。確かにラティオの言う通り、ティードはどこか本気になりきれてはいない。だがそれを差し引いてもラティオは強い。それは戦っているティード本人が一番わかった事である。

「……ラティオ」

「何だよ、兄貴？」

「お前は、王の命に従ってどうするつもりなんだ？ 今は良いかもしれない、だが王の目的が達成し終わった後、お前はどうするんだ？」

「……そんな先の事はわかんねえよ。俺達は王の命に従うように造られて、それ以上は何も求められていないんだ。その時になったら、王からまた命令が出るだろうさ。そしてそうになったら俺達アルティロイドは従い、王の命を遂行するのみだ」

「……そうか」

ティードはゆっくりと立ち上がり、ヴェルデフレインを構える。今までの構えと違い、その雰囲気は攻撃的である。

「俺は、俺はな、地上に降りて俺なりに見てきたものがある。地上の人間は、王が言う程に腐ってはいない。……俺は地上に降りて良かったと思っている」

「だから何なんだよ、兄貴？」

「王の命令もクソも無い。俺は俺の感じるままに戦う。そして俺が感じられたものは、倒すべきは城国軍という事だ！」

体に残るダメージを気迫でかき消し、一気に間合いを詰めるティード。今までの動きは様子見だと言わんばかりの速度で、ラティオを斬り伏せにかかる。

「ぐおっ……!？」

ダイナアクスでティーダの剣撃を防ぐが、やはりティーダの攻撃力も高く、ラティオは再び大きく後方へと飛ばされてしまう。バランスを取り、姿勢を直してから反撃に転じようとするラティオ。

「だが、一撃でこのラティオは倒せな」

ラティオが反撃に出る速度よりも速く、ティーダは一気に二撃目の攻撃を繰り出す。速度、いや動きそのもののクレが、明らかに増している。そして何よりもその斬撃には、目の前の敵は斬る、という姿勢が現れている。

「クソツ、兄貴、手加減していやがったな!？」

「俺はできる限りなら、お前達とは戦いたくはないというだけだ。それに対しての多少の迷いもあったさ、だが俺はこの地上を破壊する、城国軍の全ての敵と戦う決心をしただけだ!」

「地上を破壊しているのは、地上の連中だろうが!」

「お前の目で確かめてみるラティオ! 王ではない、ラティオとしての目でそれを確かめてみる!」

ティーダの攻撃は更に荒々しく鋭さを増してくる。今度はラティオが防戦一方になる。攻めるきっかけが、まるで見つからないのだ。……く、そ、があ!」

この状況を打開したいラティオは、考え無しに起死回生の一撃を放つ。

「攻撃する時は、相手をよく見るラティオ。考え無しの破れかぶれの一撃で勝てる程、戦いは簡単なものではない」

ラティオの一撃を、さも当然のように回避したティーダは、その鋭い斬撃をラティオの胸板に向かって走らせる。完全に懐が空いていたラティオは、この剣線を呆気なくくらってしまう。ラティオの鮮血が飛ぶ。

「ぐ、ああああああああ!」

焼けるような痛みが、ラティオの胸部に襲いかかる。ヴェルデフラインの切れ味を以て、ラティオの強化皮膚を紙くずのように裂く。ラティオはただ悶絶し、その場に倒れ込む。

「深く斬った、もう十分だろう。一度城へ帰り、傷を回復させ、そしてお前自身の正義を模索してみる」

「ぐうつうううつ……！」

焼けるような痛みの上に、斬られた鋭い痛みが走っているのだろう。その綺麗に切り裂かれた傷口からは、いまだに大量の血液が流れ出ている。

「お前は強い。だからこそ、その力を命じられるままに使うべきではないんだ」

これ以上は戦う必要は無いと判断し、ティータはラティオに背を向け、その言葉を言い放つ。ラティオを止めた事により、しばらくはサンバナの町への、城国軍の攻撃は収まるはずだ。

「……王の、命に従う事が、俺達アルティロイドの、いやっ、俺の正義だ！」

「ラティオ!？」

「初弾装填。行くぜ兄貴、この戦いは俺が勝つつ!」
一撃目の衝撃

ファーストインパルス

127

ラティオの右手に黄色い火花状の閃光が纏われている。天空攻防戦の時にも見せたファーストインパルス。通常の技よりも長いタメが必要なその技を、痛みを耐えながらエネルギーを集約させていた。火花状に具現化される程の強い爆炎のエネルギーを、一直線にティータに向け殴り放つ。

ティータも予期していなかったファーストインパルス。攻撃なのか防御なのかわからない動きで、ティータもヴェルデフレインを振るう。エネルギーを纏ったラティオの右拳に、剣は当たるものの、名前の通りのその衝撃により、ヴェルデフレインは弾かれる。

「くっ!？」

「貫けえええええ!！」

ラティオの拳はティータへ。しかしここでラティオにとっても、ティータにとっても予想しえなかった事態が起きる。ラティオの右拳に弾かれたヴェルデフレインは、そのままラティオの左目を切り

裂いた。

ファーストインパルスの攻撃により、今までの戦いによる被害が、霞んでしまう程の大爆発を引き起こす。天空攻防戦時と違い、地上に足を踏ん張つての完全な一撃。その時とは比較にならない爆発の衝撃がティードを襲った。

その地帯には、しばらくの間、黒煙が晴れる事がなかった。

その煙だけではなく、焼け付いた大地がまるで炭のようになっており、かつて森林地帯と呼ばれていた場所は、その名とはうって変わった、黒の大地へと変貌していた。

「……お、俺の、目がっ！ うっ、ゲホッ！」

ファーストインパルスは諸刃の剣。その術者にさえダメージを与える攻撃力を持っている。ラテイオの体はほとんど死に体だった。胸部を斬りつけられた傷跡は、お世辞にも大丈夫とは言えず、己自身で放ったファーストインパルスの衝撃により、体全体に大きなダメージを抱える。何よりも戦士としては最も重要な、片目を失う。とてもではないが、ラテイオには戦える程の体力は残っていない。

「無様だな、ラテイオ……！」

自分の有様を見て、ラテイオは自分で自分を戒める。決してティードを甘く見ていたわけではない。アルティロイドとしてでもなく、王の命令でもなく、ただ一人の男としてティードに良いようにやられたのが、ラテイオにはどうしようもない程に悔しかったのだ。

「…………… 決めたよ、兄貴。馬鹿な頭を働かせて、馬鹿なりの答えを出した。アルティロイドとしてではなく、王の命でもなく、俺は俺で兄貴をこの手で倒す為に戦ってやる！」

突発的かもしれないが、ラテイオは決意する。男としての真剣勝負に負けたのが、ラテイオの人生観を狂わす程に影響を与えていた。「死ぬなよ兄貴、アンタを倒すのは……、この俺、爆炎の騎士ラテイオだ！」

ラテイオは城国軍に撤退の信号光を放つと、そのまま城国には戻

らずに消えていく。ラテイオを見た者は誰一人としていなかった。

サンバナの町の南側でも、同様に命懸けで戦う兵士達の姿があった。ティード達が戦っていた東側程ではないが、それでも敵味方問わず死体、あるいは重傷者が転がっており、人間ができる事だからこそ、その光景はどこか生々しいものがある。

ソリディア、バース、タムサン達も自分にできる全力の戦いをし、何とかここまで生き残っている。仲間は誰が生きているのか、あるいは死んでしまったのか、それさえもわからない状況だった。しかし直後、黄色い閃光弾が黒煙が支配する空で光る。それと共に城国軍の兵士は、驚愕しながらも少しずつ撤退していく。

「……終わった、のか？」

「いやまだわからんぜ。ソリディア、油断するなよ」

「うむ。しかし先ほどの大きな地響きと爆音は一体……。ティードは無事なのか!？」

城国軍の撤退により、倒れている兵士を回収しようと後方より衛生兵がやってくる。それを見て、どうやらサンバナの町における攻防戦は、集結を迎えた事を確認する。

「タムサン、ティードのいる東側へ向かうぞ。先ほどの爆発、ティードに何もなければ良いのだが……」

「行きましよう、兵士長!」

「バース、後を任せても構わないか？」

「ああ、行ってこい行ってこい。俺もあのティードって野郎は気に入ってるからな」

南側における戦場跡をバースに任せ、ソリディアとタムサンは、ティードのいる東側を目指す。いまだ黒煙が晴れぬ東側からは、熱いと感じさせられる熱気が、ソリディア達に襲いかかる。呼吸をする事さえも困難に感じさせるその場所は、まさしく地獄を超えた地獄と化していた。

14 死闘の後に残るもの

「……これが、アルティロイドの戦い……か。こんな力を持った生命体を、同じ人間が造り上げたと思うだけで、私は一種の罪悪感を感じてしまう……」

サンバナの東、ティーダとラティオの戦いの跡地を見たソリディアは、一人そんな事を呟いた。

「兵士長！ この辺りにも、ティーダは発見できませんっ！」

「もつと向こうの方まで、くまなく探すんだ。ティーダは生きているんだぞ！」

ソリディアに余計な負担をさせない為に、タムサンが頑張って兵士達を指揮していた。

しかし兵士達の頑張りも虚しく、広範囲にわたって荒れ果てた大地の中から、ティーダ一人を捜す事は至難の業である。

「……ティーダ。生きているのなら、私達に何かを示してくれ……」
この荒野になった森林地帯から、ティーダを捜すという事が、どれ程大変なのかという事を、ソリディアは本能的に知っている。

「マルシヤナ、マルシヤナ！ 返事をしてくれ、生きているのなら……返事をしてくれえ！」

まだ若きソリディアは、正に荒野となった場所で、一人の女性の名を呼び続けた。その荒野となった場所は、かつてソリディアが住んでいた町があった場所である。ソリディアの住んでいた町は、大きな軍力を町長が秘密裏に抱えており、それを城国軍に目をつけられたのであった。

一気に大群による奇襲をかけられ、町は一瞬にして壊滅させられた。その町には何の罪もない多くの人々が、何も知らずに暮らしていたのだ。

二十年前に起きた、城国軍と地上軍による大きな戦争。ソリディア

アもまた、その戦争に参加しており、戦っている最中は町の壊滅が知らされていなかった。レジスタンス連合の上層部により、兵士達には町の壊滅という士気を下げかねない事は、絶対黙秘の決まりにて伝えられる事は無かった。

最も、二十年前の大戦の結果は、地上軍の大敗である。至る町の壊滅の事実を知る、上層部もほとんどが死亡、あるいは行方不明となっており、命からがら生き延びて里に帰った兵士達に待っていたのは、愛する者達の、守りたいと思った者達の、あまりに呆気ない死のみであった。

「マルシャナ、頼む……返事を、してくれえ！」

ソリディアは、荒野となった町で、ただマルシャナの姿を捜し続けた。何時間も、何時間も、ただ諦めずに捜し続けた。

そしてもう日も変わるであろう時まで捜し続け、ソリディアは愛するマルシャナを発見したのだった。

「マ、マルシャナ……。目を、目を開けてくれ！」

マルシャナを見つけたソリディアは、彼女を抱き抱え、ひたすらにその名を呼び続けた。しかし無情にも彼女は、ソリディアの問いかけに答える事は無かった。

「む、いかな。どうも歳を取ると物思いに耽ってしまう……」

そう言いながらも、自身の目に溜まっていた涙を軽く拭き取る。何よりもソリディアは疲れていた。

「兵士長、ちよつとこつちへ！」

「いたのか!？」

兵士に呼ばれ、ソリディアはそこに向かって走っていく。戦いの凄さを物語っているのは、地形の所々が変形している為、なかなか移動しにくくなっているというものだ。かつては森林地帯といえども平地であり、移動にはそこまで苦にならなかったであろう。

「いえ、ティードは見つからないのですが、ティードの剣らしき物が発見できました！」

兵士にその剣を渡され、直に確認するソリディア。

「うむ……。これは確かにティーダの剣だ。と、いう事はこの周辺にいる可能性が極めて高い。何とか全員で捜し出すんだっ！」

ソリディアは過去のトラウマと戦っていた。何とか見つけ出せても、そこにいたのは物言わぬ人の姿。あるいはティーダも、と考えてしまうと、いつその事見つからないでほしいとも考えてしまう。

「兵士長、いましたっ、ティーダです！」

「な、何！？ それで、それでティーダは生きているのか？」

「……はい、生きています！ しかし、かなりのダメージを負っているようです！」

兵士達は、皆ティーダ発見の場所へと向かう。そこにはファーストインパルスのダメージを受け、大小様々な傷跡が残るティーダがいた。

「ティーダ、しっかりしろっ、ティーダ！」

「……………つうう」

放っておいたら間違いなく死んでいたと思わせる外傷。いや生身の人間ならば間違いなく死んでいるだろう。軽く頬を叩きながら呼びかけたソリディアは、ティーダの意識が戻ってくれて、内心安堵していた。

「ティーダ、無事か!？」

「……………こ、これが……………無事に、見え、る、のか？」

「いや、すまない。とても無事には見えんな……………」

「ラテイ、オは……………、あいつも、相当なダメージを、負った、はずだ。……………恐らく、しばらくは襲撃、して、こな、い……………だろう、な」

（ ラテイオ？ ティーダと戦っていた城国軍の兵士の名か……………？）

ソリディアは、ティーダの口から出たラテイオという名を覚えておく事にする。

「もついい。喋るなティーダ。今からサンバナの町へ戻り、この大

怪我を手当てしてもらおう。……タムサン！ ティーダを運ぶんだ、手を貸してくれないか！？」

「了解です！ ソリディア兵士長」

レジスタンス。城国軍。近年希に見る大規模な戦闘となった、サンバナの町を基点とした攻防戦は、その幕を静かに閉じた。この戦いに参加したレジスタンスは、およそ千五百人と言われている。正確な数は定かではないが、死者は七百人。重軽傷者は六百五十人といわれ、死者を多く出してしまったこの戦闘は、多くの人々に悲しみを植え付けた。

そしてティーダとラティオが激突した森林地帯は、後に黒の森林ブラックフォレスト地帯と呼ばれる。大地はまた癒せない傷跡を残したのだ。

サンバナ攻防戦の終結から、三日が過ぎた。ほとんどのレジスタンス達は、各々のベースキャンプ地へと戻っている。戦前とまではないかないが、たくましい町民達は少しずつ活気を取り戻し、サンバナの町は再び明るい町へと変わっていく。

しかし、この戦争で起きた悲しい事は、家族を、あるいは大切な人を失った者達だけの事では無かった。サンバナの町の町長が、自害してしまっていたのだ。突然の出来事で、町長に特に縁のあった者は、急遽作られた町長の墓の前で「支配の無い、平和な世作り」を誓い、ただ涙を流していた。

一方、大怪我を負っていたティーダは、既に三日目にて自力で動ける程になっていた。三日間、アルティロイドとしての強化自己修復を行っていた為である。強化自己修復とは、人間も持つ自然治癒力を、意図的に強化したものであり、何もしなければ数日で、どんな大怪我さえも治癒する事はできる。

「ティーダ。……おっ、さすがだね、もう動けるようになったのかい？」

パーシオン兵士の為に、借りた宿泊部屋の扉を、タムサンが控え

めに開けてくる。

「普通に過ごす分には、このぐらいの治りで問題はないだろうな。ただ戦闘をするには、もう少しだけ時間がかかるな……」

ティーダは自身の右手を、握っては開いてを繰り返し、体の状態を確認する。

タムサンはそんなティーダの返答を、ただ苦笑いで流した。

「兵士長がね、ティーダが動けるようになったら、そろそろ出発するって言ってたよ。心残りな事があるなら、今の内に済ませておけよ、だつてさ」

「心残り……。そんなものはない」

「ああ、そうなの？」

それ以降のティーダの返事は無く、気まずい雰囲気になんて耐えかねたタムサンは、適当な挨拶をした後、いそいそとどこかへ行ってしまう。

「心残り……か」

一人呟くと、ティーダは部屋にある窓から、町の景色を眺める。

天気は快晴といっても良いほどに、晴れ渡っており、三日前にはあれ程に殺伐としていたのが嘘のようである。

そんな景色を見ながら、ティーダは一つの文字通り心残りを思い出す。その心残りを消す為に、部屋を出ようと着替えを済ませるティーダは、ある事に気がつく。

「……俺の法衣はどこだ？」

いつも着ていた、アルティロイド専用で作られた戦闘法衣が見当たらなかったのだ。最も、ラティオのファーストインパルスを受けた為、その爆発に巻き込まれ、燃え尽きてしまった可能性もある。ふと見ると、ティーダの為に用意された服だろうか、パーシオンの兵士達が装備しているような、防護服があつた為、ティーダはとりあえずその服を着てみる。服の大きさも、ティーダの大きさに合っているの、恐らくはソリディアかタムサンあたりが、わざわざ作ったのだろう。

（　だが甘かったな、ラテリオ。お前のインパルスが完全に直撃していたら、間違いなくお前の勝ちだっただろうな）

ティーダは、ラテリオとの戦いのあの瞬間を思い出していた。

それはラテリオがファーストインパルスを放った際の攻防。弾かれた剣は、ラテリオの左目を切り裂き、ラテリオの目を奪った。それと同時にラテリオのインパルスは、ティーダに直撃したかに見えた。しかし剣を弾かれたティーダは、腰に備えていたヴェルデフレインの鞘を使い、ファーストインパルスの直撃をかるうじて防いだのだ。ティーダは元々、剣を使い斬る事よりも、それを盾にして使い、攻撃を防ぐ事の方が得意分野なのだ。刹那の攻防で、ティーダは自分自身の癖に救われた。

（……ふっ、腕を上げたな。数年前までは、ただピーピー泣きわめくだけのガキだったのにな）

アルテロイドは幼い時より、全員と一緒にいた。決して本当の兄弟ではないが、それでも実の兄弟以上にお互いを意識していたのだ。ティーダはラテリオの成長に、静かな笑みをこぼしていた。

ティーダが真っ先に向かったのは、パーチャの運営する小さな道具屋である。ティーダ自身、正直な感想としてはパーチャが苦手な為、二度と立ち寄りたい場所ではなかったのである。パーチャは相変わらず、他の店が霞んでしまいうぐらいの大声で、元気よく店を切り盛りしている。

「おや、ティーダじゃないか。良かったよお、アンタも無事に生きてたんだね！」

「……ああ、まあな」

実の息子が無事に戻ってきた、そんな感覚で喜んでいるパーチャ。パーチャの年齢を考えると、ティーダぐらいの子供がいても、おかしくはないのだ。

一人勝手に盛り上がっているパーチャを適当に流しながら、ティーダはこの道具屋に売られているはずのワセシアの花を探す。しか

しいつもあつたワセシアの花は、既にそこには置いていなかった。
（誰かが買つていったのか。……まあ仕方のない事だ、俺だって別にそこまでほしかったわけでもない。それにあんな物を手に入れて何がしたいんだティーダ？）

無表情に、ワセシアの花が置いてあつた場所を見つめるティーダ。それにパーチャが気づき、申し訳なさそうな顔をする。

「ああ……、ごめんね。実は昨日だったか一昨日だったかに、ワセシアの花を買いたいつて人がいてね……」

「いや気にするな。何度も言うが、別に絶対にほしいわけでもなかった。それに俺は1000マーネしか無い。あの花は買えやしないさ」

「……ティーダ」

「じゃあな。多分、今日か明日にはこの町を出る。恐らく、二度と立ち寄る事も無いだろう」

軽い挨拶だけ済ませて、ティーダはパーチャと別れる。

（こんな誰がいつ死ぬかわからない時代だ。迂闊に人との縁を作るべきじゃない）

そんな思考に耽っていると、後方からパーチャの大声で、ティーダを呼ぶ声がする。

（……やれやれ、まだ何か用なのか）

とりあえず呼んでるパーチャを見る。何かを持って手招いているようである。

「あれは……」

パーチャが持っているのは、ワセシアの花である。手招きながら接近してくるパーチャを、ティーダはただその場で待っている。

「ごめんね、この際だから嘘ついちゃった!」

「……嘘?」

「ワセシアの花は売ってはいないよ。アンタの為にちゃんと保管してたのさ!」

「おいおい、だから保管してたって俺はワセシアの花を買う金は……」

「……」
「1000マーネ！」

ティードの言葉を遮るように、パーチャは持ち前の大声でそう叫んだ。

「サンバナの町が一時的とはいえ、平和になった記念で、特別価格の1000マーネでどうだ！」

「パーチャ……？」

啞然としているティードと裏腹に、パーチャは豪快に微笑んだ。

「何でなのか、つてのは聞かないさ。お客がほしいというのなら、出来る限りの事はするつもりさね。さあ、どうする！？ 今だけ限定の特別値引きだよ！」

「……人間というのは、つくづく馬鹿ばかりだな。最もそんな馬鹿と共に歩む馬鹿でありたいとは思っけどな。……ワセシアの花を買わせてもらっぜ、パーチャ！」

「毎度っ！」

持っていた1000マーネを支払い、ティードはワセシアの花を受け取る。パーチャの説明によると、このワセシアの花は、敵味方問わず、装備者あるいは持ち主の願った人物に、特殊な防御壁を張り一度だけ攻撃から身を守ってくれる、という能力を持っているようだ。この際に発生する防御壁は一種の魔法という説もあるが、詳しい説明はいまだに進んではない。

「ティード、またいつか来なよ！ アタシはいつまでもここで店をやってるさっ！ 若いアンタよりも長生きするよっ」

パーチャはそう言い残し、自分の店へと戻っていった。鬱陶しく思った町の活気も、今は非常に心地良いとさえ、ティードは感じていた。

そして、その日は念の為にという事で、宿屋に泊まらせてもらい、次の日の朝。

レジスタンスパーシオン。ティード、ソリディア、タムサン、以

下数名の兵士達は、死闘が繰り広げられたサンバナの町を後にした。出会いと別れ。それは万人に訪れる、避けられぬ悲しき運命である。だからこそ人々は、今を全力で生きている。

15 日常への帰還

「……うう、あつ、……ぐうつ、ああ……！」

ティオダヤソリディアが、サンバナの町へ行っている一方、パーションに残ったティオは、相変わらず消えない左胸の痛みと闘っている。先日、ラルク医師に診てもらった時よりも、痛みが更に強くなっている。

ティオは歯を食いしばり、手を強く握りしめ、呼吸を吸っては止めての繰り返しで、その痛みに必至に耐えている。締め付けるような、切り裂かれるような痛みは、否応無しにティオの精神を蝕んでいく。

（ どうして、どうして消えないの。この痛みは何なの、何で私だけがこんなに痛いのか。……誰か、助けて！ ）

眠って痛みを忘れようとしても、その痛みはティオに眠らせる事さえもしない。大量に汗をかいた為か、喉の渴きを覚え、ティオは水を飲みを外へと歩き出す。一人であるよりも、外で風に当たっている方が、多少なりとも痛みを忘れるかもしれない、と判断した為でもあった。

確かに風に当たる事により、感覚が散漫になるおかげもあってか、左胸の痛みは少しだけだが、治まったような錯覚をする。しかしそれでも痛みは、十分に自覚する程にティオの体を流れている。ふらつく足で食料や水を保管してあるテントへと歩いていく。

時間も朝方とあって、ほとんどの人はまだ眠っているのだろう。ティオのテントから保管場所までは、それなりに歩く距離だが、誰一人として会う事はない。ここには自分一人しかいないのではないかと錯覚をする程である。

「 ふう 」

頭に痛みが走る。それ程に冷たい水を一気に飲み干す。乾いた体に染みるように、水が浸透していく感覚を覚える。左胸の痛みは、

いつの間にか消えている。

(ティイダ……。変だよね私、貴方の事が心配で考えると、左胸に痛みが走るようなの)

そう考えた今も、一瞬ながら左胸に痛みを感じる。この痛みの不思議な点が、少しずつながら痛みが強くなっている点である。ラルク医師の診断は、冗談交じりだったが「恋」である。ティオも本で読んだ程度の知識だが、恋をすると胸を締め付けられるようになるという知識を持っている。だがその痛みが、少しずつ強くなる事などあるのだろうか。まして呼吸ができなくなる程の痛みなど走るものであろうか。

ティオは最後に一口分の水を飲み込むと、食料保管庫を後にする。テントから出ると先ほどは気がついていなかったが、朝焼けを見る事ができる。ベースキャンプの人々が起きるのも、もうじきとなるだろう。

「よ、よお、ティオじゃねえか、こんな朝早くにどうしたんだ？」
声がする方を見ると、そこにはカルマンが立っている。

「あ、おはよう、カルマン君。ちょっと……喉が渴いてね」

「そう、なのか？ それなら良いが、少しやつれてるようにも見えるぞ」

カルマンに言われて、初めてティオは自分の体が疲れている事を自覚した。

「疲れてる……？ ……そうなのかもね」

体は非常に気だるい。どこか熱っぽさもあり、一般的に見れば立派な体調不良である。

「少し休めよ、色々と大変なんだろう？」

「……ううん、もう少しだけ……この風を感じていたい」

ティオは静かに朝焼けの空を眺める。カルマンもそれに続くように空を眺める。朝日に照らされ、遙か向こう側には、天空高くそびえ立つ王の居城シャングリラキングダムが見える。この戦い全ての現況である。

「……カルマン君？」

「……えっ、あ、何!？」

「カルマン君はどうしたの？ 見張りの仕事があるんじゃない？」

「いや見張り番は交代してきた。だから今は自由行動だ」

「がんばって見張りをしてくれたんだから、カルマン君も休んだら良いのに……」

「あ、ああ。でもティオは具合が悪いだろう、だから少しだけ付き合わせてほしい」

「……うん」

ぎこちないやり取り。二人はただ無言で朝焼けの空を眺めている。そんなティオの横顔を、カルマンは気づかれないように見る。そこには優しい光と、それに照らされ優しく微笑む母のようなティオがいる。

(やっぱり可愛いな。それに何だかホツとする)

見張りにより疲れた心身も、ティオのそんな姿を見ていると、そんな疲れさえも忘れていく。

「ソリディア兵士長達は無事かなあ……」

カルマンは、ふと思った事を口にした。

「うん、心配だよね……だって戦争してるんだもん。どんな強い人でも死ぬかもしれない……」

顔を隠すように俯くティオ。それを見たカルマンは思わず、失敗した、と思ってしまう。

「だ、大丈夫だって、ソリディア兵士長は大きな戦いを生き抜いてる、いわば歴戦の勇士だぜ？ きっとみんな無事に帰ってくるって！」

落ち込むティオに対し、カルマンはカルマンなりの励ましを試みる。

「うん、そうだよな。兵士長も、タムサンさんも、それにティードもいるんだもんね」

「そ、そうだな」

（ ティーダ、か。俺にはいまだに君付けなのに、ティーダは呼び捨てか…… ）

カルマンは、ティオの言葉から、ついそんな事を考えてしまう。

「うっ……痛う……！」

「ど、どうしたんだ、ティオ!？」

「だ、大丈夫、ちょっと胸が痛くなっただけだから……」

「そうなのか……？ 具合が悪いならラルク医師に診てもらえよ？」

「うん、ありがとう、カルマン君。……疲れたから、もう休むね」

一瞬だが左胸に痛みが走る。だが持続的に続いていた痛みは、気づかない間に消えていた。体の疲れと共に、程よい睡魔も襲ってきた為、ティオは自分のテントへ戻り眠る事にする。

（ ティーダ。無事に帰ってきてね ）

パーシオンから、サンバナの町にいるティーダを想う。

再び目が覚めても、ティーダ達はパーシオンに帰ってはいなかった。

帰っていないという事実が、ティオに再びティーダを想わせる。

そしてそれと共に、再び左胸に痛みが走り出す。

「うう、ぐっ……あつ、な、何で、よ……」

持続的なその痛みは走る度に、やはりその痛みを増加させていく。今回の痛みで、今まで辛うじて繋ぎ止めていた意識が途切れてしまう。それ程の痛みに増幅しているのだ。十分程だが意識を失い、気がつくのと左胸の痛みは消えていた。

一体この原因不明の痛みは何なのか。それを知りたいが為に、ティオは再びラルク医師の元へと向かう。ラルク医師でさえも診断不能であったが、きつと何とかしてくれる、と。ティオはラルク医師を信頼している。

ラルク医師のテントは、相変わらず人気が無い。ラルク医師の人柄から、できるだけ厄介になりたいと思う人間が少なく、パーシオンに住む人々は基本的には健康体な為である。

「ラルク先生、いますか？」

「はい、いるわよお、入ってらっしゃあい」

何度聞いても中性的な声が、テントの中から聞こえてくる。世界の七不思議を探しても、このラルク医師の謎こそが最大の不思議点であろう。

「さて、今日はどうしたのかしらあ？」

「この前の事です。あれから全く治まりもしないですし、余計に酷くなっている感じなんです」

「ふうむ、困ったわねえ……」

ラルク医師は、前回ティオを診断した際のカルテを取り出す。それと共に、独自に原因を調べてくれていたのだらう。原因解明の結果を乱雑に広げる。

「あの、ラルク先生……？」

「ぶつちやけて言うわねえ。独自に調べてみたけど、全く原因がわからないわ。悪い菌やウイルスなんかにはやられた理由でもない、かといって血管とかに異常があるわけでもないのよねえ……」

完全にお手上げといった表情で、ティオのカルテと調べた結果を見る。目の前の患者を救いたい気持ちと、何もできない自分の実力に、ラルク医師は苦悩している。

「先生は立派に仕事してくれました。何が原因なのかは確かに知りたいですけど、私はラルク先生が私の為に頑張ってくれた事が嬉しいです！」

「……そう、言ってくると少しは気も楽になるわ。でも……」

ラルク医師は、再びティオのカルテを見つめる。

「……もしかしたらだけど、ティオちゃんの具合を良くしてくれる人がいるかもしれないわあ」

ふと思いついたように、淡々と話を進める。記憶の片隅にあるものを、一生懸命に引き出しているのが見て取れる。

「そんな人がいらっしゃるんですか、一体どこに？」

「ううん、詳しく場所は知らないのだけれどお、ここから北に向か

った先にシユネリ湖っていう、とても大きな湖があるのよお。風の噂ではその湖の周辺にあるレジスタンスに、かなり腕利きのお医者様がいるって聞いた事はあるわねえ。その人ならあるいは……」

「……北のシユネリ湖」

言葉に出してみるが、実感の湧かないといった表情のテイオの為に、ラルク医師は白紙に簡単な地図を描いてみせる。

「良いかしらあ？　ここがパーシオン。ここから南に行けば、愛するティーダちゃんのいるサンバナの町ねえ？」

「なっ、ちよつと、何を勝手に作ってるんですかつ！」

「うふふ、可愛いわねえ。……お話を戻して、更にパーシオンを拠点に西に行けば、ご存じの通りカザンタ山岳地帯。そして北東に大きく行けば、知らない人間はいないシャングリラキングダム。……そしてここ、パーシオンから北にうんつと進んだ先にあるのが、最大の湖でもあるシユネリ湖ってわけ」

「……せ、先生、これ凄く遠くないですか？」

ラルク医師の描いた地図を、目で追ってみると、シユネリ湖の位置は大袈裟と言える程に、遠くに位置している。

「確かあ、サンバナの町が一時間から一時間半ほどで、着いたって言うってたわよねえ？」

テイオはラルク医師の質問に、首を縦に振る。

「ならあ、シユネリ湖は歩いて一日二日はかかる距離だと思っわよお。いえ、もつとかかるかもしれないわねえ」

「そんなに遠いんですか？」

「世界は広いのよお。……といつてもお、旅をする際には歩いて一日二日の距離なんて容易いものよあ？」

ラルク医師は簡単に言い放つが、テイオはやはり歩いて一日二日の距離が想像できない。

「シユネリ湖よりも更に北へ進むと、人が住めないような極寒の大陸と聞いた事もあるわあ。……ああ、世界って何て素晴らしいのぉ！」

一人舞い上がるラルク医師。その頭の中では、一体どんな冒険が繰り広げられているのか、それはティオの知る由も無いものである。数分ほど、自分の世界に浸っていたラルク医師は、何とか我を取り戻し、再び真面目な話をする。

「とりあえず、ソリディア君達が無事に戻ってきたら、護衛してもらって連れて行ってもらいなさい。シユネリ湖の水はとても清らかで、飲むだけでも体に良いというぐらいのものよ」

「はい、そうします。ラルク先生、ありがとうございました！」

「良いのよ」

その時、外から騒がしいぐらいの、人々の声が聞こえてくる。ただ叫んでいるだけのようにも聞こえるが、その感じから歓喜の声を上げているようにも聞こえる。

「噂をすれば、ねえ。行つてらっしゃい」

「はい！……ラルク先生は？」

「私はパスよお！ 騒がしいのはクソ嫌いなよお！」

独特な発音と表現で、嫌だという意志を見せつける。ラルク医師は、医者らしい優しい笑顔で、ティオを送り出した。

長く短かったサンバナ攻防戦から、無事にパーシオンへ帰還したティード達は、暖かい歓声で出迎えられる。

「よくぞ、ご無事でっ、兵士長！」

「お疲れ様でした、ソリディア兵士長！」

最も、暖かい歓声が多かったのは、ソリディア兵士長が大多数を占めている。

そんな中で一人。ティードに声をかける者もいた。

「お帰りなさい、ティード……」

ラルク医師の元から、急いで駆けつけたティオである。ティードの顔を見た途端、安堵の為かティオは涙を流した。そんなティオにどうするべきかわからず、ティードは自分の頬を掻いた。

「 どうやら、無事に帰ってきたみたいだな！ 」

「 ふう……。そうみたいだな、またお前の相手をする事の気が重いよ 」

「 言ってくれるぜ……。 」

ティーダが振り向くと、そこには寝て起きたばかりで、明らかに眠さが見えるカルマンがいた。

「 一兵士としてっ、一兵士としてだからな！ お前に言ってやるぜ！ 」

数日前の二人の喧嘩からか、泣いていたティオは一気に、不安な顔で二人のやり取りを見守っている。

「 ティーダ！ ……お疲れ！ 」

恥ずかしそうに、その言葉をはき出し、握り拳を目の前に出す。

「 ……そうだな。たまにはちゃんと相手をしてやるか 」

そんな言葉で返し、ティーダは差し出された拳に、自分の拳を強く当てた。骨と骨の鈍い音がするぐらいに強く当たったが、その拳の痛みは、どこか気分が良いと二人は感じていた。

「 ……うん、本当に、お疲れ様……。 」

ティーダとカルマンのやり取りに、ティオは嬉し涙を流していた。「 だがあくまで一兵士としてだっ！ 男として俺は、お前を認めてねえぞ。俺とお前の喧嘩はまだ続くんぞ！ 」

「 ……フン、望むところだ。またその顔面を凹凸のある顔にしてやる 」

カルマンは口元で笑うと、眠さの限界がきたのか、早々にテントへと戻っていく。

「 本当に、心配したよ……。ティーダ 」

余程心配したのだろう。ティオは俯いてしまい、このままではまた泣いてしまいそうである。

ティーダはサンバナの町で購入したアイテムを取り出し、それをティオの頭の上に付ける。桃色の美しい髪に、白いワセシアの花が栄えている。

「……えっ、これは……？」

「また泣かれても困るからな。……やるよ」

「ありがとう……。これワセシアの花、よくこんな高価な物を買えたね？」

「……まあな。とりあえず俺は寝る。後の事はソリディアの所にも行ってくれ」

「あ、うん、おやすみなさい」

しばらくするとお祭り騒ぎも静まり、パーシオンはまたいつもの日常へと戻っていった。

16 己の余命にできる事

「と、いうわけでえ、貴方はテイオちゃんを連れて、シユネリ湖に向かいなさい」

「左胸に痛み？ 本当にテイオはそんな事を……？」

サンバナから帰って数日が経つ。ソリディアはラルク医師に呼び出され、ラルク医師専用のテントへ来ている。

そこで聞かされた事は、テイオの左胸に走る痛みの事。ラルク医師では正確な診断が不可能な為、さらに腕の良い医者を探して、北のシユネリ湖を目指すという事である。

「そんな事も知らなかったなんてえ、貴方はテイオちゃんの父親代わり失格ねえ？」

「……返す言葉もない」

「……冗談よお。貴方はよくやっているわ、むしろ医者診断としてはあ、貴方も長い休養が必要くらいよお？ 数日前の体調不良から、全く治ってないんでしょ？」

「やはりラルク先生には隠し通せぬか。確かに体調は治るところか、少しずつだが悪化しつつあります」

「そうでしょうねえ。今ここでハッキリと言っておくわ。……貴方は悪性の病気に感染してるわ、今の医学では貴方の病は残念ながら……」

戦っている患者の為に、ラルク医師はその澄んだ瞳を、真っ直ぐにソリディアに向ける。ソリディアも共に戦ってくれているラルク医師を真っ直ぐに見る。

「……覚悟はしています。それで……私の体はあとどれくらい持つのでしょうか？」

「……長くて一年、これ以上無理をし続けると更に悪化して、半年持つかどうか……」

ラルク医師は、その死刑宣告にも同等の言葉を、ゆっくりと噛み

しめるように出した。

「長くても、一年、ですか……。私は数え切れない程の命を奪ってきました。良くてあと一年、四十六年間もこの大地に生きられた、私は十分に生きました。……これで残りの余命を何に使っべきか、本当の意味で覚悟が決まりました」

ソリディアは、自身の老いた手を見つめ、覚悟を決める度に拳を握りしめた。

「……貴方の余命、貴方がどう使おうと私が指示するべき事ではないわ……。でも、無理はしちゃ駄目よ？」

「了解しました。そして私はテイオを連れてシュネリ湖へ向かいます。パーションの事はハリス副兵士長と貴方に任せます」

「ウフフ……。良いわよ。貴方の頼みだものお、断る理由は無いわあ」

礼を言いながら軽く挨拶をし、ソリディアはラルク医師のテントから出る。そのままソリディアは、テイオのテントまで向かった。

「テイオ、いるかい？」

「あ、はいっ！」

テント前からの呼びかけに、テイオは急ぐように出てくる。

「……どうか、したのかね？」

失礼だとは思いながらも、反射的にそこから見える範囲のテント内を見る。そこにはテイオが拾ってきた半分割れた鏡と、純白が美しいワセシアの花がある。

（なるほどな）

今までの生活の中で、洒落た物を全く身につけようとしなかったテイオが、鏡の前でワセシアの花と格闘している光景を想像し、ソリディアはどこか嬉しい感情が込み上げていた。

「あの、それで何でしょうか？」

「あ、ああ、ラルク先生から話は聞かせてもらった。すまなかった……私がおつと注意していれば良かったものなのに」

「……いえ、私も十五です。自分の管理は自分でできます。それにいつまでもソリディア兵士長に、迷惑はかけてもらえません」

テイオの言葉に、頼もしく嬉しい感情と、どこか寂しく思う感情がぶつかっていた。実の親ではない。しかし十五年の間、共に成長してきたつもりだった。もうここで親としての最後の仕事を全うしても良いのかもしれない、ソリディアはそう考えた。

「テイオ、シュネリ湖を目指そうか。そこに行けば、お前の痛みの原因もわかるかもしれないのだろう？」

「……はい。でもソリディア兵士長、まだ帰ってきたばかりで、疲れも取れてないはずなのに……」

「ふふふ、まだ若い者には負けてないつもりだよ。それに優秀な護衛も連れていく事にしようと考えているのでな」

その言葉に首を傾げるテイオ。シュネリ湖へは数日かかる距離の為、行くのなら早く出るに越した事はない。ソリディアは急な事だとわかりつつ、今から出発する事に決定する。テイオには準備ができ次第、パーシオンの門へ移動するように伝え、ソリディアは兵士テントへと移動する。

兵士テントの中へ入ると、兵士達の軽い挨拶が飛んでくる。その挨拶をいつも通りに軽く返すと、今現在いる兵士の確認をする。

（ふむ、今いるのは……ティード、ハリス、カルマン……。タムサンがいないのか）

「ハリス副兵士長、それとティード。こっちへ来てくれ！」

ソリディアの呼びかけに、ハリスはテキパキと、ティードは仕方なく移動してくる。

「何かご用ですか、兵士長殿？」

「うむ、突然の話だが私はテイオと、そこにいるティードを連れて、北のシュネリ湖へ向かう」

「……シュネリ湖、ですか。ソリディア兵士長のお考えですから、私は詳しくは聞きませんが……」

「そうしてくれると助かるな」

年頃のティオにとっては、自分自身の状態を他人に知られるのは、良しと思わないだろうと判断した。そしてソリディア自身の病に關しては、今の時点で打ち明けるのは下手に不安を募らせるだけだと思ひ、理由は一切教える事は無かった。

何よりも、北のシユネリ湖へ行けば、また違つた未来が残されてゐるかもしれないのだ。いずれにしる、自分にとつても、ティオにとつても、シユネリ湖へ向かう事には意義がある。

「また君には迷惑をかけるな、ハリス副兵士長」

「いえ、兵士長殿がいなくても、ここに住む人々を守り通すのが我々兵士の仕事であります！」

ハリスは勢い良く敬礼をする。それと共に、後ろにいた兵士達も敬礼をした。

「ありがとう、私は幸せ者だ。……ティーダ、激戦の後だが、私達を護衛してもらえるな？」

「それは構わない。それに軽い運動がたら旅も良いだろうな」

「うむ、では準備ができたら門へ来てくれ。……ではみんな、後を頼むぞ！」

ハリス以下、兵士達は再び敬礼をし、ソリディアを見送つた。

ソリディアがテントを出て、自分のテントへ向かう途中、追つて出てきたカルマンが、ソリディアを呼び止める。

「ソリディア兵士長！」

「どうした、カルマン？」

「俺も、俺も連れて行ってください！」

氣迫のこもつた叫びを、ソリディアにぶつけるカルマン。

「サンバナの戦いだって、俺はここで留守番でした。俺だってちゃんと戦えるんだ！」

「カルマン……。その気持ちはわかるが、戦いは気持ちでは勝てないのだぞ？ お前はまだ未熟だ、命を落としたらそれで終わりなのだぞ」

「俺は死ぬ気は無いですつ、絶対に生きてやるんだ！」

「……ふうむ」

引かないカルマンに、溜息をついた。ソリディアだってカルマンの気持ちは理解しているのだ。だがそれだけでは、戦いは勝つ事もできないし、生きる事もできない事を、ソリディアは知っている。

「良いんじゃないのお、ソリディア君」

「む、ラルク先生。貴方まで何を仰るか!？」

「この坊やだつて、これだけの気迫で言っているのよお。それに貴方が兵を大切に想っている事は知っているけどお、時には実戦の恐さを体験させた方があ、その兵士の為にもなるのではなくてえ？」

「それもそうなのだがな……」

ソリディアをある程度の説得し終わると、ラルク医師はカルマンを見つめた。

「実戦は喧嘩と違ってマジ怖えのよお、坊やにそれができてえ？」

「坊やじゃねえ、俺はカルマンだ！俺はどんな奴とだって戦う覚悟は、兵士になった瞬間から出来ているんだ！」

「うっふっふ、その言葉……忘れんじゃないわよ？じゃ、そういう事で宜しくね、ソリディア君。ばっははあい」

異様な凄みを利かせて話したラルク医師に、ソリディアは何の反応もできず事は流れる。

そしてソリディアの元へ歩みよってきたカルマンは、ソリディアの目の前で土下座をする。

「お願いします、ソリディア兵士長！俺と一緒に連れて行ってください！」

「………わかった。但しお前は後衛だぞ、それ以上のワガママは認めんよ？」

「はっ、はい、ありがとうございます、ソリディア兵士長！」

「うむ、そうと決まったら頭を上げなさい。男がへこへこと他人に頭を下げるべきではないぞ」

「はい、兵士長。俺は、一生兵士長についていきます！」

「馬鹿者！そんな事は良いから、さっさと準備をしてこんか！」

ソリディアに怒られ、慌てるように兵士テントへ準備をしに戻るカルマン。だがソリディアは一瞬ながら、このままカルマンを置いて旅立とうかと思ってしまうた。

ソリディア、ティード、ティオ、そしてカルマンの四人が準備を終え、門の前に集合したのは数分後の事である。事を大きくしないようにと、最後の見送りはハリス一人だけで来ていた。

「それでは兵士長殿、お気をつけて！」

「うむ、ハリスもこの守備を宜しく頼んだぞ」

「はい！ ……ティード、兵士長とティオちゃんの護衛を任せたぞ。

……カルマン、あまり迷惑かけるなよ！」

「そ、そりゃないっすよ、ハリス副兵士長！」

ハリスからの激励の言葉も終えて、ソリディア一向は北の大地、シュネリ湖を目指す。

16 「己の余命」で生きる事（後書き）

今回は3700字と短い内容。

17 遙かな北を目指して(前書き)

シユネリ湖探索主要メンバー

名前 ティーダ

種族 アルティロイド

性別 男

年齢 16

階級 火の騎士

戦闘 3000

装備

E 深紅の剣ヴェルデフレイン

E ティーダ専用戦闘防護服

E 火の聖獣エンドラ

名前 ソリディア

種族 ヒューマン

性別 男

年齢 45

階級 パーシオン兵士長

戦闘 1000

装備

E 鋼の剣

E 戦闘用防護服

E 鋼の肩当て

名前 ティオ

種族 ヒューマン

性別 女

年齢	15
階級	一般
戦闘	100
装備	
E 赤いゴム紐	
E ワセシアの花飾り	
名前	カルマン
種族	ヒューマン
性別	男
年齢	16
階級	パーシオン兵士
戦闘	650
装備	
E 鋼の剣	
E 戦闘用防護服	

17 遙かな北を目指して

ティーダ、ソリディア、ティオ、カルマンがパーシオンを出発して一日。

出発した時は正午を過ぎていた為、一回野宿してから再び歩き出している。最も男連中は野宿に抵抗は無かったようだが、年頃で女性のティオにとっては、野宿というのは嫌なものである。ティオの野宿は、これが初めてではないが、それでもやはり慣れないものだった。

ティーダは前を歩き、ソリディアはティオを護衛する形であり、その後ろから後衛としてカルマンが歩く。ティーダのアルティロイドとしての強さは、ソリディアが知っている為に、城国軍に見つかっても全滅はあり得ないと判断している。だが問題はそれに限らず、もしもティオに流れ弾が当たっても大変なので、やはりある程度の陣形を保ったままの進行となる。

それだけではなく、ソリディアには一つの欲もある。それはカルマンに実戦経験などを積ませる事である。陣形を保って歩くだけでも、その緊張感を体験させられる為、この進行の仕方は無駄にはならない。

「何だか、申し訳なく思います。私一人の為に、ティーダやカルマン君、それに兵士長まで巻き込んでしまっ……」

「何も気にする必要はないよ。これが私達の仕事でもあるのだからね。……それにシュネリ湖周辺のレジスタンスに顔合わせができれば、戦力も広がり城国軍との戦いを、有利に進めていけるといった利点もある」

「……早く、そんな事を考えないで済む世界になってくれれば良いですね……」

ティオは心底悲しそうな表情で言う。それは地上に住む者の願いでもある。

「 そうだね。その為にどうするべきなのか、私達は日々模索していかねばならない」

このようにティオとソリディアが、普通に話をしていられるのは、前と後ろを、ティーダとカルマンが守備していてくれるという事がある。

だがやはりソリディアは、カルマンの事が気になっていた。気迫はあるのだが、体がついてこないというのが、明確にわかってしまう。カルマンはパーシオンから外には出た事があまり無い。出たとしても、本当の近場程度であり、未開の地を歩くのはこれが初めてである。全てが初めての事だらけで緊張しているのだ。

ソリディアはカルマンを、手招きして呼び寄せる。それを見たカルマンは小走りで、ソリディアに接近していく。

「どうした、やはり怖いかね？」

「い、いえ、そんな事はありません！」

ソリディアはカルマンの事を考え、ティオには聞こえないように小声で話をする。間近で聞いたカルマンの声は、普通に聞けばいつも通りだが、やはり声色がどこか震えている。

「そうかそうか。……だが無理はするな、戦場で無理は禁物だぞ。今は戦力的にも余裕がある。自分の判断で引く事も大切なのだ、わかったな？」

「はいっ！……でも自分は大丈夫であります」

そこまででもないが、やはりカルマンは無理をしている。これでは緊張による体力消耗も激しいだろう。ティオもよく眠れなかった影響と、新しい地を歩く緊張が見える。ティオとカルマンは、体力的に長くは保たない、ソリディアはそう判断する。

後衛に戻ろうとするカルマンを呼び止め、今度はソリディア自身がティーダの元へと向かう。

「 ティーダ」

「どうしたんだ、アンタが陣形を乱すなんて？」

ティオとカルマンに比べ、ティーダは冷静沈着。体力の消耗も、

精神的な緊張も見られない。

「いや、ティオとカルマンに疲れが見えていてね。念の為にティードの様子も見に来た、というわけだ」

「……なるほど。だが俺にはまだ休憩は必要無い。それに休憩が必要なのはアンタも同じ事なんじゃないか？」

ティードはソリディアの心境を言い当てた。事実、ソリディアは悪性の病による、ここ最近の体力低下が著しかったのだ。顔には出さないが、心身ともに相当な消耗をしている。

（全く、ティードにはいつも嘘を見抜かれてしまうな。ここはティードに甘えるべきか）

「決心はついたか？ なら休んでいる、俺はもう少し先まで下見に行く」

「あ、ああ、そうだな。では宜しく頼むよ」

「任せておけ」

そう言うつとティードは、あつという間に遙か先の方まで進んでいく。こういう小さな動作の一つ一つから、生身の人間とアルティロイドの性能差を思い知らされる。

しばらくソリディアが立ちすくんでいると、後方からティオとカルマンが追いつく。

「ティード、どうかしたんですか？」

「どうもしないさ、私達は一度ここで休もう」

ソリディアが座り込むと、ティオも同じくその場に座る。

「ティードの野郎は更に先に行っただんですか！？ ……なら俺も！」

「やめておきなさい、カルマン。今は我々の体力を、少しでも回復する事が最優先だ。それができなければ、先に安全確認をしてきているティードに申し訳ないぞ！」

「そ、そうですね、でもっ！」

「……やれやれ。ならば休憩が終わったらカルマンに活躍してもらおうか」

この一言で、カルマンの説得は一発で終わる。最もこのパーティ

に中では、カルマンの疲労が一番高かった為、この休憩中にカルマンは一瞬ながら、うたた寝をする。

現在歩いている場所は、サルバナ森林地帯ほどのものではないが、鬱蒼と草木が生い茂る森の中である。全てを見たわけではないが、極端に言う事はできないが、パーシオン周辺は緑が少ない。北に向かっている事もあつてか、進む毎に風が冷たくなっていく。

ティータは最低限の速度と、最大に気配を殺して、辺りをくまなく調べている。ソリディア達を休ませた場所から約百メートル。この距離内では城国軍の気配はおるか、人の気配さえ感じられない。一体どの程度進んだのかもわからないが、シュネリ湖を指すと少しの間だが、城国シャングリキングダムの近辺を通過する事になる為、並の人間はまず通らない地帯な事には変わりないだろう。

少し高く飛び、目隠しになっていた木を避け、城国の位置を見る。雲より高くそびえ立つ程に大きな、城国が、まだ若干ながら小さく見えるという事は、シュネリ湖までまだまだ歩かなければならないという事である。

「俺一人で行ければ、半日足らずで行けるのにな」

あまりの進行の遅さに、ティータは一人で愚痴を漏らす。

あと五百メートル程の距離を見てみようと思い、ほとんど一足飛びで辺りの警戒をする。あと数メートルで警戒範囲も終わるだろうというその時、城国軍の兵士の小隊を発見する。その進行方向は、真っ直ぐにティータを指している。つまりはこのまま歩かれれば、必然的にソリディア達と遭遇する事になる。

（敵の数は五人。 どうする殺るべきか）

城国軍の兵士を五人殺す事など、ティータにとっては造作もない事である。だがもしも、この近辺に城国軍の兵士達の攻略拠点があり、増援を出されても厄介な事になると判断する。

更に城国はアルティロイドにとつては近い位置にある為、もしも増援でジューク、あるいはデュアリスを出されてしまつては、ソリ

ディア達を守るところの話ではなくなってしまう。

だが結局はこのまま行けば、戦闘になる事は変わらないと判断し、多少強引ではあるが小隊の兵士を全て殺した後、ソリディア達を連れて急いでこの近辺から離れる事にする。

(そうと決まればさっさと動くか……)

ティーダは正に電光石火の速さで、城国軍の小隊へ向かっていく。音も感じさせない速度で一気に接近し、一番手前にいた兵士をヴエルデフレインを用いて斬る。城国軍お手製の鋼鉄の鎧でさえも、アルティロイドの力と、オリハルコンの剣の斬れ味をもってすれば、紙くずのように鋼を斬り裂ける。

左肩口から右脇腹にかけて走る剣線。体が斜めに真っ二つにされ斬り飛ばされる。その相手は最後の断末魔を叫ぶ暇も無い。瞬きした瞬間には、天に召されているからだ。

「な、何だ、お前は!？」

残った兵士は四人。その四人が同じタイミングで剣を抜き構える。「……こいつは、まさか噂に聞くシークレットウェポンか……。容姿から推測するに、抜け出した火の騎士ティーダ、か」

小隊長らしき人物は、自身の頭の中の情報と、目の前にいる人物の情報を照らし合わせる。下っ端にはアルティロイドの存在は知らされていまいようである。それどころ隊長格の兵士でさえシークレットウェポン秘密兵器としか知らされていないように見える。

(つまりはアルティロイドという言葉を知っているのは、城国軍の中でも限られた人間しか知らないという事か)

どうでも良い情報だが、城国軍の人間は全員がアルティロイドの事を知っていると思っていた。

「……まあ、俺の名前を知っている奴がいるなら、別に挨拶はいらないよな? 最も挨拶する前に、お前等には死んでもらうけどな」
「ふざけんなあ!」

ティーダの発言に、短気な一人の兵士が、剣を振り上げ向かってくる。顔の造形もどこか短気である。

兵士が真上から真下に向け、剣を振り下ろす。それに合わせてティードは左から右に、真横に剣を走らせる。たったそれだけで兵士の体と剣は、上と下に別れてしまう。斬った位置が心臓に近かった為か、その兵士からは大量の鮮血を飛び散らせる。

「な、あいつ、今何をしたんだ!？」

「……ただ剣を横に振っただけだ。な、なのに、何であんなに呆気なく……!」

残る兵士は三人。内二人は今の光景を見て、完全に腰砕けになってしまっている。それでも姿勢を崩さないのは小隊長の男のみである。

「聞く話によると、シークレットウェポンの強さは、我々人間では手も足も出ないらしい。遙か南の地を攻めた俺の友人から聞いた情報だ。……つまり火の騎士に狙いをつけられた時点で、俺達の命は無駄という事だな」

「そういう事だ。アンタは話が早くて助かるな」

「……無駄だとわかって聞くが、後ろの二人は見逃してはもらえんか? これでもまだ若い兵士なんだ」

小隊長の男が言うように、後ろで震えている二人はまだ若い。恐らくティードとそう変わらぬ年齢だろう。

「そいつらを逃がしたら、恐らくここに仲間を呼ぶだろう。だからそれはできない、お前達はここで殺す」

「……そうだろうな。俺がお前の立場でもそうする」

「悪いな。別に恨みは無いが、俺は俺で仕事があるんだ」

「構わない。城国がレジスタンスか、いずれにしろ同じ兵士だ。それはわかっているつもりさ。……俺は城国軍第十五小隊長サワマツだ。お前は?」

男はティードの事を知っている。現につい先ほど、ティードの小隊を言い当てている。だがそれが武人としての礼儀か。

「レジスタンスパーシオン所属、火の騎士ティードだ」

お互いに名乗り終わる。そしてティードとサワマツは、お互いに

持つ剣を構える。

勝負はやる前から決まっているのだ。しかしサワマツは勝つ気で、そして全力で向かってくる。

「ハアアアアアアアア！」

かけ声と共に走ってくるその動きは、一つ一つが洗練されており、ソリディアに近い人物だと感じる。サワマツは一気に接近せず、突きを主体にして一定の距離を保つ。そして距離を計り終え、一気に懐に入り鋭い斬撃を走らせる。

その斬撃をヴェルデフレインの刃そのもので防御するが、その一撃はティーダの体を痺れさせる。単純明快な腕力による衝撃ではない。その類い希なる気迫が、ティーダの体を突き抜けたのだ。

「覚悟オ！」

サワマツはそのまま力任せに剣を走らせ、一気にティーダの首を斬り飛ばそうと動く。だがティーダもその剛剣を捌き、懐に入り込みその剣を走らせる。サワマツの剣は空を斬り、ティーダの剣はサワマツを腹部から真っ二つに裂いた。上半身と下半身を斬り離されたサワマツは、倒れるというよりも、落ちるように地面に転がった。

「ガハッ！ ゲボツ、ゲボツ」

その腹部からは止まる事無く、赤い血が流れ出ている。それどころか穴という穴から血が逆流している。咳き込んでもそこから吐血という形で、血を出している。

「フ、ハハ、ハハハ」

「何が可笑しい？」

「気づか、ない、のか？ この勝負、ウツ……、俺の、勝、ち、だ……」

「何だと　！？」

気がつく、と、サワマツと一緒にいた若い兵士二人の姿が無い。恐らくはサワマツとの勝負の間に、逃げ出したのだろう。

（必要以上に気迫を全面に出していたのは、俺にあの二人が逃げていくのを悟られないようにする為か！ ……やられた）

次に見た瞬間には、サワマツは物言わぬ屍と化していた。いつから呼びに行つたのかわからないが、なるべく早くここを移動しないといけなくなつたのだ。ティーダの作戦は、この男一人にまんまと狂わされた。

「ティーダ！」

その時、後を追つてきたソリディア達が向かってくる。ソリディアは意に介さなかったが、ティオとカルマンは無惨に切り裂かれた体と、飛び散つた鮮血に気分を悪くしている。

「あまりに遅かつたから来てみたら……」

「丁度良い、増援を呼ばれた可能性が高い。出来るだけ早くここから進もう」

「そうなのか！？……よし、ティオ、カルマン、先を急ぐぞ！」

追つ手からの追撃を防ぐ為に、ティーダは一番後ろを走る。前衛にソリディアとカルマンが付き、その後方をティオが追う陣形で、一気に走り抜けていく。

その後の追撃は、偶然的とはいえソリディアの対処も良かった事もあり、微々たるもので済む。

もしもソリディア達が合流せず、呼び戻ってから走っていたら、追撃はこんなものではなかつただろう。一寸先には何が起きるのかわからないのが、実戦の恐さの一つでもある。

現に作戦としては、ティーダの力押しで全ての事が済むはずだった。しかしサワマツの命懸けの戦略により、結果はティーダ敗北の形で終わっていた。単純明快に強い者が勝つだけではないのが、本当に怖いところなのかもしれない。

「……追撃は振り切つたようだな」

ティーダとソリディアの二人で、追つ手の確認を抜きに行く。

「だ、大分寒くなってきたな……」

「そ、そうだね」

ティオとカルマンは寒そうに体を動かしている。だが実際に周り

も寒いのだろう。吐く息が白くなっている事に気がつく。

カルマンは持っていた荷物の中から、分厚い布きれを全員に配る。布きれといっても分厚い為に、寒さをかなり遮断してくれる。

「助かったぞ、カルマン」

「北というと寒いと聞いた事がありました。だから念の為にと思いで所持していました」

「良い読みだ。戦いをする上でも必要な能力となるな」

「ありがとうございます、兵士長！」

心の底から嬉しそうな表情で言うカルマン。ソリディア自身も普段の生活では見れない、カルマンの先読みという能力を、発見できた事が嬉しく思っていた。

「予想外の出来事があったが、今日は大分進んだだろう。辺りも暗くなり始めてきてる、今日の進行はここまでにしよう」

ソリディアの提案により、進行の中断が決定する。

再び追っての追撃が無いとも言えない為、睡眠を取る際は二つに分ける事にする。最初に寝るのはティータとティオ。見張りとしてソリディアとカルマンがついた。

18 神々のシユネリ湖

城国軍の追撃を振り切り、ティータ達は更に北へと進出する。辺りも暗くなり、何よりもパーティーの疲労が増している為、進行を中断し休息に入る。夜になると寒さは更に増していき、否応無しに体を寒さによる緊張状態にさせられてしまう。手もかじかんでおり、自由に指を動かす事ができなくなっている。焚き火はしているが、それでも寒さが圧倒的に上回る。

寝ている間に敵に襲われては全滅してしまうので、最初の見張りにソリディアとカルマンがつく。

「よく……ここまでがんばったな、カルマン。初めての旅路にしては上出来だぞ?」

「……ありがとうございます」

焚き火の向こう側に寝ているティータを確認する。カルマンと反対方向に体を向けている為、その顔を見る事はできない。

「……正直に言うと、凄く、怖かったんです……」

寒さではなく、恐怖で震える自分の手をカルマンは見る。いや手だけでは無い。足も、体全体が、恐怖に震える。何よりも凄惨な死体を見た。次にこうなるのは自分か、一寸先には死が待っている大地。ありありと、自分達が戦争をしているという実感を、カルマンはただ正直に感じている。

「そうか……怖かったか……」

深い息をゆつくりと吐き出し、ソリディアはそう答える。

「俺は兵士失格ですよね……。威勢だけは良いくせに、今日の戦いの場を見たら……ティオを守るどころの話では無かったです。俺は……、俺は、あの時、自分の身を守る事で精一杯でした」

その目からは自然と涙がこぼれ落ちていた。己が考えていた以上に、世界に対して無力だった。ただ怖かった。こんなはずではなかった、そんな感情がカルマンを支配し、止まる事のない涙を流させ

ている。

「怖いと感じられるのは生きている証拠だ。人はたった一つしか無い、その命を守る為に常に必至で生きているのだ。命を失う事を怖いと感じないのは、死んでいるのと一緒にだ」

「……え、あの、……ソリディア兵士長？」

涙を雑に拭き取り、ソリディアを見ると、そこには悲壮感が漂う表情があつた。

「私もな、若い頃は無茶ばっかしてたんだよ。自分が死ぬ事よりもっと多くの命を救いたい、と。……私はそんな勢いのまま戦争に参加した」

ソリディアの話に、カルマンはひたすら無言で耳を傾ける。

「結果は人にとっても言えないような恥ずかしいものだったよ。そんな威勢の良い事を言っておきながら、私は怖くて何もできなかったんだ。それに怖くて怖くて……しばらくの間は生死を考え軽く鬱にもなつた」

そんな話を笑いながら話す。まるで懐かしい昔話を、今だからできる笑い話にして話すように。

「……ソリディア兵士長が、そんな状態に！？……とても信じられない」

「はっはっは、本当の話さ。良いかカルマン、最初は誰もが怖いのだ。自分の理想とかけ離れた現実になるかもしれない、しかし諦めなければその理想はやがて現実になる。……お前は昔の私に似ている、そしてその素質は私以上に持っている。今は怖いかもしれん、しかし諦めるな、お前はいつしか私を超える戦士になる！」

「へ、兵士長！」

ソリディアのその言葉に再び涙があふれ出る。カルマンは恥も外聞も捨てて、ただ尊敬して止まないソリディアの胸で泣いた。ソリディアのような兵士になりたい、そう思い兵士に志願したカルマン。そしてもう一度カルマンは、ソリディアという男の大きさを自分なりに見出す。

自分もいつしかこんな男に、いやこの男を超える兵士になる

カルマンはその男の胸で、自分の胸にそう誓いを立てる。

「生きるよ、カルマン」

ソリディアは静かに言い放った。それはまるで父親が子供に言い聞かせるような、たくましく、そして優しい響きがある。

「さて、いつまでも泣いてはられないぞ、カルマン。……そろそろ交代の時間だ、ティードとティオを起こして交代してもらおうか？」

「あ、はいっ！」

見張り交代の時間になった為、カルマンはティードとティオを起こす。ティードは起きる事を苦としていなかったが、最近の疲れが溜まってきているティオは、意識が覚醒するまで時間がかかる。

「ではティード。見張りを任せたまそ」

「ああ、ゆっくり休め」

その言葉に甘えて、ソリディアとカルマンは眠りにつく。ティオもがんばってはいるが、座ったまま眠っている。

結局は、ティオの意識が覚醒し、目を覚ましたのは一時間程が経過してからの事である。

そんな事を気にせず、ただ無言で焚き火を見つめ、辺りの気配に神経を集中するティード。

「ご、ごめんね、見張りを任せちゃって！」

「……構わない。お前も疲れているのなら、眠っていても良いんだぞ？」

「うっん、私も守ってもらってはかりじゃ申し訳ないもん。役に立たないかもしれないけど、私にも見張りをやらせて」

「その辺は、お前の好きにしる」

素っ気なく答えたティードに対し、ティオは嬉しそうな表情をする。

またこの時、カルマンは悪いと思いつつも、ティードとティオの事が気になり眠ったふりをしていた。

（俺は卑怯者だろうか）

眠ったふりをして、二人の会話に聞き耳を立てる自分に嫌気がさしている。しかしカルマンは、どうしてもティオの事が気になっていた。

焚き火の近くにいるといっても、深夜にもなると寒さはより一層厳しいものとなる。手足を擦る事により、少しでも熱を発生させようと、ティオは落ち着かなく動いている。その小さな音が、神経を集中させているティードには鬱陶しく思う。

「ほら、これも使え」

「……え、あ、良いの？ これじゃティードが……」

「俺は大丈夫だ、必要ない」

ティードは自分の分の厚布をティオに羽織らせる。二枚もあれば寒さは軽減できるだろう。事実、二枚になって暖かくなったのか、ティオの体の震えは治まっている。

「……ありがとう」

ティオの言葉にも、ただ無言を貰いた。

「ありがとう、といえば……このワセシアの花、これ凄く嬉しい」

「……そうか」

「でも一体どうして、これを買ってくれたの？」

その問いかけに、ティードは答える事ができなかった。何故ならその答えの正体に、本人すらも気持ちの整理ができていないからだ。この会話はティードが無言のまま終わった。そんな事にも気にせず、ティオは頭に付けたワセシアの花を、嬉しそうに触っている。「そういえば、もう一度サンバナの町に行った時とかに、前に言っていた命の騎士ティアナって人は、見つかったのかな？」

「……いや、そういえば存在をすっかり忘れていたな」

ワセシアの花、サンバナで会ったラティオの事、そしてこれから向かうシュネリ湖、考える事が多すぎた為、命の騎士の事まで考える余裕が無かったのだ。

命の騎士ティアナの事に関しては、カザンタ山岳地帯、白の戦荒野にて、風の騎士ジュークから聞かされた事実である。現存する四体のアルティロイド、ジューク、ティード、デュアリス、ラティオよりも、前に造られたプロトタイプアルティロイド。自身の遺伝子を後生に残す事ができないアルティロイドの中で、唯一遺伝子を残せる機能を持つ。ただ唯一のヒントとなっているのが、無事に生きていれば現在十五、六歳になっているというぐらいの事である。

「今向かっている、シュネリ湖にその人がいれば良いね」

「それはそうだが」

（ 仮に見つけられたとして、一体どうするんだ？ それに敵になるかも、味方になるかもわからない奴だ）

そもそもシュネリ湖を目指す理由を聞かされていないティードは、一体何故ここにいるのだろうか。

これだけの長い距離を移動する上で、一つの目標が必要だと思い、ティードはとりあえず命の騎士を捜す目的で、シュネリ湖を目指す事にする。

一方、その会話に聞き耳を立てていたカルマンは、頭の中で整理がついていなかった。

（命の騎士ティアナ？ 一体二人は何の事を話しているんだ。それがティードの目的、ティオはその目的を知っているっていうのか）

混乱する頭と共に、カルマンは嫉妬していた。

二人は二人だけの秘密を共有している。自分には一切知らされていない。話してもらえない気配も無かった。ソリディア兵士長は、ある程度の事を知っているのだろうか。そんな考えがカルマンを支配する。

「あ、そろそろ夜明けだよって」

「……そうなのか、まだ辺りは暗いぞ？」

「この辺は太陽があまり当たらないんだって、だから全体的に薄暗いって」

「いきなりどうした、何故そんな事がわかる？ お前はこの周辺には初めて来るはずだろう」

ティオは一瞬躊躇ったが、覚悟を決めたのか話を始める。

「実は……私、モノの心が読めるの……」

「モノの……？」

それ程驚きはしなかったが、ティードは不思議そうに返した。

「動物、植物、その気になつたら機械とか武器とか防具とかも」

「……つまり夜明けが近い事を、周辺の動物、あるいは植物から聞いた、って事なのか？」

「そういう事だね。但し例外として人の心を聞く事はできないの。

何でかはわからないし、知りたいとも思わないかな……。やっぱり人の中には勝手に入ってはいけないものだと思うから」

「……そうだな」

別に驚く事はなかった。自身は存在そのものが違法な生命体。動物や植物の心が読める人間がいたって、ティードにとってはどうって事もない一つの事実に過ぎない。

「……驚、かな、い、の？」

ティオとしては、それなりの事実を公表したらしい。

「……別に」

もう興味は無いといった素振りです、ティードはそう返答する。

意外にも驚いてくれなかった事に、ティオは拍子抜けしてしまふ。

「しかし夜明けが近いのなら、さっさと起こして先に進もう。辺りが明るくなると、城国軍に見つかる可能性も高くなる」

「うん、そうだね！」

ティオは、ソリディアとカルマンを起こす。カルマンはいつの間にか眠っていたらしく、少しの睡眠時間の為、極悪な睡魔が襲ってくる。その点に関しては、ソリディアはさすがと言うべきである。

起こされるとすぐに目を覚まし、自身の装備を調べている。

「少々暗いが、問題な無いだろう。さあ、急ごうか」

ティード達一行は、ソリディア指揮の元、再び北のシュネリ湖を目指す。

進行状況としては概ね順調であり、この進み具合ならば、予定より早くシュネリ湖にたどり着ける可能性が高い。

それから数時間歩き続ける。寒さはそれからも酷くなり、呼吸をすると、それだけで喉や鼻が痛くなる。しかし、それは逆を言うならば、シュネリ湖が近くなっているという事でもある。

「そろそろか……。心なしか空気が非常に澄んでいる」

数々の大地を移動したソリディアは、その大地の空気の味を知っている。シュネリ湖周辺の空気は、今までの中で一番綺麗だと評価する。

「く、空気は確かに美味しいですが、……こう寒いと、本当に呼吸するのが痛いです……」

「我慢なさい、もうじき到着できると思うが……」

弱音を吐くカルマンに対し、軽く一喝するソリディア。

寒さだけが辺りを支配し続け、一向に終わる事のない森を歩く。北に進む毎に、木々は更に深く大きくなっていき、一種の威圧感さえ感じられる。ここまで来ると太陽光が全く届かない、暗闇の森と化している。

「うう……さ、寒い……」

太陽光が届かなくなった事により、気温が急激に低下する。その寒さに耐えきれずに、今まで我慢していたティオも、弱音を吐いてしまう。

「あ………！」

カルマンは小さく叫んだ。ある状況に気がついた為だ。

ティオは厚布を二枚羽織っている。この内の一枚はティードのものである。そしてカルマンも負けじと、自身の厚布を脱ぎ去り、そ

れをティオに渡す。

「ほ、ほら、よ。……」
「……、これ、でも、は、羽織れ、よ……！」

あまりの寒さでカルマンは歯を鳴らす。口周りの筋肉が硬直しているのか、思うように言葉が出てこない。

「え……でも、カルマン君……？」

「お、おお、おれ、なら、だ、大丈夫、さ！ てい、ティオツ、お、女、の、子、なんだから、暖か、く、して、ろ、よっ！」

「で、でも……」

ティーダに比べ、明らかに無理をしている事が丸見えな為、受け取るに受け取れないティオ。

そんな光景を見て、ソリディアは大きな声で笑った。

「はっはっは！ ティオ、男に二言を言わせないようにするのは、女の仕事だ。カルマンの事を想うのならば、素直に受け取っておきなさい」

ソリディアに促され、ティオはカルマンからその厚布を受け取る。

「暖かい……」

本当に暖かそうにしている、彼女のその暖かい笑みを見て、カルマンも満更ではなかった。

「……へ、へへ、へ！」

「……ド阿呆め」

引きつった笑いを浮かべるカルマンに対し、ティーダは冷静につきこみを入れる。城国軍の気配も無い為か、ティーダ達の周囲の警戒は薄れていた。

そして、次に緊張の糸が張りつめたのは、ソリディアの一声からだった。

「む、あれは、何だ！？」

ソリディアが見る方角を、全員が注目した。そこからはつつすらと一筋の光が見える。

「も、もしかして、シュネリ湖ではないですか、兵士長！」

真っ先に走り出したのは、カルマンである。

「お、おい、カルマン！ 何かあるかわからん、警戒は怠るのではない！」

それを追い、ソリディアは警戒しながら走り出す。

「……やれやれだ」

そしてそれを見て、呆れ口調のティータ。そんなティータにティオは、ゆっくりと話しかける。

「私達も行きましょう？」

「ん、ああ、そうだな」

ティオに連れられ、ティータも、前を走る三人と同じように走った。

光の開けた先には、この世界の全ての美を終結させたような美しく巨大な湖、シユネリ湖があった。森林の中とは違い、太陽光と水面の反射光が眩しい場所である。さらに湖周辺だけが、包まれるような優しい暖かさが感じられる。

「しかし、これは凄い……」

今まで見た景色を凌駕する程の美しさ、ソリディアは後にそう言葉を放つ。ラルク医師の言われた通りに、シユネリ湖の水を少量手で取り、それを口に含んでみると、まるで体の中の毒素が取り除かれたような感覚さえ覚える。

「二日とちよつとか。予定通りというか何というか……。それにシユネリ湖を発見できても、肝心なレジスタンスグループを発見せねばな……」

ソリディアは一人冷静に、今後の行動を考える。

その一方でティオとカルマンは年相応に、湖の美しさに感動していた。ティータも無表情に眺めているが、恐らくは感動をしているのだろう。

「みんな、聞いてくれるか？」

ソリディアの一声に、全員が注目する。

「シユネリ湖を発見できたわけだが、本題はこの周辺にあるレジスタンスの発見だ。そこで少し休憩した後、シユネリ湖周辺を捜索したいと思う」

「……当然だな。それで、アンタには考えはあるのか？」

「うむ、捜索するのは私とティータ、それにカルマンで行く。ティータとカルマンは一緒に行動をしてくれ」

ソリディアに呼ばれなかったティオは、申し訳なさそうに言葉をかける。

「あの……私は……？」

ティオの問いかけに、ソリディアは小声で返事をする。

「男連中はこの周辺を離れる。この湖は思いの外暖かい。二日間
の野宿があったのだ、今の内に水浴びでも済ませておきなさい」

「そんな……良いんですか、私だけ……」

優しく笑い、深く頷いたソリディア。そのソリディアの表情を確認すると、ティオは小さな歓喜の表情を見せる。

「では男連中はもう少しがんばるぞ！」

「はいっ！」

「……ああ」

こうしてティータ、ソリディア、カルマンは、この周辺にあるというレジスタンスベースを探索する事にする。

一方、ティオはソリディアの計らいもあり、このシユネリ湖に待機する事になった。そしてティオは、この湖にて、一人の少女と出会った事になる。

19 親友と戦友と

ティード達は探索に出る。ティードとカルマンは西へ、ソリアは東を探しに行く。

近辺に三人がいなくなつたのを確認すると、ティオはゆっくりと湖の水を手に触れさせてみる。

「ソリア兵士長は、意外と暖かいと言っていたけど……うう、やっぱり冷たい。確かに外の気温に比べて、水は温かいけど、それでも完全に水の中に入ったら風邪をひいちゃうよ……」

水浴びは断念し、ティオは持ち物の中から手拭いを取り出し、それを水に濡らし全身を拭いていく。

「こつするだけでも、全然違うもんね！」

一通り自分の体を拭き終わると、清々しい気分になる。ティオは湖の畔ほとりに腰掛け、水に足をつけながらティード達の帰りを待つ。

シュネリ湖の水は、透き通るような青である。ただ眺めているだけでも、その目を釘付けにされてしまう。

「それにしても広いなあ、一体どこまで続いているんだろう？」

一人そんな事を喋りながら、水面を眺めていると、突然その水面が揺れ、そこから一人の少女が現れる。

「……はあ！」

少女はティオに気づいていない。今まで湖で泳いでいたのだろうか、気持ちよさそうな溜息を吐く。

「だ、誰!？」

黙っただけかと思つたが、咄嗟にティオは目の前の少女に話しかけていた。話しかけられた少女は、とても水上にいるとは思えない動きで、ティオの方を向き、その湖と同じような綺麗な青い髪を振り乱しながら、険しい表情でティオを睨んだ。

「……女の子？」

「えっ!？」

お互いに、その姿を確認すると呆気にとられてしまう。お互いが自分と同じぐらいの年頃の、一人の少女だったからである。

「ま、待って、私は武器とかは持ってないよ！」

ティオは咄差に言葉を出して、手をぶらつかせて、敵意が無い事を示す。

「貴方……地上の人、レジスタンス？」

「え、ええ、この辺の人間ではないけど……一応レジスタンスです」少女は警戒心を解かず、ゆっくりとティオに近づいていく。

ティオも高く手を挙げ、戦う意志が無い事を、強調する。そして少女の目を真つ直ぐに見つめた。

「……不思議な感覚。貴方を見てると、何かに包まれるような、優しい感覚を覚える……」

「えっ……!？」

少女は湖から上がり、その美しき体を露あらわにする。下着だけで泳いでいたのか、目立った装備は、見つからない。耳に付けている、少女の髪と同じ、綺麗な青をしたピアスが特徴的である。

「先に言っておきます。私は城国軍の兵士です……」

少女はゆっくりと、その言葉を出した。これに対して、身構えたのはティオだ。

「うふふ……心配しないでください。城国軍ですけど、私は元々戦いは好みません。それに格好を見てもらえればわかりますけど、ほぼ丸腰です」

今度は少女が、ティオと同じように、敵意が無いという風に、手を振った。

「私はデュアリスです。貴方は？」

「あ、私はティオ。ごめんなさい、勝手な偏見かもしれないけど、城国軍の人は襲ってくる印象しかなくて……」

「……否定は、できませんね。それに私も、地上にいる人間は、大地を汚染するゴミだとばかり教育されてきましたから……。でも一目見ただけで、おかしな話かもしれないですけど、私はティオさん

を見て、とてもそんな人には見えません」

これがティオとデュアリスの、お互いを見た際の意見。身構えていたティオだが、デュアリスのその穏やかな物腰に、いつの間にか警戒が解かれていた。

「……綺麗な花。何という花ですか？」

デュアリスは、ティオの頭に付けられたワセシアの花を見る。

「あ、これは、ワセシアの花っていうの。地上では稀少な花だけど、割と知られてる花なんだよ」

「そうなんですか、城国では見られない花……。とても似合ってるよ、ティオさん」

「ありがとう。それと私の事はティオで良いよ、デュアリスさん」

「わかりました。では……。ティオ、私の事もデュアリスで良いです」

「じゃあ……。デュアリス……。さ、ん」

ティオの反応に、デュアリスは優しく笑う。それにつられてティオも、恥ずかしげに笑った。

「うふふ、急には無理でしたか？」

「うん……。何でだろう？ デュアリスさんの方が年上っぽいからかなあ」

「そうかしら？ 私は同じ年だと思えますけど……。私は十五歳」

「……。あれ、同じだ、私も十五歳」

「ほら、同じ年です」

絶えず朗らかに笑うデュアリスに、ティオもその笑顔に惹かれていた。その物腰の柔らかさが、ティオに年上と錯覚させたものである。

「同じ年、か。……。では、デュアリス、ちゃん」

「デュアリス、ちゃん？」

「ごめんね。私にはこれが限界かも、もしも嫌だったら止めるよ？」

デュアリスはそれに対して、首を横に振る。

「ううん、とつても嬉しいです。では私はティオ。ティオはデュアリスちゃん。これで決定です」

二人はレジスタンスと城国軍。そんな事に関係なく笑い合った。お互いが持っていた偏見も、話し合っている内に全く感じなくなっていたのだ。

それから湖に畔に腰掛け、二人は同じ歳同士という事もあり、話を弾ませる。お互いが近い歳の、女友達というものが初めてできたのだ。それ故に普通ではどうでも良いような、他愛もない話をした。

「そういえばティオのポニーテールは可愛いね」

「え、ポニーテール？」

「うん、ほら髪型の事です」

デュアリスは、ティオの髪型を指す。

「ポニーテールなの？ 馬の尻尾じゃなくて？」

「馬の尻尾？ 地上ではそう呼ぶのですか？」

「うん、私達は馬の尻尾って呼んでるよ。城国ではポニーテールっていうんだね。……何だかそっちの方が可愛いなあ」

「馬の尻尾、も、何とか奇抜ですよね？」

「デュアリスちゃん、それフォローになってないよ……」

「うふふ、ごめんなさいね」

再びデュアリスが、ティオのポニーテールを見ると、ティオがポニーテールを形成する為の、アイテムである「赤いゴム紐」が目に入る。

「……その紐、凄く綺麗な赤をしていますね」

「これね、私もお気に入りの赤なんだ。……デュアリスちゃんの耳に付けてる青いピアスも、凄く綺麗だよ」

「そう、かな？ ……ねえ、もし良かったらなんですけど……」

「このゴム紐と、そのピアスを、交換？」

「はい、どうぞでしょう？」

ティオは少し考えた後、その答えを出した。

「うん良いよ、これは私とデュアリスちゃんの友達の印、ね！」

髪を束ねていた赤いゴム紐を、ティオは外す。今までポニーテール

ルで纏められていた、テイオの肩よりも少し長い、桃色の髪が下ろされる。同じく、デュアリスも両耳に付けられていたピアスの内、左耳のピアスを外す。

「ピアスの付け方、わかりますか？」

「全然わからないよ……。一回も付けた事が無いんだもん」

「付けてあげます。このピアスは穴を開けなくても付けられるものです」

デュアリスは優しく微笑しながら、そのピアスをテイオの左耳に付ける。

「……う、ん。耳に付いてるのはわかるけど、自分で見れないからよくわからないね」

「凄く可愛いよ、テイオ」

「ありがとうね。今度は私がデュアリスちゃんの髪を結んであげるね」

テイオ程ではないが、セミロングのデュアリスの髪を結ぶ。

「馬の尻尾でお願いしますね？」

「了解、任せて！」

手慣れた手つきで、デュアリスの髪型を馬の尻尾にしていく。美しいデュアリスの青い髪に、赤いゴム紐が目立つ。

「これも私にはどんな風になっているのか、わかりませんねえ」

「大丈夫、とつても似合ってるよ」

「ありがとうございます」

一通り笑い合った後、一呼吸置いてデュアリスが話し始める。

「……こうやって、城国もレジスタンスも無く、お互いが笑いあえる世界ができれば良いのですけれどね……」

「デュアリスちゃん……？ うん、そうだね。私達は立場上敵同士なのかもしれないけど、お互いにこうやって平和を望んでいる人がいるってわかった。それだけでも凄い事だよな？」

「……テイオ。はい、その通りです」

「デュアリスちゃん！ 私達がかんばって良い方向に持って行ける

ように、がんばっていきましょうよ！ 今は……今は、小さな存在なのかもしれないけど、諦めずに平和に向けて戦っていきましょう！」

ティオの言葉に、デュアリスも同意を示す。小さな二人が、小さな誓いをした。お互いに違う条件下で、同じゴールを目指す為に。

その時、空に乾いた空砲の音が響いた。レジスタンスのものなのか、城国のものなのか、小さな発砲音は、シュネリ湖にいるティオ達でさえ僅かに聞こえる程度のものである。

「な、何だろう、今の音は……？」

「……ごめんね、ティオ。私はもう行かなければいけません」

その言葉を聞き、咄嗟にティオはデュアリスが、軍人なのだという事に気づく。デュアリスは来た道に戻るように、湖の中に入り込む。

「ティオ……」

「どうしたの、デュアリスちゃん？」

「この赤いゴム紐……絶対に大切にする！」

「デュアリスちゃん……。私も、私もこの青いピアスを絶対に大切にすることから、この青いピアスと、その赤いゴム紐が、私とデュアリスちゃんが再会する時の、巡り会う為のアイテムだよ！」

「……うん、うんっ。……ティオ、私達はまだ短い付き合いかもしれないけど、友達だよな？」

「そうだよ、私達は友達っ！ 世界が平和になって、戦争が終わったら、私達のもつと沢山の話をして、沢山遊ぶんだよ……！」

ティオもデュアリスも、いつの間にかに涙が流れていた。デュアリスは、ティオの言葉に静かに頷くと、その清蒼の湖へと姿を消した。そこに残ったのは、デュアリスの残り香と、清らかに青く光るピアスだけであった。

時は少し戻り、シュネリ湖近辺にあるというレジスタンスグループを探す為、ソリディアは一人、鬱蒼と生い茂る森林を歩いて

いる。

（……ふむ、なかなか見当たらん。ここは一回テイオの元へと戻すべきか）

探し始めて数十分は経過した。探索範囲も時間の割には、広範囲にわたって探したつもりだが、一向に見つかる気配は無い。

（そういえばティードとカルマンは大丈夫だろうか。腕に心配はないが、喧嘩などしていなければ良いが……）

集中力も途切れてきて、考え事をしているソリディアは、遙か前方の方に人影を発見する。森の中が薄暗く、尚かつ距離が遠い事もあり、その人影がティードとカルマンのものなのか、レジスタンスのものなのか、最悪の場合は城国軍の兵士という可能性もある。

（いやティードとカルマンは無いな。人影は一人、いくら喧嘩が絶えない二人でも、まさか別々に行動するような馬鹿な真似はすまい……）

草むらと木を利用し、身を隠しながら近づいてくる人物の確認をする。少しずつ見えてきたその人影は、城国軍の鋼鉄の鎧を装備しているようだった。

「ちいつ……！」

望まぬ存在に、知らずの内に舌打ちをする。戦いを避ける事は可能だが、レジスタンスの探索という目的がある手前、城国軍の兵士に彷徨うろたかれると、厄介な事にも変わりはない。ソリディアは武士道には反すると思いつつも、奇襲をかけ、この兵士を一瞬で殺す事を考える。

そのまま息を潜め、城国軍兵士が自分の間合いへ入り込むのを待つ。そして間合いに入り込むと、一気に動き出し、防御の甘い首を一瞬で刈る為に力を一点に注ぎ込む。

「いやあああああ！」

「な、何だあ!？」

ここで一つの誤算が生じてしまった。奇襲をかけたソリディアの一撃に、この兵士は反応し、攻撃を受け止められてしまったのだ。

城国軍兵士は、このソリディアの攻撃を弾き返し、間合いを一気に離した。

「くっ、そ、まさかな……」

病魔が自分の体を蝕んでいた為か、ソリディアの体は思った以上に動けなくなっていた。

「おいおい、待ちなさんなって……。まったく穏やかじゃねえなあ」

「……む、まさか、その声は……?」

その城国軍兵士の声に、ソリディアは聞き覚えがあったのだ。

「……お前、まさかクリムか!？」

「……へっ!? ……あれ、お前さんよく見たらソリディアじゃねえか? 何でお前がこんな辺境の地にいるんだよ」

「……は、はっはっは、危ない所だった。私は危うく昔の戦友を手にかけてしまいそうだった……」

その場に崩れ落ちるように、力無く笑うソリディア。

「はっはっは、じゃねえよ、ったく……。それに腕が鈍ったんじゃねえか? あんな程度の斬撃じゃ、ガキも殺せねえ」

クリムという男は、悪態をつくように言い放つと、剣を納めソリディアの元へと歩んでいく。クリムは、かつての大戦時に、ソリディアとバースの二人と共に戦った戦友である。

「そう言うな……。うっ、ゴホッ、ゴホッ!」

ソリディアは咳と共に、初めて吐血した。それを見たクリムは慌てて、ソリディアに駆け寄っていく。

「お、おい、お前どこか怪我でもしてんのか!？」

「……いや、悪性の病魔に冒されているらしくてな。もう長くはないと診断されている」

「悪性の病魔……。あとどれぐらいなんだ?」

「長くて一年、早いと半年、あるいはもうちょっと早いかな……」

「そう、か……。気の早い話だが、また一人戦友を失っていく事になるとはな……」

「馬鹿者、少しは病人の気も考えてくれ、昔から配慮が足りないの

は相変わらずだな」

「馬鹿野郎、それが俺の良いとこだろっが」

クリムは軽く笑うと、ソリディアを安全な場所まで誘導していく。木を支えにする事により、ソリディアは幾分か楽になる。

「……まあこの際、お前がどうしてここにいるのかは聞かない。それよりもだ、もしかしたらもうじき、城国へ直接攻撃をかけられるタイミングが来るかもしれねえ」

「……何、それはどういう事だ？」

「今、城の中は微妙に荒れているんだ。簡単な話、兵士の士気が纏まっていない混乱状態になっている。理由は簡単だ。俺が内部を乱しているからな」

「それは良いが、仮に内部事情が乱れても、外にいる我々には攻め時が全くわからぬのだぞ？」

「それは大丈夫だ、ほらよ！」

クリムは小さな黒い物体を、ソリディアに手渡す。

「これは？」

「無線機と呼ばれるものだ。城国の中では割とポピュラーなアイテムなんだが、地上の文明はそこまで発展していないようだ。これは離れた相手とでも連絡が取り合えるアイテムなんだ」

「離れた相手とでも……？ 凄いいアイテムじゃないか」

「だろ？ 但し永久に使える物ではないからな、無駄な連絡を取り合っていたらすぐに使えなくなる。だからこれを使うタイミングは、俺が攻め時だと判断した時だ」

「……ふむ。お前の合図があるまで、私は地上で軍力を備えろ、という事だな」

「そういう事だ。俺の掴んだ情報によると、シークレットウェポンでもある火の騎士ティードが、レジスタンスの仲間になっているはずだ、そいつを捜し出し、タイミングさえ完璧なら一気に攻め落とせる！ そうなれば城国の支配の歴史は終わるんだ！」

少しの間を置いて、ソリディアは口を開く。

「……そう上手くいくものだろうか」

「上手くいかせるんだよ！ 俺達は何の為に、こんな無駄な戦いをしているんだ。終わらせて平和にする為だろう。勝機と見たら一気に攻める、戦いの基本だぜ？」

再びソリディアが口を開こうとした時、一発の空砲音が空に響き渡る。

「……敵か！」

「いや、俺の所属している軍のものだ。俺は今、この周辺に攻撃をかけている、水氷の騎士デュアリスの指揮する部隊に配属されているんだ」

「水氷の騎士デュアリス……？」

「そう、火の騎士ティータと同じ、シークレットウエポンド。最も女の子で可愛いもんだがな。しかし戦闘力に関しては、人間で勝てる範囲のレベルじゃねえ。情報によるとデュアリスはシークレットウエポンの中では最弱らしいが、それでも人間を殺す分には問題ない戦闘力を有しているからな」

考え込むソリディアに、クリムは続けて言う。

「とりあえず死にたくなかったら、すぐにここから離れるんだ。戦場で会つちまったら、俺とお前は戦わないといけなくなる。もしも体調が悪いのなら、ここから少し西に行けば、レジスタンスの集落がある。そこで休んでとっとと離れるんだ、良いな！」

クリムは捲し立てるように、言葉を出し切ると、ソリディアを置いて走り去っていく。空砲が呼び出しの信号だと判断したソリディアは、特に止める事もせず、クリムの背中を見送った。

「……お前も死ぬなよ、クリム」

渡された無線機を握りしめ、ソリディアは、戦友クリムを案じた。

19 親友と戦友と（後書き）

名前 ティオ

種族 ヒューマン

性別 女

年齢 15

階級 一般

戦闘 100

装備

Eワセシアの花飾り

Eデュアリスのピアス

名前 デュアリス

種族 アルティロイド

性別 女

年齢 15

階級 水氷の騎士

戦闘 ????

装備

E赤いゴム紐

ティオ& amp ;デュアリス

赤いゴム紐と青いピアスを交換。

ソリディア

クリムよりボタン型無線機を入手。

20 ザードリフのリコオ

突然鳴り響いた空砲音を聞き、ティードとカルマンは、互いに顔を見合わせる。周囲を警戒し、一人身構えるカルマンに対し、特に気にする素振りも見せないティード。

「お、おい、一度ティオのいる所に戻った方が良いんじゃないか！」
必要以上に大きな声で、ティードに呼びかける。

（今の空砲、かなり遠い位置からのものだ。方角の聞き取りは難しいが、恐らくは東からか……）

ティードは冷静に、空砲を解析している。

「おいっ！」

「……やれやれ。少しは落ち着け、静かにしろ！ そんな大声で騒いでいたら敵に見つかるだろ？」

「もしかしたら、ティオが危険な目にあってるかもしれないんだぞ。何でそんなに落ち着いていられるんだよっ！」

必要以上に騒ぐカルマンと、必要以上に冷静なティード。最も反対する理由も無い為、ティードはカルマンに合わせようと考える。

「そうだな、とりあえずシュネリ湖に戻ろう。ティオの安全確保と同時に、ソリディアの指示を仰ぐ」

「よし、そうしよう。……それとソリディア兵士長の事は、ソリディア兵士長と呼べ。呼び捨てにするな！」

「急ぐんだらう？ いちいち細かい事に気を取られるな」

ティードは、カルマンにも追いつける程度の速さで走り始める。その後も文句を言いながらも、カルマンはティードに続き、二人はシュネリ湖に戻っていく。警戒しながら探索した行き道と違い、目的地がはつきりとして、急ぎ足で戻る帰り道の方が、時間は大してかからなかった。

シュネリ湖に二人が戻ると、元いた場所にティオが待機している。この時も、カルマンは急ぎ足でティオの無事を確認し、ティ

「イーダはテイオを視認するとゆつくりと歩き始める。」

「だ、大丈夫だったか、テイオ!? 怪我は無い?」

「うん、全然平気だよ。カルマン君達こそ無事だった?」

この場にはいないのはソリディア。ティーダは付近にソリディアの気配を捜すと同時に、ふとテイオが視界に入る。

(……紐で結んでいない? 無くした……いや、まさかそんなはずは無い。あいつは赤い紐を何よりも大切にしていたはずだ)

「おい、テイ……」

「あれ、いつも馬の尻尾に束ねてたのに、一体どうしたのさ!？」

ティーダが聞くよりも少し早く、カルマンは全く同じ内容を問いただしている。同じ事を聞く必要は無いと思い、ティーダは静かに口を閉じる。

「……あ、うん、ちょっとね。待ってる間に友達になった綺麗な友達にあげたんだ」

「綺麗な、友達?」

「う、ん、ほら動物、凄く可愛い動物に付けてあげたんだよ!」

テイオは嘘をついた。デュアリスの存在を、ティーダとカルマンに知られては、まずいと判断したからだ。城国軍のデュアリスの存在を知られてしまったら、必要以上の警戒をする事になってしまう上に、もしかしたら、戦わなくてはいけないかもしれないなくなってしまう。テイオとしては、できるだけ避けたい未来である。

(動物。嘘だな、実際この周辺には、動物らしい動物が見られなかった。それに……)

これも言葉に出さなかったが、ティーダはテイオの左耳に付いているピアスを見る。

(あのピアスは……デュアリスのものだ。何故テイオが持っている? 答えは簡単だ、テイオとデュアリスは、俺達がない間に接触したからだ。……だが仮にデュアリスならば都合だ、あいつは戦いと殺しを心底好まない。現にテイオが無事なもの、あいつのおかげと言っても良い)

ティードはティオの嘘を瞬時に見抜く。だが出会った相手が、非常に恵まれている事もあり、ここはあえて相手にせず、無視をする事が最良だとティードは判断する。

「全員無事か!? 何事も無くて良かった、さっきの空砲を聞いて急いで戻ってきたのだが……」

やや疲れた表情のソリディアが、遅れて姿を現す。目に見えた疲労がある為、三人はあえて心配の言葉をかけずに、その事に関しては流すようにする。

「周辺のレジスタンスの位置がわかったぞ。さっきの空砲も怪しいが、今は周辺のレジスタンスと合流し、その先の行動はそれから決めていこう」

再び、ソリディア指揮の下で、シュネリ湖近辺のレジスタンスを探す事になる。

ソリディアの戦友であるクリムが言うには、レジスタンスベースは西の方角にある。西の方角はティードとカルマンが搜索していたので、更に西か、あるいは南西か北西という事になる。

だがソリディアは東といっても、東南の方へ向かっているところにクリムと出会った。その位置から西に向かった場所と指示された為、南西に向かう事が確率的には高いと判断する。

ソリディアの読みは的中し、シュネリ湖から南西に向かった所に、レジスタンス集落はあった。

「油断はするな。レジスタンスといっても、中には仲間意識の無い連中もいる。そうなったら突然攻撃してくる場合もあるからな」

「そんな連中がいるんですか、兵士長!？」

ソリディアの言葉を、問いたしたのはカルマンだ。

レジスタンスは仲間意識が強いという、先入観があった為、カルマン、そしてティオも驚いている。

「まあな、全員が全員、仲間意識が強いわけでもないさ。それこそ

人それぞれ、レジスタンスそれぞれの考えや、そこに至る歩みがあったのだから……。誰もそれを否定する事はできませんよ」

「でも……。一緒に地上で暮らし、一緒に戦っていかないといけないからこそ、私はできる事なら一緒に手を取り合っていきたいと思えます……」

「ふふふ、そうだな」

ソリディアは優しく笑うと、ティオの頭にその大きな手を乗せ撫でた。どこか恥ずかしいような、くすぐったい表情で、その行為を受ける。

レジスタンスベースの大きさは、外見上はパーシオンと大差はないようにも見える。そうなると具体的な兵士も数も、多いとはいえないところだろう。

「……君、すまんが……」

ソリディアは一人、そのレジスタンスに近づき、見張りの兵士と話をしている。穏やかに話をしていると、話自体は順調に進んでいるようである。

「せっかくここまで来たんだから、ベース内に入れてもらえるといいね」

「どうだろうなあ、やっぱり見えず知らずの人間を内部に入れるのは、少しくらい抵抗があるだろうしな」

「うん、そうだろうけど……」

待っている間に、ティオとカルマンは適当な事を喋っている。ティオは城国軍の兵士の気配を、探り続けている。

すると、ソリディアの呼ぶ声がした為に、三人は走ってレジスタンスの出入り口へと走っていく。出迎えたのは、元々いた見張り兵と、ソリディアと同じぐらいの年齢の兵士長である。

「自分がこのレジスタンスベース『ザードリブ』の兵士長、ラックだ。遙々遠い場所からよく来てくれた……。というべきか。今は少しタイミングが悪かったようだ」

ザードリブのラック兵士長は、歓迎したいのは山々だが、といっ

た感じで話を続ける。

「今は城国軍が攻めてきていてね。どうやら狙いはシュネリ湖の統治らしく、その為に我々のような近辺に住んでいるレジスタンスを、根絶やしにしようとして侵攻している」

驚くティオとカルマンに対して、それぞれの解釈があったものの、ティーダとソリディアは冷静だった。ソリディアはクリムからの情報。ティーダは、ティオのピアスからデュアリスの存在を察知した為だ。

「都合の良い話だが、もし宜しければ我々に貴方達の力を貸していただきたいのだが……。勿論だが強制はしないつもりだ」

そのラック兵士長の申し出に、ソリディアが答える。

「それは我々も同じレジスタンスとして協力したいな。しかし申し訳ない話だが、我々は我々のすべき事がある。その事を終わらせたら、すぐに戻るつもりなのだ」

「そうか……。仕方がない事だな。貴方達には貴方達の帰る場所もある事だ。そうすべきだ……」

「だが、もしもだ。もしも我々の事が終わる前に城国軍との攻防になってしまった時は、それ相応に協力はさせていただきたいと思う」
ソリディアの返答に、ラック兵士長は嬉しそうに答える。

「ありがとうございます、十分すぎる言葉です。さあ立ち話も過ぎました、どうぞお連れの方も中へ入ってください」

ラック兵士長の先導により、ティーダ達はザードリブのベース内を進む。

外観はパーシオンと同じぐらいと感じられたが、内部に入ってみると、パーシオンよりもやや小さな印象を受ける。城国軍の侵攻が激しさを増している為か、そこに暮らす人々には活気はなく、最低限の緊張感が支配している。

「客人用のテントです。少々狭いですが……」

ラック兵士長はそう言ったものの、中は思った以上に広く、そして綺麗だった。そこに荷物を置き、ひとまず休息を取らせてもらう。

「……ソリディアさん、ティオさん、ちょっと良いですか？」
ラック兵士長に呼び出され、ソリディアとティオはテントの外へと出る。

「お話は聞きました、この北の地を代表する医者をお捜しとか……？」

「うむ、どこか心当たりは無いですか？」

「心当たりも何も、その医者はこのザードリブにいます。名はリコオ。あの兵士テントとなっている大きなテントのすぐ隣にある、小さな白いテントがそうです」

ラック兵士長が指差した場所には、確かに大きなテントと、その隣には小さな白いテントがある。中でも目を惹くのは、白のテントには目立つ赤十字である。

「迷惑がかからない程度でしたら、中は自由に見て回っていただいても構わないです」

「ありがとうございます」

「あ、それとソリディアさん」

突然の呼びかけに、疑問の表情でラック兵士長を見る。

「もし宜しければ、リコオの用件が済みましたら、一度兵士用のテントに寄ってはいただけなんでしょうか？ 貴方の戦略としての考えをお聞かせ願いたい」

「わかりました。ご迷惑をかけさせていたでている礼にさせてもらいます」

ラック兵士長は、一礼をした後、足早に大きな兵士テントへ駆けていく。

「さて、待ちぼうけさせてすまないね、ティオ。まずはティオからリコオさんに診断してもらいなさい」

「はい……でも兵士長、どこか体の具合でも悪いんですか？」

「はっはっは、何も無いよ。私も歳だから軽い健康診断でも受けようと思っただけ」

嘘をついた。いや真実を打ち明けられなかったのだ。

ラルク医師の診断は不治の病、仮にここにいるリコオが診断したところで、この病は治りはしないだろう。何よりも自分の体だからこそ、ソリディアは自分の体の状態を一番把握している。

「では、お言葉に甘えさせてもらいます！」

「ああ、行っておいで。終わったらティータとカルマンのいるテントへ先に帰っていなさい」

ティオは小気味悪い返事をする、リコオのテントへと走っていく。

リコオのテント前にて挨拶をすると、その返事にラルク医師とはまた違った、中性的な声が聞こえてくる。

「……入んな」

「入ります、失礼します」

テントの中はラルク医師と大した差は無かった。得体の知れない薬品と、変な異臭が漂っている。

リコオはボーイッシュな短髪である。後ろ姿だけ見ると男だと判断できるが、顔を見合わせると、ティオの考えは一瞬にして白紙に戻る。ラルク医師とはまた違った中性的な顔をしているからだ。美少年なような、美少女なような、ラルク医師が大人の男性、いや女性、だとするならば、リコオとはそんな印象なのだ。

「それでどうした？ ……ん、見ない顔だな。ま、そんな事はどうでも良いけどな」

「あの……実は時々、左胸が凄く痛んで……って、ええ！？」

ティオは思わず声を上げた。何故なら喋ってる最中に、リコオはティオの左胸を掴んだからだ。触ったというよりも、鷲掴みにしたという方が近い。

「ふむ……特に異常は無いな。発育には難があるぞ、お前さん。歳の割に胸が小さい！」

ティオは怒りよりも、小さなショックを受ける。何よりもこんな所で、小さい、と言いつられるとは思ってもみなかったのだ。

(ラルク医師は歳の割には、発育が良いって言ったのに……)

「ほら、診断は終わりだ。とつと出ていきな！」

「そ、そんな、もうちょっとちゃんと診断してください！」

いきなり胸を鷲掴みにされ、失礼な事まで言われ、出た言葉が異常無しの診断だった為、さすがのティオも食い下がった。

「ちゃんとも何も、異常が無いんだからしょうがないだろう？」

「私の住んでいる所にはラルクさんという医者があります。その人も異常は無いと言っていましたけど、それでも私の左胸は何故か痛み続けます。……だから腕の良い医者があると聞いて、ここまで来たんですよ……」

リコオは、ティオの言葉の中の、一つの単語に反応する。

「ラルク……そうか、お前はラルクの患者か。なら俺には治せないね」

「どうしてですか!？」

「あいつは俺の方が腕が良いと言ったのか？ だったらそれは間違いだ、ラルクに治せないものはリコオには治せない。ラルクは俺が知る中で、最高の技術と知識を持った医者だからだ」

ティオは言い返す事はできなかった。つまりは現在知っている二人の最高の医者をしてしても、ティオの左胸の痛みの原因はわからないのだ。

「……ま、大方だ。左胸が痛い年頃の女の理由は恋じゃないの？」

「それ、ラルク先生も言っていました」

「だろうね。ラルクはこういう恋愛話好きだからね、良い歳して何やってんだかな……」

心の底から呆れたように、話を進めるリコオ。

「とりあえずそんな感じだ、悪いけどな。診断結果は異常無し、あるとすれば恋の病だろう」

「そう、ですか……」

ティオとしては、また納得のいく答えは出してもらえなかったのだ。恋の病にしては、大きすぎる痛み。

ばつの悪そうな顔で、リコオは言う。

「悪いな……せっかく頼って来てもらったのに、力になれなくてよ」「いえ、お忙しいのに、どうもありがとうございました!」

診断内容はともかく、ティオは努めて明るく礼を言うと、リコオのテントを出る。

結果的に、この北の大地へ足を運んでも、左胸の痛みの原因は掴めないままであった。

21 悲しき制圧作戦

シュネリ湖より、やや東に位置した場所にそれはあった。シュネリ湖周辺のレジスタンスを、掃討する為に作られた、水氷の騎士デユアリス率いる城国軍のテント地帯である。

シュネリ湖を、ゆつくりと泳いで移動したデユアリスは、集合の空砲によって集まった兵士の中では、必然的に一番遅くに到着する。「お、遅い到着で、お姫様。今日は随分と色っぽい格好をしておいでで……しかも、髪の毛馬の尻尾に束ねておいでで、可愛いですよ……デユアリス、様？」

そんなデユアリスを出迎えたのは、事実少し前に到着したクリムである。

「……遅れた事には非常に申し訳なく思っています。しかし変な目で私を見ないでください」

下から上へ、舐めるような視線を送るクリムに対し、明らかに不快感を露わにしているデユアリス。

「私は事実を申したまでです。お綺麗なデユアリス様を見て、声をかけない男性などおりましようか？　しかし、不快に思われたのなら申し訳ない……」

深々と非礼を詫びるクリム。そんなクリムを見ると、途端に困った表情で、顔を上げるようにデユアリスは促す。

「そういうば……デユアリス、様に、お客様が見えていますよ」

「私に……ですか？」

「はい、テントに待たせております。どうぞこちらへ……」

クリムは客人を待たしてあるテントへと、デユアリスを誘導する。案内されたテントは、デユアリス本人が使用しているテントだった。

「この中です。では私は失礼させていただきます……」

「ありがとうございます。ご苦労様でした」

再び深々とお辞儀をするクリムに対し、謝礼するデユアリス。ク

リムが離れていくのを確認すると、デュアリスは客人がいるというテントに入り込んだ。

「　　やあ、デュアリス。元気でやってるかい？」

「……兄さん!？」

そこにいたのは、デュアリスと同じ騎士でありアルティロイドである、風の騎士ジュークだった。

「兄さん、一体どうしてここへ？」

「特に深い意味は無い、作戦前の軽い激励にと思ってね。デュアリスはただでさえ優しい……この手の制圧を目的とした作戦の遂行は、やはり難しいのではないかとね」

長い間を作った後、デュアリスは切り出した。

「……正直なところ、こういう作戦は嫌です。武力による制圧なんて……」

俯きながら、言葉を出していくデュアリス。王の命令を忠実に遂行する為に造られたアルティロイドにとって、デュアリスのこの発言は御法度なのだ。

怒られる事を覚悟で言い放ったデュアリスだが、ジュークはそんなデュアリスを優しく抱きしめた。

「……良い子だ。そんな優しいデュアリスだからこそ、僕はデュアリスを信頼しているよ」

「え……に、兄、さん？」

突然のジュークの行動に、頬を少しだけ赤くする。そしてゆっくりと、離れたジュークは口を開き言葉を発した。

「……それと、ここ最近の城国の混乱の理由は、どうやら内通者がいるようだ」

「……内通者？　でも一体どうやって!？」

「それはわからない。デュアリスに心当たりは無いか？　何でも良い、ちよつとした違和感でも何でも良いんだ」

デュアリスは自分の記憶の中から、心当たりのある人物を探す。すると一人の人物が思い当たる。

「……クリム」

無意識にその名を口にしていた。

「クリム？ 誰だ、知っている人物なのかい？」

「今作戦における私の部下になってくれていてる方です。……でも怪しいというよりは、変わった人……」

デュアリスはそこまで言いかけて、一つ頭にひっかかる何かの正体に気が付く。

（ しかも、髪の毛も馬の尻尾に束ねておいで ）

これは先ほど、クリムがデュアリスに言ったものである。この中からデュアリスは一つの言葉に気が付いた。

「馬の尻尾……」

「馬の尻尾……？ 何だい、それは？」

「ポニーテールの事です。どうやら地上の人は、このポニーテールの事を、馬の尻尾と表現しているらしく……」

「……なるほどね。これで犯人の具体像が割れたというものだ」

無表情に言い放ったジュークに、デュアリスは咄嗟に言葉をかけた。

「クリムさんは確かに変な人かもしれませんが……でも良い人です！ もしもクリムさんが内通者だったとしても、兄さん……どうか殺さないであげて……！」

「……デュアリスは、この作戦を遂行する事を考えるんだ。余計な事を考えていると死を招く結果となる」

「兄さんっ！」

ジュークはテントから出ていってしまう。クリムの身を案じるデュアリスは、自分の発言を悔いてしまっていた。

テントから出たジュークは、早速クリムを捜していた。最もクリムという男の具体的な特徴は知らない為、近場にいる兵士からの情報収集をする事にした。

「すまないが、クリムという男はどこにいるのだ？」

「え、あ、クリムですか？ ……クリムなら、ほらあそこに」

兵士が指差した方向にクリームはいた。見ると仕事に勤しむ兵士とは違い、呑気に座り込んでいる。

(……なるほど、確かに変わった男だ。その行動も、雰囲気も、な) ジュークは誰にも気づかれないうように微笑すると、ゆっくりと、しかし確実にクリームに近づいていく。

「レジスタンスでありスパイとして活動しているクリームさん、だな？」

ジュークはわざと、こんな言い回しをしてみせた。

「……………いえ、自分はデュアリス様の配下として活動させて頂いている、クリームであります！」

やる気のない態度の割に、ハキハキと答えるクリーム。

「……………ふっ。地上ではポニーテールの事を、馬の尻尾と言うらしいじゃないか？」

ジュークの問いかけに、クリームは無表情と無言を貫いた。

「……………貴方がスパイだな」

率直かつ、確信を持って言葉を発する。

「……………そうだ。と、言ったら、その美しい深緑の剣で、斬り裂かれてしまうのかな？」

「いや……………貴方の回答次第だ」

ジュークもクリームも、お互いに探りあいをしている。

「時間が無いので、手短かに言わせてもらおう。……………貴方がスパイだと言つのなら、貴方も僕の同志になってほしい」

「……………何、だと……………!？」

「だがもしも、貴方がスパイではなかった場合、あるいはスパイだが、この誘いにノーと答えた場合は、悪いが貴方をここで殺させていただきます」

(こいつ……………一体何を考えている!? 同志になるとは何だ、王の犬であるシークレットウェポンのいう同志というのは、王の味方になれという事か?)

クリームの頭の中で思考が巡っていく。命が取られる事は惜しくは

なかった。既にこのように戦っていくと決めた時から、命はとうに捨てているからだ。ただジュークから放たれた同志という言葉、この言葉の先の未来が全くといって良い程に見えないのだ。

「……時間がありません。あと一分、それ以上は待ちません。一分以内に答えが出せないのであれば、ここで貴方を始末させていただきます」

無情なまでの表情で、その深緑の剣に手をかけるジューク。

「待て、同志になるとは何だ、お前は一体何者なんだ!？」

「それを言う事はできない。この行いは、迅速かつ隠密に事を成さなければいけません」

「……迅速かつ隠密」

クリムの中で再び、思考という名の行動が始まる。ただその目の前にある絶対的な死に、思うような冷静な思考ができないでいる。

「……時間です。貴方をここで排除します」

「……待て、お前は同志になれと言った。と、いう事は逆に言えば、お前の志というのは……!」

「さすが、ここまで城国を一人で乱す事のできる方ですね。話が早くて助かります」

「良いのか……? それはシークレットウェポンの流儀とやらに反するんじゃないのか?」

「確かに。しかし来るべき世界の為に動く事が正しい事であると、僕は判断しました」

その言葉と表情には、確固たる決意の眼差しがあった。

「その言葉……信じて良いんだろうな?」

「……ふっ。愚問ですね、その真意を確かめる為に、今こうして貴方と話をしています」

「くっくっく……そうだったな。信じてやるぜ、シークレットウェポン。どうせ信じなければ、俺はお前の剣の錆にされてしまうんだからな?」

「残念ながら錆にもなりません。……しかし相変わらず話が早くて

「助かります」

「ジュークは一呼吸置いてから、言葉を続ける。」

「それと……シークレットウェポンではありません」

「ああ？　じゃあ何だっつんだよ？」

「世界を変える罪人の名は……アルティロイド。そして風の騎士ジュークだ」

レジスタンスのスパイであるクリームは、風の騎士ジュークと結託する。それは誰も知らないところで、密かに生まれた一つの勢力ではないだろうか。

「　兄さん！」

その時、デュアリスの悲痛な叫びが、ジュークに向けられていた。

「……デュアリス？」

「ごめんなさい、心配で……お願いですから、クリームさんを殺さないでください！」

「心配はいらない。彼は心強い味方になってくれた」

「……え、味方に？」

「そうだ。急な話だが、彼を僕の軍団に迎え入れたい。……良いかな？」

そのジュークの問いかけを聞くと、デュアリスはクリームに目を合わせ、その真意を確かめようとする。クリームは静かに、そして深く頷く。

「……わかりました」

「ありがとうございます、デュアリス。……そして今回の作戦の成功を祈る」

デュアリスの頭を優しく撫で、そして足早に移動を開始する。その後を追うように、クリームも続いていく。

「クリーム、さん」

「……おや、これはこれは、お姫様。そんな悲しい表情は似合いません。それでは美しい貴方の顔が、台無しです……。こんな軽い台詞も今日で終わりだ。じゃあな、俺は地上の人間だから、作戦の成功は祈りたくはないが……死ぬなよ」

ジュークとクリムは、北の大地シユネリ湖を旅立っていく。そんな二人の背中を、デュアリスはただ見守っていた。

「デュアリス様。作戦のご指示を」

「あ、はい。このベースからシユネリ湖を回るように攻めていきましょう。私はここから左回りに行きます。私と行動を共にする方は少なくて結構です。なので右に回る方に戦力を集中してください」

「了解しました！……全員、出撃するぞ！」

デュアリス率いる城国軍の、シユネリ湖制圧作戦が開始される。

「まあ、あの子にも言ったんだけど、ラルクに治せないと判断したものは、俺には治せない」

「そうですね……不治の病とは聞かされましたが……貴方になら、あるいはとも思ったのですが」

「申し訳なくは思う。だが残念ながら、お前の病は現在の技術では治せないんだ」

ザードリブにて、ソリディアはリコオの診断を受けている。

「覚悟はできているつもりです」

「幸いな事に、お前の病は人には移らない。最も、移る病ならばお前の連れも、俺もただでは済まないけどな」

「……それだけが、せめてもの救いです。どうも、ありがとうございます」

「何もできない俺だが、偉そうに一つのアドバイスはできる。……余命という名の時間はあるかもしれないが、その残った時間を大事にしな」

「大事に……か。そうだな、命は大事にしなければいかん。余命などというもの、所詮は早いか遅いかの差だ」

ソリディアは、ただ淡々と言葉を出した。自分に出された最後の診断に、ただその事実を受け止めようとしていた。

「では……私はもう行きます。恐らく、この北の大地に足を入れる

事は……もう無いでしょう」

「そうか、だが俺は……また会おう、と言っておくよ」

ソリディアとリコオは、その言葉を交わして別れた。それがソリディアという人間が、リコオと話した最後の言葉になる。

テントから出ると、ソリディアは何かの違和感を感じていた。

「何だ……先ほどまでとは、何かが違う」

「ソリディア！」

ソリディアが声のした方を振り向くと、そこにはティードダが立っていた。

「敵が来るぞ、かなりの大部隊だ」

「大部隊だと！？……この違和感の正体はそれか」

「どうするんだ、敵の進行状況は恐らく、すぐそこまで迫っているぞ」

ティードダは城国軍の兵士が歩く音から、おおよその位置を推測する。

「……急いでも、敵との接触は避けられそうにないか」

「だろうな。ここから下手に離れようとすると、敵からの追撃があるかもしれない」

「何とかティオだけでもと思ったが……ここに待機させた方が安全そうだな。……よし、ティードダはカルマンを呼んできてくれ、私はラック兵士長にこの事実を教えに行く。この戦いに参加するぞ」

城国軍による、シュネリ湖制圧作戦の反撃に、参加する意向を示したソリディア。

狂気と惨劇に満ちた、悲しき制圧戦が始まる。

22 水氷の騎士デュアリス

刻一刻と近づく、城国軍の大軍。その迫る足音は、ザードリブに暮らす人々の耳にまで聞こえる程に、迫ってきていた。

「ラック兵士長！」

ソリディアの鬼気迫る声と表情とは裏腹に、ラックは大変なくらいに冷静だった。

「……わかっていますよ、ソリディアさん。予定より少し早いですが、敵は攻めてきた……悲しい事です、できれば人間同士で戦いたくはないですが、やらなければやられてしまいますからね」

「はい……やむを得ない戦いになります。泣き言は誰にでも言えます。それに理想を言うのも楽です。しかし、今は戦う事しかできないのです。戦って、そして命を繋いでいくしか……！」

ソリディアとラックは、お互いに目を見合わせ、その言葉の中の真意を確認する。

「……城国軍に打ってでしょう。ソリディアさん？」

「ええ、この防衛戦には参加させていただきます。しかし、連れの女の子……ティオは、戦闘員ではないので、ここに匿わせていただきますよ？」

「当然ですな。少女を前線で戦わせるようになったら、もうおしまいですよ……。では、よろしく頼みます」

そう言い残し、ラック兵士長と、ザードリブの兵士達は戦いの備え始める。用意が完了した者から、次々と足早に外の守備に回っていく。見たところ、装備も大差は無いようで、鋼の剣と鎧、あるいは、くさりかたびらといった防護服が主流のようである。

ソリディアも急ぎ、ティータ達に合流すべく走る。

「兵士長、話は聞きました、戦闘が起きるんですね!？」

テントに戻ると、真っ直ぐな瞳で、そう呼びかけてくるカルマンがいた。

「ああ、あまりに突然で不本意ながら、起きてしまったものは仕方がない。我々も、この防衛戦に参加する。カルマンは私と共に、ここザードリブの守備に入る。ティータは前線に出て、敵軍の遊撃をしてもらいたいのだが……？」

「了解した。なら俺はこのまま攻めに入らせてもらっぞ」
最初から装備も整えてあった為、ティータは颯爽と戦場へ向かうとする。ヴェルデフレインと共に、やる気を見せている。

「頼んだぞ、ティータ。被害を最小限に抑える為には、お前が前で戦ってもらっ他ないのだ」

ソリディアの言葉に、ティータは軽く頷き、一番手でテントを出ようとする。だがその時、ティオの声が、ティータを止める。

「ティータ……あの……」

「何だ？ 戦いは一刻を争う、無駄な時間は避けたい」

「……気を、つけてね？」

「了解した」

ティオに振り向く事もなく、ただそう答えたティータ。そしてその勢いで、パーションの第一陣として、戦場に向かっていった。

そんな光景を、カルマンは例えようのない心境でみつめていた。

「カルマン」

カルマンの肩に、ソリディアは優しく手を乗せ呼びかける。

「あ、兵士長……？」

「さあ、我々も向かおうじゃないか？」

「……はい」

カルマンにとっては嫌な光景を見せられた。戦いに向けるべき霸気が、どこか散漫になってしまっている。

「……ふっふっふ、良いかカルマン。我々はこのレジスタンスを守る守備兵として活動する。それがどういう意味があるかわかるかな？」

「……いいえ」

「教えてやろう。それは好きな女を最前線で守れるという事だ」

「へ、兵士長!？」

カルマンにとってソリディアのイメージというのは、こういう事を言う人物だと思っていなかった為、素っ頓狂な声をあげるカルマン。

「守ってやろうじゃないか、一番近い場所で……なあ、カルマン？」

「……はいっ！」

「よし、我々も行くぞ！ ティオ、負傷した兵達が出る、お前は兵の治療を手伝ってあげなさい」

「わかりました！ ソリディア兵士長もカルマン君も気をつけて！ ティーダに続き、第二陣としてソリディア、そしてカルマンの二人も戦場へと向かう。一人残されたティオは、ザードリブにて、この戦いに参加する全ての人間の、無事をただ祈る。

「ティーダ、ソリディア兵士長、カルマン君……そして、そして……

……もしかしたら、この戦場にいるかもしれないデュアリスちゃん……

……みんな、無事に還ってきてください……」

手を強く握り合わせ、無事である事を、ひたすらに願っていた。

(味方が少なすぎる。さすがにサンバナの時の規模は期待しながら、これでは一方的な戦いになるのは明確だな)

ザードリブ、あるいは周辺のレジスタンスから出陣したのは、簡単に見ても百人ちよつとが良いところである。城国軍の兵士の数は、足音から察するに、軽く五百人はいるだろう。

それに敵はただの部隊ではない。ティーダと同じアルティロイドである、水氷の騎士デュアリスがいる。アルティロイドが一体いるだけで、人間の部隊など何人いようと勝ち目は無い。

(命拾いしたな。……お前ら)

一人不敵な笑みを浮かべ、冷静に戦況を見る。

レジスタンス兵士の進行は、地の利を活かしている事もあり、か

なり順調に進軍している。この分では、城国軍と相對するのは、目とはなの先だろう。

「南のレジスタンス……パーシオンの方か!？」

声ができる方を振り向くと、恐らくはザードリブの兵士と見られる者がいる。

「ご協力を感謝します! こんな貴方達には無意味な戦いに参加させてしまい、大変申し訳なく思います」

「気にするな。参加すると決めたのは、俺達の意志だ。それに隊長命令だしな」

兵士の言葉に、いつも通りの素っ気ない返事をする。そんな反応に、兵士は軽く笑った。

「ありがとう! お互いに頑張りましょう!」

それ以上の言葉は返さず、無言で更に走る速度を上げる。そこから少し進むと、城国軍の第一陣である。鋼鉄の鎧を身に纏う、兵士の姿が確認できた。先ほど会話した兵士の隊も確認できたのか、最前線となる戦場は、更に緊張の糸が張りつめ、そして一気に爆発する。

それと共に、ティータも得意の電光石火の速さで接近し、戦闘開始からわずか数秒で、三人の兵士の命を奪っていく。

レジスタンスと城国軍の戦力が、ぶつかり合い、正に合戦となっていく。敵も味方も、この瞬間から血が飛び散り、そして命を落とす者が出てくる。

(……一人、二人……キリがないぐらいの数だ)

開始早々から、圧倒的な戦闘能力を以て、城国兵士を撃破していく。それでも数においては、比べようもない程に備えている城国軍は、斬っても斬っても、まさしくキリなく出てくる。ティータの読みは、五百人前後だったが、いざ対峙すると千人はいるのではないかとも思える。

事実、開始数分でティータは、八十人前後を殺したが、それでも減っていると感じさせない。それに引き換え、ザードリブを主

力としたレジスタンスは、見た通りに百人程しかないのだ。長く戦えば、それだけ死者が増える。最も早く終わらせようと戦っても、今度はその分、城国軍の兵士達が死んでいく事になってしまう。

（ちい……味方さえいなければ、たかだか千人ぐらい片付けるのは容易だが）

だがティードは、それができなかった。アルティロイドが、力を発揮してしまうと、敵味方問わず、自分の意志に関係なく、無駄な殺戮をしてしまう。それはサンバナ攻防戦の、ラティオを見れば一目瞭然の事である。あまりに強大な力を所持しているが故に、意図的に戦闘能力を落とさなければならぬ。

「チイツ！」

斬りつけてくる城国兵士よりも早く、その深紅の剣を振るう。足を斬り、腕を斬り、胴を斬り、そして首を斬り落としていった。返り血を浴び、更に美しく血の化粧を施されたような、ティードのその姿は、見る者に畏怖の念を植え付けていく。

「退け、退けば命は取らない。……だが退かないなら、ここでその命を散らせてみせよう」

たった一人の少年の存在が、その戦場を膠着状態にさせている。数で圧倒的に勝る城国軍を相手に、レジスタンスは迂闊に手を出せない。しかし、質において極上の戦闘力を有するティードの存在により、城国軍もまた先に手は出せない。そのティード自身も、自ら動き出そうという気は無いのだ。

この戦況を動かすには、いずれにしても起爆剤となる、何かの要素が必要不可欠となる。

「……みなさん、下がってください。ここは私がいきます」

「デュアリス兵士団長!？」

城国兵士達の後方より、聞き覚えのある声。そして兵士の一人が言った名前に、ティードは敏感に反応してみせる。

「デュアリス……だと?」

そこには綺麗な青い髪を、赤い紐でポニーテールに束ね、その髪

と同じ青い水氷の戦闘法衣を身に纏った者がいる。そして身の丈以上の三つ又の槍トライディア。

「レジスタンスの方々もお下がりにください。私は無益な殺生はしたくはありません！」

「ふ、ふざけるな、それは俺達にシュネリ湖から出ていけっていう事だろう！」

「何が無益な殺生はしたくないだ、そんな事を言っても、お前達のやっている事は一方的な支配だろ！」

デュアリスの提案に、いきり立ち乱暴に返答をする。硬直していた場は、一気に一触即発の状況となる。

「……私だつて、こんな支配なんてしたくはないです……」

誰にも聞こえない小さな声で、瞬間的に思った事を出す。ティードはそんな小さなデュアリスの声を、戦場で一人聞いていた。

(デュアリス……さて、どう動く？ 膠着していた戦場、起爆剤となったのは、お前なんだぞ)

「貴様ら、おとなしく下がれば殺しはしないという、デュアリス様のお気持ちを無駄にする気かっ！」

「ふざけるな、城国軍！ お前達の好きにはさせてたまるかよ！」
ティードは、その戦場を見て笑いたくなくなった。本来ならば、お互いの正義を貫きあい、命のやり取りをする場所だ。そんな場所で、子供染みた言い争いをしているからである。

そんな中、デュアリスの側近らしき男が、耳打ちをしているのを見つける。

「デュアリス様、このまま言い争っていても、戦況は動きません。ここはこちらから一気に攻めにいきましょう」

「……ですけど！」

「話し合いによる解決は無理です。あの地上の連中の野蛮な反抗を、ご覧になってください。……そして何よりも、我々が仕える王の為であります」

「王の……為……。くうっ！」

迷いながらも、その清らかな蒼き槍、トライディアを構える。

「話し合いが無理とわかれば、今度は武力制圧か？ 何が理想郷だ。そんな支配の上に成り立つ理想郷なんてあるものか！」

「黙りなさい！」

デュアリスは、トライディアをレジスタンスに向け、一振りさせる。攻撃的ではないものの、一陣の突風が巻き起こり、デュアリスの言葉通り、兵士達を黙らせてしまう。

「王の、王を悪く言う事は許しません！ そんな事を言う人達とは……私は誰とでも戦ってみせます」

その言葉を合図に、城国とレジスタンス、双方の戦いが再開される。

デュアリスは、アルティロイドの中では、単純明快な戦闘能力は最弱に位置する。しかし、トライディアを駆り、レジスタンスの兵士を倒していく様は、一騎当千の文字が思い浮かぶ。それでも巧みに長い槍を操り、倒す全ての兵士は、死傷を負っていない。

（ だからこそ、攻撃された兵士にとっては、逆に苦痛だ）

攻撃してくる城国兵士を捌きながら、ティーダはそんな事を考える。ティーダとデュアリスは、同じアルティロイドだが、明確に違う処は、兵士に対する対処の仕方だ。ティーダは容赦無く、人を殺していく。

いずれの理由にしても、数が圧倒的に少ないレジスタンスには、これ以上攻められるのは、良い事ではない。一時的な方法で、何の解決策にもならないが、この戦いを終わらせるにはデュアリスを退ける事が、最良の策だとティーダは考える。勿論、ここにいる城国兵士を全滅させる事は、ティーダにとって容易いが、それだけでは、どうしても避けたかったのだ。

一気に接近し、デュアリスとの間合いを詰めていく。

「たあああああ！」

接近してくる者の存在を、すぐに察知し、鋭い体捌きで、トライディアを振るう。ティーダもまた、愛刀である深紅のヴェルデフレ

インで、攻撃を受け止める。

「っ!？」

「良い攻撃だ、デュアリス。腕を上げたようだな」

「えっ、だ、誰!？」

この戦場に、自分の攻撃を受け止められる存在は、いないと予測していたデュアリスは、その事実には驚いたが、更に驚いたのは、自分を呼ぶ声に覚えがあった事だ。

「……まさか、まさか兄さん！生きていらっしやっただんですね、兄さん！」

デュアリスにとっては、大切な人である、ティード生存の確実な事実が、何よりも嬉しい出来事である。

「ああ、デュアリス。俺はこの通り生きているぞ。そして……デュアリス、何とかして軍を退かせてほしい」

「……兄、さん。それは、できません……。兄さんも知っているでしょう？ 私達アルティロイドの使命を」

デュアリスは、思い悩んだ表情で、弱々しく言葉を絞り出す。

「私達アルティロイドは、王の命令に忠実に動くように、この世界に造られた存在……。もし、逆らったらどうなるか……」

「どうなるんだ？」

「……えっ!？」

「王の命令に逆らったら、どうなるんだ？ デュアリス」

そう投げかけられた言葉に、デュアリスは思考を始めていた。

(こんな単純明快な質問だが、デュアリスにとっては、理解できない難題になるだろうな。デュアリスは戦闘能力こそ最弱だが、その精神能力は最高に位置している)

予想通り、デュアリスは困惑した表情で、問いかけに対する答えを導きだそうとしている。

「デュアリス……今は答えが見つからなくても良い。しかし、今は一旦退いてほしい。お前の決断一つで敵味方関係なく、犠牲者が増えるんだぞ！」

「う、うう……わかり、ました。」

強引ながら、デュアリスの説得に成功する。最も、その場しのぎの方法であり、すぐに戦闘が起きてしまうだろう。

（ 王の支配を、その身に最も受けている。それなのに平和を願い、他人を案じられる……デュアリスは本当に優しい人だ）

「うう……くつ、う、くつ……」

俯いて泣いてしまうデュアリス。ティーダは、そんなデュアリスの両肩に、そっと手を置いた。

「デュアリス……」

「く、ふ……う、は、はっ……。 あ、あはははははは！」

「デュアリス？ ……くっ！？」

突然、腹部に激痛が走る。ティーダがそこを見ると、自分の腹に氷の刃が突き刺さっている。そしてその氷の刃の元を見ていくと、そこには目の前にいるデュアリスの手が確認できる。

「甘いですよね、兄さんも、デュアリスも、さ」

氷の刃を勢い良く抜かれると、そこから血が一気に流れ出す。

「デュ、ア、リス……？」

「デュアリス？ ……違うわ、私はセレナ。氷水の騎士セレナ、よそこには、美しい青い髪を持つデュアリスではなく、銀髪をなびかせる見知らぬ者がいる。表情も、デュアリスの優しい表情とは裏腹に、高圧的にティーダを見下す顔があった。」

23 氷水の騎士セレナ（前書き）

名前 デュアリス
種族 アルティロイド
性別 女
年齢 15
階級 氷水の騎士
戦闘 2000
装備
E 清蒼の槍トライディア
E 氷水の戦闘法衣（青）
E 赤いゴム紐

名前 セレナ
種族 アルティロイド
性別 女
年齢 12（デュアリスに宿ってからの年月）
階級 氷水の騎士
戦闘 2500
装備
E 清蒼の槍トライディア
E 氷水の戦闘法衣（白）
E 赤いゴム紐

23 氷水の騎士セレナ

「セレナ……だと？ お前は一体何だ……？」

体から血と共に、力まで抜けていく。崩れ落ちながら、今までデュアリスだった人物を見る。

「だから言ったでしょう？ 私は氷水の騎士セレナ。デュアリスに宿るもう一つの人格……」

「もう一つの……人格!？」

それは幼き日から、一緒に生きてきたティードも知らない事実である。

「そう、私はデュアリスの意識の中で増幅されていったものを、歪んだ形で発散していく存在。デュアリスの中に元々いなかった人格なのよ」

「……氷水の騎士、二つの属性を備えていたのは、一人で二つではなく、二人で一つという事が……」

抜けていく血と力、薄れていく意識、そんな中でも頭は冷静に働かせていく。

「さすが兄さん。話が早くて助かります。……最も、ラテイオの馬鹿のように、二つの力を合わせて特化させた個体もいますけど。デュアリスは、人間の頃から戦いの嫌いな子だったみたいけど、アルティロイドの適格者に選ばれてしまった……戦いに向かない人格者だからこそ、私のような存在が造られたのよ」

「……よくも、まあ、それだけペラペラと喋るものだな……」

「うふふ、当然でしょう？ どうせ死ぬ人になんか、話したってどうって事はないわ。……ああ、そうだわ、死んでいく兄さんに、デュアリスの気持ちを伝えておきますね」

相変わらずの高圧的な態度を崩さず、不気味な笑みを浮かべながら語りかける。左手には、ティードを刺した氷の刃が、依然形成されている。

「兄さん……世界中の誰よりも、愛しています　　殺したい程に、ね」

「　　っ、貴様！」

言葉の終わりと同時に、氷の刃を振るう。刃はティードの右頬を、容易に斬り裂いていく。

直撃を受けないように、体を流し、セレナから離れるように転がっていく。

「うふふ、さすが。それだけの出血をして……よくそれだけ動けますね。アルテロイドだからって、失血の苦しみは、人間と変わらないというのにね」

転がり避ける無様な姿を、セレナは見下すように、そして微笑みながら見ている。

普段ならば、自分のプライドにかけても、他人に無様な姿をティードは見せようとしない。だが、この時ばかりは、そんな事も考える余裕さえ無い。

依然として流れが治まらない流血は、ティードからあらゆる感覚を奪っていつている。セレナの攻撃を避けられたのも、体に染み付いた反射で避けたようなものだ。

それでも、ティードの眼は、全く死んではいなかった。

「……私がちよつと本気になれば、兄さんをすぐに殺す事だってできる。それなのに何なんですか、その眼は？」

セレナの問いかけに答える事もせず、ただ真つ直ぐに睨み付けている。実際のところは、眼は死んでいなかったかもしれないが、ティードの意識は既にこの瞬間は無かったのだ。

「まあ……良いわ。殺してしまえば、兄さんともお別れ……そうすれば、ずっと兄さんと一緒よ。デュアリスも喜ぶわ」

心の底からそう思いながら、今から殺す相手に微笑を向ける。

その笑みは、人を、いや生命そのものを、いくつ殺しても何とも感じていないようにも見える。残忍や冷酷といった言葉では表しきれない表情だ。

「じゃあ……さよなら、兄さん。ほんの一瞬の出会いだったけど……
…何でデュアリスが貴方の事を好きだったのか……私にはわかる気がする」

セレナは左手に形成している氷の刃を、ティーダの心臓めがけて突き刺しにかかる。

「！」

と、その時、セレナの後方から、咆哮らしきものが聞こえてくる。セレナが振り向くと、そこには全速力で突進せんばかりの勢いで走り込んでくるソリディアとカルマンの姿があった。

「うをおおおおお！ コノヤロー！」

「ティーダは殺させせん！」

「……人間如きがつ、奇襲したところでこの私は倒せないわ！」

構えも何もなく、カルマンはセレナに突っ込んでいき、がむしゃらに鋼の剣を振るう。一応、奇襲の攻撃だが、セレナは全く意に介せずに、カルマンの剣線を避けていく。

「こ、こいつ！」

「……はあ、邪魔」

「っ！？」

カルマンの剣を避けつつ、そう言うと、セレナは氷の刃を真っ直ぐに突き刺した。あまりに速く、そして殺気すらこもっていない攻撃に、カルマンは何が起きたのかすらわからず、右胸を刺され、何も言わずに倒れてしまう。

「カルマンツ！？ 貴様！」

少し遅れてソリディアが、セレナと対峙する。走り込んだ勢いで、剣を左から右に走らせる。やはりこの一撃ですら、セレナに避けられてしまうが、セレナは大きく後退する。

「人間のくせに、貴方はかなり腕が立つようね……」

後方に下がったついでに、セレナは現状の戦力を確認する。辺りを見回すと、レジスタンス側が少しずつだが押しつつある。レジスタンス側の、攻めの第二陣が来た為でもある。何よりも、ただ攻め

ているだけの城国軍と、絶対に負けられないというレジスタンスとの間の、気迫の差が戦力を埋めている。

「良いわ……貴方達の頑張りに免じて、今は退いてあげる。こんな状態で続けても、無駄な人間が、無駄な命を散らせるだけだもの」
ちらりと横目でティードを見ると、セレナは言い放った。

「貴方を殺すのは、ちよつと伸びちゃったけど……楽しみは後に取っておきます」

セレナはトライディアから、水球らしきものを上空に放つと、その水球は大きな音と共に爆発する。それが後退の合図だったのか、城国軍の兵士と、氷水の騎士セレナは後退していった。

安全を確認すると、ソリディアは緊張の糸を解き、倒れているティードとカルマンに近づいていく。

「ティード、カルマン！……こいつは酷い……誰か、手を貸してくれぬか！」

ティードとカルマンは、そのままザードリブへ運ばれていった。ティードは腹部への刺し傷と右頬への切り傷、カルマンは右胸への刺し傷があり、二人とも重傷だった。ティードの意識は傷の割に回復していたが、カルマンは意識不明のままである。

そして、次の日の朝を迎える。

（ 傷自体は完治に程遠いが……問題ない戦える ）

寝かされていたベッドの上で、ティードは自分の体調確認を行っていた。昨日の今日であり、生身の人間程でないにしろ、傷の具合は良いとはいえない。

「ティード、駄目だよ、まだ動いちゃ……貴方だって重症なんだから！」

ソリディアは、あれからラック兵士長の元で、今後の防衛策を考えている。その間、ティオはティードとカルマンの看病に努めていた。

「問題は無い。それに状況が変わった。俺も行かなければ、レジスタンス連中は皆殺しにされるぞ」

一瞬の対峙だったが、セレナを見て感じ取った事だ。

相手の大将がデュアリスだったからこそ、実際にこの戦いは攻防になっていたのだ。もしも、このシユネリ湖を攻めていたのが、ジュークやラティオだったのなら、呆気なく陥落していただろう。だが状況は変わり、誰も知りえなかったデュアリスの第二の人格、セレナが表へと出てきた。間違い無く、この近辺のレジスタンスは、セレナの手により皆殺しにされてしまっただろう。

「皆殺し、って……」

ティオはその言葉を聞き、直感的にその恐ろしさを理解してしまっ

た。

「そういう敵に変わってしまった。四の五の言っている暇は無い」

「うん……」

そんな人のところで、デュアリスちゃんは大丈夫かな……」

デュアリスを案じているティオを、ティードは見つめていた。

（何の偶然か、ティオとデュアリスは巡りあってしまった。……セレナの出方次第によつては……殺してでも止めなければならな

い。だがそうならデュアリスは……）

自分で言っていた通り、迷っている時間も無い。何よりも、そんな迷いを持って戦場に出る事が、何よりも自分の命を落とす事になりかねないという事を、ティードはよく知っているつもりだった。

「とにかく、俺はお前が何と言おうと行くぞ。どっちにしても動かないと全滅してしまうからな」

「ティード……。……わかった、ならせめて今だけは休んで？ 出撃の時にになったら教えてあげるから」

ティオに促されるまま、ティードは再び眠りについていった。

「さて、どうしたものかしら」

拠点に戻ったセレナは、デュアリスに体を返す事無く、居座り続

けている。

デュアリスが装備していた、青い戦闘法衣を脱ぎ去り、その下に着込んでいた白いレオタードのような、氷の戦闘法衣が姿を表す。デュアリスのものと違い、肌を露出させ、徹底的に動きやすさを追求した作りになっている。

辺りを見回すと、戦いの影響からか、兵士達は軽い興奮状態にあるのがわかる。

「畜生、これが戦争かよっ、あんな誰だかわからない奴に殺されてたまるかよ！」

「お前は初めての实战だったっけか？ まあ、無理もないな、最初は誰でもそんなもんさ」

「何でお前はそんなに落ち着いてるんだよ！ ……死ぬのは怖くねえ、でもあんな名前もわからない奴らにっ！」

興奮している兵士を、ベテランがなだめている。そんな光景を見て、セレナはうつすらと笑う。「ねえ、貴方、知らない人に殺されるのは嫌？」

「ああっ！？ ひっこん、で」

今まで威勢良く叫んでいた若手兵も、セレナを見ると、急に黙りこんでしまう。

「デュアリス様！？ 申し訳ありませんっ、無礼な口を」

「それは良いんだけど……ねえ、私の話、聞いている？」

「は、はい……」

兵士はセレナの話を、全く聞いていなかったが、流れのままに返事をして、嘘をついた。

「ふうん、まあ良いわ。それで？」

「はっ……？」

「それで……知らない人に殺されるのは嫌って聞いているんだけどな」

「あ、はい、申し訳ありませんっ」

いつまで経っても、自分の問いに答えてくれない兵士に、セレナは内心イライラしていた。

「自分は、嫌であります！ 死は怖くないですが、それでも知らない奴に、この命をくれてやる程、自分の命は安くないと思っていま
す」

スラスラと言う若手兵。恐らくは根っからの本心なのだろう。その言葉には一切の迷いが無かった。

「そう……貴方、ちよつと来なさい」

セレナは努めて優しく、その若手兵を手招きする。

若手兵も、全く警戒する事無く、セレナに近づいていく。それは当たり前
の行為だ。普通ならば仲間同士で警戒する必要は無く、この兵士の行動は、大方正しいといえるだろう。

「そうよね。貴方の命は訳のわからない相手にあげる程、安くはないわよね？」

「は、はい？ つぐ!？」

セレナは近づいてきた兵士の顔を、左手で優しく撫でる。そして空いた右手に氷の刃を形成し、兵士の心臓を貫いた。

兵士は即死だった。

その行動に、近場にいた全兵士達が見つめる。優しく、おとなしいデュアリスしか知らない兵士達にとっては、セレナの行為はまさしく異端である。

「貴方達も覚えておきなさい。貴方達はただの戦争の駒よ、自分の命を過大評価してはいけないわよ？ とつと敵を殺し、そして死んできなさい」

セレナの言葉に、誰も反応を起こさなかった。いや、起こせなかったのだ。自分も心臓を一突きで殺されてしまうかもしれない、そう考えて兵士達は納得できなくても、理解しなければならなかった。そんな兵士達の反応を楽しむように、セレナは再び微笑する。そして足下に横たわる若手兵を、まるでゴミを見るように見下す。セレナにとっては、死んだ人間など肉塊に過ぎなかった。

「私が殺してあげたわ。嬉しいでしょ、満足でしょ？ 貴方の望み通り、知らない人間に、貴方の命は取らせなかったわ。……覚

えておきなさい、貴方の命を奪いし者の名は、氷水の騎士セレナよ」
満足した表情で周りを見回すと、大きな声を出し、兵士達に呼びかける。

「次の進行は、数時間後よ。それまで各自は戦いの準備に取りかかりなさい！　　ああ、あとはこのゴミも片付けておいてね」

それだけを言い残し、セレナはデュアリス専用のテントへと入っていく。

「うふふ、待っててね、デュアリス。すぐに兄さんを貴方の物にしてあげるからね。……私は永遠に貴方の味方」

それから三時間程が過ぎた。城国軍は、新しくセレナ指揮の下、シュネリ湖侵行作戦を再開したのだ。

ザードリブを拠点とし、レジスタンス兵が集まる。その中には、まだ傷も癒えないティータと、ソリディアの姿が確認できる。ラック兵士長が指揮し、再度襲ってくる城国軍からの防衛戦を行う。

「俺は何と言われようと、前へ出て戦うぞ？」

ティータは、ソリディアに対して言葉を投げる。

「うむ、構わんよ。ここで駄目だと言っても、ティータは聞かんし、何よりも前に出てくれないと、私達はあっさり全滅だ、違うか？」

「話が早くて助かるな。そういう事だ、デュアリス……いやセレナは、そういう相手なんだ」

「初めてティータ以外のアルティロイドを見たが……なるほど、あれは危険だとすぐにわかったよ。それにそう来ると思って、ラック兵士長には話を通してある。……だが無理はするな、ティータの実力は認めているが、本来ならば安静にしていなければならぬ体なのだからな？」

軽く返事をして、ソリディアの言葉を受け止めた。

「と、いう事で、みんなで一致団結をし、城国軍からの支配より、我々の暮らす場所を、シュネリ湖を守ろうではないか！」

リック兵士長の出撃前の激励も終わり、いよいよ二回目の防衛戦が始まった。

「俺はセレナ……いや、敵の大將を叩きに行く」

「うむ……それはティータに任せるしかないのだが……大丈夫なのか、そんな怪我をした状態で？」

「大丈夫じゃなくても、俺が行かなければ、セレナは皆殺しにする戦うしかないんだ」

「そうだな……。また、お前に全てを任せる事になってしまつた。正直、すまないと思つている」

「気にする必要は無い。アンタはまだまだ必要となる人間だ。アンタの経験を活かして、あの馬鹿とかを導いてやるんだ」

ティータはそう言い、颯爽とシユネリ湖の空を、翔ぶように走る。そんな姿を、ソリディアは申し訳なく思いながらも見送つた。

（馬鹿者。お前も必要なのだぞ？ お前を、ティータを待つ人がいるではないか。……死ぬのでは、ないぞ）

怒号とばかりの、兵士達の気合いと共に、ソリディアも戦場へに入る。今回はレジスタンス側も、温存していた兵力を使っているらしく、戦力差は攻めてきている城国軍と大差がない程である。最前線では既に戦いが始まっているのだらう。剣と剣が弾きあう金属音が、ザードリブまで聞こえる程だった。

ティータは、レジスタンスと城国の、両方に捕まらないように、高く速く動き、いち早くセレナを見つける事を最優先とした。

（おかしい。これだけ捜しているのに、セレナを見つける事ができない……。見逃したわけでもないはずだが……。あるいは、まだ出ていないのか）

ティータの考えは、的中していた。セレナはまだ前線に出ていなかったのだ。

「うふふ、私が兄さんとともに戦って勝てるわけがない。兄

さんは最強のアルティロイド……勝つ為には、私好みの戦場にさせていただくわ」

セレナは、全身に力を溜めるように、掌に集中させる。すると白く輝く、光の玉が発生する。

「このシュネリ湖を制圧する前に、私なりのコーディネートをするわ……クリエイト・アイスワールド氷結世界！」

セレナの力の解放と共に、シュネリ湖は、一気に氷に包まれていく。広大な湖の水は、その力によって全て凍りついてしまっている。「これで良いわ。さあ、兄さん……殺戯曲、第二幕を始めましょう」冷笑し、トライディアを装備する。セレナも、その最前線へと、己が身を進めていく。

(どういう事だ。突然、湖が凍りつくなんて)
その異常な現象に、驚いたのはティードだけではなかった。いや、むしろザードリブを筆頭に、シュネリ湖周辺に住まう、レジスタンス兵が何よりも驚いている。

この北の大地シュネリ湖は、寒さこそ極寒と呼べるものかもしれないが、何故か雪、あるいは氷に関係した現象が起こらないのである。それ故に、突然大地が凍りつくなんて事は、起こりうるはずのない現象なのだ。

(こんな事ができるのは、デュアリスの膨大な精神能力の成せる技だ。肉体は同じといえど、セレナも同等の事ができるみたいだな。そして、こうまで仕掛けたという事は、セレナも動き出したという事だ)

「 うふふ、御名答、かしらね 」

「 ……むっ! ? 」

突然、後方からトライディアによる突撃が、襲ってくる。それを咄嗟に避けると、距離を置くように軽く後ろへ飛ぶ。

「 あら、さすが兄さんですね。遊びもなにもなく、心臓を一突きして殺してさしあげようとしたのに…… 」

「……生憎、お前に易々とくれてやる命は、持ち合わせていないんでな」

「うふふ、見た目通りに食えない人。……ま、それも良いわ。そうになったらいたぶり殺すのも、また一興かもしれないわ」

一人楽しそうに、微笑しているセレナ。

ティーダは黙って、そんなセレナを無表情に見つめる。

「デュアリスの為よ、死んでください、兄さん！」

微笑を終わらせると、一気に残忍な本性を表す。カルマンを刺した際には、殺意すら無かった。それはセレナにとって、その程度の事は呼吸をするのと一緒だからだ。だが、今は明確な殺意をティーダに向けている。

一気に間合いを詰めると、再びトライディアの槍の特性を活かし、そのリーチと、鋭い突きを繰り出す。

ティーダもヴェルデフレインを用いて、トライディアを捌いていく。

激しいオリハルコンの超金属音と、その衝突による火花は、近くで見えていた兵士の敵味方を問わず、その視線を釘付けにした。

「さすがです、兄さん。全ての攻撃は、貴方を殺すように仕掛けているのに、難なく避けていくなんて」

「……お前は殺気がありすぎるんだ。そこまで殺す気マンマンだと逆に避けるのは容易いものだぞ？」

鋭いトライディアによる、突撃を避けながら、そう言葉を発する。ただ攻撃のほとんどが、気を抜けば一気に突き殺されてしまう、そんな一撃ばかりである。

難なく避けられているのは、ティーダの身体能力に大きく依存している。

「セレナ……と、いったな。デュアリスを出せ、お前には用は無い！」

「デュアリスを？ デュアリスを出してどうする気？」

「決まっている、ここから退いてもらうように説得する。お前に言

つても無駄だろうからな」

「くっ、あっはっはっは！ 兄さん、動きはキレても、頭のキレは鈍いみたいですね。私がデュアリスを出すと思つて？ せっかく表に出たのに、また裏に戻る私じゃないわ」

まさに馬鹿にするかの如く、高らかに笑つてみせる。

姿を見ても、ティータは表情を変えず、極めて冷静だった。

「もう一度言う。デュアリスを出すんだ」

「……答えはノーに決まっていますでしょ？」

「……ではどうすれば、デュアリスを表に出せる？」

「そうねえ、人格交代の条件には、わかっているだけでも三つあるわ」

セレナは人差し指、中指、薬指の三本の指を立て、相変わらずの妖しい笑みを浮かべている。

「一つは精神的に追い詰められた時」

（そうか、デュアリスがセレナに交代したタイミング。デュアリスにとっては王の命令と、俺の頼みとの板挟みになっていた）

「二つ目は、自分の意思で人格交代する事。……当然だけどこれは無理ね、私は交代する気なんて微塵も無いわ。そして三つ目は現在の主人格の意識を断つ事ね」

そう、セレナから人格交代の、具体的な条件が述べられた。

「なるほどな。それがお前達の交代条件か。そしてお前が口の軽い奴で助かったよ、それならば三つ目の条件を達成させるのみだ」

「うふふ、できるのかしら？ いくら最強のアルティロイドだからって、私をそう易々と倒せると思つたら大間違いよ」

「……そうだな。だが、やらなければならないのなら、俺はどんな手段を使つてもやってみせるさ」

「そう、ですか。……兄さん、私がどうして大地に氷化粧を施したかわかりますか？」

セレナは、自分で作り上げた氷世界を、ゆっくりと見回しながら問う。

ティータの考えとしては、自分に有利な条件にする為のもの。自分自身がフィールド形成能力を持っていない為、詳しい心情までは読み取れなかったのだ。

「わかるけどわからない……そんな顔をしていますね。それでは半分の正解と、半分の不正解です。と、いつでも、大方の正解はしていると思いますけど……」

「御託はいらない。何かがあるのなら、それで来れば良い。お前の全てを打ち砕いて、デュアリスを引っ張り出す！」

言葉通り、全てを倒して進む気迫を見せている。

挑発を受けたわけではないが、セレナもつられて戦闘意欲をかき立てる。いずれにしても、最初に挑発したのはセレナであり、この場合、先に動くべきなのもセレナである。

（兄さんには力押ししても勝てない。……どんな卑怯な手をおおうと、私はデュアリスの為に勝ってみせる。それが、私のこの世界に生まれ、デュアリスに寄生している最大の使命！）

目を瞑り、心の中で気持ちの整理をつけていたセレナは、その決心がつくと、カッと目を見開いた。

「……全力で、殺してみせます。行きますっ、グラントニードル大地の氷棘！」

勢い良く、自身の左手を下から上へと掲げる。

「むっ!？」

すると、ティータの足元から、無数の氷の棘が形成される。咄嗟に上空に逃げたティータを、セレナも追撃する。再びオリハルコンの剣と槍による、火花散る攻防が行われる。

セレナの攻撃は、見た目以上に鋭く速い。単純な戦闘能力ならば、風の騎士ジュークと引けをとらないであろう。しかし、単純に戦ってしまえば、セレナがティータに勝てる道理はない。ティータを抜きにすれば、戦闘能力の最も高いのは爆炎の騎士ラティオだが、そのラティオでさえ、善戦したとはいえ真つ向勝負において、ティータに敗れたのだ。

「どうした、その程度では俺には勝てないぞ」

「うふふ、焦っちゃいけませんよ、兄さん」

（しかし、先の戦いによる傷が癒えてないはずなのに、ここまで戦闘差があるなんて！）

言葉の割に、焦りではないが、内心良く思っていないのはセレナだ。予定では不意打ちによるダメージがある為、肉弾戦でもそれなりに対抗できるはずだったのである。

（もっと弱らせる必要がある。そういう事ね……）

最後の突撃をわざと防御させ、その瞬間に後方へ下がる。そして後方へ飛ぶのと同時に、先程と同じように左手を勢い良く掲げた。

「飛べ、飛翔する氷棘！」

すると、形成されたグラウンドニードルが、ティータ目掛けて足元から襲ってくる。

「ちいっ……！」

向かってくる氷の棘を、自分も火の幕を張る事により、かわしていく。氷の棘は、火の熱により無惨にも溶けていく。

「はっ！」

その防御行動による、一瞬の間を見逃す事無く、セレナはトライディアによる追い討ちをかける。しかしこれだけ揺さぶりをかけても、ティータの剣の防御を突破する事ができない。いや、ダメージが無いわけではないのだ。現に所々でかすり傷程度なら与えている。しかしかすり傷をどんなに与えても、それではこの最強のアルティロイド、火の騎士ティータを倒す事はできない。

「……何ていう防御力、いえ戦闘センスとすべきかしら。これなら最強のアルティロイドというのも、ラテリオの馬鹿がやられたというのも信じられる」

「……いや、戦闘センスはお前の方があつぞ、セレナ」

「どづいつ、意味かしら？」

「これは俺の当てずっぽうの推測だが、お前はデュアリスに寄生したのは数年も前の事だろうが、その事 実としては戦闘経験はあまり無い、もしくは全く無い、違うか？」

「ええ、確かに私は兄さんの推理通り、これといった戦闘経験はありません。それが何か？」

「だからだよ。戦闘センスが凄いとこは、経験が全く無いにも関わらず、俺と渡り合っている。自慢する気は無いが、俺はアルティロイドにこの身を改造されてから、幼い頃より実戦を経験させられた……それだけ、人も殺した」

その話を、セレナはただ黙って聞いている。

「わかるか？ だからこそお前は凄いな。そのセンスは尊敬に値する」

「……どうも」

「だが逆に経験の無さが、この俺との戦いに勝てない理由にもなる」
「ほう、それはどういう？」

「わからないのか？ 天才的なセンスで、経験が無いにも関わらず、互角の戦いができている。しかし経験が無いからこそ、ここからもう一伸びができない。だから攻撃回数割に、致命打を当てられない事に、焦りなんか感じてしまっただ」

ティータは、セレナの心の中の焦りを見抜いていた。しかしそんな言葉を聞きながらも、その動揺を表に出さなかった。

「なるほど、戦闘経験の不足。それが私の弱点ですか……」

「そういう事だ。組み手とかだったら、ここで終わりにしても良かったが……生憎と今は実戦中だ。その 天才的センスが覚醒する前に、お前の意識を断ち、デュアリスを出してみせる！」

これまでのスピードとは、一線を画した速さで、セレナに斬り込む。この速さはやはり電光石火と形容するのが相応しい。

「くっ！」

その身のこなしも、剣の走る速さも、全てが電光石火。セレナもトライディアを盾にして、かろうじて防御する事が精一杯になってしまう。

（これが、本気を出した兄さん……なるほど、私なんかでは話にならない。根本的にデキが違いすぎる。センスとか経験の差とかうん

ぬんの話じゃない！)

何とか防御だけでもできているのは、ティーダの攻撃がセレナを殺す目的ではなく、デュアリスを覚醒させる事にあるからだろう。事実、殺気を持って攻められれば、一瞬で葬り去られてしまうのは、戦っているセレナが一番わかっている。

(もう、限界ね。物理的に戦っては、勝てないのは明白だし、何よりも、もう守りきれない。……切り札だったんだけど、使わざるを得ないわね)

その防御の壁の向こう側で、セレナは気づかれないように、ほくそ笑んでいる。

ティーダは、そんなセレナの企みを見つucker事ができずに、怒濤の攻めで追い詰めていく。最も気付く事ができても、はたして避けられたのかは定かではない。

「……バスタードフェイス氷結爆弾」

「……っ？　ぐうっ!？」

セレナが小さく、その言葉を発した。ティーダもはっきりとは聞き取れなかったが、何かを呟いたのがわかった。

しかし、その瞬間である。突然、ティーダの腹部に激痛が走り出す。まるで不意打ちを受けて、氷の刃が刺さった時のように。

咄嗟に刺されたのかと思い、セレナを見るが、その両手はトライディアを握っている。氷で形成した飛び道具らしきものすら見えな。だが確かにティーダの腹部からは、おびただしい量の血が流れ出ている。そしてそこは氷の刃で刺された場所と、寸分違わぬ位置だった。

(馬鹿なっ、こいつは一体何をした!？　反撃の際は与えなかったはずだ……)

「どうです、さすがに効いたでしょう？　同じ位置を攻撃されると。一回目は刺されて、二回目は内部から爆発です」

(内部から爆発?　……まさか!)

「お気付きになられたようですね。最初に刺した時点で既に仕掛け

られていたんですよ。氷の爆弾が、ね。癒えてない傷もそうですけど、体の中で氷が拡散するのも痛いでしょうね。経験が無い私でも、それぐらいは予想できますよ。……ふふふ、あーはっはっ！」

「……貴、様！」

通常、刺された程度の傷ならば、アルティロイドの自然治癒で簡単に治ったはずだったのだ。それが全く完治しなかったのは、セレナに宿っている氷の獣の魔力が働いていた為だった。

「さあ、今度は私が一方的に攻撃させていただきますよ。……卑怯なんて仰らないでくださいね？ これは遊びでも模擬戦でもないんですから。これは……命のやり取りをしている戦争ですから」

見下すような笑みを浮かべ、セレナが襲いかかる。

25 赤に染まる蒼

刺されていた傷口から、大量の血を流し、その場にティーダは倒れる。あまりのダメージに吐血までした。

セレナに仕掛けられた策略。その氷結爆弾の威力は、人間ならば一発で、その身を爆散させられていただろう。なまじ防御力が人間よりも高い事が、威力を流す事もできず、体の中で留まってしまった要因だろう。

「痛いでしょう、兄さん？ 大丈夫、すぐに楽にしてあげますよ。」

……そういえば、最強のアルティロイドの兄さんを倒せば、私が最強になるのかしらね？」

既に勝ちを確信した為か、セレナは戯れている。生死の問題は無く、如何にして殺そうか、そんな事を考えていた。

「とりあえず、先に言ったように、いたぶり殺してあげようかしら。このセレナに逆らった罪は、兄さんといえども償ってもらいます」
言い終わると同時に、セレナは死に体になっているティーダに襲いかかる。

再び、失血により意識が遠のいているが、意識とは関係無く、体がなんとか反応し、セレナの攻撃を防ごうとする。

「構えだけとつたって！」

そんな死に体の男が、まだ戦闘体制を維持しているのが気にくわないセレナは、力任せにトライディアを振るう。力任せといつても所詮は女の腕力だが、力の抜けている男を吹き飛ばすには、充分すぎる威力を持っている。ティーダの体が一回でも激しく動くたびに、鮮血が飛び散る。

「こうなつては最強のアルティロイドも、最弱のアルティロイドですね。……しかし、これだけ血を流しておきながら、よくやるものです」

今のティーダには、セレナの言葉の半分も聞き取れていない。失

にかけている意識を、繋ぎ止めているのがやっとの状態である。皮肉にもセレナと初対峙した時と、ほとんど同じ状況になった。違うところは、あの時助けしてくれた仲間が、今は絶対に来ないという事のみである。つまりは絶体絶命の状態である。

「……言葉を喋っている余裕も無いのに……なのに戦いの反応はできる、貴方はプロよ。……いいえ、貴方は戦闘における殺人鬼」

淡々と述べた。無表情に、感情を込める事無く。

「といつても、これから死ぬ男に、有り様の哲学を語ったところで、何の意味もないわ。死ねばただの肉塊だもの」

セレナは、氷の棘を人差し指に形成し、それを投げつける。氷の棘は、ティーダの右肩に命中し貫通していく。

「ぐう、っ！」

右肩に突然の痛みが走った事により、失いかけていた意識が一時的ながら戻る。

（……くそ、ほとんど落ちていた。体が鉛のように重く、意識が繋いでいられない……数多くの実戦を経験してきたが、初めて経験する。……これが、絶対的な死か）

自分の体が、自分の体と感ずる事ができないでいる。ただひたすらに重く、それでいて何時でも軽くなれる。拷問と呼ぶには生ぬるいが、早く楽になりたい、そう感じさせる。

だが停止しかけている命の中で、ただ一つだけわかっている事があつた。それは、楽になるという事は、自身の体が死を受け入れるという事だ。ティーダには、それを受け入れる覚悟もあつた。最強のアルティロイドという肩書きにも、何の未練も無い。

しかし理性がそれを受け入れようとしても、本能がそれを拒絶していた。

（……耳鳴りか、雑音が酷い。死の間際には音が無くなるものかと思つたが……いや、誰かの声、か。さつきから俺を呼んでいる）

ティーダは、その雑音がやかましく感じている。その雑音がティーダの意識を、ギリギリのところまで止めていた。その雑音の正体が

知りたくて、ティードは残された神経を集中させている。

「死になさい」

動かないティードだが、依然として意識を保ち続けている。そんな動かない相手でも容赦なく、セレナはトライディアをティードの左肩口へと突き刺した。突き刺したまま持ち上げると、宙づりになり、動かないティードを眺める事ができる。

「……何故、もう致死量のダメージを与えたはず、なのに何で兄さんは生きているのっ!？」

セレナの言葉通り、ティードの体は既にボロボロと形容するには生ぬるい程の傷を負っている。中でも氷結爆弾による傷跡を中心として、即死に至る攻撃を受け続けている。

「こんな……喋れもしない男を殺す事もできないなんてっ……! 屈辱だわ、もういい、心臓を一突き……それでお終い。もうこの殺戯曲も飽きてきたわ」

セレナはトライディアを振るって、ティードの体を遙か上空まで投げ飛ばす。そして、槍の刃を立てて、心臓に狙いをつける。

「さようなら、兄さん。そしてこれで、デュアリスは幸せよ……うふふ、あーはっはっは!」

上空に放り投げられながらも、ティードはなお雑音に意識を集中していた。

(!)

(……何を、何が聞こえるんだ？ 何も聞こえない)

(ダッ!)

(……雑音……いや、声、か……。駄目だ、わからない……意識も、いよいよ無くなってきた。もう……終わり、か……)

(ティード!)

意識が完全に絶たれようとした瞬間、それは聞き取れた。自分の名を呼ぶ声に、今一度、ティードは意識を繋ぎ止める事に成功する。
(誰だ……誰が、俺を呼んでいる?)

(ティード!)

駄目、死なないで！ 生きて、生きて

帰ってきて！)

それは、その声は確実に、ティーダの意識に干渉してくる。そしてその声の正体を理解した。

(そうか……あの、馬鹿……。こっちは、死んで楽になりたいってのに……悪魔みたいな注文を、出してくる……もんだな)

ティーダの意識は、覚醒した。

「……俺は……まだ死ねないっ！」

「……なっ!？」

ただ落下して、完全なる死を待つだけだった肉体。その肉体は、再び活動を始め、空中で体制を整える。しかし差し出されたトライディアを避ける事は、既に不可能な位置にあった。

「また悪あがきをっ! そんなに最強の二文字が恋しいか!」

「……違っ! 俺は、生きるっ、生きて、帰って……こんな俺を……」

……待つていてくれる奴がいるんだっ! うおおおっ!」

トライディアを避けきれないと判断したティーダは、わずかながら体をずらし、左手でトライディアの刃を受け入れる。掌から肩まで、その長槍トライディアが突き刺さった。

「なっ、馬鹿な!？ 何でそんな真似ができる!」

「……死ぬわけにはいかないからだ。その理由を思い出せた。……お前を倒せるなら……左手の一つぐらい安いものだ!」

ティーダは、トライディアを力強く握りしめた。

「くっ、な、何を!？」

「ここで……お前を斬る」

その言葉に嘘偽りは無かった。今までは気絶させる事を念頭に戦闘をしていた。悪い言い方をすると、手抜きをしていたのだ。

だが意識が覚醒したとはいえ、冷静な思考回路が欠如している今のティーダは、ただ幼い頃からしてきた事を、本能的に行っている。

そう、人を斬り殺すという事を。

そして、深紅のヴェルデフレインを、無情にセレナに降り下ろす。「くうっ、このお!」

咄嗟にトライディアを手放し、ヴェルデフレインを防ぐ為に、両手に氷の刃を形成する。しかし、氷の刃は、ヴェルデフレインの前に硝子が砕けるように、粉碎させられてしまう。

(……ま、まさか、デュアリスの体がある限り、兄さんは殺す気で私を攻撃してくるはずは無いはずなのに！)

セレナはトライディアを見やると、そこには圧倒的なまでの存在感を示す、最強のアルティロイド、火の騎士がいる。

「ううっ！」

セレナは初めて恐怖した。自分とは全く違う殺意。いや殺意と呼べるのかさえもわからない。ただ一つ言える事は、ただ怖さを植え付けられるという事のみ。

「……………！」

気力で意識を繋ぎ止めたものの、体のダメージは既に普通の人間ならば致死のダメージ。トライダは力無くその場に座り込んでしまふ。

(一瞬……だけじゃない！ そうよ、相手はもう死に体、押せば勝てる、殺せる相手じゃない！)

(ここまで追い詰められるとは……もう完全に認めよう。目の前にいる騎士は、今まで出会った中でも、屈指の実力者だ。もう……デュアリスを助ける為になど、言うてはいられない。この戦いに全力を尽くす！ それが、ちっばけな俺にもできる最大の行動だ)

トライダもセレナも、お互いにその機を伺う。

そして動き出したのは、ほんのわずか一瞬の事だった。

「先手で行かせてもらおう！ ニードルアイス！」

トライディアが、まだトライダの左手に刺さりっぱなしの為、代わりの武器として、右手に氷の刃を形成する。そして氷の刃を用いて、まるで雨のように突きを繰り返す。

トライダも残った右手に持つヴェルデフレインと、体捌きで、攻撃による被害を最小に押さえながら防御していく。

(やはり、もう驚きはしないわ。この男は死に体でも、しぶと

く生き残る。だから、もう完全に息の根を止めるまでは、驚きはしないわ！)

「グランドニードル！」

「っ!？」

右手の氷刃の突撃と、左手による飛び道具による攻め。

ティーダの足元からは、無数の氷の棘が形成され、襲いかかる。

が、全ての棘は、当たる前に消滅する。ティーダは、火の聖獣 エンドラの力を使い、自身の周りにオーラを纏っていた。

(この程度の揺さぶりでは、崩せないって事ね。 なら、これはどうかしら?)

セレナは、ティーダの左手に刺さったままの、トライディアに手をかけ、それを無造作に、そして乱暴に引き抜いた。

「ぐっ、あああっ！」

もう残っていないと思われたが、左手からはおびただしい量の血が流れ、耐えがたき激痛が襲う。

「まだよっ、まだこんな程度じゃ、貴方は死なないんでしょ!？」

セレナの指先に、白い光の球体が見える。

「バスタードアイス。外部からでも、そのダメージは相当なものはずよ！」

光の球体の正体は、ティーダの刺し傷の中で爆発した氷結爆弾。

今度は目の前で炸裂し、ティーダの胸部に無数の小さな氷針が刺さっていく。そしてその威力と、その威力を耐えるだけの力が残っていない為、大きく後方へと吹き飛ばされる。

「あーはっはっは! どうです、氷結爆弾の味は!？ 内部ならその名の通り爆弾に、外部ならば散弾のようになり、相手にダメージを与えるのです！」

そんなセレナの高笑いも、耳に入らなくなってきた。

(……… 凄い奴だ。……… 素直に、そう思う……。もう、俺に小細工をする、余裕は……… 無い)

剣を支えにして、何とか立ち上がってみせる。しかし立ち上がっ

たものの、もう感覚という感覚が、全く機能していなかった。

(セレナ、は……どこだ)

見えなくなつた視界で、セレナを捜す。

(セレナは、こつちです)

「……だ、れ……だ？」

突然の呼び掛け。声にならない声で、聞いただした。

(私です、兄さん)

「その声 デュアリス、か……？」

(そうです、兄さん。デュアリスです)

「そう、か……最後の最後で……お前の声を聞けるとは、な。……それで、セレナの位置が……わかるんだな？」

(はい。私が、兄さんを導きます)

ティードは、まるで何かに包まれるように、体を支えられると、不思議な力に体の向きを変えられる。

「……こつちに……セレナが、いる……ん、だな？」

(はい、このまま真っ直ぐ。セレナはそこにいます)

「……だか、見ての、通り……今の、俺には……ただ力任せに、剣を、振る……事しか、できない、ぞ？」

(大丈夫です。それでも、兄さんは勝ちます。……私も頑張りますから)

励ますように、言葉をかけるデュアリス。ティードも不思議と、雀の涙ほどだが、気力が回復した気がしていた。

(今です！ 兄さん、走つて、力の限り！)

「 うおおおおお！！ 」

残つた体力と気力を、気合いの掛け声と、その斬撃に回す。

「最後の行動が、無様に走ってくる事だけだなんて……拍子抜けだわ、兄さん！ なら私は兄さんを最大に苦しめた氷結爆弾で、今度こそ終わりにしてさしあげます！ 最大出力です、死になさいつ、ティード！」

(そうは、させないわ、セレナ！)

「何っ!？」

氷結爆弾を投げつけようとしたセレナの体は、投げる前に謎の硬直が起きる。

「デュアリス!? そんな馬鹿な、私が表にいる間に、デュアリスの人格が覚醒するなんてっ!」

(もう、終わりにしよう……セレナ。貴方に、兄さんを殺らせはしない!)

「……ふ、ふざけるな、デュアリス! 離せえっ!」

セレナの体は強制的に動かなくなり、その体に人格交代が起きる。髪の色は銀髪から、青髪に変わる。

「ごめんね、セレナ。貴方は悪くない、これは私の意志……そして、貴方もまた被害者なのだから……」

(デュアリス、よしてえ!)

次の瞬間、ティーダの剣が、デュアリスの体を斬り裂いた。

「デュ、アリス? そんな、馬鹿な……」

ティーダの目の前には、自らの手で斬ったデュアリスと、美しいと感じさせる、真っ赤な鮮血が見えていた。

26 神に愛されぬ生命

氷の銀世界に栄える、一面の赤。

その中心には、深々と斬り裂かれたデュアリスが横たわる。おびただし出血量が、否応なしに感じさせる。「もう助からない」と

「……は、あ……すう……うっ、ゲホッ……ゲホッ……！」

小さく小さく呼吸をして、咳と同時に血を吐き出す。

「……デュア、リス。何故……何故なんだ……？」

自分が斬ってしまった。デュアリスの血がベツトリとこびりついた、深紅の剣ヴェルデフレインを握っている。その剣は心なしが、震えている。

「兄、さん」

もう喋る事さえ辛い体だったが、デュアリスはかるうじて言葉を出す。

「何で……お前が、そんな事を……」

「……兄さんを、助けたかった……からです。兄さんには、死んで、ほしくなかった……」

「馬鹿なっ、こんな事をすれば……お前が死んでしまうのは……わかっていたはずなのに……」

自分自身の、あまりの不甲斐なさに、強い握り拳を作る。その手からは、血が滲み出していた。

「……良い、んですよ。……兄さんの……為なら……」

「デュアリス……」

静かに目を閉じ、少しずつその活動を止めていくデュアリス。真っ赤な血とは裏腹に、肌の色は明確に白くなっている。

「……セレナに、支配……された、意、識の中で……暖かな……光が、私を導いて……くれ、ました……」

ティータは続けさせた。もう助からないから、悔いを残させず、全ての言葉を聞いてやろうと。それが、自ら手をかけてしまった、

自分への僅かな戒めになる。「これは逃げだろうか？」と、ティータは自問自答する。

「暖かな、光、か」

「まるで……まるで……お母さん……みたいな……優しい……暖かさ……」

ティータの言葉は、もう耳に入らないのか、デュアリスは淡々と自分の言葉を続けた。

「母の、暖かさ……」

「はぁ……兄さん……いますか？」

虚ろな目で、ティータを捜す。もう既に、その目は働いていない。「いるぞ、ここに！」

ヴェルデフレインが落ちた。もう動けないデュアリスの手を、ティータはその存在を確かめるように握る。

「……あぁ、兄さん……。兄さんの、手も……暖かい……」

その言葉に胸が痛む自分がいた。

幾人もの人の命を奪った、この汚れた手に、暖かい、と、目の前の少女は言うのだ。

「……セレナ、を……責めないで、あげて……ください……」

「セレナを？」

実際、全く動いていなかったが、デュアリスは頷いた。

「……あの、子も、被害者……。戦わない……。人を殺さない……。私の為に……。生み出され、た……。人格……。セレナ……。が、いな……。ければ、私は……。とつくの……。昔……。うっ、ゲホッ、ゲホッ……！」

「デュアリス、もういい……。誰も、誰もセレナを責めたりはしない……！」

最後の吐血だろうか。苦しみを越え、その身には安らぎが訪れる。

そして、デュアリスの体は淡く光だし、粒子が飛び始めた。

「これは、一体何だ！？ デュアリスの、体が、消えていく……」

……

「……………神様に、愛されて……………いない、から……………。……………私達
……違法……………から、神様……………こ……………大地……………で、死、なせてくれな
い……………よう、ね」

もう言葉すら届かなくなっていた。ティーダはデュアリスの消え
そうな言葉を、懸命に拾い集める。

（ 神に愛されていない命）

「……………兄さん」

もう出ていない声。聞こえない声で、ティーダを呼ぶ声。

ティーダも、その声を聞き取る為に、デュアリスの口元へ耳を傾
ける。

「 愛しています。 誰よりも。 生きてください」

「デュアリスッ！」

デュアリスの体は、いや命さえも、全ては光の粒子となり、天空
へと還っていく。

そこには、肉体も、おびただしまでの血痕も、完全に消え去っ
ていた。

唯一そこに残されたのは、清蒼の槍トライディアのみである。

「……………神は、俺達をこの大地に眠らせてはくれないのか……………。……………
デュアリス」

光の粒子が昇っていった天空を見上げる。すると、何かが降って
くる。それはとても小さな物だった。

「……………これは？」

その物は、真っ直ぐにティーダに向かって落ちてきた。それを受
け取り、手の中にある物を見ると、とても見慣れた物がそこにあっ
た。

「こいつは……………ティオの」

それは赤いゴム紐。そうティオとデュアリスが交換したゴム紐で
ある。

（ それを、ティオという子に返してあげてください。何年かか
っても良いです。いつか、必ず ）

それは天空から聞こえたデュアリスの声だったのだろうか。
空は憎々しい程に晴れやかだった。 戦いは終わった。

自身の傷も癒えぬまま、ティードはザードリブへと帰還する。道中にはレジスタンス、城国軍、合わせて何人いるのかもわからない程の死体と重傷者が目につく。

（ 規模の大小はあるが、サンバナ攻防戦時と全く一緒だ。……デュアリスという身内の命が亡くなって、初めてわかった。なんて……馬鹿な事を！）

戦いにおける勝敗、怪我人死人の有無、その戦いにおける総被害全てはティードにとって無関心な、関係の無い事だった。

しかし今、初めてこんな戦いにおける虚しさのようなものを、その身に体験している。いるのが当たり前で、いなくなつてわかる寂しさ。

（デュアリス……俺を生かしてくれた、お前は……俺にどうすれば良いと思う？）

心の中での問いかけ。だが当然、その問いに答えしてくれる人物はいない。

「そんなに……甘いものではない」

自分でそれを実感させる為に、自分に向けて言葉を放つ。

程なくすると、ザードリブへ辿り着く。内部から、その周辺にかけての混乱は依然として続いている。兵士の家族の者だろうか。女と子供は泣き叫び、散り逝く命へ願いもしない別れの言葉をかける。ザードリブの近くにも、大きな穴が掘られ、そこには敵も味方も関係無く、大地に、神に、肉体を還すべく別れの儀式が営まれていた。

（ 俺達は、どんな死に方をしても……神に許されず、大地に眠らず、光となり散る存在。……その先に待っているのは、天国か地獄か……あるいは完全なる無か）

今まで考えた事も無かった、死への哲学。初めて見た同じアルテイロイドの死は、ティードの心を激しく揺さぶっている。

「ティードッ!?」

突然、見当違いの方向から、あまりの驚愕を隠せない声で自分を呼ぶものがあつた。

振り返ると、見慣れた桃色の髪がそこにある。見慣れた服装がそこにある。見慣れた、少女がそこにいる。

「……そうか、案外と、お前だった……のかもな」
「えっ……!?」

その顔を見ると、ティードは突然の安堵感と戦いによる激痛により、意識が急速に離れていった。

「ちよつとティード!? しっかりしてよ、誰か、誰か来てください!」

急に倒れたティードに、ティオは慌てて駆け寄り、出来る限りの応急手当ををする。しかし素人目で見ても凄惨な怪我の数々は、応急手当程度では、焼け石に水なのは一目瞭然であつた。

ザードリブの人々に運ばれ、第一級救急患者として、ティードはリコオの手術を受ける事になる。ソリディアは軽傷も無く帰還。カールマンも後日意識を取り戻した。

この戦いによる被害数は、ザードリブ近隣のレジスタンスグループ「ルコード」の壊滅。その他、三つのレジスタンスベース半壊。死者、敵味方を合わせて現在確認できるだけでも、四百人以上を記録している。氷結世界によって氷に覆われたシュネリ湖も、術者が消えた事により、少しずつだが元の姿に戻りつつあつた。

そして、戦いから五日が過ぎた。

「凄いな……もう何年も医者をやっているが、こつも治りが早い奴を、俺は見た事が無い。いや、お前の怪我は治る治らないのレベルではなかつたわけだが」

わずか五日で、ティードの怪我はほぼ完治していた。この時点で

は既に、右胸を刺されたカルマンの方が、よっぽど重傷患者である。「ティード……とかいったな。お前、人間ではないだろう？ 隠しても無駄だ。隠せるわけがないだろう、普通の人間ならとっくに死んでる怪我だったんだから」

リコオの問いには、ひたすら無言を貫いている。そんなティードの態度に、軽い溜め息をつきながらカルテに目を通す。

「右腹部に貫通重傷、プラスその腹部内による爆発。左手から左肩にかけて槍が刺さった事による、腕の酷い裂傷。同じく左肩口に槍による刺し傷。次いで右肩に貫通傷。その他、切り傷などがチラホラ、と……普通なら死んでるって、仮に生きてても、まだ意識不明で床についてるのが当たり前だよ！」

半ば呆れ口調、若干の苛立ちを込めて、雑に書かれたカルテの内容を読み上げる。

「……そうだな、人間ではない……と、だけ言っておく」

「人間では、ない？ その言葉を待つていた割に、実際に聞いてみると、嘘臭く物事を見てしまうものだな」

「そうだろうな。それが人間として正しい行動だ。……世話になった、おかげで良く治った」

「こちらこそ、良い仕事をさせてもらった。今度、ここへ来た時には、特別待遇で診てやるよ」

軽い握手をした後、ティードはリコオのテントから出る。外は眩しい程の快晴。セレナが構築した氷結世界も、ようやく半分以上が溶けていた。あとは時間の問題だろう。

辺りを見回すと、初めて来た際の、殺伐とした雰囲気は消え去っていた。最も、後の祭りというべきか、悲しみだけは滲み出ていた。しかし活気を取り戻しているところを見ると、レジスタンスというのは何処も、遅しいものようだ。

「ティード！ もう大丈夫なの？」

ティオは相変わらず心配そうに、ティードの容体を聞いてくる。

「ああ、この通りだ。それで……わざわざどうした？」

「予想よりも長くパーシオンを空けすぎたから、酷な話かもしれな
いけど、そろそろ帰還するって。ソリディア兵士長が」

「……そうか。もう少し此処を見て回ったら合流する」

ティオは、そう告げられると、客人用に用意されたテントへ駆け
ていく。

「あ、おい！」

駆けていくティオ。いや、そんなティオの桃色の髪を見て、ふと
思い出す。ズボンの右ポケットに手を入れてみると、確かにそれは
あった。一気に引き抜くと、デュアリスに託された、赤いゴム紐が
現れる。

（良いんだな、デュアリス？ これを返さずに、お前の墓前に飾る
事だってできるんだぞ？）

（それをデュアリスが望んだのかしら？）

突然、自分の頭の中に響いてくる声に気がつく。この声は知って
いる声、氷水の騎士セレナだ。

（一瞬……デュアリスが来たのかと思った）

（根本的な声は一緒ですからね。……何にしても、そのゴム紐は、
必ずあの子に渡してくださいね？ 私はその監視役に来たのですか
ら）

（お前はデュアリスと共に消えなかったのか？）

（こんな憎まれ役の私は、とっとと消えてほしいと？ うふふ、残
念ですね。私は元々はデュアリスの人格の一つではないです。植え
付けられた別物の人格。……最も、私はデュアリスに寄生し続けて
長い、私の人格もまたデュアリスにある。恐らくは長くは、この世
界に魂を縛れないでしょうね）

（……そう、か。お前に殺されかけたが、いなくなってしまうのは
寂しいものだ。確かにこれは渡す）

ふと視界が現実に戻ると、心配そうに覗き込むティオの顔が見え
る。

「ティード、本当に大丈夫なの？ やっぱりお願いして、もう何日

か休ませてもらえるように、頼んでみようか？」

「いや、本当に大丈夫だ。それよりも、お前に渡すものがある」
「渡す、もの？ 何かな」

手に握ったものを、ティオの目の前に広げる。それを見てティオは「えっ？」と、驚きと困惑の入り交じった表情をする。

「これを、どうしても持ち主に返してほしいと頼まれた」

差し出された赤いゴム紐を、ティオは受け取るが、無言でそれを見つめている。

「それを……それを渡してくれたのは、女の子だった。とても優しい、誰よりも優しい女の子だった。俺も……戦場で彼女に救われた」
「そう……その子はね、デュアリスちゃんっていうの。……私の、一生の友達」

「一生の友達……か。そいつも喜ぶだろうな。……戦いの無い、本当の故郷に帰るから、もう多分会えなくなるからって、それを渡してくれるように頼まれたんだ」

「……ありがとう。私、先に戻ってるから、ちゃんと帰ってきてね！」

ティオの言葉に、適当な返事をして、今度こそ後ろ姿を見送る。その後ろ姿には、悲しさが入り交じった。少なくともティーダには、そう感じられたのだ。

（嘘は、お上手になりましたね、兄さん）

（自分の為の嘘は……誰だって饒舌になれる）

（ほう、自分の為と言っののは？）

（デュアリスが、死んだ、と、自分以外の他人に打ち明けてしまうと……本当に死んでしまったと、嫌でも実感してしまうから）

（……なるほど。でも、いつかはその悲しみと向き合わなくてはいいけませんよ？）

（わかって、いるよ）

セレナの方を向くと、デュアリスと同じように光輝き、その体が粒子化していく。

（元々、肉体を持たない存在でしたけど、いざ消えるとなれば怖い
ものですね）

（セレナ……お前は）

（この光の先に待っているのは、天国か地獄か、はたまた無か。待
っている未来がどんな姿でも、デュアリスは私が守ります。貴方は
安心して、今を生きなさい。あっちで……デュアリスと共に待つて
るわ）

言　い終わるのと同時に、セレナの存在も、光となり天空へと登っ
ていった。

（デュアリスを、頼んだぞ。セレナ……お前なら安心して任せられ
る）

そして、ティードもまた、パーシオンという今の日常へと帰還し
ていくのだった。

そして、そんな悲しみとは関係無く、最大の戦闘が、刻一刻
と近づいていたのだった。

27 帰還と新たな戦況へ

「それではな、ザードリブの発展を願っているよ」

「ありがとうございます。ソリディアさん、貴方程の人が今回の戦いに参加して下さり、真に助かりましたよ。ザードリブ以下シユネリ湖のレジスタンスを代表して礼を言わせていただきますよ」

旅立ちの日。短い間だったがティード達一行は、ザードリブを後にして、パーシオンへの帰還を目指す。

出発前の挨拶として、ソリディアとラック兵士長が、別れの挨拶を済ませていた。

「いや、しかし……」

そう言うと、ラック兵士長はティードを見る。

「ティード君、といったね。特に君の活躍は目覚ましいものだった。……君は、この支配の時代に、神が我々に与えてくれた勇者なのかかもしれない」

「勇者……俺が？」

勇者という単語に、奇妙な感覚を覚える。そしてそれと共に、自分が今までに殺した人達を、自ら手をかけてしまったデュアリスの姿がフラッシュバックされる。ティードは勇者と言われ、良い気分になれないでいる自分を発見する。

「俺は、勇者なんかじゃない！」

「はっはっは、真の勇者たる器の人間は、そうやって謙遜するものだ！ 胸を張ってくれよ、ティード君」

「……っ！」

ラック兵士長に悪気は無い。ティードもそれはわかっているのだが、そのラック兵士長の態度を流す事ができず、舌打ちをしてその場から離れていってしまう。

「な、何か悪い事を言いましたかね？」

「いえ、申し訳ないです。後で私から注意しておきますので……」

「いや、いやいや、構わない。戦いの後だ、きつと過度なストレスが溜まっているのだろう。そんな兵士達の苛立ちを受け止めてやるのも、我々指揮官の役目じゃないかな？」

「仰る通りです。あの、少し宜しいでしょうか？」

ソリディアは改まって真剣な顔で、話しかける。ラックもそんなソリディアの表情を読み取り、耳を傾けた。

「何でしょうか、遠慮無く申してください」

「ありがとうございます。……あまりにも信憑性の無い話なもので、申し訳ない事を先に謝っておきます」

「……ふむ。それほどの事なのですか？」

「単刀直入に申しますと、城国軍への直接攻撃の作戦と日時です」
そのソリディアの発言に、ラックはこれ以上無い程の、驚愕した表情を見せる。

「城国軍への直接攻撃？ はっ、またまた、予想の斜め上をいった発言ですな……」

「……はい。これは最近、私の友人に聞いた情報なのです。近々、城国の守備力が落ちるから、レジスタンス軍は総攻撃をかけよ、とね」

「眉唾物の話ですよ。あの城国の守備力が低下するなんて……とてもではないが信用できません」

「私も半信半疑です。しかし嘘か誠か、信じるしか道は無いとも思えます。まともに戦えば、レジスタンスの戦力では城国を倒すのは不可能に近いです」

「ううむ、しかしな……」

陽気な方の性格のラックだが、この内容にはさすがに真剣にならざるを得なかった。

「私達も協力したい。今回助けてもらった恩もありますしね。……しかし、この話は一個のレジスタンス間の助け船話ではない。これは……全レジスタンスを巻き込んだ、過去に類を見ない大戦になりますよ？」

「……でしょうね。勝てば支配の歴史は終わる。しかし負ければ地上に住む人々は皆殺しにあうでしょう。しかし……どこかでやらなければならぬのです。それならば勝機は今ではないでしょうか？」

「その情報提供者は、信頼できるのですか？」

「はい、それは間違い無いです。私と共に前大戦を戦い抜いた戦友です」

クリムへの信頼に関しては、ソリディアは絶対的な自信があったのだ。

「……わかりました。ですが少し考え、と言いますか、気持ちの整理をさせてください。お返事は後日、こちらから使いの兵を出します」

「戦いが終わったばかりだというのに……本当に申し訳ない！」

ソリディアは深々と頭を下げる。

「いえいえ、どうか頭を上げてください、ソリディアさん。確かにこれは絶対的な勝機なのです。やってみる価値は充分にあります」

「ありがとうございます……ラック兵士長」

「では……無事に帰還できる事を祈っていますよ」

最後にラックと握手を交わし、ついにパーシオンへと帰還するのだった。

「デュアリス」

デュアリスが光となり消えた場所。そこに残っているのは、デュアリスとセレナが愛用した清蒼の槍トライディアがある。

そして風の騎士ジュークの姿があった。

「逝ったのか……デュアリス……。お前にだけは、生きていてほしかったのに……」

トライディアの前で、ジュークは涙を流す。その涙は静かに、静かに流れ落ち、それに気付く者はいない。

「大将。その槍……回収するんだろ？」

「頼みます、クリム」

クリムは地面に刺さった、トライディアを引き抜きにかかる。が、予想以上の重さに四苦八苦する。

「……スラっとして、見た目は軽そうな槍だつてのに……重てえ！」
クリムの他に、二、三人の男達を使い、トライディアを運び出しにかかる。

「こんな槍を女の細腕で振り回してたつてのかい。アルティロイドつてのは凄いなあ……」

「アルティロイド、という理由もありますが、そのトライディアは、デュアリスの為に作られた特別な武器です。いわば専用武器。その本来の持ち主が、武器を振るえば羽毛のように軽く、風よりも速く攻撃できます」

ジュークは簡単な説明を、クリムに伝える。クリムもある程度の理解を示していた。

「なるほどな！ こんな良い武器を使つてたつてのかい。アルティロイドはセコいなあ」

「……ふっ。まあ、そう言つてやらないでくださいよ。これでも必死なものでね」

「ふうん。とりあえず槍は回収するぜ。先に戻る」

槍と数人の男達と共に、一足先に城国へと戻る。ただ正確には城国ではなく、ジュークが作った地下の秘密の保管庫に、である。

一人そこに残つたジュークは、デュアリスが最後に倒れた、その場所をただ見つめていた。

「僕達は、実の兄妹ではなかったけど、幼い頃から共に過ごした身だ。……情が、無いわけないだろう……死んで『はい、そうですか』と、割り切れるわけないだろう……!」

誰もいなくなつた地で、ジュークの嗚咽が響いた。やり場の無い、悲しみと怒りに耐える為に、唇を噛み、そして血を滲ませた。

「ティード。……こうなつたら、なにがなんでも計画を成功させてみせる！ デュアリスが望んだ、優しい世界を」

ジュークの言葉は、天空高く響き渡つた。

一方、ザードリブを出立したティード達は、順調にパーシオンへの帰路を歩いていった。シュネリ湖制圧作戦が失敗に終わった為だろうか、城国の警備は手薄であり、決して体調は万全とはいえないパーティには、好都合な展開である。

「はあ……はあ……くそう」

「大丈夫、カルマン君？」

胸を突き刺され、まだ数日しか経っていない。本来ならば歩き続けるのも、避けねばならない状態のカルマン。その防護服の下は、今も頑丈に巻き付けられた包帯が痛々しく残っている。

「し、心配はいらないよ。……早く、帰らないといけないんだろ」
「でも……とつても辛そうなんだけど……」

ティオの言う通り、カルマンは体中に汗をかいている。ザードリブからはそんなに離れたわけでもなく、まだ寒さの残る森のはずなのにだ。それを見かねて、ソリディアは声をかける。

「……ふむ。ならばここで少し休むかね」

「ソリディア兵士長！？ 大丈夫です、自分は全然行けますよ！」

「無理をする必要は無い。お前はよく頑張った、今ここで休んでも、誰も迷惑には思わんさ」

「そうだよ、カルマン君。無理をしないで休憩しよう？」

ソリディアとティオの説得により、カルマンは渋々休憩する事になった。しかし本音を言わせると、この休憩はカルマンにとつては助かった事は、明確な事実である。ティオはカルマンの汗を拭いたり、水を飲ませたりと、介抱に努めている。

介抱を受ける一方、カルマンの視線はティードに向かっていった。

（ あいつは、あいつも大怪我を負ったはずなのに……。俺とあいつの実力差は悔しいがわかってる。でも……この回復力の差は何だ？ よくわかんないけど……こんな不公平な事は無い……！ ）

カルマンはやはり悔しかった。好きな女の前で良い格好ができな

かったからでもない。目の前の、自分が好敵手ライバルと認めた男の、その実力や身体能力が足下にも及ばないからだ。

「……カルマン君、どうしたの？」

「えっ、あ、いや……」

気付くと、握り拳を作っていた自分に気が付かされる。それを指摘されて、慌てて握り拳をしまう。

「駄目だよ、カルマン君はまだ怪我人なんだから。そんなに力リキんじや……」

「わ、わかってるって。無理は、しないよ。　って、うわ!？」

突然、ティオが顔を近づけてきた為、顔を真っ赤にして驚くカルマン。

「な、何？」

「約束だよ、あまり……無茶しないようにね」

「う、うん。頑張るよ、無茶しないように」

長い時間の休憩の後、再び歩き始める。カルマンの体調も若干ながら回復したようで、その足取りは多少軽やかになっている。周囲の警戒はティオとソリディアがし、ティオはカルマンの介抱をしながら歩き続ける。

ザードリブを出立してから、順調に一日が経過する。全く城国兵に出会う事もなく、歩み続けた為、行き道よりも早いペースで進行している。

「大分暖かくなってきたな、南に……森林地帯や、山岳地帯が近づいてきたという事が」

ソリディアは気候から、自分達の大体の位置と、その進み具合を計算する。南に進むに連れて、暖かい格好をしていた一行は、少しずつ薄着へと変わっていった。

（やっぱりこっちの方が、何となく懐かしい感じがするなあ。北の大地も良かったけど、やっぱり暖かい南の大地が好きかな）

ティオは改めて、自分の元々済んでいる地方の良さに、気が付か

されていた。長く歩き続けた為、疲労はあったが安心した為か、テイオの足取りは軽くなっている。

「はっはっは、若いというのは良いな。軽い身のこなしだな」

ソリディアも見慣れた土地になり安心したのか、その表情は笑顔が多くなっている。

「おい、あまりはしゃぐなよ。敵はすぐ近くにいてもかもしれないぞ？」

「大丈夫、そうならテイダが助けてくれるでしょ！」

このやり取りに、テイダはデジャブのような錯覚を感じる。

「……つたく、お前はいつもそれだ」

テイオが動いたたびに、再び結ばれたポニーテールが揺れる。そのポニーテールと、赤いゴム紐を見ると、どうしてもデュアリスの事を思い出してしまっていた。

（デュアリス。お前は、セレナと合流できたのか？ 大丈夫、こっちではテイオの事は俺が守る。セレナもデュアリスの事を頼むぞ）

通じるとは思っていなかったが、遙かな空を見上げ、テイダはデュアリスとセレナに報告する。

「あっ！」

突然、一言発し、身を小さくするテイオ。それを見たソリディアは、同じく身を小さくしながらテイオに近づいていく。

「どうしたのだ、何かあったのか？」

用心し、小声で話しかける。

「待ってください、静かに！」

「むっ……」

特に気にする様子もなく、指示された通りに黙るソリディア。

（聞こえる……何だろう、動物でも植物でもない。これは……人の、声？）

不思議な声を聞き取るテイオ。その声を聞くテイオは、あまりの気持ちの悪さに吐き気を覚えている。

(ああ、見回りなんてめんどくせえ。サボっちゃおうかな)

(人が、人が斬りてえよお。できれば若い女が良い！ へっへっへ)
(三日後には娘の誕生日か。さて、何を贈ろうか……)

様々な声が聞こえてくる。その生の感情は、ベットリとまとわりつくような、嫌らしい感覚をティオに与える。

「……うう」

「ティオ、大丈夫か？ 顔色が急に悪くなったぞ」

「大、丈夫です。それよりも、私達がいる場所から右手前方……城国軍が来ます」

「何っ？」

ソリディアは軽く顔を上げ、その方向を確認すると、確かに城国兵士の姿が確認できた。数は五人。見つきりさえしなければ、このままやり過ごせる位置だった。ティードとカルマンに、身を隠すように合図すると、息を潜めるようにして兵士の通り過ぎるのを待つ。兵士達の進行は思いの外早く、ものの数秒ですれ違う。

「……ふう、行ったか。助かったぞ、ティオ」

「いえ、偶然ですよ」

既に吐き気は治まっていた。うっすらと額にかいた汗を拭き取ると、軽い深呼吸をする。

(今は、人の声？ 今まででは人の声だけは、聞こえようと思っても聞こえなかったはずなのに……。それにしても、人の心の声を聞くのがこんなにも気持ち悪いなんて……動物や植物のような感覚が、まるで感じられなかった)

偶然的とはいえ、人の感情を聞いてしまった事に、軽い罪悪感を感じる。

「さて、もう一息でパーシオンに帰れるぞ。カルマン、あと少し頑張れよ」

「了解です、ソリディア兵士長！」

パーシオンまでは、目と鼻の先にまで迫っていた。ティード達は、無事に帰り着く事ができたのだ。

28 動き始めた策略

「あ、ソリディア兵士長！ おかえりなさい、長旅ご苦労様です」

「うむ。すまんが、ハリス副兵士長を呼んできてくれぬか？ ……あとはラルク医師も」

「はっ！ 了解しました！」

見張りに立っていた兵士は、元気よく駆けていく。そんな見知った空気を感じ取り、テイオとカルマンは胸を撫で下ろした。

「何だかんだで、少々時間がかかったな。テイオ、カルマンを落ち着ける場所まで誘導してあげてくれ。直にラルク医師を向かわせる。ティードは私と共に、兵士用テントへ！」

疲れながらも、テキパキとした指示で、事を進めていくソリディア。しばらくすると、ハリス副兵士長が出迎えにやってくる。

「ソリディア兵士長、ティード、おかえりなさい。……あれ、カルマンとテイオさんは？」

「向かった先でカルマンが大怪我をしてな、テイオには付き添いに行かせた」

「……大怪我！？ 大丈夫なんですか、カルマンは？」

「何、もう峠はとづくに越えたよ、安心して良いだろう」

「良かったです。後で顔見せに行かないと」

「そうしてやってくれ。だがその前に、ハリスとティードに教えておきたい事がある」

ソリディアに促されるまま、ティードとハリスの二人は、兵士用テントへと移動する。

「すまんが、ここを機密作戦会議に使いたい。空けてはくれぬか？」

テント内にいた兵士達に声をかけると、嫌な顔一つせず、兵士達はテントを空けてくれる。そして口々に「おかえりなさい」と声をかける。

「すまん。すぐ済むからな」

「いえいえ兵士長。ごゆっくりどうぞ！」

そそくさと移動する兵士達。全員が出ると、テント内はシンと静まりかえっている。

「さて……近々、城国に直接攻撃をかける」

その言葉に、ザードリブのラック同様、二人は驚いてみせた。

「直接攻撃って……まともに仕掛けたら完全に返り討ちですよ！」

「うむ、古い友人の情報でな、近い内に城国の守備力が低下するか。この機会は地上に住む我々には、またと無いチャンスになる」

「しかし……いくら兵士長の古い友人とはいえ……信用はできるのですか!？」

ハリスの考えも最もな話だった。ラックと同じだが、この話はレジスタンスを全て巻き込んだの戦いになる。生半可な気持ちでは、とてもではないが勝つ事など不可能だ。

「間違いは無い。その男とは、策略家と呼ばれた男だ」

「策略、家？ ま、まさか……!？」

「そのまさか、だ。その男の名はクリム。前大戦で私やバースと共に戦った戦友……お前も兵士として時間を費やした身ならば、名前ぐらいは聞いた事があるだろう？」

ハリスは大きく頷いた。クリムは、ソリディアとバースと共に三剣士と呼ばれ、大戦を活躍した存在だ。ハリスのように兵士として飯を食ってる者には、夢のような存在なのである。

「それで、そのクリムって奴からの情報は良いが、どうやって城国の守備力が弱まったというタイミングがわかるんだ？」

クリムの存在を聞き、浮かれるハリスとは裏腹に、ティーダは極めて冷静である。そんな冷静なティーダを見習い、ハリスも小さな咳をすると、真面目な表情へと戻る。このようなメリハリの良さは、ソリディアも認めているところだ。

「……うむ、それなんだがな」

ソリディアは自分の荷物袋を漁ると、小さな黒い物体を取り出す。

そう、シュネリ湖を搜索してる際に、クリムから手渡された無線機である。その異様な物体に、ハリスは目を丸くする。

「これだ。北の大地へ旅に出た時に、クリム本人から手渡された物だ」

「こ、これは一体何ですか？ 見た目からその用途が皆目見当が付きません……」

「うむ、無線機と呼ばれるアイテムらしい。遠くの人と会話ができるという魔法のようなアイテムだ、という事らしい」

詳しい事が全くわからないソリディアは、解説こそするものの自信が無く、語尾がどうしても弱々しくなってしまう。ハリスも、明らかに困っているソリディアに、迷惑をかけさせまいとして、それ以上の事を聞こうとはしなかった。

「そうか……無線機で城国の内部事情を知らせるのか」

「む……ティータ、知っているのか？」

「俺も元々は城国の兵士だ。無線機なんて城国では当たり前前の物だぞ？」

「えっ、そうなの!？」

最後に大きな声で驚いたのはハリスだ。いつもは冷静沈着なハリスにしては、妙に大きな声を出し驚いて見せる。

「そうか……ティータの事は、私しか知らなかったな」

「ティータが城国の兵士……確かに最初に着ていた服装なんかは、とても地上に住む人の格好とは思えなかった」

「それで……アンタはどうする？ 俺は元とはいえ城国の兵士だ。気に入らないのなら、何かしらの事はできるだろう？」

ティータは、わざと意地悪な言い方をしてみせる。これにより組織の二番手である、ハリスの意気込みを計りたかったからである。

「……そうだな、確かに僕の権限と何人かの多数決さえあれば、今からでも君をここから追い出す事はできる」

ティータは黙って、ハリスの言葉を待ち続ける。ソリディアも、ハリスの器量を見たいが為に、この状況を静観していた。

「……………だが、何でそれをする必要がある？ 元々がどこにいようと関係無い。もう、ティータは僕達と同じ、パーシオンの一員じゃないか」

その言葉に、ティータは目を瞑り、わずかな笑みを浮かべながら俯いた。それを見ていたソリディアも、大きく深く、首を縦に二回揺らすと、ついに口を開く。

「よく言ったなハリス。私は嬉しいぞ、これなら何があっても、このパーシオンは任せられる」

「ソリディア兵士長……………。や、やめて下さい、そんな不吉な事を仰るのは………… 兵士長には、まだ頑張ってもらわないと」

ハリスの勢いを止めて、ソリディアは自分自身の事実を打ち明ける決心をする。

「私はな……………もう、長くはないのだよ、ハリス」

「えっ……………!？」

「私の体は悪性の病魔に冒されている。ラルク医師や、北の大地にいるという凄腕の医者、リコ才殿にも診てもらったが……………どうやら現在の医療科学では、治す事は不可能らしい」

「ご冗、談では、無い……………のですか？」

この言葉に嘘は無いと言つように、ソリディアは大きく頷いた。

ハリスにとつては、あまりの驚愕の事実、吐き気すら覚えていた。更にこの事に驚いたのは、ティータも同じである。

（ …… そうか、ここ最近で見た疲労感、病気のせいだったのか。

……………いや、考え過ぎかもしれないが、俺と初めて出会った力ザンタ山岳地帯の夜。あの時点から既に兆候は、表れていたのかもしれないな）

「本題から反れてしまったが……………知っておいてほしかった。そしてこの決戦、勝つても負けても、私の命は終わるだろうな……………」

三人しかいないテントだが、とてつもない程の静寂が広がる。しばらくの間、誰一人として口を開けるものはいなかった。

城国。王の間。

前回、ここに集いし騎士は三人。風の騎士ジューク、水氷の騎士デュアリス、爆炎の騎士ラテイオである。しかし、現在ここに存在する騎士はジュークただ一人である。

「……ふむ。随分と悲しくなった。そうは思わんか、ジューク？」
「はい、仰る通りです」

「デュアリスが死に、ラテイオが生死不明の行方不明状態……事実、悲しいと思うよ。試作型とはいえ、こんな出来損ないのアルティロイドを作った、自分自身に、な……」

その王の言葉に、ジュークは眉間にシワを寄せる。冷静なジュークが、明らかに怒りを持っている。

「ふっふっふ。苛立ちが見えるな、ジューク」

「！？ ……はい。確かに作戦には失敗したかもしれませんが。勿論、しかし、デュアリスもラテイオも、精一杯やった結果です。勿論、軍として動くからには、精一杯やった、で済むものではない事はわかっておりますが……せめて、せめて王よっ、貴方の口から一言でも労いの言葉をかけてやってください！」

「ほう、飼い犬にここまで吠えられるのは初めてだな」

表情の見えない薄布の向こうで、王はジュークに感心を見せる。

そして王の間には、一人の手を叩く音が響く。

「お前の度胸と、散りゆく出来損ないの子へ向けて……私から拍手を贈ろう」

気がつけばジュークは唇を噛み、強い握り拳を作っていた。明らかな殺気を王に向ける。実際にここには王とジュークしかいない。戦闘能力において、圧倒的な力を持つアルティロイドならば、王の首を今ここで斬る事は容易い事である。

「……ふっふっふ、ふぁーはっはっは！」

突然の王の笑い声。あまりに突然すぎる行為に、ジュークの殺気は散ってしまっていた。

「なるほどなるほど。あの出来損ない達も、お前の感情を抑える事

に一役買っていたとはな。……私はな、お前の時折見せるその殺気が気に入っているのだ。冷静な仮面の下に宿る熱い素顔。ふっ、面白いではないか、んっ?」

「ありがとうございます」

この時には、いつもの冷静なジュークを見せていた。そんなジュークを見て、王も再び高笑いする。

「しかし……主に殺気を向ける犬とは……ただけんな。油断したら、いつその鋭い牙で私を噛み殺すかもしれん。いよいよ、アレのお披露目といくか」

「アレの、お披露目?」

王の発言。ジュークにも「アレ」と称されたものの正体には、皆目見当もつかなかったのだ。

「入るがよい」

王の合図と共に、王の間の扉が開かれる。そして足音が鳴る。その足音の数から、二人であると確証はできる。

そのままジュークのいる場所を通りすぎ、二人は王の隣まで歩み、ジュークに向き直る。

「なっ!?!」

「紹介しようジューク。これが出来損ないの試作型アルティロイドとは違う、完成型アルティロイドだ。まあ、最も完全完成までには、あと数日は必要になるがな」

それから、しばらくしてジュークは王の間から立ち去っていた。

「おい大将、どうした? 随分と顔色が悪いというか、思い詰めた顔してよ」

「いや……この計画は思いの外、難航しそうです。クリム、僕達の計画も予定より早めましょう。完成型アルティロイドが正に完成してしまつたら、計画どころではなくなります!」

「完成型アルティロイド? って、おい待てよ。それは俺は俺の仕事をしちゃって良いと捉えて良いんだな?」

「はい、お願いします。あ、それとクリーム。貴方の仕事が終わったら一度集合してください。やっておきたい事があります」
「あいよ！ んじゃ、ちよっくらやってくるぜ！」
ジュークと別れ、クリームは駆けていくと、誰もいない空いている部屋に潜り込んだ。

静寂の中から、突然奇つ怪な音が鳴り出す。

「むっ、何だ!？」

ソリディアもハリスも、聞き慣れないどころか、聞いた事も無い音に、軽いパニックになる。

「これはその無線機の音だ。音の感じから旧型だな」

「それは良いが……どうすれば良いのだ？」

「小さな出っぴりがあるだろ？ それを押してみろ」

ティータに指示されるまま、ソリディアはボタンと呼ばれる出っぴりを押す。すると奇つ怪な音は消え、代わりに人の声が聞こえてくる。

『……ア、ソリ……ア、聞こえるか、ソリディア!』

そう、声の主はクリームである。旧型の為か、あるいは壊れているのか、少々雑音が酷い。

『その無線機は受信専用であり、そちらからの声は……に、聞こえない。交信できる時間が限られている……短に話す。よく聞いてくれ……』

「こ、この声の主がクリームさんですか!？」

「これ、ハリス！ 聞き取れんだろう」

『……軍の守備力が弱くなるのには……少し時間が必要だ。……大體、二十日後が目安だろう。……から二十日間の間に、できる限りの軍力を整えて……!』

今から二十日後。それが地上の人々にとって最大の決戦になる日。決して期間があるとは言えない。

『良……か、もう……言う。二十日後だ。それまでに俺……できる

限りの事はしてみせる。……も死ぬんじゃないぞ』

「 クリムめ」

一方的な会話だったが、ソリディアはクリムの意志を感じ取っていた。それは親友を超えた付き合いから成せるものだろうか。この友の行為に、決戦に向け胸が熱くなる感覚を覚えていたのだ。

しかし、言葉が終わり静かになったかと思えば、途端に無線機の向こう側が慌ただしくなった感じがする。

『 キャハハハ。……つぱり貴方が裏切り者だったのね。無様ね、そんな事をしての意味は無いというのにさ』

『 な、何だ……お前は！？』

『 貴方に言う必要は無いわ。だって……貴方はここで死ぬんだもの。ばいばい、裏切り者さん！』

『 ぐわっ！ ……な、何でだ、こいつは俺……の前にいるのに、何で……から攻撃されるんだ！』

無線機の向こうは、先ほど以上の荒れた音が聞こえてくる。その雑音などから、今そこで戦っているのが明確にわかる。クリムの息づかいや、攻撃され血が飛び散る音、その全てが生々しい。

「クリム、何があつたんだ、クリム！」
「兵士長、無理ですって、聞こえないんでしょう！」

声と息を荒げ、呼び続けるソリディアを、ハリスは身を挺して止める。

『 大将……俺は、ここまでだ……』

『 キャハハハ、死ね！』

次の瞬間、何かが嫌な音を立てて弾けた音が聞こえてくる。それと共に向こう側の音も静かになる。

『 キャハハハ、誰に繋がってるのかわからないけど……無駄な事はやめておきなさいな。どうせ地上の人間達はゴミのように抹殺されてお終い。キャハハハ、でも面白そうだから告げ口はしないでおいであげるわ！ 精々、綺麗な命の輝きでも見せて楽しませて頂戴ね？ シーユー……』

最後の一方的な言葉で、無線が切れてしまう。声の感じから若い女の声である事がわかる。ソリディア達は、一体何が起きたのかわからず、黙って頭の中で起きた事に整理していた。

ただ一つ確実に言える事がある。それは前大戦の三剣士の一人、策略家クリムは何者かに暗殺されたという事実である。

「ハリス……パーションの全兵士を集めてくれ……」

「は、はいっ！」

「私達にできる事は……命懸けで戦ってくれたクリムの為に、全力で軍を集める事だ」

ソリディアの拳は怒りと悲しみに、固い拳を作っている。その決意の表れを見て、ハリスも大急ぎで兵士を集めに走り出した。

決戦まで、あと二十日である。

かつての戦友「策略家クリム」の、何者かによる暗殺。この事実はソリディアの闘志に火をつける事になる。そしてクリム暗殺から翌日、ソリディアはハリスと共に、サルバナ森林地帯にある「サンバナの町」を目指そうとしていた。

「では、ティータ。留守の間、パーシオンの守備を任せろぞ？」
ティータは静かに頷いた。

軍力を結集させる為には、サンバナの町を拠点に行った方が良いと判断する。サンバナ攻防戦時の、多大な人数。サンバナの町周辺には、まだ見ぬ多くのレジスタンスチームが存在するはずなのだ。同じくソリディアと共に三剣士と謳われた最後の一角「剛力丸のバース」率いる、レジスタンス「コロセオン」も周辺にあるはずなのだ。城国軍との最終決戦、この三剣士の一人バースの力は大きな戦力となる。

「では行ってくる……」

「後を頼んだよ、ティータ」

こうしてソリディアとハリスは、南にあるサンバナの町へ、軍力結集の交渉をする為に出かけていく。

（ 軍力結集、か。俺が知る限り、協力をしてくれそうなレジスタンスはバースのコロセオン。ラックのザードリブ。そしてサンバナの町……この他、大小様々なレジスタンスが手を貸してくれるだろうが、はたしてそれで城国が倒せるか……。無理だろうな、一生の半分以上を城国で過ごした俺にはわかる）

この戦いは最初っから、勝てる見込みがほとんど無い戦いだと、ティータは判断している。しかしそれを止める術も無いのも事実である。この戦いの連鎖を長引かせていっても、消耗戦には絶対的に不利な地上のレジスタンス。ならば守備力の低下するという今が、最大の攻撃チャンスなのも事実である。いずれにしても、神の振る

うコインは表と出るのか、裏と出るのか、それは振ってみなければわからない。

パーシオンの守備は任されたが、特にやる事の無いティータは、一人で近場の小さな土手へと移動する。このパーシオンへ来たばかりの時ほどではないが、根本的にうるさいのは好きではないのか、やはり活気を苦手とする。土手は静かな為、ティータにとっては絶好の隠れ場所となる。

「ふう、やれやれ……」

土手に寝転がると、やや曇りがちな空を見上げる。

（空、か。思えば最初も、俺が城国から飛び降りた事から始まっていたな……空を見ていると、色々な事を思い出す）

頭の中から、今までの事柄が沸き出るように思い出せていた。

最初はカザンタ山岳地帯。ティオとソリディアとの出会い。パーシオンの仲間達。サンバナの町から、それに至るサンバナ攻防戦。ラティオとの戦い。北の大地への旅立ち。シュネリ湖制圧作戦の防衛。デュアリスとの再会。セレナとの死闘。そしてデュアリスを自らの手で殺した。

ティータは自分の手を、空高く掲げて、それを見つめた。何人もの命を奪い、デュアリスを殺めた手だ。

「俺は……いつまでこんな事をすれば良いのだろうか？」

自分の手を見ながら、ポツリと一言呟く。

「いつまでだろうね」

そんな呟きに対する言葉が、突然走り出す。姿は確認していないが、ティータはその声の主を知っている。

「何の用だ、ティオ。お前はあの馬鹿のお守りがあるんだろう？」

「駄目だよ、人の事を馬鹿って言っちゃ！」

めずらしく、やや強めな口調で注意するティオ。そんなめずらしい態度に、ティータも黙り様子を見る事にする。

「カルマン君も、ティータの事を最初は『ヨソ者』って言ってたけど……今はちゃんと名前で呼んでるでしょ？ だからティータも『

馬鹿』って言わないで名前前で呼んであげて。名前って……私達が思っている以上に大切なものなんだから」

「……わかった。覚えていたら、次回からはそうしよう」

「約束だからね！」

テイオは笑顔で、小指だけを立てた手を、ティードに向けて。

「何だ、それは？」

「んもうっ、指切り。約束したら指切りするのが、当たり前なんだよ」

「そんなガキ臭い恥ずかしい事を、この歳でやれるかつ！」

結局、ティードはテイオの指切りをする事はなかった。やや寂しそうな顔を見せるが、半ば予想していた事だったのか、テイオの切り替えは早かった。

「ティード……何だか、ここに来たばかりの頃より、明るくなったよね？」

「気のせいだ。それが単純に雰囲気慣れたか」

「違うよ。慣れたとかそういうのじゃなくて、根本的な性格というか、さ？」

「根本的な性格？」

「うん。ここに来たばかりの頃のティードは……何か怖かった。ごめんね、もしかしたら私、酷い事を言うかも」

「良い、それで？」

「うん、それでね。ここに来たばかりの頃はとても人間とは思えなかった。だって貴方は殺す事に関して、何も感じずに行動していたから……まるで殺す事だけに作られた人形のようなだった。……けど、今のティードは明らかに違う。何て言うか、その……人間らしくなっただって言うのかな？ どことなく、優しい雰囲気になった気がするんだ。本当にごめんね！ こんな心にもない事を……」

「いや、良いんじゃないのか、たまにはお互いに思っていた事を吐き出してしまっても。俺は人の印象なんて気にはしないしな」

それからしばらくの間、二人は流れる川の動きを見つめていた。

いつの間にか、曇り空は晴れ始めていて、暖かさと共に、小鳥のさえずる声も聞こえる。これに戦争さえ無ければ、とある日常の平和な風景である。しかし、現実は今もどこかで殺しあいが起きている。

「それで？」

「ん、何だよ？」

「いや、ティードダから見た私の最初の印象は？ 私だけ言うのもなんか悪いもん！」

「お前の印象、かぁ……」

ティードダは出会った日の事から、今までの事を振り返る。そして、思い返した結果、ある一つの印象の答えが出てくる。

「最初は、そそっかしいというか、そそっかしいというか、そそっかしい印象だったな」

「うっ……どんだけそそっかしいの私」

「でも……今、振り返ってみると」

「う、うん……」

「最初の頃に比べると、そそっかしいと感じるようになったな」

「ティードダ、それわざと？ わざとならさすがに怒るよ？」

ティードダは一人、怒りの握り拳を作る。

ティードダも気にする様子もなく、ただ空を見つめ放心している。

「……ふう、わかったわよ。そそっかしいのは、そそっかしいなりに仕事を頑張つてきます！ カルマン君の看病もまだかかりそうだしね」

ティードダは立ち上がり、土手を駆け上がっていく。

「だけど……初めて見た時から、お前には優しさというか、暖かさを感じた気がする。……それは今も続いている」

「ティードダ？ ……ありがとう。行ってくるね！」

ティードダは元気よく駆けていった。そんな小気味良い足音が消えるまで、ティードダは耳をすませた。

「……人間らしくなったか。それは究極の生命体兵器として、良い事なのかな」

それは不思議な感覚だった。嬉しいとも、悲しいともつかない感情が芽生える。

しかし今は考える事による答えは出なかったのだ。

そして数時間後、サンバナの町へ向かったソリディア達は、無事に目的地にたどり着いていた。

「ここがサンバナの町ですか？ 凄いですね、活気の凄さならレジスタンスは負けないものだと思いますが、これでは顔負けだ……」

「そうか、サンバナ攻防戦時、ハリスはここへ来ていなかったな」

二人はサンバナの町を軽く歩き回り、様子を見てみる。攻防戦終結後、サンバナ町長は多くの死者と共に自害している。遺書らしきものも発見できなかった為、その町長の心意はわからなかった。だが恐らくは多くの戦死者を出した事に対する、償いの行動だろうと噂されていた。

そして現在は、前町長の意思を継ぎ「支配の無い、平和な世作り」を胸に、ハインズ新町長が町をおさめていた。

(さて……振られたコインは表と出るか、裏と出るか……)

ソリディアとハリスは、町長のいる建物前へとたどり着く。やはり人が多く通る町だからか、町の人々はソリディア達を不審に思ってもいないようである。大方「旅人が町長に挨拶をしに来た」程度にしか、思っていないのだろう。

「ハインズ新町長は、どんな男か、私には皆目見当もつかん。もしかしたら、牽制程度の挑発をしてくるかもしれん。仮にそうなくても、決して挑発に乗るのではないぞ？」

「わかっています。……交渉のご成功を祈ります」

「うむ。……では行くでしょう」

建物の扉を二、三回ほど叩いてみる。すると落ち着いた声と共に、一人の女性が顔を出す。

「はい、どうしましたか？」

「私達はレジスタンスパーシオンの者です。私はソリディア、これはハリスと申します。宜しければハインズ町長にお会いしたいのですが、お目通りは叶いますかな？」

「パーシオンの……ソリディア様とハリス様、ですね。少々お待ちください」

その女性は柔らかい雰囲気と口調を残し、建物の中へと入っていく。

「今の人、相当に美人でしたね」

「うむ……なかなかのものだ」

「しかも美人によく似合う豪華な建物ですね。他の建物と見比べても、明らかにここだけが凄い」

「そりゃあ、町一番のお偉いさんがいるのだ。そんな町のトップが、チャチな場所にいたら格好もつかんだろう」

そんな他愛の無い話をして数分、ようやく先ほどの女性が現れる。

「お待ちせしました。どうぞこちらへ」

女性に連れられるままに、内部へと入る。見た目の大きさに比例し、中の構造も大したものである。扉がいくつもあり、案内人がいなければ最初の時点で迷ってしまう。

「こちらです。ハインズ町長、ソリディア様とハリス様をお連れしました」

「入ってもらってくれ」

案内をしてくれた女性は、扉を開けるとソリディア達に道を譲る。軽く一礼をすると扉を閉め、女性は出ていった。

「貴方が？」

「そう、私が新町長のハインズです。防衛戦の際は、お力を貸していただきありがとうございます」

そこには前町長とは全く毛並みの違う男がいる。頭はスキンヘッドにし、剛毛な口髭を蓄え、体つきの良い、パツと見ると怖い親父である。その見た目と口調があまりに不釣り合いだった。

「初めまして、ハインズ町長殿。改めまして私は」

「前大戦時の英雄の一人、三剣士ソリディア様ですね」

「私を……ご存じで？」

「そりゃあ、こう見えて私も兵士だったもので、鬼のソリディアの名前は当然の如く存じています」

「事實は英雄などと、崇められるものは無い。私は数え切れない命を奪い奪われ、数えられる程の命すら守れなかった哀れな兵士だ」

このソリディアとハインズの会話に、ハリスは黙って立っている事しかできなかった。

ハインズも軽く咳をすると、本題に入ろうとする姿勢を取る。

「それで、本日は一体何のご用件で？」

「今から二十日後、いや十九日後。城国へ攻撃をかけたいと計画しています」

「……何ですって!？」

平静を装っていたハインズだが、この言葉に少しは驚いてみせた。

「昨日、私の戦友である策略家クリムより連絡がありました。『今から二十日後、城国の守備力が低下する為、総攻撃をかける』とね」

「……策略家クリム。間違いは無いのですか？ それに一体どうやって鉄壁の要塞と化している城国の守備力を低下させるのです？」

「残念ですが、それはわかりません。だが一つ言える事は、我が戦友クリムが言い出したのならば、それは現実になる、という事です」

「そんな不確定要素を信じるといいますか？ これを行うという事は、全地上人の命を賭けた大戦争になるのですよ、貴方がそれをわからぬはずが無いでしょう」

「わかっているつもりです。……が、我々には道を選んでいる余裕が無いのも事実です。それが不確定要素の塊であっても、確率の低い戦争になっても、僅かな光があるのならば、それにすぎらなくてはならない。地上のレジスタンスが、まともに城国と戦い勝つ可能性は、万に一つも無いのですから」

ハインズは、自らの頭を撫で回し、深いため息と共に黙り考え込

んでしまう。それは一統率者としては、当然の反応だろう。個人の意味では動けないからこそ、団体を率いるというのは難しいのだ。

「それで、ソリディアさんは私にどうしろと言うのですか？」

「このサンバナの町を基点とし、周辺のレジスタンスを戦力として集めていただきたい。かつてサンバナ攻防戦時に協力したレジスタンスの名簿のようなものはあるでしょう？」

「そりゃあ、ありますが……戦力を結集させたのは前町長です。私にあれほどの戦力を集める事ができるとは……」

「やらねば、この計画は失敗に終わります。今ここで動かないのなら、僅かな可能性がある現在のチャンスをも無駄にするだけです。

今後、我々地上の人間が城国の支配から逃れられる事は完全に潰えるのですぞ！」

「う、うむ、しかしな……もしかしたら、今後に更なる可能性があるという事も……」

「城国と地上は対等ではないのだっ！ 我々には道を選ぶ事はできない。だが道を切り開く事ができる。その切り開くチャンスを無駄にしたのなら、今までに命を賭けて死んでいった者達に何と言うつもりだ！」

「……元とはいえ、私も兵士だった男です。そうまで言われて動かぬわけにはいききますまい。私にも、この時代を終わらせると誓い合……そして死んでいった戦友達がいます。わかりました、で

きるとは約束できませんが、私ができる全力を尽くしても、戦力をかき集める事を誓いましょう」

ついにハインズから、その言葉が出る。ソリディアもそつと胸を撫で下ろした。

「ありがとうございます、ハインズ町長。この近隣にコロセオンというレジスタンスがあります。そこにバースという私の旧友がいるので、是非使ってやってください。私の名を出せば、バースはきっと動いてくれるはずです」

「まさか、噂には聞いていましたが、あの剛力丸のバース殿が……」

いやあ、これで策略家クリムも集まれば、鬼に金棒ではないですか」
「クリムは、死にました。昨日、何者かにより暗殺されたのです」

「なっ、なんと……。そうですか……。貴方の気迫の理由、少しはわかった気がします。そしてそれを聞いてしまっただけは、私も頑張らざるをえません」

「頼みます。この周辺のレジスタンスを集めるには、貴方の力が必要なのです」

「任せてください。サンバナ攻防戦時よりも、大きな戦力を作ってみせる事を約束します」

ソリディアとハインズは、固く強い握手を交わした。城国攻略戦の軍備は、小さいながらも、確実に集まりつつあった。

決戦まで、あと十八日。

30 支配開放大戦

「 それでは、ハインズ町長。戦力結集の成功を祈ります。我々も、残る期間で軍備拡張、装備点検などを行いたいと思います」
「了解です、ソリディアさん。……お見送りは良いのですか？」
「構いませんよ。私はまだまだ現役のつもりですし、いざとなったら若いハリスもいます」

突然の指名により、ハリスは慌ててしまい、照れ笑いを浮かべて見せる。

「ふうむ……本当に大丈夫なんですか？ 失礼ですが、こんな軟弱そうな兵士に」

「確かに優男かもしれませんが、腕は確かなモノを持っていますし、いざとなればやる男ですよ。 それでは、我々は行きます」

交渉日から翌日。ハインズの頼みにより、サンバナの宿屋にて一泊をし、その日の朝イチで出発しようとする。まだ朝も早い為か、朝日は見えるものの、辺りは少し薄暗い。

「いやあ、しかしハインズ町長……見た目はかなり怖い人でしたが、良い人そうでしたよ」

「うむ、失礼ながら人は見かけによらない、とはよく言ったものだな」

本人がいないのを良い事に、二人は笑い話をする。ここ最近は緊迫していた事もあり、あまり笑っていなかったのを思い出す。

「兵士長！ 交渉成功もしたのでから、せつかくですしサンバナの土産でも買って帰りましょうよ」

「馬鹿者、遊びに来ているわけではないのだぞ？」

「それはわかっています。ですが、こんな時だからこそですよ。常に真剣にやっついていれば良いわけではないです。時には息抜きもしいと……それに余裕を持たせれば、兵士達の士気も向上します」

「むう……それもそうだな。……よし、許可しよう。だが土産とか

は何を買えば良いのかわからんから、お前が決めてくれよ？」

ソリディアの許可も出た事により、ハリスは端から見ても嬉しそうな顔を見せる。

「但し、十分だぞ。時間も無い……これ以上は待たないぞ」

「了解です！ すぐに戻ってきますよ！」

威勢良く飛び出していったものの、戻ってきたのは 三十分後だった。

「す、すみません、兵士長……店は並んでいるし、道には迷うしで……」

「良い！ おかげでゆつくりと今後の動向を考えられたわい」

兵士は皆、男連中という事で、飾るような小物よりも、食べ物の方が良いと判断し、サンバナ名物の「平焼き」と呼ばれる丸い円盤状の食べ物を購入する。

サンバナの町を、あまり堪能する事も無く、ソリディアとハリスはパーシオンへ帰還する。

(さて……あとはザードリブのラック兵士長が、良い返事を持ってきてくれるかどうかだが……。少なくとも、サンバナ攻防戦時以上の戦力を作らねばな……)

ザードリブからの使者が訪れたのは、今から八日後の事になる。

決戦まで残り九日である。

「遅かったな……それで、ザードリブのラック兵士長は、どのような返事を？」

ザードリブからの使いの兵士は、三人が来た。その中の小隊長であるアスイが、話し合いに応じている。

「戦いには参加させていただくと。シュネリ湖周辺のレジスタンスの総力を結集して決戦に臨ませていただく覚悟だと、聞き預かってきています」

「ふむ……それは嬉しい限りの返事だな。北の戦力、アテにさせてもらおうよ？」

「それは勿論です。突然ながらも舞い込んできた、この支配の歴史を終わらせられる絶対的なチャンスなのですから！」

アスイ小隊長は、興奮気味に話す。だが、これは結果として良い方向に動く。パーシオンの兵士も、改めてこの話を聞く事で、気力の高ぶりを感じていた。兵力、装備、気力、あらゆるものが決戦に向けて備わっていく。

「そこでアスイ君。当日の作戦なのだが……」

「はい、何かありませんようか？ 前大戦の英雄殿の言葉、一字一句逃さずに聞き入れたいと思います！」

悪気は無いのだろうが、この「英雄」という言葉に、ソリディアは嫌気がさしていた。否応なしに過去の対戦時の、自分自身の過ちと、暗殺された戦友クリムを思い出してしまうからだ。

「作戦……と言いたいところだが、作戦らしい作戦は無いのだ」

「えっと……それはどういう……？」

「別に勝つ気が無いわけではないのだ。城国はそこに立っていて、通常の城とは違い横に広くなく、縦に長くなっている。つまりは大軍で攻め入っても、内部に入る兵の数はたかが知れている」

「仰る通りですね。……しかしならばどうします、結局軍力を集めても、これでは効果が薄くなってしまう。無駄になるというものですよ？」

「うむ、だから内部に侵攻させるのは、兵士としての突破力のあるものとする。……つまりは少数精鋭、選ばれた兵士が道を切り開き、それ以外の兵士は城の入り口、あるいは外で城国兵士の殲滅と足止めをさせる。部隊は第一陣と二陣に分けよう」

一呼吸置いて、アスイは聞き返す。

「どちらが……第一陣で切り込むおつもりで？」

この問いに対して、ソリディアも一呼吸置いた後、口を開いた。

「それは、我々です。南のレジスタンスが先陣を切るべきでしょうな」

「良いのですか？ 間違いなく、第一陣は戦死者が多発しますよ！」

？」

「この賭けにも等しい事を言い出したのは、南であり張本人は私です。ならば我々が行くべきなのです。……勿論、会議の結果は必要になりましようが、必ずこうなるように尽力します。アスイ殿は、ラック兵士長にこの事を伝え願いたい」

「ソリディアさん……わかりました、必ず伝えます」

作戦はこうなった。南も北も、双方とも突破力のある兵士を内部に送り込む。その他兵士は、城国外部にて敵兵士の殲滅あるいは足止め、状況によりけり内部への侵攻。第一陣はサンバナを中心とした南のレジスタンス。第二陣はザードリブを主戦力とした北のレジスタンス。第一陣の戦力低下時は速やかに、第二陣と入れ代わり進軍。その間に第一陣の戦力を整える。

クリムの言葉通り、城国の守備力が低下し、この奇襲戦法が決まれば、勢いのままに城国を落とす事は可能はずなのだ。

ただソリディアには二つだけ、不確定要素からくる不安のようなものを抱いていた。一つは城国の戦力の大きさである。作戦自体は単純なものだが、十分に城国を落とせる計算なのだ。しかし城国の戦力が、予想以上であり消耗戦を強いられた場合は、間違いなく敗北する。

「あのソリディアさん。我々はすぐにでもザードリブへ戻り、この事をラック兵士長および仲間達に知らせたいと思います」

「あ、ああ、うむ。できるだけ早く戻り、伝えてくれる事を望むよ？　いくら詳しい道がわからなかったとはいえ、行き道と同じ時間で戻られたら、作戦には間に合わないからね」

「大丈夫ですとも。帰り道は記憶しています。二日三日あれば帰りますよ！」

「ならば良いのだが。誰かアスイ殿達を、お見送りしてくれないか」

簡易的な食料と水を持たせ、アスイ達を見送る。北のレジスタンスへ大々的な作戦を伝えたところで、再びサンバナの町へと、ソリ

ディアは出かけなければならなかった。戦力結集の具合を見ると、この会議の結果を伝える為である。

「 クリムの言った日まで、あと何日あったかな? 」

「 あと九日です。兵士長 」

ソリディアの何気ない言葉に、ハリスが答える。

「 九日……か。あとティーダはいるかな? 」

「 ティーダなら、あそこに 」

テント内の奥の方を指差すハリス。呼んでも良かったのだが、ソリディアは性格的に自分から出向く。

「 ティーダ、ちよつと良いか? 」

ティーダはヴェルデフレインの手入れをしている最中だった。いやティーダだけではない。決戦の日へ向けて、手が空いた兵士達はそれぞれの武器の手入れと点検を欠かしてはいない。自分の命を預ける武器になるからだ。

「 城国の戦力を聞きたいのだ。特にアルティロイドの…… 」

「 アルティロイドの……? 」

「 そうだ、一般的な兵士の相手ならば我々でも相手できるが、アルティロイドの存在となると話は別になる。君が知っている限り、今現在で城国に存在するアルティロイドはいくついるのだ? 」

「 ……アルティロイドは、俺が城国にいた時点で四人いた。一人は風の騎士ジューク、そして水氷の騎士デュアリス、爆炎の騎士ラティオ、そして俺の四人だ。この内、ラティオはサンバナ攻防戦時に戦い、その後は行方不明で俺にも消息がわからない。そして… 」

ティーダはゆっくりと、しかし確実にその言葉を言う。

「 そして、デュアリスはシュネリ湖制圧戦時に 死んだ 」

「 ……つまりラティオの得体の不明な点は困りものだが、明確な敵となるアルティロイドは風の騎士ジュークただ一人、と見て良いのだな? 」

「 間違いは無いと思う、仮にだが新たなアルティロイドが作られて 」

いなければ……の話だが」

「……ふむ。風の騎士ジュークな。ティーダに抑える事は可能なのかな？」

「楽ではないが、可能だ。俺は……あいつの事はわかっているつもりだ」

「よし、わかった。仮に対アルティロイド戦となったら、ティーダが率先して戦ってくれないか？」

ティーダは覚悟を決めた眼差しで、しっかりと首を縦に振ってみせる。そんなティーダの答えに、ソリディアは軽く肩を叩いた。

その後、北のレジスタンス勢との会議の疲れが癒えぬうちに、ハリスを連れ再びサンバナの町へと向かう。

サンバナの町へ到着した頃には、辺りも暗くなりつつあった。前回来た際と大きく違う点は、町にはかつての戦いの時と同じく、兵士の姿がちらほらと見受けられる点である。

（ハインズ町長。上手くレジスタンスを集めてくれているみたいだな）

町中を歩いていくと、先の戦いの時の見知った顔も見かける。その兵士達の士気を見る限り、かなりのやる気を伺う事ができる。これはソリディアにとっても、作戦成功への大きな自信となっている。町長のいる建物へ着くと、変わらずに扉を叩く。すると前回と同じくして秘書であろう美女が出てくる。

「すみませぬ、パーシオンのソリディアという者ですが」

「あ、ソリディア様。どうぞこちらへ！ ハインズ町長からは、来たらいつでも通すようにと申し遣っております」

快く通されるソリディアとハリス。そのまま案内され扉を開けた向こうには、ハインズ町長の他に、もう一人の男がいた。

「おう、遅かったな、ソリディア！」

「バースか……。一体何故ここに？」

「何故ここに、だと？ お前の呼びかけに呼応して、コロセオン……」

「いや近場のレジスタンスは小細工無しの真つ向勝負をする為に、全戦力をここへ終結してるんだぜ！」

「そうだったのか、心強いな……相変わらず」

ソリディアはハインズ町長へ一礼すると、ハインズの指示により席へつく。

「よくぞ、ここまでの戦力を集めてくださいました。全レジスタンスを代表してでも、御礼を言います」

「いえいえ、そんな事。……支配の時代を終わらせる為の戦いなのです。今この瞬間、上も下も無い、一介の人間であり同志なのです」
「事実上、我々の中の最大権力をお持ちになっている貴方の口からその言葉が頂ければ、兵士達の士気は間違いなく今以上に発揮する事でしょう」

そしてソリディアは、北のレジスタンスとの間で交わした作戦内容を、ハインズ町長とバースに伝える。反発の一つ二つはある事を覚悟していたソリディアだが、会議は思いの外順調に事が進んでいく。

「……なるほど、総力戦だな。それで、北はわからんが南からは一体誰を内部に送り込むつもりなんだ？」

「細かな兵士の能力は後々見ていくしかないが、お前とティードを筆頭しようと思う」

「……ティード？ ああ、あの見込みありそうなガキの名前か」

ハインズ町長は頭を撫で回しながら、会話に割り込む。

「私は元兵士ですが、戦略という面や、兵士の能力を見るという点ではお二人に負けます。兵士編成に関しては、貴方達二人が指揮を取って頂けないでしょうか？」

「それは構いませんが……？」

「ありがとうございます。ならば私はこれで。まだまだ各方面のレジスタンス探索と交渉の仕事が残っておりますゆえ。宿屋の件は、既にご用意させて頂いています。今夜はそちらでお休みになってください」

そう言うと、ハインズは足早に部屋を出て行ってしまふ。

「……ふむ。ならばバース、お前は前衛兵を指揮してくれないか？ 私は後衛兵を束ねてみせる。出しゃばる気は毛頭無いが、勝つても負けても最後の決戦になるかもしれないんだ、全力を尽くしてみたい」

「良いんじゃないか？ お前がそれをできるつてならよ。おい兄ちゃん、しっかりとソリディアを援護するんだぜ？」

「はいっ、頑張ります！」

ハリスに一声かけると、バースも部屋を出て行ってしまふ。バースが出ていくと、ハリスは緊張の糸が切れたのか、大きな溜息を吐き出す。

「はあ……。いやあ、何で昔の人つてあんなに怖い人が多いんですかあ？」

「はっはっは、バースはあんな風に見えて義理人情に厚い、良い奴だよ」

「そうなんでしょうが……。どうも緊張してしまいます」

ソリディア達は、会議で使ったその部屋をあらかじめ片づけて、部屋を後にする。もう外はすっかり夜になっており、この日はそのまま宿屋に向かい、朝を迎える事になる。この時点で決戦まで残り八日。

ソリディアはこのままサンバナに残り、集められた兵士達の具体的な能力査定に残った。決戦が近い為、ハリスはソリディアの命令により、パーシオンの兵士全員をここに招集する事になる。但し、当然の話だが、どこのレジスタンスも最低限の守備兵士と、怪我人や体調不良者は置いてきている。その日の内に、パーシオン兵は招集され、南のレジスタンス連合軍へと加わった。

決戦間際で集められた兵の数は、サンバナ攻防戦時の約2.5倍と推測されている。知り得るレジスタンスを全て計算しても、これ程の戦力が見当たらなかったが、ここまで集められたのはハインズ町長のおかげといっても良いだろう。彼は元々、東にあるといわれ

る砂漠地帯の兵士であった為、そのコネを使い前町長以上の、戦力を集めたのだらうと噂されている。

総大将にサンバナ町長のハインズを置き、前衛兵総指揮官バース、後衛兵総指揮官ソリディアを布陣し、今、決戦の準備が整う。

そして、決戦の日の朝を迎える。過去に類を見ない、最大の決戦が幕を開けようとしていた。

31 夫使による虐殺

城国内部の混乱。とある部屋で、クリムが何者かに殺された。その部屋には至る所に血が飛び散り、肉塊が無造作に吹き飛ばされている。まるで無邪気に虫を殺していくように、今まで人間だった「もの」はあった。

(クリム……やはり大方の予想通り貴方は殺された。……貴方が予告していた残りの二十日間、きつと僕達が継いでみせよう)

ジュークはクリムの死体を、丁重に葬る。あまりに残酷な殺し方に、怒りどころか一種の確信が芽生えていた。

ジュークと共に行動をしていたメンバーは、クリムを入れて十七人。つまり残りは十六人となっている。

「みなさん、全員集まりましたね？」

この問いに、十五人の兵士や医者、科学者といった人間達は、コクリと頷いた。

「知っての通りですが、我々の同志クリムが何者かの手により殺害されました」

「誰がやったのか、見当はつかないのですか？」

この中の一人の兵士が問いたです。

「……殺つたのは、王の直属のものです。決して手は出さぬように」「王の直属？ それしかわからんのですかっ!？」

「クリムは短い期間だったが、確かに我々の同志で、尊敬に値する男だった。誰が殺したんだ……教えてください!」

肝心な所を言わないジュークの態度に、怒りをあらわにしている。ジュークも少し迷ってから、静かに切り出した。

「わかりました。……でも敵討ちなど考えないでください。はつきり言つて貴殿方に殺せる相手ではありません。それを約束してください」

全員が黙り、小さく頷く。その目には、確かな了承の意志が見て

とれる。

「 クリムを殺したのは恐らく……光闇の騎士、リオです」

「 お言葉ですが……そのリオというのは、アルティロイドなのですか？ 貴方と同じ」

この問いに、ジュークは嘘偽り無く頷いてみせる。

「 しかし、アルティロイドはジュークを含めた四人しか存在していなかったんじゃないのか！？」

「 ええ、確かにそのはずでした。しかしこれは事実です。僕達以外の新しいアルティロイドは完成していた。しかも厄介な事に新型は二人、その内の一体は、あの最強のアルティロイドである火の騎士ティードと同等が、それ以上の戦闘力を有します……。だからです、敵討ちなんて真似はしないでください」

その場は騒然となっていた。事実、このタイミングで完成型アルティロイドの投入は、ジュークにとっても大きな誤算すぎた。

「 わかっています。……だからこそ、私達ができる最善を尽くす、これで良いのでしょうか？」

一人、白衣を纏う女性が、そう言い放つ。

「 そうです。そこで、みなさんにお渡しした物があると思います。今も持っていますね？」

各自は場所は違えど、ポケットの中から、超小型の黒い球体を取り出す。

「 先に説明した通りです。これは、こんなに小さいですが、相応な破壊力を持った爆弾です。これは飲み込んで発動します。体内に入ると、すぐにその者の心臓の活動と同化し、寄生します。生命力を吸い続け、次第にその威力を増大させる……。爆発させる方法は二つ。一つは事前にみなさまに伝えた『言葉』を言う事。二つ目は、宿主が死亡する事です。では良いですね、これを飲み込みます」

ジュークは率先して、その黒い球体爆弾を飲み込んだ。それに応じるように、全員が躊躇い無く飲んでいく。

「では……みなさんの命、新しい時代を創る為、僕にください」

その場にいた全員が、迷いの無い敬礼をジュークに向けている。そんな真つ直ぐな意志に応える為に、ジュークも敬礼をする。

「クリームが、地上のレジスタンスの為に作る城国の隙。残りの期間は、我々が埋めてみせる。この人体爆弾によって」

その数多くの眼差しは、男も女も決意を決めていた。そして決戦の日がやってくる。クリームが混乱させる為に仕掛けたのは爆弾だ。それも連鎖爆弾であり、新しいものから順々に爆発していく。

数年間分である。クリームは数年間もの間、城国を騙し続け、地上を裏切り、この瞬間の為に、爆弾を仕掛けた。この次々に起こる連鎖爆発により、城国内部はパニックに陥る。

「くそっ、何だ、一体どうなつてやがるっ、突然爆発するなんて！」

「しかも爆発の威力は、人を殺せるが、この城国を破壊できる程じゃないぜ!？」

「そんな事は見ればわかつて　んっ？」

爆煙の中から、白衣を着た女性が現れる。城国兵士も、その存在に気づいた。

「なんだ、お前はっ！　医者だか科学者だか知らんが、邪魔だからシエルタールームにでも避難してろよ、つたく！」

「……支配の時代を終わらせる為に……希望の光を我につ！」
「えっ？」

その瞬間、白衣の女性の体は光輝き、唐突に爆発する。城国兵士も共に巻き込んだの自爆である。今もなお続く連鎖爆弾と、人間爆弾により、城国内部は完全に混乱状態に陥っている。

王と呼ばれ、王の間へとやってきたジューク。そこには相変わらず薄布の向こうから喋りかけ、一行に姿を現そうとしない王の姿と、二人のアルティロイドが存在している。

そのアルティロイドは男女であり、恐らくは女の方がクリームを殺

した者である。ショートボブの髪を金髪に染めている。年齢はデュアリスと同じか、ラティオと同じか、あるいはその真ん中か。いずれにしても近い年齢な事には変わりない。ただ女の方はどこか幼さを残すのに対し、男の方はジュークでさえも威圧感を感じる見た目をしている。

黒い髪をオールバックで纏め、背が高く体つきも良い。何よりも威圧感を与えているのは、その表情である。不動明王、とでもいうのだろうか。そしてマントのように羽織った黒い戦闘法衣。何よりもその大きな体よりも更に大きな大鎌の異質さである。黒に統一された姿と大鎌により、ジュークは死神を連想させられてしまう。

「ジュークよ。下が騒がしいようではないか、何があつたのだ？」

「内部に裏切り者でもいたのでしょうか……。いずれにしても計画的な犯行です」

「なるほどなるほど……。しかし最近の貴様は失敗続きではないか。貴様ほどの眼があれば、このような事態ぐらいは見抜けよう？」

「申し訳ありません。この事態を見抜けなかつた私の責任です」

王は溜息混じりの唸り声をあげる。そしてそのまま黙り込んでしまふ。

今もなお爆弾は爆発しているのだろう。城国の中でも上に位置する王の間でさえ、微弱な振動が続いている。

「キャハハハ！」

「むう、どうしたのだ、リオよ？」

やはり女のアルティドイドがリオ。そのリオは独特な笑い方で、その場の静寂を打ち消した。

「駄目、やっぱり面白すぎて耐えられない……。キャハハハ、地上のゴミ達、この混乱に乗じて攻め込んできましたよ？」

確かに下から襲ってくるような、微弱な振動は爆発だけにしては大きいものである。この絶え間無く、繰り返られる振動は、地上軍による咆哮の威力だろうか。

「ぶっはっはっは！ なるほど、そういう計画かい。つくづくゴミ

の考えそんな事だよ」

「 どうしますか、王よ。この程度の事、我々には微弱な事柄でしかありませんが、下の階にいる兵士達には少々荷が重い事です」
今まで、沈黙を貫いていた男のアルテイロイドが口を開く。見た目だけではなく、その声や喋り方までもが威圧感に満ちている。

「ふむ……そうだな。それに裏切り者のティータと、アンノウンのラテイオの動向も気になりはする」

「この私が下界の民を一掃してきましょう」

「ちよつと待ちなよ、クリツパー！ ゴミ掃除はリオがやるのつ、パーティナの試しもしたいしさ、キャハハハ！」

今の会話から、死神のような様相の男は、クリツパーという名前がわかる。

「では王が命ずる。リオは地上に赴き、思い上がっているゴミどもに裁きの鉄槌をくだしてやるのだ」

「キャハハハ、了解しました王様！」

命令されたりオは、それこそ鼻歌混じりに王の間から出ていく。

「さて……万が一もあるのではな、この私を守護する騎士が必要になるな」

「お言葉ですが王よ。貴方様の守護は、この風の騎士ジュークです！」

「……ふんっ、愚か者めが！ 最近の貴様の失態続きの戦果で、私の命を守護するだと？ 思い上がるな、出来損ないめっ。……守護はこの闇光の騎士クリツパーに命ずる」

その王の勅命に、クリツパーは深々と頭を下げる。

「……王の仰せのままに」

そんな二人のやり取りを、ジュークはただ黙って見つめていた。

「ジューク。貴様は下の階に赴き、ティータあるいはラテイオからの防衛に備えろ！」

「……了解、しました」

ジュークは命令された行動を遂行すべく、王の間から出ていく。

そのまま下に降りていくと、いまだに続く爆発音と、兵士達の戦う怒声や断末魔を聞く事ができる。

「……ふっ、ふふふ、はははは、はっはっは！」

そんな中、ジュークは一人笑っていた。その笑い声から真意を確認する事はできない。

「計画通り」

誰もいない場所で、ジュークはただ一言を呟く。

そして地上のレジスタンス連合は、城国から轟く爆音を合図に一気に攻撃を開始していた。

はたしてそれが、クリムの仕掛けたものなのかは、わからなかった。しかしソリディアとバースには、その確信があったのだ。

事実、城国に攻め入ると、兵士達は混乱しており、半ば不意討ちに近い卑怯な戦いだったが、序盤戦の流れは間違いなくレジスタンス連合が取った。

「ソリディア！ 今なら内部を攻められる、俺とティータのガキは一気に中を叩くぞ！」

「行ってくれバース、ティータ！」

「よし、行くぞ！ 他の兵も俺とティータに続け！」

城国外部の戦いを制覇したレジスタンス連合は、決められた作戦通りに、一気に内部へ進行していく。バースが指揮する前衛兵のほとんどは内部へ入った。ここまでの作戦は極めて順調である。

（北のレジスタンスは……さすがラック兵士長。極めて冷静に戦況を見ている）

バース隊がほとんど中へ入り、外部を掌握しているのはソリディア隊となる。

「ソリディア兵士長！」

「カ、カルマン！？ お前はまだ念の為に、安静にしていなければならん体だろう。何故ここにいる？」

「自分だって、ソリディア兵士長のパーシオン兵士ですっ、こんな

大事な時に寝てるだけなんてできません！」

「……こいつめ。今から戻ってはかえって危ない、ここにいても良
いが、更に後方へ下がり援護に徹するのだ！」

カルマンは「了解！」と元気よく言うと、命令通りに後方へ下が
り援護に徹する。

戦いは順調に進んでいたが、突然の膠着状態に陥る。ただ単
に城国兵士が体制を立て直したにしては、あまりに突然すぎるのだ。
(何だ、一体何が起きているのだ。妙な胸騒ぎが消えん)

「 どうした、状況を知らせるのだ！」

あまりの急展開である。今までの流れは止められている。ソリデ
イアは見える範囲で前の方を見ると、明らかに混乱している兵士が
目につく。

「……一体、どうしたというのだ……」

「 キャハハハ、みんな死んじやえ！」

戦場には、あまりに不釣り合いな子供の戯れた笑い声。その瞬間、
白い光の線が走ったかと思うと、兵士達の断末魔が響く。

「何だ……あれは？」

そう兵士達が見たのは、アルティロイドの少女リオである。情勢
の変化は、このリオがもたらしたものである。

リオは純白の戦闘法衣を纏い、空に浮遊していた。そしてリオを
中心に、八つの光の玉が確認できる。その神々しいまでの存在に、
殺されていきながらも、兵士達はこう呟いていた。

「 まるで、天使だ」

そうして白い光線に撃たれ、その身を屍に変えていくのだ。

「キャハハハ、天使だって！ それ良いかも、キャハハハ！ じゃ
あ可愛い天使による人間虐殺を開始しまーす！」

その言動、態度は明らかに人殺しを楽しんでいた。まるで遊戯の
ように、ゲームのように人の命の重さは軽く、文字通り遊ばれて殺
されていく。

そんな光景を見て、ソリディアはうち震えていた。

「あの声、あの笑い声……間違いない、奴が、クリムを……！」
ソリディアの視線は、天使のようなリオに釘付けになっていた。そして剣を握った拳が、全身が、明確な殺意に満ち溢れていた。

「……ソリディア、兵士長？」

それを後方で見ていたからだろうか、あるいはずっと男の背中を見ていたからだろうか。カルマンは誰よりも早く、ソリディアの異常な雰囲気気がついていた。

「うっ、うあああああああつ……！」

突然の咆哮。そして弾けるようにソリディアの体は、リオを殺す為に動いていた。

「何よ、せつかく人が気持ちよくなってたのに……不愉快！ 貴方だけはもつと酷く殺してやるっ！」

言葉の通り、リオの声色は不機嫌になっていた。そして光の玉を八つ全て、ソリディアに向け放つ。

「リオの武器。月光の蝶パーティナの威力を受けなさいよ、キャハハハ！」

八つの光線が、ソリディアに向かう。だがソリディアは光線を避けてみせ、一気に間合いを詰める。

「真つ直ぐ進んでくる軌道では、何発撃とうが避けるのは容易いものだ。君の得意そうな遊びでは、こんな事はわからないかね？」

冷静な口調ながらも、怒りに満ちた一太刀を振るう。並の人間ならば、いかに達人といえど反応もできずに斬り殺されているだろう。

「生意気っ！」

心底、腸煮えくり返ったような声をあげ、その一太刀をソリディアの体ごと、叩き落としてみせるリオ。勢い良く地面に叩かれ、ソリディアは重い呻き声をあげる。

（……やはり、アルティロイド、か。……私の全霊を込めた一撃でさえ、届かんのか……。無念だよ、クリム……。敵討ちとはいかないまでも、せめて……。せめてお前の無念を晴らす……。一太刀を浴びせたかった）

ソリディアの体は、全身を骨折したような激痛が走っていた。体を動かさそうとしても、動かせない。ただ地べたで寝ている事しかできなかつたのだ。

「マジで超ムカツク！ 死ね、もう死んでしまえっ、ゴミクズの間どもめ！」

動けないソリディアに向かい、八つのパルティナを向ける。そして再び、八つの光線がソリディアに放たれた。

「これで終わり。クソ生意気な人間めっ、キャハハハ！」

「ソリディア兵士長！」

光線に撃たれようとするソリディアに向かい、カルマンは恐れる事なく走っていた。そして勢いのままに、ソリディアを回収すると、パルティナの光線は誰に当たる事もなく消え去る。

「た、助かつたぞ、カルマン。カルマン？ っ！？」

助けたまま、返事の無いカルマンを見ると、カルマンは自分の右目を押さえつけ悶絶していた。あまりの痛みからだろうか、嘔吐まですしている。

「カルマン……」

「……っもう、ウザいつ、ムカツク、絶対に殺してやるわっ！ 最大出力よ、パルティナ！」

八つのパルティナの光は、更に大きく光輝いていく。身体中に走る痛みに耐え、ソリディアは立ち上がる。

「最大出力のパルティナよ！ どこに逃げようと、お前達クズは死ぬの、遙か後ろにいる奴らごと一緒に……消し飛ばええええ！」

「カルマン。せつかく救ってもらったのに、すまないな。新しい時代を、未来への希望を守る為に……散っていった戦友達よ、クリムよ……そして、愛するマルシヤナよ。……私と共にっ！」

白く輝く極大閃光が、一帯を包み込む。だが兵士達は、そんな全てを奪う閃光の他に、もう一つの閃光を見る。それは命の光。

そして、光の霧が晴れてくる。人間はまだ生きている。命は命に守られたのだ。

32 風は疾風となりて

死の間際、ソリディアには一種の走馬灯というものが見えていた。それは遠い遠い過去の映像だ。

「ねえ、貴方……どうしても行くの？ 私は、貴方さえいてくれれば、それで良いんです……」

「わかってくれ、マルシャナ。俺はこんな時代を終わらせたいんだ。どんなに微力でも良い、地上軍の戦力となって、こんな戦争を早く終わらせるんだ。そうする事で、お前を守りたいんだよ！」

マルシャナは静かに小さく、首を横に振り否定の意思をみせる。

「守ってくださいるのなら……ここで守ってくださいませ。貴方が戦場へ行く必要など……」

その目からは、涙が流れ落ちる。

「マルシャナ……。ごめん、すぐに戻るからっ、すぐに戦争は終わるから、だから……待っててほしい！」

そう言うと、ソリディアは妻であるマルシャナと過ごしていた家を飛び出す。もう二十年も前の事である。

「人を、殺したのは初めてか、お前？」

ソリディアの身体は、殺した城国兵士の返り血に染まっている。

「いえ……初めてでは、無いですけど。自分から相手を殺すのが……こんなに気持ち悪いなんて……」

「大丈夫さ。すぐに慣れるよ。いちいち一人殺した程度で動揺してたらさ、兵士なんてやってらんないって！」

「そういう……もんですかね……」

死体が転がる場所で、目の前の男は笑っている。作り笑いとはいえ、同じくわらっている自分に気がつかされる。殺してしまった人に悪いと思いながらも、殺人という過程に慣れていく自分を発見する。

それから二、三年の間、がむしゃらに剣を振るっていると、

地上軍の中でも有数な剣の使い手となっていた。

そんな、奪っては奪われての戦いをしてきたが、中には長年に渡り共に過ごす、戦友というものにも出会う。

「よおよお、俺はクリムってんだ。アンタの剣捌き凄いなえ、思わず見とれちまったよ！」

「ふんつ、馬鹿野郎が！ 男の剣に美しさなど必要は無い。あるのは剛剣のみで良いわっ！」

「……はっはっは、あいつはバース。口は悪いけど、意外と良い奴なんだぜ？ よろしくな！」

それがバースとクリムとの出会いである。それから約二年。大戦は終わった。この大戦で多大な戦果を挙げたソリディア、バース、クリムの三人は三剣士と呼ばれるようになる。

大戦が終わっても各地で小規模な戦争は起こっていたが、地上軍は事実上解散し、生き残った兵士達も各々の故郷へと帰っていく。帰り着いた者達は、その帰還を喜び、家族と共に泣き、その生存を喜びあった。

ソリディアもまた、自分の故郷の町へと帰ったが、彼に待っていたのは荒廃した故郷の姿であった。そしてそこで最愛の妻マルシヤナの、変わり果てた姿を目の当たりにしてしまう。自分の行いは間違っていたのか、ソリディアの自問自答は続いた。結局は故郷を失ったソリディアは、フリーの傭兵として各地を転戦し、戦い人の死を見てきたのだった。

しかし、そんなある時の事である。次の戦いの場を求めて、深い森林を彷徨っていたソリディアの耳に、突然何かの音が聞こえた気がする。

「……！！」

最初は敵か、あるいは凶暴な動物かと警戒していたが、それがすぐに赤ん坊の泣く声だと気づき、ただひたすら声に向かって走った。「はあ、はあ……な、なぜここに赤ん坊が……？」

得体の知れない赤ん坊。女の子だ。近場に親はいないのかと探し

回ったが、いよいよ親を見つける事が出来なかった。

「やれやれ……捨て子か？ 可哀想に……この子の名はなんというのだろう？」

何か手がかりとなる物がないかと、赤ん坊を調べてみると、一つのドッグタグが見つかる。赤ん坊とドッグタグという異質さを不審に思いながらも、ドッグタグを調べると名前らしきものを発見できた。

「テイ……。いかな、削れてしまつてこれ以上は読めん。……テイ、テイ……。テイオ！ テイオでどうだ？」

言葉がわかるはずもないが、ソリディアは赤ん坊にテイオと名付けた。その名前に喜んでいような素振りを見せてはくれなかったが、喜んでいと無理矢理納得する事にする。

「テイオつていうのはな、貧相で地味だが……私の故郷の町の守り神様の名前なんだぞ。……といつてもわかるわけがないか、はつはつは！ ……こんな時代だからこそ、お前にはみんなを守れるような存在になつてもらいたいなあ……」

子を授かる事が出来なかつたソリディアにとって、テイオは実の娘のように育てた。テイオを発見した場所の近くに、小さなテントを作りそこで暮らす事にしたのだ。それから一年、五年、十年、月日が流れる度に人が増えていき、小さなテントは大きな集落となり、パーションという存在にまで発展する事ができた。

そして更に五年が流れる。不良少年だつたカルマンの、兵隊志願。突如現れた少年ティーダとの出会い。サンバナ攻防戦。自身の不治の病の存在。北の大地への旅立ち。そして。

「長、兵士長つ、ソリディア兵士長！」

霞んだ視界と、雑音混じりの音感。既に感覚の無い肉体。だがかるうじて、自分を呼ぶ声がカルマンであると判断できる。

「……カ、ル……マ、ン……？」

「そうです、自分ですつ、カルマンです！ ハリス副兵士長や、タ

ムサンさんもいますよ!」

「そう、か……。皆は……。生きて、いるの……。だな?」

「はい、みんな……。生きていますよっ、貴方が守ったんです、これだけの命を……。貴方が守ったんです! やはり貴方は、ソリディア兵士長は、自分にとつて一生の目標にする尊敬すべき男でありましたっ! そして……。やはり、貴方は英雄でした……。!」

涙を流し、嗚咽混じりに言葉を走らせる。そうなっているのは、カルマンだけではなかった。ハリスもタムサンも、そしてソリディアに縁の無かった者でさえ、一人の男の為に熱い涙を流した。

「新しい時代を。希望に溢れた……。未来を」

最後の力を振り絞り、ソリディアは言葉を放った。そして ソリディアの肉体は唐突に、静かに生き絶えたのだ。

「ソ、ソリディア兵士長おおお!」

未来を託した若き腕の中で、ソリディアはその生涯の幕を閉じたのだ。

だが、戦争という名の大きな渦は、そんな一人の男の死に、嘆き悲しんでいる余裕さえ与えてはくれなかったのだ。

(あなた)

(マルシャナ……待たせたね)

(いいえ……そんな事はありませんよ)

(君はあの頃のままだな、私はこんなにヨボヨボになってしまったよ。……今度は、ずっと一緒だ。行こう、マルシャナ……)

城国内部。下へ向かい爆音が鳴り響く。兵士達の断末魔。まるで地獄絵図を、そのまま再現したかのようでもある。

ティードは一人、城国を昇っている。数え切れない命を奪いながら、目指すは王の間である。

(この戦い、大元の黒幕は王に違いはない。俺にできる事は、王と
いう存在を殺す事。それが……。地上に降りて、色々なものを見て感

じて、俺が出した答えだ)

上へ進むと、爆音が小さく少なくなっていく。それと共に城国を守備する兵士もいなくなっていく。ティードには理由がわかっていゝる。王の間および近辺のエリアには、限られた人物しか入れない。通常の兵士、いや人間には踏み込む事さえできない聖域なのだ。

(……近いな。気配が近くなっていく)

ティードは王の間への最後の部屋を開ける。この部屋は前城国王の間である。特殊な模様で装飾されている裏腹に、王座などといったものは全てが片されている。いつでも抜刀できるよう構え、敵の突然の襲撃に備える。

「今の王の父、つまり前王は城国、地上とは関係なく全ての人間を愛していた。この城国シャングリラ・キングダムも、その当時の人間達の夢の産物だった」

「……ジューク！」

何も無い部屋には、一人の騎士が存在した。それはティードもよく知る人物、風の騎士ジュークだ。

「夢の産物……理想郷なんて本当にあると思っっているのか？」

「いや、思わないね。それは当時の人間達でさえわかっていた事だった」

「わかっていた事だった？ ならば何故ありもしない理想郷を目指したというんだ」

「夢の産物、と言ったろ？ 平和に慣れてしまい、好奇心や闘争本能といった人の心をくすぐるものがほしくなった。その結果、一種の娯楽として理想郷を目指したのだ。ありもしない幻想郷を求め、そして理想郷を創る為に命をかけたのだ」

ジュークは淡々と、その事実を口に出した。

「しかしそんな夢の産物は、ご存知の通り、今の王によってこのような形で使われる事になった。僕もティードも、デュアリスやラティオも、そんな人々の夢の産物から生まれた存在。哀れなものだな……」

「……だからどうした？　ならば今からでも王を倒し、再び平和な世を創れば良いだけの話ではないのか」

「……そうだな、確かにそうだ。しかしな、事実はその通りに単純ではないんだ。良くも悪くも、絶対的な指導者である王だ。そんな存在を消し、新たな世界を構築するのは、思っている以上に大変な事だ。そして……そんな絶対的な存在を消すという、大罪をお前は背負う覚悟があるのか？　地上に行き、お前にも守るべき大切なものぐらいできただろう？」

「……………そうだな。そうかもしれない　だが、そんな守りたい存在は、今もこの時代を命懸けで生きている。こんな……壊す事しか、殺す事しかできない俺だが、そんな俺だからこそ、そんな奴等の為にこの時代を壊す」

「お前らしいな。他人の為に自分が痛い目を見る、悪名を背負う……お前は元々、そんな優しい奴だったものな。　だが、そんなお前だからこそ、僕はティーダを止める！」

ジュークはその白き鞘から、深緑の剣フルーティアを抜いた。同じくティーダも、黒き鞘から深紅の剣ヴェルデフレインを抜き構える。

「行くぞティーダ。恐らく、これが僕とお前の最後の戦いだ！」

ジュークは浮遊を開始し、一気に間合いを詰めてくる。その速さは今までの中で、いや今まで戦ってきた相手の中で、最速のスピードをほこっている。

「くっ！」

ティーダは、疾風のように走る剣線を避けようと身構える。

「その程度なのかい、最強のアルティロイドとして、存在している火の騎士ティーダの実力は……」

ティーダの左肩口を斬ろうと、ジュークは剣を向ける。その軌道を読みティーダは防御も回避もできるように、全ての神経を集中させる。

「甘いよ、ティーダ。僕のスピードは、視覚で捉えた全てのものを

振り切る」

突然、ティードの背中に痛みが走る。その瞬間まで目の前にいたはずのジュークは、そのわずか一瞬で背後に回り込み、斬撃をくわえる。

（馬鹿なっ、目の前にいたジュークは、残像や幻影といったチャチなものではなかった！）

「……ふっ。なまじ最強の実力を持っているからこそ、陥ってしまった領域がある。確かに、あの瞬間まで目の前にいた僕は本物。そして背後から攻撃を加えた僕も、本物さ」

ジュークの言葉を聞きながらも、斬られた傷の具合を確認していた。傷の見事さとは裏腹に、その深さは大した事はない。

傷の問題点は、気にする必要もなかったが、現状の最大問題は、瞬間まで目の前にいたジュークが、残像も出さずに背後に回り込み攻撃を加えた事だ。

「別になんのトリックもないさ、目で追いきれない速度で回り込んだ程度の事。……僕が残像なんてものを使ったら……こうなるのさ！」

瞬きをする間とは、よく言ったものだった。時間にして一秒にも満たない時間で、部屋中にジュークの残像が出現する。その数は十を軽く越えている。

「これが風の騎士の速度か……」

「残念だがティード。今の僕は風の騎士のランクを越えている」

「……風の騎士のランクを、越えている？」

「そう……僕と融合した風の妖精の力を、最大限に発揮させる。そうする事により、僕の戦闘能力は底上げされる。それが風と火という、一つのランクしか備えられていない僕達ができる能力だ。

つまり……戦闘能力のコントロール」

「戦闘能力の……コントロールだと!？」

「風の騎士は、力の解放をする事により、疾風の騎士になる！ それ故に僕は風の速さを越える!」

残像が一斉に襲いかかる。前後左右上下、あらゆる方向からジュークが向かう。だが十を越えるほとんどは残像による偽物であり、本物はその中の一人である。

（今の段階では、ジュークの速さに対抗する術がないっ……。ならば、やる事は一つしかない！）

襲いかかる本物と偽物のジューク。攻撃の正体がわからないからこそ、防御をする事が危険だと判断する。近場にいるジュークから、ヴェルデフレインによる斬撃を走らせていく。

（防御が不可能と判断し、攻撃に転じてきたか……。さすがだな。だが僕にはそんなティーダの行動も、予想の範疇に過ぎないっ！）

一人、また一人と、残像ジュークを斬り伏せていく。着実に数を減らす事により、本物からの攻撃を予想しやすくする。残る本物を含めた残像は三体。つまり二体が残像で、一体が本物のジュークである。ティーダから当てられる確率も、ジュークの攻撃を避けられる確率も、比例して高くなる。

「ジューク！ こんな程度の残像では俺を止める事はできない」

「……そうだね、決して侮っていたわけでもないけど、幼い頃よりずっと戦ってきた相手、その戦法も動きも予想ができてしまう。だから充分な戦法を駆使したつもりだったけど……。どうやら想像の遙か上にいっているらしい」

「そういう事だ。火の騎士の力は……。お前が一番よく知っているはずだ！」

「ああ……。一番良くしっている。だからさ……。だから怖いんだよ、火の騎士の実力を知っているからこそ。誤って殺してしまうのではないかと」

ジュークの速度は更に上昇する。そのスピードは、かろうじて目で追いきれる今までの速さを超え、いよいよ目で捉えきれない、いや映らなくなる。風のような速度を誇っていた速度を更に超え、疾風のような速度で移動できるようになった。しかし、この速度は文字通り「風になった」速度である。

「疾風迅雷 斬！」

一つの風が吹く。その風は鎌鼬かましたちとなりて、触れたものを斬り裂く。

33 火は業火となりて（前書き）

今回の話は、超低クオリティ。

33 火は業火となりて

「ぐっ、あっ……!？」

風が通り過ぎたと同時に、胸元から真つ赤な鮮血を滴らせる。何が起きたのかが、わからないわけではないのだ。これはジュークの斬撃により生まれた傷なのだ。だが 見えない、反応できないのだ。

「どうだい？ 変なトリックがあるわけでもなく、不意打ちをされたわけでもない。わかっているのに攻略できない気分だろう」

あの瞬間、ジュークは風になった。残像を残せる速度を越え、全てが残らない速度である。

「何故だ……」

「何故、とは？」

「俺は今の瞬間、反応どころか姿すら見えなかった。お前がその気になれば、俺の首を飛ばすなり、心臓を突き殺すなりできたはずだ」
「……そんな事、そんな事にすら気づかないとは、僕はティーダを買いかぶりすぎていたらしいね。何が最強のアルティロイドだ、笑わせるっ。……もしも、もしもお前が、真に強ければ……デュアリスのような悲劇すら起きなかった事を、思いしれ！」

冷静なジュークにしてはめずらしく、明らかな怒気と殺気を混じらせながらの攻撃である。風になり、既に姿そのものが見えないジュークの攻撃を、ティーダはただ当てずっぽうに剣で防御、あるいは回避行動をとるしかない。

(姿は確かに見えない程に速い。だがそんな怒気と殺気を表しては、攻撃の瞬間を先読みする事はできる)

ティーダは、ジュークのいる方向を向き、剣による防御を試みる。偶然か必然か、ジュークの斬撃はヴェルデフレインに当たり、この攻撃を防ぐ事に成功する。

「……くうっ！」

「本当にその程度なのか、火の騎士ティード！ それでは王を倒すどころか……大切な人すら守れないじゃないか！」

再び攻撃を開始するジューク。風そのものになる攻撃「鎌鼬」による、見えない剣線。その斬撃は、攻撃を仕掛ける度に、ティードの体に無数の傷をつけていった。

そして、いよいよ立っているだけの体力すら奪われてしまう。呼吸を荒げ、剣を支えにする事で、かろうじて姿勢を維持している。対するジュークは、先ほどの怒気と殺気が嘘のような冷徹な表情で見つめている。

「仮に僕を倒したとしても、そんな状態では後ろに控える王を殺す事もできないかもしれないね。ティードは知らないだろうけど……後ろには新しいアルティロイドの存在もあるというのに……」

「新しい……アルティロイドだど!？」

「そうアルティロイドナンバーズの五号機と六号機。光闇の騎士リオと、闇光の騎士クリッパだ。……まあ、その程度の腕で終わるならば、この二人にたどり着く前に、僕がティードを殺す」

ジュークという男は、誰にでも優しくかったのだ。義兄弟とはいえ、ティードとラテリオには実の弟のように、デュアリスには実の妹のように。だが今はそんな兄弟に「殺す」と投げかけるジュークがいる。仲間を守る為に振るってきた深緑の剣が、ティードの首を飛ばす為に向けられる。

「最強、とはいえ……所詮現状に満足している騎士には、どんな事をしてでも守りたいという感情が芽生える事はない。そんな存在がいるならば、どんな事をしてでも守る為に更なる力を求める……この僕のようにな！」

ジュークは正に首を刈る勢いで向かってくる。その速さは、やはり目にも止まらない速さである。

(……ジュークの速さが、見える?)

ティードは咄嗟に剣を構え、首刈りの剣線を止めてみせる。超金属音と共に、一瞬の火花が飛び散る。

(むっ、止められたか！？)

近寄ってきたジュークを、偶然とはいえ止める事に成功した。この機を逃さずに、ティードは一気に接近戦をしかける。激しく交差する深紅と深緑の剣。

「このまま押し切るぞ、ジューク！」

「やらせはしないよ、ティード！」

速度は圧倒的にジュークが勝るが、力においてはティードの独占上である。

斬撃を力で押し付けるように与える事で、ジュークの得意な距離にしないよう立ち回る。

「やはりか。お前の速さはさっきよりも明らかに落ちている、現にあれほどの速度が出せるなら、こんな力押しなんて、軽く回避できるはずだ！」

(気づいたか……。確かにこの能力アップは一定時間しか効力を及ぼさず、その後に再び魔力チャージによる時間が必要になる)

風の騎士と火の騎士では、単純な戦闘力で勝るティードに、完全に戦いの流れは傾く。

「戦闘能力のコントロール……凄い技術だが、今はそんな事をしてる暇は無い。このまま早々に倒させてもらうぞ！」

「くっ……！ つこの、馬鹿野郎！」

滅多に口にしないジュークの言葉。そしてそれと共に拳が飛び、ティードの右頬に直撃する。殴られたティードは、たたらを踏んで後退する。

「ジューク……！？」

「今のお前では、勝てないんだ。時代という大きな敵の前には……！ お前は地上で出会った大切な人達を守る為にここにいるはずだ。絶対に負けられない戦いなんだ！」

「俺は負けない！ 負けるつもりもない！」

「それで負けたら……お前はとうするつもりなんだ！ 負けて死んでしまったお前には、後の世界の事などどうでも良い事なのだろう

な！」

「…………ジューク？」

息を荒げてまで、大声で叫ぶ。ただの叫びではなく、どこかジュークの感情が籠っていた。そんなジュークの姿をティータは知っていた。

（いつの頃だったか…………まだ子供の頃か、ジュークは前にもこんな風に怒った）

それは遠い昔の記憶だった。ヒューマンからアルティロイドへと改造され、己の力の開放すら間もない頃の事。

「ティータ、ちゃんと聖獣の魔力コントロールをしないとけないぞ」

「大丈夫さ、兄さん。俺達をこんな体にした科学者は言ってた。俺はアルティロイド計画の中でも最強の戦闘力を誇っているんだって！ その戦闘力と、このヴェルデフレインの攻撃力があれば、俺を倒せる奴なんていないさ！」

「馬鹿、それで負けたらどうするつもりなんだ？」

「俺は負けないって、負けるはずがないだろ！？」

「自分自身の成長を考えぬ奴に、勝利はない！ 現に今の僕がティータを殺そうと思えば、いつでもその首を飛ばす事ができるのを忘れるなっ！」

「う…………うう、何だよ、そんな事…………言わなくたって…………」

「それが僕達が必要とされる戦争という名の戦場だ。そこでは弱い者は散る運命だ。ではどうすれば戦いに勝てると思うっ？」

「…………どうすれば、良いのさ？」

「今言った通り。常に強さを追い求めろ、自分の現状に甘んじるな強さを、追っ…………」

「僕は常に追い求めている…………みんなを、守りたいから」

今も昔も変わらず、シュークはティータに教えていた。それをティータは覚えていた、いや思い出したのだ。

「強さを追い求める」

それはティータにとって、考えた事も無かったのだ。物心ついた時より、既に最強だったティータは、自分よりも強い者に打ち勝とうという、心持ちがなかったのだ。それがジュークが幼き日より注意していた、ティータの弱点だったのだ。

「さあ……ティータ。もう茶番はおしまいにしよう。魔力チャージも完了した、再び疾風の騎士となりて、お前の首をもらい受ける」
ジュークの纏う、風のオーラが明らかに変わる。より強く鋭さを増したのだ。

（どうする、次のジュークの攻撃は間違いなく避けられない。今よりも強くなるんだ。だがどうする、どうすれば強くなれる？）
「行くぞ！ ……防いでみせるよ、それができなければ時代という波に殺されるだけだ」

聞き取れないぐらいの小さな声で、ジュークは言った。ティータの表情を見る限り、何かに気づいたのかあと一歩のところまで来ているのが見て取れる。

だがジュークは風となる攻撃　鎌鼬になり、ティータに襲いかかる。体が風となり姿を消す。

「くっ……！」

「臆するかっ、ならばそのまま死ぬが良い！　大切な人すら、守る事すらできずに！」

ティータは初めて敵を前に、恐怖で後ずさった。最強という実力を備え、今までは相手を畏怖させてきた騎士が、正に初めて他の畏怖によって後ずさったのだ。

（　大切な人。　強さを求める。　大切な人を、守れる強さを求める？）

（　ティータ）

突然、声がティータの心の中に響いた。それはセレナと戦っていた際の声の感覚とは、少し違う感覚のものである。

（ティータ。ちゃんと生きて帰ってきてよね？　ちゃんと……生きて帰ってきたら、私……まだわからないんだけど、貴方に伝えたい

事があるの)

(伝えたい事? 何だ、いますぐに言えば良いだろう?)

(い、今は無理っ! とてもじゃないけど、今は無理! ……だからちゃんと帰ってきてね?)

これはティードの思い出の記憶。決戦前にうつすらと、ティオから伝えられた事が出てきた。最も、口では相手こそしていたが、ティードの心はそこに無かった。

(死を間際にして……変なものを見たか。俺は……生きて帰れない!)

(愚かよね、火の騎士)

(……誰だ!?)

女の声がする。その声はティオともデュアリスとも、セレナともつかない声だ。しかし全く知らない声ではなく、うつすらと声を知っている。

(名乗る必要もない事。そのまま死す貴方に、名乗っても仕方がない事)

(……そうか。お前は死神か? 俺を連れにきたのか)

(命を開放しなさい。貴方の聖獣と、風の騎士の妖精の光を見なさい)

促されるまま、自分とジュークの光を見る。すると自分の光は小さく光っているのに対し、ジュークの光は自ら放出するかの如く、大きく力強く輝いている。

(これは……?)

(それは命の輝き。最も定義は曖昧であり世界によりけり、霊力や魔力などと表現されるものもあります。火の騎士よ、貴方の聖獣の輝きは、まだ半分程度のものしか開放していません)

(命の輝き? 開放?)

(そう 命を開放しなさい。それが今の風の騎士に打ち勝つ方法です)

その言葉を残し、声の主は消えていた。その残り香は、やはり全

く知らない存在ではなかった。いや最も身近に感じる事さえできたのだ。

「俺に宿る……火の聖獣エンドラ。……お前に、お前にまだ力が出せるといふのなら……その力を俺に貸してくれっ！」

エンドラの命は、ティーダの声に呼応し更に光輝く。その光は今日の前に接近しつつある、ジュークの光以上の輝きがある。ティーダの体は業火のオーラに包まれていく。

「!? ティーダの纏う火が、変わっていく……」

「ジューク! ……ありがとう」

「なっ……!？」

ジュークはティーダに触れる事なく、後方へ吹き飛ばされる。ティーダの纏う業火のオーラが、他者の接近を許す事なく拒絶したのだ。

「業火の騎士……」

その炎を纏いし騎士を見て、ジュークは思わず呟いていた。

「まだ、馬鹿な俺にはちゃんとした答えのない覚醒だ。あまりに突然すぎる力の開放に……自分自身がわかっていないんだ」

「そうか……だが、そこまでくれば自分でゆっくりと見つけれらるさ。これで立前はついた、更に奥に進むが良い、ティーダ。この先には闇光の騎士クリッパと王が待っている。無事に死なないで終わる事さえできれば、次は真つ当な戦いをお前としてみたいな」

魔力開放一発で風の騎士を倒す事に成功する。明らかに戦意喪失したジュークを見て、ティーダはヴェルデフレインを鞘に収めた。

「お前がいなければ……俺は負けていたのかな？」

「さあ? 負けるとは言ってみせたけど……そんなものはやってみなければわからない。お前の力を試してみるが良いさ。……だが、クリッパには注意するんだ。あいつはどうも毛並みが違う」

ティーダは小さく頷くと、ジュークを残し王の間へと向かっていく。そんな姿を見送りながら、ジュークは小さく呟く。

「やれやれ……手間のかかる弟だ。そして、ここからが計画開

始だ」

火の騎士ティータ。王とそれを守護する闇光の騎士クリッパー。そして何かを企む風の騎士ジューク。それぞれの思惑が交差し、一つの渦を作ろうとしていた。

33 火は業火となりて（後書き）

名前 ティーダ
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 16
階級 業火の騎士
戦闘 3300
装備
E 深紅の剣ヴェルデフレイン
E ティーダ専用戦闘防護服
E 火の聖獣エンドラ

名前 ジューク
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 19
階級 疾風の騎士
戦闘 2900
装備
E 深緑の剣フルーティア
E 風の戦闘法衣（緑）
E 風の妖精フーガ

34 闇の騎士との戦い

前王の間での、疾風の騎士へと覚醒したジュークとの戦い。この戦いで自身も、火の騎士から業火の騎士へと覚醒し、ジュークを退ける事に成功する。

階段をひたすら登ると、前王の間のような装飾が施された扉へとたどり着く。ここが現在の王の間にして、この支配戦争の発端となった、人間の存在する場所である。

そつと扉を開けると、二つの人影を見る事ができる。一人は薄い布の向こう側にいる王である。そして、もう一人はジュークが話していた闇光の騎士クリッパードろう。漆黒の戦闘法衣に、巨大な鎌が威圧感を出している。

（あれが、新型アルティロイド。なるほど、俺達とは違うというわけか）

その存在を確認しながら、ゆつくりと中へ入っていく。ティータを見ても、クリッパードは全く動じずに平静を装う。

「ほう、なるほどな。ジュークはやはり負けたみたいだな。しかし手傷は負わせて、体力の消耗に努めた点は評価してやろう。所詮、風の騎士では、最強の火の騎士は止められんな……」

部屋の奥、薄布の向こう側から、王が喋りかける。そんな王の言葉に、ただ黙っていたクリッパードが、言葉を発した。

「お言葉ですが王よ。最強の称号は火の騎士ではなく、闇光の騎士が貰い受けます」

「ふっふっふ……。大した自信だな。しかしアレもこの私が造りあげた騎士。そう簡単には手に入らぬぞ？」

「ご安心を。貴方様がお造り下さった我々、光と闇の騎士は何があるかと負ける事はありません」

それは大口ではなかった。クリッパードは相変わらず表情一つ眉一つ動かさずに、絶対的な自信を持ち、ティータの前に立ち塞がる。

「クリツパー……とかいったな？ そんなに最強の文字がほしいのか？」

「……ああ、ほしいね。絶対的な指導者たる王を守備する騎士は、最強でないとならぬのだ。何よりも王が造りあげた完成型が、所詮は試作型に負けるわけにはいかない」

「完成型、試作型と……戦いの世界に、そんな肩書きは無意味だ。お前が俺より強ければ、最強の二つ名はお前のものだ。しかし俺が強ければ、お前はまだ最強には遠い。……たったこれだけのシンブルな仕組みだ」

ティードとクリツパーは、同時に武器を構える。ティードは数々の死闘をくぐり抜けてきた愛刀ヴェルデフレイン。対するクリツパーは、新品同様の漆黒の大鎌ソウルイーターである。

「無論、単純明快に見積もっても、勝つのはこの俺です」

「ふっふっふ……。良い気迫だ。私が合図をしよう　始め！」
王の合図と共に、双方は一気に飛び出していく。その突進速度はわずかにティードが上である。

そして交差する剣と鎌。激しい衝突音と共に、乱れ散る大量の火花。だが力は若干ながらクリツパーが押ししている。

そのままファーストコンタクトを、力で押しきったクリツパーは、大鎌を力の限り振るい、ティードの体を天井目掛けて飛ばしてみせる。

（な……なんてパワーをしているんだ、こいつは）

ソウルイーターを持ち直し、空中で身動きのとれないティードに、一気に追い討ちをかけていく。大鎌の絶対的攻撃範囲により、ティードを捉える事は容易いのだ。しかしティードも、自信を持っている剣の技術、大鎌を難なく裁き、落下の勢いも利用して反撃に出る。

「むっ！？」

（これならどうだ。空中にいるならば、お前も動けない。この一撃は当たる）

この一撃を終わりの一撃とせんばかりの、気迫がこもった斬撃。

だが間違いなく当たるはずの攻撃は、空振りに終わってしまった。

「何っ!？」

咄嗟に目でクリッパーを追うと、空を飛び斬撃を避けていたのだ。恐らくはクリッパーが装備している、戦闘法衣の能力だろう。まるで悪魔の羽のように、羽ばたかせ浮遊している。

「残念でしたね。自分は古い貴方と違い、空を飛ぶ事が可能です。

空中戦は自分に利がある」

「……まさか、飛行能力まで備えさせるとはな。最も空中戦はジュークで慣れている。その程度の優位で、優越感ひ浸れる程、この俺は甘くはない」

「なるほど……さすがは現、最強のアルティロイド。楽には勝たせてくれそうにない」

これ程の相手は、ティードにとって初めであった。手加減も無く、むしろかなりのハイペースで戦ったつもりだが、闇の騎士は息を乱す事もなくついてきている。それどころか、ジューク戦で消耗している分、いまだにティードが体力的にも不利が続く。

(……これは覚醒させるしかない、エンドラを……)

ジュークに教わった火の騎士から、業火の騎士への覚醒。今の状態では長期戦は不利と判断し、短期決戦で勝負を決める事にする。

「もう一度いけるな、エンドラ?」

(む、何をやる気だ、火の騎士)

エンドラが力を解放し、ティードに随時、火の防御幕「フレイムオーラ」が纏われる。火の騎士から、業火の騎士への覚醒は成功した。

(ほう……ティードめ、まさか能力解放に気づくとはな。あるいは誰かの入れ知恵か)

創造者である王は、ティードの覚醒に特に驚く素振りも見せない。そしてクリッパーも、業火への変化がただ事ではないと判断し、一層気を引き締めにかかる。

(ふむ……アレに覚醒してしまつては、クリッパーには荷が重かる

う。 リオを呼ぶか)

戦いに集中するティードとクリッパーとは裏腹に、王は冷静に戦況を見極める。

「おおおおおお！」

気合いと共に、クリッパーに攻撃を仕掛ける。その圧倒的な業火の戦闘能力に、防戦一方になる。

(……くっ、パワーでも火の騎士が上になるか。一体何だというのだ、この戦闘力の上がりようは)

剣による斬撃と、業火の火球の連携で、クリッパーの厚い防御力を突破にかかる。一撃一撃が極めて鋭く重い攻撃に、防御が追い付かなくなる。

「くっ！」

体制を立て直そうと、大きく後方へ飛ぶ。その動作は飛ぶというよりも、鋭角なステップに近く、例え歴戦の勇者と呼ばれるような者でさえ、捉えるのは非常に困難である。

しかしティードは、そんなクリッパーの動きを完全に見極め、最大の一撃を与えにかかる。纏うフレイムオーラは、更にその火力を増し、ティードとエンドラが持てる力を全て最大に高めていく。

(まさか……ティードめ、アレを放つ気か！)

そんなティードを見て、クリッパーも自身の持てる最大の防御ができるように身構える。

「なっ、何をする気だ、火の騎士！」

「エクス プロージョン！」

エクスプロージョン。それはティードができる最大威力の技である。全ての力を最大に高め放出、そして放出させた力を一点に叩き込む。あまりの魔力放出の為、火の騎士としては一発打てば、文字通り全ての力を使い果たしてしまう。だが業火の騎士に覚醒し、魔力量そのものも上がった為、一発打っても余力を残していられると判断しての事だ。

「くっ、火の騎士！」

「一撃で葬る。それが同じアルティロイドであり、兄弟としての情けだ」

完全に捉えた。例え防御しても、あまりの攻撃力の前にそれを突破し、確実に葬り去れるだろう。

だがエクスプロージョンが当たる間際、複数の閃光がティータを襲う。その閃光が放った光線をくらい、体制を崩されてしまう。

「な、何だ……これは？」

「パーティナか。リオめ、余計な真似を……！」

「キャハハハ、何が余計な真似よ。危なかったじゃない、クリツパー？」

ティータにとっては、聞き覚えのない声がある。そこに目を向けると、クリツパーとは対照的に天使を模した者がいる。闇光の騎士クリツパーの、双子の姉、闇光の騎士リオである。

「あれも、新たなアルティロイドだと言うのか！」

「キャハハハ、初めまして兄様。闇光の騎士リオと、それに従う月光の蝶パーティナです」

リオは丁寧に自己紹介すると、ゆっくり浮遊しながらクリツパーの元へと向かう。

「王様がお呼びにならなければ、クリツパー死んでたよ？ キャハハハ！」

「王の、命令か」

クリツパーは横目で、王を見る。相変わらず薄布の向こうで、影しか見えない。

「助けてもらった事には、礼を言っておく。しかしこれは俺と火の騎士との戦いだ。いらぬ手出しは無用！」

「アンタ、弟のくせに可愛くない！ リオの方が、お姉さんなんだからね！」

「わずか数秒の差で産まれた双子に、姉も弟もあるか！」

「あるの！ 弟は、お姉ちゃんの言う事聞きなさい、キャハハハ！ それに、協力して倒せって、王様の命令。まさか聞けないって言

うんじゃないでしょうね？」

クリツパーは「ふんっ」と不満をあらわにしながらも、リオと協力し、ティードを倒そうと構える。

「キャハハハ、残念でしたね。形勢逆転です、兄様。光と闇の騎士と、火の騎士ではどちらが勝つか……おわかりいただけると思いますが？」

残忍な顔をして微笑む。そこには正々堂々などという言葉は一切見ることができない。例え数十人、数百人いようと、勝てば良いという考えが、手に取るようにわかる。性質的にはセレナに似ているが、まだ一対一の戦いを臨んできた為、こちらの方が質が良い。

「最強のアルティロイド殺し……これ程楽しい遊びはないわ、キャハハハ！」

パーティナを操作し、遠距離戦を仕掛けてくる。その動きは武器が自律的に動き、まるで生きているようにも見える。そして、あらゆる角度から光線を放つ為に、回避が非常に困難である。

「月光の蝶か、よく言ったものだよっ！」

その八つの光から放たれる光線を、巧みに避けていく。更にその隙を伺い、クリツパーがソウルイーターを用いて、首を刈りに来る。「悪く思うな、火の騎士。俺とお前の勝負は決闘ではない、これは負けた方が死ぬ 殺しあいだ！」

「良い事を言う。お前とは変に悩まずに戦えそうだな」

パーティナの砲撃と、ソウルイーターによる斬撃。見事に回避してはいるが、反撃する暇もなく、正に防戦一方となる。

「キャハハハ、避けれたって攻撃しなくちゃ、リオ達は倒せないわ！」

「ちいっ！」

ティードは、少しでも攻撃の手を減らそうと、一基のパーティナに攻撃を繰り返す。しかしパーティナに攻撃を当てると、超金属音と共に弾かれてしまう。

「まさか……！？？」

「その、まさか、よ。パルティナは八つ全てが、オリハルコンでできた自律型起動兵器。それを壊す事は、事実上不可能。キャハハハ！」

この事から、パルティナを機能停止させるには、その所有者である、リオを倒さなければならぬ。しかしパルティナの弾幕により、それは容易い事ではなく、何よりも今は中央突破しようにも、クリッパーが待ち構えている。そして左右から揺さぶりをかけようとしても、リオがそれをさせない。

正に八方塞がりであり、二人の攻撃を直撃しないように、立ち回っていくのが精一杯の状況である。

（くそっ、これでは！）

このままいけば、体力低下と共にいつかは被弾する。そしてそれは遠くない瞬間に起こりうる事だ。事実、二人の騎士の攻撃は少しずつだが、ティータにかすっている。

「終わりだな……火の騎士。が、やはり一対一で勝負して、最強の称号を奪いたかったが」

「キャハハハ！ 奪い取る必要なんてないよ、クリッパー。もう私達が最強だもの！」

明らかかな余裕を見せる、光と闇の騎士。既に逆転はあり得ないと考えての事か。実際に今現在、ティータを助けてくれる存在など皆無なのだ。仮にバース達がここへたどり着いても、この二人の騎士の前に、呆気なく殺されてしまうのが関の山である。

こんな窮地を救ってくれる存在は、少なからず同じアルティロイドでなければならぬ。

（ふむ……まあ、こんなものか。余興としてはそれなりに楽しめたが……。やはり虚しいな、最強というものは）

激しく火花散る攻防を見て、王はそう感じ取っていた。

戦いの終わりが近い。ティータの息は荒く、かろうじて避けていられるのは、残った集中力といっても過言ではなかった。そんな糸のように細い集中力が切れた瞬間、それがティータの死ぬ瞬間であ

り、地上軍の再戦が無い完全敗北の瞬間でもある。

「もう飽きてきた！ クリッパー、早く殺っちゃってよ！」

「火の騎士は、そんな遊べるような相手ではない！ 一つ一つに集中しなければ、首を取られるのは俺達だ」

（……くっ、このクリッパーという騎士、なんていう冷静さを持っているんだ。せめて少しの油断でもあつてくれれば！）

三者三様の思惑があつた。ただ殺しという遊びを、楽しめれば良いいり。最強という称号を、火の騎士から奪い取る一心のクリッパー。何としてでも勝たなければならぬティード。

そして、この三つの思惑は、一人の騎士が打ち勝つ。

「火の騎士、その首もらつたあ！」

戦いの疲労からか、ティードは思わず足を滑らせ体制を崩してしまふ。わずか一瞬の出来事であつたが、その一瞬をクリッパーは見逃す事は無かつた。漆黒の鎌ソウルイーターを振り、首をはねにかかると。

だが、その鎌の刃がティードの首にかかるか否かという時、クリッパーのいる空間が赤い球体に覆われる。

「むっ、何だこれは！？」

「ヤバッ、それヤバイよ、クリッパー！ 避けてえ！」

クリッパーを覆う球体は、収縮を開始したと思うと、突然の爆発を起す。

「ぬう……！」

咄嗟に防御態勢を取り、その爆発による攻撃を防ぐ。ダメージは高くもないが、無傷というにはほど遠い。つまりそれだけの攻撃力があつたという事だ。

「兄貴、アンタは俺が倒すんだ。そんなどこの馬の骨とも知れない奴等に殺られてくれるんじゃないやねえよ！」

爆煙の中から現れたのは、左目に斬り傷がある隻眼の男。両拳には美しく光り輝く鉄鋼がある。

そこに立っていたのは、爆炎の騎士ラティオだった。

35 チェックメイト（前書き）

名前 ティーダ
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 16
階級 火の騎士
戦闘 3000 / 業火 3300
装備
E 深紅の剣ヴェルデフレイン
E ティーダ専用戦闘防護服
E 火の聖獣エンドラ

名前 ラティオ
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 13
階級 爆炎の騎士
戦闘 2800
装備
E 陽黄の鉄拳ダイナアクス
E 爆炎の戦闘法衣（黄・半壊）
E 皮のマント
E 爆炎の幻獣ヴァルサス

名前 リオ
種族 アルティロイド
性別 女

年齢 18
階級 光闇の騎士
戦闘 2500
装備
E月光の蝶パルティナ
E光の戦闘法衣（純白・天使）
E光の使徒デユミナス

名前 クリツパー
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 18
階級 闇光の騎士
戦闘 3000
装備
E漆黒の鎌ソウルイーター
E闇の戦闘法衣（漆黒・死神）
E闇の従者ルシファール

35 チェックメイト

隻眼の拳士。その引き締まった筋肉の胸板には、禍々しいまでの一文字の剣痕。

絶体絶命のピンチを救ったのは、爆炎の騎士ラテイオだった。

「ほお、ラテイオとはな……今更どの面下げて、ここへ来たのだ？ 貴様のような負け犬の出来損ない、もう既に用無しだ」

薄ら笑うように、王は言い放つ。それに対しラテイオも、睨みを利かせながら言い返す事がある。

「確かに……俺は負け犬さ。それにもう、ここへは戻りたいとも思わねえ！ だがな、そんな俺にも生き甲斐ができたんだ。人間を殺す事よりも、有意義な生き甲斐がなっ！」

馬鹿にするように王は笑う。

「して……その生き甲斐というのは？」

「……兄貴を、火の騎士ティータを、この拳でブツ飛ばす事だ！」

「ふ、はっはっは！ では貴様も最強がほしいか！ ふははは、貴様ではどうやって、ティータには勝てんぞ？ 私がそう造ったのだからな」

馬鹿が馬鹿を言うのを楽しむように、王は高笑いしてみせる。ラテイオもそんな王の姿を見て、鼻で笑ってみせる。

「これだから頭でっかちは。そんな数字とか理屈じゃねえんだよ。最も、そんなアンタにはわからねえだろうけどよ、ったく、ちよっと前まで、こんな奴を敬愛してたかと思うと虫酸が走るぜ？」

その言葉に、王の高笑い止まる。

「ほお、まだ十数年しか生きてもない、ガキがようほざいたわ。この絶対主に対しそのような言葉を吐いた罪……甘くはないぞ」

薄布越しからでも、感じ取れる憤怒の念。王が圧倒的な存在感を示し始めたのだ。

そんな言葉に、一つ「へっ」と笑うと一言。

「……上等だぜ」

そしてラティオは、戦場を見た。戦いは二対一、多勢に無勢というには小規模だが、その理由があつてティードが押されているのも、また明確な一つの事実である。

「キャハハハ！ リオはあいつを知ってるよ！ ティード兄様に負けて、城から逃げた負け犬じゃない！」

「負けた事は否定しねえし、負け犬だと言つのなら甘んじて受けてやる。……だがな、ティードは俺が倒すんだ。どこぞの弟と妹に、くれてやるわけにはいかねえ」

「弟と妹つて？ リオとクリッパは十八よ。何でガキのアンタの弟と妹になるわけ？ ねえ、クリッパ」

「そんな歳の事など、どうでも良い事だ。爆炎の騎士、君も最強の首がほしいというのなら、自分の敵だ。そうだと言つのなら容赦はしない」

相変わらず軽いリオに比べ、クリッパは常に冷静沈着。隙を全く見せつけない。事実、ティードは先ほどから、隙あらば不意打ちをしようと狙っていたが、その隙を見つけない事なく現在に至る。

「ま、好きにしてくれよ。とりあえず兄貴の首を、お前達にくれてやるわけにはいかねえんだ。だから俺はお前達を倒す」

「了解した。ならば爆炎の騎士も、我々の敵だ」

「そういうわけだ、兄貴。今は昔みたいに一緒に戦おうぜ？ 最も兄貴は疲れてるみたいだから、あの女の弱そうな奴を相手してくれよ」

「ムッカー！」

安い挑発に乗るリオ。それを見てクリッパは、軽いため息をつく。

こうして火の騎士ティードと、爆炎の騎士ラティオ。光闇の騎士リオと、闇光の騎士クリッパによる、二対二の戦いが始まる。

「爆炎の騎士、君と手合わせできるのは、自分としても嬉しい事だ」

(……こいつが兄貴を追い詰めた闇の騎士、なるほど……半端ねえ

プレッシャーだ)

これは極端な戦いになる。クリッパーの大鎌ソウルイーターは、リーチと攻撃範囲で絶対の利がある。対するラティオの鉄拳ダイナクスは、懐に飛び込んだ際の圧倒的な手数と小回り。いずれにしても、戦いは二人の腕にかかっている。

「行くぜ！」

自分の拳をかち合わせ、気合いを入れる。そして恐らくはアルテイロイド中でも、屈指の初速の蹴り足で、一瞬にしてクリッパーの懐に入り込む。

「……！！」

「ちよっ、クリッパー！？」

「どうしたい？ この程度の速さについて来れないか？ 兄貴は普通に反応したぜ」

確かにラティオの初速は速い。そして、サンバナ攻防戦の時よりも、その蹴り足は明らかに速くなっている。恐らくはティータに完敗した事により、自分自身の良い所、悪い所を見直し、徹底的に鍛えたのだろう。

「行くぜ、歯を食いしばらねえと、舌を噛むぜ　オラオラオラオラオラオラオラア！！」

全てがクリッパーの腹部への攻撃。ものの数秒の出来事だが、一体何十発、いや何百発の拳を打ち込んだのかもわからない。

「ぐうっ　！？」

そのまま殴り飛ばされ、壁に激突し動かなくなる。まさかの展開に、ほんの一瞬だが静寂が満ちる。

「……う、嘘でしょ、クリッパー！」

「何だ、もう終わりか？　俺が弱いと思って油断してたのかな」
「確実な強さを見せつける。前回戦ってから、あまり時間が経っていない。ティータは、ラティオの戦闘能力に驚いていた。」

「ラティオ、油断するなよ！　その男は油断などしない」

「わかってるよ、兄貴。オリハルコンの拳で殴ったにも関わらず、

殴った俺の方が痛かった。なんて身体してんだよ……あの野郎は」
クリッパーはまるで効いていないように、すっと立ち上がる。乱れた闇の戦闘包囲から、その肉体を垣間見る事ができる。筋肉の鎧とはよくいったもので、ラティオの胸板がチャチなものに見えてしまふ。

「な……マジで何て身体をしてやがんだ、あの野郎は！」

「キャハハハ！ クリッパーはムキムキマッチョマンだもの、ガキんちよの攻撃じゃ堪えないわよ！」

「その言い方はよせ。爆炎の騎士の攻撃力は、予想の遙か上をいつている。並の防御力では、今のでアウトだ」

僅かに吐血した血を拭き取る。その眼差しは、より一層冷たく輝いている。

（ラティオの拳をあれだけもらって、普通に動けるのか……俺はあれで悶絶したが……）

ここまでの戦闘でわかっている事は、クリッパーのパワーと異常なまでの防御力である。恐らくはこの二項目に関して、アルティロイド中で最高であろう。しかし弱点と呼べる部分もある。それはその分厚い筋肉の装甲と、巨大な鎌によるところのスピードと小回りの遅さである。

（ リオ、援護を頼むぞ ）

（ あれ、決闘に手出しは無用なんじゃなかったっけ？ ）

（ これは既に決闘ではない。あくまで二対二の戦い。俺は爆炎の騎士とだけ戦っているわけではない ）

（ 理解、キャハハハ！ ）

二人は思念会話ができる。これはリオとクリッパーのみに与えられた能力であり、ティード達には無い。

「もう油断は無いと思え」

その言葉は真実だ。クリッパーの纏うプレッシャーは、明らかにその緊張感を増している。それを間近にいるラティオは感じとり、気づかない間に冷たい汗を流している。

「はあっ！」

ソウルイーターを構え、ラティオに向かう。いくらスピードに難があるといっても、それは速度を売りとする連中と比べての事である。普通に見れば、速すぎると例えられるものはある。

「その首、もらい受ける！」

「やれるものならやってみろ！」

二人は再び、お互いの間合い取りに入る。先に有効射程になるのは、リーチに優れるクリツパーだ。

「キャハハハ、いきなさいパーティナ！」

そんな最中、見事といえるタイミングで、リオがパーティナによる砲撃を試みる。

それに気を取られ、光線を防御するラティオ。当然のように、クリツパーが隙を見逃す事は無い。力の限り大振りした一撃は、ダイナクスにより防がれる。ダブルアームで防御したが、そのパワーの凄まじさにより、今度はラティオが壁に激突させられる。

（いまだ、リオ！）

「任せなさいって！ パルティナ最大出力、生意気なガキンちよを光の藻屑にしちやいなさい、キャハハハ！」

最大出力の八つの閃光。壁に激突したまま動かないラティオ。このままでは確実に仕留められる。

「ラティオ！」

しかし、そんなピンチを救ったのはティーダだった。業火に再び覚醒し、パルティナの光線を弾き返す。

「良い所を邪魔したわね！」

「……さすがは火の騎士といったところか」

「すまねえ、兄貴。あの野郎の攻撃……まるで化け物だぜ」

「気にするな、ラティオ。　しかし業火覚醒もこれがラストだな

……」

四者四様の攻防と思惑。それが激しくぶつかり合っている。

しかし戦況は光と闇の騎士に傾いている。ティーダは消耗が激し

く、ラティオは今のクリツパーの攻撃で、腕が痺れてしまっている。更に思念会話で、抜群のコンビネーションを持っている。

「どうするよ、兄貴？ せっかく登場したものの、あいつら……とくに鎌野郎はとんでもないぜ」

「打開作は……無い。正直、予想の遙か上をいつている。……だが聞け、ラティオ」

「おつよ！ 何だ、勝てるなら聞く」

「とある事情があつて、今の俺ならクリツパーを止める……いや、あるいは倒せる。だが時間にすれば恐らく三分、それまでの間……あのリオを完全に足止めする事ができるか？」

無言のままチラリとリオを睨み付ける。真面目な回答をするならば、可もなく不可もなくといったところなのだ。性格に騙されるがリオの能力は強い。一度たりともリオとの真つ向勝負をしていないラティオだが、ここまでの戦いでリオの強さを感じ取っている。

（鎌野郎がいたとはいえ、あのフワフワしてる光の球から放たれる光線のコントロール……それに力の強弱、どれをとっても繊細で加減の難しいもんだ）

そしてラティオは決心し、口を開いた。

「相性的には……ぶつちやけ悪いが、止めてやるよ。あのうるさい女を、兄貴の方には行かせねえ！」

「……決まりだな。頼んだぞ、三分間だ」

逆にいえば三分間で倒せなければ、この勝負は敗北である。残った体力と魔力をかけて、ティーダの最後の攻撃に出る。

一気に飛び出し、真つ直ぐにクリツパーへ向かう。その動きにクリツパー本人も身構える。

ラティオも同じく、リオへ向かっていく。このあたりでさすがなのは、業火へ覚醒したティーダとダッシュ速度は同じ、いや若干ながら勝っている事だ。

「次は火の騎士か。良いぞ、自分は嬉しいぞ」

ラティオでも不足は無かつただろうが、やはり目当ての相手とあ

つてか、クリツパーの気力は充実している。

再び交わるヴェルデフレイント、ソウルイーター。ここは業火となったティードが押し切る。

「ぬう、押されるか！」

「このまま押し切り勝つ！」

ティードには狙いがある。それは先ほどは邪魔され、成功しなかったエクスプロージョンを当てる事にある。いや逆にいうのなら、これでなければ闇の騎士を倒せないという事にもなる。大量のあらゆる力を消費する為、当てても外しても、これでティードは戦闘不能にまで陥るだろう。後に王も控える状態にあり、それが唯一の不安要素だったが、今はラティオが味方にいるというものが、ティードの支えになっている。

激しい攻防が再開してから、既に一分が経過し、予測の時間まで残り二分となる。ただでさえ業火状態は、少しずつ魔力を消費する為、早くエクスプロージョンに回さなければ、打つ前に魔力が尽きてしまう。

「何か狙いがあるようだな、火の騎士……が、そんな焦った剣では自分を倒す事はできない」

確かな焦りがあった。更にいうならば、ジュークを見ていたからである。疾風となったジュークは、時間と共にスピードが元に戻っていた。これは同じく、自分にもいえる事なのではないかと、考え始めていた。その根拠として、一分を過ぎたあたりから、クリツパーを押せなくなっている。まだ攻勢は変わらないが、普通に防がれて終わってしまう。

（ くそっ、これでは……。体感だが一分半を越えた、とてもじゃないがエクスプロージョンには……。いけない！ ）

体力低下による動きのキレの減少。魔力低下による攻撃力の減少。そして残り時間の減少。あらゆるものが、ティードの思考を焦らせていく。

「もう終わりだな、火の騎士よ。何を企んでいたのか知らんが……

火の騎士から戦意が失われていくのがわかるぞ」

既にクリツパーは、ティーダの攻撃を普通に受け止められるくらいになっていた。ラティオを見ても、リオの飛び道具特有のリーチで、逆に抑えられてしまっている。

時間は残り一分を切り、完全に業火の攻撃力は消えてしまっている。

「ほう……まあ、こんなものか。ティーダの業火への覚醒。ラティオの出現。……クリツパーとリオの、御披露目式としては楽しめたか」

王は一人、微笑を浮かべながらこの戦いを見つめている。しかし、その微笑をかき消す出来事が起こるのだった。

「いきなさい、パルティナ！」

「ぐあああああ……！」

パルティナの直撃を受け、倒れるラティオ。

「……どうやらリオは片付いたようだ。終わりにしよう、火の騎士」
「……ぜえ、ぜえ……！」

かつてない程まで消耗していた。過去、ティーダをここまで追い詰めた相手はいない。はたして万全ならばこの男に勝てただろうか
ティーダは瞬間的に一つの答えを出していた。

「さらばだ、火の騎士。そして最強の称号を我に……」

ヴェルデフレインを持つ手が震えていた。もう持ち上げる事さえ億劫であり、ティーダは無防備にも、ソウルイーターの攻撃に対し、構えもしなかったのだ。クリツパーはただ仕事をこなすように、冷静にティーダの首へ鎌を振るった。

と、その時であった。

「王よ、覚悟！」

凄まじい速さで、王に剣を突き立て走るジュークが現れたのだ。あまりの奇襲であり、リオもクリツパーも、誰一人として反応できなかった者はいなかった。

そして薄布の影の向こうにいる王を、深緑の剣フルーティアが突

き刺す。布の向こうでは血飛沫が舞った。
。

36 深緑の王

ティードとの戦いから、ジュークは一人体力の回復に努めていた。

(ティードを覚醒させるだけの演技のつもりだったが……つい本気になってしまう)

業火になったティードの、魔力解放における衝撃をもらったただだ。しかしそれでも体の芯に残るダメージがある。

「さて、と……」

「よお、久しぶりだな、ジュークの兄貴」

その声の主はラティオである。大して驚いた顔も見せず、ジュークは口を開く。

「ラティオか……。このタイミングでどうして？」

「あれ、あんまり驚かないのな。……本当は来る気なんか無かったいや、そもそもこんな戦いが行われている事すら知らなかったさ」

「話が見えないな……」

「……声が出たんだよ。『火の騎士を助けてほしい』ってな。それで来てみたら、この様だ。ティードの兄貴はこの先かい？」

ジュークは適当な相づちをする。それを見て、ラティオはこの先にある王の間へ走る。

「大方、ティードの兄貴にやられたのか？ ジュークの兄貴も今後を考えた方が良くぜ」

捨て台詞を残し、王の間を目指す。

ジュークはその言葉を全く聞かず、ある一つの事柄について考えていた。

(声が出た……。人の思念の中に入り、言葉を話す。まさかな、まさか……。生きていてくれたというのか)

予測に過ぎない感情だが、その考えに鼓動が早くなる。そんな高まる鼓動を落ち着かせる為に、大きく深い呼吸をする。

「ならば、僕はまだ頑張れる。最後のやるべき事……王の暗殺」
深緑の剣フルーティアを見つめる目は、妖しく冷たく輝いていた。
そしてジュークは、四人の攻防を見定め、王にフルーティアを突き刺した。並大抵のタイミングでは、リオとクリッパーに気付かれ、その攻撃を阻止されてしまう可能性が高い。だからこそ、気配を殺し期を伺ったのだ。

「キヤアアア！ 王様！」

「ま、まさか……王よ」

長きに渡り、支配の時代を作り続けた張本人。城国王の暗殺。

布の向こうで、大量の血を流す王。そして心臓を一突きし、血の赤がこびりつく深緑の剣。そこには、かつて見せた事が無い程の、冷徹な顔を見せるジュークの姿がある。ジュークは乱暴に布を引きちぎり、自分が突き刺し殺した者の姿を確認する。

「っ！？」

薄布の向こうにいた者は、確かに心臓を突き刺されている。だがジュークを驚かせたものは、その姿形だった。

「……まさか、長きに渡って支配をした王の姿が……こんな若者なのか！？」

その言葉に、ティータ、ラティオ、リオ、クリッパーの四人が驚く。誰一人として王の姿を確認したものはいないが、少なからず老体であるうと思っていた。事実、声では判別できないが、その喋り方はどこか若くはなく、貫禄に溢れていたからだ。だが、いざ布を取ってみると出てきたのは、どこにでもいるような普通の若者である。

「まさか……影武者だともいうのか、ならば本物の王はどこに！？」

勢い良く剣を引き抜く。そして突然の襲撃に備え、辺りを警戒し始める。

この事実はリオとクリッパーにすら、知らされておらず、普段から取り乱さないクリッパーでさえ、さすがに困惑の色を見せている。

はたして、この若者は本物の王なのか、あるいは影武者なのか。仮に影武者ならば本物の王はどこにいるのか、全てが謎だらけであり、緊張を走らせる。

「ふ、ふっはっはっは！」

突然の笑い声。反響するように聞こえ、発信源がどこなのか検討もつかない。

「くそっ、どこにいる！」

「どこにいる？ 貴様の後ろにいるではないか、ジュークよ」
咄嗟に後ろを向くと、そこにいたのは突き殺された若者がいる。

「どうした、私だよ、私が王だ」

やはり言葉を発したのは、目の前にいる若者。そして心臓を貫き、確かに殺したはずの者は立ち上がり、薄ら笑いを浮かべている。

「お前が王だと！？ ふざけるな！」

「ふざけてはいない。確かに私が王だ。さて……」

自分を王と述べる若者は、突き刺された胸元を見る。すると傷がみらみると回復していき、あっという間に元に復元してしまう。

「ば、馬鹿な、心臓を刺され死なないどころか、完全回復するなど！」

「驚く事ではあるまい？ 貴様達アルティロイドにも、自然治癒力を強化させたものを備えているではないか。それをさらに強化したものだよ。……最も不死身ではないのでな、心臓を刺された瞬間は確かに死んでいたよ。死を治癒したのだがな、ふっはっはっは！」
「死を治癒だと！？ そんな馬鹿な事が……治癒力の強化ができたとしても、生きている人間が、死を治癒するなどっ！」

「生きた死体。と、すればどうするね？」

生きた死体。人はそれをゾンビなどと例える。王は自分の事を、リビングゲッドとでも言うつもりなのだろうか。

ジュークですら、その王の言葉の真意が掴めないでいる。

「わからない……と、いった顔をしているな。大方の予想は当たっているが、この肉体はリビングゲッドなのだ」

「そんな馬鹿な……肉体は死して、魂が健在などと」

「それが可能なのだよ、なあティードよ。お前にならわかるのではないか？ 思い出してみる、デュアリスとセレナをな」

王の言葉の通り、デュアリスとセレナの事を思い返してみる。この二人は元々一緒にいた人格ではないのだ。主人格と肉体はデュアリスのものであり、セレナという人格は、デュアリスの体に寄生していた人格である。

ここでティードは、ある事に気がついたのだ。

「寄生」

「ご名答。そう、寄生だ」

「つまりその若者の肉体は本来の王の肉体ではなく、人格……いや魂を寄生させた存在だというのか……」

「ふっふっふ。さすがジュークだ、頭の回転が早いな。この肉体は本来ならば、既に廃人になっている程の改造が施されている。超治癒力もその一つ、その他、痛覚の削除や肉体の増強も限界まで行っている。まあ、これも他人の肉体だからこそできる事だがな。ふあーはっはっは！」

「……外道めっ！」

自分ではない他人の肉体に寄生し、そして好きなように弄ぶ。寄生に関するセレナとの大きな違いは、宿主の尊重である。セレナはデュアリスを主人格、肉体とし、そこからできる限りの事をしていった。だが王に限っては、この若者の人格と肉体を乗っ取り、そして殺した。これでは寄生ではなく略奪である。

「私は神になるのだよ。リビングゲッドもアルティロイドも、私にとっては造物主としての実験に過ぎんだ！」

王は高々と笑ってみせた。その笑い声は、神などではなく、さしずめ悪魔、いや魔王の笑い声である。

「おい、お前ら二人も聞いただろう？ あの野郎は、お前らの命も遊びとしか見てないんだぜ、このままで良いのかよ！」

ラティオは、リオとクリッパーに言葉をかける。だが二人は動揺

も全く見せずに言う。

『我々の命は王の為に』

「……こいつらっ、大馬鹿野郎だぜ！」

舌打ちしながら、苛立つ感情を力の限り吐き出す。

そして、ラテイオがそんな事を言っている間に、ジュークは王の心臓を再び貫いた。突き刺しただけに留まらず、そこから剣を上にも走らせ、左肩を斬り裂く。そして流れのままに首をはね飛ばす。

「どうだ、心臓を潰され、首をはねられて、生きていられる奴はいまい！」

「それが生きていられるのだよ、ジューク」

「……なっ！」

この世の光景とは思えなかった。潰された心臓は傷痕が消え、裂かれた肩はくつつき、飛ばされた首は、本体の肉と首の肉が合わさり連結する。

「この体は生ける屍。魂だけが寄生してる肉体なのだ。殺そうとしても殺せんよ、所詮は生きてる者を殺す行為ではな」

そして王はジュークに手を伸ばす。

「くっ、寄るな！」

その手を斬りつける。大量の血飛沫が散ったが、すぐに再生し、追い始める。ただがむしゃらに、剣を振るう。頭の中から足の先まで、あらゆる場所を斬っても再生し、追いかけてくる存在。

「ジューク、もういい、逃げる！」

嫌な予感がし、ジュークを助ける為に走るティード。だがその前に、リオとクリッパーが立ちはだかる。

「火の騎士。ここから先へは通せん！」

「そういう事、通りたければ倒していきなさいよ、キャハハハ！」

「くそっ、どけっ、お前達！」

「兄貴、突破するしかねえ、行くぜ！」

ジュークと王とは違う所で、再び始まる四人の騎士の戦い。だがティードもラテイオも疲労してしまい、二人を突破する力は残って

いなかった。

「あやつらは、また戦い始めたようだ。はっはっは、愉快愉快」

「何が愉快なものか！」

「愉快ではないか。他人同士が戦い血を流す。それを見てみると謎の高揚を覚えないか？ 弱い者が弾圧、凌辱される様を見てみると、一種の快感を感じるはずだ」

「……貴様という奴はっ、お前のような奴がいるから、こんな支配の歴史が生まれてしまっんだ、このエゴイストがっ！」

「強がるな、正義感ぶるな。人間とはそういう生き物なのだ。自由？ 平等？ そんなものは、所詮は弱き者が掲げた逃げの口実に過ぎん。この立場で見ろ。すぐに気持ち良くなる、他人をより強い力で凌辱する快感だ！」

再び伸びてくる手。その手はまるで触手のようになり、ジュークの体に刺さり始める。

「ぐっ、あああああ！」

「どうだ痛いだろう？ 肉体と精神を侵す行為だ。お前は痛いかもしれないが、私は全く痛くない。むしろ先ほどから言うように、他人の体を凌辱する快感だ」

「き、さまの、よう、な、奴、にっ！」

力を振り絞り、再度、王の心臓を突き刺した。

「無駄だジューク。……お前は私だ。私はお前だ。私の存在を受け入れろ……そして消えろ」

「ぐあああああああ！」

激しい光が、若者からジュークへと移動する。その途端に、若者の体は灰のようになり、崩れ落ちた。そしてそれをクズを見るように、見つめるジュークの姿がある。

「……ふむ。さすが私が造ったアルティロイドの肉体だな。凄まじいポテンシャルだ」

声はジュークだが、喋り方は王のものになっている。その一つの儀式のような行為に、戦いはいつの間にか終わり、静寂と共に四人

は見つめていた。

「ジューク……？」

その存在を確かめるように、ティードは言葉を投げかけた。

「ジューク？ 違うな、私は王にして神、この世の支配者にして造物主だ。ジュークなどという者は、私によって完全に殺した」

王により宣言された事実。アルティロイド達の、長兄であるジュークの死。

「なるほどな、最初から私を暗殺する事だけを考えていたか、こやつを乗っ取ったおかげで、あらゆる企みが見えてくるな、はっはっは！」

「き、貴様だけは　！」

怒りの感情が、ティードを動かした。凄まじい速さで、王となつたジュークに向かう。

「火の騎士……まだ動けるといふのか！？」

クリッパーですら、反応する事はできなかった。

「お前が王だというのなら、俺がジュークの肉体を殺してやる！それが俺の……」

「　良いのだな、実の兄の体を殺して」

その言葉で、今まさに斬りつけんばかりの、ヴェルデフレインが止まる。

「な、に……！？」

「ジュークとお前はな、デュアリスやラティオのような存在ではない。リオとクリッパーと同じ……実の兄弟なのだ」

「ジュークが……俺の、実の兄……？」

「そつだ。ジュークは随分前から知っていたようだがな。……死への土産としては、粋な計らいだっただろう？」

王は深緑の剣を振るい、ティードの体を深々と斬り裂いた。行き場を求めて、溢れ出る血液。力無く崩れ去るティード。

「兄貴っ、すっかりしやがれ！　ぐあっ！」

ラティオも、リオが放つた光線の前に倒れる。

「キヤハハハ、今まで生意気言ってくれた分、たつぷりと仕返ししてやるから！」

一人、そんな場を冷めた視点で見ていたクリッパーは、ジュークを乗っ取った王を見て、ポツリと言葉を溢した。

「深緑の、王か」

「どうした、クリッパーよ。ティータの首をその鎌で取り、最強の称号を手中に収めよ！」

王に言われ、クリッパーはその場へ向かう。全てが満足げな表情を見せる王と、身を切り裂かれ体に力が入らないティータ。

（不本意だな。こんな……誰にでも倒せるような火の騎士を倒して、最強などと言えるものか）

漆黒の鎌ソウルイーターを、ティータの首にかける。ちよつと力を入れれば、一瞬にして首を飛ばす事ができる。

「キヤハハハ、早く殺つちやいなよ、もうリオは疲れちゃったー！」

深緑の王と、光と闇の騎士。そこには火の騎士が処刑される様相がある。

ラティオを見ると、リオに完全に倒されたのか、大の字になり倒れている。今立っているのは、深緑の王と、リオ、クリッパーのみ。この光景を見て、王は心の中でほくそ笑んだ。

（これで、私に逆らう愚か者は全て消えた。良い遊戯であった）

「悪く思うなよ、火の騎士。そして……さらばだ」
クリッパーは、その鎌に力を入れて首を飛ばしにかかる。

「だから、言っただろ？ 兄貴、を倒すのは、俺だ、つて。お前等、なんか、か、に、くれてやるわけにはっ……いかねんだ！」

その言葉を放ったのはラティオであり、見るとその右拳は最大魔力が集中し、火花のように荒れ狂っている。

「ま、まさか……！？」

「二撃目装填！ 二撃目の衝撃！」

セカンドインパルス

まるでファーストインパルスのように溜めた魔力を、地面に向かって殴りつける。その威力に地面から大爆発を起こし、辺りを爆炎

が巻き込んでいく。外から見れば、城国の遙か上の方全てが大爆発を起こしている。その場にいた全ての者を巻き込む大技である。

王も、クリツパーも、リオも、ティードも、そして技を放った本人であるラテリオでさえ、どうなったのかが全くわからない程の大爆発。

「ラテリオめ、よもやあんな事をしでかすとはな」

「ご無事ですか、王よ？」

「うむ……大した傷はない。しかし見ろ、最強の火の騎士も、爆炎の騎士も、水氷の騎士も、そしてこの体である風の騎士も、私に逆らう戦力はもういない！」

「キャハハハ、これで邪魔者は消えた。王様の世界構築の独壇場ですね？」

「ふっはっはっは！ さあ、この世界を、大地を、悪しき手から浄化せねばいかな」

この地上軍と城国軍の戦いは、地上軍の敗北に終わった。数ある強者達、そして兵力を失い、地上軍は撤退を余技なくされる。過去希に見ぬ大戦に、参加したレジスタンスの被害は大きく、戦意を失うには充分過ぎたのだ。そして、ここから城国軍による地上弾圧が急速に始まっていったのだ。

第一部 エピローグ

天空に轟く轟音。それはまるで神の怒りの声に聞こえた。

後々に聞いた話ですが、その轟音を合図に支配開放大戦と銘打たれた戦争は、終わりを向かえたそうです。結果は地上軍の敗北、城国の制覇はならず、という報告だったそうです。

敵味方を問わず、行方不明者、重軽傷者、死者、全てが計測不能な程の人数を出したそうです。戦いから三日、その具体的な数はいまだにわからず、この戦いに参加したレジスタンスは事実上の壊滅状態となっているようです。そう私達のパーシオンも。

「早く、ラルク先生をつ、手当てのできる方なら誰でも良いから！」

慌ただしさと共に帰還した、パーシオンの兵士達。

その数はどう見ても少なく、大なり小なり、全ての人が怪我をしているのが見えました。ハリス副兵士長の先導により、場を指揮されている光景が印象的でした。

「カルマン君！？ 嘘でしょ、カルマン君！」

そんな中でも最初に見たのは、右目を失い、意識の無いカルマン君でした。血を止める為に抑えられた手拭いが、完全に真っ赤に染まっっていて、心の底からの震えを感じました。

私の叫びも虚しく、カルマン君は意識が目覚めないまま、ラルク先生達による集中治療が始まりました。出血の量も酷く、意識が戻るかは五分五分だという事でした。仮に目覚めても何かしらの障害が残る可能性も高いと説明されました。

「すみませんが、現状でわかっている行方不明者と死亡者の方を讀

み上げます……」

ハリス副兵士長により、行方不明者と死亡者の名前が読み上げられます。呼ばれる全ての人が知っている名前です。そしてついに、その名前が呼ばれる瞬間がきてしまったのです。

「……そして、行方不明者ティード、死亡者……ソリディア兵士長。……い、以上です！」

みんなが涙を流しました。ハリス副兵士長も、読みながら泣くのを堪えていました。

そして最後の名前を聞いた瞬間、私の体からすっと力が抜けていき、その場に崩れ落ちました。もう帰らない人を想っているのに、涙の一つすら流せなかった自分が、悔しかったのでした。

第二部 プロローグ

支配開放大戦

近年希に見る、大戦の名を人々はそう呼んだ。

世界の北と南。そのほとんどの戦力を結集し、臨んだ対戦は 地上レジスタンス連合軍の敗北に終わった。 地

人々は大切なものを失い涙し、散っていった者達の後を追う者も出てきていた。

この敗戦により、レジスタンスは事実上の戦力壊滅。残った者達にも城国の支配と戦おうという人間は、一握りしかいなくなっていた。

今もなお、城国の支配は続いている。

あれから一年、支配開放大戦に参加したレジスタンスの六割以上が壊滅させられ、地上は地獄と化していたのだ。

そんな中、物語は砂漠地帯 一国の姫君との出会いから始まる。

1 エスクード城（前書き）

名前	ティータ
種族	アルティロイド
性別	男
年齢	17
階級	火の騎士
戦闘 装備	2900 / 業火 3200
	E 深紅の剣ヴェルデフレイン
	E ティータ専用戦闘防護服
	E 火の聖獣エンドラ

1 / エスクード城

砂漠地帯。緑のほとんど無い、砂だらけの地平。ありとあらゆる命を奪っていく、砂のブラックホール。太陽は大地を灼熱にさせ、全ての水分を蒸発させていく。

「……………み、ず……………」

支配解放対戦から数日。

ティーダは一人、砂漠に倒れ付していた。最後の決戦、ラティオの放ったセカンドインパルスにより、ある意味で一命は助かっている。あのままインパルスの爆発が無ければ、間違いなく闇の騎士クリッパの、鎌により首を跳ねられていただろう。

爆発の衝撃に飛ばされるがまま行き着いた場所が、此処、ディザードウ砂漠地帯である。だがクリッパに命は取られなかったが、砂漠地帯の環境により、このままでは確実に命は終わりを迎えてしまう。

ティーダは既に、自分の力では動き回れない程に、疲弊しきっていたのだ。アルティロイド独自の回復力も、ここまでのダメージを回復させるには、長い時間を要する事になる。しかし今は時間を長く見ている暇は無いのだ。このまま砂漠に倒れていれば、身体中の水分は広大な砂に飲まれ、灼熱の太陽により、その身を焼き焦がされるだろう。

（駄目、か…………。俺はここで死ぬのか…………ジューク、デュアリス、セレナ…………ラティオ…………そして…………）

思考が止まっていく。恐らく、ここで眠れば永遠の眠りになるだろう。だが意識とは関係なく、闇への誘いは急速に高まり、全てを飲み込んでいく。命を縛り付ける為の、重力という名の鎖から解放放たれていく。それは一種の解放という名の快感を、ティーダに与えていたのだ。

（…………そうか、死ぬというのは、こんなにも気持ち良いものなのか。

……このまま……死ぬのも良いかもしれぬ)

死を受け入れ、そつと意識を遠ざけていく。あとちよつとで、あの世と呼ばれる場所に向かえるだろう。数々の強敵と戦い、死闘を演じてきたが、そんな戦士には呆気ない死に方だ。少なからずティーダは、そう思いながら死に絶えていく。

「……駄目……！ では……ませんつ。……ティーダ……！」

何者かが呼んでいる。男の声か女の声かはわからない。ただティーダの名前を、必死で呼んでいたのはわかった。

(誰だ……俺の名前を知っている？ 俺も知っている奴なのか……ティオ……)

薄れゆく意識の中で、その謎の声の呼びかけは聞こえたが、残念ながら深い闇へと吸い込まれていった。

ただ一つ、その叫ぶ者から感じ取れた事は、心に沁みるような暖かさだった。

歩き続けても、終わる事のなかった漆黒。無の世界と呼ばれるものだろうか。何も無いそこには、一瞬の閃光すら見えない。自分が立っているのか、座っているのか、あるいは寝ているのか、更にいかなれば生きていいのかさえも、一切がわからない。

だが、そんな長い漆黒も終わりを向かえ、降り注いだのは溢れんばかりの光と 見知らぬ天井だけである。

無言でその天井を見つめる。どこか高級感のある内装、これだけでレジスタンス連中に、拾われたわけではない事がわかる。城国と同じく壁はレンガでできている。更に辺りを見回すと、綺麗な装飾品の数々が置かれた、机が目に入る。

「……ここは一体？」

体には包帯が巻かれ、怪我の手当てがされているようだ。そのおかげか体の調子は思いの外、良好であった。

軽く体を動かすと、フワッと甘く優しい香りが漂う。その香りの元がどこなのか、わかるのはすぐだった。それはティーダが寝かさ

れていた、ベッドそのものからである。

（薄々わかつていたが……この部屋の持ち主は女か）

部屋の窓から外を覗くと、遙か下の方に、たくさんの人が見える。どうやらこの部屋は、高い場所にあるらしく、外の様子から城であり、更に城の周りには見渡す限りの砂漠が目につく。よく見ると下にいる人間は、皆が兵士であるようだ。数も見渡せるだけでも百人はいるだろう。

外の様子を見てみると、部屋の扉前に気配を感じる。一人ではなく、三、四人はいるだろう。何が起きてても良いように、ティードは身構える。そうさせたのは、その数人の内の二人だ。とても人間とは思えないような、存在感を放っているのがわかる。そしてその存在感を隠そうともしていない。絶対の自信の表れだろう。

扉が開かれると、最初に目についたのは、金色の髪をなびかせるように備えた、美しくも可愛らしい女性である。ドレスを纏っているとところを見ると、この女性が姫君であろう。

「まあ！」

そして姫であろう女性は、ティードの顔を見ると、顔つきが非常に晴れやかになり、突然走ってきて思い切り抱きついてくる。

「……って、おい！」

「良かった……本当に良かった。無事に意識が回復してくれて……ティード」

恐らくは、薄れゆく意識の中に聞こえた声は、この女性のものである。しかしティードは、この娘を全く知らないのだ。

「ちよつと待て、人違いじゃないのか？ 俺は確かにティードという名だが……恐らく、お前の知っているティードとは別人だ」

この言葉に、目の前の女性の表情が陰る。泣く程に落ち込んでいないようだが、悲しそうに俯く姿を見て、どこか申し訳なく思う。

（酷な話だが、こういうのはさっさと言っちゃった方が良い。

盛り上がってしまったから、言う方がショックが大きいだろうしな）
これはティードなりの優しさだ。それに、現状を早く確認したい

という思いもあった。

風の騎士ジュークを、乗っ取り自分の物とした王と、光と闇の騎士、リオとクリツパーの動向。救援に来てくれたラティオの生死。共に支配解放大戦を戦った、戦士達の安否。そしてパーシオンや、ティオの存在が、何よりも気になっていた。この事もあり、得体の知れない場所に、いつまでも留まっているわけにはいかない。今のティードには、パーシオンという帰る場所があるのだ。

「記憶喪失、なのね……ティード」
「……………はっ？」

目の前の娘は、俯きながら突然そんな事を言い出す。勿論、記憶喪失なんてものにはかかってもないし、間違いなく人違いなはずなのだ。

「可哀想に……きつと余程、怖い目にあつたのね。でも大丈夫、ここにはもう怖い事は無いわ」

優しく頭を撫でながら、そう言う。スラツとした割に、温かく柔らかい手だ。

「あのなあ……………」

「姫様、お時間です。ティードの事はまた後程で、お願いします」

一人の老人が入ってくる。ややきつそうな印象だが、悪い人ではないだろう。さしずめ娘の世話係といったところだろうと予想できる。そして老人の言葉から、やはり国の姫なのだとわかる。

「はい、ノリヌ。……ではティード、また後で来ますね。それまでゆっくり休んでください。……貴方は一応は重症なのですから」

姫は足早に部屋を後にする。そして姫と入れ替わりに、ノリヌと呼ばれていた老人と、二人の騎士が入ってくる。恐らく、扉の向こうで存在感を放っていたのは、この二人であろう。

だが、この二人の騎士を見て、ティードはどこか違和感を見出だす。見た感じは人間と同じなのだが、人間にしては持っているプレッシャーのようなものが、強すぎると感じる。いや、この表現は正

しくないのかもしれない。もつと正確にいうのならば、野性的、である。そして眼光も人間とは思えない程に鋭く、正に鷹の目という言葉が当てはまる。武器はレイピアと呼ばれる、細身の剣である。

「よく無事に帰ったな、ティードよ」

「……アンタは？」

ノリ又と呼ばれていた老人が、やたら上から目線で話しかけてくる。

「覚えておらんのか？ ワシはノリ又。このエスクード城の大臣兼姫の世話係じゃよ。しかしまさか記憶喪失なのか？」

やはり老人ノリ又は、姫の世話係。更に大臣らしい。

そしてノリ又は、この城の名をエスクード城と言った。エスクード城とは、大陸の遙か東に位置しているディザードウ砂漠にある、世界でも数ヶ所しかない城の一つである。元々は、そんなに強い兵力を保有していたわけではなかったが、ここ最近では、城国軍からの攻撃を退ける強さを持っている。

「記憶喪失もなにも、俺はアンタ達の知っているティードじゃない。間違いなく人違いのはずだ」

ノリ又は独特な笑い方をする。

「ぬっほっほ、この鬱陶しい長い黒髪、目付きの悪さ、そして無愛想な喋り方、どれを取ってもワシらの知っているティードそのものじゃわい」

大きな溜め息をつく。どうやら、エスクード城にいたティードという人物と、全くの瓜二つらしいのだ。見た目も性格も同じという事に、にわかには信じがたいところもある。

「どうすれば信じてもらえる……俺は俺で帰らなければならない所があるんだ」

「お前さんの帰る場所は、ここエスクード城じゃよ。何、今は記憶喪失だけじゃ、治れば安心するわい」

話が一向に進展しなかった。説明しようにも、記憶喪失の一言で片付けられてしまう。

「だからな、じいさん……」

「ま、早く良くなって……フィーネ様を安心させて守ってやってくれ。一兵士と姫様の結婚、反対する者もそりやおるが、今の時代だからこそ幸せになってもらいたいもんだわい。戦いを終わらせる為に、と言つて、城から出て行ってしまつたお前さんを想い、フィーネ様は毎晩嘆き悲しみ、毎日教会に行き、神に祈りを捧げておつたのだぞ、この幸せ者が！」

「そりや大層な事だな」

確かに凄いと思つたが、結局は赤の他人の事なので、あまり深入りはしないようにする。更にノリ又の話より、姫の名前はフィーネである事がわかつた。

「ノリ又様、そろそろ……」

二人の騎士の内の一人が、ノリ又を呼びに来る。白髪を後ろで纏め、長い馬の尻尾にしている。何よりも特徴的なのは、首に下げた鳥の爪のようなネックレスである。あまりに精巧な作りであり、まるで本物の爪なのではないかと思える程だ。

「おお、そんな時間か。ではティード、ゆっくり休んで早く治しなさい。フィーネ様に気苦労をかけんようにな」

そう言つと、ノリ又は部屋から出ていく。その護衛についていた騎士も、出ていこうとするが、その内の一人、今しがたノリ又を呼びに来た騎士と目が合う。二人の騎士の内、この男の眼光が特に、鷹のような目をしている。ホークアイとはよくいったもので、この言葉は、この男の為にあるのではないかとも思えてしまう。

「これ、どうしたホーク。呼びに来たお前が、そこで突っ立っていても、しょうがないだろうに」

「はい、申し訳ありません、ノリ又様。ただいま向かいますゆえ……」

その男はホークという名前、何かの暗号名だろうか、まさか本名のはずはないだろう。

ノリ又とホーク、そして一人扉の前で待機していた騎士は、何処

かへと歩いていく。最もティータは、傷がある程度治ったら、すぐに出ていくつもりだったので、特に深追いしようとも思わなかった。厄介事に巻き込まれて、帰還が遅くなるのも避けたい。

（さて……どうしたものかな。フィーネ……だったか。あいつは俺の事を人違いの、ティータだと思っている。説得しても納得はしてくれないだろう。……そうなると思えば出すか）

このような結論に至ったが、すぐに考えを止める。

（いや、そもそもここが具体的にどの辺りなのか、まずはそれを知らないといけない。そうなる、やはりこの城で情報を集めないといけないか……）

いずれにしても、まずは傷を治さないといけない。この城で何をすべきかは、今は考えないようにする。

そうなる、ここに来てからの現状確認になる。まずここは、東の砂漠地帯にあるエスクード城。そして城の姫はフィーネ。更に側近にノリヌと騎士ホーク、名前はわからないが、もう一人騎士がいる。あまりにも現状を判断するには、材料が少なすぎる。

支配解放大戦以降の情報が、不足しすぎているのだ。まるで再び一から始まる冒険のように、新たな道を進まなければならない。

「……考えても仕方がないか。今は自分にできる事を、一つ一つこなししていく事が大切だ」

たくさんの考え事はあったが、割り切って一つに集中する事にする。そして、そう思った矢先に、一つの重要な事柄に気がついた。

「ヴェルデフレインは、どこだ？」

部屋中をくまなく探しても、ティータの愛剣、深紅の剣ヴェルデフレインは見つからなかったのだ。

2 本物のティータ

「で、結局わかったのかね、この剣の事は？」

「一つ言えるのは、この剣に使用されている材質は、一般的な鋼鉄といったものではないという事です。古き言い伝えにある材質……」

「古き言い伝え……一体何だと言うのだ、それは？」

「はい、これは……神々が人間に与えたとされる、伝説の超金属
オリハルコンです」

とある一室、ノリ又と学者の会話。そこにはティータのヴェルデ
フレインがある。これは砂漠にて、ティータ救出の際に回収された
もの。それをエスクード城に仕える学者が見て、材質に興味を持っ
た為である。

「オリハルコン……しかし、ティータの奴がそんな代物の武器を持
っているなんて……あいつは鋼の剣で手一杯だった兵士じゃぞ」

「……経緯はわかりませんが、何かのキツカケで手に入れたか、あ
るいは……」

「あるいは？」

「あるいは、あのティータは、別人か。いずれにしても、こんな超
金属武器の持ち主を、一目で良いですから、身近に見てみたいで
すね」

一人の学者が出した意見に、ノリ又は低い唸り声をあげながら、
考えている。ティータは別人なのか。ノリ又にとっては、それだけ
が気がかりになっている。何故なら、自分が見たティータは、確か
に知っている人物なのだ。姿形、声帯、性格のほとんどが、知って
いるソレと変わらない。あまりに同じすぎるので、唯一ある可能性
は、ドツペルゲンガーとしか言い様がない。

「むむむ……。なあ、例えばじゃがな、自分にそっくり……いや、
瓜二つという人物は、はたして存在すると思うかね？」

ノリ又は学者に問いただしてみる。

「……瓜二つ、ですか？ そりゃ、例えば一卵性双生児とかなら
」

「違う違う！ 双子とかを抜きにしてじゃ。全く知らない赤の他人として、瓜二つな人間はいると思うかと聞いておるんじゃない！」

「難しい質問ですが、太古の昔から、自分にそっくりな人間は、三人はいるって言いますしね。答えは出しにくいですが、そこまで同じ人間は、存在確率自体が低いと、私は考えていますが？」

この学者の回答に、ノリ又は多少の参考意見として、受け止めていた。全く瓜二つの人物が存在する確率は、無いとはいえないが、極めて低い確率である。

「あい、わかった。……邪魔したのう、ワシはこれで撤退する。このオリハルコンの剣は、持っていくからな！」

「ああ、そんな……。滅多にお目にかかれない材質が……。しかし、その剣を使っているであろう、ティーダは凄いですね」

何が凄いかわからない為、顔に「何が？」と書いてみると、それを察知した学者は喋り始める。

「伝説の超金属オリハルコンですよ。普通ならば、どんな武器でさえも、オリハルコンを傷付ける事なんてできないはずですよ。それが見てくださいよ！」

学者に急かされ、ノリ又はヴェルデフレインの刀身を凝視する。

「何もわからんよ？」

「この剣、かなり痛んでいるんですよ。しかも手入れを怠っている様子も、見受けられないのです」

「……つまり」

「そう、この剣の持ち主……ティーダかはわかりませんが、オリハルコンの強度を上回る、激戦をしているとわかりますね。それは必然的に、超凄いという事なのですよ！」

いまいち実感のわいていないノリ又だったが、学者の言う通り、超凄いというのがわかる。

だからこそ、砂漠で救ったティーダに、ちょっとした違和感を感じ

じていたのだ。はたして自分が知るティードに、そんなオリハルコンにダメージを与える程の、腕前があっただろうか。仮に自分の知らない所で、劇的なレベルアップを果たしても、人間がそこまでの存在になれるだろうか。答えは間違いなく否だ。

そんな違和感を抱えながらも、ノリ又はティードの元へと向かっていく。向かっている最中に、騎士二人が護衛に付く。その二人の内、一人はホークと呼ばれる鷹の目の騎士である。

「ホークよ、ティード搜索をな……もうしばらく続けてほしいのだ」

「搜索を？ 了解しましたが、一体何故です？」

「うむ……ちよいと老婆心がな。頼めるな？」

「お任せください。搜索を再開します！」

そう言つと、ホークはもう一人の騎士に、護衛を任せて足早に駆けていってしまう。その身のこなしも、かなりのものだ。

ティードが寝かせてもらっている部屋は、フィーネ姫の一室らしく、姫はちよくちよく出入りをしている。何でも、その時の行事により、ドレスやアクセサリを変えているらしい。

「おい、ここはお前の部屋なんだろう、なら俺がここに寝てたら迷惑なんじゃないか？」

「平気ですよ。私用の部屋は他にも三部屋ありますからね。ティードが寝てても問題ありませんよ。それに早く良くなってもらわないと」

優しい天使のような笑顔を見せる。とても作り笑いとも思えず、これは天性のものだと判断できる。その笑顔を見ていると、どこか心に安らぎを覚える。

「……どうかしましたか？」

「あ、いや……」

どうやら、その笑顔を見てばーっとしていたらしい。つまりは見とれていたのだ。だが実際に、そういう魅力のある姫だ。

「……ティード」

突然名前を呼ばれ、逸らした視線を元に戻す。すると今しがたの笑顔は無く、そこにはどこか悲しそうに見つめる、姫の顔がある。

「記憶喪失……早く治してくださいね。私、貴方との結婚をずっと待っていますから……」

そう言つと、フィーネ姫は足早に部屋から出ていってしまう。

「結婚……か。俺とは違うティードと、あの姫はそういう間柄か。

……だが残念だが、俺はそれではない」

そんな言葉を、小さな声で吐き出していると、フィーネ姫と入れ替わりに、ノリ又が部屋に入ってくる。

「どうかね、元気にやつとるか、ティード？」

「まあ程々にな。それで、今回は何の用なんだ？」

問いただすと、返ってきたのは言葉ではなく、愛剣のヴェルデフレインであった。

「これは……お前が持っていたのか」

「うむ、悪いとは思ったが、めずらしい装飾の剣だったから……ちよつと調べさせてもらったよ。伝説の超金属、オリハルコン……

の、武器らしいじゃないか？」

何も隠さずに、ティードは「そうだ」と答える。但し余計な事は言わなかった。事細かに答えてしまつては、いずれは元城国の兵士であると、わかつてしまふかもしれない。そうなると色々と面倒である。

「ふむ……実はな、前まではお前の事を、知っているティードであると思つていたのだが……最近は違うのではないかと考える時がある」

「ほう、それは一体何故だ？ あまりにも突然すぎる言葉だ」

「ただの勘というやつなのだがな。ただ、そう思わせる事柄もある。

……改めて聞いてみたい、君は一体何者なのか、はたして記憶喪失のティードか、あるいは別人なのか、そして砂漠で倒れていた理由などを、できたら聞いてみたいのじゃよ」

「ようやくか、そう言ってくれる人間が現れてくれるのを、待っていた」

ティードは、ここまで起きた出来事を、必要最低限だけ話した。パーシオンというレジスタンスの事と、支配解放大戦の事だ。そして重要なのは、自分が別のティードであるという事を、理解してくれる者を増やす事。

「なるほどのう……お前はパーシオンというレジスタンスの兵士で、数日前にあった戦争に参加していたと言うのじゃな。しかし……城に攻めいるなどと、自殺行為に等しい。それ程の軍力が揃っていたのかね？」

「それなりにはな。だが、はたして集まった軍力が、現在の時点で一体どの程度減ってしまったのかは、俺にもわからないな」

「そりゃそうじゃ。お前は砂漠でのたれ死んでいたのじゃからな」

「……とりあえず。俺はそういう理由もあり、早くパーシオンに戻りたい。そろそろ俺を、この城の外へ出してくれないか？」

抜け出そうと思えば、いつでも抜けられたが、手荒な真似はしなくなかったのだ。それにそうした場合、フィーネ姫の事が、どうにも気がかりにだったのも事実である。いつそ誰かの「はい」の言葉を貰い、気持ち良くこの城を去りたかったのかもしれない。

しかし、ノリ又からの言葉は、求めていた答えとは逆の言葉が出てくる。

「駄目じゃ。確かに少しは君の事も信じよう。しかしワシ達からすれば、もしかしたら記憶喪失の可能性も無いとは言えんのじゃ。もう少しだけ、ここにいてもらいたい」

その答えに、心の中で舌打ちをする。とにかく早く帰りたいティードには、苛立たせられる回答だ。

「ここだけの話にしておいてほしい。絶対に姫には内緒にしておいてほしい話があるんじゃ」

「わかった、考えておく。……それで？」

「現在、エスクード城の探索部隊が、ティード搜索に全力をあげて

いる。念の為だ。もしも、形はどうあれ姿を確認できれば、君を解放しよう」

形はどうあれ、つまりは死体の場合も、考慮しているという事である。

「一応聞いておくが、見つからなかった場合はどうなるんだ？」

「一概には言えんが、場合によりけり此処に留まってもらう。ワシはそこまでの決定力は無いから、何とも言えんがな……」

ティーダからすれば迷惑な話だが、エスクード城側からすれば、当然の判断だろう。ここは、こちらでいうところの「本物のティーダ」が、見つかってくれる事を願うしかない。だがもしも見つからなく、ここに拘束されるような事があれば、強行的にでも出ていく覚悟をつける。

「ま、そういうわけじゃから、気長に待つといってくれんか。ワシ達も早めに見つかるように、全力を尽くしてみる」

「そうしてほしいものだ……」

半ばため息混じりの返答。その返答を聞くと、苦笑いをしながらノリ又は、部屋から出ていく。

当面はエスクード城のティーダが見つかるまで、動く事ができない。傷の治りも、完治とは言い難い為、しばらくはここにいる事にする。

（これからの戦い……当面の相手は、あのクリッパーとリオになるだろう。俺も万全の状態にしておかないと……特にあの闇の騎士クリッパーは、要注意人物だ。……そして）

一人の男を思い出す。それは風の騎士ジュークであり、明かされた一つの真実、ティーダの実の兄である。しかし今は、王に寄生され乗っ取られた男。

なまじ肉体がアルティロイドになってしまい、戦闘能力が上がってしまった。元々、地上軍の方が戦力は低かったが、ここまでする者がないから。何故ならば事実上、ティーダしかこの三人と戦える者がいないからだ。今までのジューク、デュアリス、ラティオと

いった者達との戦いとは違い、今の相手は容赦無く、攻撃を仕掛けてくるだろう。そうだった時に、ティード一人で戦い抜けるだろうか。答えはすぐに出てくる。

共に戦ってくれる、強き存在が必要になってくるのだ。そして藁にもすがる考えで、思い出した事がある。

（そういえば、ジュークは命の騎士ティアナを探せと言っていたな。結局、支配解放大戦の際にも、捜す事はできなかったが……こんな時だ、捜すならば今しかないか）

何度か断念していた、命の騎士ティアナの搜索。都合の良い考えだが、こんな時だからこそ、一人でも多くの戦力がほしかったのだ。（しかし、結局都合の良い時に出したところで、ティアナに関するヒントが相変わらず、ほとんど無い現状だ。いくら何でも本格的な搜索活動に、時間を割くわけにはいかないな）

ティアナ搜索の前に、やる事がたくさんありすぎるのだ。やはり、念頭に置いておきながらも、偶然的な遭遇に頼るしかないのだ。

何にしても、これらの考えが実行に移せるようになるには、まずはエスクードのティード発見が第一だ。何もする事が無い苛立ちが、ティードに襲いかかっていた。

そして数日が経ったある日の事。ついに秘密裏に搜索されていた、エスクードのティード発見の報告が成されたのだ。しかしその結果は、大臣ノリヌの耳には悲しい事実である。

「申し上げます。ティードと思われる人物を発見、至急確保しましたが……その……」

「何じゃ、早く言わぬかつ！ 年寄りをあまり待たせるでない！」

「では……見つけたのは私とは違う兵士でしたが……見つけた時には、既に死んでいたそうであります」

「な、何と……！？ し、死んでいた……じゃと。遺伝子鑑定などは済んだのかね！？」

「……はい。調べた結果、ほぼ確実にティードのものと同じしまし

た……」

その報せを受けたノリ又は、途端に体に力が入らなくなり、その場に崩れ落ちた。そしてゆっくりと口を開く。

「……この事は、フィーネ姫様には内密にするんじゃ。あの方は今でも一途に待ち続けておる……いずれは話すつもりじゃが、今は絶対に姫様の耳には入れぬようにな？」

「了解しました。徹底します！」

一礼をして、兵士は下がっていく。ノリ又はいまだに体に力が入らなく、べったりと床に座り込んでいる。

(戦場に出たんじゃ、死ぬ可能性が高い事は、百も承知している…

…しかし、まさかこれ程に悲しい事とは……)

一人の男の死に、一人の男が涙を流していた。

3 エクストリウム

Eskuroドのティードが、死んだという報告を受けてから、三日が経つ。更に調べた結果、死因は背後から、槍のようなもので刺されたものである。傷口の深さなどから、即死だと判断された。

「はあ……」

ノリ又は一人、突然大きなため息を吐き出す。あまりの深刻な顔つきに、側にいたフィーネ姫が、心配そうに声をかける。

「どうしたのです、ノリ又？　ここ数日、急に元気が無くなって……まさか、どこか体の具合でも悪くなつて……!?」

「あ、ああ、いえ、大丈夫ですとも……ご心配をありがとうございます、ごまます、姫」

やはりティードの事を、割り切れてはいなかったのだ。そもそも Eskuroドのティードと、フィーネ姫は、ノリ又にとっては我が子のように十七年間育て上げた。そんなティードが戦争しに行くと、城を出てから早一年、それがこんな結末になってしまったのだ。一人でこの事実を受け止める事さえ辛いのに、フィーネ姫にそれが知れて嘆く姿を想像すると、ノリ又は更に気を落としてしまうのだ。

「そういえば……ワシはティードの様子を見えます。もしかしたら、記憶喪失も回復の兆しがあるやもしれません」

「それならば、私も一緒に
「なりません！」

フィーネ姫の言葉を、乱暴な口調でかき消してしまう。その行為に、ハツと我にかえり、申し訳なく土下座をし謝った。

「そ、そんな……ノリ又、顔を上げてください。私は気にしていませんから、どうか……」

数秒……あるいは、一分が経つただろうか。姫の言葉から、それだけの時間が経過してから、ようやくノリ又は頭を上げた。

頭を上げたノリ又を見て、フィーネ姫も、ほっと胸を撫で下ろす。

「貴方は私にとって、育ての親……そんなノリ又が私に向かって土下座するところを、見たくはありません。どうか気を確かにしてください」

「はっ、姫様。どうも最近は何事かありまして……少々、冷静さを欠いていたようです。しかし姫様、今は姫様もやるべき事

があるはず、ティードの世話はワシに任せていただけませんか？」

「ノリ又……それは構いませんが……どうか、ティードの記憶が少しでも回復に向かった時は」

「わかっております。必ずの一番に、姫様をお呼びします。……では、私はこれで！」

あまり今はフィーネ姫と、話したくないと感じてしまい、ノリ又は足早にティードの元へと向かう。しばらく歩くと、ノリ又を守護する二人の騎士が現れる。

「ホーク、イーグル、ご苦労じゃったな……」

「いえ、このような仕事でさえ、受け持ち完遂させるのが私達の使命であり、恩を持つエスクードへの忠誠の証です」

ノリ又の言葉に答えたのは、ホークではなくイーグルだ。ホークと同じく鋭い眼を持っている。装備もホークと同じく、細身のレイピアを持ち、何か棘のような物を、首から下げていた。

「そんなに堅く構えずとも良い、エスクードの王族は皆、器の大きな方々じゃ。我々とも対等に接してくれるのじゃ」

その言葉に、二人の騎士は小気味良く「はっ！」と答える。

そこから数歩行くと、ティードがいる部屋へとたどり着く。元々が姫の部屋な為、外部の扉装飾も華やかであり、男が いや一介の剣士がいるには、過ぎた部屋である。事実、ティード自身も装飾を見る度に、軽いため息を漏らしていた。

「どうかね、ティード。気分の方は？」

「ずっと室内にいて、気分が最高だと思っただけか？ 住み心地や待遇は悪くないが、俺にすれば此処での生活は地獄だ」

「仮にも城内だ、迂闊な発言は慎んでくれよ？ ……さて、とりあ

え、君にはいくつかの報告があるのじゃ。まずは……君の疑いが晴れた事、じゃな」

その発言に、ティーダは敏感に反応する。

「と、いう事は、此処に住むティーダが見つかったという事だな、ようやく俺は俺の目的の為に動けるといいうわけだ」

「まあ、そうなのじゃがな……その……死体として見つかったのじやよ」

「死体か。この戦争している世界で、戦士としての死は、半ば当たり前な事だぞ」

「そ、それはわかっておる！……じゃがなあ、このティーダの死を、姫になんと報告すれば良いか……」

真剣に悩むノリ又だが、その顔を見て、ティーダは絶対なる答えを言い放つ。

「だがいずれは言わなければならない事だ。お前が言えないのなら、俺が直接言つてやろうか？」

「ば、馬鹿者！ その顔で……その声で……死刑宣告に等しい事を、姫に言う事などできるかっ！ いずれワシの口から明かすよ、

酷い言い方じゃが、余所者のお主の力は借りんつもりじゃ」

ティーダも、それ以上は何も言わなかった。言う必要も無いからだ。それに兼ねてより、ティーダは早くパーシオンに帰るといいう、目的もある。

「……まあ、事がこうなつた以上は、俺が此処に留まる必要は無くなつたわけだな。俺は俺の場所へ帰らせてもらう」

「む、あ、ああ、そうじゃな。姫様にはワシから言っておくよ……」
ようやくの解放。

なんだかんだで、支配解放大戦から、数十日が経過してしまつた。あれから大戦に参加したレジスタンスには、良い噂や情報を耳にする事がなかつたのだ。もしかしたらパーシオンも……ティーダの頭の中には、その事でいっぴいになる事もあつた。更にいえば、ティーダにとってパーシオンというのは、いつの間にか、そういう存

在になりつつあったのだ。

「では俺は行く。……世話になった」

軽い挨拶を済ませると、わずかとはいえ世話になったエスクード城との別れの時だ。

しかし、そんな歩みを止めようとする者がいた。

「なんの真似だ？」

「いや、別に……ただ俺はエスクードの騎士としての、使命を全うしようとしただけの事、お前はスパイかもしれないからな」

「こ、これ、ホーク！ 一体何をしておるのじゃ！」

その細身のレイピアを突き立て、ティータの前進を止めたのは、エスクードの騎士 鷹のオルテンシア。

「簡単な事です。この者は、このエスクード城を陥れる為に、城国が送り込んだスパイかもしれない……そう申しているのです。そして根拠もあります。まずはこの者の持つオリハルコンの剣、そして剣に施された装飾……どれを取っても、この地上ではお目にかからない代物、城国 シャングリラキングダムを除いてな。……そして何よりも、この者には凄く強い……『血の匂い』がこびりついておりますゆえ」

鷹の目が、獲物に狙い定めたような眼光を光らせる。圧倒的な威圧感、人間には到底出す事はできない、野生の威圧感である。しかしこの鷹の騎士オルテンシアも、また人間である。どうすれば、このような野生の威圧感が出せるのかは、全くわからない事である。

「むう、ホークよ……ならばお前はどうしたいというのじゃ？」

「簡単な事です。この者と剣を交えます。剣を通して、この者の真実を謀るのみ。 良いな、ティータとやら？」

「……構わない。それで俺が勝てば、後は好きにして良いんだろ？」

「……ああ、好きにするが良い。だが……勝てたら、だかな」

不適な笑みを浮かべる鷹の騎士オルテンシアと、表情を崩す事のない火の騎士ティータ。

確かに威圧感は、並の人間の比ではないが、この程度ならば十中

八九、ティードが勝つ。ティード自身もそれはわかっている事だ。

「むむむ、イーグルよっ、お前もホークと同じ考えなのか!？」

「はい……私もオルテンシアと同じ考えであります。元より、この行為はオルテンシアと話し合っただけの結果です」

その物腰、話し方など、全てにおいて冷静な、驚の騎士バゼット。

「むう、お前達二人の合意の行動か……ティードはどうするね、本当にこの戦いを受けるのかね？ 君には戦いを拒否する事だっでできるのじゃぞ」

「何度も言わせないでくれ。やりたいのなら、別に構わないんだ。

俺は早くパーシオンに帰りたいだけだ。それにここで断つても、城を出たらこいつらに襲われるだけだ。……そうだろ？」

ティードの問いかけに、オルテンシアは自信満々の表情で、強く頷いてみせた。

「あい、わかった！ ワシとしては、このままティードを旅立たせたいという思いもあるが、仮にもスパイならばエスクード城を危険に晒す事にもなる。申し訳ないが、悪事を未然に防ぐ為に、この戦いを承諾しよう！」

こうして、ノリ又管理の下で、オルテンシアとティードによる、剣の決闘が開始されようとしていた。

その戦いが公にならぬよう、場所は特別兵士訓練場という、限られた兵士しか使用不可な場所に決定する。

「では、お互いに命を取るような事はせんようにな。ホークもティードも、そのような事が起こりそうな時には、イーグルが止めに入るからな。では両者、無理はするでないぞ」

そして開始の合図が成される。ティードの武器は変わらずに、深紅の剣ヴェルデフレイン。対する鷹の騎士オルテンシアの剣はレイピア。しかしこのレイピア、目を見張るものが、刀身が淡く青に輝いている事だ。

「俺のレイピアは、別名マークX^{エックス}。このディザードウ砂漠地帯でし

か採取できない、エクストリウムという鉱石を、使用した武器なのだ。その強度は、鍛え抜かれた鋼鉄を軽く凌駕するのだ！」

ありとあらゆる物があつた城国だが、エクストリウム鉱石の存在は知り得なかつた。如何にこの鉱石が、希少なのがわかる。

（エクストリウム鉱石の強度は、この砂漠に住まう者ならば、よくわかる事じゃ。しかし相手は最強の材質と謳われるオリハルコン……はたして、エクストリウムがどこまで通用するか……そしてマークXがやられた時には、『アレ』を出すのか……ホークよ？）

この戦いを第三者として、見ているノリ又は考えていた。不謹慎ながら最強のオリハルコンに、エスクード城が、城国と戦う際に売りとしているエクストリウムが、どこまで対抗できるのか。これは今後を左右する判断材料に、満ち溢れた戦いになる。

「行くぞっ！」

最初に仕掛けたのは、オルテンシアだ。その突進してくる速さは、人間の身体能力で出せるそれを、遙かに越えている。

レイピアという剣の特性を活かした、鋭い突きを出してくる。第一撃目、相手の単純な力を見る為に、あえてティードは、剣を交える。当然の話だが、如何にオルテンシアが人間離れした速さを持っているといつても、ティードには避ける事など造作もない事である。

「ぐうっ!？」

だが予想外の事が起きる。速さだけでなく、力においても、オルテンシアは人間を越えている。予想以上の力強さに、ティードも一瞬で気を引き締めにかかる。

「ほお、耐えたか。『人間にしては』やるな」

更に力を込めて、一気に押し潰さんばかりの勢いで、攻撃をかける。そのオルテンシアの力加減に合わせ、ティードも踏ん張る。

（このオルテンシアとかいう男 どういう事だ。その威圧感、力、速度、どれを取っても人間の範疇を越えている。まるで……『動物の力を備えた』人間、そんな例えが当てはまるな……）

（むっ、これ程に力を込めても、耐えるのか……この男は。如何に

鍛えあげた人間でさえも、これ程のプレスには、否応なしに耐えられぬはず。……まさか、この男も『我々と同じ』？ いや、そんなはずはない。この男には同種の匂いが無い、だが……人間とは違う決定的な何かがある)

わずか一太刀と、力比べの攻防で、ティードとオルテンシアは最初の考えに至る。それはお互いが、人間離れた何か、という推理をしてみせる。

「だが所詮はその程度、この攻撃を捌き切れるかつ！」

一撃目よりも、圧倒的に鋭さを増した突き。瞬きする速さよりも速く、ティードに襲いかかる。

だがティードも、相当な実戦をぐぐり抜けている。速さにおいては風の騎士ジューク。攻撃速度においては爆炎の騎士ラティオ。そのどちらにも、オルテンシアは勝ててはいない。確かに鋭い攻撃だが、まだまだティードには、避けられるレベルである。

「な、何っ!? まさか、この攻撃すら難なく避けるとは……」

この事実に驚いたのは、オルテンシアだけではなく、鷲の騎士バゼットも同じである。

「悪くない攻撃だが……上には上がいる！」

今度はティードによる攻撃。横一文字に左から右へ、剣を走らせ

る。

「ぐっ、はっ！」

オルテンシアも、かろうじて攻撃を防御できたが、その攻撃の衝撃にダメージを受け、そのレイピア マークXも、今の一撃でひび割れが起きてしまう。

(まさか……オリハルコンとエクストリウムで、これ程の差があるとは……)

ノリ又は見た。オリハルコンとエクストリウムの、力の差を。しかし仮にも人間同士が、この素材を用いた武器で戦っても、ここま

で一方的にはならないだろう。これはアルティロイドの、人智を超えた力と、オルテンシアの謎の力に、エクストリウムが耐えられな

かった為だ。

エクストリウムはそこまでヤワではない。仮にもエクストリウム製の剣一本と、鋼鉄の剣が五十本、勝負しても余裕でエクストリウムが勝つぐらいの、強度とパワーがあるのだ。

「な、何だ……このパワーは！？ それにマークXがいとも簡単に碎かれるなどっ……！」

怒りと困惑の、入り乱れるオルテンシア。相手の力を見くびっていたわけではない。しかし相手の力は、予想の一步……いや三步上は行っている。オルテンシアは瞬時に、自分とティーダとの実力差を分析する。

「これでわかっただろ？ 俺は早く帰りたい、この辺で良いはずだ」
終わらせようと、ティーダはノリ又を見る。その視線に気付き、ノリ又も戦いを終わらせようとする。

「アレを、使うしかないようだ」

そのオルテンシアの言葉。

すると首からアクセサリーのように、下げていた鳥の爪のような物を、右手で強く握りしめる。

「アレを使うのか……オルテンシア」

一人、冷静に戦いを見ていたバゼットは、オルテンシアのやる行動が読めていた。

そして、オルテンシアの握りしめた右手が、力強く輝き始めたのだ。

4 / 思念武装と複合生命体

閃光が晴れると、そこには今まで存在していなかった、武器があつた。鉄製ではなく、まるで骨でできた刀身の剣だ。不思議なオーラで包まれ、まるで剣を持つているのではなく、光に包まれた右腕そのものが、剣になった、と例えるのが近いかもしれない。

「……何だ、あの武器は」

初めて見る形状の武器。特に異様だと感じさせるのは、まるで武器そのものが呼吸をし、生きているようにも感じられる事だ。

「これが我々の、エクストリウムを超える切り札っ、思念武装だ！」

「思念武装……だと!？」

「そう、名前の通り、使用者の思念に応じて、その強さを変える武器。思いが強ければ強い程、オリハルコンにも匹敵する武器になり、思いが弱ければ……木の棒にすら劣る武器にしなければならない。……だが、それは俺に限りならないのだっ！」

オルテンシアの自信に満ち溢れた態度。しかしハツタリともいえず、その武器の輝きは、確実に強くなつていく。

その光は意志の強さ。光が強くなれば強くなる程、武器の強度、攻撃力共に、増していくのだ。

「テストにしては、いささかやり過ぎだとは思っているが……お前に俺達に近い匂いを感じた。悪いが全力で押させてもらっぞ！」

オルテンシアは、光る剣を駆り、ティータに襲いくる。その武器を危険と察知し、油断する事なく構えを取る。

（確かに得体の知れない、あの武器は要注意だが……基本的に持ち主の、能力アップは施されていない。ならば、武器にだけ注意すれば、この勝負に勝つ事は容易いな）

瞬時に相手の能力を、見極めてみせる。

「せあっ！」

かけ声と共に、一気に間合いを詰めにかかるオルテンシア。見極

め通り、身体能力の向上はしていないが、やはり武器は要注意しなければいけない。

ティードは初撃と同様、わざと受けて相手の力量を見ようとするが、その行為を躊躇する。間近に相對すると、その光輝く武器の威圧感に飲まれるからだ。

「ふっ、はあっ！」

オルテンシアの鋭い攻撃。やはり人間の身体能力を、大きく凌駕している動きである。

しかし難なく避けていくティード。この攻防は武器が変わっても、全く変わる事のない展開である。

「もういいだろう？ お前では俺に勝てない、お前程の騎士ならばわかるだろう」

「……そうだな、お前の強さはやはり想像の遙か上を行っている、だからこそっ！」

オルテンシアは、鋭い跳躍と共に、一気に空へ飛翔した。その飛翔力は、当然の話だが人間のそれを大きく超えている。まさしく飛翔というのに相応しく、一時的にジャンプする『飛んだ』ではなく、まさしく空を飛んでいる。

「ゆくぞっ、思念武装による騎士の魂の一撃を受けてみる！」

「……つく！？」

咄嗟に受け止めるべきだと判断する。いや、上を相手に抑えられている時点で、回避するのは困難だと判断したのだ。戦いにおいて頭上を支配されるのは、大きな痛手となるのだ。

「思念武装……魂の一撃とかいうそんなオカルトめいたもので、この俺のヴェルデフレインを打ち砕く事は不可能だ！」

「いやあああああああ！」

まるで鷹が獲物を捕らえる際の雄叫びだ。遙か上空で空を飛ぶオルテンシアは、ティードに向かって一気に降下する。その速度は数秒もかからない、一秒あるかないかの速さだ。

そしてヴェルデフレインと、思念武装は弾き合い、強大な衝撃波

をそこに生み出した。

「な、なんとお……二つの武器の衝突がこれ程のものとは……」

「ノリ又様、お下がりにください！ この衝撃は危険です」

いち早く危険を察知し、バゼットはノリ又を守るように身を盾にする。

そしてその衝撃波が終わり、何事も無かったように静けさが訪れる。時間にすればほんの十数秒の事だが、バゼットはともかく、見ていたノリ又は更に長い時間経過を感じていたのだ。

「……………勝ったっ！」

オルテンシアは、静寂を力強く打ち砕くように、言葉を放った。手に持つ思念武装は依然として不思議なオーラを纏い原型を留めている。

しかし対するティータのヴェルデフレインは刀身の真ん中から上つまりは剣先が見事に無くなっている。その剣先は凄まじい衝撃に飛ばされ屈強な壁に刺さっていた。

「……………お、お……！？」

それを見たノリ又は、声にならない声をあげた。オルテンシアの騎士としての魂が、オリハルコンの強度を超えたのだ。

（我がエスクードの誇るエクストリウムは負けてしまったが、ホークの思念武装は勝ったか……いや、あのオリハルコンの剣は度重なるダメージからか、相当な疲労をその刀身に抱えていた。悔しいがホークが勝てたのは、その結論によるところが大きいじゃろう。しかし……よくぞ勝ってみせた！）

心の中からの賞賛を、ノリ又は贈った。

それとは裏腹に、ティータはひたすらに無言でヴェルデフレインを見つめていた。その見事に折れた刀身は、敵であっても見事と言つてすまう程だ。

「危なかった……もしも、その剣が万全だったのなら、やられていたのは俺の方だった」

「いや……そうでもないだろ？」

「そういうもんさ。俺の思念武装が勝てたのは、その剣の疲労と一種のタイミングによるところが大きい。お前の戦士としての能力が高すぎたからこそ、それを利用して打ち砕けたに過ぎんのだ」

「自らが対峙したからこそその判断。事実、ヴェルデフレインの疲労はティードも知っていたのだ。」

オリハルコンはそれ単体で微弱ながらの、自然治癒能力を秘めている。例えばそれを扱う者が普通の人間ならば、オリハルコンの持つ自然治癒で全ては丸く納まるだろう。だが今回の例は人間を遥かに凌駕する能力を持つ、究極の生命体が使用者。更に今までの戦いによる度重なる極大な衝撃は、自然治癒能力を上回る勢いで疲労させていった。結果、刀身は見事に折れてしまった。

「ノリ又様、この者ティードは、悪ではございません」

「うむ、よくぞやってくれたな、ホークよ。……ティードよ、もし良かったら剣をワシらに預けてはくれんかの？ 少しながらオリハルコンの材質に精通した者が、この城にはおるのでな」

「構わない。むしろ折られてしまったんだ、ある程度の修復はしてもらいたいものだな」

手に持った本体と、折れてしまった剣先をノリ又に渡す。

「ううむ……間近で見ると凄いい折れ方じゃわい。こりゃ完全修復は難しくないかのう」

「できないならできないで何とかするさ。それまで代えの剣でも貸してくれないか？」

「これを使え！」

オルテンシアから一刀が投げ渡される。見るとオルテンシアやバゼットが備えているような、エクストリウム製の剣だ。二人の騎士とは違うところが、レイピアのような細身の剣でなく、しっかりと剛剣であるところだ。

「レイピアではお前の力を受けきれぬだろう。その剣はエクストリウムをふんだんに使った特別な一刀だ。……最も、それでもお前の力を受け止めるには役不足だろうがな」

刀身は更に淡く青く輝き、オルテンシアの言う通りに特別製である事が伺える。

「ティード、いずれにしてもお前がここにいなければならぬ理由ができた。お前の部屋は今まで通りの場所を使ってくれて構わぬ。…あとはもう少しだけ姫の相手をしてくれぬか」

「何度も言うが急いでくれ。俺はいつまでも留まっていられる程に時間はないんだ」

「わかっておるわかっておる。ではホーク、イーグル、ティードのここにいる期間内での面倒をよろしく頼むぞ？」

二人は小気味よく、

「はっ！」

というと、ノリヌが訓練場から出るまで頭を下げ続けていた。

「……さて、聞かせてもらいたいものだな。お前が何者なのかを」

突然そう言い出したのは、今まで無言のまま状況を傍観していた鷲の騎士バゼットだ。

「それは俺自身も聞こうと思って聞いた。お前達は何者だ、明らかに人間ではない……だが俺と完全に近い存在でもない」

「バゼット、人に聞くからにはまず自分からだ。俺達のご推察通り、普通の人間ヒューマンではない」

バゼットを抑え、代わりにオルテンシアが説明を進めていく。

「俺達は複合生命体キメラ。城国の生命実験の果てに造られてしまった哀れな生命体の一つさ。まあ、勘の鋭いお前の事ならあらかたの創造はつくだろうが、俺は人間と鷹、バゼットは人間と鷲との複合により生まれてきた生命だ。この世には知られてはいないだけで、多くのキメラが地上に住んでいる……いや住まざるをえなかったんだ。俺達、地上に住むキメラは実験失敗（ダスト オブ ライフ）の烙印を押され、文字通りゴミのように捨てられたのだからな」

（複合生命体キメラ……まだ城国にいた頃に聞いた事はあった。だが実在していたとはな、その実験の果てがアルティロイド（おれたち）ってわけか……なるほどな）

「さて、俺達の事は話した、お前の事を教えてもらおうか？」
どこまで話すべきか、当初は迷っていたがオルテンシアの話の内容で、ほぼ全ての事を話して良い事を確信していた。

「俺は、お前達と一緒に。城国に造られた生命だ。ただ……複合生命体の領域を超えた存在だがな」

その答えに、興味を示したのは、バゼットだった。

「ほう、キメラを超えた存在……それは一体？」

「複合生命体を超えた生命の名は……究極の生命体。アルティロイド俺は生まれてすぐにアルティロイドに変えられた」

「アルティロイド……!？」

その聞きなれない名に、二人の騎士は同時に驚きの表情を見せた。当然だろう、如何にこの二人がティータと同じく元城国の者だったとしても、アルティロイドの存在は限られた者しか知らぬ、トップシークレットなのだ。不本意ながらも失敗の烙印を押されてしまった二人の騎士が、その存在を知らなくても無理はない話だろう。

「城国め、一体どれだけの生命を弄べば気が済むのだ!」

「全くだな……世界を統制するべく城が、やっている事はただの独裁だ」

二人は怒りを前面に押し出していた。無理もないだろう、その城国に自分自身の生命を弄くられたのだ。人間としての本能も、動物としての本能も、城国への怒りを高めているのだろう。

「文句を言ってもしょうがない。この時代を終わらせたいというのなら、今は戦う事でしか道は開けないのだからな」

だからこそその支配開放大戦。敗北に終わったかもしれない、ただ死者や負傷者を出してしまっただけなのかもしれない。しかし決して意味がないわけではないのだ。戦う事によって地上に住まう人々の、いや生きる者達の意思の強さを見せ付ける必要があるのだ。

この日だけで色々な事がわかり、進展したのかもしれない。

存在すら表に出ていない複合生命体キメラの存在、折れたヴェルデフレイン。魂の強さが影響する武器、思念武装。大方知りえなか

った事が明るみに出てきたのだ。

そして数々の思惑を時という名の流れは運び、次の日の朝を向かえる。

「ふわああ……ノリ又様、これはどう頑張っても難しいですよ……」

「やはりか。オリハルコンの剣の復元……まさかこの材質が、ここまで難しいものだとはな……。どうにかならんものなのか？」

「ふうむ……この剣を元の形に戻すのは難しい、いや無理ですが……元通りは難しいですが、いつその事、剣を強化してみるのはどうでしょうか？」

学者の意外な言葉。剣を元に復元するのではなく、強化し新たな姿へと変えてしまう。

「何か考えがあるのかね？」

「ええ……あくまで理想論かもしれませんが、このデザートウ砂漠地帯にある、伝説の焰竜の骨を使ってみようかと思っています」

「何とつ、焰竜の骨を！？ 一体どうやって……」

「はい、このオリハルコンという材質は、放っておいても自然治癒により回復します。なので事実上、時間をかければ元の姿に復元する事は可能なはずなのです」

学者がノリ又を見ると、意味不明を明らかに見せている。そんな苦しんでいるノリ又を尻目に、学者は話を続けてみせた。

「ですが、これだけのダメージを負った刀身が、完全に回復しきるには恐らく十年の歳月は必要と見るべきでしょうね。だからです、焰竜の骨を骨組みにし、オリハルコンの自然治癒の手助けをするのです」

「ほう、そんな事が……？」

「計算上では可能です。ですが、オリハルコンという神が与えたとされる伝説の材質、そして伝説の焰竜の骨を使う事。あまりにも不確定要素が高すぎますので、どうなるかは保証ができませんが……。ですが仮にも計算通りに組みあがれば、焰竜の骨内部で自然発火し

ている効能が、オリハルコンの材質とマッチし、今以上の攻撃力を備える事ができるでしょうね」

「むむむ……つまりは元々のオリハルコンの切れ味に、高熱剣ヒートソードによる攻撃力の増加……という事かの？」

学者は笑顔で、

「ご名答です！」

と、答える。

そして高熱剣にある材質の劣化は、オリハルコンの自然治癒により、事実上無いとみても良い。但し、これらはいくまでも学者の見解であり、事実はどうなるかはわからないのが答えだ。焔竜の高温がオリハルコンに勝ってしまうえば、溶解し今以上に壊れた姿となって取り返しのつかない事になるだろう。

「まあ、良い意見じゃとは思いますが、まずは持ち主に聞いてみん事はの」

「そうですね、良い返事と、良い結果を信じますよ」

ここに留まる事になったティータの、当面の目的は折れてしまったヴェルデフレインの復元と、命の騎士ティアナの搜索となった。

5 夢の桃源郷

その日、ティーダは二つの夢を見た。

「……兄さん、ティーダ兄さん！」

意識が完全に覚醒したのは、青い髪の少女の呼びかけによるものだ。

「デュア……リス……!?!」

「寝ぼけてるの、兄貴は？」

ふと声がかかる方を見ると、幼きラティオの姿が確認できる。いや、ラティオだけではない。デュアリスもジュークも、幼き『あの頃』の姿をしていた。

これはティーダの真相心理の奥にある、一つの真実という記憶だ。

「ティーダ兄さん、私と遊びましょ」

「いいや、兄貴と遊ぶのは俺さ！」

向こうで無邪気にティーダを取り合う、幼いデュアリスとラティオ。

困惑しながら二人を見つめっていると、背後からジュークが話しかけてくる。

「驚いたかい、ティーダ？ ここは紛れもない君の記憶の中、君の

後悔の世界だ」

「……ああ、驚いている、夢の中とはいえ、お前は変わらずに冷静だという事に」

ジュークは軽い微笑をすると、言葉を続けた。

「この世界はティーダのものだ。今、心に抱いている念を晴らすのなら、今のうちだ。ここにはティーダの邪魔をする奴は、誰一人としていないんだ」

その言葉を聞き、再びティーダはデュアリスとラティオを見つめる。するとティーダの表情から、静かに笑みが溢れたのだ。

「……つぶ、おいおい、二人共、俺はちゃんとここにいるぞ、今日

は三人で遊ぼう」

「やったあ、兄貴と遊べるっ、やったあ！」

「えへへ、ティーダ兄さんと遊べる、嬉しいな！……でも、ジューク兄さんは？」

「ん、ああ、そうだな、ジュークも一緒に、四人で遊ぼうな」

手招きして、ジュークを呼ぶ。そんなティーダを見て、デュアリスとラティオは、真似をして手招きしている。

「んっ！？ ふっ……やれやれ」

そんな三人に呼ばれたジュークも、優しく笑いながら輪の中へと入っていく。

四人の子供達は、当然年齢も違えば、実の兄弟ではない。だが端から見れば、誰もがこう言っただろう。

『実の兄弟よりも、中の良い義兄弟』

と。事実、四人の顔からは笑いが絶えなかった。

少なからず、この四人が数年後に運命の悪戯からか、命を賭けた戦いに赴くとは、誰もが思わなかったはずだ。

とある、一部を除いて。

「こら、デュアリス。あまり走ると危ないぞ！」

「えへへ、だつてティーダ兄さんと遊んでるんだもんっ！」

心底、楽しそうに走り回るデュアリス。

「ずるいよ……姉ちゃんばかり、遊んでさ……」

「よし、ラティオ来い！ 相手になってやるぞ！」

「本当！？ よおし！」

ティーダの呼びかけに、これまた心底嬉しそうに、格闘ごっこを仕掛けるラティオ。

そして、二人の相手をしているティーダを、見守るようにジュークが見ていた。

「いたっ、……う、うわあああああん！」

「どうしたデュアリス？ 転んだのか、痛いのはどこだ？」

「うっ、うっ、……こっ」

「ああ、膝を擦りむいたんだな。大丈夫だ　それっ！」

勢い良く、ティードはデュアリスをおんぶし、立ち上がった。

「に、兄さん……」

「良いなあ、姉ちゃんだけ」

「あははは、ラティオは我慢しろよ、男の子だろう？　デュアリスも泣かない、こうすれば痛くないだろ？」

このような感じで、四人で遊び、そして長き時の　一つの終わりがやってくる。

デュアリスとラティオは、すっかり遊び疲れて眠ってしまい、そこにはティードとジュークだけがいる。

「　どうだい、久々に戦いから離れ、僕達にとっての平和だった頃を体感した気分は？」

「……最高だった。できれば次は、本当にこうしたいとも思ったよ……　それが、もう叶わない願いだとしても」

「そうだね……　当たり前のように日々を過ごしてきた。もう、あの頃には戻れないけど……　ティードにはまだ光があるじゃないか」

「光……？　待て、ジューク、それは一体！？」

ジュークは、指を指し示すと、徐々にその姿を消していった。

その指し示された方に振り向くと、そこには新しい世界が構築されていた。

「　ここは、パーシオン！？」

見慣れた風景だ。

地上に下りたティードには、家とも呼べるぐらいの存在になった、レジスタンスベースパーシオン。

見慣れた場所には、見慣れた人々が暮らしていた。

「みんな……　無事だったのか？」

「　ティード！」

後ろから、自分を呼ぶ声に気付く。その声は何故かとても懐かしく、どこか心休まる暖かさを秘めている。

振り向いた先にいたのは、これも見慣れた優しい桃色な髪をなびかせたティオの姿がある。相変わらずトレードマークの、赤いゴム紐で馬の尻尾に束ね、いつしかプレゼントした白いワセシアの花が彩られている。

「おかえりなさい、ティーダ」

柔らかく話しかけてくるティオ。

「本当に、お前なのか……？」

「そうだよ……。心配したんだよ、私……。心配でしよがなかつたんだから……！」

その声は、突然泣き崩れてしまう。

「すまない、な」

「うん、良いの……。無事に帰ってきてくれた、それだけで良いの。」

ティーダ、私ね、貴方に伝えたい事があるの」

「伝えたい事？ 何だよ、言ってみてくれ」

「うん。私、私ね……」

そして長い間の後に、ティオは一つの言葉を、ティーダに伝えた。

「私 ティーダの事が好きです」

「えっ……！？」

「ティーダの事が好き。何よりも誰よりも、貴方の事が好きです。」

……。ティーダは、ティーダはどうですか？」

「ティオ……？」

「私の気持ちを……。受けて……。くれますか？」

その問いに、ティーダは答える事ができなかった。

「俺は……」

「……。ふう、さよならだね、ティーダ」

その言葉を皮切りに、ティーダの意識は急速に覚醒へ向かっていった。

「ッティオ……！」

目覚めた先は、半ば見慣れてきた天井に、部屋があった。

めずらしく息を荒げ、身体中に微量な汗をかいている。それを一度見ていたフィーネ姫は、心配した顔を見せながら、ティードを氣遣う。

「大丈夫ですか、ティード？ 何だか突然うなされたりして……あまり、良い夢を見なかったのですか？」

「……いや、何でもない」

「……もし、何かあったら、遠慮なく言ってくださいね」

姫の氣遣いに、素っ気ない返事で返すと、それっきり言葉をかわす事なく、姫は部屋から出ていく。

「……はあ、寢覚めの悪い夢を見てしまったものだな」

自分の顔を覆うように、手を合わせると、思わずそんな事を口にしてしまう。

しばらくそのまま沈黙していると、扉を叩く音が、再びティードを現実に取り戻す。

「ティードよ、起きているか？」

声の主は、鷹の騎士オルテンシアだ。

「ああ、今行く」

「ノリヌ様がお呼びだ。急げよ」

恐らくはヴェルデフレインの事だろう。修復の為に、剣を預けてから、数十日が経とうとしていた。ティードからすれば、あまりにも『やっ』すぎる事だ。

オルテンシアに連れられ来た場所は、名目的には研究室。ただ研究室と呼ぶには、あまりにお粗末な設備をしている。

「おお、来たか」

「ノリヌ……まだ直せないのか？ 何度も言うが、俺は急い」

「わかつとる、わかつとるわい！ そこでな、結論から言わせてもらうとな……」

ノリヌは、学者との話し合いの結果を、要点だけ述べ簡潔に説明してみた。

「なるほど……焔竜の骨を使いますか……」

「ヴェルデフレインの強化策か。俺は構わない話だが、本当にそれは成功するのか？」

ティードの疑問に、当初から懸念していた事が、浮き彫りとなる。「それは……わからんじや。全てが未知の領域、確率は九割の成功と一割の失敗か、はたまた九割の失敗と一割の成功か……。だが成功すれば、防御力の低下はあるが、攻撃力は飛躍的に上がるといふ、見解もされておるんじや」

「まさに、やってみなければわからない、というものか。良いだろう、それしか手段が無いというのなら、試す価値は充分にある」
「よし、ティードの許可も下りた！ ならば早速出発しようではないか」

何故か一番乗り気なノリヌ。メンバーはティード、オルテンシア、ノリヌの三人となる。バゼットは、戦力を割きすぎるわけにはいかないとして、エスクード城に残る事にした。

と、その時、
「待つてください！」

突然の叫び声といつても良い声が、その場に響いた。誰もがそこに目をやると、やや息を荒くした、フィーネ姫が立っていた。

「姫様、如何なされたのです？」

近場にいたバゼットは、支えるように近付いていく。

「私も、連れて行ってください！」

「姫っ、なりませぬぞ！ 外にはどんな危険が待っているか、わかりもしないのです。もしも姫に死なれては……」

するとフィーネ姫は、ノリヌの言葉を遮るように手をかざすと、そこから鍵のようなものを見せた。

「話は聞かせていただきました。折れた剣の復元の為に、焔竜の所へ行くのでしょうか？ 残念ですが、あの場所は城国兵の侵入を防ぐ為に、我がエスクードが防御壁を張っています。この鍵は、そこへ入る為のものです、入りたければ……どうか私を連れて行ってくだ

「さい！」

「な、なんと……姫様」

愕然とするノリ又とは対称的に、ティードとオルテンシアは冷静だった。二人ならば、フィーネ姫から鍵だけを奪う事は容易かった。しかしそれをしないのは、半ばフィーネ姫の同伴に、賛同こそしないものの、別に構わないといった姿勢の表れだった。

最も、城に仕えるオルテンシアが、姫の危険を承知するのはあまり好ましくない事だが、そういった経験を体験してこそ、一人前の大人に、ひいては一人前の王族になれるという思いもあったのだ。

「良いではないですか、ノリ又様。警護にはこの鷹の騎士オルテンシアもおりますゆえ」

「む、むう……」

「それにティードもいます。どんな相手が来ようと、並の相手など恐れるに足りないでしょうな」

「むう……わかった。みんな揃って、年寄りに迷惑をかけおるわい」
最終的には、ティード、オルテンシア、ノリ又、そしてフィーネ姫を入れた四人で、焰竜の墓場へと行く事になった。

伝説の焰竜の墓場は、エスクード城より東南に約三日程、歩いた場所にあるという。フィーネ姫も加わった事により、最低限の準備を行う為、出発は翌日へと変更される。

6 焰竜の墓場（前書き）

名前 ティーダ
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 17
階級 火の騎士
戦闘 2900 / 業火 3200
装備
Eエクストリウムソード マークXX
Eティータ専用戦闘防護服
E火の聖獣エンドラ

名前 オルテンシア
種族 キメラ
性別 男
年齢 24
階級 鷹の騎士
戦闘 1800
装備
Eエクストリウムレイピア マークX
E思念武装

6 焰竜の墓場

「 姫様、これを」

出発の朝、ノリ又は女性でも扱えるような、小型の短剣を渡す。

「これは？」

「優秀な騎士もおりますゆえ、その心配は無用と思っておりますが、万が一に備えてでございますじゃ」

フィーネ姫は、渡された短剣を見つめ、決意の眼差しを以てノリ又を見る。

「自分の身は……自分で守れ、という事ですね？」

その回答に、ノリ又も力強く首を縦に振り、返答する。

「女性といえども、こんな時代です。自身の身の守り方の一つぐらいは、覚えておくべきですぞ」

「はい、そうですね」

フィーネ姫とノリ又が話している一方、ティータとオルテンシアは、近場に驚異がないか確認に向かっていた。

(このシチュエーション…… 思い出すな、シュネリ湖の事を)

いつかの出来事。ソリディア、カルマン、ティオの三人と共に、陣形を組ながらシュネリ湖を目指した。

「 ティータ」

オルテンシアの呼び掛けに、ふと現実に戻された。

だがそれで良かったのかもしれない。もしも、このままシュネリ湖の事を思い出していたら、デュアリスの事を考えてしまっていただろう。

「どうした、ボーっとして？」

「ああ、いや、何でもない」

「まあいい、ノリ又様から召集命令が見えた。警戒体制を解除し、一度戻ろう」

適当に返事をして、エスクード城へと戻っていく。ここまで城国

の兵士は、一人たりとも確認できない。それどころか現れる気配すらないのだ。

支配解放大戦の影響か、あるいは勝ったのか、今のティードには、その全てを知る事ができなかったのだ。

「戻ってきたな、ホーク、ティード。お前たち二人の働きに期待しておるぞ」

オルテンシアだけが、

「はっ！」

と、答えてみせるが、ティードは特に何も言わなかった。

「宜しく願いしますね？ ティード」

「あ、ああ……」

見かねてフィーネ姫も頼むが、ティードの返事はどこが気の抜けたものだった。

その理由は、昨日見た夢が少なからず影響していたのだ。

「では、行くでしょう！」

送り出すのは、鷲の騎士バゼットののみ。

ティード自身、前々から不思議に思っていた事だが、一国の姫が旅に出るというのに、見送りに一人だけという事に気にかかっていたのだ。仮にも極秘に進めていたにしても、数人の人が来ても良いのではないか。

「不思議か？」

相当に気になる顔をしていたのだろう。内心を見抜いたかのように、オルテンシアが話しかけてきた。

「まあな、余所者の俺が気にするべきではないが、こんな事は普通、あるべきなのか……」

「一般的な普通、と言われれば、これは無いな。だがエスクード城の普通にすれば、当たり前前の事なのだ。我がエスクードも、かつては何千人も住む大国だったらしい。しかし今では度重なる城国からの圧制により、事実上の壊滅。今では市民を含めて数十人が住むに留まっている」

「あの大きな城で数十人？ 道理で……全く人を見ないわけだな」
ティードは、ここに運ばれてきた時の事を思い出していた。部屋
の窓から、広場のような所にいた人々、あれでほぼ全てならと、納
得してしまふ。

「王族というが……今残っているのもフィーネ姫のみ。フィーネ姫
の親であるエスクード王は、苦心からか王妃様と共に自殺を……せ
めて姫様だけには幸せをと思ったが、ティードの戦場での死を確認
全くお手上げの状態だ……」

「そうだな、どこもそうだ」

オルテンシアとの会話によりわかった、エスクード城の内情。両
親の自殺、恋人の戦死、徐々に崩壊していく母国。わずか十代の少
女が支えるには、重すぎる重圧だ。

気づかれないように、フィーネを見やるティード。そんな少女の
顔は、ノリ又との会話に弾んでいて笑顔を見せている。とても重圧
など感じてはいなさそうにも見えるが、あるいは外に出すまいと懸
命に耐えているのだろうか。いずれにしても、人の心に同情心だけ
で易々と踏み込むべきではない。

だがティードは考えてしまった。この少女は自分がここから去る
時に、一体どうするのだろうか、と。

ここから離れる時、それは間違いなくフィーネに『エスクードの
ティード』の死亡を伝える時だ。彼女はその事実を知った時、その
身にはあまりにも大きすぎる現実を受けきる事はできるのだろうか。
「フィーネ様が気になるか？」

どうも鋭すぎる勘を持つオルテンシアに、ティードはわざと聞こ
えるように舌打ちをする。オルテンシアも大人な対応を見せ、微笑
しながらその舌打ちを流した。

「気になったわけではない。……ただ俺がここを離れ、真実を告げ
られた時、あいつは一体どうするんだろう、とな」

「それを気になるというのだが、まあいい。あの方は強い心の持ち
主だ、間違ってもご両親の末路を辿る事はしないだろう。仮にも、

そうなるうとするのならば、それを阻止する為に我々もいるのだ」
「身内からの期待は、何よりも身を滅ぼす最大のキツカケになるぞ？」

「そうだな、そうかもしれない……。だが、まだ幼いとも言える姫様に、例え忌み嫌われようと……誤った方向には進まずまい、それが私達エスクードの騎士の誓いでもある」

それ以上は、ティードも何も言わなかった。

しばらく歩いていると、オルテンシアが後衛につき進行するようになる。『あの時』の実質的なパートナーはソリディアだった。その実力に不安も不満も無かったが、今のパートナーは更に安心できていた。複合生命体キメラである鷹の騎士オルテンシア。その実力に文句はない。

「ティード、記憶喪失は治りましたか？」

辺りの気配に集中していると、突然フィーネ姫が話しかけてくる。

「まあ、な」

曖昧な返事をする。はい、とも、いいえ、とも言えなかったからだ。どちらにしても、この少女を悲しませる結果となる。そしてそのタイミングは今ではない。

「そうですか……でも、少しは回復しているのがわかりますか？」

「……ああ」

「そうですか、良かったです。……ごめんなさい」

「どうして謝る？」

「だって、私ったら、ちゃんとティードの事を看てあげられなくて……本当にごめんなさい。辛いのはティードなのに」

落ち込んだ表情を見せるが、決して涙は見せなかった。それがこの少女の、皮一枚の強さなのだろうか。いずれにしても耐え続けられるものではない。

「あまり無理はするな」

「えっ……!?!」

「お前は一国の姫なのだろう。確かに国民の為に耐える事も必要か

もしれないが、それでも無理はするな。いつしかそれが耐えられなくなつた時、いや決してそんな時を迎えてはいけないんだ」

「ティード……はい、わかりました」

「わかつたら、とつと後ろに下がれ、敵はいつどこから来るかわからない」

フィーネは丁寧了解の意を示すと、言われた通りに後ろに下がりに、ノリ又と共に歩く。

（来るかもわからない『その時』を信じて耐えて待つ、か。……女はいつの時代も強いというが、信じたくなくなった）

砂漠を歩き続け、一日目。特に何事もなく、その日が終わって行く。

見張りはティードとオルテンシアが交互に行うという事で、フィーネとノリ又は深い安息の闇へと入っていった。

「じゃあ、頼むぞ？」

「……ああ、三時間後に起こす」

先に休憩を取るオルテンシアと合図を取り、ティードは一人、星空が瞬く空を眺めていた。

（星の輝きは命の光と言うが、この何千、何万にも及ぶ生命が、この戦いの犠牲になり死んでいったのだらうな……。俺も、一体いくつの命を星に変えたのだらうか？）

自問自答しながら、その星空を見る。美しく輝くその光は、殺した者に対する怨念の光なのだらうか。

「デュアリス……お前も、その星の中に入れたのか？」

そんな言葉を星空に向かって問いかけてみるが、勿論、返事が返ってくる事はない。ただ、一際大きく輝く星の光が、一人の戦士を照らすように燃え盛つたのかもしれない。

二日目の朝。まだ太陽が出ていない内から歩き出す。

当然、敵の目が薄いだらう時間を狙い、そしてなるべく早く焰竜の骨を持ち帰り、ヴェルデフレインの修復へ当てたかった。

「ティーダ！ 気持ちはわかるが、急ぎすぎだ」

振り向くとフィーネとノリ又は、暑さに体力を奪われて遙か後方を歩いている。

それを無言で見ていると、オルテンシアが言葉をかける。

「暑さでイライラしているのか、あるいはお前の故郷への焦りか、何にしても今は着実に進むしかない。もう少し落ち着いていこう」

「……ああ、すまない」

ティーダを説得し終わると、オルテンシアは正に鷹の如く飛翔し、二人を護衛しながら歩いてくる。

確かに焦りと暑さで苛立っていたのかもしれないと、ティーダは思う。それに砂漠での全く変わらない風景も、更に苛立ちを加速させていたのだろう。

「ごめんなさいね、ティーダ。私達が足手まといなばかりに……」

「ふはあ、ふはあ、年寄りにはきついわい！」

「いや、大丈夫だ。先を急ごう」

二日目も何もなく終わっていく。二人の疲労からか、初日よりも歩行距離が少ない事は確かだった。

やはり炎天下による体力の消耗度は著しかった。予定では三日で到着だったが、このままでは四日はかかってしまうだろう。

「仕方がない事だ、この暑さではな。あまり無理をすると日射病になってしまっし、下手をすると死んでしまっし」

「無理もないか、俺達でもこの暑さは堪える」

事実、暑さは日に日に増しているようにも感じられる。暑さによる体力の消耗から、ティーダでさえも思わず息を荒くする。

「さすがのアルティロイドさんも、自然の脅威には勝てないようだな？」

「そうみたいだな……所詮は人が造ったもの、自然や神のレベルのものには勝てないさ」

「では願いたいものだな……」

ティーダが「何が？」といった顔をすると、

「王がこの先、自然や神に匹敵するものを造りださないように、だ」と、答えた。

自然や神に匹敵するもの。いくら莫大な技術力があっても、人間がこの二つに勝つ事は不可能だろう。

「まあ、そんなに考えこむな。あくまで例え話だよ」

オルテンシアは、すかさずフォローする。

唯一、気にすべき事は、進行がやや遅れているという程度である。この日も、ティータとオルテンシアが交互に見張りをしていく。

そしてティータの見張り時、眠っていたはずのフィーネが起きて、ティータに話しかける。

「ティータ」

「何だ、眠れないのか？」

「ちよつと……嫌な夢を見ましたから」

「嫌な夢？」

フィーネはこくりと頷くと、ゆっくりと夢の内容を話始めた。

「ティータが 死んでしまった夢」

その言葉に、一瞬だが体を強張らせた。

「夢の中で、ティータが死んでしまって、私は……泣いて、貴方の名前を呼び続けて……でも貴方は目を覚ましてくれなくて。こんなのは嘘なんだって、全てを否定した瞬間に目が覚めて、その視線の先に貴方がいた」

「俺は 死なない」

それは、どつちのティータの言葉なのだろうか。

「では、私も頑張れます。貴方がいてくれる限り、私は頑張りが続けます」

「……もう、寝ておけ」

「……はい」

ティータは思つようになった。半端なりに、この少女の内情を知ってしまった。もう赤の他人として、この少女の前から去る事はできないだろう。

だが、考えたところでどうしようもない現実がある。下手に手を出しても出さなくても、これは簡単な問題ではない。

「……もう一つあったか、女はめんどくさい……」

この日も、空いっぱいに輝く星に向かって愚痴を溢した。そんな愚痴を一言呟くと、頭いっぱいにティオの姿が浮かんでくる。そして振り回される日常を思い出す。

「やめようかな……帰るの」

また一つの愚痴を溢した。

そして続く三日目を過ぎ、エスクード城を出てから四日目の昼。ついに目的の場所に近づいてきていた。

「ここが焰竜の墓場か……噂に名高いが、実際にお目にかかるのは初めてだな」

珍しくオルテンシアが、目を輝かせている。だが確かにここは、そんな神秘的な雰囲気醸し出している。正に焰竜の絶対領域。

「コホッ、コホッ……!!」

「大丈夫ですか、フィーネ姫？」

「ええ、ここに来た途端、ちよつと喉が乾いてしまったらしくて、コホッ……」

確かに焰竜の墓場の乾燥率は異常だ。水気が全く無いといっても過言ではない。

「恐らくは骨の中で自然発火しているという、焰竜の骨の影響だろうな。燃え盛る火炎が、この周辺の水分を蒸発させてしまっただろう」

「とんでもないものだ。竜なんてにわかには信じられなかったが、この有り様を見て信じたくなった」

「そうだな……死してなお、大地にダメージを与える焰竜。こいつが生きていなくて良かったと思うぜ。こんなのが相手では、命がいくつあっても足りんからな」

ティータとオルテンシアが話している間に、焰竜が封印された建

物の鍵を開けるフィーネ。

封印しているだけあり、壁の材質は何か特殊なものでできており、大昔に存在したとされる呪法が使われている。

そして鍵を開け終わると、扉を開けようとするフィーネを、オルテンシアが急いで静止する。

「どうしたのじゃ、ホーク？」

「この扉は危険です、下がっててください。私が開けます」

フィーネとノリヌを後ろに下げると、ゆっくりと扉を開けていく。すると建物内部に蓄積されていた熱気のせいだろうか、扉の前が一瞬にして炎の渦に覆われる。

「ひええ、あれは危険じゃわい！」

「止めてくれなければ、私はあの炎に焼かれていた……ありがとう、オルテンシア」

「姫を御守りするのが我が使命。これぐらいの事、当然です。

さて、ティーダ。そろそろ大丈夫だろう、焰竜の骨を！」

オルテンシアに支えられた扉を潜り、ティーダは建物内部へ侵入する。中は熱く、並の人間では、この熱さで蒸発してしまうだろう。

「誰も中に入るな！ 入ったら死ぬぞ」

それだけ言い、辺りを見回すと、まるで山のようにそびえ立つ、焰竜の骸骨があった。

「これが、焰竜……！」

7 三百回の願い事

焰竜の骸骨。それは生きていたのではないかと、錯覚してしまう程の威圧感を放っている。

「なるほど……こいつの骨を組み込むのか。確かにどうなるかなんて、既存の計算でできる事じゃないな」

しばらく眺めていたが、思わず目を奪われてしまう。

「ティード！ なるべく急いでくれっ、この地帯の乾燥は異常だ！」

オルテンシアの急かす声が聞こえる。恐らくは、フィーネとノリ又を案じての事だろう。

「ああ、わかつている！ ……さて、さっさと済ませるか」

渡されていたエクストリウム剣を、鞘から抜く。

思えば初めて持つてみるが、改めて大した剣だと、ティードは納得する。

「では、腕の一本でもいただいでてくか」

ティードが焰竜の腕を斬ろうとした瞬間、不思議な光が包み込み、焰竜の眼前へと移動させた。

よく見ると、焰竜の眼は淡く炎が煌めくように、赤く輝いていた。

「我に何の用だ？ 人の子よ」

「なっ！？」

目の前の骸は、ティードに話しかけてきた。完全に死骸だと思っていた為、さすがに驚きを隠せない。

「我に何の用だ？ 人の子よ」

再度、同じ問いかけ。

「お前の骨を貰いたい」

ティードの要求に、焰竜の眼の奥に輝く光が、妖しく力強くなる。

「我の骨。我の骨は、人間が使うには過ぎた代物だ。一体、何用得
我の骨を求める？」

「剣の修復の為、じゃ駄目か」

『ほう剣の。人の子よ、剣の修復をしてどうするつもりか。剣は人が産み出した凶器、例え正しき理由があるうと、そのまごうことなき真実は変わらぬ。人の子、剣で何を成す?』

即答はできなかつた。何秒、あるいは何分、ティーダはずっと考えていたが、焰竜の問いに対する答えは出なかつたのだ。

「わからない。俺にとって、剣は物心ついた時から、常に共にしていたものだ」

この言葉に、焰竜の眼は更に妖しく輝きだす。まるで目の前の存在を、定めているように。

『人の子よ。どうやら普通とは違うようだ。すまないが、お前の義を見させてもらおう』

すると、今まで骸の眼が輝いていたが、突然すつと消える。代わりにティーダを包む淡い光が輝きを増し、その光は正に焰となりて、ティーダを覆っている。

『これは審判の焰。義に悪を持つ者ならば、その悪と我に関する記憶を抹消する。だが義に正を持つものならば、我が力を授けよう。そのままじつとしていれば良い、じきに終わる』

ティーダは言われた通りにしていた。ただ審判の焰に包まれた時から、謎の心地よさを感じていた。恐らくはティーダに宿る、聖獣エンドラが反応しているのだろう。

『人の子よ……いや、お前は人にして人にあらず。だが稀に見ぬ素晴らしい義を持った者だ。望み通り、我が骨を与えよう』

ティーダを覆う焰が晴れていく。

『何に使うのかは、詳しく詮索はせん。だがお前ならば、正しい方向に力を使えるだろう。……しかし忘れるな、もしも悪しき事に力を使おうものならば、我が内骨の灼熱が、お前の体を燃やしつくすだろう』

その言葉を最後に、焰竜は完全な骸へと姿を変えた。

気がつくくと、ティーダの手には焰竜の骨があつた。ただ手に持つ

ているだけでも、熱さを感じる。

「ティード！」

振り向くと心配が頂点に達した、フィーネが駆け寄って、そのままティードを抱き締めた。

「お、おい!？」

「良かった……無事で……」

どうやらこっちはこっちで、色々あったのだろう。ティードなりの自己解釈をする。

「一体どうしたんだ？ お前が、来るな、と叫んだ後、赤い閃光が

建物内部から漏れた。すぐに確認してみたら、お前の姿は無かった」

「むう……そういえば言い伝えでは、焰竜は試練を与え、その試練に合格した者に、その者が望んだものを与えてくれるらしいんじやが……まさか言い伝えは本当だったのか」

オルテンシアとノリヌが、それぞれの解説をする。だがティードの実体験から、言い伝えは真実だと思ふべきだろう。だがティード

いずれにしても、目的の品である焰竜の骨は、無事に手に入った。後はこれを持ち帰り、折れたヴェルデフレインに組み込むだけだ。

「そっぴゃあ、仮にもヴェルデフレインの復元が成功したら、名前を変えたりせんのか？ 例えばスーパーヴェルデフレインとか？」

ノリヌは本気なのか冗談なのかわからない。

「……するわけがないだろう。何だ、その子供みたいなネーミングセンスは」

「せっかくパワーアップするんじやから、スーパーとかハイパーとかつけないじやろ？」

「つけるかつ！ ヴェルデフレインはヴェルデフレインだ。それ以上でも、それ以下でもない」

「そうかあ、残念じゃのう……」

渋々といった感じで引き上げるノリヌ。それを見て、フィーネはくすくすと笑っていた。

「ふっふっふ、ノリヌ様は名前の付けたがりだね。かくいうエクス

トリウムのレイピアも、ノリ又様のネーミングだ」

オルテンシアもそう言うと、にやつきながらもノリ又とフィーネを追っていく。

「……ふっ、やれやれだな」

馬鹿馬鹿しくも笑い、ティータも追っていく。

帰り道は元気を取り戻した為か、行き道よりも早い予定通りの三日間にて、エスクード城に到着した。

だがあまりに順調すぎたのが不気味だった。行き道帰り道、共に城国兵士に出会わなかった。それはそれで良い事なのだが、ティータはそれに対する世界の情勢が気になっていた。

焰竜の骨を持ち帰ったものの、完成復元までは、どれだけの時間を使うかわからないという事だった。

ただわかった良い事は、ヴェルデフレインと焰竜の骨は非常に相性が良く、復元に関しては可能だという結果になった。

「そういえば記憶喪失はどうですか？」

考え事をしていたティータに、そう投げ掛けたのはフィーネだ。

その表情は、心の底から案じてくれているが為に、曖昧な返答が利かなくなってきた。

「大分、良くなって……いるとは、思う」

「まあ、そうですね。お早い回復で、ティータは昔からそうでしたものね！」

エスクードのティータを、ティータが知らないからこそ、墓穴を掘ってしまう事もある。

「ティータ、覚えていますか？」

「何を……？」

「戦争に行く前に、貴方が私にくれたもの」

「……いや、わからないな」

「わからない、ですか。そっか、そうだよな」

悲しむのではなく、どこか怒った様子で部屋から出ていく。そんな素振りを、ティーダも黙って見ている事しかできない。

フィーネ姫が出ていってから、すぐにオルテンシアとバゼットが入ってくる。

「悪いとは思ったが、聞いてしまったぞ、ティーダ」

「記憶が無いというのは、根本的に難しい話だな。ここで暮らしていたティーダが、一体どんな奴で、あの姫さんとどんなやりとりをしていたのか、それが全くわからないんだから、対応のしようがない」

オルテンシアの半ばからかい口調の言葉に、やや悪態をつきながら返事をする。

「それで……あいつにあげた物って何だ？」

その問いには、バゼットが答えた。

「物ではない。ティーダがフィーネ姫様に差し上げたものは、生涯の愛を誓う口づけだ」

「ぶっ……!？」

「はっはっは、二人は大層愛し合っていてな、キスもティーダから迫ったとかなんとか」

「オルテンシア。姫様の大事なお話であるぞ。少し控えなさい」

二人が話している間に、ティーダは考えていた。どうすれば何事もなく、この地から去れるか。

部屋でじっとしていてもしょうがないと思い、ティーダはヴェルデフレインの復元状況の確認に行く。

「おお、ティーダ！ 来たのか」

そこには学者や鍛冶職人、そしてやけに楽天的なノリ又の顔があった。

「調子はどうか？」

「ぬっほっほ、順調順調！ 予想以上に進んでおるよ、この調子ならスーパーヴェルデフレインの完成は間近じゃよ」

「そうか。スーパーヴェルデフレインはただけだが、順調なのは良い事だな」

そう良い事なのだ。だが今は素直に喜べない自分がある事に、ティーダ自身も感じていた。

「どうした、嬉しくないのかのお？」

「……いや、嬉しいさ。フィーネの事、どうするつもりだ？」

その問いかけに、馬鹿みたいに明るかったノリヌの顔が一変し、真剣な顔が出てくる。

「だから……この件はわし達で何とかすると、言っておるじゃろうに」

その答えに対する、ティーダの返事は沈黙だった。

「とにかく、今はヴェルデフレインの復元を最優先じゃ。お前はお前で、待ってくれとる人がいるんじやる？ ならばエスクードの内情は二の次じゃ」

「ああ、そうだな」

それつきり言葉をかわす事もなく、ティーダは作業工程を見続ける。程なくすると、誰にも知られる事なく、その場から出ていった。

そのまま宛もなく歩いていくと、フィーネの姿を発見する。

ティーダは、

「おいっ！」

と、呼び掛けると、フィーネもそれに気付き駆け寄ってくる。

「ティーダ、探していました。さっきはごめんなさい。私……辛くあたってしまったから……」

「いや、いいんだ、それは」

「本当にごめんなさいね」

フィーネは申し訳なさそうに、謝り続けた。

「あの……今、お時間はおありですか？」

「あ、ああ、大丈夫だ」

「そうですね、良かったあ」

そう言ったフィーネの顔には、嬉しそうな笑顔が見える。まるで初めてフィーネに会った時のような笑顔だ。

「これから教会へ、お祈りしに行きます。良かったら一緒にどうでしょう?」

教会、と聞いたティータには、あまり良い印象を持てなかった。

それは神に近い神聖な場所。神に愛されていない、アルティロイドのティータが、そこに行くのは、良くは思われないのではないかと。

「遠慮したい」

と、言いかけたが、突然手を握られ言葉が止まる。

俯いていて、表情は読み取れないが、その握った手にはある種の感情の塊のようなものが感じられる。

「……お願い、します!」

「わかった」

結局、教会に行く事を受けるティータ。その教会は、エスクード城の内部にあるらしく、ものの数秒でたどり着く。

神をイメージしているのだろう。やや廃れてしまっただけはいるが、どこか神々しさが感じられる大扉。その扉をくぐると、内装には十字架が一つという、至ってシンプルすぎるものだった。机も椅子も無く、唯一は十字架の少し上に、小さな窓がある程度のものだ。

「殺風景な所だな」

言ってから失言だったと気付く。

「ええ、でも私にとっては、とても大切な場所」

あまり気にはしていないようだ。ふと見るとフィーネは十字架に向かい、祈りを捧げていた。

「何を、祈っているんだ?」

「貴方の記憶喪失が治り増すように、って。でもその前は……貴方が無事に帰ってきますように」

「願った程度では、運命は変えられない」

「でも、願わなければ、運命は動きません」

長い沈黙が訪れた。だが沈黙はフィーネの言葉によって破られる。「一日一回、合計三百回。ここで願いを祈り続ければ、その願いは叶う。遠い言い伝えにある、一つの真実です。だって、三百回目の祈りの後、貴方は現れたのだから」

三百回。ティーダの目の前の少女は、欠かす事無く祈り続けたというのだ。そして三百回の祈りと共に、フィーネに出会った。

自分と瓜二つという、エスクードのティーダ。そして三百回の祈り。全てが現実にしては出来すぎた、偶然に奇跡が重なった出来事だ。

「もしもお前は　俺がお前の知っているティーダではないとしたら、どうする？」

フィーネは「えっ？」という顔をした後、ただ押し黙ってしまふ。そして微弱に聞こえるぐらいの声で、こう答えた。

「そんなはず……ありません、貴方は確かにティーダです」

だが半ば、自分に言い聞かせるような口調だ。

そんな様子を、今度はティーダが黙って見つめていた。

「さあ、もう行きましょ？　早く貴方が良くなる事を祈ります」

教会を出ると、そのままフィーネと別れる。人口が少なくても、やはり一国の姫。何だかんだで色々と忙しいらしい。

（俺に会うまでは奇跡の偶然によるものだとしても、次の願いは叶う事は無いぞ。俺が偽物だとわかった時、お前は一体どうするつもりなんだ、フィーネ？）

らしくもなかった。そう、らしくない。

ティーダは突然、フィーネを最も身近な存在に感じていたのだ。

まるで　愛を誓い合った者のように。

8 数多の中で輝く星

「必ず、帰ってくる」

「嫌です……戦争に行くのでしょうか。絶対に生きていられる保証はありませんっ、だったら……ずっと、側にいてほしい、私を守っていてほしい」

「……お前は、そんなに弱い人間じゃないだろ」

「私はっ……弱いよ……貴方が思っているより、ずっと……。私だけじゃ、エスクードの人達を守るのは無理だよ……」

「……ごめん」

「馬鹿あ！ うっ、ちょ、ちょっと!？」

「必ずだ、必ず生きて帰ってやる。だから三百回だ」

「三百回？」

「エスクード教会の十字架の元で、三百回の祈りを捧げるんだ。知ってるだろ？ 休む事なく、一日一回、三百回。願い続けなければ叶う。

……だから、俺が無事に帰ってくる事を、祈り続けてくれないか？」

「三百回、ね？」

「三百回、だ」

「わかりました。では三百回、私が欠かす事なく頑張ったら、何かご褒美をください」

「ご褒美？ えーと、じゃあ帰ってきたら、真っ先に生涯の愛を誓うキスだ。今のは違う、本気の」

「待って、いますよ」

更に数日が経つ。気付けば急いでいたはずだが、エスクードで暮らしている時間が長くなっている。

「ティータ、起きているか？」

オルテンシアの声。ちなみにノックはしていない。

「ああ、何かあったのか？」

扉を開けると、そこには良い事がある、といった表情で立っている。

「喜べ、ヴェルデフレインの復元が完了したぞ」

「やっとか!」

「時間があるのなら、今すぐ見に行くの良い」

言われずとも、ティータは向かっていた。その後をオルテンシアも付いてくる。

相変わらず研究室というには、お粗末なそこに、復元されたヴェルデフレインがあった。

「来たか」

ちらりと横目で、ティータとオルテンシアを確認するバゼット。

「待たせたのう、これが新ヴェルデフレイン 炎帝じゃ」

「炎帝……ヴェルデフレイン……」

近づき、しっかりと刀身を確認する。折れた箇所は、よく見ても傷一つ無く、完全に復元されている。折れる前のヴェルデフレインそのままである。

唯一、復元前と違う箇所は、折れたところに何かの文字が書かれているぐらいだ。

「その文字が、焰竜の骨を組み込んだら、突然刀身に刻まれたんだよ。ちなみに古代文字で『炎帝』と書かれている」

不思議そうに見ていた為か、学者が説明を入れる。

「骨はどこに?」

「骨は折れた箇所を補強に使っています。なのでヴェルデフレインの中に、既に埋め込まれています。 刀身を触ってみてください」

言われて刀身を触ると、熱いと言えるぐらいの熱を帯びている。

「それが高熱剣の原理です。更に私の見立てでは、戦闘時には、もっと熱が上がるかと」

「それはどういう説明だ?」

「さあ? 大体、そんなものでしょう」

学者の回答に、一瞬その場が凍りついたように感じたが、誰一人として咎めなかった。

そんな不穏な空気を破るべく、ノリ又がつとめて明るく喋り出す。「ごほん……良かったのう、これでお前さんの故郷へ帰れる」

「そうだな……」

嬉しさの反面、やはり気がかりが残っていた。いやそれは最初、ティーダの意思だと思っていた。しかし最近、どうも自分とは違う何かの感情が、それを行っているようにも感じた。

「剣の修復も終わった、明日、明後日には、ここを出るのか？」

オルテンシアが聞く。

「そうだな、もうここに留まる理由も無くなった」

「長いようで短い付き合いじゃったが、寂しくなるの」

別れを意識してしまい、雰囲気は辛気くさくなってしまふ。気のせいかな、ノリ又は若干ながら涙目だ。

「今夜、出発する」

「夜の砂漠は危険じゃぞ？」

「俺なら大丈夫だ」

「そうだな……確かに前なら大丈夫だろう」

ティーダの言葉に、オルテンシアがフォローしてくれる。その言葉で、ノリ又も納得し、今夜出発する事が決まる。

「じゃあ、行くまでに準備をしよう。さてさて忙しい！」

何故かやる気満々のノリ又。そのまま足早に研究室を出ていく。

「それじゃ、俺達も仕事に戻るとするか？」

オルテンシアがバゼットに言葉を投げると、無言で頷き同意する。

「じゃ、ティーダ。また今夜な、勝手に一人で出ていくなよ？」

「ああ、わかった」

二人の騎士とも別れ、ティーダも研究室を出ていく。そこにいた学者にも、挨拶をしようと思いを探したが、既に次の調べものがあるのだろう。慌ただしそうに走り回っている。下手に挨拶をするよりも、そっとしておくのが、この相手に対する最大の気遣いだろう

と、ティーダは判断する。

「さて……長旅になるだろうしな。少し休んでおくか」
いつも使っていた部屋に戻り、ティーダは夜まで眠りについた。

フィーネはノリヌを探していた。妙な胸騒ぎがしたからだ。

大方の、ノリヌの行きそうな場所を探し、後は研究室だけになっていた。

「ノリヌはいます……か……？」

と、問いかけたが、途中から声が小さくなっていく。

「！」

研究室の奥の方から、声が聞こえる。どうやら人はいるようだ。

フィーネは悪いとは思いながらも、普段やらない盗み聞きをしよう。その会話の中に、興味を引く単語があったからだ。

「ティーダが今夜、旅立つ？ 一体何でさ、せつかく帰ってきたのに」

「え、知らなかったの？ 今、ここにいるティーダは別人だよ、本物……というか、エスクードにいたティーダは戦死したんだってさ

……」

「えっ！？ 本当かよ、そ」

その会話を聞いていたフィーネは、頭の中が真っ白になった。

（ティーダが……戦死？ そんな……じゃあ、あの人は誰なの……私の祈りは……神様に通じなかった？）

いてもたってもいられずに、フィーネは走り出した。ティーダ本人に確認を取りたかったからだ。

（そんな……そんなっ……ティーダは、帰ってきたのでは、ないの？）

何がなんだかわからなくなっていた。ただ信じていたものは、それが真実というのならば、あまりにも脆く儂く砕け散ったのだ。

ティーダに貸している部屋の前にたどり着く。

息を整えようと、深呼吸をするが、落ち着いた瞬間に心臓が高な

っている事に気付く。

（会ってどうするの、何を話すの？ 仮に聞いても記憶喪失で片付けられてしまうかもしれない。……でも）

より大きな深呼吸をし、フィーネは扉を開けた。ゆっくりと広がる視界の中で見えたのは、眠るティードの姿だ。

フィーネは内心ほっとしていた。起こさないように近づき、眠るティードを見つめる。

（どこも、変わらない。私の知っているティードそのもの。でも、この人は偽物？ わからない、この人は寸分違わず）

「貴方は……誰なの？」

思わず声が漏れた。

真実の確認方法は、最早一つしか無く、フィーネはノリ又を探し歩く。先程まで捜してもまるで見つからなかったノリ又だが、今回はすぐに見つかる。

「ノリ又ッ！」

フィーネは怒り混じりの声で呼びつける。これは初めての事ではないだろうか。

「おお、姫様。如何なされましたかな？」

「ノリ又、本当の事を教えてください！」

「ほ、本当の事!？」

あまりの剣幕に、ノリ又は目を白黒させる。

「貴方達は一体何を隠しているの！ あの人は誰なの！ ティードは……本当のティードはどうしたのですかっ!？」

「ひ、姫様……」

もう隠し通す事はできない。観念するしかなく、意を決してこれまでの事を全て話す。

「そんな、嘘よ……嘘だと言ってください、ノリ又……」

「申し訳ありませんが……」

ノリ又も、どうしても嘘だとは言えなかった。

「みんな、揃って……私を騙していたんですね……酷い、酷す

ぎます……っ！」

その言葉には、どこか静かで、どこか荒々しさを秘めていた。そしてフィーネは、どこかへと走っていつてしまう。

「姫様！」

呼び止めたが、それを聞く事はない。

ノリ又は深いため息を吐き出した。

「いつか言おうとは決めていたが……あまりにも、あまりにもタイミングが悪いわい……」

色々な感情が入り乱れ、それが外に出てしまうのを堪えるように、唇を噛み、拳を握った。

そして、夜が訪れた。

夜の砂漠は、昼間とはうって変わって寒い。厚着をしなければ、その寒さにやられてしまう。

「これでお別れだな。短い間だったが、やはり寂しいよ」

「君の故郷の、無事を祈っている」

オルテンシアとバゼットが、順番に別れの挨拶をする。

「もしも、次に城国を叩くような事があったなら、呼んでくれよ？
今、城国を倒すという事は、地上に住む我々の未来へ繋がるという事だ。　　そうですね、ノリ又様？」

「ん、あ、そうじゃな」

オルテンシアの言葉に、ノリ又は何とも歯切れの悪い言葉で返す。
「これがダイザードウ砂漠地帯と、その近隣を示した地図だ。まずは北西よりに大きく迂回する事だ。そのまま進むとイカロスの門へ出てしまう」

バゼットが解説している。

「イカロスの門？」

「ああ……。とにかく北西へ迂回し、まずはシュネリ湖という北の大陸へ出るんだ」

「シュネリ湖か、大丈夫だ。一度行った事がある」

「それならば話は早い。後は君の判断に任せるとしよう」

これでバゼットの解説が終了する。まずは北のシユネリ湖を目指す。話の中に出てきた、イカロスの門という言葉が気にかかったが、今は帰郷する事を第一と、ティーダは考える。

「……じゃあ、世話になったな」

ティーダはノリヌを代表として、礼の言葉を出す。

「思えばアンタ達に見つけられなければ、俺はこの砂漠で死んでいたかもしれない」

ノリヌは無言だった。一つの命を助けた事に対する喜びのようなものを感じていたし、逆にその命を救ってしまったばかりに、フイーネに事実を知られてしまっている。

「ノリヌ様……?」

「あ、ああ、気をつけるんじゃないぞ、ちゃんと帰れる事を祈っているよ」

その言葉を皮切りに、ティーダはパーシオンに向けて歩き出す。若干、いや大きな心残りを抱えていた。その正体には気付いているようで、気付いていない自分がいる。

(馬鹿な、気になるのか、あいつが……?)

自分に対する自問自答をしているつもりだったが、どこか他人に投げかけるような言葉。

(悪いな、俺にはまだやるべき事が残っている)

「とうとう行っちゃったな、あいつ……」

仲の良かったオルテンシアは、感慨深く言う。

「仕方がない。彼には彼の場所がある。私達のようにな」

「それはそうだ」

オルテンシアは、

「それはそうと……」

と、いうと、ノリヌを見る。それと共にバゼットもノリヌを見た。「一体どうなされたのです、ノリヌ様? 先ほどから様子がおかし

「いのですよ？」

ノリ又は「むう……」と低い唸り声をあげると、

「実はな、姫様にティータ死亡の事実を知られてしまっただけ……」

「何ですって！？ それで姫様はどこに？」

「確認したわけではないが、恐らくはエスクード教会じゃろう……」

「そうですね、しかし遅かれ早かれ言わなければならなかった事実です。いつまでも隠し通せるものでもなかった。起きてしまった真実は、乗り越えていかなければならない試練となります」

ノリ又はエスクード城を見上げ、その内部にある教会を思う。

ふと目を覚ました。どうやら眠ってしまったようで、まだ頭が覚醒しきっていない。

無言で辺りを見回すと、そこが教会である事に気が付かされる。

ノリ又から聞かされた事で、頭の中がパニックを起こして、感情のままに走った先がここだったのだろう。

ここには 彼がいそうな、彼を近しく感じられる場所だったから。

「でも……貴方はもういないのね」

頭上高くある十字架を見上げながら、自分の中の否定する感情を、肯定する理性で抑えつけて言う。

その言葉を言った瞬間、認めてしまった自分がひどく遠くに感じられて涙が溢れてくる。

「ごめんなさい……貴方が帰ってくるまで、涙は流さないって決めたけど、もう……耐えられない」

既に腫れていた目から、涙がどんどん溢れてくる。涙と共に、彼との記憶が流れてしまえば良いのにも思う。でも現実には 流れる涙に比例して、彼との記憶が蘇って痛くなる。

「何だ、せっかく帰ってきたのに……泣いてるのか、お前？」
耳に入ってくる懐かしい声。しかし最近聞いた声。声がした後方

を向くと、そこにいたのは一年前、戦いに出て行ってしまったティ
ーダの姿があった。

「……ティーダ？」

その瞬間悟った。目の前にいるティーダは『彼』なのだ。その
はずだ、ノリヌの言う事が正しければ、私の知るティーダは死んで
いる。ならば私の目の前に現れるはずがない。仮にも、現れたのな
らそれは幻や霊体といったものなのだから。

「疑った目をしてるな。どうした？」

「どうしたって……私を気遣っての縁起ですか、ありがたいですけ
ど……そういうのはやめてもらえませんか？」

と、私が言うと、目の前のティーダは呆れたように深い溜息をつ
いた。

「悲しいな……お前なら、ちゃんと俺の事をわかってきてくれると思
ったのに」

私はその言葉に、一瞬で怒りがわいてしまう。

「何が、何が『わかってくれる』よ！ 確かに私が勝手に勘違い
していた……それは申し訳なく思います。でも……でもっ、赤の他
人の貴方にそこまでされる程、私は惨めな女ではありません！」

息を荒げる。日常でここまで声を出す事がないから、余計に疲れ
てしまう。でも行き場のない怒りを、ただ目の前の彼に向かって放
つ事により発散していた。

その彼も、その事を察してか知らずか、ただ黙って聞いていた。
そんな事をしてくれてしまうから、私はただ大声をあげて泣き喚い
た。

「もう、俺にしてやれるのは、こんな風にお前の声を聞いてあ
げる事しかできない。いや、できなかった」

「できなかつた？」

意味深な事をいう彼の言葉に、少しだけ冷静になった私は耳を傾
けた。

「お前は、俺の言った通りに三百回……ここで祈りを捧げてくれた

「んだろうか？」

ティードに成りきる彼が気に入らなかつたが、私は答える。

「ええ……確かに三百回……私は祈り続けましたよ。それは貴方に言った事ではないですか!？」

「俺も三百回、祈ったさ」

「えっ……?」

彼は何を言っているのだろうか。砂漠で彼を見つけてから三百日も経っていない。一日一回合計三百回。だから彼の言っている事は矛盾している。やはりただ成りきっているだけの、他人のティードにはわかるはずもないのだ。

「嘘を言わないで……。三百回ですよ、それも教会で三百回。貴方にいつそんな事ができる暇がありましたか? ないでしょう、勝手な事を言わないでっ! もう、ここから出て行ってよっ!」

再び声と息を荒げる。それに対し、静かに彼は言い放った。

「やったさ……三百回。ここに来てな」

「もういい加減にして……」

「俺は……確かに死んだ。俺の意識体は間違いなく天に昇った……はずだった」

「はずだった?」

彼はゆっくりと頷いた。

「どうやら人間ってというのはな、死んでしまつたら天へ帰る記憶しか残らなくなってしまうらしいんだ。だから俺も真つ直ぐに天へ昇った。でもその時だった。謎の、でもとても暖かな声が俺に囁いた」

私は思わず「何て?」と聞くと、彼は言った。

『貴方はまだ天へ帰っては駄目。貴方にはまだ行かなければならぬ場所がある』

「俺はその声が指し示したくれた光を追うと、そこにはエスクード城があつた。そこで俺は見つけた、思い出した、お前を……待たせていた人を」

今まで淡々と話していた彼の言葉には、とても演技とは思えない
気迫がこもっていた。

「その日から……俺はお前と一緒に願ってたんだぜ？　もう一度、
お前と話したい、お前の温もりを感じたいって……。全ての奇跡の
偶然が重なって起きた、これは奇跡の必然だ」

確かに私は感じていた。この教会で祈っているたびに、ティーダ
に見守られているような感覚を。

「まさか……本当に、貴方なの、ティーダ？」

その私の言葉に、ティーダは私の前でしか見せない独特の笑い方
で、

「最も肉体は俺のものではないけどね」

と、戯^{あど}けていつてみせた。

だけど、それを理解できた私には、そんな事は関係なかった。私
の感情は、今度は言葉ではなく行動にして吐き出した。

「ティーダ！」

私は力一杯に、出来る限りの力を込めて抱きしめると、ティーダ
もそれを合わせて私を抱きしめた。

力強く締め付けてくるティーダの力に、息が止まりそうだったが、
胸の中に溜まっていたモヤモヤした不快な感覚が、彼に吸い寄せら
れていくような感じがした。

「悪かったな、俺の　馬鹿なわがままのせいで、お前一人だけ辛
い思いをさせちゃった」

「もういい、もういいよ、そんなのはもう……いいよ」

ティーダは私の溢れ出てきた涙を、その胸で受け止めてくれた。
数秒、いや数分そうしていると、そっとティーダから、私を離れた。

「ごめんな……でも、俺はもう逝かなきゃいけないんだ……」

「そんな……もう、一人は嫌だよ……ずっと、側にいてよ」

ティーダは困ったような笑顔を浮かべて一言、

「ごめんな」

と、言った。そして言葉を続ける。

「今日は、約束を果たしにきたんだ」

「約束？」

「何だ忘れたのか？ 帰ってきたら 生涯の愛を誓うキスだ。…愛しているよ、フィーネ」エスクードを。肉体は滅んでも、俺は貴方を愛し、ずっと見守り続けている。寂しくなったら 空を見てほしい」

「……空を？」

ティータは優しく頷くと、天井を、いやその向こうにある空を見つめた。私も一緒に空を見た。

「空には数多あまたの星が輝いている。その星々の中で、一際強く輝き、君を照らしているのは俺だ。君が俺を照らしてくれていたように、今度は俺が君を照らす」

時間が止まった。

彼はゆっくりと私を見つめ、優しく私を抱きしめる。

私は彼に身を任せ、彼に身も心も全てを預けた。

唇と唇が触れあう瞬間、彼は小さく私に言った。

「明るく、暖かく、幸せな未来を、生きてほしい」

と。

翌日、私は自分の部屋のベットで目を覚ます。

「ティータ？」

辺りを見回し彼を捜したが、もう彼の姿は勿論、彼の気配すら感じる事はできなかった。

「夢、だったのかしら……」

ふとそんな事を言ってみたが、それは夢ではなかった事に気付く。何よりも心身に残った暖かな残り香、そして 空を見ると、明るいはずなのに私を照らしてくれている星があった。

「……ティータ。見ていてね、また……泣いちゃうかもしれないけど、きつと幸せになるね」

一瞬だが、星がきらりと輝いた。それはまるで、彼が笑いかけて

くれていたかのようだった。

すると控えめなノックと共に、ノリ又の声が聞こえた。

「姫様……起きて、いらっしやいますか？」

おずおずと聞いてくるノリ又に対し、私は明るく言った。

「おはよう、ノリ又！ どうぞ、入ってください」

「失礼致します。……姫様、どうかなされたのですか？」

私の顔を見て、ノリ又は呆気にとられた表情で言う。

「どうかしましたか、ノリ又」

「あ、いえ、その……申し上げにくいのですが、あんな事がございましたので……」

あんな事とは、ティーダが死んでしまったという事だろうと解釈する。それに対し、隠し続けていた事もあって、ノリ又は顔を合わせにくいのだろう。

だから、私は言った。

「確かに……事実は悲しい事です。でも……今を生きている私達が、悲しい顔を見せていたら、天にいるティーダが悲しみます。だから、私達は明るく笑いましょう！ 太陽のように」

「フィーネ様……。わかりました。ではっ、今日はどーんと宴でも開きましょうぞ！ 何、全てはこのノリ又が受け持ちますぞお！」

切り替えが早いノリ又らしいと思った。でもそんなノリ又の態度に、私は笑みがこぼれていた。

さようなら、ティーダ。

砂漠地帯～砂城の姫君～ 終

9 ありがとうの言葉(前書き)

名前 ティーダ
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 17
階級 火の騎士
戦闘 2900 / 業火 3200
装備
E炎帝・ヴェルデフレイン
Eティータ専用戦闘防護服
E火の聖獣エンドラ

名前 クマンバ
種族 キメラ
性別 女
年齢 99
階級 熊の婆ちゃん
戦闘 1300
装備
E笑えるぐらいに細い腕

9 / ありがとうの言葉

Eskud城を出てから、およそ七日間が過ぎる。広大な砂漠地帯は、突破するのに予想以上の時間を費やされてしまう。

砂漠を抜けると、特有の暑さも無くなり、砂しかなかった大地に、少しずつ緑が見えるようになってくる。

やはり人間 いや、動物としての本能か。緑を見ると、心が休まりつつある自分に、ティータは気づかされる。

(渡された食料も、徐々に底をいついてしまう。そろそろ補給が必要だが……)

ティータは一足飛びで上空に飛び上がると、軽く辺りを見回してみる。しかし近場にレジスタンスあるいは村に該当する、いわゆる集落は見当たらなかった。

(城国さえもつぺんが少し見える程度、か。確かシュネリ湖からは、城国が確認できる位置だった。 という事は、シュネリ湖までは、まだまだ時間がかかるといふ事か)

あらゆる偶然の重なりか、元を正せばラティオの放ったセカンドインパルスにより、Eskud近場の砂漠まで飛ばされた。

(改めて見て思うが……これは飛ばされすぎだろう)

深いため息と共に、仕方がなく歩き続ける。まず目指すのは、北の大地シュネリ湖。そしてそこから南下し、パーシオンへ。

何事もなければ、こういう気ままな旅も良いと思うが、残念な事に、今はそこまでゆっくりしている暇もない。だからこそ、ティータはただ黙々と、目的地を目指して歩くしかない。

それから二日間ほど歩くと、すっかり砂漠の様相は無くなり、シュネリ湖のような薄暗い森林に入る。

シュネリ湖みたいに、突き刺さるような寒さはまだなく、砂漠と湖の間で、丁度良い涼しさになっている。

(まだかかりそうだな……。食料も底を尽きた、いよいよもって……)
その瞬間、ティーダの鼻に良い匂いが感じられる。すぐにそれは食べ物の匂いだとわかった。

さすがのアルティロイドといえども、食には勝てず。その匂いの元を求めて、走り出す。匂いの元は、森の中に一軒だけたたずむ家だった。

「何故こんな所に家が？ 一体どんな奴が うっ!?!」

突然の気配を感じ、その方向を向くと、あまりにも重い鈍撃が襲う。何かによる攻撃は、きっちりと防御するが、遙か後方まで飛ばはれてしまう。

「誰だっ!?!」

炎帝・ヴェルデフレインを構える。

「誰だ？ それはこつちのセリフじゃよ」

そこにいたのは、白髪頭の老婆。しかも腕や首など、ちよつと捻れば、すぐに折れてしまいそうだ。

ティーダは油断しなかった。見た目はどうあれ、軽く人を飛ばせる力の持ち主だ。

「悪かったな、俺の名はティーダ。 旅の途中で、偶然ここを見つけた」

簡単に説明しながらも、細心の注意を払う。

「ほう、旅の……随分と若いのに、数多くの修羅場をくぐり抜けておるな。しかし妙じゃな」

「……?」

「お前、城国の臭いがするね」

その言葉を聞き、ティーダはいつでも老婆の首を、斬り飛ばせる体勢をとる。

「物騒な考えを起こすんじゃない！

まあ最も、お前みたいに

生まれながらにして、戦いが共にあった存在には無駄じゃろうがね」

「お前、一体?」

「ワシかえ、ワシも城国　いや元と言った方が良いね。名前はクマンバ」

「クマンバ……」

クマンバは、ティータの剣を睨み付けて言う。

「わかったら、その物騒な物をとっとしまっておくれ！」

「いや、まだだ。俺を軽々飛ばした、お前の力の秘密がわからない。それにどうして俺が城国と言う？」

クマンバは独特な高笑いの後、言葉を出す。

「　とりあえず、家の中に入らんか？　年寄りにあまり立ちっぱなしにさせんでくれんか」

「　良いだろう」

少し考えたが、そう答えを出す。

家の中に入ると、クマンバが椅子に腰掛ける。

「どうした、座るが良い」

「俺は遠慮する」

座ってしまうと、仮にもクマンバが襲いかかってきた際に、反応するのが鈍ってしまう。基本は立ち姿勢。

「ふむ、では話を始めようかね。まずはワシの秘密じゃね。複合生命体　の事は知っておるかえ？」

「ああ、丁度良く数日前に世話になっていた所にも、複合生命体がいる。キメラ　と総称してるとか」

「なら話が早くて助かるね。ワシは人間と熊のキメラさえ。おかげで、こんな細腕でも、大男のような腕力を持てるわけじゃがな」

クマンバは、エスクード城の騎士。鷹のオルテンシアと、鷲のバゼットと同じ、複合生命体キメラ。

「ちなみにクマンバという名前は、熊と婆ちゃんを足した名前じゃえ」

「いや、そんな事はどうでもいい。　という事は、俺から城国の臭いを感じ取ったのは……」

クマンバは「うむ」と、首を縦に振る。

「まあ、お前さんの事を聞く気はないよ。こんなババアが、若いお主の物語に入っただけはいけんからな」

クマンバは立ち上がり、調理中の鍋の様子を見る。とても美味しそうなの匂いの正体は、間違いなくこれだろう。

「食べるじゃろ？ 腹が減ったから、ここに来た。違つかい？」

ティーダは無言でクマンバを見ていたが、そんな態度とは裏腹に、腹の虫がなく。

「ひえっひえっひえっ、体は正直じゃの。いっぱい食べていくと良い。大丈夫、毒は入っていないよ」

誘惑に負けたティーダは、クマンバの料理に口をつける。独特な臭みのある料理だが、何ともいえない濃厚な味付けだ。具材に肉のようなものが入っている。

「これは何を使っているんだ？」

「ああ、それかい。その辺に落っこちてた、人間の肉じゃよ」

「うっ!？」

「冗談じゃよ。それは魚じゃ。熊の力が入ったからか、こんな時代でも食べ物探しに不便しなくてね。むしろこんな便利な能力を与えてくれた城国に、感謝したいぐらいじゃよ」

「物は使しよう、か」

「そういう事じゃね。こんな時代だから、悲観的になるのはわかるけど、ちよつと知恵を使えば何とかなるもんさ」

そう言ったクマンバの表情は、どこか懐かしいものを感じさせた。この日は、クマンバの家に泊めてもらい、次の日の朝をむかえる。

「!」

ティーダの目が覚めると、外が騒がしい事に気付く。どうやらクマンバが、複数の人間と言い争っているようだ。

（何だ、近隣同士の喧嘩か？ …… それにしては荒れているが）

窓からそつと様子を伺うと、予想通り数人と言い争っていた。ただ、その争っている人間に、いや正確には格好に覚えがあった。

「あいつら、城国兵か」

そう、城国兵士がクマンバと言い争っていたのだ。相手は三人、普通に見れば老婆相手に三人では、成す術もないが、クマンバならば問題ない。

事実、三人の兵士は言い争ってはいるものの、戦闘意欲は無いらしく、むしる腰が引けている。

何かあったら飛び出す準備だけして、ティーダは流れを傍観していた。

しばらく見ていると、兵士が諦めたのか、渋々といった感じで引き返していく。

「おや、起こしてしまったかい？」

中に入ってきたクマンバは、申し訳なさそうに言うと、ティーダに暖かい液体を渡す。

「生姜汁じゃえ」

「シヨーガジル？」

「古い書物に伝わる、料理書物の一品さえ。体が暖まるよ」

ティーダは一口飲むと、すぐに体が暖まってきた。

「なるほど。 奴ら、一体何を言ってきたんだ？」

「何、いつもの事さ。何故かは知らんが、城国にワシが必要になつたんじゃと。だから、ふざけるなっ、と言ってやったよ」

「懸命な判断だな」

「奴らにとつては、他人の命など子供をあやす玩具程度にしか、考えておらんのだじゃろつて。 心配はいらないよ、キメラのワシに、

所詮は人間が来ようと勝てはせんよ」

そう言うと、筋肉の無い腕で、ガッツポーズを決めてみせる。

「じゃが……奴ら、最後に何か言っておったの。『こちらには、お前を殺せる兵器がある』とな」

「兵器に関するものは、城国に関してハツタリは無い。少しでも良い、用心はしておくんだ」

「わかっとなるわかっとなる。ワシも元城国、奴らのえげつないやり方

は心得ているよ」

「そうか。このショーガジル、旨かったよ」

ティータは立ち上がり、身支度を整える。

「もう……行ってしまうのかい？」

「ああ、できるだけ早く帰りたい場所がある」

「そう、か……あんたにも、帰る場所があるんじゃない？」

「それを確かめる旅なのかもしれない」

あらかたの身支度を整えると、クマンバは小さな包みをティータに渡す。

「食料は一日分しか無いけど、生姜汁は三日分は入ってる。あんたの歩いてきた方角からして、向かうのはシュネリ湖じゃろ？ 寒くなるから持っておいき。包みはそのまま気休め程度の、防寒具になるよ」

「良いのか、クマンバにも生活があるだろう」

「こんな婆さんに、一晩とはいえ夢を見させてもらったからね。まるで孫と暮らしているようじゃったよ」

クマンバは満面の笑みで言い、ティータに荷物を渡した。

「すまないな、貰っていくよ」

ティータは荷物を受け取り、出入口まで歩を進めた。

「ティータ！」

と、クマンバが呼ぶ。

「お世話になったら ありがとう だよ」

まるで、お婆ちゃんが優しく教えてくれるように、

「ありがとう、クマンバ」

ティータも教わった事を返した。

10 少年兵士の挑戦(前書き)

名前 ティーダ
種族 アルティロイド
性別 男
年齢 17
階級 火の騎士
戦闘 2900/業火 3200
装備
E炎帝・ヴェルデフレイン
Eティータ専用戦闘防護服
Eクマンバのマント
E火の聖獣エンドラ

名前 ケイン
種族 ヒューマン
性別 男
年齢 12
階級 ザードリブ兵士
戦闘 700
装備
E鋼の小剣
E鋼の長槍
E身軽な服

10 少年兵士の挑戦

クマンバとの出会いから一日。歩き続けていると、さすがに寒くなってくる。シュネリ湖が近くなってきた証拠だ。

貰った食料と共に、生姜汁を飲み、体を暖めていく。包みは広げる事で、マントのように羽織る事ができた。

「これは……なるほど、ただの包みじゃないな。これを装備しているだけで、打撃に対する防御力は見込めそうだ」

ティータはマントが気に入った。残った生姜汁の器は、あと二つ。残しておいても、いずれは冷えてしまう為に、後を考えずに胃袋に流し込んでいく。

一息つくとも、もう少し先にあるはずの、シュネリ湖を見据える。

(シュネリ湖、か……)

あまり良い気分ではなかった。そこはティータにとって、忘れられないアイコンのある場所だ。デュアリスとの再会から始まり、セレナとの死闘、そして。

ティータはそれ以上を思い出さないように、固く目を瞑る。あれから随分な時間が経つが、いまだ忘れられぬ記憶だ。

そして数時間、ティータはシュネリ湖へと到着する。

セレナが放った『氷結世界』の氷は、完全に溶けさり、今は元の状態に戻っている。制圧作戦時の慌ただしさが、嘘のように静まりかえっている。

(確か近場のレジスタンスは、ザードリブ、だったな)

ザードリブの長はラック。覚えていれば、ティータの事は知っているはずなので、楽に内部に入れるはずだ。

ザードリブはシュネリ湖より、西の方角にある。そしてパーシオンと共に『支配解放大戦』に参加したレジスタンスだ。もしかしたら、何かの情報が得られるかもしれない。ティータは、真っ直ぐにザードリブに向かう。

ザードリブにたどり着くと、目に入ったのは門番の兵士。ただ気になったのは、門番の兵士は子供のようだった。

「貴方は？」

少年のような兵士が話しかけてくる。その声から、少年のようなではなく少年である事がわかる。

「ティーダという者だ。このレジスタンスを束ねる、ラック兵士長はいるかな？」

「あ、貴方が、ティーダさん!？」

少年は異常な程の驚きと、輝いた目を向けてくる。

「あ、ああ、そうだが……」

「わあ、感激だ! あ、僕はケインと申します。貴方の活躍に憧れて、兵士に志願したんです!」

「兵士に志願って……お前、歳はいくつだ？」

「はい、現在十二歳です!」

ケインの年齢に、ティーダは絶句した。十二歳といったら、まだ子供といっても過言ではない。確かに自分自身も、物心つく前から兵士としての経験を積んでいたが、それはアルティロイドとしての話。

この少年 ケインは間違いなく人間だろう。だからこそ、驚きを隠せなかった。

(身の丈に全く合わない長槍……確かに突撃槍として使えば、下手な剣士は倒せるだろうが……)

ティーダが考えている間に、ザードリブ内から一人の兵士がやってくる。

「客人か、ケイン？」

「あ、アスイさん。こちらティーダさんですよ!」

アスイという兵士は、ティーダの名前を聞き、目を丸くした。

「何、まさかあのティーダ殿か!？」

「間違いありませんよ、あのティーダさんですよ!」

二人は勝手に盛り上がり始める。特にケインの興奮は凄まじい。「それで、ティーダ殿は何用でここまで？ 確か貴方は南のレジスタンスの方では……」

「色々とあつて。それで、ラック兵士長はいるかな？」

「ああ、いますよ。ケイン、ティーダ殿を案内してあげなさい。見張りは私がやる」

ケインは元気よく、しかし慣れない敬礼をしながら、

「了解です！」

と言い、ティーダを案内する。

案内された先は、パーションと同じように設置されている、兵士用テントである。

「どうぞ、中へ！」

ケインは嬉しそうに、テントを開くと、ティーダを中へと誘導する。

「ラック兵士長、ティーダさんをお連れしました！」

その言葉に、テント内にいた全ての兵士が、視線をティーダに浴びせる。

その異様な視線の雨に、ティーダが困惑していると、ケインは、

「ここではティーダさんは、シュネリ湖を救った勇者様です」

と、小声で言ってくる。

「やれやれ……」

半ば呆れてため息をつくとき、ラック兵士長がやってくる。

「本当にティーダ君か、久しぶりだな。元気にしていたかい？」

「まあ、程々に」

「そうですね。……それで、今日は一体どうしたのです？ 君のいるパーションからは、そんなに気楽に来れる場所ではないでしょう」

「とある理由があり、支配解放大戦後は、東の砂漠地帯、エスクード城にいて……今はその帰り道だ」

「ふむ、という事は、ソリディアさんの事は？」

ティーダは首を横に振る。

「そうですね。理由は聞きませんが、東のエスクード城とは、随分と遠い所にいましたね。まあ、噂でしか聞いた事はありませんが。」

「ついでに質問させていただくと、支配解放大戦の情報は、耳に入っていないのではないかね？」

「ティータにとっては、願ってもみない話題だった。情報に関していえば、エスクード城に飛ばされたのは、一種の不運だった。エスクード城は支配解放大戦に参加していないが故に、その情報が決定的に不足していた。」

「その事が聞きたくて、ここに寄らせてもらった。知る限りの事で良い、良かったら教えてほしいんだ」

「わかりました。最も説明できるだけの情報があるわけではないのですがね……」

「ラックは、大戦に関する事柄が記された書物を部下に持ってこさせた。」

「まずはこの『支配開放大戦』と銘打たれた戦いは、地上レジスタンス連合の敗北に終わりました。死者重軽傷者の詳しい数は、いまだにわかっていませんがザードリブで把握しているだけでも四千人は……」

その数の多さに、さすがのティータでさえも驚く。

「四千？ かつてのサンバナの戦いでさえも千五百人とかだったと思うが……」

「そのサンバナ戦の事は詳しくわかりませんが、多い、いや多すぎる事は確かです。しかも四千という数も、ご存じの通り、レジスタンス連合は北と南に分かれての編成でした。この四千という数はあくまでも北で把握している数です。」

恐らくですが、城国の兵士達も入れるならば、間違いなく万単位は覚悟するべきでしょうね」

その話に、ティータは絶句した。自分の知らないところで起きた、悲しき戦争の火種。その火種の犠牲になった人々の、あまりの悲痛な声が耳に届いてくるようだった。

「パーシオンは　パーシオンは、その後の連絡は？」

「ラックは首を縦には振らなかった。」

「いえ、あの戦い以来、パーシオンどころか近場のレジスタンスとも連絡が付きません。ただ……風の噂で聞いたのですが、南は城国からの報復攻撃が酷かったらしいです。とんでもない事ですよ……」

嫌な予感を感じていた。確かに支配開放大戦は、南のサンバナの町を拠点に勢力を拡大していた。そして数あるといえども、パーシオンはサンバナの町からは近い。攻撃される可能性は充分にあるのだ。

「君は、パーシオンに帰るのだろうか？」

「そのつもりだ」

「ならば、できるだけ急いで帰ってあげた方がよい。今は支配開放大戦前（あの時）と違って、情勢があまりにも悪すぎる」

そしてラックは、こう付け足した。

「みんな……勇者の帰りを待っているよ」

「前にも言ったが、俺は勇者なんかじゃない。俺の手は……数多くの命を奪い、血を浴びてきた。勇者なんて、そんな物語のような産物とは、程遠い存在だ」

すると、ティードの言葉をかき消すように、静かに話を聞いていたケインが叫んだ。

「それは違います！」

「何がだ？」

「ティードさんが勇者じゃないという事です。貴方の事は、よく聞きます。確かに貴方の手は、血に染まっているのかもしれない。でも、それでも、救えた命はあります。僕は貴方を、貴方が勇者であると信じたい！」

しばらく無言のまま、ティードとケインは視線を交えた。真っ直ぐで純粹な瞳。根負けしたのはティードだった。

「……信じるのは勝手だ」

「はいっ、勝手にします！　あ、それと、ティードさん」

「何だ？」

「突然ですが……もし、宜しかったら、僕と手合わせしていただけないですか？」

その言葉に驚かされる。この少年には、驚かされっぱなしだと、ティードは思う。

ラックに確認をとると、

「見かけはまだまだ子供ですが、才能は確かなものです。侮ると痛い目をみますよ？」

相当な自信がある事が伺える。

「……良いだろう。誰か剣を貸してくれないか？」

「あれ、その腰に下げた剣は使わないのですか？」

「自信を持つのは大切だが、過剰な自信は身を滅ぼすぞ」

このティードの言葉に、敬礼をしながら言う。

「はい、わかりました！ アドバイスをありがとうございます！」

「……調子の狂う奴だな」

ひよんな事から、ガードリブの若すぎる兵士、ケインの手合わせを受ける事になる。

炎帝・ヴェルデフレインを使うわけにもいかないで、ティードは適当な鋼の剣を貸してもらおう。

対するケインは、初見の時に確認した長槍ではなく、今度は小さな身の丈に合った小剣を装備している。その身のこなしから、フットワークは軽そうだ。

（なるほど、ラックの言う通り、侮ると痛い目をみそうだな）

「では、いくぞ！ ちっちのちっ！」

やや変わったラックの合図で、ティードとケインの組み手が始まる。

最初に仕掛けようとしたのはケインだ。最も、ティードは自分から攻撃をかけようとは考えていない。しかし予想通り、ケインのフットワークは非常に軽い。これならば、大人の兵士でも並の相手

ならば、その動きに翻弄されてしまっただろう。

「はっ、やつ、せいっ！」

その素早い動きと、小剣による小回りで、怒涛の攻めを見せるケイン。

（良い動きだ。この歳で、これだけの動きができる……才能があるのかもしれないな）

それが手合わせをした、ティーダの率直な感想。

今度は攻撃の間を見て、ティーダも攻撃を仕掛ける。

「くっ……！？」

（防御できるか。体格的に仕方がないが、攻撃を受ける毎に体がブれている。攻撃はなかなかだが、防御はまだまだだな）

約十分間、ティーダとケインの組み手は終了する。

端から見ると、終始ケインが圧倒した戦いだった。だがそこにいた兵士達は、ティーダの強さを見せつけられた。

「……はあっ、はあっ！」

肩で荒い呼吸をするケイン。

「その歳で、そこまでの戦いができるとはな、大したものだ」

「あ、ありがとうございます……！」

「だが防御能力には、まだ難があるな。お前はこれから体格もできてるだろう。改善どころか、もっと強くなる」

「ティーダさん……ありがとうございます！」

深々とお辞儀をした後、ケインはそのまま倒れ、眠り込んでしまっ

「ティーダ君。急いでいるのに、手間取らせて申し訳ないね」

「いや構わない。あいつは良い兵士になる、大事に育ててやるんだな」

「うむ、そうしているよ」

「では、俺は行く。大戦の情報をありがとう」

「いやいや、大した役にも立てなかったがね」

ラックと数人の兵士に見送られ、ティーダはいよいよパーシオン

に帰還する。

だが、そこに一つの真実が待ち受けている事を、ティードはまだ知らない。

仲間が次々に挑み、しかし殺されていく中で、その中の一人の男は言う。「生きていたのか」と。

一凧ぎで数人の兵士を蹴散らしていく。絶えず轟く断末魔と血の雨に、そこにいた誰もが狂気する。

「漆黒の髪、深紅の剣、そして……そして、この強さ。間違い
ない、あいつは、火の騎士だ。火の騎士、ティーダだ！ こ、殺されるぞ、俺達はみんな殺されるぞ！」

最初は勢いで襲いかかっていたが、その内に誰もが恐怖し、手を
出さなくなっていく。

「急げ、クリッパー様か、リオ様にこの事実を伝えるんだ、早くっ
！」

「は、はい！」
一体いくつの屍がそこにあるのだろうか。ただ一つ言えるのは、
ティーダに立ち向かい、そこで生きている者は確実にいないという
事だ。

「ば、化け物め！」
悪態をつく一人の兵士にティーダが言う。

「そうだ、俺は人間の強欲が生んだ、化け物だ。死にたくなければ
退くんだけ。退けば命までは取らない」

屍と血の海。その上にティーダは立っている。

「だが退かないのなら……俺は容赦なくお前達の命を奪うだろう」
ティーダが炎帝・ヴェルデフレインを構えると、誰も立ち向かう
人間はいなくなった。向かってくる存在がいなくなったのを確認し、
ティーダは剣を納め、パーシオンへの道のりを歩いていく。

ここは丁度、シュネリ湖とパーシオンの間ぐらいだろう。城国に
最も近い位置でもある。ティーダは偶然たまたま城国兵士の中隊と
出くわしてしまう。それが今の結果だ。城国からすれば、支配開放

大戦以降、行方不明になり、そしてほとんど死亡扱いと見なされていた。

「報告します！」

息も絶え絶えで走ってきた兵士は、報告内容を告げる。

「一個中隊の演習中に、火の騎士を発見したとの報告がありました！」

その兵士が告げる先、二人の騎士が反応した。

そうそこにいるのは光闇の騎士リオと、闇光の騎士クリッパの二人だ。ここは城国内部、リオとクリッパのために、特別に作られた一室だ。

「……火の騎士が、生きていた？」

その兵士の言葉に、一番の反応を示したのはクリッパだ。

「は、はい、確かな情報との事です」

「キャハハハ、まさかね。本当にしぶとい人、あの人には戦いにおける死の概念とかあるのかしらね、キャハハハ！」

あざ笑うリオと、その生存報告に胸を打ち振るわせるクリッパ。

「それで、火の騎士は一体どこにいるのだ？」

「は、はっ！ 報告によりますと、火の騎士は北のシュネリ湖方面から、真っ直ぐに南下しているとの事です」

「南下……？ 南に何かあるというのか……」

「キャハハハ、クリッパ馬鹿ね。そこに兄様の本拠地があるという事じゃないの！」

クリッパは勢い良く、椅子から立ち上がると鍛え上げた分厚い筋肉を隆起させた。

「……これで、決着をつけられる。最強の称号への、決着が」

気合いも新たにするクリッパと対照的に、リオは黙って思考回路を回らせていた。

（南……大戦以降、王様の命令で南を中心としたレジスタンスを一掃している。その中に兄様の所属している場所があったら？ キャ

ハハハ、これは面白いものが見られそうね)

お互いに違う目的ながら、二人は再びティーダの前に姿を現すべく行動に出た。

シュネリ湖を出て、城国の中隊との戦い。そこから約一日分の時間が経っている。

以前、この道を歩いた際は、ソリディア、カルマン、ティオの三人と共に歩いている。パーシオンからシュネリ湖まで、およそ三日の時間がかかったが、今はティーダ一人。恐らく時間はそうかからないだろう。

北の大地特有の寒さも無くなりはじめ、少しずつだが暖かな気候が目立つようになってきた。この空気を吸った瞬間に、「帰ってきた」と実感する自分がある事に、ティーダは気が付いていた。

(何日ぶりだろうか。偶然この地方へ落ちて、そこで出会った人々と共に暮らし、いつの間にか自分の故郷にもなっていた)

意識したわけではなかった。無意識の内に、ティーダの歩くスピードは早くなっていた。

ティーダ自身、そんな風に思えるようになったのは、いつからだろうとも思える事だった。

「誰だっ!?!」

「っ!」

自分らしくもない、とティーダは舌打ちをしながら、声のした方を見る。どうやら見つかったのは城国兵士のような。数は見える範囲で三人。ティーダが仕留めるには、余裕すぎる数だ。

「散開! 的を絞らせるな!」

隊長らしき兵士の指示により、三人はバラバラに移動をし始める。「むっ!?!」

完全に目線も思考も、パーシオンに傾いていた。ティーダは自分がどこを歩いていたのかさえも、見えていなかった。ここは森林地帯ほどではないにしても、草木が生えそろうている。敵は散開し、

的を絞らせないようにしながら、ティーダの首を斬るタイミングを計っている。

「らしくもない、らしくもないぞっ」

それは自分に向けての言葉。注意不足で敵に見つかるなど、あつてはならない事だ。

ティーダはヴェルデフレインを構えると、神経を戦いに集中し、敵の気配を探り続ける。

（一人は真っ直ぐに俺を狙っている。……あとの二人は気配を消しているな）

「ならっ！」

向かってくる相手に対して、ティーダも向かう。普通ならば馬鹿な事だが、ティーダには既存の常識は通用しない。

一気に間合いを詰めると、すぐに相手の姿を確認できる。

「なに！？」

「……悪いな」

向かった勢いのまま、刃を立て、心臓を串刺しにする。相手は即死だろうが、最後の一瞬まで、ティーダの姿をその目に映していた。一気に引き抜くと、その引き抜いた勢いと同じ、いやそれ以上の血が噴き出す。

「いやああああ！」

殺す隙を狙っていたのだろう、気配を殺していた内の一人が、斬りかかる。

弾ける金属音。剣と剣は斜め十字になり拮抗する。

「ぬぬぬ……レジスタンスめ！」

「退くんだ」

「退けだと、レジスタンス風情があ！」

城国兵士は、更に力を込め、剣もろともティーダを真っ二つにしようとする。

その返答に舌打ちをし、ティーダも相手を斬り殺そうと、力を込めた。

「死ぬがいい！」

突然襲ってきた、背後からの気配。残った一人が、拮抗状態を見計らい、一気に勝負を決めに来たのだ。

左手で剣を押さえながら、右手で鞘を抜き、背後の敵に攻撃を仕掛ける。鈍い衝撃と音が伝わってくる。ほとんど当てずっぽうだが、上手く当たったらしい。

「隊長！」

一瞬だが、目の前の兵士の注意が逸れる。それを見逃すティードではなく、一気に力を入れて、敵を力任せに斬る。

「うっ、あ、あああ、ああ……！」

なまじ即死でない為に、斬られた痛みと、失血の恐怖を味わうはめになる。

「く、くそ……」

後ろの兵士は、顔面に命中してしまったのが、口と鼻から血を流し、歯も何本か折れてしまったようだ。それでも剣を構えているあたり、さすが隊長というところか。

「最後に言う。退け、退けば命は取らない」

「……ば、馬鹿にするなよ、レジスタンス……」

その言葉と共に放たれた一撃をかわし、ティードも真横に剣を走らせた。胴体と頭が、綺麗に分かれた。

「馬鹿にするなよ……か」

ティードは、たった今殺した男が言った事を、呟くように繰り返した。

自分の不注意による、望まぬ戦闘。それにより命を落とした兵士達。ティードは残るパーションへの帰路を、気を引き締めてかかる。

それから数時間後、見慣れた風景にたどり着く。暖かな気候と、深い森林。恐らくこのまま更に南に進むと、サルバナ森林地帯のサンバナの町へ着き、西に向かうとカザンタ山岳地帯に着くだろう。

しかし、見慣れた風景になったからこそ、ティーダは一つの違和感を感じていた。

（何だ、この感覚は……嫌な予感がする）

そのまま進んでいくと、森林の中の視界が、急に開ける。その先にあるのが、パーシオンのレジスタンスなのだ。ティーダはパーシオンに着いたのだ。

「なっ……!？」

だが、その光景を見て、ティーダは息を飲んだ。

そこにあつたのは、廃墟となったパーシオンの姿。辺りは完全に廃れ、城国に襲撃されたのだろう。無惨に崩されたテントに、逃げ遅れた人の屍が、いまだに残されていた。

焼き払われたのだろう。既に、倒れている屍が、生前どんな姿をしていたのか、判別すらできない。

ティーダは、兵士用のテントとソリディアのテントを確認しに行く。

「うわっ」

「誰だ！」

周辺に蠢く人影。その姿から城国兵士ではないようだ。

「待って、待ってくださいよ！ あっしはただの薄汚い泥棒ですって！」

「泥棒？ 一体こんな所で何をしている、ここの人達はどうした！」

「いや、ですから泥棒ですって！ ……ここの人間の事は知りませんよ。ちよつと知ってる事があるとすれば、支配解放大戦から時間も経ってない時に、一気に城国の兵士達が攻めてきたって事ぐらいですよ。ここはその内の一つって事ですよ。ここの人がどうなったのかなんて、本当に知りませんって」

「……そうか、すまなかつたな。だが泥棒活動は他所でやってくれないか」

泥棒はその言葉を聞き、愛想笑いをしながら走り去っていく。

「生き残りはいるのか、いたとしてもどこにいったんだ」

やっとたどり着いた先に待っていた真実。掴んだものは、一気に距離を離れていく。途端に行く宛の無くなったティードは、この隣で馴染みのあるカザンタ山岳地帯へ歩き出した。

12 再会

そこから見えるのは、無数の墓標。その内の一つに少女は、お参りしている。少女はティオだ。

ソリディア、ここに眠る

実の親ではないが、自身のほとんどの人生に関与した、育ての親。数多くの人間に慕われ、数多くの兵士が、この男を目指した。そんな男も、支配解放大戦という、近年稀に見る戦争にて、その命を落とした。

ソリディアの墓のお参りを済ませると、ティオはふと、自分が特別に作った一つの墓を見る。

それはティーダの墓だ。ソリディアと同じく、支配解放大戦に参加。そのまま行方不明になってしまい、戦死扱いとなる。ただティーダの墓だけを、少し離れさせたのには、ティオなりのわけがあった。

それは『ティーダはまだ生きているから、死人と一緒にしては駄目』というものだ。

だが大戦から数ヶ月。既に人々は、少しずつだが悲しみから抜け出し、新しい生活環境への適応を果たし始めていた。そんな人々から、ティーダの名前、存在が消え始めるのも無理はなかった。

「また、あいつの墓に行くのか？」
もう諦める、と言いたげに投げかけたのは、ティオの護衛に付いてきたカルマンだ。

「うん、でもお墓参りとは違うよ。これはお祈り」

「祈り……？」

「うん……」

それ以上、ティオは答えようとしなかった。カルマンもまた、理

由を聞きたいとは思わない。

「それは誰の墓だ？ 死んでもいないのに、祈らないでくれよ、縁起が悪いからな」

その言葉に、ティオとカルマンは、揃って驚愕の目線を浴びせる。

「ま、まさか……」

「お前……生きていたのか」

その二人の視線の向こう、そこにはティーダの姿があった。

「だから勝手に殺さないでくれないか？ 俺はこの通り、ちゃんと生きている」

「な、ならっ、何でさっさと帰ってこなかったんだ！ 俺は、心配なんてしなかったけど……ティオが、一体どれだけ心配したと思っ
てんだ！」

感情を言葉に込めて、ティーダにぶつけるカルマン。その言葉を
受けて、ティーダもティオに目をやる。

「ティオ……」

「……ティーダ」

お互いの視線が交錯する。その釘付けにならんばかりの、瞳の先
には、今まで最も想っていた人がいたのだろうか。

しかしティオは、ふいに視線を逸らすと、無言のまま歩いていっ
てしまう。髪に飾ってある、白いワセシアの花が、どこか寂しそう
に見えた。

「あいつはな、大戦の後からあんな風になっちまった。自分の感情
を表に出すのが、急にできなくなったんだよ！」

ティーダは何も言えなかった。記憶の中のティオは、いつでも喜
怒哀楽の感情を、表情に表すような人だった。だが先ほどの反応か
ら、カルマンの言う事が、嘘ではない事がわかる。

いままでならば、泣いて抱きついてきそうなところだ。しかしテ
ィオは涙の一滴すら、流してはいなかった。

「今にして思えば……大戦はするべきではなかったんじゃないかと
思えるよ。あいつの、ティオのあの姿を見ると。近い人が一気に

死にすぎた、ずっと住んできた故郷が焼かれた。ティオの心の時間は　あの日あの瞬間から、ずっと止まっているんだよ……」

「心の、時間……」

「お前、帰る気はあるんだろ、パーシオンに？」

「その意志の為に、俺はここにいるつもりだ」

「……わかった。案内するよ、新しいパーシオンに。　但し、これは個人的な事だけど、約束をしてほしい」

ティードは無言だが、目で「何だ？」と聞く。

「あいつの止まったままの時間、お前が動かしてやってくれ……」

「……カルマン？」

「俺じゃ駄目みたいだ。……俺じゃ、どうやったってティオの時間を動かす事はできなかった」

唇を噛みしめ、絞り出すように言葉を出すカルマン。

「俺に……それができる、か」

「……っ、お前がやれなければ、誰がやるんだよ！」

そのあまりのカルマンの気迫に、ティードは息を呑んだ。とても数ヶ月前のカルマンとは、似ても似つかない。「男子三日会わざれば　」という言葉があるが、ティードは正にそれを感じていた。

「そうだな、すまない」

「……いや、とりあえず付いて来いよ。どうせお前の事だから、俺達はどうなったのかわからないんだろう？　とりあえずパーシオンに戻る」

カザンタ山岳地帯での再会。それは思いもよらぬ再会だった。

新しく作られたパーシオンは、カザンタ山岳地帯に偶然的にあった、洞穴の中だった。

まるで蟻の巣のように分岐した道は、人が短時間でできるようなものではない。だが、その中でパーシオンに暮らしていた人々は、悲しみに負けずに、一杯今の生活を営んでいた。

「洞穴になっちまって、まるで古代文書の中の原始人って奴らみた

いになつたけど、これはこれで住み心地が良いもんだぜ？」

カルマンは本音でものを言っているようだが、そこで暮らす人達を見ていると、とてもそうは思えなかった。

「ハリス兵士長！ 客……って程でもないけど、人を連れてきたぜ」
「ああ、カルマン。客人が、一体こんな時分に誰が……っ！？」

ハリスはその姿を見ると、思わず絶句した。いやハリスだけではない。その場にいた兵士達全てが、と言っても過言ではない。

「テイ、ティード、なのか？」

「ハリス兵士長、当たり前でしょ？ この鬱陶しい黒髪に、喧嘩売ってるような目つき、どつからどう見てもティードですよ」

この存在を認めるカルマンの言葉を聞き、兵士達は歓声の声を上げた。

「ゴホン！ みんな静かに、とりあえずティード、よく無事に帰ってきてくれたな？」

「ああ、色々あった……と言いたいが、元のパーシオンは一体どうなったんだ？ 聞く限りだと、城国からの襲撃があったと聞いているが……。それにアンタが兵士長って、ソリディアはどうしたんだ？」

その言葉を聞き、ハリス以下兵士達の表情は、苦悶の表情を浮かべる。

「……みんな、すまないが退席してくれないか？ ここは私が説明したいと思う」

ハリスの命令により、その場にいた兵士達が出ていく。カルマンだけがその場に居残った。

「まずはもう一度だけ言わせてほしい、よく無事に帰ってきてくれた。これでみんなの活気も上がるだろう。……そして、ソリディア兵士長、いや前兵士長は……支配開放大戦にて、戦死された」
「……そうか、ソリディアが」

「その他、大変だった事はラルク先生も、前パーシオン襲撃の際に殺されてしまつてね……おかげで負傷者の手当てなどが追いつかず、

更に死者を出していく結果となつてしまった。パーシオンに住む民間人に兵士、そのほとんどが失われ、正直なところ壊滅寸前だったのだ。ただ……今までの防衛はそこにいるカルマンと　　ティオちゃんティオちゃんが頑張ってくれてね」

「ティオが！？　あいつは戦闘能力は皆無なはずだ。一体どうやって？」

ハリスは眼鏡をくいつと上げると、

「戦前……ティオちゃんの趣味に付き合わされていたティードならわかると思うが、ティオちゃんは兼ねてから言っていた、城国との抑止力を作る事に成功したんだ」

「城国との抑止力？」

「そう、アンドロイド機械兵士。それがティオちゃんの作り上げた抑止力の賜物」
「機械兵士……アンドロイド……」

「事実、アンドロイドの力は大了なものだったよ。実戦投入は一機だけだが、その一機あれば城国の兵士を一気に薙ぎ払える。カルマンとアンドロイドのツートップで、我々は生きてこられたのだ。その上、ティードが戦線復帰してくれば、再び城国への反撃チャンスが訪れるかもしれないんだ！」

その眼鏡の奥の瞳が、希望の光を捉えていた。

とりあえずティードがいない間に、ここまで起きていた事をまとめる。

一つは、かつてのパーシオンの壊滅により、カザンタ山岳地帯に新しいパーシオンを設立した事。ソリディア、ラルク医師の死亡。前兵士長ソリディアの戦死により、ハリス元副兵士長が新兵士長へ。ティオの作り上げた機械兵士、アンドロイドの出現。

これがない間に起きていた出来事。ティードとカルマンは、ハリスとの会話を終えると、パーシオンの中を歩いていた。

「確かに、お前がいない事で苦しい思いはしていた。……悔しいけど、お前の強さは認めているからな。でも、それに対してお前が気に病む事はないぜ？　お前も……色々あったんだろ、別に聞きは

しないけどよ」

「まあ、そう言ってくれると助かる。　だがカルマン、その右目はどうした？」

カルマンの右目には大層な眼帯がある。それを気にしてないというような照れ笑いを浮かべた後、カルマンは話し始める。

「大戦の最中にな……ソリディア兵士長を助けようとして、頑張ってみたけど……駄目だった。兵士長は俺の目の前で殺された」

そう言っているカルマンの顔には、笑顔が無くなっていた。

「目を失ったのは、兵士としての俺の力量不足だ、それは別に良い。でも、でも俺は、ソリディア兵士長が殺された時の、あの気持ちを忘れはしない。仇を討とうってわけじゃないんだ、ソリディア兵士長は……そんな事を望んでいないようにも感じたし、それにそんな事をしようとする兵士を、ソリディア兵士長が許してくれるわけがない」

その失った右目の代わりに、左目には断固たる決意が表れていた。「だからっ、俺は強くなる。ソリディア兵士長よりも、そして……兵士長を殺したあいつよりも！　そして、お前よりもな！」

そのティードを真っ直ぐに見る目は、かつてのカルマンではなかった。一人の男として、一人の兵士として、成長した姿があった。

「ソリディア兵士長見ていますか、俺は貴方を超える兵士に、男になります」と言っているような、男の顔がそこにあっただのだ。

「望むところだ。お前程度じゃ、俺を倒す事はできないって事を教えてやる！」

「へっ、知らないぜ、負けたら笑いまくってやるからな！」

二人は自然と笑みがこぼれていた。長き時の空白は、二人の距離を縮めたのだろうか。

ふとカルマンが足を止めると、そこには道がある。

「そういえば、機械兵士がどんなもんか、見ておくか？」

「ああ、そうだな」

カルマンに誘導されついでにいくと、そこにはかつて拾ったガラク

タのような部品で、構築されたモノがあった。形は人形だが、身長は異様に高い。

「名前はロビン。正式にはロボット・ウォリアー・零型らしい。誰もそう呼ばないけどな」

「……長いからな」

「無駄に長いよな？ 前々から思ってたんだけど、ティオの感性って一枚ズレてるよな」

「お前もようやく、それに気付いたか」

ある程度見ると、カルマンは次に行こうと歩き出すが、ティーダがそれを止める。「動かないのか？」というティーダに、カルマンは言う。

「ああ、それはティオがいないと動かせないんだよ。今はティオいわく充電中らしいが……まあ、そういうわけで。動いてるところを見たければ、ティオに言ってくれよ？」

「……わかった」

納得したところで、カルマンはティーダ用の空きスペースへと案内する。所詮は洞穴の中の空き地の為、全く豪華ではないが、体を休めるには充分だ。ちなみに兵士用テントではないが、兵士用の空きスペースは、それなりに大きく作られている。

「しかし」

そう切り出したのはティーダだ。それに疑問の文字を頭に浮かべるカルマン。

「身に纏う気迫は見事だが、お前はいまだに見張りや案内係をしているのか？」

「馬鹿野郎！ 甘く見るなよ、今の俺はカルマン『副兵士長』だ！ ティーダにとっては、それが本日一番の驚きだったかもしれない。副兵士長、お前が？」

「そうだ。ここで暮らしていく気があるんなら、俺の方が偉いんだ。少しは言う事聞けよ！ じゃあな」

高笑いしながら、去っていくカルマン。それをティーダは呆然と

眺めているしかなかった。

13 初恋にさよなら(前書き)

名前 ティーダ

種族 アルティロイド

性別 男

年齢 17

階級 火の騎士

戦闘 2900/業火 3200

装備

E炎帝・ヴェルデフレイン

Eティータ専用戦闘防護服

Eクマンバのマント

E火の聖獣エンドラ

名前 カルマン

種族 ヒューマン

性別 男

年齢 17

階級 パーシオン副兵士長

戦闘 900

装備

E鋼の剣

E戦闘用防護服

名前 ティオ

種族 ヒューマン

性別 女

年齢 16

階級 一般

戦闘 100

装備

E 赤いゴム紐

E デュアリスのピアス（水氷のピアス）

E ワセシアの花飾り

実はティード達の年齢が、「理想郷」の頃より一歳成長しました。

13 初恋にさようなら

新生パーシオンに、ティーダが帰還してから数日が経つ。洞穴での生活だが、カルマンの言う通り慣れるとそれなりに住み心地が良いと、不覚ながらティーダは思う。

この日は、ハリス兵士長に呼び出される。とある事をやってほしいというものだ。集められたのは、ティーダ、カルマン、ティオの三人である。

「忙しいだろうに悪いね、三人共」

「いえ……」

「気にすんなよ、ハリス副……じゃなくて兵士長!」

ティーダだけは無言で頷く。この三者三様の反応を、ハリスは軽く一笑すると、呼び出した理由を話し始める。

「さて……今回呼び出させてもらったのは、君達に旧パーシオンに赴き、そこにある貴重品などの回収をしてきてほしいんだ」

「それだけですか？ その程度のものだったら、普通にやれた事ですよ？」

「うん、そうなんだけどね。 気になる事があるんだよ」

その言葉に、三人はハリスの言葉を待った。

「とにかく、今更ながらこれを頼んだのには、ティーダの戦力の復活だ」

「……俺の？」

ここまで言われてティーダは、ハリスが何を警戒しているのかわかる。恐らくはアルティロイドの存在だろう。かつてのサンバナ攻防戦時、そして兵士長になりあらゆる噂を聞くようになり、その存在を認識し始めたのだ。事実、現時点でハリスはアルティロイドの明確な存在こそ知らないが、うっすらと化け物じみた強さを持った存在がいる事は知っていたのだ。

「ティオちゃんは貴重品の回収、ティーダは護衛、カルマンはその

両方を重点として行ってほしい。……それでティオちゃん、その間、
ここの守りが薄くなってしまつから、ロビンを機動してほしいんだ
が？」

「わかりました」

「うむ。では、宜しく頼むぞ、三人共！」

それぞれがそれぞれの準備をする。ティードは特に装備しな
すものなどはない為、一人早々に出入口へ移動する。カルマンは、
副兵士長になつた影響からか、熱心に持ち物整理へ。

そしてティオは。

「力を貸してね……」

ティオはロビンのスイッチを入れる。

「タダイママイクノテストチュウ！」

ロビンの目が光る。電源が入つたという事だ。重々しい金属音と
共に立ち上がる。

「ワガマスターティオ。ドウシタナニカヘンダ」

「……えっ？ ううん、そんな事ないよ」

「ソウカナライイ」

「うん。ロビンにお願いね。私は用があつて少しここから離れ
るから、その間にここの人達を守つてあげてね」

「リヨウカイシタ。マスターノメイレイマモル」

少しだけ困つたように笑うティオ。だがその反応は、よく気にし
なければわからないような、微弱な反応だ。

「マスターじゃないよ、ティオ。それに命令じゃなくて、お願い」

「オネガイ」

「そう、お願い」

「リヨウカイ。オネガイノメイレイオネガイサレタ」

ティオは、その冷たい装甲を優しく撫でながら、

「うん、お願いね」

「よあ、ロビン！ 目が覚めたか」

ティオの言葉が消えてしまいそうな程に大きな声で、カルマンが

ロビンに話しかけた。

「カルマンワタシノトモダチ」

「おう！ ちょっとこれから出かけてくるから、留守番を頼んだぜ？」

「カルマンイツテコイ」

カルマンが勢い良く、ロビンの装甲を叩くと、鈍い音が響く。

続いてロビンも真似してカルマンを叩こうとするが、

「お、おい、お前はやめろって！ そんな馬鹿力で叩かれたら死ぬじゃまうよ！」

と、必死に止めた。

「さて。ティオ、準備は良いのか？」

「……うん」

「よし、じゃあ行こう」

カルマンとティオも、準備を済ませ出入口へ急ぐ。

三人が揃うと、いよいよ旧パーシオンへと向かう。

「ハリス兵士長には言っておるから。勝手に行ってくれだそうだが、あの人も色々やる事があるからな」

と、カルマンが適当な解説をする。

「ティード」

「うん？」

いまいち一步が踏み出せないといった感じで、ティオがティードに話しかける。

「どうした？」

「あ……いや、何でもない」

それっきり何も話さなくなるティオ。

この空気に挟まれて、肩身の狭くなったカルマンは、そんな空気を払拭するように叫ぶ。

「ほらっ、行くぞ行くぞ！」

カルマンに付いていくように、二人は歩いていく。旧パーシオンまでは、作戦を立てたわけではないが、前衛にカルマン、後衛にテ

イーダが付き、その真ん中にティオがいるという陣形になった。

(あいつ……)

その中でもティーダは、カルマンの動き方に、目を奪われた。

(かつての面影がどこにもない。全く隙の無い歩き方だ。 あい

つはあいつで、何かを失い、何かを得た、という事か)

かつては、どう甘く見ても足手まといな印象が高かった。しかし今のカルマンは、ベテラン以上のモノを持っていると、ティーダは評価する。

(まだまだだが、ソリディアと歩いていた頃の感覚が思い出せるな)

程なく歩いていくと、かつて暮らしていたレジスタンスベースのパーションが見えてくる。

ティオも、カルマンも、ここに足を踏み入れるのは数ヶ月ぶりの事になる。改めて見るその悲惨な場所は、二人からあらゆる言葉を出させなかった。

ティーダはティオの表情を伺う。無表情でその光景を見つめているようだが、何故かティーダには、はつきりとわかった。無表情という殻の中の感情は、確かに泣いている。

「さて……さつさと用件を済ませよう」

「あ、ああ、そうだな」

ティオとカルマンは、お互いに散らばり、それぞれに回収していく。ティーダも、辺りの気配を気にしながら、惨劇の場を見ていく。

数日前に立ち寄った時は、少ししか見ていなかったが、改めて見直すと、城国軍の徹底した報復攻撃の痕が見れる。

無意識に歩いて行くと、とある場所にたどり着く。そこはティオが好きな場所と言っていた、かつては美しかった土手になっている川だ。

『 あ、ここにいたんだ』

そう言って、ここで話してきたティオ。記憶の中の、幻想の彼女

を思い出す。

「覚えてる、ここで話した事？」

そしてそこにいるのは、現在の、現実のティオだ。かつてこの場所話した顔は、今はそこに無い。

「うつすら、とだけどな」

「……ティード、らしいね。ここで初めて話した時、私は自己紹介しようって言ったんだよ」

「そうだった……？」

「そうだよ。忘れたの？」

ティードは必死に思い出そうとするが、全く思い出せないでいた。何故か嘘をついた。

「いや、覚えてるよ」

「嘘つき。……あはは」

あまりにも小さかった。あまりにも小さすぎる笑い声だった。だがティードはそれを聞き取り、はっとティオに振り向いた。

そこには、本当に小さなものだったが、笑ったティオがいる。しかし、その表情はすぐに消えてしまふ。まるで自分で感情というもの、押し込めているように。

「ティオ！」

ティードは、その名を呼ぶ。

「ホタル……だったっけ。見れなかったな」

「なんだ　覚えててくれたんだ、やっぱり」

「やっぱり？　いや、そんな事よりも……ティオ。俺を見てくれ！　今まで真っ直ぐに目を合わせようとしなかったティオは、ゆっくりとだが振り向き、ティードの姿を見る。

振り向いたのを確認すると、ティードは右手小指を突き立て言う。「ここでは見れなかった。でも、いつか見よう！」

「……いつか、なんて……約束できないよ。だって……仕方がないのは、わかってるけど、ティードも私の前から消えちゃうんでしょ？」

「何だつて？」

「みんなそうだよ。私の前から、みんな消えちゃうんだ。みんな……。そんな約束、したくないよ。……今だって、私の目の前にいるティータは、私が作り上げた幻だつて思ってるんだからっ！」
まるで癪癢を起こしたように、わめき散らすティオ。現在のティオの精神は、とても不安定なのである。

「……ティオ。ティオ、俺を見る！」

泣いているわけでもないが、顔をくしゃくしゃにしなから、ティオは言われた通りにティータを見る。

「お前の、瞳の中に俺はいるかっ！」

「いる、けど……。だつて、幻かもしれないよっ、夢かもしれないよっ、もう……。人が死ぬのを見たくないんだよお！」

「っ、このっ、馬鹿野郎！」

ティータは一気に土手を駆け上がり、そこにいるティオに近付いていく。

「う、あ！？」

何も考えずに、ティータは目の前の少女を抱き締めていた。

「俺は……。幻でも、夢でも、ましてや偽物でもない。俺は、戻ってきたんだ。ここにっ！」

ティオは、ティータの抱き締めてくる力、その温もりを感じていた。感情を閉じ込めていた壁が、その暖かさにより、ほんの少しずつだが溶けていく。

「……ティータ……。っ！」

今まで溜め込んだ涙が、一気に溢れ出した。ティオの目からは、止めどなく涙という、悲しい記憶が流れていく。

「ごめん……。でも、俺はもうどこにも行かない。戦いに出ても、きつと帰ってくる」

「はい！」

泣きながら、しかし努めて明るく、ティオは小指を突き出す。

「何だ、それは？」

「指切り、だよ？」

「いや、だから何で？」

「きつと帰ってくるんでしょ？ ……なら約束、して」

ティードは視線を一度逸らし、もう一度視線をティオに向ける。

「いや、それはしない」

その答えに、ティオの表情が曇る。

「お前もさつき俺が出した指切りを、受けてくれなかったから」

「……ケチ」

「ケチで結構」

ティードの態度に、ティオは「じゃあ」と切り出すと、

「私の部品収集、きっちり手伝ってね」

「それは……その……」

そんな様子を離れた位置から見ていたカルマンは、色々な感情が入り交じった溜息を漏らしていた。

「良かったな……ティオ」

それは好きな人間が多少なりとも元気になってくれたという、安堵の溜息。

そして。

「じゃあな、初恋！」

言葉と同時に、ふっと力強く噴き出す溜息。カルマンは一人、言葉と溜息と共に、天空そらに返した。

14 出かけの前に

ティード、カルマン、ティオの三人は、旧パーションでのアイテム回収を終え、新パーションへと帰還していた。

「じゃあ、俺は回収してきたブツを、ハリス兵士長に渡しに行くから！」

カルマンは、パーション出入口に着くと、足早に中へ入っていく。見えなくなるまで見ていると、ふいにティオが口を開いた。

「信じても……良いんだよね？」

ティオは、いまだに目の前にいる、ティードの存在を信じきれずにいた。

「ふう。……ほらっ！」

ティードは、恥ずかしいと思いつつも、ティオに自分の手を向ける。ティオも、その手の意味がわからずに目を白黒させていたが、すぐにその意味を理解し、ティードの差し出された手を握った。

「……手、暖かい」

ティードはちらりと、ティオの顔を見る。ここ数日間に見た、凍りついたような表情は、少しずつ溶けていつている。

「ねえ、ティード」

「どうした？」

「うん……私もね、今度は戦うよ」

「どうしたんだ、いきなり？」

「私、ずっと人任せだったんだ。支配の時代を終わらせたい……そんな事を言い続けて、でも言ってるだけで。それで私はみんなに迷惑をかけてた」

「そんな事、あるわけないだろ」

「ううん、そうだよ。ソリディア兵士長も、ラルク先生も、デュアリスちゃんも、カルマン君も、そしてティードも。みんなそれ

ぞれが、自分のできる事をやろうと、そうやって時代と戦ってたん

だ。……私だけが何もしていなかった……」

独白めいたテイオの言葉を、ティータは黙って聞いていた。

「だから、だからね、私も私ができる事を探してみたの。そしたらね、私にできる事は、私が思っている以上にあっただ」

「それが……あのロビンとかいう機械兵士、か？」

「うん、私自身はティータ達みたいに戦う事はできないけど……私はこうやって戦う人達の援護をする」

そう言ったテイオの目は、カルマンに似通ったものがあつた。確固たる意思を秘めた目。感情を押し込めたが、その感情の火は決して消えていなかったのだ。

「それに……ちょっと医者の仕事に興味があつたから。ラルク先生の残したメモとか見てね、見よう見まねだけど、みんなの手当てとかもしたり」

「と、いう事は、機械の整備、作成から治療までやっているのか？」

「うん……そうなるかな」

「いくらなんでも、仕事をしすぎだぞ？ そんなに頑張りすぎるとお前がパンクしてしまうぞ」

「大丈夫だよ。程々にこなしてるからさ。ほらっ、ティータも少し休みなよ。兵士は私達と違って、体が資本なんだからね！」

半ば強引に話を終わらせ、ティータをパーション内に引っ込めた。

「うっ、ぐ……あっ!？」

突然の身体中に走る激痛。かつてテイオは、左胸に謎の痛みが走っていた。しかし今は左胸に留まらず、まさに体全体に痛みがあつた。

まるで中から強い力が、外に溢れていくような激痛。自分の体を突き破らんとする、その強い力のようなものを押さえつける為、テイオは自分で自分の体を押さえつけるように、抱き締める。

数分、いや数十分は経つただろうか。悶絶しながらも、痛みに耐え続ける。すると徐々に痛みは消えていく。

荒々しい呼吸をして、自身の状態を調べていくテイオ。ただ不思議

議な事は、激痛が終わった後、テイオの体からは血が流れるようになっていた。

「血……。私、もう駄目なのかな……」

自分も死んだ人のように、天へ還るのか。テイオはそんな事を思い、遙か空を見上げた。見上げた先には空と 力強く大地を照らし続ける太陽があった。

「うっん……弱音を吐いちゃ駄目。頑張るんだ……！」

足下がおぼつかないが、目に見えた太陽のように、力強く立ち上がった。

ティードは、テイオの事が気にかかり、何度も振り返り見たが、テイオが続いて歩いてくる事はなかった。

また戻るのも悪いと判断し、ティードはそのまま歩いていく。大した宛もない為、カルマンを追い、ハリスのいる場所へと移動する。

「やあ、ティード。ご苦労様だったね！」

愛用の眼鏡を、くいつと上げながら労いの言葉をかけるハリス。カルマンが入手した物を、その場に出し、それについて打ち合わせをしているようだった。

「じゃあ、ハリス兵士長、後はお願いしますよ？ 俺は少し仮眠を取ります」

「ああ、ゆつくり休んでくれ」

カルマンは、大あくびをしながら、そこから出ていった。ティードも、ただ立っているのも疲れるだけなので、適当に椅子へ座る。

「ふっむ……」

ハリスは品定めでもするように、ティードを見ている。

「な、何だ、気持ち悪いぞ……」

「あ、いや、はっはっは！ ちょっとね、しばらく見ない間に……ティード、ちょっと大人っぽくなったんじゃないか？」

「大人？」

「うん、気のせいかな。雰囲気丸くなった感じがするんだよね。」

初めて見た時は、どうにも刺々しい印象が拭えなかったんだけどね
思い出話を懐かしむように、ハリスは笑いながら話す。

「……何も変わってはいないさ。いまだに肝心な事がわからないし、
伝える事もできない」

「えっ、何が？」

「いや、何でもない。俺も仮眠するよ」

「あ、ああ。ティーダ！」

まだ何かあるのか、といったような表情で、ハリスに向き直るテ
ィーダ。

「お互いに……主人公にはなれなかったな」

「……はっ？」

「いや、何でもない。忘れてくれ」

ハリス自身も、何を言っているのだろう、といった感じで笑って
いる。

「最初から、主人公なんていないさ」

と、ティーダも返し、そのままハリスと別れた。

翌日、ティーダはテイオに起こされた。

「……ティーダ。起きて！」

「う……ん、うあ……！？」

寝ぼけ眼で、テイオを見ると、何かしらの準備をした姿が見える。

「な、何だ、その格好は……？」

「お出かけ！ ティーダ、約束忘れたの？」

「約束……？」

まだ意識がはっきりしない頭を、何とか働かせて、ティーダは約
束を思い出す。

「もしかして……？」

「そうだよ。私に付き合っつてね」

「それ、本気で言ってるのか？ まだ朝早いぞ」

「行くの、それに最終的な目的地はサンバナの町だし、日帰りする

なら早く出ないとね」

サンバナの町。支配解放大戦以降、どうなってしまったのか、ティードにはわからなかったが、ティオの口ぶりからすると何とか無事のようなのだ。

「……はあ、仕方がないな」

ティードは、やれやれといった感じで起き上がる。

「ありがとうね、ティード。ティードがいてくれれば、安心して機械兵士の部品集めできるよ！」

「ああ、それは良いんだけど……」

ちらりと見たティオの顔には、気力をみなぎらせた表情とは裏腹に、目の下にくまができてる。それに心なしか疲れが見える。

「お前、昨夜も怪我人とか、病人の手当てしてたのか？」

「え、あ、うん。だって頑張らないと、患者さんは苦しいもんね」

「……今日は行かない」

「えっ……？」

途端にティオの顔が曇る。

「そりゃ、他人も大切だろうけど、まずは自分の身からだ。他人見て、機械いじって、お前が休む時間はいつになる？ いくら何でも倒れてしまっぞ」

「だ、大丈夫だよ……適度に休憩は取ってるから……。心配、してくれて ありがとう」

「とにかく、今日は行かない！ 今日は何があっても、お前は休んでおけ」

「大丈夫……だよ……」

楽しみにしていた事が、急に中止になり、落ち込む子供のような顔。泣くわけでもなく、喚くわけでもなく、ただ黙って俯いたままのティオ。

ティードも心の中で葛藤があった。確かにティオが喜ぶのは、今日をティオの言う通りに過ごす事。しかしティオの体調を思えば、ここは多少悲しい思いをさせても、行かせるべきではない。休ませ

るべきなのだ。

「 わかったよ、今日は……諦める」

とぼとぼ歩いていくティオ。そんな後ろ姿を見ると、ティードには自分でも何かわからない、感情のようなものが込み上げていた。

「 つ、ティオ！」

返事は無く、ただ黙って振り向いてくる。

「無理はしない事。ちよつとでも体調が悪いところを見せたら、俺の判断で終了。この条件でどうだ？」

「ティード……？」

「但し、お前が元気な間は、俺が責任をもって、お前を」

徐々に声が小さくなっていく。最後の方は、完全に何を言っているのかわからない。

「え、もう一度……言って」

「同じ事は二度も言わない主義だ。それに早く行かないと、気が変わるぞ」

「ずるい……。でも、ありがとうティード、よろしくね」

結局、出かける事になった。

外へ向かう途中、ティオは何かあった時の為に、ロビンを起動させる。

「トウキョウトツキョキョカキョク」

独特な起動音と共に、目を覚ます機械兵士のロビン。動いてないロビンは以前見たが、動いているロビンを見るのは、ティードにとって初めてである。

「おはよう！ 今日はお出かけてくるから、ここの守備お願いね」

「マスターノメイレイリョウカイシタ」

ロビンはじろりと、ティードの方を向く。

「何だよ？」

「オマエガティード」

「そうだけど」

「マスター。ティーダノコトガスキヨロシクタノム」

「……つぶ!?」

顔を真っ赤にして、吹き出すティオ。反射的に、ロビンの動力を切る。

「ま、ままま、全く、この子は何を言ってるんだろっねっ！ たまに意味わからない事を言うんだよー」

焦りと白々しさが同居したような口調。

「そりゃ……さっさと直さないとな」

「うんっ！ そうなの、だから早く部品を集めてあげないとね！

……ティーダ、先に行つてて、この子を起動させたら、すぐに行くから」

「あ、ああ、わかった」

ティーダは、なに食わぬ顔で歩いていく。

その姿を見送ると、ティオはロビンを起動させた。

「ティーダノコトガスキヨロシクタノム」

「ま、また、変なの覚えて……ふう。そうだよ、そうやって面と向かって言えたらどんなに良いだろう。でも無理、いえ、した

くない。だって……駄目だった時、今の関係が壊れる方が、よっぽど怖いものね」

「マスターコワイカ」

「……うん、怖い、ね。はあ……人を傷つけないように、歩いていけたら良いのにね……」

ロビンは何も言わなかった。

ティオはもう一度、深いため息をつく、ティーダの後を追いかけていく。

15 伯パーシオンにて

「遅いぞ」

「そんなに遅かったかな」

実際は、そんなに待たせてはいないはずだ。ティオはすぐにティーダを追いかけている。これはいわゆる「お決まりの流れ」的なものである。

「とりあえず行くこうか」

「うん」

歩いていくと、見張りをしていた兵士が話しかけてきた。よく見ると、兵士はサンバナ戦時に共に戦った、タムサンだった。

「おや、お二方。お出かけかい？」

（しまった……存在をすっかり忘れてた……）

「はい、タムサンさん。ちょっとサンバナの町まで」

「そうかい、ティーダと一緒になら大丈夫でしょ。ゆっくり……とまではないかなだろうけど、楽しんでおいで」

「はい！」

張り切った返事をするティオ。

最近は本当に元気が無かったのだろう。そんな元気なティオの表情を見たタムサンは、そんな反応に驚きと安堵が入り交じった顔を見せる。

「いつてらつしやい」

タムサンに見送られ、少し歩いていくと、ティーダとティオが再会した場所へとやってくる。パーシオンの仲間達が眠る、墓のある場所だ。

「他の人はわからないけど……ソリディア兵士長のお墓は、本当の故郷に還ってあげたいな」

「本当の、故郷？」

「うん。後で知った事だけだね、ソリディア兵士長、マルシャナッ

ていう奥さんがいたらしいんだ。解放大戦前の戦いで、死んでしまつたらしいけど……」

複雑な心境で、これを話すティオ。

「色々、あつたみたいだね。ソリディア兵士長……天国でマルシヤナさんに会えたのかな？」

「さあ、そもそも天国があるのかさえも怪しい」

「もうっ、すぐそういう事を言う！」

少し怒つたように喋るティオ。これに対し、ティードもあまり気にした様子もなく、軽く謝つた。

「とりあえず、だ。あの男は、何よりも強かつた男だ。何があつたかは知らないが、きつと後悔の清算もできているだろう」

「うん、そういうもんかな」

「そういうもんだよ」

二人でソリディアの墓に手を合わせ、そして歩き出す。

そこから数分程歩くと、カザンタ山岳地帯らしい、何も無い場所へと移動できる。白の戦広野である。

「ティード、覚えてる？」

「何が？」

あまりに突発すぎるティオの質問だが、ティードはわかつていて疑問を投げ掛けた。

白の戦広野は、ティードとティオが初めて出会つた場所。そして再会の地だ。

「ここで、初めて出会つた事だよ」

「あ、ああ、そうだった？」

「そうだよっ、あの時、私」

ティオは、そこまで言つて、言うのを止めた。当の本人には、出会えた事の嬉しさもあるが、嫌な記憶も甦つてしまったからだ。

勿論、ティードもそれを思い出していた。普段は思い出そうとしても、思い出せないのに、どうでも良い事を覚えている、自分の頭を密かに笑つた。

「まあ、良いさ。早く行こうか、日帰りしたいんだろ？」

「あ、うん、そだね」

そのままにしても、気まずい沈黙になってしまっているので、ティータは「早くフォローする。」

「そういえば」

カザンタから、まずは旧パーシオンへの行き道。ティオがそんな切り出しから、ティータに話しかける。

「まだ聞いてなかったけどさ、大戦の後、どこにいたの？」

「聞きたいのか？」

と、ちらりと横目でティオを見ると、「聞きたい」といった好奇心に溢れた目が、一直線に向けられていた。

「まずは……砂漠だ」

「砂漠？」

「ああ、とある理由あって、俺は城国から東の地にある、エスクード城近辺の砂漠に落とされた」

「落とされた、よく生きてたね!？」

「いや、落下の衝撃よりも、砂漠の暑さの方が地獄だったな」

「砂漠ってそんなに暑いんだ？ 暑いとは聞いた事があったけど……」

……

本で読んだ記憶を遡るように、うーんと考え込むティオ。

「その砂漠のエスクード城で、一人の姫さんに会ってな」

「お姫、様……」

やや嫉妬のようなものが混じったような声。

「いや、何もないからな、断っておくけど!」

「いや、何も聞いてないからね、断っておくけど」

ティータは『あの事』を喋らなかった。自分ではない、エスクードのティータは、フィーネ姫に口づけをした。自分ではないが、体は自分だ。

「それから色々あって、ここに至るわけだよ」

「略しすぎ! ザードリブの方達は元気だった?」

「ああ、活きの良い奴も増えていたしな」

「そつか。東のエスクード城、それに北のシュネリ湖、そして今から行く、南のサンバナの町。この戦争が終わったら、ゆっくりと世界を回りたいな！」

「……そうだな、それも良いかもしれないな」

ティオは突然小走りし、ティーダの前に来ると、今までの楽しそうな表情から、少し真剣な表情に変わる。

「ティーダも……一緒に来てくれる？ 私と一緒に、世界を回るの……そうだな、お互いに生き残れたらな」

「うんっ！ ティーダ気をつけてね」

「何で俺なんだ？」

「前線で戦う人だから、何があるとも限らないでしょ……」

今度は心配そうに言う。ころころと変わるティオの表情に、ティーダは慌ただしさと、安心を覚えた。

ティーダの今までの話をしながら、歩いていくと程なく旧パーションに着く。

「あ、そうだ、ちょっと思い出した」

「あ、おい、一人で歩き回るな」

「大丈夫！」

ティーダは軽いため息をついた。

「まあ、結局は俺が面倒見るんだよな……」

愚痴を溢しながら、ティオを追いかける。方角からすると、レジスタンスから少し離れた位置にあった、ラルク医師のテントだろう。

「むっ!？」

追いかけている最中、突然の気配を感じる。完全な敵意を感じた為、ティーダはすぐに物陰に隠れた。

物陰から相手の姿を伺うと、そいつはすぐに発見できた。その相手はなんとアルティロイドの一人、光闇の騎士リオだった。

優雅に空を飛び、この辺りを見回すように眺めている。

(まずいな……あそこからだ、テイオが見つかる可能性が高い。それにあいつがいるという事は、闇の騎士クリッパーもいる可能性も高い。……さて、どうする)

気配を消し、物陰に隠れながらテイオを捜す。先にティーダが見つかっても、テイオが見つかっても、いずれにしても厄介になる。

今は相手を倒す事よりも、早くここから離れる事を優先する。敵の数が不確定な時点で、迂闊な戦闘は避けるべきだからだ。

「いない……つまんない」

リオは、報告にあつたティーダを捜しに来ていた。当然だが、クリッパーも共に来ている。

「見つかったか？」

「いないわよ、もう帰ろうよ、いい加減に飽きてきちゃった」

「ふむ……しかし、火の騎士の気配を感じたのだから」

「キャハハハ！ あんた、兄様とデキてんの、それヤバ、でもウケるわ」

小馬鹿にするリオだが、クリッパーは相手にする様子もなく、ひたすらに気配を探っていた。

「もういいよ、クリッパー。早く帰る？ これだけ捜していないんだから、勘違いがなんかだよ」

「……仕方がない。一時、撤退しよう」

クリッパーも賛同し、二人は城国方面へと飛んでいく。

それを移動しながらも、物陰から確認したティーダは、すつと立ち上がると、ラルク医師のテントへ走る。しばらく走ると、横道から声をかけられる。

「ティーダ！」

「テイオ、無事だったか」

テイオは草むらに隠れていたようで、身体中に葉っぱをまとわりつかせている。

「さっきのは……？」

「ああ、あいつらはちょっとな」

「あの二人……酷く嫌な感じを受けたよ。純粹でもない邪悪でもない、何か……生命として、とても不愉快になるもの……」

ティードは、黙ってティオの話を聞いていた。

（そうか、こいつは前にも一度、敵の気配が明確にわかっていた事があった。強すぎる気配の、あの二人にはティオも敏感に察知したという事か）

「ティード……?」

「いや、何でもない。用事は済んだのか?」

ティオは首を横に振った。その反応に、ティードは小さく微笑みながら言う。

「そうか、なら急いで済ませよう。またいつ二人が来るかわからないからな」

「あ?」

「どうした!？」

ティオが驚いたような顔を見せた為、ティードは辺りを警戒しだす。

「あ、ごめん、なんでもない」

「……状況が状況だからな。あまり、ややこしくするなよ」

「ごめんね」

ティオは、ラルク医師のテントへ走っていく。それを警戒しながら追っていくティード。

（ティード、笑った）

頭の中には、小さくといえども、笑ったティードの顔があった。

何をするにも、基本的には無表情で、感情を表に出す事をしないティードにとって、これは、とてつもなく大きな事件である。

ラルク医師のテントの用は、予備の治療備品だ。かなりの数のストックがあった為、一度には運び出せず、何回かに分けて取りに来ているのだ。

「最近ここに来たばかりだろ、もう無くなったのか?」

「違うよ、ちよっと手違いしちゃって、必要な物を取り忘れただけ

だよ」

ティードには意味もわからない、薬品や道具の数々。それを袋に詰めていく。

「これでよし。さて、次はサンバナの町だね」

「今度は忘れ物はないな？ またここに来るのは、さすがに勘弁してほしいからな」

「さすがにそれはないよ」

苦笑いしながら、返答するティオ。

次は旧パーシオンより、南下した場所にある、サンバナの町だ。

16 再びサンバナの町

「懐かしいよね」

「え、何が？」

サンバナの町に向かう際の道で、テイオが話す。

「あの時、私とティーダで歩いていたら、サンバナ町長さんに出会って」

「ああ、出会いというには、いささか乱暴だったけどな」

「あの頃って、今思えばまだ幸せな方だったのかな」

当時と違い、城国軍に荒らされた南の大地。その影響は、地上の人々だけでなく、自然にも影響していた。

「……そういう、事は、考えない方が良さ。なくなったもんは、どんなに嘆いても戻ってはこないんだから」

「ティーダ？ うん、そうだね。どうせ同じなくすなら、明るくいきたいよね。それが難しくもあるんだけどね」

「ま、そうだな」

なくした時の痛み。それとどう付き合っていくのかも、生きていく故の課題なのかもしれない。

「しかし、前々から思ってたんだけど、最近は城国兵をあまり見ないな。気配すら感じない」

強いていうならば、何故か旧パーシオンにいた、二人の騎士、リオとクリッパード。しかし考えたところで、ティーダに理由がわかるはずもない。

「こっぴどく攻撃してきたからね……きつともう、しばらくは攻撃する必要は無いと思われてるんじゃないかな？」

「そうだと良いが……だが、確かにシユネリ湖付近には、兵士がいたからな。テイオの推理は案外と当たっているかもな」

推理は半分正解、半分不正解といったところだろう。

現に東のエスクード城では、ほとんど兵士を見かけなかった。世

界全体で、城国の姿が少なくなっているのだ。では、そうなる要因は何があるのだろうか。

パーシオンに帰ってきてても、今のティータにはわからない事が多すぎる。

「あ、見て、ティータ！」

考え事をしてしていると、ティオの元気な声にかき消される。サンバナの町が見えたのだ。

だが、やはり解放大戦の首謀者でもある、サンバナの町は、かなりの攻撃を受けたようだ。遠目で見ても、むしろ遠目で見るからこそ、その被害の大きさがわかる。

「あれは……よくもまあ、原型を留めているな」

「サンバナの被害は凄いと聞いていたけど……これは酷いよ……」
「前に来た時の雰囲気は全くないな。壊滅しなかっただけ、運が良かったと取るべきか」

ティータとティオは、依然、戦いの爪痕が色濃く残る、サンバナの町に到着した。

外部に比べ、内部は綺麗な方だった。勿論、頑張つてここまで復元した可能性もある為、迂闊な事を言えたものでもない。

「この町は、強い戦士の人がいったりするから、戦えたのかもしいねいね」

「そうかもな。……さて、ティオは何か用があるんだろ？」

「あ、うん」

「俺は俺で用事ができた。ちょっと別行動にしないか？」

「良いよ。じゃあ、全部が終わったら、宿屋の前に集合にしよう」

ティータは、首を縦に振り、了解の意を示すと、ティオと別れた。目的の場所は、この町の町長のもとだ。解放大戦の黒幕といつても良い人物。この者ならば、何かしらの情報が得られるかもしれないのだ。

(確か、新町長の名はハインズ……だったかな。最も、まだ生きていればの話だが)

町長宅へと歩いていると、横からやかましい声で話しかけられた。

「ちよつと、ティードじゃないか、ティード!」

あまりのやかましさに、苛立ちを覚えながらも、そこを見ると、見覚えのある顔がそこにあった。

「パーチャ!？」

「そうだよ、パーチャだよ! 元気だったかい!」

パーチャはサンバナの町に住む、道具屋の女主人だ。以前、ティードがサンバナ攻防戦時に訪れた時に、ティオのワセシアの花の事で、お世話になった人物だ。

「元気そうだな?」

「ああ、元気がパーチャの取り柄だからね! しかし……しばらく見ない間に、随分と大人っぽくなったね」

「最近になって、そのセリフは何回も聞いたよ。自分では変わった気がしないけどな」

「成長つてのは、自分ではわからないぐらいの微弱なもんさね。大丈夫、ティードはどんどん良い男になっているよ!」

本気なのか、茶化しなのか、裏表の見えないパーチャの真意はわからない。

「そつえばパーチャ。この町長は、ハインズで変わりないかな?」

「え、ああ、ハインズ町長さんで変わってないよ。……一体何の用だい?」

「別に……ちよつと挨拶に行くだけだよ」

パーチャに合わせると、そのまま長話になりかねないので、ティードは無理矢理に話を打ち切る。

「良かったら、帰りに店へ来ておくれよ!」

後ろ手を振り、パーチャと別れた。

そして、ハインズ町長のいる場所まで来る。町の奥の方にある為

か、あまり建物に被害はないように見える。扉をノックすると、美人秘書のような人が顔を出す。

「えっと、どちら様です？」

「俺はパーシオンから来た、ティーダという者だ。ハインズ町長はいるかな？」

「パーシオンのティーダさんですね。少々お待ちくださいね」

女性が引つ込み、しばらく待っている、

「お待たせしました。中へどうぞ」

と、促される。そのままついていくと、ハインズ町長の部屋前へと着く。女性は軽くノックする。

「ハインズ町長、お連れしました」

「通してくれ」

女性は「どうぞ」と、扉を開けてくれた。中に入ると、すぐにハインズ町長を確認する事ができる。

（こんな簡単に会えるとはな、ソリディア……あんたの置き土産は大したもんだぜ）

「さて、何の御用でしょうか、パーシオンの使者よ」

「……使者、という程の事はない。パーシオンの名は使わせてもらったが、これは俺個人として、だ」

ハインズは「ふむ……」と、低い唸り声を出す。

「支配解放大戦、その首謀者の一人であるハインズ町長に、今の世界情勢を聞いておきたい」

「ほお、具体的には？」

「城国兵の数が、最近になって少なく感じる。これは一体どういう事なのか、わかる範囲で教えてもらいたい」

「確かに、ここ最近の城国の配置は何故か少ない」

「その口振りだと、あんたも状況をいまいち掴めていないようだな？」

「率直に言わせてもらおうと、そういう事です。何故、城国の侵攻が弱いのか、理由は一切が謎に包まれています。大戦によるダメージ

が高かったのか、あるいは他の理由でもあるのか……」

ティータは注意深く、ハインズを見たが、とても嘘や隠し事があるとは思えなかった。

「なるほどね。……もう一つ、良いかな？」

「何でしょう？」

「これは、全体ではなく、あくまでハインズ町長個人の意見として聞きたい」

ハインズは、ティータの瞳を伺うと、真っ向から向き合う姿勢を作る。

「あんたは、支配解放大戦を行った。もう一度、これを起こそうと考えたか、あるいは、もう考えているか？」

「支配解放大戦を、もう一度!? いやいや、確かに大戦に負けた直後は、そうも思いましたが、実際の失われた戦力では、そうもいえない事がわかりました。今の戦力では、城国に喧嘩を売る力は無いでしょう。……せめて、大戦時よりも大きな、いや匹敵する戦力さえ集められれば……」

「力があれば、再び大戦を起こしても良いと？」

「安易には決められません。しかし我々、地上に住む人々が平穏に暮らすには、城国と戦い勝つしかありませんからね。とても話し合いが通じる相手でもありませんし……」

「なるほど、良い回答を貰えたよ」

ティータは満足そうな顔で立ち上がる。

「もう、お帰りですか？」

「ああ、とりあえず今は十分な回答を得られた」

送り出そうとするハインズを、手で制しながら言う。

「見送りはいい。あんたも忙しいだろ？」

と、だけ言い、一人、ハインズ町長の部屋を後にした。

(王との決着は、いずれにしてもつけなければいけない。第二次解放大戦……近いうちに起きるだろうな)

建物から出ると、眩しい程に太陽が照らしていた。同じ太陽なの

に、森林地帯と砂漠地帯とでは、全く違う太陽になる事を、気が付かされる。

「さて、ティオ……の前に、パーチャに挨拶でもしておくか」

ティードは、サンバナの大通り、パーチャの道具屋へと向かう。目的地に近づくと、パーチャの道具屋前が慌ただしい事に気付く。ティードは何があつたのかと、急ぎ走っていく。

「ほらほら、見せもんじゃないよ！……お嬢ちゃん、しつかりしな！」

更に近づくと、パーチャが誰かを抱きかかえているのが見える。

「ティオ!?」

よく見ると抱きかかえられているのは、ティオだった。

「パーチャ!!」

「……あ、ああ、ティードかい。ちょっと待ってね、今は手が……」
「そいつは俺の連れだ」

「そうかい、それは都合が良い。店の中に入って、この子を寝かせてやっておくれ」

ティードはティオを抱きかかえると、店の中へと入っていく。その間、パーチャは店の前に集まった野次馬を追い払っていた。

（っ!? こいつ……なんて軽さだ。それに……こうやって近くで見ると、やつれている）

近くにあつたベットに寝かせると、しばらくティードはティオの顔を見つめていた。やつれた顔だけではなく、何故か全身から血が出ていた。決して外傷があるわけでもない。現に、今は血が出てくる要因となる傷が無いのだ。

「全く、こういう時ほど野次馬が鬱陶しく思う事はないねえ!!」

息も絶え絶え、額の大粒汗を拭いながら、パーチャが来る。

「良かったよ、ティードの知り合いで。その子、急に痛がり始めてね、そのまま気を失なっちゃったんだよ。全身から血も出てきていたし、いくらアタシでもどうしようかと思っただよ……」

「すまないな、迷惑をかけた」

「気にしてないよ。それより　ワセシアの花、その子へのプレゼントだっただね。……男なら、女の一人でも大切にしておやりよ？」

「お、俺とテイオは別にそんな関係じゃ……」
パーチャは聞いてないフリをしながら、店の奥に引っ込んでしま
う。

「ったく、話はちゃんと聞いてほしいもんだ」

「聞いてるよ。聞いてる上で言ってるのさ。……ほれっ！」
パーチャは白い布きれを投げてくる。

「そんな物しかないけど、目に見える血ぐらい拭いてあげな」

「ありがとう」

パーチャは「いいって！」と、手で制する。すると、再び奥の方へ入っていく。

ティードは、やつれたテイオの顔を見ながら、表面に付いた血を拭っていく。

（よく見ると、やつれているだけじゃない。顔色も悪い、それに細くなった腕。俺は、こんな風に一緒にいても、何一つこいつの事をわかっていなかった）

「　　ティード、ダ？」

「テイオ、目が覚めたか？」

虚ろな瞳で、テイオは辺りを見回す。

「ここは……？」

「心配するな、サンバナの町にある知り合いの家だ」

「……そう。ごめんね、何か、迷惑かけちゃったね」

「気にするな。もう、そんな事を気にするような仲でもないだろ？」

「　　そうだね、そうだよね」

何故かそれを聞き、嬉しそうにするテイオ。

「おや、目が覚めたみたいだね！　テイオちゃん、だったけね。お風呂の用意をしたからね、動けるようになったら入りなさい」

「ありがとう、ございます」

「さて……」

パーチャはティードに向かって手招きした。パーチャに連れられ、店の奥へ移動する。

「あの子、何かの病気なのかい？」

「いや……」

心当たりはあったのだ。事実、その事の究明の為に、北のシユネリ湖まで向かった。しかし、結局はティオの異変の原因が、わかる事はなく終わっていた。

「まあ、いいさ。何にしても、今日はここへ泊まっておいき。元気に振る舞ってはいるけど……相当な衰弱がわかるよ」

「ああ……すまない」

「困った時こそ助け合いつてね！」

パーチャは、ティードの肩を強く叩くと、店番へと戻っていった。

「ティード？」

「今日は大事を取って、泊まっていけだって」

「……申し訳ない事をしちゃったなあ」

「あいつは……パーチャはそんな事を気にする奴じゃない」

「パーチャさんっていうんだ。後でお礼をいっておかなくっちゃ」

サンバナの町で倒れたティオ。日に日に痛みを増していく、激痛の理由さえわからないまま、時は進んでいく。

17 火薬餅作用

突然、テイオが倒れる。運良く、パーチャに拾われ、休ませてもらえる事になったティードとテイオは、パーチャの道具屋にて一泊し、次の日の朝を迎える。

「パーチャさん、本当にご迷惑をかけました。ありがとうございますました!」

「本当にもう良いのかい? 倒れるなんて、よっぽどの事なんだ…遠慮しないで、もう少し休んでいても良いんだよ」

テイオは、にっこりと微笑みながら言う。

「もう大丈夫です! それに、待っている仲間も心配しますから」「そうかい……。あ、これを持っておいき」

パーチャは店から、中が見えない袋を持ってくる。

「これは?」

「火薬餅っていう食べ物さね。熱いうちにお食べ、美味しいよ」

「わあ、ありがとう!」

袋をテイオに渡そうとする。テイオも手のひらを上にして、その袋を受け取った。

「あつ!?!」

それに対し、何故か驚くパーチャ。そんな事も知らずに、嬉しそうに火薬餅を眺めているテイオ。

「あ、あんた、何ともないのかい……?」

「え、何がですか?」

「いや……アタシの思い違いさね」

深刻な表情で、俯くパーチャ。それを見かねて、ティードが話しかけた。

「どうした?」

「あの子、やつぱりどこかおかしいよ……」

「何がだ、はつきり言わないとわからないぞ」

「火薬餅はね、あの厚手の袋に入っているのは、名前の通り、とても熱いからなんだ。それこそ、あの袋に入っているといても、手のひらで受けたら、相当熱いはずなのに……」

「熱さに強い、とかじゃないのか？」

「いや……そういう類で、どうこうなる代物じゃない。あの子……まさか痛みそのものを感じていないとか、あるんじゃないかい」

「ま、まさか……」

二人は黙って、ティオを見つめた。全くと言っていい程に、ティオの顔からは痛みによる、苦痛が見えない。

「ちよつと、ティオ」

「どうしたの、ティード？」

ティオの手を掴み、その手のひらを見ると、重度というには軽いが、確かに火傷らしく赤くなっていた。

「お前……何も感じなかったのか？」

「え、あ、えと、いや、熱かったよ、火薬餅！」

ティードは振りかえると、パーチャが安堵のため息をつくのが見れた。

「……あほ」

と、言いながら、ティードはティオの額を、軽く叩いた。

「いたい……何で……!？」

「いや、なんとなく」

「ま、なんともなくて良かったよ……」

「すまないな、パーチャ。世話になった」

「お世話になりました、ありがとうございます!」

二人の言葉に、パーチャも笑顔を向ける。

「良かったら、また泊まりにおいで。こんなとこで良ければね」

ティードは小さく頷き、ティオは大きく右手を振った。パーチャもそれに負けじと、更に力強い笑顔を二人に送る。

予定よりも、一日過ぎてしまったが、二人はサンバナの町より旅立つ。

ティードダは、最悪の想像よりも、元気のあつたサンバナの町に安堵はしていたが、一つの不安点が浮き彫りになっていた。それはティオの問題だ。前々から、ティオには何か悪い症状が出ているという認識はあつたものの、それが何なのかわからずにいた。それに色々な事柄が立て込み、それを気にしている時間が無かつたというのも、一つの真実である。

だが、ティオは町で倒れた。これは異変そのものといっても過言ではない。

「……ティオ、さ」

ティードダの呼びかけに、無言で振り向くティオ。

「多分……もう一度、大きな戦争が起きる。次の戦争は、間違いなく勝たなければいけない戦いだ。だから、もしも勝つて、世界が平和になつたのなら……」

「……うん」

「世界が平和になつたのなら、俺と一緒に世界を回つて、お前の体を治せる人を捜そう。……それは、迷惑か？」

「ううん、全然迷惑じゃないよ。むしろ、私の方がティードダに迷惑をかけてないか、凄く不安で心配だった」

ティードダの心臓は、これ以上ない程に脈打っている。何故か、謎の高揚感のようなものが支配している。

「迷惑……は、かかつてるけど……俺は、俺はお前の隣にいるのが、俺でありたいと思つてる」

「ティードダ、それって……!？」

言つたティードダも、言われたティオも、お互いに何が起つていいのか、理解できていなかった。

一つ言える事は、ティードダもティオも顔が赤い、という事だけだ。

「……さあ、先を、急ごうか」

「ちよつと、ティードダ？」

何か行動のおかしいティードダ。その理由もわからずに、ティオも困惑した様子でついてくる。

ただ後ろから見ていたティオは、後々にティーダの様子を、こつ語っている。

「本で読んだ事のある『千鳥足』のようだった」と。

それから数時間、異様な程の口数の多い時と、真逆に口数の少ない時とを、繰り返すティーダに、ティオはひたすらに合わせ続け、ようやくパーシオンに戻る事ができた。

ただ更にティオを驚かせたのは、パーシオンに着いた瞬間、今度はティーダが倒れてしまった事だ。

「え、ちよつ、誰かつ、誰か来て！」

ティオの必死な声を聞き付けた、数人の兵士がやってくる。

「どうした!？」

「助けてつ、ティーダが突然倒れちゃったの！」

「よし、任せる！」

そのままティーダは、兵士達に運ばれていってしまう。それを心配そうに見つめていると、ハリス兵士長がやってくる。

「慌ただしいけど、何かあったのかい？」

「ティーダが突然倒れてしまった」

「ティーダが!？ 一体何が……ん？」

ハリスは、ふと目に入った物に注目する。

「ティオちゃん、それはもしかすると……火薬餅かな？」

「え、そうですけど……今はそれどころじゃ！」

「はーん。なるほどね、大した事じゃないよ。ま、とりあえず無事に帰ってきてくれて良かった。まずは中に入って、ゆっくり休みなさい。理由は後で話すよ」

ハリスは緊張感のカケラすら無い顔で、ティオに中に入るように促す。

まずは旧パーシオンや、サンバナの町で手に入れた物を、自室となっている空洞に置く。それからティオは、兵士達が集まる場所を

目指した。そこにはハリスとカルマン、そして数人の兵士しかいない。

「さて……まずはティオちゃん、お疲れ様。予定よりも遅かったから、少し心配したよ」

このハリスの言葉に、カルマンも「全くだぜ！」と同意する。

「すみません、色々とあつて……。それでハリス兵士長さん、ティードは一体!？」

「あ、ああ、理由はティオちゃんが持ってた火薬餅さ」

「火薬餅!? 何ですか?」

「火薬餅は二つの意味がある。一つは火薬を使用している、火薬のような、という熱さという意味がある」

ハリスの説明で、赤くなつた手を見るティオ。

「そして二つ目、これが火薬餅最大の名前の理由でもある……それはカヤクという、強い酒を使っているという事なんだ。そのカヤクの強さは、耐性の弱い者ならば匂いを嗅いだだけで、全身に酔いが回ってしまう」

カルマンはそれを聞き、一人大笑いしている。

「つ、つまり……ティードは……?」

「そう、別に体調不良や、悪い病気にかかったわけではない。全身に酔いが回つた、いわゆる酔っぱらい状態になっているという事さ」

ティオはそれを聞き考えていた。ティードが言った、あの言葉。

あれは酔いが言わせたものなのか、それとも本心だったのか。

ティードという人物は、滅多に感情を表に出さず、自分の考えを教えてくれないからこそ、真相の理解ができずにいる。

「あれ、火薬餅っていくつあるんだ?」

聞いてきたのはカルマン。ティオはとりあえず、厚手の袋を縛っている紐を緩めて、中を覗き見る。

「えっ……と、三つだね」

「じゃあ、俺が貰っても良いか?」

「そうだね、ティードは匂いで駄目って事は、食べられないだろう

し。私もそんなに強いなら、ちょっと遠慮しておこうかな」

「では、私も貰っても良いかい？ 火薬餅は非常に美味しいと有名でね」

カルマンとハリスが、一つずつ貰い、最後の一つを丁度良く来たタムサンが頂いた。

三人が美味しいと言い食べていたが、食べ終わる頃にはタムサンがフラつきだし、ハリスも少しの酔いが回っているようだった。カルマンだけが、普通に食べ終えている。

「俺の実家は、酒を扱っていてね。酒の濃度には滅法強いんだよ」という、理由もあつたようである。

ティオは、倒れたティーダの事が気になり、足早に向かっていく。この際、ティオも濃度にやられたのか、若干ながら足のふらつきを感じられた。

ティーダは、専用の空洞部屋にて寝かされている。顔の赤さが、酔いの回りを伺わせる。

ティオは冷水で、よく冷やした手拭いを、ティーダの額に被せる。

「……うっ！」

「大丈夫、ティーダ？」

目を開けたティーダの瞳は、焦点の定まらないものだった。酷く目が回っている状態だろう。

「ここは……？」

「パーシオンだよ。ちゃんと無事に帰ってきたんだよ」

「そう、か。何故か途中から、記憶がはつきりとしない……頭の中がぐらぐらしている……」

ティオは、ハリスに説明された事を、丁寧に教える。

「火薬餅が原因か。……まさか、そんな効力があつたとはな」

「私も知らなかったよ。突然倒れたから、凄くびっくりした。

その、さ、ティーダはその時の事を覚えてないの？」

「その時？ いや、悪いが全く記憶がない。町を出た直前までは、

意識があつたんだが……。何かあつたのか？」

「ううんっ、何も無いよ！ だから忘れて！ ……私、手に入れた物の整理してるから、何かあつたら呼んでね」

ティードの額に乗っている手拭いを、掛け直すと、ティオはその場から離れていく。

まだ焦点の定まらない瞳は、ただ黙つてその姿を見るしかなかった。

（酔っていた？ ……だから、俺はあんな事を言えたっていうわけか）

二人の想いは、同じゴール。しかし、二人の進む道は、互いに交わる事なく、無情にも事態は次の戦局へ向かう。

その頃、誰も知りえない所で、新たな戦況への引き金をひく者が、少しずつ、しかし確実に近づいていた。

18 引き金を引く者（前書き）

今回の話は、リオが汚い（教育上よろしくない）言葉を連発します。
好きじゃない方はスルー推奨。

18 引き金を引く者

火薬餅の一件から、数日。大方の予想通りに、城国からの南側のレジスタンス攻撃は、極少数に限られていた。新しいパーシオンは、洞穴という見つかりにくい習性を活かし、現在までの難を逃れている。

しかし、その時に見張りについていた、一人の兵士がとある異変を発見する。カザンタ山岳地帯の、高い位置という利点により、発見された出来事である。

それは遙か北の方から、煙幕のような煙が少しずつながら、南側へ近づいているという事だった。いや、煙幕というには少々穏やかなもので、実際にはまるで爆発の衝撃のような、砂埃が舞っているというものが正しいのかもしれない。

「ふむ……どうだい、ロビン。何か見えるかね？」

「ワカラナイ デモ タシカニヒトノヨウナモノガミエル」

ロビンの眼は、一種の双眼鏡にもなっており、遠くの景色を見渡せる。ハリスはロビンの見た報告により、今後の動向に対する考えをまとめている。

先手必勝。打って出るべきか、様子を見るべきか。パーシオン内での多数決も見事に割れてしまい、後は兵士長としての、ハリスの判断により決まるといふ状況である。

「ハリス兵士長、どうです？」

思考を巡らせるハリスに、問いかけてきたのはカルマンだ。

「カルマン、確か君は様子を見るべき、と提案したね？」

「はい、その通りです。せっかく見つけた洞穴という、最大の隠れ蓐になる場所です。俺達の誤った判断によって、一般の女子供を戦いに関係させるわけにはいきません！ 下手に攻撃を仕掛け、仮にもこの位置が見つかってしまうのは避けたい、というのが俺の意見です」

「あのやんちゃだったカルマンが、そういう冷静な判断をしてきてくれてしまったのが、どちらにするかの悩みの種になってしまつとはね……いずれにしても、私の力不足か……」

ハリスは、その眼鏡の向こう側に起きている景色を、今はただ傍観している事しかできなかった。

もしかしたら、あれは城国の罾かもしれない。そうだとすれば、ここは行くべきではない。しかし、もしもあれが仲間の危機だとしたら、そもも考えれば打って出て、助けるべきなのだ。現にパーションには、並の戦力を蹴散らせる力を備えている。

「カルマン、そしてロビン。肝心な時に、役に立たない私を呪つてくれても良い。君達に任務を命じたい」

一つの決心と作戦を考えたハリスは、その旨をカルマンとロビンに伝えた。

旧パーションから、やや北東に位置している場所。その爆発のような砂埃が上がっている、大元となっている場所がここだ。

そこでは、数人の兵士同士による、小規模な戦闘が行われていた。追手は城国軍、しかし数は二人。対する追われる側は、約十人ほどだろう。こちらも前線に出て、戦っているのは二人だ。

戦局は事実上の二対二。そして、その四人の姿は見知った姿なのだ。

「くっ……奴等は一体何者なのだ!? 我々がこつてもやられるとは」

「我が命尽きるとも、姫を無事に南の地へ、送り届けるのみ!」

追われる側の二人、その正体はティードが、遙か東の地で出会った者達。

エスクード城に、絶対の忠誠を誓う、複合生命体の騎士。鷹の騎士オルテンシアと、鷲の騎士バゼットである。

「キメラにしてはよくやる。強き剣、殺すには惜しいな……」

「キャハハハ! でも殺しちゃうよっ、どこの田舎のお姫様だか

知らないけど……お姫様つてだけで、イラってしちゃうじゃない？
殺っちゃえ、殺っちゃえー！」

そして対するは、城国が誇るアルティロイド。光闇の騎士リオと、
闇光の騎士クリッパである。ここまでは何とか、互角の戦いを
繰り広げている、オルテンシアとバゼット。しかし、それは明らか
な手加減によるものだ、これ程の腕を持つ二人が、気づかないは
ずは無い。

「この強さ……まさかティータと同じ、アルティロイドという奴な
のか」

オルテンシアの発言に、食いつくクリッパ。

「ほう、火の騎士を知っているようだな、一体どこにいる？」

「火の騎士？」

バゼットが聞き返した。

「火の騎士つていったら、ティータ兄様の事に決まってるじゃない、
アンタら馬鹿ね、大馬鹿だわっ、キャハハハ！」

「残念だな、ティータの事は我々も捜している最中だ。仮に知って
いても、お前達に教えるわけにはいかない」

お互いに、話の通じる相手ではない。そう判断し、オルテンシア
とバゼットは、エスクードが誇る、エクストリウム製の剣『マーク
X』を構える。

「良いだろう、行くぞ！」

再び、四人の騎士による戦いが始まる。

オルテンシアには、クリッパ。バゼットには、リオがつく。

「今までとは違うぞ？」

その大鎌を持っているとは、とても思えない速度で、間合いを詰
めるクリッパ。

「くっ！？」

オルテンシアは決して弱くはない、しかし最強のアルティロイド
と、双壁を成す実力を持つこの男に、はたして、その実力は活かさ
れるのだろうか。答えはノーだろう。

その突進だけで、全てを薙ぎ倒してしまいそうな、クリツパーの攻撃に、オルテンシアは、かろうじて構える事しかできない。

「……笑止」

漆黒の鎌ソウルイーターを、その怪力のままに、横へ薙ぎ払う。

オルテンシアも、必死の思いでこれを防御したが、虚しくもマークXは、簡単に音を立てて砕け、オルテンシアは後方へ飛ばされ、大木に激突する。

「くっ……そ、……化け物……め」

バゼットには、その光景が信じられなかった。過信しているわけではないが、オルテンシアは、自分と同じぐらいの能力を持った、強き騎士だ。並、いや、並以上の相手は、軽く捌ける力があると評価している。

しかし、目の前にいるクリツパーは、汗一つかかず、息すら乱さずに、そこに立っている。オルテンシアを相手に、物足りない、といった表情で、そこに立っているのだ。

「そんな馬鹿な。とても言いたげな顔ね、バツカじゃないの？ アンタらみたいな実験失敗の烙印を押された、クズが私達に敵うと思ってる？ キヤハハハ、ウケる！」

「何だと……!?!」

嘲笑うリオと、その冷静な表情を変え、怒気に満ちた目を見せるバゼット。

「王様いわく。人は『平等ではない』んですって！ 私もそう思うわ。だって私と貴方じゃ、生命の価値が明らかに違うものね、キヤハハハ！ 失敗した、いらぬ生命の出来損ない、そんな貴方達キメラは、とつとと死んでしまえば良いのよ、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね！ キヤハハハ、自分で死ねないなら、私が殺してあげる。子供が蟻を殺すように、遊びながら、ね？」

「確かに……我々は実験の結果に生まれた、失敗の産物なのかもしれない。しかし、私達の命は、エスクードに拾われてから今まで、一変たりとも陰る事のない煌めきを手に入れたのだ！ 貴様のように、

命の重さを理解できん奴に、易々と殺されてやるわけにはいかつ
！」

「生意気っ！」

リオは八つある月光の蝶パルティナを、バゼットに向ける。そし
て一撃を、放ってみせる。

だがバゼットも負けてはいない。その一筋の光線を、マークXを
用いて弾き返してみせたのだ。

「ならっ、これはどう！ いきなさい、パルティナ！」

今度は八つのパルティナが動き出す。自律行動をするパルティナ
は、その一つ一つが独自の動き方をし、バゼットを追いつめていく。
「いくら独自して攻撃してこようと、確実に撃墜すれば問題はな
い！」

八つの内の一つを、間合いに捉えたバゼットは、目にも止まらぬ
速さで接近すると、レイピアの形状をしたマークXを活かし、一気
に突きを繰り出す。

しかし、砕けたのは攻撃されたパルティナではなく、攻撃を仕掛
けたマークXだった。

「 そんな！？ 」

「キャハハハ！ バーカバーカ、パルティナは一つ一つがオリハル
コン、同じオリハルコンだってパルティナを壊すのは、至難の業な
のよっ！ そして馬鹿は馬鹿らしく、地に這いつくばりなさい！」
まるで雨のように、バゼットに降り注ぐパルティナの光弾。それ
を為す術なく、全身でくらってしまい、バゼットは力無く崩れ落ち
る。

「あーあ、飽きちゃった……クリッパー、最大出力、やっちゃうか
らさっ？」

クリッパーは静かに首を縦に振り、静かに上空へ飛び上がる。

「さっきのお姫様に、雑魚数人。どこに隠れてるのか知らないけど、
最大出力のパルティナは、この一帯を軽く吹き飛ばしちゃうんだか
らっ、死ね！ キャハハハ！」

リオも飛び上がり、八つのパーティナの砲門は、巨大な光をチャージしながら、地上へ向いた。

「キヤハハハ！ いけえー、パーティナ！ ゴミを片付け キヤア！？」

突然、リオに衝撃が走る。それは砲撃によるものだ。

「……やったのは奴のようだな」

クリツパーの眼は、冷静にその攻撃者を捉えている。

そこにいたのは、カルマンとロビン、そして。

「はあっ！」

クリツパーの視界の外から襲ってくる、あまりにも鋭すぎる斬撃。それもそのはずだ、それは最強の斬撃である。

「……しばらくは、俺がお前の相手をしてやる」

「 火の騎士！」

そして斬撃の正体は、ティードである。ハリスは『打って出る』という選択をしたのだ。

再び相対した火の騎士ティードと、闇光の騎士クリツパー。炎帝・ヴェルデフレインと、漆黒の鎌ソウルイーターが、交差した刃と共に火花を散らす。

19 二つの戦い・前編

それは、今から数十分前の事。

「……私達、パーシオンは打って出よう。仮にもあれが、我々と同じレジスタンスだったとしたら、それを地上に生きる仲間として、見過ごすわけにはいかない！」

ハリスは、打って出る事を選択する。その発言に、カルマン以下パーシオン兵達は、一層に気を引き締める。

「但し、目標の得体が知れない事も事実。よって目的地向かうのは、少数精鋭。ティード、カルマン、ロビンの三名とする」
ハリスの発言に、作戦室はざわめきだす。

「目標に当てるのは、我がレジスタンス、最高の兵士だ。もしも敵の罠ならば、三人でこれを、瞬時に撃滅。敵にこの位置を悟らるな！」

「もしも、味方がいたなら？」

非常に冷静な口調で、カルマンが質問する。

「うむ、仮にも味方がいた場合、ティードを攻撃の基点とし、ロビンで防壁とする。その間にカルマンが、誘導できるだけの人間を、安全な場所まで避難させる。いずれの場合にしても、重要なのは、敵にこの位置を悟られてはいけないという事だ。そして残った我々は、万が一に備えて誘導の準備だ！……何か質問はあるかな？」

すると、後ろの方から、小さな手が上がる。

「はいっ！」

「ティオちゃん？ 何かな？」

「えっと、質問というわけではないんですけど……」

話すべきか迷っている、そんな感情がはつきりと、読み取れるよくなティオ。ハリスも努めて優しく、声をかける。

「構わないよ、どんな事でも言ってくれて良い」

「……この作戦、私もティードヤカルマン君と一緒に、連れていってください！」

これを聞いたティードは、感情を顔には出さない。代わりにカルマン達が、驚いてみせる。

ハリスもまた、内心では軽い驚きはあったが、顔には出さず、その出で立ちは冷静である。

「と、いうのは？」

「え、あの、明確な理由は特には無いんですけど……こんな言い方、悪いとは思いますが、何となく、です」

眼鏡をかけ直し、「ふむ……」と唸り声をあげるハリス。

「俺は賛成、しておくよ」

今まで黙っていたティードが、静かに口を開く。

「何故だい？　ちなみに僕は行かせるべきではない、と考えている。現地では何が起こるかわからない。みすみす彼女を、危険に曝すわけにもいくまい」

ティオは、暗く沈みこんでしまう。

「正論だな。だが、こいつの勘はある意味で当たる。不確定要素は高いが、連れていく必要がある」

これにつられて、カルマンも口を開く。

「俺からもお願いします。きつと守り抜いてみせますから！」

ハリスは、ティード、カルマン、ティオの、三人の顔を見回した後、深いため息をつき言う。

「……わかったよ。但し、ティオちゃんは、カルマンとロビンの後方、何があっても逃げられる位置を、キープする事。そして戦闘そのものには、間接的にも、関与しない事。……この二つを、守ってくれるね？」

「はいっ！　ありがとうございます。……それと、わがママを言っつて、ごめんなさい」

「うむ。　よし、では作戦開始だ！　一人の死者すら出させず、各個が全力を尽くすように。以上！」

これが今回の作戦。

少数精鋭による行動。攻撃にティータ。防御にロビン。指揮にカルマン。そして味方がいた際の、誘導にティオ。

そして、現地に到着すると、ティオの勘は当たっていたのだ。オルテンシアとバゼットの時間稼ぎにより、エスクードの民は姿を隠せた。しかし、その結果として、リオがパルティナにより、一帯を吹き飛ばすという暴挙に出してしまう。

「カルマン マカセロ」

ロビンは自分の右腕を、リオに向け、狙いを定める。ロビンの右腕は、ギガンティックアームズといい、旧時代にあつたとされる、タイホウやテッポウのように、弾を発射させる腕だ。

「よし、ロビンが撃つたら、ティータはあの大鎌を持った奴を、抑えてくれ！」

カルマンの指示に、ティータも黙って肯定する。

そしてロビンの右腕から、一発の砲弾が放たれた。迫力ある発砲音と共に、飛び出すティータ。その鋭い刃は、もう一人の最強の騎士、闇光の騎士クリッパーを狙っていた。

「 待っていた、待っていたぞ！ 火の騎士との決着を、最強の称号を奪う日を！」

激しい火花と共に、交差する互いの武器。力でクリッパー、技でティータ。一進一退の攻防は、一瞬でも気を抜いた方が、その刃の餌食となってしまうだろう。

クリッパーの怪力からなる、大鎌からの一撃。それを受ける度にティータの体が右に左にと、大きくブレる。だがこれは、ティータだからこそ、この程度で済んでいるといっても、決して過言ではないのだ。

仮にも、この怪力を真っ向から受け止めたのならば、その力を止める事はできずに、吹き飛ばされる事は明確だ。

その証拠として、過去のクリッパーとの戦いが、全てを物語って

いる。解放大戦時、相対したティードとラティオは、その一撃により、激しく壁に叩きつけられた。同じくしてオルテンシアも、武器破壊という代償を払う事になったのだ。

(クリッパー、更にできるようになったな)

大鎌による豪快で鋭い一撃、それを受け止めるでもなく、捌く形での戦いをする。

「ぬうあつ！」

そのまま回転をしてしまうのではないかと、錯覚してしまうクリッパーの縦振り。それを見極め、ティードは大きく後方へ飛び、距離を離す。そのまま左手をクリッパーへ向け、火球を数発放つ。

(今回の俺の目的は、決してクリッパーを倒す事ではない。俺はクリッパーとリオが一緒にならないようにする為の、いわゆる時間稼ぎ)

放たれた火球を、防御も弾き返すわけでもなく、そのまま接近してくるクリッパー！

「この程度の攻撃、防御する必要も、避ける必要もない！」

突進の勢いと共に、ソウルイーターで突きを繰り出す。鎌で突きをして、刃は裏返ったままだが、クリッパーの怪力の前では、ただ物を振っただけで、一種の凶器となる。

ティードはその一撃をかわし、反撃を繰り出す。クリッパーの背中に走る剣線。そこから血飛沫が舞う。

「ぬ、うつ……ぐー!？」

苦痛に多少ながら顔を歪めるが、クリッパーはよろけを感じられない。

「お前は確かに強いかもしれないが……その強さに『あぐら』をかいてしまっているな」

「ほお、この俺が？」

「だから一対一で、背後を斬られるなんて事になるんだ。絶対的な経験値、それが俺とお前の差だ」

そっと目を瞑り、呼吸を整えだすクリッパー。ティードもわざと、

その隙に攻撃をしかけないでいる。

「なるほどな、そういう事か。この俺との戦いは……時間稼ぎ、という事だな」

「……どういう事だ？」

「とぼけなくて良い。敵である俺に対する、心優しい説教。それにここまで隙を見せている俺に、攻撃を仕掛けてこない」

「お見通し……ってわけか」

やれやれ、といった感じで、軽いため息を吐き出すティード。

そして対称的に、クリッパーは表情を変える事はない。

「だが俺には、そんな事実は興味はない。俺が興味あるのは、火の騎士と最強の称号のみだ！」

気合一閃。再び、その躍動する肉体と共に、一気に間合いを詰めるクリッパー。首筋に狙いを定めた攻撃を、ティードはヴェルデフレインを使い、受け止めてみせる。一瞬の力比べ、しかしすぐに勝敗はつき、ティードは大きく薙ぎ飛ばされてしまう。

「くっ……この、馬鹿力め！」

飛ばされながらも、再び火球を放つティード。

「時間稼ぎ……そんなもので俺を倒せるかっ！」

やはり火球をもともせず、突進移動をしてくるクリッパー。瞬きする間に追いつくと、その大鎌を上から下へと振り下ろす。ハンマーで殴られたような衝撃と共に、ティードは地面に叩きつけられた。とてつもない怪力による威力は、少しでも気を許せば意識を刈り取られてしまいそうになる。

「俺を圧倒してみせた、あの力を出せ。俺はこんなものでは倒せん！」

全身に走る痛みを耐え、剣を支えにしながらも、立ち上がるティード。しかし、その瞳の光はまだ失われない。

あの力 それは火を超えた、業火の力。風の騎士ジュークとの一戦で、教えられた覚醒の力だ。

(業火の力……あれ以来、やろうと思ってもできない)

業火の騎士への覚醒。できていたのならば、最初の段階で、クリッパーを仕留められていただろう。

「出し惜しみか、良いだろう。ならば、出さざるをえないようにしてやるだけだ」

ティードとクリッパーが、一進一退の攻防をする一方。カルマン達にも、命を賭けた戦いがあった。

ティータとは違う戦場、カルマンは冷静に周りを見る。

(倒れている二人の男、あれが回収目標だな。そして……あの空を飛んでいる女)

ちらりと横目で、リオを見た。相変わらず『あの時』と同じように、悪びれる様子もなく、他者を痛めつける事に、他者を殺すという行為に、喜びを感じている女。

誰に気付かれる事もなく、カルマンは両拳を強く握りしめた。

(ソリディア兵士長は、あの女に殺されたんだ……あの女にっ！)
現場を指揮しなければいけないという理性と、恩師を殺された事に対する、敵討ちをしようという本能。その二つがぶつかり合い、カルマンから冷静な思考を奪っていく。

「カルマン」

ふと思考の海から戻される。その電子音のような声の主は、カルマンの目の前に、盾となるように立ち塞がっているロビンからだ。

「シンパクスウ ガ ミダレテイルゾ オチツケ」

「わーってるよ！ ちょっと昔の因縁に、整理をつけていただけだ」
数ヶ月前、いや、今となっては約一年前といってもいいだろう。

支配解放大戦の最中、カルマンの尊敬した一人の男、ソリディアはリオに殺された。間接的とはいえ、カルマンの右目を失った、張本人ともいえる。冷静でいる、という方が無理な話だ。

「カルマン君！」

ティオが呼びかけてくる。振り向くと、既に目と鼻の先にいる。

「ばっ、バカ！ 駄目じゃないか、こんな所まで来ちゃっ！」

「ごめん……でも聞いてほしいの」

そう言つとティオは、左手で西の方角を指差した。

「あっちの方に、数人の人を感じるの。きつと倒れている人達の仲間だよ」

「か、感じるって……そんな事が……」

「キヤハハハ！ 作戦会議は済んだかしら？ 私にこんな恥をかかせたの……綺麗に死ねると思わないでよ」

悩んでいる暇は無かった。

リオは強い。カルマン自身も、リオを相手にして無事であるという、自信は全くないのだ。

「……よし、ティオはレジスタンスの回収へ向かってくれ！ うまい事回収できたら、そのまま戻らなくて良いからっ」

「うん、わかった！」

決まると同時に、ティオは西に走り出す。しかし、リオはそんなティオの動きを、見逃す事はなかった。

「私から 逃げられると思わないで！」

八つある内の半分、四つのパルティナにより、ティオに向かって光弾を放つ。

「ロビン！」

だが光弾は、正に鉄壁ともいえる、ロビンの装甲に阻まれる。

「オレ マスター ノ コトラマモル」

「ナイスだ、ロビン！」

「ありがとう、ロビン」

ティオは、ロビンが盾になってくれている間に、先へと進んでいく。

「ムツカー！ 機械人形ごときが、逆らうわけ？ 笑えない……笑えなさすぎて殺意がわいてくるわ」

遊びを楽しむような顔から、一気に残虐な素顔を現すリオ。その顔は、あまりの冷たさに背筋が凍る。

「へへへ……まずいな、目の前に敵がいるから、怒りのままに一発殴ってやろうと思ったけど……こりゃ、逆に冷静にさせられる」

「カルマン オレノ ウシロニイレバ ダイジョウブ」

「バツカ野郎、あいつが本気になったら、俺もお前も、一発でおじやんだぜ？ お前一人に……そんな真似させられっかよ」

「オレ ニンゲンヲ マモルタメニツクラレタ カルマン オレノ
タイセツナ ダチコウダ カルマン オレガマモル」

ここが戦場である事も忘れ、カルマンはうつすらと涙を溢れさせる。

「ダチ公か…… そうだな、俺とお前はダチ公だ！ だがな、ダチ公だからこそよ、どっちが守るとかじゃなく、お互いに守りあおうじやねえか。なあ、ロビン？」

「オレ ウレシイ カルマン イツシヨニタタカウ」

カルマンとロビンは、同時に構えをとる。二人でリオと戦うという、意思を見せつける。

「男ってバツカじゃないの？ 最強とか友情とか、暑苦しいたらありはしないわ！ しかも、そんな程度の事で、私を倒せると思ってるのかしら？ キヤハハハ！ お笑い」

冷たい理性と、熱い本能。この二つの言葉は、今のカルマンにこそ、ふさわしいだろう。

（あの女は、自分の実力に絶対の自信を持っている……だからこそ、つけこむ隙はそこにあるはずだ。今の俺達の目的は、敵を倒す事ではなく、味方を救助しつつ生き残る事！）

「じゃあ、死んじゃえ！ キヤハハハ！」

今度は八つのパルティナが、光弾を放ってくる。まるで雨のように降ってくる光弾は、避ける事さえも至難である。

「くそつ、あの武器には弾切れつてものは、無いのかよ！」

的を絞らせないように、とにかく動き続けるカルマン。対してロビンは、ずっとその場から動かず、降ってくる光弾をただ耐えている。

「そっちのガラクタは、動く事すらできてないじゃない！ キヤハハハ、傑作！ ほらほら、助けてあげないと、スクラップになっちゃうよ！」

無差別に落ちる光弾。助けに行くには、少しばかり骨が折れる作業だ。

ちらりとロビンを見るカルマン。そのロビンの目となつてゐる箇所は、光つてゐるものの、目線が合わさつたのかさえわからない。

しかし、カルマンには確かにわかつていた。

（カルマン キテハダメ テキノオモウツボ）

と、ロビンが言つてくれているに、違くない。少なくとも、カルマンはそう感じた。

（わかつてるよ、ロビン。今、感情に任せて、お前を助けに行く事が、俺とお前の友情じゃねえよな？ 時には打たれている仲間を見捨てる信頼、それが俺とお前さ。なあ、ロビン）

心なしか、ロビンもそれに頷いたように見えた。

「キャハハハ！ かつこつつけてる割には、逃げ回つてると、ただ防御してるだけ。そんな行動では、私を倒す事なんてムリムリ！」
相変わらず途切れる事のない、月光の蝶。パルティナによる弾幕。

友情や信頼を語る前に、この弾幕をどうにかしなければならぬのは、変わらぬ一つの真実である。

（確かに……こんな攻撃を、俺だつていつまでも避けられるもんじやないし、ロビンだつて受け続けられるもんじやない）

ロビンの装甲にも、限界はある。それはそう遠くない未来だ。そしてカルマンにも、体力の限界がある。

（くそつ、大見得切つてもこんなもんか！ 俺は あ頃から何か変わったのかつ。……テイオ、急いでくれ！）

その頃、テイオはテイオで、自分の感性を信じて、道なき道を進んでいた。

気配は殺しているのだろう、普通ならば気付くはずのないものだし、しかしテイオは、何かをわかつていた。

（確かにこつちの方なんだけど……私の勘違い？ ううん、駄目だ、弱気になつてちゃ）

もしかしたら間違いかもしれない恐怖。だがそれ以上に、頑張つてゐるティード、カルマン、ロビンを思うと、テイオの足は恐怖に

負けず、ひたすら前に歩き続ける。

そのまま歩いていくと、視界の悪い森林を抜ける。途端に入ってくる視野の中には、冷たく鋭い金属が見え、気付けばそれを向けられている。

「……ま、待つて！」

反射的に声が出るのと同時に、威厳のある、しかし可愛らしい女性性の声が響く。

「お待ちください、彼女は敵ではありません！」

刃を向けていた兵士達は、そつと武器を下ろすと、ゆっくり後退していく。その開けた視界から、声の主を探すと、そこにはエスクードの姫、フィーネがいた。

フィーネの事を、全く聞かされていなかったティオは、その美しさに目を奪われていた。

「私は　遙か東の地より来た、エスクードのフィーネです。失礼ですが、貴方は？」

「あ、えと、私はティオって言います。パーシオンというレジスタンスグループの者です。あなた方を救援に来ました」

何の言葉に反応したのか、そこにいた者達は嬉しさの入り交じった声が聞ける。フィーネ姫の近場にいたノリ又は、ティオに聞こえないように内緒話をする。話が終わると、ゆっくりとティオに歩みよってくる。

「失礼ながら貴女は今なんと？　聞き間違いでなければ、パーシオン、と……」

「ええ、確かに言いましたけど」

「おお、何たる偶然か！　ティードの所属するレジスタンスの方に接触できるとは！」

ノリ又の事をよく知らないティオは、それだけで困惑してしまう。

「あの……ティードの事を知っているのですか？」

「ありゃ、ティードから聞いていないのですかな？」

「え、あ、えと、その、エスクード城の方々ですよね。ティードか

らお話は聞いていますよ……でも、ちょっと驚いてしまつて……」
ティオはゆつくりと、エスクードの姫君　フィーネを見る。ティ
イーダの言っていた一人のお姫様。ティオは何故か、正体のわから
ない胸の高鳴りを感じていた。

「　とりあえず、こちらへ移動してください。ここから東に移動
すると、城国軍がいます。見つからないように移動しましょう！」

ティオはこの場から離れる為、現パーシオンと旧パーシオンの間
を指し、南へ移動する。エスクードの民も、フィーネとノリ又を
筆頭に、ティオに付いていく。

（フィーネ姫様……何だろう、不思議な人。普通の人とは違う……
これが、王族つて人なのかな……）

「　危ないっ、伏せて！」

びつくりするぐらいの、叫び声。あまりの出来事に、誰がそれを
言ったのかさえもわからない。

その声に反応できた人も、一体何人いただろうか。ティオは半ば
転ぶような形で、伏せる事に成功していた。

叫び声と同じように、突然轟く爆発音。どうやら、この辺りに攻
撃がきたらしい。ティオはゆつくりと、辺りを見回す。すると後方
を歩いていた、兵士達の半分は、今の爆発で死に至っている。隠れ
蓑になつていた森林も、焼けて吹き飛び、丸裸同然になつていたの
だ。

「　キャハハハ！　あらあら、流れ弾がとんだものを発見してく
れたわ！」

あまりにも不運すぎる。わずか一発の流れ弾が、計画の全てを台
無しにしてしまう。

「オルテンシア！　バゼット！」

倒れる二人の騎士を見て、悲痛な声を出すフィーネ。今にも二人
の方へ、走っていつてしまいそうなフィーネを、ノリ又は体を張つ
て止める。

「いけません、姫様！ 貴女様が行き、命を落とすような事があつては！」

「でもオルテンシアがつ、バゼットが！」

テイオは最初に見た時の、フィーネとの違いに驚く。あれ程の威厳と包容力のようなものを、感じさせられた女性。その人が、これ程に取り乱しているという事に、どれだけ二人の騎士が大切なのかを、テイオは感じ取れていた。

「……お、おいおい……まさか、こんなタイミングで、ご登場かよ！ さすがに……ピンチだな」

激しく消耗しているカルマン。ロビンも防御性能が追いつかなくなり、身体中がボロボロになり、白い煙を吹き出している。

「ったくよお、ティーダも来ねえし、この女には手も足も出せねえし、やってらんないぜ……ちくしょう！」

悪態をつくカルマン。無言のロビン。いまだ来る事のないティータ。やはり作戦には無理があつたのだろうか。

「悪態、を……つく暇があるなら、大丈夫……です、ね？」

「お、お前!？」

カルマンの近くで倒れていたバゼット。体に走る痛みにも耐え、ゆつくりと起き上がる。

「まだ……誘導するぐらいの、体力は残っていますね？」

「当たり前だ！ 仮に動けなくても、気合いと根性で動いてみせるぜ！」

気合いと根性の二つを聞いたりオは、腹を抱えて「キャハハハ！」と笑っている。

「あの女は、私とオルテンシアが受け持ちます……。君は姫様とノリ又様を！」

そのバゼットの言う事に呼応するかの如く、オルテンシアも立ち上がる。

「わかった……。でも、無理はするんじゃないぜ？ あんたらが死んだら、あの姫さんが悲しむんじゃないかねえのか」

バゼットは薄くにやりと微笑むと、

「承知……」

と、とても怪我人とは思えないぐらいに、冷静に言い放つ。

「オレ……タタカウ……」

そんな男達に、また機械兵士であるロビンも呼応した。これは奇跡とよべるのだろうか。

「ロビン、無茶するなよ！ お前だって……いなくなったら、ティオが悲しむだろ」

「ダイジョウブ ムチャハシナイ」

「ロビン……と言いましたね。貴公の力をお借りします。 攻撃

は私とオルテンシアがつ、ロビンは弾除けになってください！」

言葉と同時に、全員が動き出した。

オルテンシアとバゼットはリオに攻撃を仕掛け、ロビンは体を大の字にし、壁として大きく見せる。

カルマンもまた、ティオと共にエスクードの民を誘導する為に、力強く駆け出した。

「キメラ風情が、私に齒向かうなんて、生意気ね！ キャハハハ！」

容赦なく飛び交う、パルティナの弾幕。オルテンシアとバゼットは、鳥のようなスピードを活かして、その光弾を避けていく。だが、消耗した二人には、そこまで長い時間の回避は困難だ。事実、二人が上手く捌けなかった弾は、カルマン達の方へ何発か行っている。ロビンが体を張って、止めているのだ。

「さあ、急ぐんだ！ あいつらも長くは保たないぞ！」

強引ながら、カルマンはエスクードの人々を誘導していく。既に相手が城の人間だからと、遠慮している暇も余裕もないのだ。エスクードの兵士達が移動していく中、フィーネとノリヌは、いまだのその場から動こうとはしていないかった。

「姫様！ ワシらが動かねば、ホークとイーグルの迷惑になります！」

「ですがっ、私はもう近しい人が死んでいくのは嫌です！ また、

私の知らない所で死ぬなんて　！」

途端に、乾いた音がフィーネの言葉を遮る。音の正体は、カルマンがフィーネの頬を張った為だ。

「なっ、君、なんて事を……！？」

「今はそんな事を言ってる場合じゃねえだろう！　あいつらはアンタを生き残らせる為に、命賭けて頑張ってるんだ！　もしもアンタがそれで死んでみるっ、アンタはあの世でどの面下げて謝る気なんだ、アア！？」

フィーネは涙こそ流さなかったが、一瞬俯いたかと思うと、静かに小さくこくりと頷いた。

「ごめんなさい……私が冷静であるべきなのに……」

「謝るのは良いって、早くアンタもティオにくっついて行けっ！」
フィーネは軽く一礼すると、ノリ又には押され、ティオの先導へと付いていく。

「ったく、やれやれだぜ……」

「　カルマン　アブナイ」

口調こそ変わらなかったが、どこか切迫したようなロビンの声。それに振り向いた時は、遅かったのだ。

「ロビ　？　ぐっ、が、あ、あああああ……！？」

ロビンも守りきれなかった一発の光の弾。たった一発の光弾が、カルマンの右腕を貫いていったのだ。腕は飛んだのか、あるいは光弾の威力で蒸発したのか、カルマンの右腕は無くなっていた。

「カルマン」

ロビンは陣形を崩し、遅い足ながらも、必至にカルマンの元へと走る。

「ばっ……馬鹿野郎！　来るんじゃないっ……隊列を……隊列を乱すなっ！」

この隙をリオは見逃さない。見逃すはずがない。

「キャハハハ！　チャーツンス！　パーティナ、最大出力！」

上空に飛んでいたリオは、更に上空まで飛んでいく。

「くそつ、あんなに高くては、いくら俺達だって……！」
歯がゆそうに見つめる、オルテンシアとバゼット。

八つのパールティナの光が、更に大きくなっていく。あまりにも美
すぎる光。その美しい光は、命を奪っていく光なのだ。

カルマンも、痛みではつきりとしていく意識と視界の中で、ソリ
ディアの事を思い出してしまっていた。

（まただ……また、この光景だ。俺は結局……あの時と何一つ変わ
ってない。あの時は右目を失い、今度は右腕を失い……ハハハ、ざ
まあないぜ……。でも、でもな……あの時と一つだけ違うもんがあ
るっ！）

残った左手を、力強く握ると、カルマンは持てる力の全てを込め
て言った。

「ロビンッ！ 俺を……無様な俺を、助ける！」

八つの巨大な閃光が、地上へ、カルマンとロビンに向けて放たれ
た。

21 二つの戦い・後編

闇の騎士と、相対し続けるティード。相手が相手だけに、捌き続けるのにも骨が折れ、疲れの色が見え始める。

最も、それはティードだけに限られた話ではない。クリッパでさえも、めずらしく呼吸が乱れている。

だが当然の話だろう。いくら鍛えぬかれた体躯があっても、巨大な鎌を振るい続けられれば、こうならない方が、おかしいというものだ。「くっ……本気になれっ、火の騎士！」

目的の相手にすかされては、寡黙なクリッパでさえ、頭に血が上る。

だがティードは、そんな挑発には乗らず、静かに呼吸と体力の回復に努める。

（しぶとい……。あれだけの大きな武器を振っても、いまだに動ける体力。長期戦の勝負は、あっちに分があるか……）

冷静に判断できるのは、ティードが本気で戦っていないからだろう。いや、正確には攻める気で、殺す気ではないからだ。

当初の予定通り、時間稼ぎ。圧してくるクリッパに対し、退くティード。クリッパが前に出れば前に出るだけ、ティードも後ろに下がり続けている。

仮にも、お互いが倒す気で、この戦いに臨んでいたのなら、また違う行く末になっていただろう。

「火の騎士が来ないのなら……何度だって攻め続けるのみ！」

息も乱れているのに、その突進速度は衰えを見せない。右から左に走る大鎌を、後方飛びして回避する。そうして、またクリッパとの距離を開けていく。

「なっ、あれは!？」

その時、ふとティードの視界に入ってきたもの。カルマン達がいる場所に、いや、その遙か上空に、少しずつ大きくなっていく、一

つの光が見える。

「どうやらリオが、パーティナを最大出力で放つつもりだな……。ちっ……ここで戦いも終わりのようだな」

急に戦闘意欲を失ったのか、ソウルイーターを納めるクリッパ。 「アレの最大出力が、あの高さから放たれば、間違いなくこの辺りは、何も残らない廃墟となる。巻き添えは……御免被りたい」

それを捨て台詞にし、クリッパは城国方面へと、あっさりと飛んでいってしまう。

ティードも追撃する気は無かった為、剣を一旦鞘に納める。

「あの光は……まずい。放たれば、この辺りどころか、世界の半分は飛んでしまうのではないのか」

大袈裟かもしれないが、ティードは率直な感想として述べた。とにかく急ぐしかない、やや離れたその場所から、ティードは全速力で向かう。

右腕が消失し、流れ行く血と共に、無くなっていく意識。そんな状態で、八つの光に囲まれた天使の姿を、カルマンはどんな思いで見っていたのか。

「カルマン アキラメルナ」

天使が見える視界の中に、ボロボロになった鉄屑が現れる。

「諦めちゃいけないよ。……だから、お前に頼んだのさ」

薄れていく意識の中でも、その鉄屑が発する声は、より鮮明に聞き取れる。

「すまねえ……俺、まだ生きてたいんだわ……。他者の命をさ、踏み台にしても……まだ死ぬわけには、いかないんだ。悪い……」

独白めいたカルマンの言葉に、目の前の鉄屑は、何も言ってはくれない。

「ダチ公だから……お互いに守りあおう。……こんな、俺みたいな弱い奴が、言えた台詞じゃなかったな……。恩師を守れず……ダチを守れず……己のプライドすら守れず」

「カルマン ツヨイヤツダ キット マスターノノゾム ヘイワナ
ミライ ヲ ツクレル カルマン プライドカケタナラ オレ
ハ イノチカケル オレノイノチヲ スエ」

カルマンは涙が溢れ出していた。それを見られないように、残った左目を左手で隠す。

「まったく、饒舌になったと思ったら……気安く重い事を言ってくれ
るぜ……。でも」

カルマンは、残った左手を、高く掲げる。ロビンもまた、自身の
右手で、力強くカルマンの左手を掴む。

「へへ……ありがとよ」

「死ねっ、この辺り一帯ごと、私を馬鹿にする奴ごと……みんな、
光の中へ消えちゃえっ！」

ついに放たれた、パルティナによる巨大な閃光。その光を前に、
戦士達はただ指をくわえて、見ている事しかできない。

とても遅く、長く感じられた間。だが実際には、ほんの数秒た
らずのそれは、確実にカルマンとロビンの元へと着弾する。

とてつもない閃光の大爆発。その爆発の瞬間、辺りが白一色にな
り、その場にいた全員が、死を覚悟、いや、受け入れざるを得な
かっただろう。

少しずつ、だが確実に開けてくる視界。

「そ、そんな……何で!？」

誰よりも早く、辺りの確認がとれたりオは、その光景に驚く。最
大出力により、放たれた閃光は、確実に荒廃した大地へと変えるは
ずだった。

しかし、その大地は目の前に無い。リオにとって、このような体
験は、二度目である。そう、一度目は支配解放大戦にて。

「何で、何でよっ! 何でどいつもこいつも、こうなるのよ!
自分の全力を、完全に否定されたような、そんなトラウマを刺激
される。思った通りにいかない、子供のように喚き、怒りをあらわ
にするリオ。」

更に開けた視界には、少し前には人形を模していた、鉄の残骸がある。黒煙を撒き散らし、所々には、火が出ている。

「……………うう、ロビン……………？」

カルマンも、辛うじて目を開けると、もうそこには、かつての友の形は存在していなかった。

唯一あるものは、ロビンの右腕のみ。これだけが、綺麗に残った『ロビンだったもの』だ。

「悪い……………。お前は、凄いやつだよ……………ロビン。仲間を守る為に、命を賭けられる……………そんな簡単な言葉で、難しい行動を……………お前は意図も容易くやつちまう。……………つたく、お前に、ソリディア兵士長……………超えるべき壁が多すぎだぜ」

カルマンは、再び溢れてくる涙を、止める事ができなかった。止めたいとも思わない。

たった一つの小さな奇跡が、たった一つの小さな男の命を守った。それが真実。

「何なのよ、マジで！ あんな鉄屑のガラクタがつ、何でパルティナの攻撃を防げるのよ！ 冗談じゃないわ、ふざけんなっ！」
行き場のない感情が、言葉として出てくる。

「……………もう一発、もう一発撃てば良いのよ！ キヤハハハ！ そうよつ、そうすれば今度こそ、おしまいだものね！」

再び、パルティナの砲門が、地上へと向けられる。既に怒りに我を忘れ、一種の狂喜すら感じられる。

地上では、オルテンシアとバゼットが、倒れたカルマンの元へと駆けつけていた。

「おい、君！ 大丈夫か、しっかりするんだ！」
「……………これが、大丈夫に見えるのかい？」

オルテンシアは、カルマンをおぶりながら言う。

「それだけ言えるなら、大丈夫だな。……………もう無理だ、とにかく遠くへ逃げよう」

この提案に、カルマンとバゼットが頷く。

パーティナの攻撃威力を前に、逃げても意味がない事を、三人は理解している。理解しているが、何かをして足掻いてみないと、気がすまないのだ。

「よし、行くぞー！」

カルマンは、逃げながらも振り向き、ロビンの残骸を見つめる。もう動かないロビンを後にして、今は前へと進んでいく。

「キャハハハ！ 逃げる気？ 逃げても無駄よ、だって全てを吹き飛ばしてしまうもの！ ……みんな消えれば良いのよ、みんなっ！」

途端、リオの右側に位置していた、四つのパーティナが、音を立てて砕けた。いや、正確には切れた。

「 なっ!?!? 」

ふと見ると、そこにいたのは 。

「 ティーダ……兄様……! 」

炎帝・ヴェルデフレインと、斬鉄の技量を用いて、ティーダは八つある内の、四つを斬り伏せる。

「 お前にこれ以上、好き勝手させるわけにはいかない 」

「 そんな……クリッパーはどうしたのよ!?!? 」

信じられない、といったリオ。

「 お前が一発、でかいのを放つとわかったら、とつとと撤退したぞ。いずれにしても、この戦いは俺達の勝ちだ 」

ティーダが合流し、クリッパーが撤退した。まともやり合ったら、リオに勝ち目は無い。リオもそれをわかっているのか、怒りに満ちていた表情は、途端に冷静になっっていく。

クリッパーやリオのように、飛び続ける事ができないティーダは、一旦着地すると、いつでも跳べる体勢を維持している。

「 クリッパーのバカ……。今回は私達の負けを認めてあげるわ、でも覚えておきなさい！ 次に会う時は、必ず殺してあげる。キャハハハ! 」

最後に捨て台詞を残し、リオも城国方面へと飛んでいく。

多大な被害を出してしまった今回の戦闘。何とか勝つ事はできた

のかもしれないが、誰もが素直に喜ぶ事はできなかった。

結果的には、エスクードの民を救う事はできた。だがそのエスクードの民も、死人怪我人は多く、それを助けに出たパーシオン陣営も、カルマンの右腕を失い、ロビンを失った。

ティーダがパーシオンに戻ると、やはりというべきか、あまり良い雰囲気ではなかった。

当然の話だろう。今回の戦いで得たものは、エスクードを救えた事。しかし、本当に救えたのか、と問われれば、素直に「はい」とはいえない。

エスクード兵の半分以上が、名誉の戦死を遂げ、残った兵士もオルテンシアとバゼットですら、無事とはいえない状況である。何よりも、ロビンとカルマンという、戦力を失った事だ。この戦いでパーシオンが得たものは無い。

カルマンは出血こそ止まっていたが、集中治療が必要な事には変わらず、エスクードにいた医師と、ティオが付き添っている。ただ幸いな事といえば、エスクードの核となる、フィーネとノリヌが無事だった事だろう。

「どうだ、調子は？」

「あ……ティーダ、さん」

二人のティーダに対する区別だろうか。

ふと見ると、フィーネの左頬が赤くなり、少し腫れているのがわかる。

「怪我でもしたのか？」

そのティーダの問いに、一瞬だが、びくつと反応すると、フィーネは自分の手を被せ、左頬を見えなくする。

「私の……せいで……私が……あの人の、兵士生命を……奪ったんです……」

嗚咽混じりに、呟くフィーネ。ティーダは、すぐにフィーネの言う『あの人の』の正体に気付く。

「お前が気に病む必要はない。戦いとは、そういうものだ」

「でもっ……！」

「それにあいつは、タフな野郎だ。並大抵の事じゃ、あいつは死なない」

「でも……」

お互いに、それ以上は何も言わなかった。ただティーダは、何故 Eskurd がここまで来たのか、それを聞きたいと思っていた。

だがフィーネがこの調子では、今は聞く事ができないと判断し、ティーダは一人しておく事にする。

残るはノリ又に聞く事だが、本人の姿が確認できない。

「おい、ノリ又…… Eskurd のじいさんを見なかったか？」

ティーダは、パーションの兵士に尋ねる。誰かしらが、その行方を知っているだろう。

「あ、ああ、見たような見ないような……。間違いでなければ、ハリス兵士長のところに行ったと思うけど」

「そうか、ありがとう」

それは間違いなく、ノリ又だろう。そうでもなければ、誰が好んで組織の偉い人間に、会いに行くだろうか。

ハリスの元へと向かうと、予想通り、そこにはノリ又がいる。ただ目についたのは、わずか数時間の間に、ハリスの顔がやつれてきた事だ。ティーダ達が出ている間、相当なストレスと戦っていたのだろう。

「と、いうわけで、我々がここまで来た理由は、大戦に協力しよう」と

「それは嬉しい申し出だと思つのですが……その」

ノリ又のペースに、ハリスが対応できていない。見兼ねてティーダが声をかける。

「ノリ又。長旅の後だろ、少しは落ち着け」

「お、おお、ティーダではないか！ 久々じゃのう」

すぐに人懐こい顔で、迫ってくるノリ又。しかしティーダは、そ

んなノリ又を冷静にかわす。

「相変わらずじゃの、ティーダ」

「それはこっちの台詞だ。……大戦に協力、と言っていたが、そんなものをここで言ったって、どうにもならないぞ？」

意味がまいちわかっていない、ノリ又の表情を見て、ティーダはため息をついた。

「まあいい、詳しい説明は事態が落ち着いたらで良いだろ？ どうせ今は、動けないんだ」

「そうじゃの。……手段が無かったとはいえ、浅はかすぎたと、反省しとるわい」

ノリ又の説得も終え、まずはパーシオンもエスクードも、あらゆる面で、体制を立て直さなくてはならない。

解放大戦に参加しようと、やってきたエスクードの人々。第二次解放大戦と銘打たれる、大きな戦争の火種は、着々とその歩みを近づけていたのだった。

22 それぞれの行動

「と、いうわけで、ワシらは遠路はるばるやってきた、という事じゃ」

ノリ又は、やけに得意気に物事を言う。

前にティードが、エスクード城に世話になった際に、支配解放大戦の話をした事がある。ティードがパーシオンに向けて、帰っていった後、ノリ又はフィーネと相談し、再び解放大戦を起こすべく、ここまでやってきたらしい。

「ですからノリ又殿、大戦を指揮したのは、我々ではなく、サンバナという大きな町の町長なんですよ。我々には、大戦をしようと言っても、それを実行させる権力はありません」

かなり困った表情で、眼鏡を掛け直すハリス。体調が悪いのか、顔色は青白い。

「むう……では、早速ながらサンバナ町長とやらに、話をつけに行こうではないか！」

「そんな……小規模レジスタンスを率いる私に、サンバナ町長と話せる器なんて……。小僧と言われ、門前払いが良いとこですよ」

強引にでも前に進みたいノリ又と、テコでも動こうとしないハリス。両者はこのバランスを保ったまま、既に数時間が経とうとしていた。

あの戦いから五日、怪我をした兵士達も、何とか動けるようになり、生き残ったエスクード兵士達は、とりあえずパーシオンにて、手伝いをしながら暮らしている。

特筆すべきはカルマンであり、右腕を失うという大怪我をしながら、たった五日で歩き回っていた。

「聞いても、良いですか？」

問いかけたのは、フィーネである。

「ああ、何だ？」

その問いを、ティードが無愛想に受け止める。

「あの……カルマンという方、本当に人間なのですか！？ あんな大怪我で……動き回っているなんて、とても信じられない……」

「だからタフな奴だって、言ったはずだ。さすがにタフさと、馬鹿さは負けるな」

その回答に、複雑そうな表情をするフィーネ。その複雑な顔のまま、視線は動き回るカルマンを追っていた。

どうやら、カルマンとオルテンシアが、バタバタと何かをしているようである。二人は性格的に気が合ったのか、意気投合している。「ちよつとカルマン君っ！ まだ重症なんだから、そんなに動いや駄目だよっ、また傷が開いちやうつてば！」

珍しくティオが、鬼のような表情で怒っている。ティオからすれば、怪我人が動いているのは、快く思えない事だろう。

しかし怒るティオに反して、カルマンは元気そうに言う。

「大丈夫、大丈夫！ そんなに無理はしないって。ほとんど動くのは、オルテンシアなんだからさ！」

「そういう問題じゃなくて！」

やはり認められないティオ。そのティオの勢いにあやかり、オルテンシアも口を開く。

「こら、カルマン！ 俺はお前のパシリじゃねえぞ！ 俺は誇り高きエスクードの騎士、鷹の」

「わかったわかったって。パシリなんて考えてないってば、ちよつと協力してもらおうとしただけじゃんかよ」

悪びれる様子もなく、満面の笑みで言う。右腕を失った事を、全く気にしていないようにも見える。

それが良い事なのか、悪い事なのか。とりあえず元気なカルマンを見て、ティオは安心しておく事にした。

「何するのか、知らないけど……あまり無茶はしないでよね？」

ティオの心配に、カルマンは親指を上突き立て、大丈夫だという事を伝える。

そしてそのまま、カルマンはオルテンシアと共に、パーシオンから出ていく。

向かった先は、最近戦った場所、その跡地である。改めて見ると、リオのバルティナによる、砲撃の痕が色濃く残っていた。

そんな中でも、特にカルマンの目を惹いたのは、物言わぬ残骸と変わり果てた、ロビンの姿である。

(ロビン……)

残骸の前に立ち、何も言わずに立ちつくす。その表情には、パーシオンにて見せていた、明るい顔は無い。

「詳しくは知らないが、やけに明るいカルマンを見て、少しばかり違和感を感じていたが……」

「少しぐらいは、明るく振る舞っておかないと……あんたらの姫さんが、泣いちゃうだろ？」

意外な気配りに、目を丸くするオルテンシア。

「それに……そうしないと、俺の気持ちが悪されちゃいそうで……」
カルマンの気持ちを汲み取り、ロビンだったもの、に手を合わせるオルテンシア。

「ありがとうな、そんな事をしてくれるとは、正直思ってた」
「当然の事だ。機械兵士……というのは、よくわからないが、共に戦った戦友である事に変わらない」

しばらくそうしていると、カルマンは、落ちているロビンの腕を持つとうとする。しかし、腕一本といっても、重さはかなりのもので、片腕しかないカルマンでは、持ち上げる事ができない。

「やっぱ……重いな……」

「片腕では無理だろう？ それを持っていく気なら、俺が持つてやるっ」

「ああ、頼むよ。てか、その為にあんたを誘っただけどね」

「ったく、調子のいい奴だな」

やれやれ、といった感じで、ロビンの腕を持ち上げる。キメラといえども、ロビンの腕は、なかなか重い。

「しかし、腕なんか持ち帰って、どうするつもりなんだ？」

「へへへ、秘密」

他愛のない話をしながら、パーシオンに戻る、カルマンとオルテンシア。二人がここに来ている間に、パーシオンでは、ある取り決めが行われていた。

「何にしても、まずはやってみないと、始まらんじやろう？」

カルマン達が出かけている現在も、ノリ又とハリスの話し合いは続く。この場にいるのは、他にもティータとフィーネがいる。

最も、フィーネは話し合いに参加しているというよりも、ノリ又の押しに、困り果てているハリスに対し、申し訳なさそうに俯いている。

隣にいたティータは、小声でフィーネに話しかける。

「お前が一言出せば、どんな方向にだって、すんなりと行けるんだぞ？」

ほぼ崩壊しかけている、エスクードの姫でも、姫は姫だ。並の間よりも、その権限や価値は高い。

何よりも、このノリ又の説得も、最終的にはフィーネと、サンバナ町長のハインズが、対話をする事に意味がある。

「でも……それを決めるといふ事は、また大きな戦争が始まるという事。私には……今更ながら、それを決める覚悟が無かったのかもしれない……」

「本当に、今更だな」

平和の為にと言えども、その一言でたくさんの人々が死ぬ事実。それを一人の少女が決断するには、荷が重すぎるのではないだろうか。

それをわかっていながらも、ティータは呆れ口調で言う。

「とりあえず、サンバナという町まで連れていってもらえれば、あとはワシらでどうにかするわい」

「ううむ……しかし、私はここを離れるわけにはいきませんし……」。

副兵士長が今は負傷中ですし」

副兵士長、つまりはカルマンの話題が出ると、フィーネは責任を感じ、更に俯いてしまう。

「……では、他に誰が道案内を頼める人物はいませんか？」

「俺が行こう」

いつまで経っても決まらなく、同じ事を延々と繰り返す事に、業を煮やしたティータは、自ら道案内役をかって出た。

その発言に、その場にいた誰もが、ティータを見る。

「おお、ティータ！ やつてくれるのか！？」

「但し道案内だけだ。交渉の成功は、当然ながらあんた達にかかっているからな？ ハリスもそれで良いだろう？」

ハリスは「ああ、うん」と、何とも煮えきらない発言をする。

「よし、そうと決まれば早速出発じゃ！ 良いですか、姫様？」

「え、ええ……そうしましょうか」

ハリスと同じく、フィーネも煮えきらない。

カルマン、オルテンシアは外出中。ティオは怪我人の手当て。その結果、サンバナの町へ向かうのは、ティータ、フィーネ、ノリヌ、バゼットの四人になる。

（……また、サンバナの町か。ここまでくると、余程の縁があるんだな）

思い返せば、ティータは一度サンバナの町へ行くと、続けて行く事が多い。事実、最近でもティオと共に向かい、戻ってきたばかりだ。

気合い十分のノリヌ。乗り気ではないフィーネ。それに従うバゼット。行き飽きたティータ。あまりに珍妙な違いを見せる、四人は急ぎサンバナの町へ向かっていった。

パーシオンから、サンバナの町まで、およそ一時間。エスクード城から、ここまで歩いてきた疲れを、多少なりとも見せながらも、フィーネは頑張って歩き続けている。

だが、サンバナの活気を見た瞬間、そんな疲れも忘れてしまったようだ。フィーネだけでなく、ノリ又までも年甲斐もなく興奮している。

「これは凄い……まさかまだ地上に、これ程の集落があったとは……」

冷静沈着なバゼットも、サンバナの町を見て驚いている。ある意味で、これが初見の反応なのかもしれない。

「ここが大戦の敗北によって、城国に襲われていなければ、もっと活気があっただろうにな。町長がいるのはこっちだ」

本来の目的を忘れてはならないとして、ティーダは淡々とした口調で、道案内をしていく。

フィーネとノリ又は、辺りをキョロキョロと見回し、後ろから歩くバゼットは、二人が迷子にならぬように、見守っている。

町長がいる建物に到着すると、特にノリ又は身だしなみを、気にかけて始める。この辺りが、王族に使っていた為のものだろうか。扉を叩くと、以前と変わらずに、美人秘書が姿を現す。

「あら、確か貴方は パーシオンのティーダさん、だったかしら？」

秘書が覚えていた事に驚きながら、

「よく、覚えているな。今日はハインズ町長に客を連れてきた。会わせてもらえるかな？」

と、フィーネ、ノリ又、バゼットの事を紹介する。

「少し……お待ちいただけますか？ 現在はレジスタンス コロセオンのバース様が御目見えになっていまして……」

「……だそうだが、どうする。待っても平気か？」

誰に、というわけでもなく、ティーダは問いかける。そして、その問いにフィーネが答える。

「お客様がいるのなら、仕方がありません。宜しければ待たせてもらっても、大丈夫でしょうか？」

ティーダに答えながら、今度は秘書に問いかける。

「ええ、大丈夫です。では中にお入りください。入って右手に待合室がありますので、ここでお待ちください」

秘書は物腰穏やかに、案内すると、足早に自分の仕事に戻っていく。中の様子から、大分忙しそうだ。

そして次にティード達、四人が呼び出されたのは、数十分後の事である。

23 / 一分間の交渉

部屋に通されると、そこには見知った顔がある。髭面で、えらくガタイの良い大男。近隣のレジスタンス、コロセオンを率いるバースだ。

「おうつ、客人か。邪魔したな　って、お前……ソリディアんとこのティータか!？」

巨体に似合う、大きな声と大きなりアクションで、驚きを表す。

そんなバースを初めて見た、フィーネとノリ又は、ただ目を丸くして、目の前の男を見つめる。

「先客はあんただだったのか。解放大戦以来だな」

ティータとバースは、そこまで仲が良いわけでもないが、それなりの話をする。

(あの男……できるな)

一人、押し黙っていたバゼットは、遠目で見ただけだったが、バースの能力を感じ取る。

「ごほん……バース、悪いが客人の話を知りたい」

バースに盛り上がられては、いつまで経っても話ができない。ハインズは今までの付き合いから、それがわかっていて、無理矢理にでも話を折る。

「ま、仕方がねえやな」

めずらしくバースも聞き分けが良く、思いの外あっさりと黙りこむ。

それを見届けたハインズは、フィーネとノリ又に向き直り、

「どうぞ、お掛けになってください」

と、促した。

フィーネは上品に、ノリ又はどこか慌ただしく着席する。それでも座ろうとしないバゼットに、ハインズは座るように促すが、無言で首を横に振り、それを拒む。

(いつ何がきても、動ける体勢を維持する、か。……なるほど、良い戦士だ)

「それで、失礼ながら貴方達は一体……?」

そのハインズの質問に、フィーネが答える。

「私達は遙か東の地、デザイナードウ砂漠地帯の、エスクード城から参りました」

「エスクード城?」

疑問を浮かべるハインズに対し、言葉を出したのはバースだ。

「エスクード……あの世界でも有数の大国と賞された城の名か……解放大戦以前の戦時下に、一度だけ近くを通った事があるぜ」

「ほお……それほどの大国の方々が、一体こんな町まで何のご用件ですか?」

ハインズはどこか嬉しそうな口調で、その言葉を言う。

当然だろう。口には出さないが、ハインズは再び解放大戦を行い、次こそは城国に勝利しようとする、野心がある。大国エスクードと聞けば、軍事的に見ても、涎が出るほどの美味しい話を、期待するのも普通の事だ。

「……まず、一つ訂正させていただきます。我がエスクードは、確にかかつては世界有数の大国として、その名を轟かせていました。

しかし現在は、城国からの攻撃にあい、ほぼ壊滅状態というのが現状です」

顔には出さなかったが、ハインズは内心でがっかりしている。

「そんな状態にある、エスクードの方々が……結局は何のご用ですか?」

「お噂は聞いております。約一年前、支配解放大戦と銘打たれた戦争が、北と南が結集して行われたそうぞ」

「確かに。北のシュネリ湖、南のサンバナ。北と南を代表する二つの戦力を結集し、城国に戦いを仕掛けた。だが結果は我々の敗

北に終わった。かつて集められた戦力は、今となっては集められな
いでしょう。それだけの人員を我々は失った。いや……失ったのは、

人員だけではない。戦おうとする闘争意欲さえも、あの戦いの敗北は根こそぎ奪っていったのです。今現在、人々にそれを与えるには揺るぎない勝利の確約が必要になります」

ため息混じりに、ハインズは一気に喋る。それに嘘偽りは無いのだらう。ティータは、横目でバースを見ると、同じくして重い表情を浮かべていた。

「勝利の……確約。それに私達、エスクードの民も協力させてはいただけないでしょうか？」

交渉前とは違い、迷いのない瞳で、ハインズに問うフィーネ。

しかしハインズは、やや失笑気味に言う。

「失礼ながら……ほぼ壊滅状態にあるというエスクード城。今の時点で一体何人の戦士が、現存しておられるのかな？」

フィーネは俯き、エスクード兵の人数を思い出す。かつては千人単位を保有していたとされる戦力も、今となつては、数百人たらず。更にそれも、ここへ来るまでの間に減少し、数える程の人数しかない。

戦争　まして大戦と呼ばれるくらいに大きな戦いになると、数十程度など、戦力と呼べないのは、素人のフィーネですら、わかりきった話になる。

それ故に、フィーネは俯き黙つたままだった。

「……どうやら、そのご様子では、大戦に踏み切るのには、不十分だと推察しますが？」

「いや、エスクードの力はそんなものではない」

ハインズの言葉を遮るように、珍しくバゼットが口を出す。それが本当に珍しかったのだらう、フィーネとノリ又は、はっと視線をバゼットに合わせる。

(……バゼット)

大きな反応こそ示さなかったが、ティータもバゼットの動向に注目する。

「我等がエスクードには、確かに数字上の戦力は、あまりにも少な

い。しかし、今日まで城を守れてきたのには、理由があります」
その言葉に、ハインズも「興味深い」といった感じで、目を細める。

「私は　私はエスクードが今日まで生き残れてきた理由に、城を守護する騎士……鷹と鷲の騎士が存在する為だと自負しています」
ハインズは、大声で笑ってみせると、

「いやいや、失礼。　鷹と鷲の騎士、聞く分にはたった二人しかないではないか。たった二人の騎士が、一体この戦争という大きな渦の中で、何ができるといふのだ？　そこにいるバースでさえ、かつては『軍神』と呼ばれ、その強さは一騎当千。そして今でも、そんな強さを維持している、歴戦の強者だ。……そんな男がいても、戦争には勝てんのだ。たった数人の人間が、戦争を終わらせられるなんて、本などで描かれるおとぎ話に過ぎんのだ」

「騎士は確かに二人。だがその二人で数百、数千の戦力になりましたよう。おとぎ話かどうかはわかりませんが、鷹と鷲の騎士は、それすらも体現する能力を持っています」

バゼットも負けじと食い下がる。ハインズもバゼットも、お互いの経験と自信からなる正論だ。

だから引けないし、引きたくもない。

「にわかには信じられんな。当然だろう？　言うは易し、するは難し。そこまで言うのならば、証拠としてバースを倒してみせよ。それならば説得力としては、十分すぎる」

バースは戦いに関しては、いつでも良いのか。高揚を体現したような、静かな笑みを浮かべる。

対するバゼットは、寡黙の一言。そのままフィーネとノリ又を見ると、二人も証明するには、戦うしかないと判断したのか、静かに頷いてみせる。

それを確認したバゼットは、ゆっくりと口を開いた。

「　良いでしょう。但し、これは私個人の申し出があります」

「ほお、何かな？」

「ただ倒すだけでは、貴方様を説得するには、あまりにも弱すぎる……」

そう言うと、バゼットは右手人差し指を、突き立て見せる。

「一分。……一分で歴戦の勇者、バース殿に勝ってみせましょう」
その言葉に、反応しようとしたハインズよりも先に、バースが応える。

「ガツハツハツハ！ 一分か、面白い事を言う……小僧オ、大口も大概にせえよっ！」

殺気みなぎる、バースの口調と声。ハインズ、フィーネ、ノリヌの三人は、それだけですくみあがってしまう。

「大口？ 事実を言ったまでです。そして 私はエスクードが栄光の道を歩む為ならば、どんな敵とでも、戦ってみせましょう。その標的の一人目が、軍神バース、貴方だというだけの話だ」

「大口かと思つてみりゃ、なかなかどうして、しつかりと相手が見えてやがる。……良いだろう、俺もお前という男と戦ってみたくなつた！ 条件の一分も受けてやるう」

睨みを利かせていたバースも、バゼットの言葉に態度を改める。

ただの大口ではないと、わかつた為だ。

そしてこれにハインズも動く。

「よし、ではエスクードの力を見せてもらおうではないですか、宜しいですね、フィーネ殿、ノリヌ殿？」

「え、ええ……」

「ふふん、鷲の騎士イーグルの力を見て、腰を抜かさんようにな！」

二人の反応を確認し、ハインズは、バースとバゼットの戦いを承認する。あくまでも、エスクードの力を見る為のテスト試合である。お互いに命を取る行為は勿論、大怪我をさせないように、という合意が成される。

とはいえ、バースが暴れまわるだけでも、周りに迷惑がかかる事を考慮したハインズは、サンバナの町から出て戦うように指示する。
「ちっ、そんなに信用ねえのか、俺はよ」

と、愚痴るバースに、

「念の為だよ、念の……」

と、説得するハインズ。

とりあえず、そんな事で一同はハインズに連れられ、サンバナから出る。

場所はサンバナから、約五分歩いた所にある、見晴らしの良い平原だ。ここは、かつてのサンバナ攻防戦時に、木々が失われた場所であり、その際のダメージがいまだに色濃く残っている。

「バゼット」

心配そうな口調で、バゼットに話しかけるフィーネ。それに対し、バゼットは何の不安も見せず、淡々とフィーネに答える。

「申し訳ございません、姫様。一兵士風情が出過ぎた真似を致しました」

「い、いえ……良いのですよ、バゼット。私は交渉を成功させる自信が無かった、馬鹿な話ですね、ハインズさんの雰囲気、完全に吞まれてしまっていたのです。……でも、貴方のおかげで光が見えました。ありがとう、バゼット」

「光荣です、姫様。必ずや勝利し、エスクードの民の願いを叶えましょうぞ」

そう言うと、バゼットはエクストリウム製レイピア、マークXを携えて、前へと歩を進めていく。

待ち構えるは、屈強な大男、歴戦の勇者『軍神』バース。

いわゆる人間クラスでは、この男に勝つのは、不可能 いや、至難の業と言えよう。

「さて……一分、だったな。一分でこの俺を倒す、どんなものか、早くやりあってみたいもんだぜ？」

バースは愛刀の剛力丸。巨体に見合った大剣。

いくらエクストリウム製といえども、レイピアのような細身剣では、一発でも受ければ、いとも簡単に折れてしまいそうだ。

「では、合図は私が。このマーネが落ちたら、始まりの合図だ、双方とも準備は良いな？」

バースは豪快に、バゼットは小さく頷く。

それを確認したハインズは、金貨を上空に弾いた。ゆっくりと、しかし確実に落ちていくマーネ。次の瞬間には、地面に落ちる。

その金貨のように、弾けるように飛び出すバゼット。そのスピードは、まさしく空を舞う鷲。

(速い……まともにやれば、クリッパーよりも速いだろうな)

端から見ているティードにも、バゼットの速度はそう見えたのだ。対してバースは、完全に受け姿勢。体格を利用して、正に岩のように構えている。あまりの威圧感に、通常ならば、それだけで圧倒できてしまえそうだ。

まず攻撃を仕掛けたのは、その勢いのままに前進したバゼットだ。レイピア特有の、鋭い突きによる攻撃。その細身の刀身と、繰り出す攻撃の速さにより、一瞬ながら、剣が見えなくなる。

しかし、そんな攻撃も、バースは剛力丸を使い、完全に防御してみせる。激しい金属音と、飛び散る火花。防御されると同時に、バゼットは上後方に、飛び上がり、一瞬で間を開く。

「オラオラア！ そんな程度では俺は倒せんぞっ、まして一分など、笑わせるな小僧オ！」

(ちっ、あのガキ……なんて攻撃をしてきやがる。鋭く軽そうに一撃の見た目に反して、その実、鋭く重い。たった一発で腕が痺れちまった、人間ができる腕力の範疇を超えとるぞ、あのガキ……) このあたりは長年の経験。バースは決して、痛みを顔に出さないのだ。

上空に飛び上がったバゼットは、バースのポーカーフェイスに、ある意味で騙された。

(一撃で完全に終わらせるつもりだったが……まさか、あれを耐え抜く人間の兵士がいるとは。さすがに勇者として崇められるだけの事はあるか)

一撃で決められなかった事に対する、驚きの感情はあったが、バゼットは冷静に、すぐ次の攻撃へと移行する。空中で一瞬だが停止し、そのまま垂直に落ちる。空中にて当たり前のように、姿勢制御をしてみせるバゼットに、バースとハインズは驚きを隠せない。

だがこの行動は、同じようなタイプのオルテンシアと戦ったティードは勿論、フィーネ、ノリ又共にこれが当たり前の事として見ている。人間には到底想像もできず、真似する事もできないような動きが出来るのも、複合生命体キメラの性能に大きく依存している。

落下慣性がついたまま、再び突きを繰り出すバゼット。初回の攻撃もなかなかの速さだったが、今回の攻撃は『落ちてくる』という観点もあり、更に速く感じられる。実際に速いのだが、反応できなければバースの負けとなる。それだけはバースのプライドにかけても許されない。

「くっ……そ、があっ！」

既にバゼットが速すぎて、バースには何が起きているのかわからない。だがそれでも、長年に渡り磨いた勘を頼りに、防御行動へと移るバース。剛力丸で完全に自分の体を隠し、前方からの攻撃を完全に防ぐ構えだ。

時間にすれば一秒だろうか。刀身を盾にしたその瞬間に、先ほどの一撃とは比べものにならない攻撃の衝撃が、バースに襲いかかる。初撃と大きく違うところは、その一撃によりバースの体が大きく後方へと、弾かれた事だ。完全に腕の感覚がなくなり、思わず剛力丸を手放してしまう。途端に視界が開け、バースの目の中には、その一撃を喰らわせた張本人、バゼットの姿を確認する。

一瞬でポークフェイスが崩されたバースとは裏腹に、相変わらず冷静な表情を崩さないバゼット。そしてその冷静な矛先は、バースを完全に捉えていた。そのまま一気に間合いを詰め、その剣をバースの首元へ突き立てる。

「一分。これで文句はなかるう？」

戦闘時間はわずか二十秒。一分の条件を遥かに凌駕するスピード

で、歴戦の勇者『軍神』バースから勝利を奪ってみせた。

これに驚いたのは、何よりも戦っていたバースだが、それを見ていたハインズが、ある意味で最も驚いたのではないだろうか。ある種の胸の高鳴りが抑えられなかったのだ。年甲斐にもなく、呼吸が荒く、手に汗を握っている。

それがどういう意味を成していたのか。いずれにしても、エスクードとの交渉は順調に進んでいき、第二次支配開放大戦への準備と計画が進行していくのだった。

24 降り出す雨

バースとバゼットの、交渉試合から翌日。ティード達は、サンバナの宿屋に泊めさせてもらい、一夜を明かした。

あの後も、簡単な話し合いが行われ、エスクードも含めた、第二次支配解放大戦の始まりの経緯を取り決める。物量に関しては、前大戦の方が、遙かに多かったのは事実だが、二回目となる今回は「量より質」というように、ティード、オルテンシア、バゼット、バースといった、単騎でも強さを発揮できる兵士を、前面に押し出す作戦が、検討されていた。

だが、いずれにしても、南のレジスタンスのみで、全てを決めるわけにもいかず、北のレジスタンスを代表して、ザードリブのラックとの話し合いを望んだ。すぐに使いの者が出され、まずはラック到着を待つばかりとなる。

到着までの間、フィーネ達はパーシオンに戻るべきかを考えたが、迷惑をかけまいとして、このままサンバナに残る事を決める。ハイonzもこれを了承し、フィーネ、ノリヌ、バゼットの三人は宿屋に残った。

翌日にはティードは、フィーネ達と一旦別れ、パーシオンへの帰路へとついていた。

一方、ティード達がサンバナにて交渉している間に、パーシオンでも別の交渉が行われていた。

「で、できるわけないでしょ、そんな事！」

怒鳴り散らすティオ。ティオという人物が、他人に怒鳴りつけるのは、極めて珍しい事なのである。

好奇心こそ旺盛であれ、基本的には争いを好まず、非常に温厚な性質の少女である。

そんな少女の怒りの矛先は、目の前で座り込んでいるカルマンだ。

ついでにオルテンシアもいる。

「もうっ、オルテンシアさんも何とか言っちゃってくださいよ！」

「え、あ、いや、その、ね」

普段は物怖じする事のないオルテンシアも、目の前のティオの剣幕により、しどろもどろしてしまふ。それほどの怒りをあらわにしている、という事になる。

「頼むよ、ティオ……。俺は決めただ、お前が認めてくれるまで、俺はここを動かねえって」

頭を地面につけるまで、土下座しているカルマン。そんなカルマンを見て、怒りと困惑が入り乱れるティオ。

「カルマン君の……。その決意はわかってあげたいと思うよ、でも……。でも無茶だよっ、『ロビンの右腕を移植』するだなんて！」

これがカルマンの、頼み込んでいる理由。自身の失われた右腕と、残ったロビンの右腕の移植。つまりは生身の人間のカルマンに、機械腕をくつつけるといふ事になる。

「無理は承知してる、失敗して、兵士生命が完全に絶たれたって……。勿論、恨んだりはいしない。でも、このまま終わっていくのには、絶対に悔いが残るんだ！ 頼むよ、ティオ、俺にロビンの腕を移植する、手術をしてくれ！」

これでもかと、これ以上は無いぐらいに、頭を地面に叩きつけ、擦りつけて、頼み込むカルマン。

その行動に、ティオは十分程だが、黙りこみ、何かを考えるように、洞穴の天井を見つめていた。

その間も、カルマンは土下座の体勢を崩す事はしない。

「そもそも、2メートル近かったロビンの腕、それをカルマン君に移植する、アンバランスは元より、その重量に苦しめられる事になるよ？」

「覚悟の上だ」

「それだけじゃない。さっき、カルマン君は『兵士生命が完全に絶たれたって』って言ってたけど……」

テイオは一瞬の間を空ける。その一瞬に、その言葉を言う為の、力を溜めているように。そして一気に、その力を解放するように、

「甘いと思うよ！」

思うよ、と言い、完全な断言をしなかったあたりが、テイオの優しさだろうか。だがあまりにも重たい言葉に、土下座していたカルマン、そしてオルテンシアも、視線をテイオに集める。

「この手術、兵士生命が絶たれるので済むなら、それは運が良すぎただけの事だよ。この手術は 貴方の生命を賭けてもらう事になるんだよ」

兵士生命ではなく、文字通りの生命。失敗すれば死。死を覚悟して臨まなければならぬ、移植手術である。

これにはさすがにカルマンも、身体中の震えを隠せなかった。仮に成功しても、光があるとは限らない。いや、その確率は極めて低いといえる。そして失敗すれば、待っているのは死。震えないわけがない。

「……それでも、俺はテイオに移植をお願いしたい。城国の支配の時代を終わらせる為に、戦友の仇を打つ為に、俺を戦わせてくれっ、テイオ！ お願いします！」

再び土下座するカルマン。あまりの勢いで、頭を下げた為に、地面と頭が激しくぶつかり、ごつごつした鈍い音が響く。

さすがに根負けしたのか、あるいは心を動かされたのか、テイオは深いため息を吐き出す。そのため息を吐き出すのと同時に、一種の覚悟を決めるように。

「わかったよ、カルマン君。でも、これだけは言わせてね。当然の話だけど、生身の人間に、機械腕を移植するなんて事、前例の無い事だよ。最も、城国にはそういう資料があるかもしれないけど、少なからず地上にはない。……成功の確率すらわからない、光があるのかさえもわからない。それでもっ……それでもカルマン君は、移植手術を受けるんだね？」

「男に二言はない。やってくれ、テイオ。……頼む！」

静寂。ほんの数秒の静寂だが、とてつもなく長く感じられる静寂だ。

「すぐに準備に取りかかろう。気持ちが悪くない内にね！」

「サンキュ！ ティオ」

カルマンは立ち上がり、後ろで決意を見届けていた、オルテンシアに向く。

「あんたもサンキュな。こんな小さな男の覚悟を、見届けてくれてよ」

「何を言う。一時とはいえ、共に戦った戦友ではないか。……また、会える事を願うよ」

そう言うと、オルテンシアは右拳をつき出した。

「……またな、戦友」

カルマンも同じくして、左拳をつき出す。骨と骨がぶつかる音と共に、カルマンは歩き出す。

後ろで見守る戦友を残し、共についてくる戦友を抱えて。

カルマンの生命を賭けた、移植手術が始まる。

サンバナの町から帰りついたティードは、すぐに交渉の結果を、ハリスに報告しに行く。これといって急ぎではなかったが、ハリスの為を考慮して、出来るだけ早く教えようと、ティードは考える。

「よお、ティード。戻ったのか……バゼットはどうした？」

オルテンシアに会ったついでに、バゼット達の行動を教える。バゼットがついている為か、オルテンシアはそれほど気に止めてはいないようだ。

「ここに来る途中で出会った、化け物みたいな強さの二人でも現れない限り、バゼットがやられる事はないだろう」

そう言って、オルテンシアはどこへともなく歩いていく。ティードも、オルテンシアに対して用事も無い為、止める事もなく見送る。それよりも今は、ハリスに報告する事だ。ティードも奥へと歩い

て行くと、すぐにハリスを発見できた。

「あ、ティード。おかえり、どうだったんだい、交渉の結果は？」
ティードはサンバナの交渉結果を、そのまま教えた。交渉は順調に進み、まずは北のレジスタンスとの作戦会議になる。

こうなってくると、サンバナ近隣のレジスタンスのリーダーは、会議に参加する方向で、話が進む可能性は高くなる。という事は、否応なしにハリスも参加しなければ、いけないという事になる。

「ま、まさか、あの姫様とノリ又さんが、交渉を有利に進めるなんてね……」

全く成功するとは、思っていなかったのだろう。ハリスの言葉は、本音だったのだ。

「色々とあってな……想像はできていると思うが、あんたも近い内にサンバナに向かう事になるだろう」

「ははは……そうだね。胃が痛くなってくるよ……」

右手で眼鏡を上げ、左手で胃をさする。苦笑いをした顔は、明らかに困っている。

ソリディアの後の大役、願わくば誰しもが避けたいところだろう。ある意味では、名前が大きな人の下に付いていた代償というべきだろうか。その者が亡くなってしまった後、誰かがそれを行わなければいけないのだ。

「そういえば、ティオとカルマンがいないな？」

「あ、ああ、そういえば見ないね。誰かが知ってるんじゃないかな……例えば、オルテンシアとかが知ってないかな？ 最近、カルマンと行動を共にしてるみたいだったしね」

「オルテンシア、か……」

先ほどすれ違ったオルテンシア。ティードは何となくだが、損をした気分になる。

「まあ、とりあえず、だ。ソリディア兵士長の後釜って事で、プレッシャーはあるけどさ……頑張ってみるよ、僕なりにね」

「そうしてくれ、あんたはパーシオンの代表だからな」

「その言葉、プレッシャーだなあ……」

苦笑いした顔を崩さず、ハリスは言う。

多少なりとも、同情心はあったが、ハリスには頑張ってもらわなければいけない。それを踏まえた上で、ティーダは何も言わずにハリスと別れる。

特にする事もなく、テイオとカルマンがどこにいるかなども、気にする必要もない事だった。だが、何もする事がないからこそ、適当に歩きたい気分にも駆られている。どうするわけでもないが、ティーダはオルテンシアを捜す。

とはいっても、所詮はパーションの中での搜索。見つからない方が可笑しいのだ。実際に少し歩けば、すぐにオルテンシアが見つけられる。

「おお、ティーダ。突然だが、俺はフィーネ様達に合流しようと思
う」

「そうか、エスクードの騎士であるお前が、主に向かうのは突然の事だ。……それよりも、テイオとカルマンを見なかったか？」

オルテンシアは、頭を掻きながら「あー……」と前置きすると、「ちと、今は色々とあってな、多分相当忙しいから顔を出さない方が良いと思うぜ？ まあ、どうしてもってんなら、テイオのガラクタ置き場みたいなのにいるぜ」

荷物をまとめながら言うオルテンシア。

それを聞いても、やはり別にどうしたいという事もなかった。

「浮かない顔をしているな？」

「……そう、か？」

「ああ、してるよ。どこか人恋しい、って感じだな。何がしたいのか、どうしたいのか、わからないって顔に書いてあるぜ」

そう言われ、実際に書かれてもいない自分の顔が、無性に気になつて、ティーダは無意識に顔を触る。

よっぱと間の抜けた顔をしていたのだろう。オルテンシアは、そんなティーダの表情を見て、軽く鼻で笑う。

「やれやれ……片一方は自分のしたい事に忠実で、片一方は自分がどうしたいのかわからない。一見、完璧そうな後者だが、その実は極めて脆く。不完全で脆そうな前者は、対してその密度と純度は濃い……か」

「……何の事だ？」

「別に……後者には何が起きてても、崩されない頑丈さを身に付けなければいけないって話だ。おまけを言うなら、自分の我を押せるようにならないとな」

余計に意味がわからない、といった顔をするティータ。

そんなティータを見て、今度は声を出して笑うオルテンシア。

「ま、何にしてもだ。一旦はお別れだ、今度はサンバナというところで会おうぜ」

オルテンシアは、ハリスに挨拶に向かったのだろう。奥に向かって歩いていく。そして数分後、パーシオンに残っていたエスクード兵を引き連れ、サンバナの町を目指していった。

刻一刻と進んでいく、第二次支配解放大戦への布石。人々が望むも望まぬも、再び大きな戦争という火種は、確実に落ちる。

待ち続けても、終わらぬ支配の歴史。戦って掴み取るしかない未来。多くの犠牲を払いながらも、進んでいく世界に待ち受けているものは何か。それを知る者は、誰一人としていないのだ。

そして数日後。北のレジスタンスの代表達が、サンバナの町へと到着する。世界は再び、自由を手にする為の一つになる。いや、それは破滅への引き金なのかもしれない。

「じゃあ、行ってくるよ。留守を頼む」

やはり予想通りというべきか、サンバナ近隣のレジスタンス代表が、集められる事になった。

パーシオンからは、当然だがハリスが出席する事になる。共にティータも、同行する事にする。

「ついに、この日が来てしまったね……。戦わなければ、未来が掴

み取れないといえど、やはり気が重いな……」

相変わらず煮え切らないハリスの態度。当然といえば当然だろうか。自由と未来を勝ち取る為の戦い、そういえば聞こえは良いが、結局は命を賭けねばならず、死の危険性は言うまでもない。

誰しもが、喜んで死に行けるはずもなく、むしろ戦わずに現状維持を望む者がいても、なんら不思議な事ではない。ハリスもこのタイプに該当するだろう。

しかし、現実はどうもいかず、命を賭けた戦いを強いられてしまう。「戦争だから仕方がない」言うのは簡単だが、この言葉を納得し、理解できる人間などいるはずもない。

誰しもが生きていたいと願い、平和に暮らしたい、笑って暮らしたい、そう願うのは、人間が持ち得る正当なエゴだろう。

そしてこれは、そんなエゴを勝ち取る戦いなのだ。

「ティータ……一つ聞いて良いかい？」

言葉による返事はしなかったが、聞く姿勢を作るティータを、ハリスが確認すると、

「君は、僕よりも若いのに、僕よりも前線に出て戦っている。何故なんだい、何故君は、いつ死ぬともしれない戦場へ入っていきけるんだ。死を怖いと感じないのかい？」

自分の中の不安を吐き出すように、ハリスは淡々と言葉を発する。ティータは黙って言葉を全て聞き取るが、その問いかけに、一切答える事はしなかった。

雨が降りだした。

それは、無慈悲な雨だった。

それは、静寂な雨だった。

それは、痛みを伴う雨だった

25 少数精鋭突破作戦

雨は降り続けている。

辺りは曇り空。太陽が隠され、どんよりと重く、そして暗い。

この理由は天候のせい、というわけでもないのだろう。サンバナに終結した、近隣レジスタンスのリーダー連中。そこに住む、一般の人間からすれば、不安を煽られる雰囲気だろう。

ティードとハリスは、サンバナの町に到着すると、真っ先にハインズの下へ向かう。

一つ、目に入ったものは、一般人からの兵士志願者を、募っていた事だ。あくまで志願者を求めているだけで、徴兵ではないものの、過去にこのような事がなかった、ハインズという人間からすれば、あまりにも珍しい事だといえる。

恐らくだが、これからの流れによっては、強制的な徴兵もあり得るのだろう。思えば辺りを見回すと、一早くそれを悟った人が、逃げ出す準備をしていた。しかし、ここから逃げ出しても、どうしようもない事が、わかるのだろう。遠目で見ても、酷く鬱になっている。

「凄いな……どの人も、前の大戦で見た事がある人ばかりだ……」
既に圧倒されてしまっているハリス。前回は、ソリディアの影にいられたからこそ、冷静でいられたのだろう。

だがハリスは逃げられない。逃げるわけにはいかない。パーシオンを代表してここに来ているからだ。

「えー……皆様、本日はお集まりいただき、誠にありがとうございます」

挨拶に出てきたのは、いつも見る美人秘書。社交辞令をするのも、様になっているあたり、流石だと感じさせる。

そして、社交辞令の後の本題の内容。それは中に入れるのは、組織中で最大二名まで、という事だ。当たり前の話だが、レジスタン

スによつては、ここへ来るのに数人で来ているところもある。それから全ての人が、建物の中に入れるわけがない。

元々、二人で来ていたパーシオン陣営は、対して悩む必要はないが、周りを見ると人選にかなり頭を使っている団体が、ちらほらと目につく。

(……こんな事で頭を使つて、先が思いやられるな)

段取りが悪いとは、まさにこの事なのかもしれない。事実、全団体が人選を完了するまで、数十分を要した。優秀な指揮官のいるところは、とつくに人選し、早々と建物内に入っている。

ティード達も中に入ると、早速、秘書から手拭いを渡される。よく見ると、雨の影響もあり、床は泥だらけになっている。

そしてそのまま、秘書に誘導され歩いていくと、いつもとは違う部屋に案内される。それはさながら会議室。

「凄いな、ハインズ町長は……。まさか、こんな部屋まで用意しているとはね」

呆気にとられているハリス。だが確かに、外観からは想像もつかない、その広さは圧巻の一言だろう。

「キヨロキヨロすんなや。田舎者丸出しだぜ？」

突然の声に、振り向くとバースが立っていた。

「ば、ば、バースさんっ、あのコロセオンの！」

「おう、元気にしとったか？ ソリディアンとこの若いの。今はお前がリーダーか」

ただでさえ落ち着かなかつたハリスだが、バースの出現により、更に困惑の色を強める。

「バース殿、あまり若いもんを、苛めてはいけませんよ？」

次には後ろから、北のレジスタンスの、正に代表格。ザードリブのラックが登場する。

「おう、北の……これは苛めではなく、可愛がりつてんだ」

「待たせたな、諸君」

そして、トドメと言わんばかりに、ハインズ町長が姿を現した。

ハインズ町長、南の代表格バース、北の代表格ラック。あまりにも強大な三人に囲まれ、ハリスの意識は無くなりかけている。

ハリスの視界は、きつと真っ白になって、何も見えていないのだろう。

「皆様、小娘ですが、どうか宜しくお願いします！」

最後に聞こえたのは、覚えのある声だ。その正体は、東の大地からやってきた、エスクード城のフィーネだ。

やはりというべきか、中に入ったのは、フィーネとノリヌの二人だ。

「素晴らしい……我が南のサンバナ、北のシュネリ湖、東のエスクード城。世界は一つになりつつある。少なからず、私はこの光景を見て、そう思わずにはいられない！」

ハインズは本当に嬉しそうにしている。そのハインズに釣られて、兵士達にも、活気がみなぎっていくのを、感じられるのだ。

程なくすると、会議は始められた。まずは一部しか知らない、第二次支配解放大戦の事を話す。

ここで全員の反応で、意外だった点は、大方予想していたのか、驚いた人間の方が少なかった事だ。最も、北の人間も合わせての、大会議となると、勘の良い人間ならば、その内容も予想がつく、といったところだろう。

第二次大戦。この事実については、大した批判もなく、話は順調に進んでいく。これも意外な点だった。ハインズは、突然の取り決めに、もう少し反発があっても良いと、覚悟をしていたからだ。

そして、その反発の切り札に、先日のバースとバゼットの、戦いによる結果、というものを用意していたのだ。

反発が無かった事には、これも予想がつく。それはここに集まった人間が、レジスタンスだからという事。戦って勝たなければ、地上に勝利はない。この事実を重々承知している、これが大きな事だろう。あとは、前大戦における、ハインズへの信頼だろうか。

続いて、大まかな日時を取り決め。前回はソリディア、バースの

戦友『策略家クリム』の作戦により、半ば強引な日時取り決めになっていた。

だが現在は、そのような事もない為、ある意味では悠長に構えていられる。勿論、そこまで気長にやってる余裕もないのだが……。

戦力は万全を期するべきであり、ここは全員の意見を聞こう、という事になる。特に重要なのは、北との日時合わせである。その距離の違いから、一旦別れると、連絡を取るのが容易ではない。

ここは北の代表でもある、ラックが日時提案をする。その結果、現在より四十日後と決定する。万全を期する割には、短い猶予だが、元々北の被害は、大した事はなく、いつでも大戦を起こせるように、各自で準備をしていた事が大きい。

「ありがとうございます。北に住む貴方達が、ここまで万全を尽くしてしてくれたおかげです」

ハインズは深々と、頭を下げてみせる。準備に関しては、予想よりも良い方向に進んでいて、ハインズとしても肩の荷が少し下りた感じだろう。

「さて……後は攻撃に関する具体的な作戦になりますが、私は前大戦と同じようにいきたいと思っています」

ハインズが言う。前大戦と同じ、とは、先に戦力で勝る南のレジスタンスが、城国に攻め入り、北のレジスタンスが、それをサポートする。但し今回に至っては、戦力で勝るのは北側といっても良い。「南は前大戦で、多くの戦力を失ったと聞いています。その先制攻撃は、我々、北のレジスタンスに任せてもらうべきではないですか？」

これを北側の代表、ラックが反論する。

「確かに……数という一点に関しては、今現在は南よりも北に軍配があります。しかし、私には一つの自信が……あります！」

一息の間を開け、力強く言葉を出す。ハインズは、ほんの一瞬だが、ティータとバースを見た後、エスクード陣営に目を向ける。

「貴方程の人が、自信がある、とハッキリ言うくらいです。信用は

させてもらいますが、一体その自信の裏側が、どのようなものなのか、それぐらいはお聞かせ願いたいですね」

ラックの質問は、非常に納得のいくものだ。ハインズの自信の正体を知っているものは、極一握りであり、知りたいと思うのは、南も北も関係無く多いはずなのだ。

実際、ハインズが周りを見ると、次の言葉を待つ期待の眼差しが、一点に向けられている。

「ごほん……そこまで期待されると、自信がなくなりますが、言っておきましょう。まずは話を戻して、攻め方です。城国は、城というには非常に特殊な形をしている、それはこの世界に住む誰もが知っている事と推察しますが」

そう、城国　シャングリラキングダムは、一般的な城の形状をしていない。それは元来、城国は天空にあるとされる、理想郷に辿り着く為に人間が建てた、いわば塔のような形状をした建物だからだ。

それ故に、横の面積は事実上、広くはなく、高さに関するものだけが、目を見張る必要がある。攻撃できる範囲は、縦に大きい分、その一点に関して広い。

だが城国に大雑把な攻撃を、仕掛けられない理由もある。それは城国の巨大さにある。雲の高さを越える城国が、例えば倒れようものならば、それだけで地上には大きなダメージとなる。

それに一次大戦時に、クリムの策略により、城国を内部から爆破してみせたが、倒れる事はなかった。つまり、細身の塔のような外観の割に、その防御力と耐久性は極めて高い。内部および外部からの攻撃に耐える建造物。そうになると、人間が内部から制圧するしかなくなってくる。

そして一次大戦時もそうだったが、城国は横に関しては非常に狭い。これが地上軍の兵士が、内部に侵入する事に手間取った、大きすぎる理由となっている。故に城国制圧の、鍵となるのは物量で攻めるのではなく、単騎で圧倒的な戦闘力を持つ兵士による、少数精

鋭一点突破作戦となる。

「一点突破をする限られた兵士の有無。これが我々、南側を先行させる理由になります」

「ふうむ……確かに。北側は今となつては、数こそ南に勝る。しかしそれは消去法に等しい。それにハインズさんの言う、一点突破を可能とする兵士の有無……これもいないというのが、正直なところ。

しかし、お言葉ですが、それは南も同一条件といつても、過言ではないでしょう。私の知るところで、バース殿とティード君、この二名しかいない。それに今回はソリディア殿もいた。とてもじゃないが、成功するとは思えない……」

この反論も、ハインズには予測済みであり、この程度の事では、自信は揺らがない。

前大戦の有力戦士は、ティード、ソリディア、バース、クリム。事実上、大戦の英雄による編成が大きかった。普通に見れば、三大英雄でも勝てなかったのに、戦力が半分になつては、勝てるものも勝てない。誰もがそう考える。

だがハインズは見ている。大戦の英雄の中でも、単純な戦闘力に關して、一番だといえるバースに、わずか二十秒で勝ってみせた、騎士の存在を。不謹慎な事だが、ソリディアとクリムの抜けた穴を、補うには充分すぎる戦力だ。

「皆さんが、そう言うのは最もな話です。ですが私は目撃しているのです！」

真相を知らない全ての人間が、露骨に「何をだ？」という顔をす。そんな中、バースだけが舌打ちをする。

「あの軍神バースを、たったの二十秒で倒す男の存在を！」

これには、大きなどよめきが起きた。軍神バースは、東西南北を問わず、その名が知れ渡っている人間だ。その男を二十秒で倒す男、素直に驚く者もいれば、疑う者もいる。その反応はまさに様々。

「ほ、本当なのですか？ 貴方ほどの方が、やられたというだけでも、信じられないものがありますか……」

ラックは冷静に、バースに問いたです。ハインズを疑うわけではないが、やはり本人に事実確認をするべきだ、との判断だ。

バースは、力強い大きな舌打ちの後、口を開く。

「……ああ、間違いねえよ。認めたくねえが、奴は強い。いや、強すぎるくれえだ」

本人の認めた言葉を聞くと、どよめきは一気に歓声へと変わる。

困惑していた兵士達が、一気に強気になる。本来は嬉しい事なのだが、バースはどこか気に食わなかった。

「なるほど。そこまでの兵士が、南にいるのならば、先発を任せさせていただきましょう。前大戦と同じく、我々北側は援護にまわります」

これで第二次大戦への、大まかな取り決めが終了する。作戦の開始は、現時点より四十日後。

急遽行われた会議だったが、各々の備えにより、それは現実的なものになった。再び、城国と戦おうと考えていたのは、ティータやハインズだけではなかったのだ。

地上に住む、ほとんどの人間が、城国の 王の支配時代終焉を望んでいる。

「いやあ……息が詰まりそうだったよ……」

外に出ると、開口一番の台詞が、ハリスから出る。余程息苦しかったのだろう。何度も深呼吸をしている。

「よお、ティータ。それにハリス兵士長殿」

後ろからの声に振り向くと、そこにはフィーネを筆頭に、ノリヌ、オルテンシア、バゼットが立っていた。話しかけたのは、オルテンシアである。

「会議お疲れ様でした。あんなに大規模だとは思っていませんでしたから……さすがに緊張しました」

「あははは……そうですよ。急に召集したのに、あんなに集まるなんて、ハインズさんの人望は凄いですね」

フィーネが話しかけてきたので、ハリスは口調穏やかに、当たり前障りなく会話を進める。

「じゃが確かに、じゃ。第二次大戦……大戦と呼ばれるぐらいの、大きな戦争なのに、拍子抜けするぐらいにあっさりと終わってしまったのう。ワシは少々不安になるわい……」

珍しく大人しかったが、ノリヌも作戦会議に参加している。だが頭が働く者ならば、ノリヌのように考えるのは無理のない事だ。

「地上の取り決めは、いつだって大雑把だ。そもそも遠くの人間と連絡を取る手段も確立されていないからな」

ティーダは城国と地上の、科学力の差を感じていた。城国内部では、当の昔に無線機などによる、遠方への連絡手段が確立されている。

仮の話だが、地上に連絡手段となる何かが存在していたのなら、城国との戦いは少しでも有利に進められただろう。

「ハリス兵士長、ティーダさん。私達は戦いの日まで、ここで待機します。どうやら同じ考えの方々は、多いみたいですので」

「そうですね。私達、パーシオンも、決戦が近くなればサンバナに移動します」

「では、その日まで、しばらくのお別れになりますね」

軽い挨拶と握手をして、ティーダとハリスは、フィーネ達と別れた。さすがにレジスタンスの兵士が集まっている為か、来た時よりも人が多く、騒がしく感じられる。

それに降り続ける重苦しい雨が、更に鬱陶しさを増している。

「こう……賑やかなのは良いんだけど、サンバナに活気が出ると、否応なしに戦争への覚悟をさせられるね……」

誰に話したわけでもない。ハリスの独り言か、あるいはティーダに向けてのものだったのか。

ティーダも何となくだが、話したい気分でもなかった為、返事をする事はなかった。

結局、サンバナの町に居残っても、何もする事がない二人は、と

つとに戻った方が得策だと判断する。真つ直ぐに道を進み、出口に到着すると、突然、ティードは何者かに掴まれる。

「やっぱりティードさんだっ、こんにちは！」

「お前、ケイン！？」

何故か、ザードリブ所属のケインがここにいる。恐らくは、ラックにくつついてきたのだろう。

「ティード、知り合いかい？　なら僕は先に戻っているから、ゆっくり話せば良いよ」

ハリスはティードを残し、先にパーシオンへと帰っていく。

「……やれやれ。ケイン、お前がどうしてここにいるんだ？」

「はいっ、ラック兵士長が、勉強になるから見とおけ、と。僕も有名なサンバナの町には興味があったので、丁度良いかなっつと」

(……やはりか)

ティードは内心、ため息をついた。

「しかし大きな町ですね、ザードリブとは大違いだ！」

「ケイン、ラックはどうしたんだ？」

「えっ？　ラック兵士長なら、会議が終了した後も、大柄な人と、偉そうな人と一緒に何か喋ってましたよ」

(恐らくはバースとハインズか。細かい作戦などは、上に任せておいても、大丈夫だろうな。俺達がどうこういつても仕方がない)

今度は本当に、ため息をつく。

「ケイン、俺はもう行くが……あまり周りに迷惑かけるなよ？」

「はいっ、了解しました！」

とびつきり元気な敬礼で、返事をするケイン。雨でずぶ濡れだが、そんな事は元気で関係ないのだろう。

第二次支配解放大戦。

人々が望み望まなかったその戦争は、残り四十日というカウントダウンに入っていく。今度こそ、敗北は地上全体の死を意味するだろう。しかし待っていて、いずれは朽ちていく大地。勝たねば未

来はない。

大戦まで、残り四十日。

26 拭えぬ予感

サンバナの町における、地上レジスタンスの城国への攻撃作戦。つまりは、第二次支配解放大戦の作戦会議から数時間後。

パーションに戻ってきたティータとハリスは、すぐに会議の内容を伝える。次こそは最後になる戦い、兵士、一般に関係なく、この事実を伝え、全ての行動の選択を迫る。

不退転。もう後ろには下がる事のできぬ戦い。残り少ない地上の人々は、仮にもこの戦いに敗北すれば、更にその人口は少なくなり、今度こそ反撃の糸口は潰える。

だからこそ、兵士は勿論、一般の人間の協力も、ハリスは求める。なにも一般人に、前線に出て戦えというわけではない。例えば、傷ついた兵士の手当て、あるいはそういった事の、補助活動。一致団結する事が、大切なのだと呼びかけた。

この結果、一般の中からも、戦いたい、という人が、数人だけ出てきた。主な理由はそれぞれあるが「簡単な手当てができる為、それが少しでも役に立つのなら」や、「夫と息子の仇を打つ」などといったものがある。いずれにしても、その日からパーション内部はいや、地上は一種の殺伐とした空気が、多かれ少なかれ漂い始めた。

それから十四日が経過した現在。

大戦とは違う方面で殺伐としていた、カルマンの右腕の手術に、一区切りがついていた。だが残り二十四日以内に、全ての移植の完了は、間違いなく不可能であり、カルマンは事実上で、最後の戦いへの不参加が決定してしまう。

そしてティータは、今まで休み無しで資料も見本もない、人体の改造手術を行っていた為、ついに力尽きて死んだように眠っている。

「今回の大戦で、勝っても終わり、負けても終わり、か。まったく、

俺はどうも間が悪いっていうか……」

ソリディアの墓前で、愚痴を漏らすカルマン。その隣には、無言のティータがいる。

カルマンの右肩は、既に人間のそれではなく、正にロボットのように、色々な部品で形成されていた。鈍く光る鉄の塊が、思わず目を反らしてしまう程に痛々しい。

「なあ、お前は……仮にも勝てたなら、その後はどうするんだ？」

「お前がそういう事を聞いてくるなんて、めずらしい事もあるんだな」

「茶化すんじゃないよ！」

ティータは考え込む。どこまで本気かはわからないが、以前、テイオと世界を回るといって、約束もある。だが、そういうものを抜きにして、ティータには望む未来像が出なかった。

「特に無い、か。……ま、俺も似たようなもんだな。こんな身体になっちまったし、もう真つ当な人間生活は送れないのかな……。せめて美人でもブスでもない、普通の女の子と結婚して……普通に人生を終えたかったなあ」

明後日の方向を見て、しみじみと話すカルマンと、相変わらず無言を貫くティータ。ティータは地面を見つめ、カルマンは空を見つめている。そのまま両者共に喋らぬまま、一分が過ぎた。

だが唐突に、あまりにも唐突に、ティータが口を開く。

「アルティロイド」

ティータから出てきた言葉に、何の事かもわからないカルマンは、ただ目を丸くしている。

「あ、アルテ……？ 何だよ、そりゃ」

「アルティロイド。それが俺の正体だ」

カルマンは、頭を掻きながら、

「いや、正体だって言われてもよ……いきなりすぎるぜ、一体何なんだよ、それはさ」

「俺は世間一般的にヒューマンと呼ばれる、人間じゃない。人とし

て、あらゆる能力を強化され、人を殺す為に造られた」

カルマンはティーダの表情を伺うが、全く表情を崩す事なく言っている為、嘘か誠かを判断できずにいる。

「仮に、お前がアルティ……ロイドってやつだとして、誰が造ったってんだよ!？」

「仮にではない。アルティロイドを造ったのは、王」

「って事は……お前は、城国の人間なのか？」

やや声を荒くするカルマン。対してティーダは冷静に、カルマンの質問に、首を縦に振る。

「そう、なのか。何でそんな事を俺に？ お前がアルティロイドだって」

一呼吸置いて、ティーダは口を開く。

「何故だろうな、状況が状況だからか」

「意味わかんねえ奴だな」

「俺に偏見は持たないのか？」

「逆に聞くが、持ってほしいのか？ 強化された人間ね、むしろ化け物染みたお前の強さの原因が、一つ片付いて清々したぜ。それに……今まで何だかんだで一緒にやってきていて、今更偏見なんてあるかよ」

鼻を擦りながら言うカルマン。ふと、視線はソリディアの墓へと移る。

逆にティーダは、先程までは下を向いていたが、今度は空を見上げる。

「ありがとう」

「ぶっ、やめろ、気持ち悪い！ お前からそんな事を言われると、変な鳥肌が立つっ!」

本当に鳥肌が立っているカルマンを尻目に、ティーダは小さく鼻で笑った。

「何にしてもよ、勝つぜ……今度はよ。勝たないと、未来は見れないからな」

「ああ……そうだな」

「お前は変な奴で、ム力つく野郎だけだよ、お前の強さは信頼してる」

「五月蠅い奴で、馬鹿な奴だと思っていたが、諦めの悪さは尊敬している」

合わないようで合う、合うようで合わない。それがこの二人のペーソなのかもしれない。いずれにしても、お互いを確かに繋げているものは、「信頼」と「尊敬」である。

ティーダとカルマンは、ソリディアの墓の前で、お互いの拳をぶつけ合い、今度こそ支配時代の終焉　大戦の勝利を誓いあった。

それから七日後。第二次大戦まで、あと十七日。

「十日前には、完全に準備を済ませて現地入りするんだってね」

いまだに続いている、カルマンの移植手術の合間をぬって、ティーダとテイオが話をしている。

ここ最近では、二人で話をする事がなく、こうやって話をするのは約一ヶ月ぶりかもしれない。

「テイオ、お前はどうするんだ？」

「どうするって？」

「現地入りするのかって話だ」

ああ、と意味のわかったテイオは、考え込むように目を瞑る。

ティーダの内心としては、行ってほしくない、という気持ちがあった。何故、そんな気持ちになるのかは、本人にも知る由もない事である。その気持ちの正体を知る為には、ティーダの心はいまだ幼い。ただ、それとは別に、何かの嫌な予感があったからだ。

「ティーダは」

どうしてほしい？

悪戯心では、そんな事を聞いて、ちょっと困らせてみたいという考えと、それを聞いた結果、自分の求めている答えと、違う答えが返ってくるかもしれないという、ネガティブな恐怖心。だからそん

な事はできない。

「……私も現地入りするよ。自惚れるつもりはないけど、私の応急技術は、並みよりは凄いと考えているから」

「正論だな。戦いが起きれば、否応なしに怪我人が出る。迅速な対応で一早く味方を治癒し、戦場へ戻す事ができれば、勝つ可能性は高まる」

「うん、頑張るよ！ だからティータも頑張つてね！」

ティオもそうだが、ティータは内心とは反対の事を、ティオに向けてしまっていた。

本当はパーシオンに残っていてほしい。確かに安全とは言いつれないが、少なからず前線基地となる、サンバナにいるよりは、遥かに安全だといえる。

「これで勝つ事ができれば……世界は平和になるんだね」

「いや、仮に勝つ事ができたとしても、それは古き時代を壊したに過ぎない。新しい時代を構築する事、それが何より難しい」

「そうだね。その新しい時代になった時の、約束は覚え あっ…

…ぐっ………！」

「ティオ!？」

突然、左胸を押さえながら悶絶するティオ。それと共に、体のいたるところから、血が滲み出す。

(血が……皮膚が裂けて、血が出るなんて。それに……なんだ、この圧倒的な力は……)

外部からの攻撃により、皮膚が裂け、血が出るのとは違う。まるで内部からの圧力により、外部が耐えられず、血が滲んでいる。

まるで鳥の雛が、必死に自分の力で、殻という外壁を打ち砕こうとするように。

「うっ、ぐっ………う……痛みが……」

わずか一瞬の苦悶の表情だったが、すぐにそれは治まる。いつもはもっと長い時間、その苦痛が続く為、この痛みの短さはもとより、痛みにより自分の意識が、途絶えなかつた事に、ティオは驚きを隠

せなかった。

そしてティードは見た。今までは内部からの力により、裂けていた皮膚が力の縮小と同時に、外傷が消えていった。

仮にもこれが、身体による治癒能力ならば、ティードには覚えがある。いや忘れるはずがない、何故ならばそれは、アルテロイドが備わされた、強化治癒能力。しかも、考えが正しければティードの回復速度は、ティードよりも圧倒的に早い。治癒開始から、治癒完了までの過程が、あまりにも早すぎる。

「ティオ……お前は……」

「何だか拍子抜けしちゃった！ もつと痛くて長いのを覚悟していたから。何か今回ののは……変な感じ」

既にいつでも、こういう事態が起きてても良いように、自分で用意していたのだろう。ティオは、自分で用意していた手拭いで、身体中に付着した血を拭き取る。

更にティードの見た、以前の発作のようなこの症状の後、ティオはいつも死んだようにグッタリとし、青白い顔をしていた。だが自身が不思議だと言う、今回は違った。まるで憑き物が落ちたように、非常に顔色も良い。

「ごめんね、ティード。少し……やっぱり具合が悪いから休むね」

「あ、ああ、無理はするな」

ティオは最後にもう一度だけ、「ごめんね」と言うと、ティードと別れた。

一人になったティードは、ある考えに支配されていた。

（あの治癒速度……まさか、まさかティオはアルテロイド、なのか……。いや、いくらなんでも早計すぎる。生まれつき異常な治癒速度があるのかも……）

そこまで考えて、それは無いと思う。何故ならば、アルテロイドの強化治癒能力は、生身の人間における、生まれつきの範囲でやれるものではない。それはアルテロイドとして、人生の半分以上を生きている、ティードにわからないわけがない。

だが半分以上を生きてきたからこそ、わからない事がある。それは自分を圧倒的に超える、治癒速度の早さ。自分の他にも、比較対象はいた。ジューク、デュアリス、ラティオ、それらと比べても、ティオの早さは異常だ。

（まさか……ティオは、命の騎士ティアナ？）

今までに存在していたアルティロイドに、消去法でやると残るのは、命の騎士ティアナになる。だが色々と思いついたフシがある。

かつてティードとティオが出会ったばかりの頃、当時の城国兵に見つかったティオは、暴力を振るわれ、常人ならばそれなりの怪我をしたが、予定よりも早い時間で完治してみせた。それに当時、ジュークに聞いたティアナの特徴の一つが、年齢である。十五、六歳だと言っていた情報が正しいのならば、およそ一年が経過した今ならば、十六、七歳になるだろう。どちらもティオに該当している。

そして動物や植物、最近では人でさえも、その気配や生命を感じる事ができる能力。辻褄を合わそうと思えば、次々に合わさってしまふ真実。

（いや、いやいや、落ち着けよティード。偶然が重なっただけだ、それに仮にもティオがティアナだったとして、どうなる問題でもないだろう。ティオは戦えるような戦闘力はない、味方でも敵でも、全く害のない存在だ。……そうだ、もっと他人を信用しても良いじゃないか、ティード）

だが辻褄合わせとは、全く違うところにある、一つの真実がティードを不安にさせている。

今までは感じられなかった、ティオの内に宿るような、圧倒的すぎるパワーの内包。もしもティードの感じたものが、気のせいなどではなければ、その内包されたパワーは、最強のアルティロイドとされる自分さえも、大きく上回っている。

嫌な胸騒ぎが消えない。

城国シャングリラキングダム。旧王の間にて。

「うつ……がっは……！」

突然苦しみだし、吐血する深緑の王。その姿は王が、風の騎士ジュークを乗っ取り、寄生した姿である。そして今の姿は、かつてのジュークの姿と比べても、あまりにも弱々しい。

「王よ……やはり、現在行っている作業を中断し、貴方様の回復に努めた方がよろしいかと」

近場で見ている、リオとクリッパ。その衰退は、目に見えて早い。

「それを決めるのは、私だよ……クリッパ」

心配して声をかけた、クリッパの提案を、断固拒否する深緑の王。

この衰退の理由が、世界から城国兵が消えていった、一番の理由だ。上から全てを見ている、深緑の王からの指示がこない。情報伝達が不十分であり、下にいる兵士達も、いよいよどうすれば良いのか、困惑しているのだ。

「どういうわけだか、こやつの体から離れられん……ジュークめ、一体何をしたのだっ」

「キャハハハ！ 王様、こんな時ですが……一つお知らせしておきます」

「何の用だ、リオ？」

「はい、地上の連中……どうやら再び大戦を起こそうとしているみたいですよ、キャハハハ！」

深緑の王は驚きはしなかった。半ば予想していた事だからだ。だがその表情の、雲行きは非常に悪い。

「こんな時にな……地上のゴミどもめがっ！ 下にいる兵士に通達しておくのだ。各員大戦用意、とな。……その時がきたら、お前達が指揮を取るのだ」

リオとクリッパは、深緑の王の命令を受ける。

あまりにも体調が悪すぎる。かつての王の余裕が無い程に、今の

王は苦しんでいる。体の中に、強い淀みのようなものが、その体を痛めつけていた。

「あれが完成すれば……あれさえ完成すれば、全てをおしまいにしよう。あらゆるものを食らいつくす……無の怪物『ゼロ』よ」
地上レジスタンス軍、城国への攻撃予定日まで、残り十日を切る。

これにより、パーシオン陣営の戦闘および補助担当者は、サンバナの町へと移動する。

人類最後の大战と予想される、第二次支配解放大戦が、ついに始まるうとしていた。

27 第二次開放大戦

決戦前夜。サンバナの町には、異様な活気が満ち溢れていた。それもそのはずだ、明日が地上最後の日といっても、過言ではないのだ。各自が思い思いの事をしている。これはその結果なのだ。

「ティーダ！」

呼びかけたのは、カルマンである。既に腹は決まっているのか、迷いのない顔をしている。

「ちよつと前によ、アルティロイド、の話をしただろ。あれさ、もしも明日の大戦に勝って、お互いに生きてたらさ……もつと教えてほしいんだよ」

その予想もしていなかった言葉に、珍しくティーダが、驚きの表情を見せる。

「何故だ？ それに教えるといつても、俺は俺の体験談とかしか教えられない。技術とかといったものは、全くわからないぞ」

「体験談、そういうのがほしいんだよ！ ……俺さ、戦争が終わって、平和な時代が来たらさ、ティーダやオルテンシア、バゼットみたいな、城国に身体を弄られた犠牲者の為の、孤児院みたいなのを作りたいって思ってたな」

「孤児院……？」

「ああ、きつと支配の時代が終わっても、アルティロイドやキメラっていうのが、迫害される。人間って、よくわからないけど、そんなもんだ。……でも、俺はそんな奴等の暮らしていける場所を、作ってやりたいと思うんだっ！ 一方的な自己満足かもしれないし、偽善なのかもしれねえけど……ソリディア兵士長が、みんなにパーションを与えてくれたように、俺も誰かに場所を与えてやれるような、そんな男になりてえんだ！」

相変わらぬ馬鹿正直で、真っ直ぐしか知らない、確固たる意思を秘めた瞳。嘘のつきようのない、全力の瞳がティーダに向けられ

る。

「……わかった。参考にならない意見かもしれないが、それでも良いのなら」

「サンキュ！　　たく、信じられないよな、会ったばかりの頃には、想像もつかない事だよな。お前とこんな話するなんてよ」

「恥ずかしそうに話すカルマンを見て、ティードも鼻で笑いながら言う。」

「そうだな、でも不思議と良く思える」

「お前は、将来的にはティオと結婚か？」

「茶化し混じりに、聞いてみるカルマン。だが本心としては、真面目な問いかけでもある。」

「何を馬鹿なっ！」

「面白いぐらいに動揺するティード。最も、これはカルマンだからこそわかった、動揺なのかもしれない。普通に見ても、微弱な変化だからだ。」

「それにアルティロイドは、後世に遺伝子を残す事はできない。仮にも、ティオと結婚したとしても、子供はできない……」

「良いじゃねえか、子供ができなくてもよ。最終的に、お互いが幸せなら……」

「……そういう、ものか」

「自分が求めているもの。掴めそうで掴めないそれは、いまだにティードの心の中で、一つの課題として残っている。開放大戦の後に、その課題の答えは見つかるのか、ティードの頭の中に奔走し続ける。カルマンは、残った左手でティードの肩を叩くと、

「俺はもう寝る。俺も前線に出られない代わりと言ったらアレだけど、ここで補助の補助要因として頑張るつもりだ。お前は前線に出るし、大役なんだろう？　もう、寝ておけよ」

と、ティードの体調も気遣い、一足先に部屋に戻っていった。

時間にすれば、深夜は確実に回っている時間だろう。それでもサンバナの町の、活気という名の炎は消える気配を見せなかった。

ティーダも休もうと思ったが、疲れの感じられる体とは裏腹に、睡魔は無く、むしろ目はとても冴えている。

明日が決戦、という事実。ティーダはいまだに、その事実を実感できないでいる。決して緊張してるわけでもない。だがやはり、ある一種の予感が拭い切れないでいた。

「どうしたティーダ。眠れないのか？」

ティーダが振り向くと、そこにはオルテンシアとバゼットがいる。バゼットはともかく、オルテンシアは相当な酒を飲んだのだろう。顔が赤くなり、酒臭い。

「フィーネ様とノリ又様は、既にお眠りになった」

酔っぱらっているオルテンシアの代わりに、バゼットが言う。

「そうか……お前達は寝ないのか？」

「勿論、そろそろ眠りにつくつもりだ。だが酔っぱらいを一人にしておくわけにもいかないだろう？」

「……大変だな」

「そうでもない。いや、そうだな。大変だ。しかし、オルテンシアとは城国時代から一緒にいた、今となっては慣れた事だ」

足に力が入らないのか、一人で立っていられないオルテンシアに、肩を貸しているバゼット。仕方がなさそうに、担いでいる男を見る。

「じゃあ、私達はこれで。ティーダも早く睡眠を取るんだ。眠れないのならば、横になって目を瞑っているだけでも良い」

そう言っつて、バゼット達も自分の休むべき部屋に、移動していく。気が付くと、あれほど活気に満ちていたお祭り騒ぎも、徐々に静かになっていった。サンバナの町から、灯が次々に消されていき、最低限の炎だけが残された。

ティーダもとりあえず、自分の停まっている宿屋の部屋に戻り、ベッドの上で横になる。すると、今まで冴えていた瞼も、急激に重くなり、一気に睡魔に飲み込まれていく。

決戦の朝を、ついに迎える。第二次支配解放大戦と銘打たれた、最後の決戦が始まる。

昨晚 時間的には、昨晚といって良いのかはわからないが、それは違う活気がそこにあった。

人々の声は呼応し、怒号の歓声を繰り出す。これが最後の大戦、そんな思いを誰もが秘めて、これに臨んでいる。

「本当に始まつちまいましたね、ハリス兵士長」

「ああ、そうだね。何か思い起こせば、エスクードの方達が来てから、色々な事が起きて……あまりに一瞬でここまで来てしまって、大戦当日なのに、あまり実感が無いんだよ」

「って、マジですか、ハリス兵士！？ 兵士長は前線に出るんですよ、しっかりとしてくださいよ？ ……なんて言っても、俺にも何か実感が沸かないんですけどね」

ハリスは南側第三波攻撃部隊に配属されている。そしてカルマンは、前線部隊への配属はされず、衛生兵や医者への補助をする事になっている。

その他、ティータは第二波、同じくバースも第二、オルテンシア、バゼットは第三、ラックは北側第一部隊となっている。

「こんな時に、ごめんね……ティータ」

南側第一波攻撃部隊は、既に進軍を開始していたが、第二部隊のティータには、まだ時間があった。ティオはティータを呼び止める。

「あの……頑張ってるね」

「そのつもりだ」

「えっと……」

あまりにぎこちない会話になってしまう。ティオはティータに、言いたい事が山ほどあった。事実、昨晚は、その言いたい事の整理と練習で、やや寝不足気味である。

一方で、ティータも聞きたい事があった。それはティオ「ティアナの事実確認。知ってどうなるわけでもないが、知らなくてはいけない事だと、何故かティータの直感が告げている。予感はいまだに拭えていないのだ。」

「ティーダ あっ！」

「ティオ あっ……」

「どうしたの？」

「どうした？」

ティーダもティオも、顔を赤らめる。ただこの時、お互いに顔を見ていなかった為、赤面は見られていない。

「先、良いよ」

「俺のは大した理由じゃない、ティオが先に言えよ」

「わ、私のも大した理由じゃないよっ、ティーダが先に言ってよ」
譲り合う両者、そのまま譲り合って、いつまで経っても話が進展しない。その内、気まづくなって、同じタイミングで同じように黙る。

それを繰り返している内に、誰ともつかない人の声がして、

「南側第二波攻撃部隊所属の方々は、至急お集まりください！ 繰り返します」

「あ……召集、命令」

どこか悲しそうに言うティオ。来るべき時が来てしまった。再び巡り会う時なのか、今生の別れの時なのか、それを知るのは、まさしく神のみ。

「行ってくる。ここには、城国の攻撃はこないと思うが、万が一にも」

「ティーダっ！」

ティーダの言葉を打ち消すように、俯きながらも大きな声を絞り出す。

「すうー……はあー……、絶対に、生きて帰ってきてね。絶対だよ。私ね……私、まだティーダとしたい事がいっぱいあるんだっ、前にも約束した……世界を回る事もそうだけど、それ以上につ、もつとした事があるんだ！ 平和な世界で、貴方と……」

「あ、ここにいたんですか、ティーダさん。早くこちらへ！ 第二陣は貴方がいなければ、ささっ、こちらへ！」

黙って聞いていたティータだが、そのティオの言葉は、誘導兵士に遮られてしまう。仕方がないといえば、それまでの話だ。作戦は、迅速かつ的確に行わなければならない。

「あ……ティータ……」

連れていかれるティータを、ただ黙って見送るしかできないティオ。俯き、全ての感情を胸に押し込めようとする。

ドクン。鼓動が動き出した。

「ティオ！」

ティータの言葉が、耳に入る。

「俺はっ、必ずお前の前に、戻ってくる！ だから……聞かせてくれ。お前の話の続きをっ、必ず！」

ティオは遠目に見えるティータにも、わかるように大きく頷き、小さな体で大きく手を振り、戦場へ向かう戦士を送り出した。

ドクン。ドクン。鼓動は加速する。

「あの子、君の彼女？ 可愛い子だねえ、素朴な感じでさ」

「そんなんじゃない……俺とあいつは、まだそんなんじゃない」

「そうなの？ でもね、男だったら『かもしれない』女でも、ガツチリと掴んで離さないぐらいじゃないとダメだよー、女だっていつまでも待つちゃくれんよ」

やけに馴れ馴れしい、もとい気さくな中年兵士。恐らくは緊張した兵士の、不安を取り除くのが仕事なのだろう。

だが緊張は取り除けないだろう。ティータの相手は、間違いなくクリッパー。それにリオ、深緑の王となったジューク。難題は多い。前大戦では共に戦った、ラティオも来てくれるかはわからない。

「おうっ、ティータ！ 勝っても負けても、これが最後の大战だ、気張っていこうぜ！」

「ああ、そのつもりだ！」

そして、いよいよティータの所属する、第二波攻撃部隊が進軍を開始する。

「ついにバースさんとティードの、第二波攻撃部隊が出撃したんだってよ！」

どこからともなく、ティオの耳にそんな声が入ってくる。

(そっか……ついに攻撃したんだ、ティード)

ドクン。ドクン。ドクン。感じられる命の鼓動は。

(せめて……私は貴方の勝利を願います。神様……どうかティードを生きて返してください、お願いします)

両手を握りしめ、神に祈りを捧げる。ティオは滅多にこういう事はしないが、ティードの為に、祈りを捧げる。

ドクン……命は、おトラ立てテ、コワれタ。

「あつ……ああ……そ、んな……」

ティオは突然、膝をつき倒れる。その体は遠目で見ても震え、目は常軌を逸している。繰り返す嘔吐と、滲み出す血液。その異様な姿に、誰もが近づこうとしない。

「ティ、ティオちゃん、どうしたんだい!？」

それを発見したハリスは、急いでティオに駆け寄る。

「ティオちゃん、しっかりするんだっ! ……何をしている、救護班早く呼べっ!」

そうしている間にも、止まる気配のない、ティオの異様な行動。どうすれば良いのかわからず、ハリスもただ名前を呼ぶ事しかできない。

そして。

「駄、目……もつ、う、みんな……離れ、て……離れないと……みんな、みんな……殺してやるっ!」

ティオの体から、黒桃色のような、オーラが漂い、その瞬間サンバナは光に包まれた。

途切れる事のない断末魔、悲鳴、泣き叫ぶ声。

ティオはゆつくりと上空へ浮遊し、黒桃色のオーラで形成された、あまりにも巨大で、禍々しい翼を広げる。

それを見た人々は言う、「あれは悪魔の子」だと。

世界の全てが、その彼女へと視線が向けられた。黒桃色の翼は、怨念に満ちた命の輝き。

「ハハハ、アツハツハツハツハ、アツハツハツハツ！ ありがとうと言わせてもらおうよ、ティオという名の、もう一つの私の人格よ……。世界よ、聞けっ！ 私の名は、ティアナ……。世界を崩壊させ、愚かな人類に裁きの鉄槌を下す！ ……これは、手始めとなる、裁きの一つだ！」

ティオ、いやティアナは、軽く腕を振ってみせた。その瞬間、城国を掠めるように、大地が大爆発を起こす。腕を振っただけの衝撃波で、前線にて戦っていた多くの人間が、わけもわからず何もわからず、その命を散らしていく。

「さあ、人間共よ、そして私を造った王よ、懺悔するがいい！」
悪魔の咆哮と、悪魔の翼が世界を包む。

「なっ、まさか……。ティアナだともいうのか……。？」
一人、その存在を認識している、深緑の王。

「王よ……。あれは一体何なのですか！？」
その姿をただ事ではないと判断した、クリッパーとリオも、軽い混乱を起こす。

「あれは……。数十年前に、私が造りあげた、アルティロイドの原型にして、破棄したはずの、真の……。最強のアルティロイド。……。まさか……。失敗に終わったと思ったが、よもや完成し覚醒するとは……」

「か、覚醒って……。何かあるっていうんですか、王様！？」
リオは完全に、パニックになっている。無理もない、ただ見ていられるだけでもわかる、聞く必要もない。あまりにも次元が違いすぎる。「無理だと思うが、クリッパー、リオよ。あやつの、ティアナの迎撃に行くのだ！」

深緑の王は、無理だとわかって命じた。
クリッパーとリオは、ティアナの元へと急ぐ。

空を覆う、黒桃色の光の幕。サンバナの町から、やや南西の方角から、その光の幕が形成されている。

「何だ、これは……一体!？」

第二波攻撃部隊として、城国へ向かっていたティード。突如襲ってきた、衝撃波を間一髪のところ避ける。

落ち着いて辺りを確認する。第一部隊は、直撃コースだっただろう。遙か向こう、城国方面は混乱しているように見える。それに同じ部隊の人間でさえ、死者が多発している。

謎の衝撃波により、一瞬で命を散らせた戦士達。生き残った者は、全員が黒桃の光を見つめている。

「ティオ……」

言い知れぬ不安感。拭いされなかった予感。その全てを、今こそ最も実感する事ができる。

ティードは作戦に関係なく、ひとりでに足が動き、その光の幕黒桃の翼を目指し走り出していた。まだサンバナから、そう遠く離れた場所ではない。ティードならば、すぐに戻れる。

しかし、その戻った先には、変えられぬ現実が待ち構えていた。

「ティオ……そんな、馬鹿な……」

ふと、目の前で浮遊する、ティオと視線が合わさる。

「火の騎士か。ずっとお前を見てきたが、直に見るのは初めてだな」「何を言っている……ティオ!？」

ティオであって、ティオではない。別人とも呼べる目の前の人間。顔つき、口調、纏う雰囲気、その全てが知りうるティオとは違う。

「ハツハツハ 私はティオではない。いや、ティオなどという、私の中の疑似的人格と一緒にされては困る……」

「疑似的……人格?」

「 わかりやすいように言っただろう。我が名は、命の騎士ティアナと呼ばれた、最初のアルティロイド。そして……この肉体のオリジナルの人格は、ティオではなく、この私だ！」

どうしても拭えなかった、言い知れぬ予感は当たっていた。

だが当たっていたからと、どうなるわけでもない、はずだった。

ティオが仮にもティアナだったとして、それを受け入れれば、全ては収まるはずだった。そう、ティオがかつて自分を受け入れてくれたように、今度は自分がそうすれば……。

「お前も私と共に来い！ 我らアルティロイドという名の、忌まわしき存在を造りあげた王につ、人間につ、共に裁きの鉄槌を下そう…… 私とお前には、そうできる権利がある」

裁きの鉄槌を下す権利。確かにアルティロイドには、それがあのかもしれない。

最初のアルティロイドのティアナから、現在最後のアルティロイドのクリッパー。彼等は、例外なく元は人間だったのだ。

究極の生命体 アルティロイド計画。アルティロイドには、誰しもがなれるわけではない。いわゆる『適合者』でなくてはならない。人体改造、聖獣と称される動物との核融合。その全てが適合しなければ、たちまちその命は、闇に消えていく。ティードもティアナも、そんな壮絶な人体実験による産物だ。

「私達は汚い人間の、勝手なエゴによって造られた！ そうなる前までは、平和だったはずだつ、家族がいて、友達がいて、そんな当たり前を奪われた結果がこれだつ、今度は私達が奪うのだ、恐怖を与えてやるんだ！」

「……違う」

「違う、それが人間という汚い生き物だ」

「……違うつ、人間は……全てがそういうものじゃない！ この大地は、ティオが平和を願った大地だ、……お前が破壊を望むのなら、俺はお前を止める！」

炎帝・ヴェルデフレインを鞘から抜き出し、構えるティード。

「人間に感化されたか、火の騎士。それも良いだろう……死ね」
腕を振るうティアナ。それは再び衝撃波になり、大地をえぐって
いく。

それを回避し、一気に間合いを詰める。まずはティアナの意識を
失わせる。セレナの時の方法が、ティアナに通じるなら、一時的と
はいえ、この騒ぎを止める事ができる。

「テイオを、引っ張り出させてもらっぞ！」

だが勢い良く振ったヴェルフレインは、ティアナに当たる事な
く、その刃を止められる。

「なっ……！？」

刃は決して、同じように武器で止められたのではない。ティアナ
の目の前の、見えない空間が、その攻撃を遮断した。

「残念だったな、火の騎士。……見えているだろう？ 私から放た
れている、黒桃の光が。これはただの視覚的効果の飾りではない、
私の体を守る為の防御幕。……そしてっ！」

腕を振るい、再び衝撃波を発生させるティアナ。攻撃後の硬直も
あり、かすった程度だが、大きく飛ばされるティード。

「ぐあっ……！」

「この状態の私は、何者にも勝る最強の兵器となるんだ……。最強
のアルティロイドと称された、火の騎士よ。せっかくだ、もっと私
を楽しませてくれ」

「くっ、……このっ！」

再度飛び上がり、ティアナへの攻撃を開始する。一撃目で、お互
いの力の差を認識したティードは、完全に攻撃体勢で臨む。

その証拠に、一度で意識を刈り取るうとはせず、二度、三度、四
度と、その電光石火の剣を仕掛けていく。

だがその度に、ティアナの形成した防御幕に阻まれ、決定打にな
り得ない。

「……くっそ、 うぐっ!?」

今度は腕を振るわず、コンパクトな掌打を、ティードの腹部に放

ち、そのまま地面に叩き落とす。

「うっ……げほっ、げほっ……！」

「アーツハツハツハ！ 残念だったなあ、私の攻撃は何も衝撃波だけではない。その肉体から繰り出される、小さな攻撃の一つ一つが、名刀をも凌ぐ武器になるのだ！」

激しく咳き込み、吐血し、その場に倒れるティード。既に呼吸も荒い。

「最強の火の騎士も、私の前ではこの程度か……いささか拍子抜けだな。……だが私にも、この状態で戦っていられるのには、限界時間がある。同胞を殺すのには抵抗があるが、私の復讐の為に、障害となる者は排除するっ、さらばだ、火の」

「 行け、パルティナ！」

突然飛び交う、四つの光弾。一発一発が、かなりの威力を持っていたが、それすらもティアナの防御幕に阻まれる。

そう、そしてこの攻撃の正体はリオだ。見ると、リオとクリッパーが、この戦闘領域に姿を現した。

「ふふ……何かと思えば、王の完全なる犬になった、アルティロイドではないか」

「くそ……クリッパーに、リオ……。この機会に……俺を殺しに、来たのか？」

ゆっくりと空から舞い降りる、二人の騎士。光と闇の騎士、リオとクリッパー。

クリッパーは、無様だな、と言いたげにティードを睨み付け、
「勘違いをするな。俺達は、王を守る為に、奴を殺す為にやってきただけだ」

「キャハハハ！ そういう事ね、殺すチャンスを見逃すのは、さすがに残念だけど、今は見逃してあげるわ！」

「リオにクリッパー、か。面白い、どんなものか……相手をしてくれる！」

その言葉が合図となり、光と闇、そして命の騎士の戦いが始まる。

リオは、クリッパーが懐に飛び込む為の援護に、パーティナの斉掃射をする。

「無駄だよ、そんな攻撃ではね」

「ならば、これならどうだ！」

援護射撃の間に、接近したクリッパーは、大鎌ソウルイターと、自慢の怪力を活かした攻撃にでる。これならば、どんなものでさえも粉碎してしまうのではないか、そんな錯覚をさせるぐらいの、気迫ある攻撃である。

だが、ティアナの防御幕はそれでも打ち消せない。

「……………ぬっ、あああああああ！」

「うふふ、そんな野蛮な獣のような声を出さなくても、これを突破する事はできない、わっ！」

気迫籠るクリッパーに対して、ティアナは涼しい顔をして掌打を顔面に放つ。

「ぬう……………っ!？」

「貴方も墜ちなさい、火の騎士のように、ね……………」

ティアナにしてみれば、ちょっと相手を押した程度、しかしクリッパーにすれば、強大な力で突き飛ばされたに等しい、衝撃が腹部に襲ってくる。

「があっ……………ぐっ……………!」

吐血するクリッパー。その意識は、今の攻防で断ち切られてしまいそうになる。

「あら……………見かけ通り、貴方は火の騎士よりも、打たれ強いようね?」

「クリッパー、離れて!」

動けないクリッパーの、時間を稼ごうと、必死の思いでパーティナを放つリオ。しかし健闘も虚しく、何の時間稼ぎにもならない。

背中を叩かれ、その威力と勢いで、地面に衝突するクリッパー。

防御能力に、随一のものがあった、クリッパーでさえも、ものの三発の攻撃に動けなくなる。

「クリツパー！」

「光の騎士……天使を気取る愚かな女……ふふふ、貴女も墜ちなさいよ」

リオに向け、腕を振るい衝撃波を発生させる。

「ふ、ふざけんなっ！」

せめてもの抵抗か、パルティナをティアナに向け、一斉掃射を繰り返す。

しかしその光弾も、ティアナに当たる以前の問題であり、衝撃波の風圧だけで、光弾が弾かれていく。そして衝撃波がリオを捉える。

「きゃああああああっ……！」

その衝撃波により、体をズタズタにされ、墜ちていくリオ。既に意識が無いのか、あるいは死んでいるのかさえわからない。それ程の肉体と衝撃の、激しい衝突だった。

「興奮めね……ここまで一方的な暴力をかざすと、さすがに罪悪感もあるわね。それでも私の復讐は遂行する。ティオの影になり、ずっとこの時を待っていたのだから！」

ゆっくりと前進していくティアナ。黒桃の翼を携えし悪魔は、ゆっくりと城国へと進んでいく。

「……くそっ、ティオ……お前を、行かせるわけには……！」

何とか立ち上がり、ティアナに向かっていこうとするティード。

しかしその足は、突然止められる。

「待て、火の騎士……！」

「クリツパー……！？」

「貴様一人では……あいつを止められん……！」

それはわかっている事だった。一回の衝突で、それ以前に対峙しただけでもわかったのだ。命の騎士と自分との力の差を。 いや ティードにはもつと前からわかっていたのかもしれない。

ティオの中に内包されていた、得体の知れない力強さ。それが現在、ティアナが使っている力そのものなのかもしれない。だが、ここまで強大なパワーを、一瞬で溜められるはずがない。長い時間

をかけて、地道に溜めていかなければならないはずだ。

「……どうだ、火の騎士……。一つ、俺と交渉……。しよう」

「交渉……。だと？」

クリッパーからの突然の提案に、困惑するティード。

「そうだ……。見たところ、お前はあの女を、止めたいらしい……。それは俺も一緒な事だ。俺も……。あの女を城国へ……。王の元へ行かせたくはない」

「つまり 利害の一致」

「さすがだな……。その通り、俺とお前は……。今の時点で利害が一致しているはず……。だ。俺に、協力しろ」

考えた事もない提案事だった。決して相容れぬ仲だと思えたクリッパーとの、いまだけとはいえ共同戦線を張る。

「 良いだろう。だが、手はあるのか？」

すると、クリッパーはダメージが色濃く残っているのだろう。震える指先で、ティードを指し示す。

「 确实とは言えん……。だが、切り札は貴様にある……。かつて俺と戦った時、一時的とはいえ俺を圧倒したあの力、そして不発に終わった技……。」

ティードの戦闘力を飛躍的に上昇させる、業火の騎士への覚醒と、ティードの持てる最大級の大技エクスプロージョン。確かに、今現在で出せる最高の切り札な事には変わりない。

「だが二つの技の発動には、長い予備時間が必要になる。そんな時間……。今この瞬間にはない……。」

「それは……。俺が作る」

クリッパーは、大鎌ソウルイーターを支えに、何とか立ち上がってみせる。他人事で見ても、痛々しすぎるその肉体は、かつての猛々しさを感じられない。

「だが……。」

「早くしろ！ 敵は待つてはくれんだ！」

ティードに克を入れつつ、自分にも気合いを入れるように、めず

らしく大声をあげるクリッパ。

「わかるだろう……？　今ここで、あれを止めなければ全てが終わる……」

クリッパは、迷いなく飛び立つと、一気にティアナに向かっていく。その姿を見て、ティーダも業火覚醒と、エクスプロージョン。その持てる最大を発動する為の準備を始める。

（無駄にはしない。お前が作ってくれた時間を、決して無駄にはしない。……そしてティオを、ティオを助ける。……頼むエンドラ、俺の心に反応してくれ、もう一度だけで良い、これが最後まで構わない、俺に……俺に、ティオを助ける力を貸してくれ！）

ティーダに炎のオーラが纏われる。その炎は、かつてない程に揺らめき煌めき、ティーダを火の騎士から業火の騎士へと覚醒させる。熱く燃えたぎる深紅の瞳が見つめる先は、深紅の剣　炎帝・ヴェルデフレイン。

（力を集約させるつ、ヴェルデフレインへ！　俺の身体が壊れても、ヴェルデフレインが砕けても、それでも構わない。だから……俺の中の限界という壁よ、砕ける！　そして、力を……もっと力を！）
炎が集約していく。ティーダとヴェルデフレインに。業火が浄化していく。黒桃に包まれたフィールドを。

それを成す、炎帝の剣　エクスプロージョン。

「　命の騎士、覚悟！」

ティアナの背後から襲いかかる、クリッパ。既に正々堂々の概念はなく、ただティアナを止める、という一点のみに目的を絞っている。

「闇の騎士クリッパー！？　まさか、もう動けるといふのか」

肉体は万全ではないが、それを気迫で補っている。その甲斐もあつてか、繰り出す斬撃の破壊力は先ほどを、大きく凌駕している。だが肉体のダメージも、その補った気迫の分だけ大きい。破壊力とは裏腹に、その鋭さは既に錆びついてしまっている。

「なるほど……大した男だよ、クリッパー。火の騎士と並び、最強のアルティロイドの事だけはある」

「違うっ……！」

意味のわからない事を言う、そう言いたげなティアナの表情。

「最強は火の騎士……俺は、まだっ、火の騎士から最強の称号を奪っていない……そう、奪っていないのだあっ！」

気迫が肉体を凌駕したのか、クリッパーの斬撃に鋭さが戻る。だが破壊力と鋭さの両方を兼ね備えても、ティアナを守る防御幕を突破するには至らない。いまだに余裕の表情を崩さないティアナ。

「馬鹿な男。くだらない執着心よね」

「貴様とて……同じようなものだ……」

「っ……!?!」

そのクリッパーの発言に、苛立ちを感じさせられたティアナ。今までは余裕の表情で、クリッパーの攻撃を眺めているだけだったが、ティアナ自らが攻撃に打って出る。

「王の犬の貴方如きに、私の、何が、わかるっていうの!」

言葉と同時に、クリッパーを殴りつける。そのたった一発の攻撃でも、普通ならば即死してしまう程の威力がある。クリッパーはこの時に、四発の攻撃を受けた。

「虫の息の……犬がっ!」

頭部を殴られ、それと共に鈍い音が響く。

「かっ……はっ……」

「アハハハ、アーハッハッハ、もう終わりよ闇の騎士、逆らわなければ長生きできたのにね　うっ!?!」

ティアナの言葉を遮るように、ソウルイーターを振るうクリッパー。既に意識はなく、半ば本能のみによる攻撃といっても良い。

「この……私を、これ以上　怒らせるなあ!」

最後のトドメといっても良い一撃、再びクリッパーの頭部を殴りつけ、それと共にクリッパーが落ちていく。血だらけとなり、腫れ上がったその肉体は、とてもクリッパーとは思えない。

（火の騎士……あとは……頼ん……だ、ぞ……）

「ありがとうクリッパ！。そして、任せろ！」

最大級の業火エクスプロージョン。その剣を携えし騎士が、黒桃の空を舞い駆ける。

「くっ……火の騎士！？ だとしてもっ、私を止める事は」

まさに死角だった。誰も予期していなかった、そこから一発の光弾がティアナに当たる。完全に倒れたはずのリオが操る、パルティナ。そのたった一つだけが動き、僅かといえども動きを止めた。

「ちい、あの女……はっ！」

「エクス プロージョン！」

炎帝の剣と、黒桃と翼。その両者が激突する。荒れ狂う衝撃の嵐が、世界に吹き荒れる。

（ ティオ！ 目覚めろ、俺は、ここにいるぞ！ お前が困った時には、俺が必ず助ける！ ……だから、だから……お前には、いつまでも俺と共にいてほしい……ティオ！ ）

炎と命の衝撃の交差する中で、少女の覚醒が始まるうとしていた。

29 覚醒スル命

(テイオ！)

誰かが私を呼んでいる。誰だろう、私はこの声を知っている。

(目覚めろ！)

でも思い出せない。記憶の片隅に残る、聞き知った声。

(必ず助ける！)

助ける？ 私は幸せ、とても今が気持ち良い。

(いつまでも俺と！)

俺。私は俺を知っている。俺は私、私は俺？

「違うよ、貴方は貴方だよ」

私が貴方？

「そうだよ、私は貴方、貴方は私」

違う、貴方は誰なの？

「私は……まだ生まれてきていない存在、このまま死んでいく存在」
生まれてきていない、死んでいく存在？

「そう、でも貴方はまだ生きているよ。さあ、目を開けて！」

目を開ける。何も見えない。

「あはは、こつちを見てごらん」

あつ 。それが貴方？

「そう、これが私」

光……なの？

「光でも闇でもない存在。さあ、これで自分を見てみて」
自分？

「自分は貴方。さあ、勇気を出して！」

これが、私？ 貴方とは違う。

「そうだよ、だって……貴方は生きているからね」

私は、生きている。

「さあ、命の鼓動に、命の声に耳を傾けて！ 貴方を呼ぶ、貴方の

為の
「

「 うおおおおおおおつ！」

「 ぐう……この力、私に匹敵するといふのか、火の騎士！」

「 俺は……俺は、負けない！ ティオを救い出す！」

ティオ、さつきから呼ばれるその名前。私はティオなのだろうか。熾烈を極める激突。業火エクスプロージョンを持ってしても、黒桃の翼を突破できない。いや、最初から突破する事は不可能だったのだろうか。

「 ふっ、くっくっく……そんなにティオが大事かい！ こんな私の復讐劇に巻き込まれた、哀れな女がっ！」

「 ……わからない、俺は……まだあいつをどう思っているのか、はつきりとは言えない。でもっ、あいつがいてくれたから、今の俺がある！ だから、目を覚ませ、ティオ！ こいつに、こんな奴に負けるんじゃない！」

こんな奴？

私は私の隣に存在する、彼女の存在を見る。彼女は私と同じだ。でも、とても怖い顔をしている。

「 ほざけよっ、火の騎士 ティーダ！」

ティーダ。知っている、私はその名前を知っている。

いつも無愛想で、素っ気なくて、でも でも実はとっても優しくて純粋な人。そんな貴方だから、私は……。

「 くっ……業火の限界時間か……」

「 ハッハッハッハ！ 無理をしていたんだなあ、火の騎士。でもそれも終わりだよ、よく頑張った褒美に、一瞬であの世に送ってあげるよ。あの世に行けば、ティオも待つてるぞ！」

「 ティオも……待っている……？」

一瞬、ほんの一瞬だが、力の抜けるエクスプロージョン。しかし、それを見逃すはずもなく、ティアナは黒桃の翼で、炎帝の剣を弾き

飛ばす。

違う、違うよ、そこにいつても、私はいないよ！

「終わりだ、火の騎士……」

ティアナの拳に、力が集約していく。そして、それを一気にティードに放った。

駄目、諦めないで、お願い。

「死ねっ、ティード！」 「生きて、ティード！」

「っ……！？」

二重となつて聞こえる声。片方の声は、ティードにとって聞き覚えの いや、忘れるはずもない声。

僅かの差で、ティアナの拳を避ける。その拳圧により、後方の大地が大爆発を起こした。

その力のほとんどを使い果たし、力なく大地に落ちるティード。

「ティオ……なのか？」

虚ろな瞳で見上げる空。そこにいる、一人の少女はティオであり、ティアナでもある。

「ティード……」 「何故だ、何故、私が表にいるのに……！」

一つの肉体に、二つの人格。そして二重に聞こえる声。

「ティアナが目覚めて……全てがわかった」「この私がいるのに、何でティオが出られるんだ！」

その表情、拳動は心なしか、ティオのものに感じられる。肉体の主導権を握っているのだろう。

「私は……かつて城国において、命の騎士としての改造を受けた存在だった……。最も、その時の人格はティアナのものだった」

「何を言っているんだ、ティオ……？」

「私は、いえ私達は、人体改造の失敗の烙印を押され、そして捨てられた……。あの高い城国から、でも……私は生きていた。そしてソリディア兵士長に拾われ……ティオが生まれた」

ティアナとしての、ティオとしての、記憶を辿るように、静かに話すティオを、ティードは黙って見つめ、そして聞き続ける。

「でも……でもね、私はそれで良かったと思えるんだ。だって、そうだったからパーシオンに生きれて、ソリディア兵士長、ハリスさん、カルマン君、ラルク先生……もっと沢山の人達やロビン、そして……ティードダに会えた」

「……ティオ」

「でもねっ」

ティードダの言葉を遮るように、ティオは力強く言葉を続ける。

「でも……ティアナの目覚めによってわかった、悲しい事もあるんだ。ティードダ……貴方がデュアリスちゃんを殺したんだね？」

「……ああ、仕方がなかった、とは言いたくない。俺は……義兄妹であるデュアリスを殺した」

ティオは唇を噛んだ。涙を流さないように、その行為をただ耐えるように。

「そう……か。デュアリスちゃん、今ならわかるよ……デュアリスちゃんも、ティードダが好きだったんだね。実は義姉妹で、親友で、恋敵で……あはは、何か嬉しいようで、悲しいような感じがする」
耐えきれず涙が溢れ出す。うつすらと優しい笑顔に、悲しき涙が
つたつ。

そしてティードダに向き直る。向き直った顔には、既に笑みも涙も無い。

「ティードダ」

「ティオ、戻ろう。俺達がいた場所へ」

この言葉に、ティオは首を縦に振らなかった。

「……ティオ？」

「ティードダ……ごめんね。私の……お願いを聞いてほしいの」

「お願い？ 何だ、言ってみるよ……」

それを聞き、ティオはティードダに笑顔を向ける。どこか無くなっ
てしまいそうな笑顔に、ティードダの鼓動は不思議と早くなる。

「ティードダ、私を」

時が止まったのではないか、そう感じられるぐらいに早さで、テ

イオの言葉はティードダに入っていく。

「私を 殺して」

ティードダには、何を言っているのかわからなかった。いや、わかっ
てはいたが、どういう事なのかが、わからないでいた。

「そんな……事が、できるわけないだろ！ それに、何でお前を殺
さなければならぬ……！」

それを言った笑顔は既になく、悲しみに満ちた顔だけが、そこに
ある。

「ティアナが全てを知っていた……。私は命の騎士として生まれて、
命の騎士だけができる特殊な能力があった。ティードダも知って
いると思うけど、アルティロイドは後世に遺伝子……つまりは子を
残す事ができない。そして、私が生まれながらにして持っていた力
は、ある方法を使い、遺伝子を残す事ができる力……」

「話が見えない……それと、お前を殺さなければいけない事と、ど
う関係があるんだ!？」

「その後世の残し方。それは母胎に生命エネルギーを徐々に蓄
え、それを外部に出す方法。例えば、私の左胸の痛みは、この生命
エネルギーの蓄積に伴う痛みだったんだね。私という生命エネルギ
ーの器に、少しずつ蓄積されていくもの。本当なら、このエネルギ
ーを意図的に発散させる事ができるみたいだけ……」

そこまで言いかけ、ティオは「えへへ……」と笑う。

「残念だけど、私は発散させる方法を知らずに、ここまで来ちゃっ
た。もう……後戻りはできないみたい。私という器は、エネルギー
を許容量以上に取り込んでしまつて、垂れ流しの状態みたい……。
そしてティアナは、その時を待っていたみたい。私は……放ってお
いても、命を出し尽くして死ぬ。でもティアナは、出し尽くすまで
力を使い復讐を果たそうとしているの……。お願い、これ以上、私
達が育つた大地を壊させないで」

「そんな……そんな事を言つたつて……俺にはできないっ！」

「ティードダなら、そう言ってくれると思つてた。でも……お願い、

私を殺して。そしてティアナの怨念を断ち切つてあげて！ それに……私の、私達の中に宿っている『まだ生まれてきていない命』を、私達という殻の中から出してあげて。この子は、一人では外に出られないの……」

ティオの、ティアナの中に宿る、生まれてもいない生命エネルギーの存在。新たな命の鼓動を外に出す為には、その殻となつた命の鼓動を断ち切らなければならない。

「そんな……そんな事……」

「急いで、急がないと……ティアナが目覚める！」「そうはさせない！ この私の身体の中にある生命エネルギーは、私が使つんだ！」再び聞こえ始める二重の声。それと共に、黒桃の翼の活動が活発になつていく。

「早く！ この子と……未来に進んで、お願い……」「未来などない！ 全ての未来は、私の怨念と共に終わるのだ！」

「ティオ……ティオ……ティオツ……。う、うう、うわああああああああああ！」

最後の力を振り絞り、剣を持ち、ティオに、ティアナに向かい、その剣を構える。

全ては未来の為、新たに生まれてくる生命の為。それら全てのエゴというエゴを、断ち切る為の剣線。

一気にヴェルデフレインを、上から下に斬り落とす。黒桃の翼を超え、その刀身はティオの身体を裂いていく。溢れ、飛び散る鮮血。あつさりと切れていく肉、臓器。その全ての手応えが、ティオの手にまとわりついて離れない。

「ありがとう……ティード」「そんな……私の……」

黒桃の翼と幕に包まれた、空は晴れていく。

「ティオ、ティオ……目を開けてくれ、ティオ……！」

剣の重さを制御できる程、ティードの体力は残っていなかった。力の限りでもなく、ただ振り下ろしただけの剣だったが、人の身体

を切り裂くには、それで十分な威力を持っている。

明らかに致死に至る傷。いや、傷というのすら生ぬるい。

「ティー……ダ、あり、が……とう。それ、と、ごめん……ね？」

「……な事に、な、ちゃ、て」

「お前は悪くない、悪くないんだ！ お前は……！」

裂けてしまった身体を、繋ぎ合わせるように力いっぱい抱きしめる。

そして 無情にも、あの現象が始まっていく。

(ティオの身体が……光の粒子になり、消えていく……)

「ああ……ティ……ダ、と、世界……周りが、かつたな……。私は……掴めなかつた……みたい、未来……を」

「そんなつ、まだ諦めるな！ まだ生きるんだよ、またガラクタ探しに行くぞ、買い物にでも付き合つてやる、世界と一緒にいるんだろ、こんなところで……こんなところで死んじゃ駄目だ、ティオッ！」

悲痛な叫びとは裏腹に、光の粒子となり消えていくティオという存在。時間の経過と共に、抗えない真実というものが迫る。

「何か、言った……ティー、ダ？」

「……っ！？ お前……聞こえないのか、俺の声がつ、聞こえないのかっ！」

ティオは微笑んだ。そして、力の入っていない手で、ティーダの手を自分の身体へと誘導した。すると、ティーダの手には、とても暖かな何かがある。

「その子……く、ね……」

ティオの粒子化が、急激に加速していく。足が消え、手が消え、そして身体が消えていく。

「ティオ、ティオ、ティオッオオオオ！」

その子をよろしくね、ティーダ。

私は……残念だけど、貴方達と一緒に時間を歩めない。

まだ、聞こえているのかな？ 最後に言います。本当は、とても怖くて貴方を傷つけてしまいそうで、もしも失敗したら、そんな事

を考えると見えなかつたけど。

「駄目だ……テイオ、消えちゃ……駄目なんだよお……」

ティーダ、私は。

「俺は何一つ、お前に……」

私は　貴方の事が好きです。きっと世界中の誰よりも。

「俺は、お前に何一つ言つてやれなかつた……！」

貴方は、こんな私にたくさんのお事をくれました。

「俺は、お前に何一つ与えてやれなかつた……」

貴方と出会えて毎日が、私の幸せでした！

「俺は……お前を不幸にした……」

だから、未来を切り開いて。新しい、素敵で明るい未来にして、そして生きてください。

「だから……逝かないでくれ……戻ってきてくれ、テイオッ」

テイオの粒子は、完全に天空へと昇つていき、その光の全てが消えていった。

雨が降り出した。その雨の意味もわからず、その雨を感じる事もできずに。そこに残された、小さな生命の輝きを持っていた。

第二部 エピローグ

「 つの、馬鹿野郎がつ！」

カルマンは、左手でティータを殴り飛ばす。

殴られたティータは、体勢を整える事もなく、大の字になるように、倒れた。降りしきる雨のせいで、地面は泥水のようになり、倒れたティータは、泥だらけになる。

「はあ……はあ……！ 事情はわかったよ……でもなあ、それでも殴らせてもらった意味はわかるか？」

大の字で倒れたティータは、その問いに答える事なく、無言で雨が降る空を見ていた。

雨は勢いが凄く、ティータから流れるものの正体を、問答無用で消していく。

「……つこの、何とか言えよ、こらっ！」

死んだような目のティータを見て、カルマンは苛立ちを覚える。

そのまま馬乗りになり、一発、二発、三発……と、ティータの顔面に拳を入れていく。

「ティオは……ティオはなあつ、どうしてお前に、『これ』を託したのか……本当にわからねえのか、お前はっ！」

カルマンの手から、ティオがティータに託した、生命の光が現れる。

「 俺は、あいつに何もしてやれない。俺は……あいつから奪う事しかできない……俺は……」

「……っ！」

呪文のように繰り返される言葉に、カルマンはそれを黙らせるように、再び、四発、五発、と拳を叩き込んでいく。

その行為は数分間に渡り繰り返され、いつしか雨音の静寂のみが、二人の耳に残るようになる。

途端、ティータは立ち上がり、ヴェルデフレインを腰から外

す。そしてそのまま、何処へともなく、歩き出していく。

「お、おい、どこへ行くつもりだ!？」

「償い……俺は、罪を償わなければいけない……」

「罪を償うって……。これはどうするつもりだ、おいつ、ティーダ!？」

必死の呼び掛けも虚しく、ティーダは、この激しい雨により発生した、濃霧の中へと消えていった。

そして、今後数年。ティーダの姿を確認したものはいないという。

アルティロイド? 覚醒スル命 完

第三部 プロローグ

一年前に起きた 第一次支配開放大戦 。
一ヶ月前に起きた 第二次支配開放大戦 。
城国に支配される、地上の人々が、自由を勝ち取る為に行った戦争の名前である。

結果は、二つの戦争とも地上レジスタンス軍の敗北に終わる。この二つの大戦の敗北の影響により、地上人口は、大戦前に比べ七割の人口を死に至らしめるといふ結果になった。

城国に逆らう勢力は、事実上消滅し、レジスタンスという反城国勢力は壊滅。人々は、城国に弾圧されながらも、残る余生を蹂躪じゅうりゃんされながら送っていく事しかできない。

大戦から三ヶ月後のパーシオン。

「そうか……行くのか、カルマン？」

「はい、申し訳ないですけど、ね……」

カザンタ山岳地帯の洞穴を、基地として数十人が暮らしていたパーシオンというレジスタンス。

そこにいたのは、ハリス兵士長という両眼に包帯をした男と、カルマン元副兵士長という、右腕に巨大な機械腕を備える男がいる。

ハリスは、三ヶ月前の第二次支配開放大戦時、『ティアナの悪夢』が発生した近くにいた。ティアナという、悪魔の放った黒桃の光は、彼の眼から光を奪っていった。

「仕方がない、さ……事実上、パーシオンも壊滅だ。どこか大きなレジスタンスや町に移動して、あとはひっそりと暮らしていくしかないさ。……悔しいけど、もうどうしようもないしね」

「それでも、それでも俺は、どうしても諦めたくないんです。ティオが託したこの子を、ティオが誰よりも望んだ未来を……俺は諦めたくないんだ」

「ふふふ……そういえば、カルマンはティオちゃんの事が好……ごめん、失言だった」

ハリスはカルマンに頭を下げて謝った。

カルマンは、ふと振り向く。その視界に映るものは、パーシオンの出入口である。カルマンにとっては、みんなと過ごした思い出の場所だ。そして、その思いを振り切るように、強く眼を瞑る。

「じゃあ、俺、行きます。今まで……ありがとうございました！」
「達者でな、あまり無理はしないように。辛かったら……いつでもやめれば良いんだからな？」

カルマンは、そう言ってくれるハリスに、深く頭を下げた。

そこから少し歩いていくと、数十はあるだろう墓が見えてくる。その内の一つの前で立ち止まると、背中に背負っていた、まだ赤ん坊と呼べる子供を見せる。

「ほら、ティアナ。この人がお前の母さんの、育ての親だぞ。そして俺の尊敬する師匠だ」

「あー……うー……」

ソリディアの墓。

それを見た、ティアナと呼ばれた赤ん坊は、何を喋っているのかはわからないが、小さな動きを見せた。

「はっはっは！ 悪い悪い、ちょっと難しかったな？ ……さて」
カルマンは赤ん坊を再び背負い、ソリディアに向かって敬礼をした。

「ソリディア兵士長……いや、ソリディアさん。行ってきます！ 出来損ないな弟子かもしれませんが、精一杯にやってみます。どうか……どうか見守っていてください！」

そして意を決したように、カルマンと赤ん坊は、カザンタ山岳地帯から下山していく。

そして十五年の歳月が流れ、物語が再誕する。

アルテロイド?~星屑の光のよつに~

1 旅立ち（前書き）

アルティロイド？～星屑の光のように～まで、お読みいただきありがとうございます。

ここからは、「理想郷」「覚醒スル命」のように、続編感覚で書いていきますが、一方で？と？を読んでもない人が、？から読んでもわかるように、を目標として執筆していきたいと思います。

主人公がティータからティアナに代わり、新たなアルティロイドとして読んでいただけたら嬉しいです。

では、どうぞご覧ください。

1 旅立ち

十五年前の悲劇。人々は、支配解放大戦と呼んだ。この名の
大戦は、二度行われ、それぞれ名前の頭に『第一次』と『第二次』
と付けられた。

大戦クラスの戦いは、過去の歴史で数回行われているのは、い
うまでもない。特に現代から近しく、大きな犠牲者数を出した三つを
紹介する。

一つ目は、今から約三十五年前に起きた、『地上連合大戦』と呼
ばれるものだ。戦いは熾烈を極めたが、数に勝る城国軍の、事実上
の圧勝。地上軍の完敗である。

だが、この大戦で名を残した戦士達がいた。『鬼神ソリディ
ア』『軍神バース』『策略家クリム』という、英雄達の存在だ。完
敗こそしたが、圧倒的な戦力差の城国軍と戦えたのは、彼等の活躍
によるところが大きい。

そして、二つ目が『第一次支配解放大戦』と呼ばれるもの。現在
から十六年前に起きている。北と南の地上戦力を、一気に城国へ向
けた、いわば総力戦。戦死者は連合大戦を大きく上回り、近年の大
戦としては、最も最大の戦いとなっている。

最大の痛手となったのは、前大戦の英雄 ソリディアとクリム
を失った事にあるだろう。それとも一つ、この時期あたりから、
人間離れた兵士の存在を、確認できるようになった。

話は逸れるが、『サンバナ攻防戦』『シユネリ湖防衛戦』と、大
戦外の戦いで確認されている。特筆すべきは、黒髪の少年である。
名前は不明だが、あまりにも人間離れた動きは、それを見た者に
とっては、記憶に新しいところだろう。

話は戻り、この大戦も地上軍の敗北となっている。だが、あと一
歩のところまで城国を追い詰め、次への期待を心待ちにした人間も、
決して少なくはないはずだ。

そして、最も近い十五年前の『第二次支配解放大戦』は、歴代で最も、最悪な大戦と呼ばれたであろう。死者数自体は、不謹慎ながらも、過去の大戦よりも下回っている。

しかし、神の天罰か、悪魔の断罪か、恐らくは後者であろう。この大戦には、悪魔が参加した。……詳しい事はわからないのだ。ただ悪魔が現れ、一陣の風を発生させ、多くの人間の命を奪っていた。地上、城国に関係なくだ。

いずれにしても、この三つの大戦により、地上戦力は完全壊滅。第二次大戦が、最後の大戦といっても過言ではないだろう。

人々は終わりなき、城国からの蹂躪と略奪の日々に耐え、始まりなき希望の未来を、待っているのだろうか。

「よしつ、勉強終わり！」

少女は勢い良く本を閉じ、固まった体を、うんと伸びてほぐす。

少女は十五歳ぐらいだろうか、その歳の平均としては、やや小柄な体つきだ。綺麗な桃色で、ショートの髪型。そんな少女と不釣り合いなものは、その服装だろうか。いわゆる地上で使われるタイプの、戦闘用防護服と呼ばれるもの。現在、その防具部分は外されているものの、そんな少女と見比べれば、異常と考えても不思議ではない。

木で作られた、小さな家。これが少女の住まいである。決して恵まれてはいないが、必要最低限の、生活必需品が揃えられている。

「さてつ、次は剣の稽古！ サボると、師匠に怒られちゃうもんね」準備運動を兼ねて、適度に体を動かしながら、剣を取りにくい少女。向かった先には、数本の大小様々な実剣が置いてある。そしてその全ての剣が、何年も使い古したようになっており、所々に血が付着している。

少女が手に取ったのは、その中でも大きい部類に入る、ロングソードである鋼の剣である。この世界では、最もポピュラーな武器であるが、小柄な少女には、あまりにも似合わない。

そして鋼の剣を手に取った少女は、その隣に置いてある、刀身が

深紅の剣を見つめる。

「お父さん。私は、お父さんの領域に、近づけていますか？」
決して悲しそうな瞳ではなく、何か目標を見定めるような、真っ直ぐな瞳が向けられている。

まだ、あどけなさが残る少女には、これも不釣り合いな覚悟をもった表情をしている。

「ティアナ……剣の稽古はどうした？」

突然、家の扉が開き、男が姿を現す。体格は非常に良く、貫禄に満ちた顔つき。何よりも、その男に目を見張るものは、その男の右眼と右腕だろう。人間のモノではなく、機械でできた眼と腕がある。右腕に関しては、ガタイの良い男でさえも不釣り合いとされる程に大きなものだ。

「あ、カルマン師匠！ 大丈夫です、今からやるところですよ」

「ふむ……まあ、お前はサボるような奴ではないし、嘘をつくような奴でもないのは、わかっているつもりだ。俺は食料確保に行ってくる、決して手を抜かないようにな？」

「はいっ、わかりました！ 気をつけて行ってきてください、師匠！」

「ふん……誰に向かって言っている」

決して怒っているわけではなく、不器用に言い、男は出かけていく。

少女の名はティアナ。師匠と呼ばれる男の名は、カルマンという事がわかる。

「やつ、はっ、せいっ！」

それからおよそ二時間は経過しただろうか。休む事なく、教わった通りに剣を振り続ける。流れる汗が何故か美しく、清らかに見えてしまう。

激しく動き回っているのに、その静寂漂う森のように、少女の存在は、静かに激しい。洗練された といべきなのか、やはり十五という歳の割には、一言で凄いとしか言い様がない。

鋼の剣を鞘に納めると、ティアナは丁度良い大きさの切り株に腰掛け、一息をつく。

(……木や草、生き残った動物達の声。そうだよ、同じ大地に住む生き物同士、争ってちゃいけないよね。……うんっ、もう少しだけ待っててね、私、頑張るよ！)

まるで自然と同化したように、ティアナの存在は、まさしく自然にそこにあった。神秘性などもそこになく、感じさせるものもありません。

流れる汗が伝い落ちると、足音が聞こえる。とてもずっしりとした、重い足音だ。

「二時間の稽古時間、しっかりとこなしたか？」

その足音の正体はカルマンである。左手には、袋一杯になった、食料が詰め込まれている。

そしてまた、その重い一步を踏みしめ、ティアナに近寄っていく。「おかえりなさいっ、師匠！しっかりと稽古はこなしましたっ、安心してください！」

「安心も何も、手抜きして後々困るのはお前だ。……っん？」

カルマンは、抱えていた袋を、ティアナに渡す。すると訝しげな表情で、ティアナの髪の毛を見つめる。

その理由がわからずに、ティアナも上下左右を確認するが、その正体はわからない。

「髪が長くなってきたな……切っておけ。それと旅立ちの準備をしておけ！今夜、ここを発つぞ」

「あ、はいっ……！」

不器用で口が悪い男だが、今は明らかに少しばかりの悪意があった。決して嫌がらせなどではなく、過去のトラウマのようなものから、カルマンの口調を荒くさせる。

ティアナもこれが初めてではない為、そこまで気にした様子もなく、素直に返事をする。

「……っ、えっ、今夜ですか？」

「そうだ、そろそろ頃合いだと判断した。まずはここから南西にある『サンバナの町』を目指す」

半ば強引ながら話を終わらせ、カルマンは家の中へと入っていく。そんなカルマンが家に入っていくのを見て、手渡された袋の中から万能ナイフを取り出す。そのナイフを使い、器用に伸びた自分の髪の毛を切っていく。落ちていく髪の毛の長さは、ほんの数ミリ程度だったが、その度にカルマンに注意されていた。

最初は髪の毛が長いと、動きに支障が出る為だと思っていたが、どうやら別の理由があるようだ。その理由を、過去に数回ほど聞いた事があったが、それこそカルマンの怒りに火をつけてしまうようで、ここ最近では全く聞いていない。

「……こんな感じかな？」

手探りで自分の髪の毛の長さを調べ、大体で調節する。切る前と大差はなかったが、気持ち短くなっている。

ナイフに付着した髪の毛を、軽くはたき落とし、それを収納する。袋の中に入っている食料は、お世辞にも多いとはいえないが、この世界この時代を考えれば、恵まれているといえる。そして食料を、今食べるものと、旅に持っていくものとに分けていく。

「旅立ち、かあ」

不思議な気持ちを持っていた。期待と不安の入り交じったような、心音が跳ねるような気持ちだ。

遊びに行くわけではなかったが、そんな気持ちを隠せずにはいられなかったのだ。

「ちっ、またあんな事を言っちゃった」

ティアナを外に残し、家の中に入ったカルマンは、やや強めの舌打ちをする。

その原因はティアナの髪の毛のせいでもあり、決してティアナ本人に苛立っているのではない。

「ふう……ったくな！」

タルの中に貯蔵してあった水を、小さな容器に一杯入れ、それを一気に飲み干す。喉も渴いていた為、その水の冷たさと潤いが心地良い。

気分を落ち着けると、椅子に座り込む。右腕の巨大な機械腕が、総体重を重くしているのだろう、椅子が軋む音を立てた。

カルマンは一瞬ながら、過去の記憶を思い出していった。第一次および第二次大戦の渦中、カルマンは成人に満たない少年兵であった。お世辞にも才能があったとはいえなかったが、負けたくない一心で色々は無茶をしていた過去の自分がいる。カルマンには、戦闘においても恋愛においても、負けたくないとして一方的ながら、ライバルと見ていた男がいた。

その男の名前はティードといい、歳は同い年。なのに戦闘の腕は、カルマンと雲泥の差があった。

そしてティードには負けたくないと思える戦いが、もう一つあったのだ。それはティオという少女の存在。少年時代のカルマンは、当時、英雄として名を馳せたソリディアという男に憧れ、その男が作ったレジスタンスチーム『パーシオン』に所属していた。そのパーシオンに来た際に、ティオに一目惚れをした事が全ての始まりだった。

「うむ……歳をくつたな、昔の事ばかり思い出してしまう……」

座っていると思いついてしまふ、良い事も悪い事も。カルマンは立ち上がり、自身も旅立ちの準備をしていく。鞆や袋に使うべき物を入れていく。巨大な機械腕と、体格の良さからは意外だが、カルマンは非常に手際良く荷物をまとめていく。

すると勢い良く扉が開き、ティアナが入ってくる。

「師匠、食料の仕分けが終わりましたよ！」

「ティアナ、扉は静かに開けなさい。……俺に構わずに、先に食べている。準備が出来次第、すぐに出発するからな」

右手を高々と掲げ、「はーいっ！」と非常に元気よく返事をする。そんな元気いっぱいのティアナと対照的に、黙々と荷物の仕分け

をするカルマン。数分してから荷物の整理が終わり、ティアナの用意した食料を口に運ぶ。調理などしていない為、美味しいとは言えないが、素材独自の味を楽しめる為、カルマンはよく生のままで食事をする。

窓から空を覗くと、夕焼けが空に広がっていた。全てを燃やすような赤い空を見て、カルマンは嫌な事を思い出す。

「よし、そろそろ出発するぞ。夜になると色々と面倒だから……。刃物は最低限で良いんだぞ、ただでさえ嵩張^{かさば}って重いからな。あと……ヴェルデフレインを忘れるな？」

言うべき事だけを言って、カルマンはさっさと家の外へと出て行ってしまふ。

ティアナは言われた通りに、ヴェルデフレインを手に取る。

深紅の刀身のヴェルデフレイン。普通の剣とは違い、材質にオリハルコンが使われ、刀身が生きているように熱い剣である。

これ程の剣が、何故ここにあるのかさえ、ティアナは知らなかった。師匠であるカルマンの繋がりである事は、容易に想像できるが、それ以上にティアナには感じ取れていた。

その剣に宿りし、悲しみの記憶を。

ティアナは、使い慣れた鋼の剣と、深紅の剣ヴェルデフレインを、腰に携えて家を出る。家から出ると、予め用意していたものだろうか、枯れ木や枯れ草が家の周りに置かれている。

「師匠……何を？」

「下がっている！」

そう言い、カルマンは火のついた枝を数本、家に向かって投げた。一瞬にして炎が燃え広がり、その夕焼け空と同じように、辺りは真っ赤に染まっていく。

「師匠つ、一体何を！？」

「……必要ないのだ」

燃える家を見つめながら、重く言葉を放つ。全く表情を変えずに、燃えていく家を見つめるカルマンに、ティアナは言葉をかけられない

いでいた。

「俺達の旅は……ただの旅じゃない。混沌となったこの大地に、希望という名の小さな灯を見せていく旅だ。俺達に帰る場所はない。人々が安心して故郷に帰られるようになる、その日まで……俺達は戦い続けるんだ」

燃えていく轟音と共に、小さな嗚咽がカルマンの耳に入ってくる。横でティアナが涙を流していた。

「……泣くなつ、俺達は」

「泣きますっ！」

泣き声だったが、カルマンの声を消すように、頑張つて大きな声を出す。

どうしても譲れないものが、その心の内に秘められているからだ。「泣きたい時に泣けない人間がつ、人の故郷は守れません！」

「ティアナ！？ ……そうだな、今は、思い切り泣け」

その瞬間、今まで耐えていた涙が、ティアナの眼から溢れて流れた。泣き終わる頃には、家が全て燃えて、灰となっている。夕焼けはすっかり夜という、闇の世界へと変貌を遂げていた。

星が泣いているように見えた。いつもよりも多く光り輝いていると感ぜられる。

無数に輝く星達の中で、一際強く大きく輝く星が、ティアナとカルマンを照らしている。

「行くぞ、ティアナ。まずはサンバナの町へ」

「……はいっ！」

名もない場所から、二人の旅は始まる。

光り輝く星は人で、それを映す空は大地だ。二人の存在はとても小さく、星屑の光のようかもしれないが、確かな輝きが一步を踏み出した。

1 旅立ち（後書き）

キャラの名前の頭二文字にて、略されています。

「名前」

カル「ティアナ」

ティ「何ですか、師匠？」

カル「今まではお前の事を、ティアナ、と呼んでいたが……以降はティアと呼ぶ」

ティ「……？ 一体突然どうしたんですか？」

カル「何、簡単な事だ。今の世の中ではな、ティアナの名前を出すだけで、邪険にする者が多いというだけの事だ。お前だって、好んで嫌な思いはしたくはなかるう？」

ティ「そりゃそうですよ！」

カル「と、いうわけだ。以降はティアと呼ぶ、わかったな」

ティ「わかりましたっ！」

2 かつての故郷で（前書き）

名前 ティアナ

種族 Nアルティロイド

性別 女

年齢 15

階級 命の騎士

戦闘 2500

装備

E炎帝・ヴェルデフレイン

E鋼の剣

E戦闘用防護服

名前 カルマン

種族 サイボーグ

性別 男

年齢 31

階級 機械腕の男

戦闘 1700

装備

Eギガンティックアーム（右手装備）

Eスモールソード（左手装備）

E戦闘用防護服・改

2 / かつての故郷で

ティアナとカルマンは、己の帰るべき場所を燃やし、旅の覚悟を固くする。

住んでいた場所から、南西の方角にある、サンバナの町が二人の向かう先となっている。歩き出してから数十分、ティアナは外の世界に目を輝かせていた。

実は十五年の間で、家の周囲からは出た事がない。カルマンが出させなかったのだ。出たいという気持ちもあったが、ティアナはカルマンの言い付けを、しっかりと守り続けた。

暗闇を歩いていくと、そこにはかなり小規模だが、人の集落を発見する。明かりもある為、城国に潰されてはいないようだ。

「ここは」
カルマンは小さな声で言った。

思い起こせば、ここには、いや正確には、この場所には覚えがあったのだ。

出発した家から、やや西寄りであり、サンバナの町とは丁度中間の位置にある。

そう、ここはかつての、

(旧パーシオンの跡地……俺の、全てが始まった土地)

感慨深いものがあった。その土地で過ごした、かつての記憶が、カルマンの脳裏で甦っていく。

もう、十五年も前の出来事だが、確かに思い出せる記憶達。

「 師匠っ、あそこに影が! 」

ティアナの声で、現実に戻される。既に剣を構えて、謎の影の襲撃に備えている。この辺りは、さすがに鬼稽古の成果といったところだろう。

確かに視線の先には、大きな影がある。だが人間ではないと、人目でカルマンは推測する。その影は四足歩行をしていて、畑の上を

歩いている。おまけに畑の食物を、食い漁っているようだ。

カルマンは小声で、ティアナに指示をする。

「落ち着いて見る、あれは野生の獣だろう。放っておけば害はない」
「でも畑がっ！」

「あいつも……生きる事に必死なんだ。この人間には悪いが、これぐらいは見逃してやれ。捕まれば、それがあいつの運命なんだ」
途端に、村中に火が灯り、そこから数人の村人が出てくる。男も女も、鍬や簀を持ち、影になっていた獣に向かっていく。

一瞬だが影の正体が見える。毛むくじやらの本体、カルマンの予想通り、野生の獣に間違いはないようである。

村人がいきり立ち向かっていくと、獣は嘲笑うかのように、走り去っていく。あまりの速さで、目で追うのがやっとだ。到底、人間に追いつけるものではない。

「何だ、あんた達はっ!？」

獣を追ってきた、村人の男に見つかる。獣騒動のせい、目が殺気立っている。

「待って、私達は怪しい者ではないです！」

「俺達は旅の者だが……何かあったのか、協力できるのなら協力するが？」

旅の者、と聞いて男の目から、殺気が消えていく。

男は後ろに振り返り、

「搜索中止だ！各自、家の中へ入れ！」

と言い、指示を出す。どうやら、村の中でも地位があるものものようだ。

「私の名前はエドガー。かつては兵士として、活動していた男だ」

「俺はカルマン。そして、こいつはティアだ」

「よろしくお願ひしまーすっ！」

エドガーという男は、二人の事をよく確認する。当然だろう。城国兵が旅人に偽り、村の壊滅を狙っているかもしれない。事実、過去にそういった例も、数件だが確認されている。

ティアナに限っては、不釣り合いな体格に、携えられた剣に注目されるぐらいだったが、問題はカルマンだ。

そもそも体格が良いというだけでも、注目される的でもあるのに、その巨大な機械腕が、特に視線を釘付けにする。そして右眼の機械眼を隠す為の眼帯。既に、只者、という域を超えている。

「カルマン……さん、貴方のその腕は、一体……」

カルマンは、「さん、はいらない」と言うと、

「この腕は友の形見だ。俺は昔、レジスタンス兵でね、この辺りで活動をしていたんだ」

「なるほど……貴方も、いろんなものを失いながら、今という時代を生きているんですね……。良かったら、今夜はここに泊まってくださいませんか？」

「泊まらせる代わりに、あの獣を退治しろ。そういう事だな」

エドガーは、一瞬だけ反応すると、少し考え込むように俯く。そして腹が決まったように言う。

「そういう事になります。貴方達は、見たところかなりの腕をお持ちだと、お見受けします。どうか……あの化け物を退治していただけないでしょうか？ このまま農作物を食われると、私達の生活がままなりません」

カルマンは考えた。予定では、今日の夜の内にサンバナの町まで到達したかったからである。

この出来事は、道端に落ちている小石に等しい。大して疲れもない為、泊まる必要もなければ、助けてやる義理もないのだ。無駄な消耗は、避けるが良し。

「悪いが」

「受けますよ、そのお願い！」

カルマンが言うよりも早く、ティアナが口を開く。

その言葉を聞き、エドガーは、

「良かったっ、助かります！ では、少々汚いですが、あちらのテントをお使いください」

と言って、一足先に村に戻っていく。他の村人にも報告する為だろう。

指定されたテントは、一番端にあった。確かにお世辞にも綺麗といえず、埃が舞いそうな見た目をしている。

もっとマシかものはなかったのか、カルマンは率直にそう思った。「ティアナ、何故受けたんだ？ 俺達の旅の目的を忘れたのか？」その問いに、ティアナは少し間を空けて話始める。

「世界に希望の灯を見せる。……だから、困っている人の力になるんです！」

「そうする為には、目の前の小さな石は無視しろ、そう言っているんだ」

「嫌です！」

普段はカルマンの言い付けを、しっかりと守る少女であるが、たまに自分の意思を押し通す事がある。

カルマンは、そんなティアナの反応に、目を細め動向を推察する。「希望の灯を見せる旅だからこそっ、目の前の困った人達を救っていくんです。一部が見放されて……大衆が救われるなんて、あつてはならない事なんです！」

そんな言葉にカルマンは、はっ、とさせられる自分がいる事に気がかされる。

気にする様子もなく、「先に行きまーす！」と、足取りも軽く、指定されたテントへ向かうティアナ。そんなティアナを見ながら、軽いため息を吐き出す。

「これが歳を取った……という事か。真剣なつもりでも、どこか冷めたように見てしまう。……昔の俺は、もっと馬鹿でいられたはずなのにな」

一人呟き、テントへと移動していく。

中に入ってみると、やはりボロボロで小汚ない。しかし客用に指定するだけあつて、最低限の物は揃っている。

やる事も無いので、二人は眠りにつく事にする。

そして、次の日の朝を迎える。

朝になり、辺りが明るくなると、村の輪郭が見えてくる。十五年も経過した事により、かつてのパーシオンの形は、全く見えない。畑がメインの村なのだろう。村の中心が畑になっており、それを囲うように、人の住まいとなっていているテントがある。規模はパーシオンほどではなく、むしろ小さい。最小限の土地で、城国に見つからないように暮らすには、最善の環境だろう。

「さて……望まぬ宿泊ではあったが、一応あのエドガーという男に、挨拶でもしに行くか」

まだ寝ているティアナを起こさぬように、そっと立ち上がり、自分が使っていた薄布をかける。左手で頭を優しく撫でると、女の子らしいさらっとした柔らかい髪質を感じられる。

テントから出ようとすると、村の中心部でエドガーと数人の男が話している。遠すぎて何を喋っているかまではわからないが、あまり穏やかな雰囲気ではない。

それもそうだろう。エドガーが話しているのは、城国兵士である。（まさか、俺達の事を……！？ いや、それはないか、俺達の存在を城国に教えてどうなるわけでもない。……少し、盗み見をさせてもらおうか）

カルマンは右眼に備えられている眼帯を外し、その下の機械眼をあらわにさせる。望遠レンズによる読唇術である。

「お願いします！ここ最近では化け物が、この周辺を襲うようになっています、城国への貢ぎ物が追いつかないのです」

「へっへっへ、そんな事は知るかよ。俺達はいつでもここを叩く事はできるんだぜ？貢ぎ物をするから、ここへの攻撃をやめてほしい、と頼んできたのは、あんた達だ。そうだろ、エドガーさん？」

「は、はい……その通りでございます……」

土下座までして、頼み込んでいるエドガーに対して、汚い薄ら笑いをする兵士達。

そんな城国兵士を見て、カルマンは胸糞の悪さを覚える。聞こえはしないが、聞こえるように強い舌打ちをする。

「まあいい……。俺達はティアナのような悪魔ではないつもりだ、もうちょっとだけ待ってやるよ」

「あ、ありがとうございます！」

更に深々と土下座をするエドガー。それを尻目に城国兵は立ち去っていく。

完全にいなくなったのを確認し、カルマンもエドガーに接近していく。

「今のは城国兵だな？ 貢ぎ物とは、ここにある農作物の事か」

「あ、貴方は、カルマン、さん……でしたね。聞いていたのですか？」

「そんな事はどうでも良い。貢ぐ為の農作物が、昨夜の獣に食われ、ノルマを達成できていない……そういう事なんだな？」

「はい、仰る通りで。前にあの化け物を殺そうと、男手を使い立ち向かったのですが……あの化け物は強いものって、返り討ちにされてしまいました。なので強い方の力を借りて、化け物を何とかして殺そうと……」

カルマンの苛立ちは最高潮に達していた。貢いで貢がれてを繰り返す、村人と城国兵に。かつてのパーシオンの土地で、こんなにも情けない事が行われている事実。人間が作り上げてしまった、こんな大地にも、文句一つ言わずに必死に生きている獣に、化け物と連呼し続けるこの男に。そして 自分達のやっている事実には、目もくれず気付かず、ティアナを悪魔と称する人間に対して。

自然と左拳は握られ、目の前で情けなく座り込んでいるエドガーを、力の限り殴りつける。突然の事で、受け身も取れずに横転するエドガー。そしてそれを見ていた村人の、数人がテントの中から出てくる。

「それ以上、エドガーさんに暴力を振るうなら、容赦しないぞ！」
そんな発言が、更にカルマンの苛立ちを加速させる。

(何でそんな風に、城国兵に言えねえんだよっ、いつから地上は城国の犬になっちまったんだよ……！)

カルマンには、その気になれば、ここにいる全員を殺せるぐらいの、戦闘力がある。

だが燃え立つ苛立ちの割に、拳は全く出ようとはしない。感情のままに攻撃しない事、それが今の自分にできて、昔の自分にできなかった事だろう。

「ちよつと、みなさんで何をやっているんですか!? 武器を納めてください!」

「先に手を出したのは、その男だ! 私達は自衛する為に武器を手に入れているっ!」

「し、師匠……?」

ティアナはカルマンを見るが、その表情からは全く真意が掴めない。

殴られたエドガーも、相当なダメージなのか、足にきてしまっていて、いまだに立ち上がる事さえできないでいる。

「聞けっ、エドガー! てめえの言う化け物とやらは、今夜には退治してやる。但し、退治できたら、お前達は城国への貢ぎを止める! 地上の誇りを失ったお前達に、のうのうと生きていて良い権利はねえっ、わかったか!」

カルマンの態度に、村人達は驚き竦み上がる。誰一人として、言い返す事もできない。客用テントに下がっていくカルマンを追い、ティアナも駆けていく。

去り際に頭を下げていったが、間違いなく印象は最悪だろう。

「師匠、さすがにあれは言い過ぎじゃ……」

「そうだろうな。言い過ぎだとわかって言った」

これに、意味がわからない、といった顔を見せるティアナ。カルマンもそれを見て、意を決したように話し出す。

「ティアナ……ここはな、かつてはパーシオンと呼ばれたレジスタンスベースだったんだ」

ティアナが、「パーシオン？」と聞くと、

「そうだ。お前も資料で読んだかもしれないが、鬼神ソリディアが指揮を取っていたレジスタンス。そして、ガキの頃の俺や、お前の母さんが暮らしていた場所でもある」

「えっ……お母さんが!？」

「この土地はな、ソリディアさんや、俺や、ティオ……お前の母さんが頑張って生き抜いていた土地だ。だからこそ、この土地に住んでおきながら、沈んでしまった地上人を見る事が、無性に腹立たしかったんだ」

普段、感情をあまり表に出さないカルマンが、あまりにも意外で、ティアナにとってはどことなく複雑な感情があった。そして、今自分がある所が、自分の母親が暮らしていた土地だと知り、小さな嬉しさもあつたのだ。

「 そういう、事だったのでですか」

テントの向こう側で、突然の声。すぐに声の主は、エドガーだと判断できる。

「立ち聞きとは……まあ、俺も人の事は言えないか」

エドガーはテントの中に入らず、外で立ち続けている。テント越しで影しか見えないが、ふらついているのがわかる。

ティアナが入るように促したが、エドガーはそれを拒んだ。

「この以前の集落……名前は知りませんが、存在は知っていましたよ。実は私もね、ソリディアさんに憧れて兵士を目指した口でね、何度も門を叩こうと思いましたよ」

エドガーの独白に、ティアナとカルマンは黙って聞いている。決して作り話などではないと、判断できた為である。

「だからこそ、この場所にあつたレジスタンスが、十五年前に襲われ、壊滅してしまった時は悲しかったもんです。何よりも同胞の仇討ちがしたいと、若いくて馬鹿ながらに願つたりもした。ここに村を建てたのも、ソリディアさんのようになりたかつたからだ。……でも、現実はそうもいかなかった。カルマンさんの言う通り、私達

はただ生き続ける事に慣れてしまい、戦う事を忘れてしまったみたいだ……」

「安心しろよ、夜の獣は必ず倒してやる。だからお前は、ソリディアさんのように、ここの連中を率いてやるんだ。好きか嫌いか、やれるかやれないか、ではなく戦う事に意味があるんだ」

カルマンの言葉を聞き、エドガーは深々と頭を下げ、走り去っていく。少しは吹っ切れたのだろう、走り方にどことなく覇気が見える。

ティアナは、そんなカルマンを誇らしく思っていた。

「さつすが、師匠！」

「そんなんじゃない、ソリディアさんが偉大だったからできた事だ。俺個人の力ではない」

相変わらず不器用な言葉だったが、ティアナは嬉しかった。そんな偉大なソリディアという英雄を、追いかけた結果が、今のカルマンを生み出している。

だからこそ、目の前の男を「師匠」と呼べるから、それが何よりも嬉しいのだ。

「さて……あの巨大な獣が現れれば、今夜は戦闘になる。体を休め、武器を手入れしておけよ、ティアナ？」

「はいっ、わかりました、師匠！」

「や、やけに元気だな……」

そして、夜を迎える。

巨大な獣の咆哮が、闇夜を裂きこだまする。

2 かつての故郷で（後書き）

「母の故郷」

ティ「~~~~」

カル「どうした、嬉しそうだな？」

ティ「嬉しいですよ、お母さんが住んでいた場所にいるんですよ！」

カル「母の……故郷、か」

ティ「そういえば、師匠のご両親は？」

カル「む、俺の両親か。詳細はわからん、何せ勘当同然で家を飛び出してきた。もう本当の故郷がどこにあったのかも、わかった話ではないよ」

ティ「どうして、家を……？」

カル「ん、ああ、エドガーという男と同じように、俺は当時のソリディア兵士長に憧れててね。門を叩いて弟子にしてみらいにいったのさ」

ティ「へー、じゃあ、師匠はソリディアさんの最高の弟子ですね！」

カル「な、何故だ？」

ティ「だって、私にいろんな事を教えてくれた師匠ですよ、優秀だ

「たはずです！」

カル「っ……。 (耳が痛いな……) 」

3 狼との戦い

「来ましたね、昨日の子と一緒にですかね？」

「大きさも一緒だ、まず間違いはなかるう」

テントの中から、獣の動向を伺う。退治に動くのは、相手が行動に移してからだ。何の証拠もなく、一方的に暴力で押さえつけるわけにはいかない。

村人達には、事前に一切の手出し無用、という旨を伝えてある。

足手まといが飛び出してきては、攻撃の邪魔になり、守りながらの戦いでは不利になる。

村をまとめるエドガーには、それを村民に伝えるように、重々言つて聞かせた。

「……っん？」

「どうした、何かあったのか？」

ティアナがあまりにも、変な声を出す。何かの疑問がある、そんな感じの声である。

「あの子……普通の獣じゃないみたい……」

「普通の？ そりゃそうだろう、あんなにでかいのは普通はいない」

「そういう事ではないんです。……何て言うか、こつ……」

違和感を感じているが、言葉には表せられない。きっとそんなところだろう。

だがそれは、微弱ながらカルマンにも感じられた。いや、正確には知っていたのかもしれない。過去に同じような感覚が、近くにあったのかもしれない。

過去の記憶を遡り、この感覚に近いものを探る。あと少しでも考えられれば、その正体を掴めたのだろうが、ティアナの声により、思考世界から現実に戻される。

「動きましたよ、師匠！ どうしますか？」

「仕掛けるに決まっているだろう。但し殺すな、峰打ちでやってや

れ

「わっかりましたっ！」

そして一気にテントから飛び出し、獣との間合いを詰めていく。まるで電光石火と例えられる、その速度は、ティアナという少女からは、およそ想像がつかない。

獣は一早く、そんなティアナの攻撃してくる際の、殺気のようなものを感じ取ったのだらう。漁っていた作物を投げ、警戒体勢を作っている。

「ガルルル……」

「ごめんね、痛いかもしれないけどっ！」

刃を逆さにして、鋼の剣で応戦する。なまじ手加減をしていない攻撃は、一撃で仕留める気満々といったところか。

しかし、これはティアナの優しさである。下手に手加減した攻撃で、相手を仕留められずに、結果的に何発も痛い事をするならば、一発で終わらせるのが、最大の優しさだらう。

だが、そんな気持ちとは裏腹に、獣は素早い身のこなしで、剣線を避けると、野生の獣独自の反射で、ティアナに反撃を仕掛ける。

「ティアナ！」

間一髪のところ、カルマンがその大きな機械腕を盾にして、攻撃から身を守る。

獣は機械腕を蹴り飛ばし、三角飛びの要領で、一瞬にして間合いを離す。

「ありがとうございます、師匠！」

「気をつける、どうやら本当に普通とは違うらしい」

相手の攻撃を防御した、たったそれだけだが、カルマンは相手の力量を計った。

ただの巨大な獣、というだけならば、ティアナの初撃で終わっている。仮にも避けていたとしても、カルマンの機械腕への攻撃による衝撃に、ダメージがあるはずだ。

しかし目の前の獣は、それらを避けて、無傷に近い状態で目の前

にいる。この結果からなる、一つの予測による答えが出てくる。

「あいつ……知性を持っているな」

「知性？ でも、あの子は動物ですよ!?」

「何、動物の見た目をしていても、知性を持つ方法はある。例えば

複合生命体キメラ、とかな」

「グルルル……!」

カルマンは、こう言う事により、目の前にいる獣に駆け引きを試してみた。

だが予想は外れたのか、獣は何の反応も見せずに、警戒を強めるばかりである。だが、知性を持っている、という予想は、あながち外れてもいないだろう。

「それで師匠、どうするんですか!?!」

「方針は変わらない。一発叩いて追い返す、それだけだ!」

カルマンは気迫を込め、接近戦を仕掛けていく。だがあまりにも大きすぎる、機械腕が重いのか、動きは非常に鈍重である。獣は足取りも軽く、容易に攻撃を避けていく。

「当たらん……大したものだ、あの獣」

「師匠! よく見るとあれは、北の地域でよく見られた、狼つてやつですよ!」

「獣でも狼でもどつちでも良い! ティアナ、お前が攻撃の要になるんだ。俺では奴の速度に追いつけん!」

「了解ですつ! 防御、お願いします!」

師匠と弟子。さすがというべきか、二人の連携は速く的確である。ティアナの鋭い攻撃を、回避していく狼。スピードという一点に関しては、負けず劣らずの能力を見せている。だが狼の反撃は、きつちりとカルマンがブロックする。この狼に、カルマンの防御能力以上の、攻撃力が無かった事が、幸いしたところだろう。

二人と一匹の攻防は、長期化していく。それは二人にとっては、あまりにも意外すぎる事だ。仮に野生の動物で、それが例えば並外れた強さを持っていたとする。そうだと仮定しても、『一般の中の

並外れ』程度なら、簡単に倒せる予定だった。自惚れではなく、確かな自信があつたからだ。

しかし事實は、二人相手に善戦をする獣が、目の前にいる。カルマンの予想通り、複合生命体キメラ、のような存在。あるいは、それに近いものとする見方が、強まってきているのは確かである。

「あつ!?」

だが拮抗した攻防は、狼の一撃により崩された。

長期戦に集中力が、維持できなくなったティアナの、鋼の剣を狼が弾き飛ばしたのだ。これでは狼の速さについていけない前衛が、いなくなってしまう。

「ティアナ、ヴェルデフレインを使え!」

咄嗟にカルマンは叫んだ。剣が無くては、丸腰で相手の攻撃を受ける事になってしまう。

しかし、ティアナはヴェルデフレインを、鞘から抜こうとはしなかった。一度も使った事がなかったが、本能的にその剣の威力を、ティアナは知っていたのだ。この剣を使えば、例え相手の攻撃を受けただけでも、狼の体を真つ二つにしてしまう事を。

そんな思惑とは裏腹に、ここが勝機と判断した狼は、一気にティアナへ襲いかかる。

「ティアナ!　　つちい!」

ヴェルデフレインを使おうとしないティアナ。防御をしようとしていない事を見て、カルマンは全速力で防御行動に出る。

狼の鋭い爪と牙。当然、ティアナのアルテイドロイドとしての、防御力を考えれば、ダメージこそ受けても、致命打にはなりえない。アルテイドロイドとは、それほどまでに、一般的な人や動物というものを、凌駕した存在なのだ。

そして狼の牙が、ティアナの喉元に食らいつこうとした、その時、「させるかつ!」

狼の牙よりも先に、カルマンの左拳が狼に命中する。鈍い音と、痛みに対する奇声をあげ、狼はその場に叩き落とされた。

「しつかりしろっ、お前の不注意からなつたものだ！　どんな時でも集中しろ！」

「は、はい、すみませんでした！」

「謝っている暇があるなら、さっさと剣を拾え。ここは俺が受ける。ティアナの背中はやらせない、そんな気迫を纏う。その重圧は、二度の大戦を経験した、最高級のプレッシャーだ。下手な遠吠えよりも、よっばどの怖さがある。」

飛ばされた剣を回収したティアナ。わずか数メートルの距離だが、この狼相手には、このわずかな間合いの読み違いが、命取りになる。

今動けないのなら、無理に動くな。戦況は変わる、その一瞬を待て。

これは師匠であるカルマンに、教えられた事である。ティアナはそんな教えの通り、剣を拾い焦って戻るのではなく、じつと耐えてその場の流れを読む。

(それで良い。今は無理に動く時じゃない。……それに)

カルマンは冷静に、目の前の狼の動きを見る。威嚇し、前傾姿勢を保っているが、その実、少しずつ後ろに下がっている。

戦ってみた感じから、この狼は怯えて後退しているわけではなかった。むしろその逆、生きる為に逃走しようとしている。

(ティアナが戻ってきていたら、どうなるかはわからなかった。……)

……さあ、行け！　逃げるなら今しかないぞっ)

そんな思いが通じたのか、狼は思いの外あっさりと、ティアナとカルマンの前から離れていく。ただ逃げたのではなく、むしろ引き際を心得ている、そんな事を思わせる鮮やかな逃走だ。

夜という暗闇に紛れるように、狼は姿を消した。手痛いダメージを与えられ、しばらくは姿を現さないだろう。勿論、何の根拠もない事だが、何故だが戦った二人には、そう感じられたのだ。

「　な、何で逃がすんだ！　殺しとかないと、またいつ現れるのかわからないぞ！」

「そうだそうだ、俺達にあの化け物からの恐怖と共に、ここで暮ら

してけつていうのか!？」

「あんなの殺しちゃえば良かったのよ、せつかく人様が頑張ってた作
った農作物を……」

狼との戦いを見ていたのだろう。その戦いが終わり狼が去った瞬間、
村人達はテントから出てきて、ティアナとカルマンに好き放題の言葉を浴びせる。

夜の闇に飛び交う、人間の「殺せ」「化け物」の言葉、そして人間の「エゴ」そのものが空間を支配する。村人達は感情のままに叫び続けた。

「……気にする事はない。俺達は俺達の仕事をしたただけだ、行くぞティアナ。……ティアナ?」

肩を抱き、そんな罵声に負けないように歩ませようとするカルマンだが、ティアナは頑なにその場から動こうとしない。それどころが肩を小刻みに振るわせていた。

「何なのですか、貴方達は! 同じ生き物なのに……同じ地上に住んできた仲間のはずなのに……二言目には、殺せ、や、化け物ですか!？」私は 私達は、そんな貴方達のエゴを聞き入れる為に、あの狼さんと戦ったわけじゃないっ! 貴方達をしている事は、城国の人と何ら変わらないです!」

一気に言葉を吐き出したティアナ。もっと言いたい事はあったのだろうが、カルマンに止められた。

村人達も、おとなしそうなティアナから、そんな怒りに満ちた声を聞き、圧倒され、今まで言いたい放題の人間も、その場で黙ってしまったている。

カルマンは、静かに立っていたエドガーに、アイコンタクトを取ると、ティアナを連れて静かに客用テントの中に入っていく。

「……師匠、私……あの人達に酷い事を……」

俯き落ち込むティアナの頭に、カルマンは大きな手を乗せ、ワシワシと頭を撫でる。

「誰かが他人の悪意を指摘してやれなければいけない、お前は素晴

らしい事をしたと、俺は思っているよ」

「し、師匠……」

ティアナはカルマンに抱きついた。その大きく広い胸にいと、ティアナという小さな生命を実感できる。

「あとはエドガーの問題だ、俺達は早朝にここを出よう。……だから、今はゆっくりとお休み」

旧パーションの跡地にて、少女は多くの経験をしたのかもしれない。過去に消えていった人々の思い、現在に残る人々の思い、それら全てが今のティアナを成長させていく。

そして早朝。まだ霧も濃く、歩いていくのは危険だが、二人はサンバナの町を目指す。誰にも見送られる事のない旅だ。

カルマンは後ろ髪を引かれる気持ちがあつたが、振り向かない事で、過去との決別を果たそうとしている。ありとあらゆる出来事が、今を作っている宝物である。だが今は、そんな宝物を捨てて、前に進まなければならないのだ。

かつてカルマンは、ここで初恋に別れを告げた。今度はここで思い出に別れを告げる。今見るべきは、未来。過去ではなく未来なのだ。

「さあ、サンバナの町だ。まずはそこで、情報を集めよう」

「はいっ！……あと、師匠」

言いにくそうな感じで、ティアナはカルマンに話しかける。

「サンバナの町に着いたら、お母さんの墓を見に行っても良いですか？」

「お前……知っていたのか？」

質問に質問で返したカルマンの問いに、ティアナは小さくこくりと頷く。しばらく考えているように、カルマンは空を見上げ黙りこむ。

霧が晴れてきて、青い空には光輝く太陽と、白い雲が見える。

「良いだろう。俺には否定する権利も無いし、何よりもお前に

は、テイオの……母親の墓を見る権利がある」

ぱつと明るい表情になり、

「ありがとうございますっ！ 師匠！」

と、本当に嬉しそうにするティアナ。裏表のない表情は、見る人を元気にさせる。

「あら、貴方達……サンバナの町に向かうのかしら？」

突然話しかけられる、ティアナとカルマン。女の声で、非常に大人っぽく、色気に満ちた声の質である。

振り向くと、その声の通りの人物がそこにいる。なびく波状の青みがある銀髪。出るところは出て、ひっこむところはひっこんでいる、声と同じく色気がある体つき。顔立ちも、美人でも可愛いでもなく、エロティックな雰囲気醸し出している。

そんな美女だが、一つだけ不思議な点がある。それは右頬の赤みと腫れ。とても殴りあいをするような、見た目をしているわけでもない。

「そうだが……あなたは？」

「あら、女に先に名乗らせるのかしら？」

「……ふっ、失礼。俺の名はカルマン、そしてこれがティアナ」

ティアナは、綺麗なお辞儀をする。

「うふふ、ご丁寧に。私の名前はシンラ、何の変鉄もない旅人よ」

「旅人？ 君のような良い女が一人旅かい？」

「ええ、いけないかしら？ それを言ったら、貴方とティアちゃんを組み合わせも、普通に変に見えるわよ」

カルマンは鼻で笑った後、「確かに……」と、今度は普通に笑う。

「それで本題なのだけれど、サンバナの町に行くのなら、私も一緒に連れて行ってくださらないかしら？ 女の一人旅は心細くて……」

最後の方は、非常に演技臭かったが、そういうものを気にしないティアナは、カルマンに「一緒に行きましょう」と問いかける。

目的地が一緒ならば、断る理由もなく、変人には見えるが悪人に

は見えない為、カルマンもこれを了承する。ただ一つ気になる点である、シンラの右頬の赤みと腫れ、カルマンはこれの理由を聞こうとする。

「良い女には秘密がつきものよ？　むやみやたらに女の内情を聞くのは、ナンセンス」

カルマンが聞くよりも早く、いや非常に良すぎるタイミングで、シンラはそう答えた。まるで今から言うのが、わかっていたように。不思議すぎる女旅人であるが、一行は目的地同じく、サンバナの町を目指す。

3 狼との戦い（後書き）

「仲間」

ティ「~~~~」

シン「あら、どうしたの？」

カル「嬉しいのさ、こいつは感情が態度に出やすい」

シン「歓迎されてるわね、私」

ティ「はいっ、シンラさんみたいな、綺麗なお姉さんが仲間になってくれて嬉しいんです！」

シン「仲間……ね」

カル「……？ どうかしたのか？」

シン「いいえ、別に。ただ……仲間、といわれる事に慣れてなくてね」

カル「ふむ……」

ティ「じゃあ、シンラさんは仲間です！ 誰がなんと言おうと、私達の仲間です！」

シン「うふふ、ありがとう、ティアちゃん」

4 大人な一時

旧パーシオン跡地の村から、およそ一時間ほどが経つ。ティアナ、カルマン、シンラの三人は、かなりゆっくりしたペースで歩いていた。

女同士のお喋り、というべきか、各地を転々と渡り歩いてきたという、シンラの話に、ティアナは興味津々といった感じで、耳を傾けている。

特に急いではいない為、カルマンも文句は言わなかったが、「やれやれ……」といった感じの態度を見せている。こうしてのんびり歩き、よく晴れた空に、豊かとはいえないが少しばかりの緑、城国兵も現れずにいると、本当は世界なんて平和なのではないかと、思わず錯覚してしまう。

だからこそ、カルマンは静かにゆっくり息を吐きながら、自身の巨大な機械腕を触る。当然の話だが、この腕は元々カルマンの腕ではない。これはかつての少年時代、パーシオンに所属していたカルマンと共に戦った、ロビンという機械兵士の右腕である。

ロビンとは、機械好きであったティオが作り上げた、アンドロイドという種族に該当する兵士である。とある戦いにおいて、カルマンを庇い戦死している。機械腕は、そんなロビンという戦友の形見であり、魂でもあり、そして 自分が戦いから逃げないようにする為の、一種の戒めでもあった。

「 どうしたの、随分と思ひ詰めているようだけど? 」

下から覗きこむように、上目遣いで気遣うシンラ。元が美人な顔つきなだけに、カルマンも一瞬ながら、心臓がドキッとす。

「 あ、ああ…… ちょっと昔を思い出してしまつてな。駄目だな、最近は思い出ばかりに浸つちまう。悪い大人の見本だ 」

「 あら、語れる過去や、思い出せる過去がある男性って、素敵じゃないかしら? 」

口調は真面目だが、悪戯っぽい表情でシンラは言う。
そんな言葉の意味を振り払うように、カルマンは小さく左手を左
右に振る。

「やめてくれ、そんな自慢できるようなものはない」

悔いは残していないが、カルマンの人生は敗北が多い。とてもで
はないが、人に堂々と話せるものはない。そう思っているからこそ、
カルマンも昔を振り返りはするものの、他人にそれを話したからな
い。

シンラは何故か会った時からある、やや赤みがかった右頬を擦り
ながら、

「私は 貴方に興味があるの、貴方の過去に、も」

わざとなのか、その大きめな胸を、カルマンの左腕に押し付ける
ように言う。その口調も、どこか含みがあるような言い方をしてい
る。

大人のいやらしさを纏い、くつつくシンラを払いのけるように、
自分から離すカルマン。はつきりとしすぎるぐらいに、左腕にはシ
ンラの女性の柔らかさが残っている。ちょっとでも気を許せば、そ
の色香に簡単に持っていかれそうになる。

「や、やめろっ、そういうのは好きじゃない！」

「あら、そう……」

シンラは官能的に、しかし上品さを感じられる笑みを浮かべて、
カルマンから離れていく。

(……何を考えていやがるんだ、あの女)

ティアナの下へと戻っていくシンラを、睨み付けるように見る。
悪意は感じられないが、どこか妖しさを持つ女旅人。疑わない方が
どうかしている。

「 師匠と何を話していたんですか？」

「うふふ、大人の話よ。それよりもう少しで着くわよ、サンバナの
町にね」

相変わらず悪戯っぽい笑みのシンラに、相変わらず純粹な瞳を向

けてくるティアナ。全く正反対の二人だが、何故かこの二人はすぐに仲良しになっっている。ティアナにしてみれば、良いお姉さんができたような感覚だろう。事実、シンラはティアナを可愛い妹のように感じていた。

シンラの言う通り、サンバナの町はそこから数分で見えてくる。サルバナ森林地帯に囲まれている為、意外と視認はしにくいのだが、森林を突破するとすぐに大きな町は見えてくるのだ。

「わあっ、大きい！……けど、何かボロボロですね。本で読んだ事があるサンバナの町とは、随分とイメージが違いますね」

もっとしっかりしていて、活気がある場所を想像していたのだろう。圧倒的な存在感は感じられるものの、どこか寂しさも見られる外観がそこにある。

「お前に見せていた本は、随分と古い書物だからな。サンバナの町は過去の大戦で、拠点となる事も多かった。その際によるダメージはとても大きく深く、生半可な時間では修復は無理だといわれている」

ティアナの想像に補足をするように、カルマンは言う。全ては人と人が争った為による、大きく深く消える事のない傷痕となっている。そんな話を聞いただけでも、ティアナの心には悲しい気持ちで充滿していく。

そしてサンバナの町の外装部分を見つめながら、ティアナはゆっくりと歩き出す。

「……悲しいけど、悲しんではかりじゃいられませんね。早く、終わらせましょう」

まだ、あどけなさが残る少女だが、後ろから見られるその背中には、確固たる決意のようなものが感じられる。小さな体には有り余る程の、大きな信念である。

そんな目の前の少女に、何か惹かれるものがあつたのか、カルマンとシンラはその言葉を噛みしめ、何も言わずに後を付いていく。

いよいよサンバナの町に到着である。十五年前の第二次解放大戦

の最中で起きた、ティアナの悪夢の事実上の発生現場である。自分と同じ名前を冠する災厄の名称と、その災厄の発端となった母親としてのティアナ。その全てを知る、今のティアナの心中は誰にも想像する事はできない。

「さて……どうするか」

切り出したのはカルマンである。それもそのはずで、ティアナはまだ良いとしても、シンラがどうするのかわからない。シンラとはサンバナの町までの道中を、共にしただけの事であり、正式な仲間というには違う存在である。現にカルマンの言葉は、意味合い的にはシンラに向けられたものだった。

「そうね、普通に考えればここでお別れ……になるのかしらね」

そんな意図を察したのか、カルマンの言葉に一早くシンラは答える。

「えっ、シンラさん、行っちゃうんですか……!？」

別れの雰囲気、ティアナが寂しそうに訴える。やはりそんな表情を見ていると、まだまだ子供だといえる。

シンラは包容力を感じられるような、優しい笑みを浮かべると、
「残念だけどそうなるかしらね。もうちょっと一緒にいたいけどね」と、大人の女性を感じさせるような雰囲気、ティアナに返事をする。

「しかし、もう別れるのか？　せめて町にいる間ぐらいは、一緒に行動しても良いんじゃないか？」

「うふふ、そう言ってくれるのを待っていたわ。じゃあ酒場に行つて、一杯やらない？」

まるでからかっているように、表情がころころと変わっていく。そんなシンラの態度に、カルマンはため息をつく。

「いや……酒を飲むのも良いが、俺達はそんな事をしている余裕は……」

「師匠、良いじゃないですかっ！　その間に私は母さんのお墓に行つてきますよ」

いまいち煮え切らない態度のカルマンの、後押しをする為にティアナは口を開いたが、その開いた口はすぐに閉じられる。

焦りながらも、しかし小声でカルマンは注意を促す。

「馬鹿、ここで墓の話はするな。表向きでは、ティアナの墓とされて良くは見られないからな」

「あ……すみません、うつかりしました……」

念のために聞かれていないか、辺りを見回してみるが、どうやら取り越し苦労だったようだ。一人の言葉は、大勢の活気によって消されていたようだ。

「ねえ、何の話をしているの？」

「いや、何でもなし。こつちの話だ。 ティア、それじゃあ行っ

てきなさい。場所はわかってるな？」

「あ、はい、家にあった簡易地図で把握してありますから。では、行ってきます！」

そう行つて、ティアナは大勢の人がいる町の中へと、消えていった。目指す場所は、ティアナの母親的な存在でもあるティオの墓場である。

位置は町から出て、西に行つた場所である。十五年前 そこで一人の少女が、誰に知られる事もなく、その短い生涯を閉じた。

「 さて、と、俺達は酒場でも探すか？」

「あー、飲む気になつたのね」

「お前とは二人きりで話したいと思つていた。色々聞きたい事もあるしな」

「それって……デートのお誘いかしら？」

「女性をエスコートする気があるなら、もう少し上品な格好をするさ」

「それもそうね。じゃあ行きましようか」

ティアナと別れ、カルマンとシンラも酒場を探しに、サンバナの町を歩き出した。さすがに人が集まる場所とあつて、酒場を探すのは容易であつた。

二人はレトロ感が漂う酒場に入店する。時間はまだ昼間という事もあり、店の中には客が一人もない。

「やってんのか、ここ……？」

すっかりと呟いてしまう。それほどに店の雰囲気は暗い。決して悪い雰囲気ではないのだが、やはり暗いと思える。

「 やつてますよ」

店主らしき男が、微かな暗闇の中から言う。どうやらカルマンの呟きは、店主に聞こえていたようだ。

「あんた達みたいに、こんな時間から酒を飲もうなんて奴は、そうはいない。あんた達……旅人かい？」

二人を品定めするように、店主の鋭い眼光が光る。顔だけ見れば、まるで裏世界の人間のようにも見える。顔や腕に生傷が、ちらほらと見受けられる。

「 貴方だつて同じようなもんでしょ」

「 えっ、何がだ!？」

突然、シンラがカルマンに言う。

その言葉に、何故か一瞬だけ心臓が激しく弾む。いわゆる嫌な汗も滲み出す。

「マスター、適当に持ってきてくださる？」

手慣れたもので、シンラはトントン拍子で酒の席を用意していく。客が少ない……いや、二人しかいない事もあり、店主の酒の用意も非常に早かった。

「 お強いのかしら?」

シンラはグラスを指差しながら、そう問いかける。

「 まあ、自信はある方だ」

と、カルマンも満更ではないように答える。

トクトクトク……と、ボトルから酒が、グラスに移動していく。上手そうな音に、カルマンの口の中では唾液が分泌していた。

二人分の酒を注ぎ終わり、ボトルを置いたシンラは、ゆっくりとグラスを持ち掲げる。

「道中お疲れ様でした　では、乾杯」

「乾杯」

グラスに注がれた酒を、一気に飲み干すカルマン。対してシンラは、半分ほどを飲んでグラスをテーブルに置く。

空になったカルマンのグラスに、シンラは酒を継ぎ足していく。

「本当にお強いのね」

「……実家が酒に関係していてね、そういう家系なのか昔から強いんだ」

頬がうつすらと赤くなり、色つぼさを見出だせる。目の前の女性には、今日が始まってからずっと色香を使われていたが、今この瞬間が最も色つぼいと、カルマンは素直に思えた。

「実家が酒屋……結構良いとお坊ちゃんだったのかしら？」

「一般的にはそうなのかもしれないが……なんて事はない、弱小酒屋だったよ」

実家を思い出して、再び一気に酒を胃袋に流し込む。決して小さいグラスではないのだが、一口でその中身が空になっていく。

空になったグラスに、先ほどと同じようにシンラが酒を注いでいく。男に手間をかけさせない、よくできた女である。

「嫌いだったの、実家は？」

「嫌い……ではなかったな。ただ当時の俺は憧れの人がいてな」

シンラが「女？」と聞くと、

「いや、ソリディアという名の一人の男さ」

と、答えた。

記憶を手繰り寄せるように、シンラは天井を見上げ考え込む。すると一人の人物が、頭の中に出てくる。

「鬼神　ソリディア、ね。大戦の英雄の」

ソリディアは有名人であるとはいえ、女性の口からその名前が出てきた事が、カルマンにとっては嬉しい事だった。

「俺ばかり話してしまったな……お前は？」

今度はカルマンが酒を足していく。半分しか減っていなかったグ

ラスが、再び満杯になっていく。

急に自分の事に話題が動いた為、シンラは「えっ……？」と、聞き返してしまう。

「何か話したい事があるんじゃないのか。だから俺なんかと酒に付き合ってくれているんだろ？」

「貴方は良い男よ。　そうねえ」

言いたい事はあったが、どう切り出すかを迷っている。いや、それとも言いたい事なんてなかったのかもしれない。

注がれた酒を小さな一口で飲み、少し考えた後、シンラは口を開いた。

「私、ね。本当は狼なのよ」

カルマンには、その言葉の意味を理解するまで、少しばかりの間がかかった。久々に飲んだ酒のせいか、あるいは歳のせいか。

そんな告白してきたシンラの瞳を見つめる。顔は程よく赤く火照り、潤んだ瞳がそこにあっただが、嘘をついているとは思えなかった。

「一応……聞いておくが、狼、とは？」

「ここに来る前に、名も無い小さな村で戦った狼、それが私なの」
右頬を自分で撫でながら、シンラはそう言った。

赤く腫れた右頬。確かに村で戦った狼の顔を、カルマンは左手で殴った。真正面から対向していた狼の右頬あたりに、拳が命中したのは確かである。だからといっても、そんな偶然かもしれない事を信じるわけにもいかない。

そこまで考えて、カルマンには一つの答えが浮かび上がってきた。
「複合生命体　キメラ、か？」

「ご名答。あの村での貴方の推測は、完璧だったわ。普通の人間とは違うとは思っていたけど、まさかキメラの存在を知っているのは予想外だったわ……」

「知人にキメラがいてな。そいつ等は鷹と鷲との複合だったが……」
かつての友人を思い出す。十五年前の第二次開放大戦時間際に、

一時的とはいえども行動を共にし、そして戦った。遙か東のディザードウ砂漠地帯に存在する、エスクード城を守護する騎士達の存在。その名を鷹の騎士オルテンシアと、鷲の騎士バゼットという。

これは余談に過ぎないのだが、懐かしい思い出の中で、カルマンが他人に話せる過去の話を見つげられた。

「なるほどね、既に面識があつたわけね。私の言つた事も疑いはしないのね？」

「疑うも何も、証拠を見せてもらえれば解決する話だし、疑つたつて仕方がない話だ」

もう何杯目になるのかわからないが、グラスに残つた酒を一気に飲み干す。それでもカルマンの顔は、シンラと対称的に赤さもない。これも何回目になるのか、シンラもグラスに酒を注いでいく。そしていよいよ、ボトルの中の酒は底を尽きる。

「そうねえ……ここじゃアレだし、ティアちゃんと合流してから見せましようかね。いい加減に人の姿でいるのも疲れてきたしね」

その言葉の中に、カルマンは引つ掛かる何かを感じていた。だが、その何かの究明は、酒が入り気が大きくなっていったカルマンには、考えられる余地もなかった。

「さて、そろそろ出ましようか？ 宿屋でも探さない？」

「あ、ああ、そうだな。……代金は」

持ち物の中から、金貨を出そうとするカルマンに、
「殿方は堂々としていれば良いわ。私が払ってくるわ」

と言い、その行動を止めさせる。手際よく会計を済ませ、カルマンの下へと戻ってくる。

その間に準備を済ませたカルマンも立ち上がり、シンラと共に酒場を出ていく。

酒場が暗かつた為、その暗さに目が慣れてしまい、外の明るさが辛く感じられる。外の中の違いは明暗だけではなく、外の賑やかさと、中の静けさが該当するだろう。今思えば、酒場の雰囲気作りは大したものだったわけである。

そして活気溢れる町を歩き、二人は宿屋を探す。

一方、母親の墓を目指したティアナはティアナで、とある事態に巻き込まれていた。

4 大人な一時（後書き）

「いっぱい一杯」

カル「しかし、女にしては酒に強いな？」

シン「まあ、ね。小さい頃に色々あってね」

カル「ふむ……」

シン「ごめんなさいね、辛気くさい感じにしちゃったわね」

カル「いや、構わない。酒の席だ、普段は言えないような事を言うのも良いだろう」

シン「うふふ、ありがとう」

カル「……」

シン「……？ どうしたの？」

カル「いや、ありきたりな発言だが、笑うと可愛いな、とな」

シン「あら、酔っているの？」

カル「そういうわけでも……あるかもな」

シン「……そういうもんよね」

5 行き交う人流の中で

カルマン、シンラの二人と別れてから、ティアナは町を歩き回っていた。

あまりの人通りの多さと、町の大きさを前にして、いわゆる迷子状態にあった。とはいっても、来た道は覚えているので、一概に迷子と言いつけるわけでもなかった。

最も、当の本人は初めて訪れた大きな町の雑踏を見る事に必死で、道に迷っている自覚すらなかった。仕方がなく道を戻ろうかとも考えてはいたが、自分なりにカルマン達に気を利かせたつもりである。大戦によりかなりの人が死んだが、サンバナの町に限り、その範疇に入っていないのではないかと、とも考えさせられる。それほどに、視界に飛び込んでくる人の数は多い。

そんな活気に溢れた町中だが、そんな大衆の活気に負けないような、とても大きな声が聞こえる。

ティアナがそこを見ると、白髪混じりの老人らしき女性が、威勢も良く一人で切り盛りしていた。どうやらそこは道具屋らしく、店の中には数々の品物が確認できる。

まるで品物合唱会だ。何故かティアナは頭の中で、そんな事を考えていた。自分の頭の中の妄想が面白くて、一人でクスクスと笑う。「ちょっと、そこのお嬢ちゃん！」

突然その老婆に呼ばれ、思わず笑いが止まり、呆気に取られてしまう。当然だろう、まさか自分が呼ばれるとは思えない。

ティアナも念のために、自分で自分を指差し、その老婆に確認する。

どうやら間違いではなかったらしく、呼んできた老婆は満面の笑みを向けてくる。

観念した わけでもないが、純粋なティアナは何も悪い事は考えず、興味本意で老婆に近寄っていく。近くで見ると、老眼の

為か老眼鏡をかけていた。大きな声の割には、幾分かおとなしそうに見える。

「お婆ちゃん。私を呼びましたか？」

にこやかな目の前の老婆に負けないように、ティアナも満面の笑みを浮かべる。

「お婆ちゃん、じゃないよっ！ アタシの名はパーチャってんだむむむ？」

パーチャと名乗った老婆は、ティアナを見ると訝しげな表情で見つめる。不思議そうにパーチャを見返すと、急にしわくちな顔が、カツと見開き言う。

「どこかで見たと思つたら、アンタはアレだねっ、何年前だ、ええと……そうっ、第二次大戦のちょっと前に、ここで倒れた女の子だよ！」

勝手に自己解決した。

しかし、ティアナにはパーチャの言っている意味がわからない。身に覚えもない事なのは、言うまでもない事だろう。

それも当然の話だ。第二次大戦は十五年前、ティアナは生まれてもない。

「あの……倒れたって仰いましたけど、どういふ事ですか？ 私はこの町に来たのは初めてですよ」

それを聞き、パーチャは老眼鏡をしっかりと掛け直して、もう一度ティアナを覗き込むように見つめる。

「おつかしいねえ……記憶だと確かにアンタなんだけどね。……うん、そういえばあれから十数年は経っているのに、全く老いてないねえ」

「パーチャさん、きつと人違いですよ！」
努めて明るく促す。

だが満足できていないのか、パーチャは一人で「うーん……」と唸っている。

パーチャの答えは、半分正解で、半分不正解といったところだろ

う。過去にパーチャに出会ったのは、母親でもあるティオの方だ。

ティオとティアナは親子のような間柄だが、実際は生まれ変わりに近い存在であり、その見た目は一卵性双生児よりも似通っている。単純な話、見た目だけではなく雰囲気までもが、ティアナはティオとそっくり……いや、同じといっても良い。

余談だが、カルマンがティアナに髪の毛を伸ばさせなかったのは、こういった理由があったのだ。

生前のティオは、ティアナと同じ桃色の髪を、馬の尻尾　ポニールにしていた。ただでさえ今のカルマンにとって、ティオを思い出す事は、過去の思い出したくない記憶を甦らせてしまう事になる。

ティアナに髪の毛を伸ばさせなかった、最大の理由というのは、『出来る限りティオに近づけさせない為』である。

あまりにも勝手な理由かもしれないが、カルマンなりに過去に足掻きたかったのだ。

「　そうだつ！　ティードだよ、アンタは確かティードのガールフレンドだったはずだよ！」

ティード　これもティアナにとっては知らぬ名前である。

ただ、どことなく不思議な感覚に襲われる名前でもある。いや、正確には名前ではなく、その向こう側の存在そのものに。

「いえ……ティードという名前にも、覚えはありません」

「そうかい、それじゃあ完璧に人違いだったかねえ。悪かったね、お嬢ちゃん」

パーチャは申し訳なさそうに頭を下げる。

「い、いえっ、気にしてませんから大丈夫ですよ！　だから頭を上げてください」

「優しい子だね。そういうところはティード達にそっくりだ。

良かったら名前を教えてくださいませんか？」

ティアナは「ティア」と名乗る。カルマンの言いつけ通り、本名は出さないようにした。

「ティア……ん、ティア……？」

その名前を聞いた瞬間、また何かを思い出したのか、パーチャは唸りだす。ひとしきり唸った後、その口から、その言葉が出てくる。「そうだっ、ティオだよ！ 確かティードの連れていた女の子はティオ。アンタはティオにそっくりなんだね、名前も似ているし！」謎解きが終了し、一人すっきりとした表情のパーチャ。眩しいぐらいの笑顔である。本当に老人か、と思えるぐらいに艶々している。それに引き替え、ティアナはその言葉に、軽い衝撃を受けていた。この老婆　パーチャは、自分の母親と接点のある人物だ。何故かそんな小さすぎる真実が、ティアナの心をどうしようもない躍動をさせる。

「おか　ティオさんは、どんな人だったのですか？」

「どんな人？　うーん、そうだねえ……あまりそこまで話した事はなかったし、もう随分と昔の事だから、うる覚えなんだけど……」

パーチャの中に眠る、古い記憶の山の中から、一つの小さな出来事を手繰っていく。

「いまいち当時を思い出せないから、何とも言えないんだけどね。」

ティオという子は、アンタみたいに明るい雰囲気を持っていたけど、その一方でちよつとした事で崩れてしまうような、繊細さがあつた印象だね」

「明るさと繊細さ……」

パーチャは頷いた。

「近くにいたんだけど、ちよつと目を離せばどこかに行ってしまうような、ね。……ティードもティオも、あれつきり姿も見せないで、元気にやっているのかねえ。何だかんだ仲が良さそうではあったから、今頃は子供でも生まれて、ひっそりと暮らしてれば良いんだけど……」

何も言えなかった。

ティアナは黙って、その話を聞いている事しかでなかったのだ。他人の平和と幸せを望んでくれているパーチャに、ティオは死んだ

などという事は、口が滑つても言えなかったのだ。

「パーチャさん、お話をありがとうございました！」
「良かったら、またおいで」

最後まで優しい笑みを向けてくれたパーチャと、ティアナは別れた。自分ができる、最大の笑顔で返ししながら。

偶然的とはいえ、このパーチャの出会いには数々の真実を、ティアナに知らせる結果となった。

中でもティアナの頭に残っているのは、母親のテイオと共に出てきた『ティード』という名前だ。決して知っている名前ではないのだが、何故か記憶の中に残っている名前だ。

恐らくは母親 いや、この場合は生まれ変わる前の、生前の自分というのだろうか。つまりはテイオの記憶が、ティアナの中に断片的とはいえ残っているのだろう。

その答えは、考えても今は出てこない。だからこそ、何かに導かれるように、ティアナはテイオの眠る墓へと向かっているのかもしれない。

「うわーん！」

と、その時、ティアナの耳に子供の泣き声が聞こえてくる。声の感じから、かなり小さな子だろう。

周りを見ると、すぐに子供は見つかった。十歳前後の男の子だろう。随分とみすばらしい格好をしていた。

親はいないのだろうか。そう思っただけなら男の子を見ていたが、親が現れる気配は全くなかった。それどころか道行く人も、男の子を見て見ぬふりをしているように見える。

ティアナは思い切って、男の子に近付き声をかけてみた。

「ねえ、君、どうしたの？ お父さんやお母さんは？」

男の子は、見た目の割に鋭い目付きで睨み付ける。その鋭い瞳と涙が印象的だ。

「パパは戦争で死んだ。ママは何日か前に、城国の兵士に襲われそうになった時に、僕を守ってくれて死んだ」

まだ年端もいかぬ少年とは思えぬ程、恐ろしいぐらいに残酷で淡々とした口調だった。

誰に向けていいのかわからない、怒りと悲しみが、この少年を支配しているのだろう。だからこそ力の限り泣き叫ぶしかなかった。

「私はティア。君の名前は？」

「……………ロミ」

「そっか、ロミ君。もう……………ママのお墓は作ってあげたのかな？」

少年　ロミは首を大きく横に振った。

「僕一人じゃ……………無理だよ……………」

そう答えたロミに、ティアナはにっこりと微笑みかける。

「大丈夫！　お姉ちゃんも手伝ってあげるから、ねっ？」

「でも……………ママは町の外にいるんだ、危ないよ……………もしも、また城国の兵隊に襲われたら……………！　黒騎士だつて助けにきてくれるかもわからないのに」

黒騎士　ロミの口から出てきた言葉に、興味を惹かれる。口振りから地上の味方なのだろうか。

色々想像できる事はあったが、今はロミの母親の墓を作るのが最優先だと考える。

「大丈夫だよ、ほらっ！」

ティアナは腰に携えた、二本の剣を見せる。よく手入れされた鞘部分が、その中身の刀身のように鋭く光輝いている。

「でも、お姉ちゃん弱そう……………黒騎士の方が、かっこいいし強そうだよ」

「アハハ！　じゃあ、うんつと頑張るよ！　行こう、ロミ君」

「う、うん……………」

頼りないと言いたげな視線をティアナに向け、差し出された手を繋いで、歩き出すロミ。

端から見ていると二人は対称的で、明るい表情を崩さないティアナと、暗く俯いてしまっているロミ。あまりの正反対な表情に、一度は視線を二人に向ける歩行者も、決して少なくはなかった。

そして、ロミに導かれるままに、町の外へ出る。方角は町の北側に位置している。歩いて数分のところに、『それ』はあったのだ。

無惨に斬り殺された、恐らくはロミの母親。

「……あれ!？」

ティアナは予想もしていなかったものを目にする。そこにはロミの母親以外にも、三人程の城国兵の死体が転がっている。血がいたる所に飛び散り、少しだが腐臭も漂っている。

ティアナはロミを少し離れた位置に待機させ、慎重に死体に近付いていく。

(ロミ君のお母さん……背後から斬りつけられている。最後までロミ君を守ったんだ。でも、城国兵の殺され方は、見事すぎる。

上下左右……どこから襲いかかっても、必ず相手を殺せるような、身体能力と剣腕の持ち主……そして、この人達を殺した 恐らくは黒騎士さんは、相手を殺す事に何の躊躇も持っていない……)

軽い戦慄が走る。

ロミの証言の通りならば、黒騎士という人物は味方である。だが、ここまで見事に人を殺せる人間を、はたして簡単に信用しても良いものだろうか。あまりの殺人という過程の芸術性に、戦慄が走り続けるのだ。

「ロミ君。ちょっと長めの木の棒とかを、その辺から持ってこれる?」

「あ、うん」

死体を見て、当時の事を思い返してしまっていたのだろう。

ロミはやや放心気味ながらも、返事をして走り出していく。

「私の目に見える範囲内だね! 何かあったら大声を出すんだよ!」

一度立ち止まり、確かな頷きを見せた後、ロミは再び走り出す。

まずはロミの母親の墓を確保する。ティアナは、その場に人が一人入るぐらいの穴を掘り始める。その土は思いの外軟らかく、掘

つていく事自体は容易な作業だった。しかし土に染みついた血の匂いは、ティアナの手から離れない。

血を吸った泥だらけの手になりながら、ロミの母親を抱き抱え、用意した穴の中へと丁重に下ろしていく。そして少しずつ死体に泥をかけていく。

「ママ、ママッ……！」

後ろで木が落ちる音と共に、母を呼ぶロミの声が響いた。

今まで我慢していたのだろう。枯れる事のない涙が、ロミの瞳から流れ落ちていく。どれだけ叫んでも、どれだけ泣かせてみせても、決して蘇る事のない母親の肉体。まだ幼い少年のロミの中では、一体どんな感情が渦巻いているのだろうか。

同じくして母親を亡くしていたティアナには、ロミの事がどうしても他人として見られなかったのだ。

「……ロミ君、もう休ませてあげようね？」

「嫌だっ、まだママは生きてるんだ！ 目を開けてくれるんだ！」
そう願いたかった。今はただ眠りにについているだけであって、もう何分もすれば目を開けてくれる。本当にそうだったのなら、どんなに良い事だろう。誰もが思う事ではないだろうか。

しかし、現実はその理想とはかけ離れて残酷である。死者は決して目を覚まさない。

だからティアナは、無情に、無慈悲に見えても、ロミの母親に土をかけていくのを止めない。

「やめろっ、やめてよっ、そんな風に土をかけていたら……ママが死んじゃうだろう！？ 息ができなくなって……ママが死んじゃうだろう……やめてよ……」

力が無くなっていくロミの声。幼いながらにわかっているのだろうか、こんな事を言わなくても、もう自分の母親が死んでいるという事実を。

かけ続けた土は、いよいよ顔を残すのみとなった。いつしかロミの叫びは消えていて、母親が埋められていく過程を、ただ静かに見

つめていた。

「ロミ君……これが最後だよ。お母さんに　ロミ君のママにお別れしないと」

「ママ……ママア……」

掠れるような声を絞り出しながら、ロミの目には涙が流れる。

「お姉ちゃん、木を取りに向こうへ行ってるから、ね？」

ティアナの言葉に、ロミは応えなかった。

無理に返事させる必要もないと判断し、ティアナは立ち上がり、先ほどロミが落とした木を取りに行く。振り向いた先にいるロミが、蹲っているのが見える。

「……これが、私達がやっている真実、いけないよ……こんな事は思わず言葉が走っていた。抑えきれないような、感情が確かに存在していた。こんな光景を見て、ティアナは胸が苦しくなっていた。ほんの少しだが、間を置いた後に木を拾い、ロミの下へと戻る。

まだ嗚咽混じりだったが、別れは済んだのだろうか、少し落ち着いてきてはいる。

「ロミ君？」

「お姉ちゃん……最後に土をかけるのは、僕がやるよ」

「うん、わかったよ」

ロミは最後となる、母親の顔を見つめる。

「さようなら、ママ……」

そう言っつて、ロミは土をかける。完全に土に埋まったロミの母親。更にその土の上へ、先ほどの木を突き立てた。

その場で二人は手を叩き、死者の冥福を祈る。

またロミの嗚咽が聞こえてきた。ティアナはそっと、ロミの頭を優しく撫でた。

5 行き交う人流の中で（後書き）

「黒騎士」

ティ「ロミ君、黒騎士の事について教えてくれないかな？」

ロミ「うん、でも……僕も何が何だかわからなかったんだ。僕とママは、サンバナの町を目指してただけ……ううっ……」

ティ「ごめんね、ロミ君。嫌な事を話させちゃったね」

ロミ「いや、良いんだ、お姉ちゃん。黒騎士は、名前の通りに全身が黒づくめなんだ。それに仮面をつけてた」

ティ「仮面？」

ロミ「うん、何て言うか……その仮面をちょっとしか見てなかったから、詳しくは言いきれないんだけど……気味が悪かった」

ティ「気味が、悪い？」

ロミ「何か怖かったんだよ。黒騎士の仮面って……」

ティ「そっか、話してくれてありがとう、ロミ君！」

6 少年は歩き出す

「お姉ちゃん、ありがとう」

ロミは死んだ母親の墓の前で、確かにそう呟いた。

それは墓作りに協力してくれた、ティアナに捧げた言葉。ロミの素直な言葉である。

あれから数十分は経過しただろうか、ロミの涙と嗚咽は全く止まる事を知らず、その母親の死という、絶対的な真実を受け止めきれずにいた。

無理もないだろう。まだ年端もいかぬ子供が、両親の死というものを経験してしまった。今時めずらしくない事だとは、誰に言えたものではない。

そんなロミを、ティアナはずっと頭を優しく撫で続けていた。

「お姉ちゃんの手、暖かいなあ……ママみたいだ」

「ママみたい？ えへへ、嬉しいな！」

その言葉に、くすぐったい嬉しさを感じていた。だらしのない顔をしていると、自分の顔を見なくてもわかるぐらいだ。

「さて」

途端にティアナの顔つきが、キリツと締まる。

その視線の先には、ロミの母親を殺し、恐らくは黒騎士に殺されたとされる、城国兵の死体がある。

（あの人達……確かに酷い事をしたけど、お墓くらいは作ってあげないと……）

無惨にも斬り殺された死体。ロミの母親と違うのは、その斬られる方にある。

ロミの母親は、小さな外傷こそ沢山あれど致死に至った傷は、背中に刻まれた大きな剣痕だけだろう。

しかし城国兵の場合は、明らかに全ての攻撃が、普通ならば即死したりしても、おかしくはないものばかりである。体のほとんどが、

真つ二つに裂かれている。まるで人体解剖だ。

ティアナはゆっくりと、城国兵の死体に近付いていく。

「お姉ちゃん……?」

とても不思議そうな、ロミの声に振り向くと、言葉の通りに不思議がる顔の中に、静かな怒りのようなものが感じ取れる。

あまりに静かすぎて、背筋が寒くなる程である。

「どうして……そいつらに近付いていくの?」

「……ロミ君にとっては、悪い人で憎むべき敵なのかもしれないけどね、やっぱり……同じ人間だもん。このまま人目に晒すのは」

そう言いかけた時、少年とは思えないぐらいの、怒気に満ちた声が響いた。

「そいつらはママを殺したんだ！ そいつらに優しくする必要はないよ!」

今のロミを支配している、心からの感情論だろう。なまじ真面目で純粹だからこそ、このような言葉を吐いてしまう。

「そうかもしれないね。そうかもしれないけど……きっとあの兵士さんも、家族がいて、ロミ君みたいな子供もいる。もしもそうなた時に、あの人達の子はお父さんがこんな晒し者になっていたら、とても悲しむし、シヨックを受けるんじゃないかな?」

「……つでも、でもさ!」

「あの人達のやった事は、確かに悪い事だよ。でもね、後ろで待っている子達を悲しませちゃいけないよ」

ロミは何も言わなかった。ただ納得できない気持ちを抑える為に、強く握り拳を作り、唇を噛んでいた。ロミを責める事はできないし、する必要もない。自分がロミの立場ならば、どう思っていただろう。せめてこう考えてみる事が、自分の正義を押し付けてしまった、ティアナなりのロミへの償いだった。

無惨すぎるくらいに、身体中を斬り裂かれた肉体。血液は土に染み込んでいるのか、あまり見られない。

失礼ながら、間近でそれを見ると、吐き気が込み上げてくる。い

や、それが当然の反応だろうか。

「な、何だこれは!？」

突然　あまりにも突然すぎるぐらいに、耳に入ってくる声。男の声だ。

ティアナもロミも、同時に声がした方を見た。そこには新たに、城国兵が三人見える。

「あ……あ……あ……」

城国兵を見た事によって、ロミは当時の怖い体験を思い出したのだろう。声にならない掠れた声を出し、口をパクパクと動かしている。

それは城国兵も似たようなもので、人間がやったとは思えないぐらいの、惨い殺され方に、顔面蒼白になっている。

「これは貴様がやったのか？」

その内の一人の男が、剣を持っていたティアナに問いかける。

仲間は斬殺されているのは、火を見るよりも明らかであり、この場にいるのはティアナとロミの二人のみ。剣を持つティアナが、真先に疑われる事は当然だろう。

「いえ、私ではありません」

「嘘に決まってる！　地上の連中め、よくも我らの仲間をつ問いただしてきた男とは、別の男がいきり立つ。一方的な怒りを向けてくる。

「お……お前達だつてつ、ママを殺した！」

男の言葉に感化されたのか、ロミも怒気が込められた叫びをあげる。

それに対して、男達はロミに完全なる敵視を向けた。子供とはいえ、容赦なく殺す気なのだろう。鞘から磨き抜かれた鋼の剣を抜き出す。

何も言い返してこないで、刃だけをちらつかせる。そこが不気味に思えてしまう。

「ちょっと待ってつ、ロミ君はまだ子供です。子供に大の大人が剣

を抜いて……恥ずかしくはないんですか!？」

ロミに向けられた敵視を外そうと、ティアナはロミの前に立ち叫ぶ。

「いずれにせよ、我々は地上の人間を殺すように命令を受けている。大人も子供も、それは関係のない事だ。それに……仲間の仇討ちをするという、一つの名目も整ったのでな」

「そんな勝手な……」

「今更始まった事ではないだろう。汚れた地上人は、高貴なる城国の人間に抹殺されるべきなのだ!」

その言葉を合図に、三人の男達は雪崩のように襲いかかる。

それに応じるように、ティアナも腰に携えた鋼の剣を抜刀する。

「ロミ君は遠くに逃げて!」

その指示を聞き入れてくれたのかを、確かめる暇はなかった。

予想よりも足の早い城国兵。三人の内の一人と交戦状態に入る。

お互いの武器は同じである。

鋼と鋼のぶつかり合う音。耳に残るような、鈍重だが鋭い音だ。

「女だからって容赦は」

聞く耳持たず。

ティアナは、男の腕力を横に流し、ついでに足を添える。自分の力により体勢を崩し、ティアナの足に引っ掛かった男は、驚く程に激しく転倒をする。

「くっそ、うっ……!？」

転倒した拍子に、男は剣を手放してしまふ。ティアナはすぐに剣を拾い、男の顔面近くに、剣を突き立てる。

「動かないでください。動くとも寝かせます」

もしも刃を寝かせたら、男の首が斬れる位置にある。仮に綺麗に斬れなくても、首には頸動脈があり、ただではすまない。

勿論、ティアナは本当に刃を寝かせる気はない。これはハツタリであり、男は人質なのだ。

残った二人の城国兵も、ティアナという少女からは、想像もでき

ない動き方に、呆気に取られてしまっている。

「や、やめる、そいつを離してやってくれ!」

「主導権を握っているのは私です」

「そうだな……一体どうしたら、そいつを離してくれる?」

城国兵の問いを無視して、ティアナは辺りを見回す。ロミの位置を確認する為だ。逃げるように指示は出したものの、城国兵の存在に圧倒されてしまっていた事もあり、もしかしたら動いていない可能性もあった。

仮にも動いていないで、近場にいた場合、逆に城国兵に人質にされ、形勢は逆転してしまう。それだけは何としても避けたい為、ロミの位置把握のタイミングを今だと判断したのだ。

そしてロミは、ティアナの指示を聞いていた。目に見える範囲内だが、十メートル以上は離れている。森林地帯での十メートルは大きい。これならばロミが追いかけても、捕まる可能性は低いだろう。

そしてティアナは、城国兵に向き直ると、

「そこにある死体を持ち帰ってください。家族の下へ帰してあげてほしいです」

「そ、それだけの事で良いのか?」

「はい。貴方達が死体を回収した後、時間を空けてこの人を解放します」

「わかった、言う通りにしよう。……エルダ、しばらく堪えているよ?」

エルダと呼ばれた、ティアナに捕まった男は、皮肉いっぱいに舌打ちをする。

その間に残った二人は、死体の回収を始める。

これが正しい選択だったと、ティアナは考える。城国兵が来なければ、ロミの母親から少し離れた位置に、その肉体を大地に還すつもりだった。

しかし、結果として城国の人間は現れた。それならば、城国で待

つているだろう、家族の下へ送るのが、最大の務めなのではないか。それが例え 死体として帰る結果だったとしてもだ。」「よし。お嬢さん、俺達はこのまま城国へ引き返す。条件通りに、そいつを解放してくれよ?」

ティアナは小さく首を縦に振り、「はい」と答える。

城国兵二人は、おとなしく死体を回収して、この場から消えていく。それでもエルダの拘束は解かない。

「おいつ、貴様、いい加減に離せよ!」

「まだ離しません」

鼻息の荒いエルダ。

自分の半分の年齢にも満たないような少女に、屈辱的な格好をさせられれば、男としてのプライドが許さないものか。

それから実に、一時間は経過しただろうか。草木の情報では、城国兵達は相当遠くまで移動したようだ。

そう、ティアナはあらゆる生命の声が聞ける。これによって、実は博打に近いこの交渉を、成立させる事ができたのだ。

何故ならば、城国兵達は死体を回収するふりをして、ティアナの目から見えなくなった所で、待機する事だつてできた。そしてエルダと合流した後に、三人でティアナ達を殺す。

それはあくまでも、そういう可能性もあるという話であり、事実はおとなしく撤退してくれたのだ。

「 貴方を解放します」

ティアナは何の小細工もせずに、すつと立ち上がりエルダを解放する。

不自然な体勢で拘束されていたからか、体が固まってしまったように、エルダは適度に運動をしてから立ち上がる。

「良いのか、こんな簡単に俺を解放してよ?」

「そういう条件でしたからね。強いて言うなら、二度とこの辺りに近づかないください」

真つ直ぐな視線を、エルダにぶつける。そんな視線を受けて、エ

ルダは再び舌打ちをする。

「近寄るな、か。……つたくよ、近頃のガキは生意気なんだよっ！」
冷静になったように見えて、エルダの頭は熱かったようだ。側にあった自分の剣を地面から抜き、ティアナに向けて振るう。

鋭い降りの剣は、ティアナの前髪をわずかながら掠めていく。

「貴方は……！」

「これは条件じゃねえ！ 大人からガキへの、躰だコラッ！」

「エルダさん、いい加減に……っ！」

交差するティアナの剣と、エルダの剣。同じ種類の剣だが、その瞬間に音を立てて折れたのは、エルダの剣だった。

滅多に使おうとはしなかったが、ティアナはアルティロイドとしての、単純な力を使った。技術も何もなく、ただ力業で剣を折ったのだ。

「ばっ、馬鹿な……！」

「これで貴方に戦える力はありません。あと十秒以内に、私の前から消えないと……次は貴方の首を飛ばします」

これはハツタリではなかった。本当にこれで消えなければ、ティアナはエルダの首を斬り飛ばす気でいた。

その嘘ではない殺気が伝わったのか、エルダもたじろいでいく。

「ちっ……覚えてやがれ！」

そう言っつて、エルダは城国方面に向かって、走り去っていく。

それを見届けると、ティアナは深呼吸をして、剣を鞘に納める。

気付けばいつの間にか、空には夕陽が出始めている。

「お姉ちゃん！」

勢い良く、近付いてくるロミ。そんなロミを見て、ティアナはほつと胸を撫で下ろす。

「お姉ちゃん、凄いや！ 弱そうに見えたけど、めっちゃめっちゃ強いんだね！」

「えへへ、これでも鬼みたいな師匠から、みっちり修行を受けたからね！」

ティアナは満面の笑みで、勝利のサインをロミに向ける。ロミも嬉しそうに、真似をしてみせる。

色々な事があったが、当初の目的は達成できた。だが一つ大きな問題が残されている。それは両親のいなくなったロミを、誰が育てていくのかという事である。幼い子を旅に連れて行くわけにもいかず、誰かに引き取ってもらい、育てていくのが一番最良である。

「ねえ、ロミ君。君はこれからどうするの？」

そのティアナの問いにより、現実に戻された為か、ロミの表情は一気に暗くなる。しかし、避けては通れない道でもある。

そしてロミは、ある言葉を静かに言う。

「サンバナの町の、ハインズ町長の所に行くよ」

「ハインズ町長？」

ハインズ町長とは、サンバナの町の町長にして、過去の大戦における総指揮者でもある。

現在は町長業を行いながらも、戦争によって家族を失った子供を、親代わりとなつて育てている。それが戦争を指揮し、親を戦争で失わせてしまった子供達への、せめてもの償いだとして。

「ママにも言われてた事なんだ。『ママにもしもの事があれば、ハインズ町長を訪ねなさい』って」

「そっか……。じゃあ、一旦町に戻って、ハインズ町長さんを訪ねてみよう」

ロミはコクリと頷く。そしてもう一度、母親の眠る墓を見つめた。
「ママ……きつとまた来るからね。今度は何か持つてくるよ……ママ……」

うつすらと溜まった涙を、服の袖で力強く拭き取り、ロミはサンバナの町へと歩き出した。

6 少年は歩き出す（後書き）

「鬼師匠？」

ロミ「そういえば、お姉ちゃんの師匠ってどんな人なの？」

ティ「師匠？ うーん……おっかないけど不器用な人かな」

ロミ「それ……何のフォローにもなっていないよね？ 普通はおっかないけど実は優しい人、とかさ……」

ティ「ああ、そうだね！ ロミ君は頭が良いなあ！」

ロミ「え、いや、その、うん、まあ」

ティ「でも確かに優しい人なのかもしれないね。それに気持ちがあっ直ぐな人だと思うよ。あとあまり妥協しないかな、自分にも他人にも」

ロミ「お姉ちゃんの師匠って……鬼？」

カル「ぶわーつくしよい！」

シン「あら、風邪？」

カル「風邪を引くような、ヤワな体には育ってないつもりだが……」

シン「じゃあ、誰かが噂をしているのね、良かったわね人気者で」

カル「噂のくしゃみは、大概良からぬ事を言われている時だ」

7 無差別殺人者

サンバナの町に戻ってきた。

ティアナとロミは、真つ直ぐにサンバナ町長である、ハインズを訪ねようとしたが、二人揃って場所がわかっていなかった為、パーチャの道具屋に行き道を聞く。

ハインズの屋敷は、町中の建物の中でも大きく、わかりやすい位置に存在する為に、ティアナとロミも迷わずにたどり着けた。

「凄いね……ここが、ハインズさんのお屋敷なんだ」

「僕……引き取ってもらえるかな？」

心配そうに、ロミは呟いた。

「大丈夫だよっ、きつと引き取ってくれるよ。お姉ちゃんに任せて！」

自分の胸を叩いて、堂々とした態度を見せる。

そんなティアナの姿勢に勇気づけられ、ロミも少しだが表情が明るくなる。

そして立派な扉をノックしてみる。すると中から女性の声で

「はい、ちよつとお待ちくださいね」と、声が聞こえてくる。

「お待たせしました。……えと、どちら様で？」

中から出てきたのは、赤ん坊を三人も抱き抱えた、綺麗な女性だった。その周りには、ロミよりも少しだけ年下であろう、子供達がいる。

「あ、ごめんなさい、忙しいところを……。実は、この子を引き取ってもらいたいのです」

紹介されたロミは、差し支えないぐらいの、小さなお辞儀をする。それを見た女性は、やや困った顔で言う。

「多分……ハインズは申し入れを受けると思いますが、今は生憎と留守にしています……」

「良いではないか、ルーカ」

と、ティアナ達の後ろから、貫禄のある男の声がする。咄嗟に振り向くと、スキンヘッドで白毛が混じった、髭面の中年男性が立っていた。

直感的にわかる。この男がハインズであると。

その直感は当たりだったようで、ルーカと呼ばれた女性は小声で、「あれがハインズですよ」

と、耳打ちしてくれる。

近年起こった、三度の大战を経験し、生き残ってきた男だ。そして壊滅状態にあるとはいえ、事実上の地上軍幹部である。

纏う風格が、一般的な兵士達とは段違いである。町長などではなく、首領という言葉がよく似合う。

「申し遅れたね。私の名はハインズ……少年、君のような子がここにいるという事は、身寄りを亡くしてしまったのかね？」

「ロミといいます。僕は、その……パ、父さんを戦争で亡くして、母さんはつい最近、城国兵から僕を守ってくれて……死んでしまいました。僕には……行く宛がありません。もし宜しければ、僕を……ここに置いてくださいっ、お願いします！」

頭が地面についてしまうのではないかと思えるぐらいに、勢い良く頭を下げる。

まだ十歳前後の少年には、あまりに似合わない行為である。

そして、そんな姿勢を見たハインズは、ロミに向けてにっこりと微笑んだ。

「ご丁寧ありがとうございます、ロミ君。君がここに来る事を歓迎しよう」

「そ、それじゃあ……？」

「君も私達の家族だ。少し不自由な暮らしになってしまっかもしれないが、共に未来を見ていこうではないか」

ロミは、今日何度目になるのかわからない、涙を流していた。これは悲しみの涙ではなく、嬉しさの涙である。

そんな光景を見たティアナも、自分の事のように嬉しく思い、気が付けば涙を流していた。

「ルーカ、みんなにロミ君の紹介を。 さあ、ロミ君。ルーカに付いていきなさい」

ロミは元気良く「はいっ」と答えると、駆け足でルーカの下まで移動した。

そして振り返り、真っ直ぐにティアナを見る。

「お姉ちゃん、短い間だったけど……ありがとう！ お姉ちゃんのおかげで、ひとりぼっちになっていた僕だけど、小さな勇気が出たよ！」

大きく手を振り、その言葉を贈る。そしてロミは、ルーカに連れられ、屋敷の中へと姿を消す。

これで少年　ロミとの別れになる。

「ありがとうございます、ハインズ町長さん。これで、あの子ども幸せになれると思います」

「いや、礼を言うのはこちらの方だ。それと本当の意味で、幸せになれるかは、最終的にはロミ君自身にかかっている」

「……そう、ですね。 あ、あの、ハインズ町長さんに伺いたい事があるんですけど」

ハインズは、見た目の割に優しい顔で「何だね？」と答える。

結局の本題である、母親であるティオの墓への行き道。町の構造に悩まされ、一人ではたどり着けないと判断し、ハインズに聞く事にしたのだ。

一般の人間に聞いても、邪険に扱われてしまうが、全てに公平な立場であるハインズならばと、ティアナは考えた。

そして予想通り、ハインズは墓の行き方を教えてくれた。だがやはり言うのは、あまり快いとは思えなかったようである。

「何故、君のような子が、ティアナの墓について聞いてきたのかは、不問とするが……あの一带には注意したまえよ」

それまで優しくかったハインズの表情が、みるみると険しくなり始める。

「一体……何に注意しろと仰るのですか？」

「うむ。君は 黒騎士というのを存じているかね？」
知っている名前だった。

それはロミから聞いた名前だ。ロミを襲ってきた、城国兵を殺したとされる人物。

卓越した剣腕と、身体能力を有していると、推察している。

「私達は黒騎士の事を、クロディアンと呼んでいる。こいつは危険人物だ、用心した方が良い」

確かに芸術性が垣間見える程の、殺人技術を持った相手だ。危険人物と言っても、過言ではないのかもしれない。

しかし同時に、ロミの命を救ってくれた人物でもある。地上の人間の命を救ってくれたが、地上の人間に危険人物扱いをされている。それにティアナは、どこか納得できない感情があったのだ。

「その黒騎士……クロディアンは、一体何が危険なのですか？」

「人間離れた戦闘力もそうだが、何よりもこいつが危険なのは狙う相手が一貫していない事だ」

思わず「えっ……！？」と、聞き返してしまう。

狙う相手が一貫していない つまりは、城国、地上に関係なく、攻撃を加えているという事だ。

それではロミを救ってくれた恩人などではなく、ただの無差別殺人者である。

「とにかく、ティアナの墓に行くならば、クロディアンには気をつけてくれ」

そう言って、ハインズは屋敷の中へと入っていった。

墓の他にも、危険な情報が聞けてしまったが、いずれにしても、ティアナの目的はティオの墓へ向かう事だ。

黒騎士 クロディアンに会わない事を祈りながら、ティアナはサンバナの町から、西に行った位置にある、正式名称 ティアナの墓、を目指す。

空はすっかり、漆黒の夜空へと変貌を遂げていた。

墓へ到着した時には、完全に夜と言える頃合いだった。

そこから見える町の灯りが、どこか細く寂しげであり、そう感じさせる静かな美しさがある。

綺麗だ。漆黒に映える、生活という名の、生命の夜景だといえる。ふと、空を見上げると、そんな町の灯りとは一味違った光が見える。星だ。遮るものがない為に、星の光がよく見える。目を瞑ると、今日起きた色々な出来事が浮かんでくる。

喜怒哀楽。ある意味で全ての感情を出したのかもしれない。それも悪くない。そう思える自分が好きだった。

「お母さん」

風が吹いた。静かで涼しくて、優しい風だ。こんな風は、滅多に体験する事はない。

夜景と風に揺れる少女の姿は、どこか神々しいとさえ思える。

今、まさに母親の墓の前に立っている。そこに母の骨は無いが、ティアナには包まれている暖かさを、感じる事ができた。

まるでティオが優しく抱きしめているかのようだ。あるいは、それは真実だったのかもしれない。

「これは……」

ふと目に入ってきた物がある。殺風景といえる墓に、白い花が揺れている。

それはワセシアの花。非常に稀少な種類であり、持ち主には幸せが訪れるという、一種の伝説のある花だ。

ティアナという悪魔の存在に、これ程までに稀少な花を備える人間がいるのだろうか。

答えはノーといえるだろう。人々はこの墓を、荒らす事もしなければ、浄める事もしない。我関せず。それがティアナという悪魔に対する、暗黙の了解になっているのだから。

「一体誰が……!？」

その白い花に、ティアナが触れようとした時、見えない力がそれを拒んだ。

「痛つ……この力、そつか、この花は私でさえも触れないぐらいに、大切な花なんだね。ごめんなさい、お母さん」

今度は、両手の平を使い、包み込むように触れようとする。本当に触れるのではなく、手から感じ取るという事の方が正しいかもしれない。

触れる事は拒まれたが、その白い花からは、暖かな優しさを感じ取れた。それは誰よりも、何よりも強かった。

たったそれだけだったが、自分の母親がどんな人間だったのか、わかったような気がしたのだ。

「お母さん、もうそろそろ行くね。みんなを待たせてるから」

もつと色々な事を伝えたかった。だが随分と遅くなってしまった事もあり、心配させまいとして、今回は町に戻る事を優先する。

テイオが笑って手を振っている気がした。でもどこか寂しげな表情にも見える。

「大丈夫、きつとすぐにここへ来るから！ その時は、カルマン師匠も一緒だよ。シンラさんっていう人とも出会えたんだよ。……だから、もう一度来るから、今は『またね』しよう」

漆黒の中に白く輝く美しい花が、風が吹いて揺れる。

少しの間だったが、墓参りを終えたティアナは、カルマンとシンラの待つ町へと戻っていく。行き道の大変さの割に、帰り道はすんなりと戻ってこられた。

朝と昼のような熱い活気に満ちた町並みも良いが、サンバナの町というのは夜になると、どこかアダルトな雰囲気は漂う、静かで妖しさを放つ町になる。

大きな町の為か、空は暗くとも町内としては非常に明るい。その理由としては、先ほどティアナが見たように、人々の生活による灯りが多い為だ。建物の中から漏れてくる、暖かな光である。

だが戻ってきたは良いが、肝心のカルマンとシンラが見つからないでいた。夜になって町並みも少しは落ち着いたとはいえ、人通りはいまだに多く、特定の人物の発見には、非常に手を焼く状態

にある。

「ティアちゃん、こつちよ！」

聞き覚えのある声が、耳に入ってくる。声の主はシンラである。見ると大きな宿屋の前で手を振っていた。

更に遠くから見ると、改めてわかるカルマンのゴツさ。確かに知らない人が、注目するのもわかる話である。貫禄のある顔も、一つのスパイスになっている。

「遅いぞ、何をしていたんだ、墓に行くぐらいの事で」

「えっと……色々と」

本当に色々とあったのだ。まさか帰りがここまで遅くなるとは、ティアナ本人だって思いもしなかった事である。

「まあ、良いじゃない。とりあえず中に入りましょうよ。お話はそれからでも良いでしょ？」

余程心配していたのだろう、帰りが遅かった事に、不機嫌になっているカルマンを、説得するようにシンラが言う。

カルマンも大きなため息を吐き出し、

「そうだな、話は中に入ってからにしよう」

と言い、一足先に宿屋に入っていく。

「大事にされているのね。貴女が帰ってくるまで、ずっと心配していたのよ」

「はい、すみません……。気をつけます」

「うふふ、良いのよ。さて、お腹空いたでしょう？ 美味しいスープでもいただきましょう」

シンラはティアナの小さな肩を抱き、宿屋の中へと誘導していく。宿屋の中は、見た目通りの広さがある。それに見合った人数がそこにいて、各々が食事をしたり、仲間と話し合ったりしていた。

まるで昼間の町の雰囲気、そっくりそのまま建物の中に入ったように感じられる。

ティアナ達も食事を済ませ、その宿屋に備え付けの風呂も堪能した。そして予約してある、専用の部屋まで案内される。

「混んでいて二部屋は確保できなかった。一緒の部屋になるが、我慢しろよ」

「私はいつも一緒に寝ていたから大丈夫ですけど……シンラさんは平気ですか？」

「ティアちゃんがいるから、変な真似はできないでしょ。大丈夫よ、彼は変な下心に負ける人でもなさそうだしね」

三人は部屋に入る。大きなベッドが、二つ備えられていた。必然的に、カルマンが床になったのは、言うまでもない事だろう。

風呂で暖まった体のまま、布団に入ると眠くなってしまいそうになる。特にティアナは非常に眠そうにしていた。

「さて、ティアナ。どうして遅くなったのかは、この際聞かん。だが早めに戻るように努力しろ、わかったな？」

「はいっ、本当にすみませんでした、師匠！ あ、でも一つ、気になる事を耳にしたんです」

そう切り出したティアナに、カルマンとシンラは注目し、聞き耳を立てた。

話の内容とは、黒騎士 クロディアンの事である。ティアナは、クロディアンに関する事を、簡潔に説明してみせた。

「黒騎士ね、割と有名な戦士よ」

ティアナの話を聞き、シンラは口を開いた。

「知っているのか？」

「噂で、だけどね。城国、地上を問わずに、人を斬り殺していく漆黒の剣士ね」

「ティアの言っている情報が正しければ、確かに無差別殺人だな。こいつの意図がまるでわからん」

低い唸り声を出しながら、カルマンは考えている。だが、真つ当に考えたところで、黒騎士の意図がわかるはずがないのだ。

それは何故か。無差別に攻撃を仕掛けたところで、黒騎士が利益を得られるわけではないからだ。

城国の支配開放を望むのならば、地上に人々を殺す必要はない。

逆もまた然りであり、城国の体制を良しと思うのなら、城国兵に攻撃を仕掛ける必要もないのだ。

あるいは第三勢力として、存在しようともいうのだろうか。それこそ最も馬鹿馬鹿しい答えになる。そんな独りよがりな戦いをしても、世界は動くはずもない。

「これも噂だけだね、黒騎士はその時の弱い戦力には、攻撃を仕掛けないみたいよ」

このシンラの発言に、カルマンはありったけの力を込めて言う。

「はあっ!? 何だそれは、正義の味方にでもなつたつもりかっ!」
「私に文句を言わないでよ。そういう噂を耳にした程度の事なんだから。大体は城国が地上の人を弾圧している事が多いから、黒騎士って城国兵を殺す印象の強いようだけど……たまたに形勢逆転して、地上の人が城国兵を、数人で攻撃する事があるみたいね。その時だつたらしいわ、黒騎士が地上の人を攻撃したのは」

ティアナもカルマンも沈黙する。理由はあるとはいえ、無差別殺人者であり、正義の味方を気取っている。異常な人物としか言いようがない。

ロミの事でさえ、もしも立場が逆転していたら、少年のロミにさえ無慈悲な剣を振りかざしていたのだろうか。そう考えただけで、ティアナは恐ろしいと感じられた。

「まあ何にしてもだ、得体の知れなさすぎる黒騎士の事は、ひとまず置いておこう。……シンラ、お前が昼間に酒場で言っていた事の続きでも、話してはくれないか?」

「ええ、そうね……」

黒騎士の事とは、また違った真実。

シンラが複合生命体 キメラであり、旧パーシオン跡地にできた村で戦った狼である事。そしてその発言の真相を、ゆっくりと話し始めた。

7 無差別殺人者（後書き）

「心配する男」

シン「それにしても、ティアちゃんがない間の、あの人は面白かったわね」

ティ「え、どんな風にですか？」

シン「ティアはまだか！？ ティアはまだなのか！？ ってずっと同じ事を言っているのよ」

ティ「師匠は心配性なところがありますからねえ」

シン「それにしたって、あの見た目で立派にお父さんしてると、何だか面白いわ」

ティ「あははは、それは確かにそうかもしれないですね！」

カル「 聞こえてるぞ、貴様等」

8 / もう一つの十五年前

「さて、無駄な説明は無しにして、さっさと現物を見せてしまった方が早いだけねど……」

そこまで言っつて、シンラは横目でティアナを見る。

「まあ、ティアちゃんの為に、簡単に説明しましょうかね」

ティアナもそれを望み、簡単な説明を始める。

まず事の成り行きは、シンラが酒場にて自分の正体を、カルマンに明かした事から始まる。旧パーシオン跡地の村で出会った、狼こそがシンラの正体だ。

しかし狼がシンラならば、現在、人間の姿でいる事に矛盾が生じる。そこで出てきたのが、複合生命体 キメラの存在である。

現にシンラ自身も、その推理を認めていて、今は推理が正解している事についての、証拠を見せる段階なのだ。

「というわけなのよ。わかったかしら？」

理解はしているが、納得できていない。そんな考えが顔に出ている。同じくカルマンも、納得できていないから、証拠が見たいのだ。そんな二人を見て、シンラは嘲るように笑う。

「じゃあ……いくわ」

シンラの体が淡く輝き始める。すると二足で立っていた体は、四足で立ち、輪郭も人間のものから、徐々に犬型に変化していく。

一分もかからぬ内に、人間の姿をした女性は、一匹の狼へと変貌を遂げた。その姿は確かに、村で見た狼そのものであった。

「驚いたな」

「凄いですっ、シンラさん！」

「うふふ、ありがと。……私は元々、狼ベースだったから、人間の姿でいるよりも、この姿でいる方が楽だわ」

狼の姿で人語を喋られると、何故だが違和感らしきものを感じられないだろうか。

また狼の顔の為に、あれほど色気に満ちていて感情豊かであった、シンラの表情が読み取れない。逆に狼の雄からすれば、魅力的な雌なのだろうか。

「人と狼のキメラ……いわゆる人狼ってやつか、直に見てもわかには信じきれないものだな」

「違うわ。人狼って、人をベースに狼でしょ？ 私は狼ベースに人だから狼人よ」

その事にプライドがあるのか、めずらしく感情を込めて言葉を出す。

とにもかくにも、シンラが跡地村で戦った狼だという事は、絶対的な証拠を見せられて信じる事にする。

「でも凄いですよね！ 狼さんが喋るんですよ」

「うふふ、キメラになって一概に嫌な事ばかりでもないのよね。こうして言葉が喋れるようになったし、人間の知恵がついた事で、純粹な狼時代とは、生活の仕方が変わったわ」

狼の姿でそんな事を言われると、何故か謎の説得力がある。

しばらくすると、狼形態から人間の姿へと戻る。見慣れた姿へ戻ってくれた事により、ティアナもカルマンも、ようやく溜飲が下がるようだった。

人間の姿へと戻ったシンラは、備え付けのベッドに腰かけると、いつもの大人の女性的な雰囲気を持ちながら言う。

「さて……私の事は話したんだし、そろそろ貴方達の事を教えてみようだい」

そんな言葉を聞き、ティアナはカルマンを見る。これに対する反応を、アイコンタクトでも良いから知りたかったのだ。

そんなティアナの考えとは裏腹に、カルマンは見向きもしなかった。今そんな事をすれば、秘密があります、と言っているようなものだからだ。

秘密 という程に隠す事はないが、ティアナの事だけは表沙汰にはしたくない。その事実を知って、シンラがどう動くのかもわか

らない。

しかしそんな用心は、思いの外、簡単に碎かれてしまう。

「俺達の？ 別に、特に言う事はないつもりだが」

「あら、そう。 駆け引きは苦手だから率直に言わせてもらおうけど」

一瞬の間。その間が嫌らしい。

気付けばシンラの顔つきは、やや小悪魔染みた意地悪なものになっている。「駆け引きは苦手」なんて事を言っておきながら、楽しむ気満々である。

「貴方には無くても、ティア……ちゃんにはあるんじゃないの？」
心臓がはねあがる。

もしも聞き間違えではなければ、シンラは真実を口にしていた。それを確かめる為に、カルマンは聞き返した。

「ティアに何があるって？ 何もあるわけがないだろう。こいつは俺の弟子で、実の娘のような存在。ただそれだけだ」

実の娘のような存在。

その言葉を聞き、ティアナの心は暖かくなる思いだった。しかしそれはティアナだけであり、現在進行でカルマンとシンラの、駆け引きが続いている。

「あくまで誤魔化すのね。ねえ、ティアナちゃん、この人って本当に頑固よね？」

「昔からそうですね、師匠は……っあ」

確定的だった。

ティアナ、と呼ばれて会話をしたのは、流れにより気付かなかつたと言いつけるが、完全にミスした事に反応してしまっている。

これは自分がティアナであると、シンラに認めているようなものである。

「えっ、えつとですね、今のは……！」

あたふたと弁解の言葉を考え出す。しかし焦れば焦る程に、頭の中は真っ白になっていく。

そんな姿を見て、可愛いと思っっているシンラは、失礼のない程度の微笑をする。それにカルマンも深いため息を吐き出し、意を決したように言う。

「何故……わかったんだ？」

シンラは昔を思い出すように、目を瞑り、開けると目線を天井に向ける。

「話は長くなるけど……何となくわかっていたのよ」

そう言い始めたシンラに、ティアナとカルマンは、同時に注目した。

「あれは、およそ十五年前のシュネリ湖の事。前にティアちゃんが言っていたように、私のような狼族の大半は、シュネリ湖が生息地なの。……その湖の畔で見たのよ、ティアちゃんにそっくりな女の子をね」

十五年前のシュネリ湖。

カルマンには覚えがあった。恩師ソリディアと共に、シュネリ湖を目指したのだ。その際に同伴していたメンバーに、確かにティオはいた。

「まさか……その直後に、シュネリ湖防衛戦が起きなかったか？」

「ご名答ね。確かに、ティアちゃんに似た女の子を見た直後に、戦いが始まったわ。……話は戻すけど、それから次に見たのは、いわゆる『ティアナの悪夢』の時ね。わかるわよね？ ティアちゃんは、私が見た女の子とそっくり……いえ、同じだった。それに動物的な勘みたいなものでわかるのよ。十五年前の女の子と、ティアちゃんは纏う雰囲気みたいなものも瓜二つ。カマかけてみたら案の定ってわけね」

興味深そうに、ティアナを見つめるシンラ。その表情からは、この次に何をするのか皆目見当もつかないでいる。

仮にもシンラが、ティアナが町にいる事を町民達に通告したのなら、ティアナとカルマンは今すぐにでも、この町から出て行かなければ大変な事になる。それ程に世界の、いやもっと言うなれば、テ

イアナの悪夢発生の地点でもある、サンバナの町に済む民達にとつて、ティアナというのは忌むべき存在になっているのだ。

「それで……シンラさんは、私がティアナであるとわかって、一体どうなさるつもりですか？」

ティアナが凜とした態度で、シンラに問う。その堂々とした姿は、先程可愛らしく慌てていた少女とは、似ても似つかない。

それは目の前で対峙しているシンラが、一番実感している事ではないだろうか。真っ直ぐすぎるぐらいの瞳に見つめられては、駆け引きしようという、気持ちすらも揺らいでしまう。

だからこそ、次に言うシンラの言葉は嘘偽りのない、根っからの本心だったのだ。

「別に……どうもしないわ。私は十五年前に、興味が湧いたティアナという人間を見てみたいだけ」

そんな言葉に、ティアナはきょとんとしてしまう。もっと想像では、最悪な答えを想定していたからである。

「おかしいかしら？ 人間には感じられないのかもしれないけど、動物的な勘には貴女という人間の、不思議な感覚を感じずにいられないのよ」

「そ、そんなに変な感じがあるんですか？」

「変、じゃないのよ。何と言うか……優しい気持ちになれる。あるいは、勇気が出てくるというのかしらね」

ティアナの放つ、勇気と優しさのオーラ。それはかつてのティアナとは、全く別の種類のものではないだろうか。

「それで、結局お前はティアナだと知っても、何もしないというのか？」

今まで黙っていたカルマンが、ナイフのように鋭い口調で、シンラに聞いてくる。

シンラは「ええ……」と、一言だけ返した。その返事はあまりにも静かすぎて、素直に言葉を信じさせないものがある。

あるいはカルマンの、疑いの気持ちが強すぎるのか。一概にどち

らが正しいとはいえないものがある。

「信じられんな。そんな事を言つて油断させておいて、何かをやるうという企みがあるかもしれないからな」

「 師匠！ シンラさんは私達の仲間……」

そこまで言つたティアナだが、カルマンに手で制され、言葉が止まってしまう。

「こいつは……シンラはまだ俺達の仲間ではない。忘れたのか、俺達とシンラはただサンバナという、目的地が一緒だったに過ぎない間柄だ」

無情かもしれないが、それが変わらぬ真実である。色々とおつたが、何だかんだで仲良くなつた。

しかし、カルマンの言う通り、シンラとは目的地が一緒だっただけであり、その実、まだ得体の知れないところはお互いに多いのだ。「どうすれば、信じてもらえるのかしら？」

ある意味呆れたように、しかし当然の事として、シンラは口にする。確かに偶然的 いや、必然とされた出会いは、信じると言われて信じる方が難しい。

「師匠……私は、シンラさんを信じていますよ」

他者を疑う事への悲しみか、ティアナは寂しそうに言う。

カルマンもそれはわかつているのだ。カルマンの師匠にして恩師ソリディアには、人を信じる事、という教えを、耳にタコができる程に聞いている。

その教えを間違つて覚えたつもりはなく、シンラという狼人を信じたいと思っている。いや心の内では信じているのだ。一時とはいえ、旅を共にした仲間であり、悪い心を感じ取る事はできなかった。だが一方で、感情論だけの信用の危険もわかつていた。長き十五年の間に、自身が体験し、痛い目を見たからこそ、理屈的な信用も必要なのだと。

「 わかつたわ。なら、これを貴方に託すわ」

シンラは隠されていた首飾りを、そつと外した。その首飾りの先

端には、白く鋭利な物が付いている。

その首飾りを受け取り、カルマンは念入りに品定めする。

「これは……骨、か？」

「そう、父の形見よ。それは父の牙、とつても大切な物よ」

「……信用を得る為に、そこまでするのか？ 一体何故だ」

「言ったでしょ、ティアちゃんに……いえ、貴方達に興味が出たのもしも私が裏切るような真似をしたり、怪しい行動をするようならば、その牙を壊すと良いわ。私にとっては、命と同じぐらいに大切な物だから……」

駆け引きもなしに、ティアナのような真つ直ぐな瞳を、カルマンに向けた。冷静ないつもの顔とは違い、情熱的な瞳がそこにある。

さすがに根負けしたのか、カルマンは渋々といった感じで首飾りを受け取った。

「それを受け取ってくれたという事は、少しは私を信じてくれたのかしら？」

「……そういう事になるな」

素直ではないが、カルマンはシンラを認めた。

その結果に誰よりも喜んだのは、不安そうに見守っていたティアナである。その証拠に、勢い良くシンラに抱きついた。

「やったあつ、シンラさん、これからも一緒に来てくれるんですね！」

「うふふ、改めて宜しくね、ティアちゃん。それに、カルマン……師匠？」

「それはよせつ！ 変な肩書きはいらん、普通に呼べ」

賑やかに笑いあつた夜だった。それは旅立ちの序章だったのか、あるいは終幕への時刻唄になるのか。

そんな見えない未来を切り開く為に、旅をしている。一行は、狼人シンラを仲間に加え、次の目的地を目指していく。

翌朝。新たな旅立ちの朝である。爽やかとはいえない曇り空

だが、不思議と不快感はない。

使用した部屋の簡単な後片付けと、これからの旅の為に、カルマンとシンラは身支度を整えている。

次に向かうのは、世界地図では西側、サンバナの町からは北西の方角にある、デスクロウム火山地帯である。火山という環境により、いつも以上の準備を余儀なくされる。

「あの、師匠……」

遠慮がちに、ティアナはカルマンに呼び掛けた。

「何だ、ティア？ 準備はできたのか、火山地帯は生半可な装備では、危険すぎる場所だぞ」

「あ、はい、準備はできたんですけど、その……」

あまりに煮え切らない答え方に、カルマンは体ごとティアナに向けて、話を聞く体勢を作る。

「どうした、何かあるのなら言ってみる」

「はい……えと、お母さんのお墓に、もう一度行きたいんです」

「さすがに寄り道している時間は無いぞ。行くならば、俺達が準備している今の内に済ませておけ！」

許可が得られないものと、予想していたティアナは、その予想外の返答に歓喜した。そして嬉しさの勢いそのままに、部屋から飛び出していこうとする。

そんな反応をこれも予想していたのか、カルマンはティアナの肩を掴み呼び止めた。

「少しは落ち着け。……俺達も準備が整い次第、墓に向かう。だからお前は、墓で待機していてくれ。わかったな？」

「はいっ、わかりました！」

本当にわかったのか、わからないぐらいの大きく元気な声で返事をするティアナ。そして今度こそ、部屋から飛び出していった。

元気なティアナを見て、シンラはいつものように微笑する。

「あらあら……元気が良いわね、ティアちゃんは」

「元気だけは人一倍凄い。……その点だけは、あいつを超えている

かもしれん」

「あら、あいつって誰かしら？」

「あいつはあいつだ。さつさと準備を進めるぞ、和やかにしている暇はないからな」

シンラは流すように「はいはい」と言い、旅の準備を進めていった。今回の旅の準備は、シンラとしても非常に心弾むものだった。いつも一人旅で、自分一人ですべてかしていた為、仲間と一緒に支度をするというだけで、どこか嬉しいものがあったのだ。

しばらくすると、支度も終え、今度は町へと必需品の準備に向かうのだった。

一方、先に出ていったティアナに、漆黒の騎士との出会いが待っていた。

8 もつ一つの十五年前（後書き）

「モフモフ」

ティ「もっふもふ」

シン「うふふ、気に入ってもらえたみたいね」

ティ「はいつ、シンラさんの毛並みは、ふかふかで気持ちが良いです！」

カル「（ふかふか……だと!?!）」

シン「毛繕いは入念にやっているからね」

ティ「凄く良いですよ！ 師匠もどうですか？」

カル「いつ、いやっ、俺はいい！ 俺はそういつ乙女チックなものは好まん！」

シン「うふふ、意地はっっちゃって」

その日の夜。

カル「そっと、そっとだ。気付かれないように、そっつと……」

シン「うふふ、やっぱり触りたかったんじゃない」

カル「ぬあっ!?!」

シン「師匠の面目丸潰れですもんね、ティアちゃんには黙ってあげるわ」

カル「ぬぐぐ……」

9 殺撃のオルグナード

宿泊していた宿屋を出て、カルマンとシンラは、これからの旅に必要なものを揃えていた。

向かう先は、西に位置するデスクロウム火山地帯である。南東にあるカザンタ山岳地帯との違いは、その名の通り火山。つまりは活火山が存在する事にある。近場を通るわけでもないが、特にこの火山地帯における最大の活火山である「オルゴ山」は、ただそこに存在しているだけで、見た者に畏怖させる迫力がある。

また、このような過酷な環境にある為に、そこに住む獣などは独自の生活形態へと変わっており、通常の獣よりも獰猛で強い。敵は城国兵だけではなく、火山地帯の獣も含まれる。

このような理由の為、デスクロウム火山地帯を通過するには、大量の治療品や食料に水、といった物が必要不可欠になる。

「そういえば……お互いに旅の目的とかを知らなかったわね。それに気になる事があるんだけど、どうしてわざわざ火山地帯なんて、過酷な道を歩もうとするの？」

シンラの問いかけは最もな話だ。普通ならば、誰もが避けて通る火山地帯だ。通る理由を聞くのは、仲間として当然の事だろう。

「登山家に『何故、山に登るのか？』と問えば『そこに山があるからだ』と言う。……こういう事だ」「なるほどね」

それ以上は特に追及しなかった。何よりも、カルマンという男は説明が下手である。追及したところで、今以上の答えが返ってくるとは、思えなかったのだ。

そんな話をしながらも、二人は適当に町中を歩いて、道具屋を探してみる。さすがに大きな町だけあって、単に道具屋といっても、かなりの数があるのだ。

「あそこなんて良いんじゃないかしら？」

シンラが指差した方を見ると、威勢の良い老婆が切り盛りしている姿が見える。

「道具屋パーチャ。ふむ……値段は見た中では一番安いが、旅に必要なのは量も大切だが質だ。特に今から向かう場所を考えるとな」

「とりあえず見てみれば良いじゃない。行きましょ」

理屈っぽいカルマンを、先導するようにシンラは引つ張っていく。シンラの言う通り、真実は見てみなければ始まりはしない。

近付き道具屋の品揃えを見ると、特筆して目立った物は無かったが、かといって悪い物も無い。むしろ標準的な物を良心的な価格で取り扱っていて、好感が持ててしまう。

元氣な老婆、というのも魅力の一つになっているだろう。

「婆さん、売ってくれないか？」

「アタシは婆さんじゃないっ、パーチャってんだ！」

恐らく、パーチャに関わった全ての人が思う事だが、間近で話した時の迫力には、誰もが圧倒されてしまうだろう。

その証拠に、見た目だけなら圧倒できてしまうであろうカルマンでさえ、パーチャの勢いに吞まれてしまっている。最も、シンラは楽しんでるようだが。

「そ、そうか、パーチャ。俺はカルマンという旅の者だ。これから西のデスクロウム火山地帯に向かうから、その為の準備をさせてくれないか？」

「あいよ、喜んで！ どれでも好きな品を選んでくれよっ」

カルマンとシンラは、品揃えを見て、お互いに意見を出しあい品物を決めていく。

やはり重要になったのは、水分と回復薬といったものだ。火山地帯とあって、大量の汗をかく事が想定される。それ故の水分確保。

そして独自の進化を遂げていると噂される、火山地帯の獣達との戦い。負けるつもりはないが、怪我をしないとは言い切れない。回復薬や薬草といった、傷の手当てができる物は、持てるだけ持った方が良い。

「とりあえず、だ。こんなもんで良いだろ、持ちすぎても無駄になるからな」

「ええ、そうね。パーチャさん、お会計してくださるかしら？」

結果的には人数分の購入と、予備に二人分、合計五人分の購入数に止まった。他の理由としては、持ち金がそれほど無かった事もある。

「あなた達の旅の無事を祈るよ」

「ありがとう」

包まれた品物を受け取り、カルマンとシンラは、ティアナが向かった墓へと移動する事にする。

だが、カルマンは正直なところ、墓には行きたくなかった。そこに眠るティオというのは、かつての初恋の相手であり、墓を見るという事は、その相手が死んでしまった事を嫌でも実感してしまう。

しかしティアナにとっては、母親ともいべきティオの意識に触れさせる事が、何よりも重要だと判断して、カルマンは許可を出したのだ。自分の中の葛藤は、今でも暴れまわっている。

そんな中でティアナは一人、無事に母親の墓の側まで来ていた。

落ち着いて道を歩いてみると、町と墓との距離は意外とあり、それなりの時間がかかってしまう。最も、待ち合わせは墓の前なので、焦る必要はないわけだ。

「あれ？」

朝焼けの光も眩しい場所だが、ティアナは墓の前に誰かがいる事を確認した。

確認できたのは後ろ姿であり、顔の確認まではできないが、その体格的に男であると予想できる。

朝の白い光の中でも、その存在は異質に感じられる。それは墓の前にいる人間が、光とは対称的な黒が映えていたからである。上から下まで、全てが黒だ。

「黒騎士 クロディアン」

その存在を認識してしまった瞬間、鼓動は一気に早くなり、うっすらと汗が滲み出す。

噂に名高く、しかし得体の知れない存在である。卓越した戦闘能力と剣腕、そして目的のわからない無差別殺人。これが現在まともっている、黒騎士という存在の情報である。

平然としていられる方が、どうかしている。

「……ここには、一人の少女が眠っている」

ティアナの存在に、気付いているのだろうか。誰に言っているわけでもなく、黒騎士は喋り出す。

声の質では男なのだが、若いのか老いているのか、それが全くわからない声をしている。とても機械的な声だ。

「少女は……誰よりも平和を望み……誰よりもそんな未来を作る為に、必死で戦ったのだ。……彼女こそは、ここに供えてあるワセシアの名の下に……幸せになるべく存在だった」

独り言か、とも捉えられたが、すぐに言葉はティアナに向けられているものだとわかる。

今まで俯き加減に墓を見ていた、黒騎士らしき人物は、振り返りティアナを見る。ロミの情報通りである。黒い不気味な仮面をし、腰に携えた鞘も黒い。

「あ、貴方は……？」

何故か声が震えていた。理由はすぐにわかった、ティアナは目の前の黒騎士 クロディアンに恐怖している。圧倒的なまでの負の感情が、その黒い仮面の下から滲み出ている。

わかる人が見たら、間違いなく吐き気、あるいは嘔吐してしまうだろう。事実、ティアナも吐き気が込み上げている。

「我は……彼女の望んだ……平和な世界を……創り、そして……償いの剣を振るう存在……」

「償いの、剣……」

ゆっくりと、ティアナに近付いてくる黒騎士 クロディアン。

そして静かで鋭利な金属音と共に、腰に携えた黒き鞘から、黒き刀身の剣が抜かれた。

それに対して、ティアナも身構えた。いつでも腰の鋼の剣を抜けるようにする。

「これが……償いの剣、オルグナード……。貴様も、この剣の……断罪を受けるが良い……！」

突然。あまりにも突然に、黒騎士はティアナに襲いかかる。理由は全くといっていい程にない。

これでは本当に、無差別殺人者そのものである。

そして向かってくる速度は、予想通りに　いや、予想の一枚や二枚ではなく、三枚は上手の速さを誇っている。これ程の速度があれば、並の城国兵や地上の人間は、造作もなく殺人という工程を実行できるだろう。

ちなみに狼であるシンラとは、比べ物にならない速さである。既に人間離れた身体能力だ。

「　良いのか、その剣で」

「……えっ!？」

言うのと同時に、いや、言うよりも速い、黒騎士の剣線。攻撃というよりも、殺撃といえる。

ティアナも必死に反応し、音速の殺撃を受けようとするが、瞬きする間の時間で感じ取れたものは、黒騎士の剣オルグナードが、頬を掠めていく風切り音だけであった。

「鋼など……容易いものだ……」

ティアナは確かに、黒騎士の殺撃に反応し、防御したはずだ。しかし殺撃は、ティアナの持つ鋼の剣に当たる事なく、頬を掠めたのだ。

（何で……確かに防御したはずなのに……。すり抜けた？　　違

う、そんなんじゃない、これは……）

途端、音もなく鋼の剣が真っ二つに割れた。真ん中から綺麗に切れていて、刃先の方は静かに地面へ落ちる。

これでは黒騎士の剣オルグナードによる、斬鉄である。しかもティアナの手には、剣を斬られた事による衝撃すらない。

持ち手が感じる間もなく、剣を斬鉄する技量と、黒剣オルグナードの切れ味。

「その深紅の剣を……抜くがいい。……彼女の血を浴びた……呪われた罪深き……剣をな」

ティアナは腰にもう一刀携えられた、深紅の剣　ヴェルデフレインを見る。確かに、これ程の威力と切れ味を持つ、黒騎士の黒剣　オルグナードに対抗するには、この剣を使うしかない。

今までは、その深紅の剣に宿る、絶対的なパワーが危険だと判断して、使用する事はなかった。しかし目の前に存在している黒騎士は、そんな絶対的なパワーを使わなければ、殺られてしまうと判断する。

だからこそ、ティアナは深紅の剣を鞘から抜き、その名前通りの刀身を、太陽の下に曝したのだ。

美しい、美しすぎるぐらいの深紅である。長い間、使用されていなかったが、錆びる事もなく、その刀身は輝いている。

「……それでいい」

黒騎士は再び剣を構えた。

「待つてください!」

通じるとは思っていなかったが、ティアナは黒騎士に対して、そう呼び掛ける。

前の黒騎士の発言に、どうしても気になる部分があったからだ。

「呪われた罪深き剣……貴方はそう言いました。一体何の事なのですか!？」

「貴様は……知る必要などないのだ……。その剣と同様……貴様もまた、罪深き生命……。我が断罪の剣オルグナードにて……一人と一刀まとめ……償いの一太刀を浴びせよう」

言っている事が支離滅裂である。

突然襲ってきて、意味不明な事を言う。おまけに行動は無差別殺

人者、頭がどうかしているとしか思えない。

だが理屈的な解釈の前に、目を覚まさせるような、鋭すぎる殺撃が飛んでくる。

「……うっ！」

その剣線も、ティアナの頬を切り裂く。幼さを残す顔に、右と左の両方に、一筋の赤い線が走る。

「死ぬがいい……。呪われた子よ、罪深き子よ……。一人の……。彼女の人生を、共に奪った……。子よ」

「っ、死ねません！ 私が一体何をして、何で貴方に殺されそうになっているのかはわかりませんが、それでも……。私は死ぬわけにはいきません！」

黒騎士ほどではないが、ティアナも風を切るように、深紅の剣を振るう。

受けた黒騎士は、難なく防御してみせたが、予想以上のパワーがあったのか、遙か後方まで引きずり飛ばされた。

「ほう……」

素顔も、表情も見えない仮面の下で、ゆっくりとした口調で呟いた。

甘く見積もっていた相手が、予想以上に力を出してきた為、頭の中で再評価するように。砂煙の向こう側に、黒の騎士がいる。

しかしどこか余裕のある黒騎士に対して、攻めたティアナは、精神的にやられていた。過信しているわけではないが、半ば感情任せに振るってしまった一撃。手加減はしていたといえども、アルティロイドとしての一撃を振るってしまったのだ。

逆に言えば、その力を使ったからこそ、並の相手は今の一撃で終わっていたはずである。だからこそ、ティアナは精神的に圧されているのだ。

普通ならば一撃で終わっていた相手が、どこか余裕を見せて、そこに立っている。相手はカメラか、あるいはそれ以上の存在、という事になる。

そして何より、ティアナの精神を圧しているのは、黒騎士の強さ以前に、その纏う絶対的な負の殺意だ。気を許せば、瞬きしている間に首を刈り取られてしまう。そんな気を起こさせる相手なのだ。（どういう事なのかは知らないけど……私の攻撃が、まるでダメージになってない。仮に相手がキメラだったとしても、相当なダメージを残せる一撃だったはずなのに……。まさか、相手は私と同じ……!?）

そこまで考えて、思考は停止させられる。再び、黒騎士が電光石火の如く勢いで、ティアナに攻撃を仕掛けてきたからだ。

相手の命を奪う事に、何の迷いもない剣。だが不思議な点が一つあり、その殺撃には不安定な感情のようなものが、感じ取れる点である。迷いが無い割には、不安定な部分もある。まさしく情緒不安定な剣である。

しかし、そんな理屈があっても、黒騎士の剣と剣腕は強い。道理は『力』という、シンプルなものに打ち消されている。

「っ、強い……！」

「抗うな……償いの運命を、受け入れるがいい……」

交差する深紅の剣と、漆黒の剣。ヴェルデフレインとオルグナーの能力差は、ほとんど無いといっても過言ではない。

そもそもここまでの戦闘で、ティアナと黒騎士における剣の実力は、圧倒的に黒騎士にある。だがティアナの使うヴェルデフレインは、オリハルコン製の剣であり、並大抵の剣では足下にも及ばない性能がある。

つまりは、いくら黒騎士の腕が強いといっても、それに扱われる剣が耐えられるはずがない。オルグナーと呼ばれる漆黒の剣も、ヴェルデフレインと同じ材質を用いた剣なのだろうか。

「くっ……っ……！」

均衡は崩れだす。ティアナと黒騎士の、実力差が明確に表れ始めたのだ。

剣の腕前はいうまでもないが、腕力に体力、経験といったものが、

黒騎士はティアナの数倍上を行っている。ヴェルデフレインのパワーで最初は押せても、ただのパワー押しを、黒騎士がいつまでも許さずもない。

「はぁ……はぁ……」

「貴様は、ヴェルデフレインをやみくもに振っているに過ぎん。その程度の技量で……その剣を扱うとは……笑止千万」

かなりの攻防をしたつもりだが、黒騎士は息の乱れもなければ、汗一つかいてはいない。ティアナとは全く大違いである。

黒騎士の体格は、決して大きくはない。体つきを見ても細身である。それなのに疲れを見せないのは、洗練された全く無駄な動きのない戦い方もあるだろう。

一朝一夕で身に付くものではない。長年に渡る経験によるものが、非常に大きなウェイトを占めている。

そして黒騎士　クロディアンの殺撃は、衰える事なくティアナに襲いかかろうとしていた。

9 殺撃のオルグナード（後書き）

「綺麗な食事？」

ティ「もぐもぐ……」

シン「あら、ティアちゃんは口を閉じて静かに食べるのね」

ティ「はいっ、食事する時の作法ですからね」

シン「うふふ、よくできた子ね。……それに引き替えこっちは……」

カル「ガツガツ！」

ティ「ああ、師匠はいつつもこつですよ」

シン「少しは静かに食べられないの？」

カル「男の飯は豪快に食ってこそだ。お行儀良く食べるのは男じゃねえー！」

シン「あらそつ……」

ティ「はは、は……」

10 黒き仮面の向こう

圧倒的な技量を持つ剣腕。電光石火の速度。禍々しいまでの仮面殺撃を繰り返す剣オルグナード。

それらを駆るは、黒き騎士 クロディアン。

ティアナとの遭遇、戦闘からおよそ五分が経過した。たったの五分、されど五分。間違いなく最大の長さを誇る、濃密な五分間を過ごしている。

その五分間の全てに襲いかかってくる、黒騎士の殺撃。かろうじて避けても、あるいは剣で受けても、否応なしに体力と精神力を削り取っていく。

「……はあっ、はあっ！」

肺に穴が開いてしまったのではないかと、思わず錯覚してしまう程に、ティアナの胸は苦しく痛かったのだ。

身体中には、直撃をなんとか避けたが、至るところに細く鋭いかすり傷が見える。もしも直撃などしていたら、腕や脚の切断など容易かつただろう。

ティアナは深紅の刀身に、反射して映った自分の顔を見る。

酷く疲れている。大量の大粒汗が、髪の毛や頬を伝っている。そんな流れてくる汗が、傷口にしみて苦痛を感じさせる。

(……駄目だ。私には、あの人に勝つ力が無い……。このまま戦い続けても、よくてあと数分間だ)

さすがに悟ってしまう。このまま戦い続けた先にある、絶対的な己の死を。

どう足掻いてみせても、どうひっくり返っても、黒騎士と自分との差は大きすぎて修正できないものだ。だからといっても、諦める事はできないし、許されない事である。

「……ふんっ、お前から……戦いの火が消えぬ……。諦めが悪い……とつとつ首を飛ばされれば楽にもなろう……」

「生憎！ 私は……諦めが悪いんですっ……！ それに、私の師匠も同じく諦めが悪いんですよっ」

戦いにおける、ありとあらゆるもので劣っている。

だからこそ、精一杯に虚勢をはった。本当はこの瞬間も、体力の回復に努めていたかったのだ。だが剣の腕や体力で負けていても、気持ちだけは負けたくない、ティアナは考えている。

勿論、その場しのぎかもしれないし、負け惜しみに近い事なのかもしれない。しかしだからこそ、どんなに小さな事でも、戦いの姿勢をやめる事はしなくなかったのだ。

「クツ、ハツハツハツハ！」

ティアナは目を丸くした。当然だ、今まで感情一つで襲ってきていた黒騎士が、突然大声で笑い出したのだ。

「な、何ですか、いきなり笑いだして……」

その問いを投げ掛けられると、黒騎士の笑いは、ぴたりと止まった。

「……昔を……思い出した。まだ我が貴様と同じぐらいの……年齢の時の事だ。……貴様のように、諦めだけが悪い……馬鹿の存在を思い出した」

「馬鹿の、存在？」

こんな存在の黒騎士だからこそ、『馬鹿の存在』という、身近に感じられるような言葉が出てきた事に、ティアナは変な親近感を感じてしまう。

たったこれだけの事で早合点かもしれないが、ひよっとしたら悪い人間ではないのか、とも思えてしまう。もしかしたら、自分を攻撃しているのは、何かの勘違いなのではないかと。

だがそんな思惑は、一瞬にして脆くも崩れ去ってしまう。無情にも黒騎士は、その自身と同じ黒き刃をティアナに向け、明確な殺意を向けてくる。

「戯れ言はここまでだ。……貴様の命、ここで消させてもらう……」
「やられるわけにはいきません。まだ、やるべき事が残っています」

し、何よりもここはお母さんの墓前、死者の眠る土地に、生者の地で汚すような真似はできませんよ！」

黒騎士と同じく、再び戦う姿勢を作る。

ほんの少しの時間稼ぎの甲斐もあり、荒かった呼吸もおとなしくなり、滝のように流れていた大粒汗も、少しは収まりをみせている。だが少量の体力が回復したところで、黒騎士とティアナにおける、絶対的な力量と経験の差が変わるわけではないのだ。

このまま戦い続ければ、ティアナが敗北、つまりは殺されてしまうのも、時間の問題なのだ。相変わらずこれが一つの真実である。

「……………いくぞ」

その言葉を皮切りに、再度、黒騎士の電光石火としか形容できない速度を持ち、ティアナに向かってくる。

（確かに速いけど……………大分目が慣れてきた。剣の腕では敵わないけど、動きが見えれば立ち回れる！）

確かにティアナの視線の中には、黒騎士が捉えられている。初見では反応もできない速度だが、ここまで見続ければ慣れる。

そして目が慣れてくれさえすれば、ティアナなら戦える。ティアナと黒騎士の間には、歴然の差があるが、ティアナも決して弱くはない。

毎日のように、鬼のようなカルマンの特訓に耐えてきていたのだ。基礎能力は、充分すぎるぐらいに高い。

そして、オルグナードによる殺撃が、ティアナに再び放たれる。これをヴェルフレインで受けるティアナ。

多少の体力回復もあり、鋭さと重さを兼ね備えた、黒騎士の殺撃を何とか防御できている。だがそれも耐えられても、一分もつかもたないかだろう。

「防御能力は大したものだ……………。だが戦いとは、受けてばかりでは……………相手に勝てない」

右上から左下へ、袈裟斬りの剣線が、ティアナへと走る。

それを防御するも、腕に力が入らなくなっている為、オルグナー

ドの刀身が、ティアナの首の皮一枚を斬り裂いていく。うつすらと、しかし傷の割に多めな血液が流れていく。

「……安心するがいい。頸動脈を切ろうなどと……ちやちな真似はしない。このまま……首一本を刈り取るのだ」

「うつ……くつ……！」

確実に進んでいく、黒騎士のオルグナード。確実に後退していく、ティアナのヴェルデフレイン。

ティアナが腕から力を抜けば、一瞬で楽になるだろう。それはこの戦闘で、何度も意識をさせられた、死というものである。

体力と精神の限界が近づいてくる。どんなに鍛えぬいた者でさえも、必ず訪れる限界点。根性論を使っても、ティアナはもう限界なのだ。最初っから、ティアナと黒騎士のレベルが違いすぎたのだ。

元はと言えば、突然の黒騎士による攻撃が発端である。これ程の能力差がある相手だ、逃げてでも追い付かれ、確実に命を奪われていただろう。どんな結果でも戦うしかなかった。

運が悪かったのだ。同じ時間に墓に訪れなければ　今となっては、それも虚しい話になる。

「……諦める」

あまりにも無慈悲に言ってきた黒騎士。そんな無慈悲な言葉は、苦しみに耐えているティアナにとっては、甘い誘惑に変貌する。

このまま目を瞑り、腕の力を抜けば、この苦痛から解放される。あらゆる事柄から自由になれる。

だがティアナは、それをしようとはしなかったのである。

「ティアア！」

そんな中、突然聞こえてくる第三者の声。男の声のそれは、とても聞き知った声だった。

そして声の終わりと共に、凄まじいまでの爆発音が鳴り響く。いや、音だけではなく、その音の根本からくる、衝撃のようなもので感じ取れる。

「……っち」

舌打ちしながら、ティアナから離れる黒騎士。鋭いステップで後方へ飛ぶ。すると何故、黒騎士が離れたのか、この爆発音と衝撃は何なのか、という答えがわかる。

平均的な成人の頭の大きさより、一回り大きな弾丸が、黒騎士に向かつて飛んでいっている。

倒れながらも振り向くと、そこには予想通りに、カルマンとシンラがいる。砲撃の正体は、カルマンの巨大な機械腕　ギガンティックアームからによるものだ。そして倒れるティアナの体を、シンラが受け止める。

本当にわずか短時間の攻防だったが、体力を根こそぎ奪われたらしい。ティアナは受け止めてくれたシンラの胸の中で、力を抜いて体を預けた。

次の瞬間、二つの爆発が起きる。カルマンの放った一発の弾丸が、黒騎士により真つ二つにされた為だ。

カルマンのギガンティックアームから放たれた弾丸は、威力自体は相当なものだ。それこそ巨大な機械腕の、見た目通りの威力を持っている。ここまで無敵の戦闘力を誇る黒騎士でさえ、間違いなく大きなダメージを受けるはずである。

しかし、黒騎士は弾丸を容易く斬ってみせ、その威力を完全に殺してみせた。威力という概念さえも、殺撃してみせたのだ。

「あの野郎……弾丸を斬りやがっただっ」

素直に驚いた。ギガンティックアームの弾丸の威力は、撃った本人が一番わかっている。

黒騎士が仮にも噂以上の能力を備えていたとしても、今の一撃で倒せる、あるいは深傷を与えられる予定だった。なおかつ確信していた。

「……仲間か。運の良い奴だな……」

いずれにしても、黒騎士一人に対して、ティアナ側は本人を含めて、カルマンとシンラが合流した。三対一の構図になり、数において優勢となる。

圧倒的な戦闘力を持つ黒騎士でさえ、この構図の不利は自覚しているのだろう。それまでの好戦的な姿勢は、少しずつ解かれていつているのが伺える。

「さすがの貴方も、この状況は不利じゃないかしら。ここは退いていただけると嬉しいのだけれど？」

シンラが黒騎士に言う。言葉通りの意味でもある。

シンラは本能的に悟っているのだ。仮にも三人で戦っても、この黒騎士には勝てないという事を。それほどに黒騎士　クロディア　ンという敵は強い、と。

見逃してくれて、この今を回避する事ができるのなら、それに越した事はないのだ。完全に敗けを認めているが、これは次に勝つ為の敗走になる。

「ティアは無事か？」

カルマンが駆け寄ってきたようだ。これでティアナ、カルマン、シンラの三人が、一カ所に集まった。戦いにおいて、まとまっている方が不利にはなるが、黒騎士ほどの能力と速度がある相手には、むしる固まって戦った方が良かったらう。

散開してのを絞らせないようにさせようと、一瞬に間合いを詰められては、散らばる意味合いがなくなるからだ。

「目立った外傷は少ないけど……体力の衰弱が激しいわね。こんな短時間の戦闘で、どうやったら体力をこんなにも奪えるのか……是非知りたいところね」

「絶えず死を意識させられる……戦いのプレッシャーというやつだ。それだけ黒騎士という野郎は、強いつて事だな」

そしてカルマンは、横目で鞘から抜かれた深紅の剣　ヴェルデフレインを見つめる。

（仮にも黒騎士の奴が、ティアナよりも戦闘力で上だと仮定しても……あの剣の強さならば、そんな差だって埋められるはずだ。それを用いても、ティアナをここまで圧倒する相手、俺達三人を相手にしても、余裕で捌けるだろうな）

カルマンには、これだけで充分過ぎる程の、情報が読み取れたのである。

そしてこの予想から、シンラの言った事は、大方的を射ていた。いくら三対一になったからといっても、黒騎士にとっては、戦いにおける優位性は全く変わっていないのだろう。

これは黒騎士に対しての駆け引きではなく、見逃してほしいという、こちらからの願いである。勿論、黒騎士が首を縦に振ってくれなければ、戦うしかなくなるのは当然の事になる。

「……退くと思っているのか？ 我は貴様らを殺す事など、造作も……んっ!？」

再び好戦的な姿勢を、あらわにしてくる黒騎士だったが、三人の内の誰かを見て、急に動きが止まる。最も、ティアナに限っては先ほどから見ている為、カルマンかシンラ、という事になるだろう。

「……ふっ、なるほど。貴様が……」

黒騎士は不気味に笑っていた。その笑みの中の、一つの答えなど、ティアナ達にはわかるはずもなかった。

そして三人がしばらく呆気にとられていると、黒騎士は電光石火の速さで、一直線に向かってくる。何の前触れもない行動で、防御行動も遅くなってしまう。

何よりも、ティアナは咄嗟に動く体力は無い。そのティアナを介抱しているシンラも、素早い動きはできないだろう。

「やらせはしないっ」

唯一動けるのはカルマン。全員が収まりきるには、いささか小さいが、右腕の巨大な機械腕を盾にして、黒騎士の攻撃に備える。

いずれにしても、鈍重なカルマンの動きでは、電光石火の黒騎士についていく事はできない。ならば大きな体つきを活かして、大きく防御する事を最優先とさせる。

そして、カルマンの機械腕　ギガンティックアームと、黒騎士の黒剣　オルグナードが、わずか一瞬ながら交錯する。

黒騎士の攻撃を、完全に防御してみせるカルマン。その様相は、

まるで山のようにも見える。そして攻撃を仕掛けた黒騎士は、そのすれ違い様の一撃のみで、走り去ってしまった。

結果としては、黒騎士に見逃してもらえたのだろうか。

(今の一撃……まさか、な)

攻撃を受けて、しばらく固まっているカルマンに、ティアナは心配そうに言葉をかける。

「あの……師匠、大丈夫ですか？」

その言葉にぴくりと反応したカルマンは、無愛想に「ああ」と答えると、大雑把かつ豪快に、ティアナの頭を撫でた。

「今のお前に、大丈夫、なんて聞かれる筋合いはないぞ」

「いたっ、痛いですよ、師匠」

黒剣オルグナードを駆る、黒き騎士クロディアンを退けた。その卓越し過ぎた戦闘力は、ティアナ達に恐怖を植え付ける。

しばらくの間、ティアナの回復の為に、その場での手当てが開始される。それをするのは、旅慣れたシンラである。幸いな事に、回復薬になる物は、サンバナの町にて買い貯めもしてあった。

一方、カルマンは一人、ティアナの墓に立ち呆けていた。墓に備えられている、白きワセシアの花を見る。それを見ていると、十数年前の自分自身を思い出せてしまう。

「ったく、あの馬鹿は何をしているんだろうな。お前をこんな所に置き去りにしてな、ティオ……？」

そう言いながら、所持していた水を墓にかける。半分近くまで水を流すと、もう半分を自分の口まで持つていき、一気に飲み干した。「こういう時、水じゃなくて酒をかけるのが主流だが、勘弁してくれよ？ だってティオ、一応未成年だからな。……俺やあいつは、三十超えちまったよ、もう良いおっさんだ……」

完全に陽が昇り始めた空を見て、十五年を振りかえる。あまりに長い年月である。色々な事があった、ただの一言では済ませられない

いぐらいだ。

「 師匠っ、お待たせしました！ 手当て完了です、出発しましょうー！」

過去の振り返りは、ティアナの元気過ぎる声に打ち消される。見ると声だけではなく、小さな体で大きく手を振っている。

カルマンはもう一度だけ、ティオの墓を見る。そこにティオはいないが、ティアナと同じように手を振って、送り出してくれているかのような、そんな幻影が見えた気がしたのだ。

「よし……行ってくるか！ だが、その前にやるべき事があるな」

誰に言ったわけでもなく、カルマンは呟いた。

次に向かうのは、西の大陸 デスクロウム火山地帯である。

10 黒き仮面の向こう（後書き）

「黒騎士の戦闘力」

ティ「これは本編に関係ないとは言い切れないけど、番外編ですの
で宜しく願います」

カル「誰に言っているんだ？」

シン「うふふ、大人の事情ってやつよ。さて今回のお題は黒騎士の
戦闘力、ね」

ティ「はい、凄く強かったです。全くかなう感じがしませんでした」

カル「ふむ……ティアナの戦闘力が2500（設定）なわけだから、
それを圧倒してみせた黒騎士の数値は3000前後は見積もってお
くべきか」

シン「あら」

カル「どうした？」

シン「いえね、戦闘力3000って仮にもそうだとしたら、この物
語の中では三人目の3000ねって」

ティ「そういえばそうですね。一人目はティーダさんと、二人目
はクリッパーさんです！」

カル「こらっ、ティアナ！ お前、ネタバレ台本読みながら言うな

っ、一応本編では、ティードとクリッパ―は知らない扱いになってるんだから！」

ティ「あ、そうでした、うっかりしてました」

シン「やれやれ、ね……」

11 黒騎士の正体

今から数十分前の事。ティアナの治療も終了し、最後の墓参りも済ませた。ここから旅立てば、しばらくはサンバナ近辺には戻ってこない為、ティアナは特に念入りに手を合わせている。

次に向かうのは、デスクロウム火山地帯。過酷な環境であり、辛い旅が想定される場所である。シンラは何があってもいいように、持ち物の整理をしている。

そして女性陣が、各々の行動をする中で、たった一人、カルマンだけは何かを言うわけでもなく、無言のまま突っ立っていた。

勿論、ただ立っているわけではない。考え事あつての事である。あまりに真剣に無表情である為、ティアナもシンラも、声をかけにくい状況でもあつた。

「お待たせしました」

「あら、もう良いのかしら？」

「はいっ、伝えたい事は全部伝えましたから！」

和やかに話す、ティアナとシンラ。しかしそんな声も耳に入っていないのか、相変わらずカルマンは動かない。

目を瞑っている事もあつて、ぱつと見ると寝てるようにも見えてしまう。しかも立ちながら。

「ねえ、準備よろしいらしいけど……そろそろ行かないかしら？」

シンラは柔らかく、カルマンに呼び掛ける。

それに目を見開き、

「ああ、そうだな」

と、静かに一言だけ口にして、ゆっくりと歩き出した。だがその途端、ゆっくりとした歩き出しとは対称的に、急に立ち止まる。

「どうしたんですか、師匠？ さっきから変ですよ」

「……お前ら、ゆっくり先に行っている。俺は後から追いかける」
あまりに突然すぎる、カルマンの言葉。当然、ティアナとシンラ

は、その言葉の真意が読み取れずにいる。

「じゃあ、先に行つてましようか、ティアちゃん？」

「えっ、でも……」

渋々と歩くティアナを、半ば強引に急かすシンラ。アイコンタクトを取ると、カルマンは大きく首を縦に振った。

二人が見えなくのを見届けると、その視線を、ティオの墓に向ける。

「さて……来るかね、ティオ」

答えの返つてこない墓に、そう呟いてみる。当然だが、その問いかけに対する答えが、返つてくるはずもないのだ。死者の魂は存在するだろう。しかし、死人に口なし、なのだから。

軽い溜め息を吐き出し、カルマンは少し離れた草むらにしゃがみ、そつとある存在を待ち続けた。

一体どの程度の時間が流れたのかはわからない。たったの五分なのか、十分なのか、あるいは三十分か、一時間は経過したのか。時を計る手段を、カルマンは持ち合わせていない。だが、待ち続けた甲斐はあったのだ。

「……来たな」

巨大な機械腕を持つ男の、残された左目には、確かに待ち続けた存在が映る。

全身を黒で覆い、特徴的な黒き仮面、そして黒き剣。そう、つい先程まで、ティアナの命を狙い、そして戦っていた黒き騎士クロディアンである。

気配を消している為か、黒騎士はカルマンに気付いてはいない。だが黒騎士ほどの実力者が、全く気付いていないものだろうか。あるいは意識を他に集中している、何かがそこにある。

後者の推理ならば、「何か」の正体は目の前にある。そうティアナの墓であり、友人でもあったティオの墓である。

そして、カルマンの推理が正しければ、黒騎士にとっては、友人

以上の存在である。

「よお、遅かったじゃねえか？」

カルマンが黒騎士に話しかける。本当に気が付いていなかったのか、黒騎士は少々驚いているようにも見える。

しかし、すぐに気を落ち着かせたのか、冷静という感情が手に取るようにわかる。冷静、という言葉が正しいのかはわからないが、ただ一つ言えるのは、黒騎士から伝わってくるものは、圧倒的な冷たさというだけである。

「……何の用だ？」

仮面を通して聞こえてくる、ノイズが混じったような声。だがその声は、確実にカルマンへ向けられていた。

「何の用だ？ その言葉をお前に貰うのは心外だな。うちの子を危うく殺されそうになったんだ、そこまでいったら保護者が出るのは当然だろう？」

返された言葉に、黒騎士は無言だった。そしてそのまま無言を続ける。

反応がない事に、少しながら痺れを切らしたのか、カルマンは苛立ちながら溜め息を吐き、その勢いのままに口を開いた。

「今のお前の心理はわからんが、あの子にあんな真似をしたって、過去の事がなくなるわけじゃない、それはわかっているんだろう！？」

「過去の事……ふっ、わからんな。貴様の過去と我が過去、何の関係があるというのだ？ 今の我は黒き騎士クロディアンと呼ばれている存在だ」

カルマンは苛立ちどころか、苛々していた。目の前の人間は、カルマンの質問に答えようとしない。それどころか出てくる言葉は、問いとはあまり関係のない事だからだ。

だが事実はそれだけではなかった。口論による駆け引きにおいて、話をはぐらかす行為など、最も軽率で簡単な行為だ。

つまりカルマンにとって、どうしても苛々させられるものがあっ

ただ。そしてカルマン自身は、その正体に気がついている。

「ああ、そうかい。ではクロディアン、俺の言葉に答えてはくれないか？ あの子に手は出すな、あの子をお前が殺しても、そこに眠る少女は蘇りはしないし、何よりも根本的な事は一つも解決なんてしないんだ」

「根本的な解決？ 何の事だ、私はただ断罪の剣を持ち、罪を裁くのみ。罪人を全て裁き斬れば、いずれ罪人は消えよう。貴様が連れ去っていた少女は、かつてティアナと呼ばれた悪魔の欠片なのだ。多くの人間を殺し、多くの恐怖を与えた、この悪魔の欠片は大きすぎる罪を持っている。だからこそ裁かねばならない」

「その悪魔という個体が、その墓に眠る少女だ。なら何でお前は、その悪魔に花を添える？ それに多くの命を奪った事に対する罪ならば、俺にもある。今までで数え切れない命を、たくさん奪ってしまった。ならば目の前にいる俺に、その断罪の剣を振るってみろ！」

お互いに話の中に、個人的な感情がこもってしまった。

カルマンは言葉通り、黒騎士の持つ剣　オルグナードの裁きを受けようと、大の字になり立ち続ける。だが黒騎士は何の行動も取らずに、ただ黙って見たままに何もなかった。いや、何もできなかったのかも知れない。決してカルマンの気迫に圧されたわけではない。

「やれないのか？ そうか……少しは安心したぜ」

いつまで経っても斬ろうとしない黒騎士を見て、カルマンは体勢を戻した。体勢を戻した後も、黒騎士は断罪の剣を抜く気配もない。これには言い出したカルマンも、内心安堵していた。

罪人を裁くと言いながら、それを実行しない黒騎士。この行動が、黒騎士「無差別殺人鬼」という図式を、少しは緩和していたのだ。少なからずカルマンにはそう思えた。

「さて……少しはお前に、人間の心が残っているようで良かった。なあ、クロディアン　いや、元ティータ、と呼ぶべきか？」

言った人間、言われた人間、それを見守る人間、三者の間の時間

は、一瞬でも止まったかのように見えた。

ただ黙って動かなかった黒騎士も、この言葉に僅かながらの動きを見せる。それは常人ならば、気が付かないくらいのものだ。しかし、その点にかけては目が肥えているカルマンにとって、その反応を見破るのは造作もない事である。

「凶星か、どうなんだ、ティー……」

「我はティーダではない。我はクロディアン、断罪人なのだ」
カルマンの言葉を遮るように、今までの口調とは違う、やや激しい口調で黒騎士は言う。明らかに困惑していた。

そしてそれとは対称的に、カルマンは極めて冷静だった。

「どうしてそんなに声を荒げる？ 仮にクロディアン殿がティーダだとしても、お前が違うというのなら、今まで通りに黙秘を続けていれば良かっただけの事じゃないのか」

黒騎士は再び黙り込んでしまう。何を考えているかまでは、その黒き仮面のせいではわからない。ただ少し俯き加減の顔は、明らかに何かに迷っているのだ。

その決断を鈍らせないように、カルマンもそんな黒騎士の動向を、静かに見守り続けた。

数分後、黒騎士の手はゆっくりと、自身の仮面へと向かっていく。そしてゆっくりと、本当にゆっくりと仮面をはずしにかかる。少しずつでも見えてくるのは、仮面の中に収納されていたであろう、外部に見える以外の髪の毛。当然、外部の髪と同じように黒髪である。そして、ついに仮面は全てはずされた。

そこにあつた顔は、歳月の経過により多少の老化はあるものの、確かにカルマンの知っている顔だ。

「……やっぱりお前か、ティーダ」

カルマンの目の前にいる黒騎士　クロディアンの正体。それは紛れもなく、かつて共に過ごし、共に戦った男の姿^{ティーダ}だった。

「何故、わかつたんだ？」

声もノイズ混じりの声ではなく、確かにティーダの声である。

ティーダの問いを聞き、カルマンは鼻で笑う。

「俺がお前に気が付かないとでも思ったか？ 一見すると完璧に偽装してはいるが、お前の行動には決定的なものがある」

反論する事もなく、ティーダは先ほどと同じように、ただ黙っている。

「その決定的なものっていうのが いや、ここで話すのはよそう。

ティーダ、せつかく会ったんだ、少しは付き合えよ？」

ティーダは目を瞑り、少し考えた素振りを見せてから、

「……良いだろう」

と、淡々と答える。

カルマンが向かおうとした先は、前日にシンラと酒を酌み交わした酒場である。誰にも邪魔される事のない場所で、カルマンはティーダと話がしたかったのだ。

そして何よりも少女の眠るこの場所で、物騒な話はしたくなかった。

カルマンが横目で墓を見ると、テイオの魂という幻影が、オロオロしながら二人を見ているようでもある。カルマンは左の人差し指で、軽く頭を掻いた。

（大丈夫だよ、テイオ。何も喧嘩しに行くわけじゃない。ちよつと昔のダチと思ひ出話するだけだ。だから心配するな、ティーダは俺に任せてテイオはあの子を見守ってくれ）

それが伝わったのかはわからない。だが伝わったと思いたい。生者と死者は会話はできないが、思いだけは繋がっていると思いたい。そしてカルマンとティーダは、サンバナの町へと向かっていく。

11 黒騎士の正体（後書き）

「あの世の役者達」

デュ「どうも皆様、おはようございます、こんにちは、こんばんは。久々に登場しましたデュアリスです。以降の略称は『デュ』になります」

ロビ「オレ ロビン」

ティ「私はティオ っ、略称がティアナのティと被ってないですか？」

ソリ「ちなみにソリディアだ。ふむ……まさか久々の登場が、死者の会合とは……」

ティ「一応言っておくけど、私は第二部のラスボスのティアナだからね！ ちょっとティオ、略称が被るから変えなさいよ！」

テオ「えっ、ちょっ、……あー、変えられてるよぉ……」

デュ「でもテオって、どこかの某狩りゲーに出てくるモンスターの名前みたいでかっこいいですね」

ソリ「ほう、デュアリス君は某狩りゲーやっているのかね？ それは奇遇だ、今度一緒にやらないかね？」

デュ「ええ、是非！ 某狩りゲーだけじゃなくて、某神喰いゲーとか、某PSシリーズとかもやっていますよ」

ロビ「デュアリス　ゲーマー」

テイ「まさかおとなしい感じのデュアリスが、ゲーマーとはね……
一般的にいう女オタク、腐　子ってやつ？」

テオ「ティアナ、ちょっと言い過ぎ……」

ソリ「むっ、ティアナ君、オタクとゲーマーは違うぞ！」

デュ「そうですっ、オタクとゲーマーは違います！」

テオ「ええ！？　何でみんな熱くなってるの！？　收拾がつかない
ので、強制終了お願いします！」

12 他が為の使命

「さて、どうした、座れよ？」

かつての最愛の親友ティオの墓の前で、十五年の空白を経て、再会したカルマンとティード。お互いに最後に会った時ほどの、若さもない。あるのは過去よりも老け込んでしまった、二人の男だけである。かた一方は、内心疲れてはいるものの、気力は充実した目をしてしている。そしてもう一方には、何も無い。正義も無ければ、悪も無い。明確な目的すらも見えない。

ただ強いてあるといえるものは、多くの人間の命を奪ってきた断罪の剣。オルグナードと、男を黒騎士クロディアンたるものに仕立て上げる為の、黒き仮面である。

カルマンとティードは、サンバナの酒場にいる。前日に、シンラと共に入った酒場と同じ場所である。

カルマンは自分が座るよりも先に、呆然と突っ立っているティードに対して、椅子に座るように促す。ティードは椅子を睨み付けるように見て、一呼吸の間を空けて、静かに着席した。完全に着席したのを確認し、カルマンもその巨体を預けるように、椅子へと座り込んだ。

「酒は飲めるようになったのか？」

カルマンがティードに聞く。十五年前、とある出来事により、ティードは酒に呑まれた事がある為だ。

「……少しなら」

「そうか。親父さん、アルコール度数の少ない酒をくれよ」

店の店主に、酒を注文する。親父は静かに頷くと、店の奥へと歩いていった。

「ちょっと待ってるよ、すぐに来るから」

カルマンが話しかけるが、ティードは無言。頷く事もしない。余計な会話はしたくない、という事だろう。最も、カルマンも余計な

会話をするつもりはない。

しばらくすると、店の店主が一本の瓶を持って現れる。それを手際良くテーブルに並べ、一杯分の酒を、用意したグラスに注ぐ。そして一礼した後、店主は奥へと引っ込んでいった。何も催促していないのに、わかったかのように奥へと行くのは、熟練の成せる業だろうか。

カルマンは注がれた酒を、一気に飲み干すと、

「かあつ、本当にアルコール度数低いな、こりゃ！」

と、率直な感想を大声で言う。幸い他の客はいないので、誰に迷惑がかかるわけでもないのだが。

そして一口で一杯を飲み干し、空になったグラスに継ぎ足した。

「それで、貴様の話は一体なんだ？」

仮面を取り、一時的にといえども黒騎士から、ティータへと変わっている。だが、そんな変化とは違い、その口調は黒騎士の時と同様、非常に淡々としたものである。

元々、ティータという人物は、あまり感情を表に出すような人物ではなかった。できる限り他人との接触を、避けるような仕草も見取れる事もあった。

しかし人との関わりを持つようになり、その傾向も幾分は緩和されてきた感もあったのだ。その中心となっていたのが、喧嘩こそ多かったが、目の前にいるカルマン。そして墓に眠る少女、ティオなのである。

「……まあ正直、話したい事はいっぱいある。十五年……この歳月が流れる間、お前は何をしていたのか、とか。一体何故、黒騎士としての活動を始めたのか、とかな」

誘ったものの、カルマンには具体的に何を話そうか、そのテーマとなるものを、全く考えていなかったのだ。

だが十五年　そのあまりに長すぎる、空白の歳月。それを埋める為には、ちょっとした時間で済むはずもないだろう。

「俺も貴様に聞きたい事がある。……何故わかったんだ、黒騎士の

「正体が俺であると」

本題、というわけでもないが、カルマンとティードをここへ来させたのは、確かにこの理由である。

「勘……なんて言うつもりはないから安心しろ。まず、お前だと判断させられる点は、ティオへの墓参りだ。一般的には、あそこはティアナという悪魔の墓だ。普通の人間ならば、まず近寄らない。なら誰なら近付く？ それは生前の彼女に所縁のある人物だ。だからといって、かつて住んでいたパーションの人が来るわけもない、何故なら、あんな事があって、みんなティオという存在を畏怖の念で見えていたからだ。強いて言えばハリスさんだけが、あの人に来れるわけがない。まして全身を黒で覆うなんて、変に目立つ格好をするわけもない。となると、後は誰がいる？ エスクード城の人が来てくれていた可能性もあるが、消去法で考えて、お前しかないよな」

ティードは目を瞑り、カルマンの説明に耳を立てている。肯定するわけでもなく、また、否定するわけでもない。

「それにティア……いや、あえてティアナと言うが、普通に見れば年端もいかない女の子だ。誰も彼女が、かつて恐怖を与えた悪魔だなんて、知る由もないだろ。それがわかってる事が、またティードという人物像に近付ける。……そっくりだもんな、いや、そっくり過ぎるんだ。ティオとティアナは……。親と子ではなく、本当に生まれ変わりだ」

「欠片……だからな」

今まで黙っていたティードが、ようやく口を開いた。しかし、酒を一口含み、また黙ってしまう。

「……。とりあえず、俺がティードだと確信を持ったのは、さっきお前が走り去っていく時の、剣撃によるものだ」

「……ほう」

今までの中で、ティードは一番の反応を見せる。

「いや、正確には戦闘スタイル……と言うべきか。超人的な動きか

つ、電光石火の剣撃。俺の知る中で、それを実行実現できる人間は、ティードという男だけだ」

「……その推理は、個人的な感情による推測の域を出ていないな」「そうだろうな、だが間違えるはずがない。そのスタイルは俺が羨ましく思い、妬み、そして憧れたものだ。ガキの時代、俺はお前のように強くなりたいと何度も願っていた。そして必ず倒してやると、何度も心に誓ったもんだ」

恥ずかしげもなく、力強く過去を語るカルマン。

それに対して、今まで無言無表情を貫いていたティードが、僅かながら笑みをこぼす。

「なるほど、納得した」

妙な雰囲気 が漂っていた。殺伐した感じではない。むしろ懐かしさが、その場を支配している。

決して、今の二人の関係は、馬鹿みたいに笑い会える状態ではないが、うつすらと笑みが出てくる、そんな雰囲気なのだ。

ティードはわからないが、カルマンは少なからず、そう思っている。だからこそ、聞きたい事が出てきたのだ。

「なあ、ティード。今からでも遅くはない、今までの事は水に流して、俺達と一緒に来ないか？ 絶望に支配されてしまった時代だ、俺達だけでも城国と戦おうと、旅をしているんだ。そして支配の時代を終わらせるんだ。不可能に近い事だが、やらなければ」「俺に、悪魔の欠片と共に、城国を、王を打てと言うのか？」

カルマンの言葉を無理矢理遮り、ティードは言う。その言葉は、どこか怒りを感じられる。

だが、ティードの怒りを秘めた言葉以上の怒りを以て、カルマンはやや怒鳴るように言う。

「お前……さつきからティアナを欠片欠片って、あの子は歴とした一つの生命だぞっ、それをお前は」

「あの娘の、本当の能力を知らないから、貴様はそう言えるんだ！」怒鳴るカルマンの、更に上をいくかのように、ティードの口から、

生の感情が吐き出される。

言い返そうと思ったカルマンだが、ティータの口から出た、一つの単語に興味を奪われてしまう。

「ティアナの……本当の能力？ 一体何だ、それは!？」

感情を出したティータだったが、今は完全に黙りこんでいる。いや、喋るべきかを、考え込んでいるようにも見える。

「おいっ、何とか言いやがれ！」

「正直なところ、俺には理解できない」

「はあっ？ 何だよ、大口叩いた割には、肝心なところはわかってねえのかよ」

拍子抜けしてしまったカルマンは、再び気を入れる為に、酒を一杯煽った。

気を落ち着かせて、ティータを見ると、めずらしく何かに恐怖しているようにも見えた。

「お、おい、どうした？」

「理解できないんだ、俺にもっ。それほどにティアナの力は強大なんだ。……この数十年、俺なりに過去のティアナの情報や記録を、調べた事がある。だが結果的にわかった事がある。ティアナと呼ばれた個体は、全てのアルテロイドを超越して強い、という事だ」

「アルテロイド……」

カルマンは、記憶の奥底に眠っていた言葉を、手繰り寄せるように思い出した。かつてティータに、そういった告白をされた事があったのだ。

アルテロイドの強さは、カルマンの中では、ティータという象徴がある。それはあまりにも、常人離れしている戦闘能力を有している。それこそ、並の人間では歯が立たない程に。

そしてティータというアルテロイドは、最強、の二文字で恐れられた個体である。

「十五年前 第二次解放大戦の渦中、ティオはティアナへと覚醒を果たし、わずか短時間ながら、世界中を恐怖と死の世界へと創り

あげた。俺は間近でお前と、ティアナの戦いを見ていないから何とも言えないが、当時の惨状と、お前に色濃く刻まれたダメージで、いかに死闘だったのかの想像はつくつもりだ。……だから悪魔と形容されたのも……認めたくはないが、わかる、つもりだ。だが、それはあくまで、ティオティアナとしての話だろう、今のティアナには関係ないはずだ！」

自分で言っていて、墓穴を掘っているのだと、カルマンは気が付く。

だからこそ危険なのだ。最強のアルティロイドである、ティードが戦っても、止める事はほぼ不可能な力を、当時のティアナは持っていたのだ。

そのティアナから生まれた、今のティアナは、ティードが言う程の力を備えていない。現にティードは、先程の戦いにて、剣においても実力においても、見事にティアナを圧倒してみせていた。当時のティアナと、今のティアナとの、実力差は簡単にわかるものだ。しかし、今のティアナにも、いわゆる『力の片鱗』は見せはじめている。事実、単純な勝負をすれば、ティアナの実力は、既にカルマンを越えている。カルマンが優勢を保っていられるのは、長年に渡り培った経験の賜物でもある。

話を少し変えるが、かつてティアナへと覚醒した、ティオという当時の少女は、お世辞にも戦闘ができる少女ではなかった。間違いなく拳による喧嘩はした事はないし、仮にしたとしても、まず負けていただろう。

そんな少女でさえも、ティアナへと覚醒した瞬間、何者にも止められぬ怪物へと変貌するのだ。

仮にも、今のティアナが、かつてのティアナのような覚醒をしたとしたら、今度こそ止められないだろう。世界は確実に、死への道に進む事になるだろう。

殺せるうちに殺しておく、それが正しいか間違っているかは抜きにしても、ティードの答えはある一種の正論である。

かつて誰も倒せなかった城国という、大きな敵と戦わなければならない。もしも、ティアナが敵となってしまったのならば、完全に勝ちはなくたってしまふ。ならば、確実にできる安全策として、今の時点でのティアナを、殺してしまった方が良いのだろうか。

カルマンは力強く、首を横に振った。

「殺すなら今しかない。あいつが覚醒したら、俺にだって止められはしない」

「……………だが、あの子は、ティアは、ティオが俺達に託した子なんだろう？」

ティードは顔をしかめ、逃げるように視線を横に逸らす。

「昔から、世界の平和を、他人の幸せを願っていた……………でも、夢も半ばで死んでいったあいつのつ、ティオの願いは、ティアに受け継がれているんだ。あの子は、この運命から逃げる事もできたんだ。

親のティオの理想なんて、捨てる事だつてできたんだ。普通の女の子として、ひっそりと生きていく事だつてできたんだ！ でも、あの子は受け継ぐ事を選んだ。……………こんな小さな女の子が、未来へと戦っているのにつ、俺達の世代が足を引っ張つてどうするんだつ。

あの子は戦い続けるさ、この先も、争いが無くなるまで、それが例え終わりのないものでさえもな。……………それが、ティアナという名すらも受け継いでしまった、あの子の宿命だ。だから決めたんだ、俺は残された力を、ティアの為に使おうと。あの子を出来る限りの無傷で、終わりまで運んでやる事、それが勝手な俺が決めた、勝手な使命だ」

荒くなつた息を整えるように、深呼吸をすると、また酒を一杯、胃袋の中へと押し込んだ。

鼻息の荒いカルマンに対し、やはり冷静な姿勢をティードは崩さない。

「ティオの夢、願い、か……………。だが、今のティアナが危険だという事実は変わらない」

「お前はまだそんな事をつ！」

今にも殴りかかりそうなカルマンを、ティーダは手で制する。

「危険な事は変わりないんだ。仮にも覚醒してしまった時、後悔の感情だけでは遅いんだ。……俺はこれから、ティアナの命を狙い続ける。それを阻止するのが、貴様の使命だと言うのなら 戦場で会う時、俺と貴様は敵同士だ」

ティーダは、自分のグラスに残った酒を一気に飲み干し、席を立ち上がる。一直線に出入口へと向かうティーダを、カルマンはただ眺めている。

そして、ティーダがドアノブに手をかけた時、

「ティーダ」

一言。カルマンからの呼び掛けに、歩みを止める。

「これだけは言っておく。ティオはお前に、あの子を託したんだぞ」

「だから？」

「あの子は、ヴェルデフレインの持ち主、つまりはお前を父親だと思っている。血は繋がっていないのかもしれないけど、あの子は、お前の子だよ」

「……ふっ、娘殺しの悪名も、悪くはない」

扉が閉まった。

もうそこには、かつての親友である、ティーダの姿はなかった。

「……このっ、大馬鹿野郎が……」

カルマンがティオの墓へと戻る頃には、既に昼時も過ぎていた。

ティアナとシンラは、無事にデスクロウム火山地帯に入っているだろうか、カルマンの心配は尽きない。

「うん、あれは……？」

ふと見ると、墓の前に人影がある。茶化し目的で、足を踏み入れた人間か、あるいは別れたばかりのティーダか。

だがその答えは、両方とも違っている。

「あつ、来た！ 師匠！」

人影が手を振っている。その正体は、ティアナとシンラである。

「お前達、先に向かえと言っておいただろう？」

うふふ、と笑いながら、シンラが答える。

「一応、説得はしたのだけれど……師匠と一緒になきゃ、先には進まないってティアちゃんが。愛されてるわね」

カルマンは嬉しかった。

そして酷い罪悪感に見舞われた。

「ティアナを殺すならば、今しかない」

そんなティータの言葉が、頭のどこかで根付いてしまっていた。最悪の事態を想定するならば、それも覚悟しなければいけない事なのだ。

だがそんな事を、一時といえども考えてしまった事に、カルマンは涙を流す。

「師匠！？ どうかしたんですか、どこか具合でも……うわっ」

カルマンはティアナを、力いっぱい抱き締めていた。

「あらあら、うふふ……」

（大馬鹿野郎は、テメーもだっ、カルマン！ こんなに良い子を、飯にも殺そうだなんて、よく考えられたもんだ……。馬鹿野郎、大馬鹿野郎、クソ馬鹿野郎！）

「し、師匠……」

一分程だろうが、カルマンはティアナを抱き締め続けた。

それから三人は、ティオの墓の前へと整列する。

「ティオ、さん。当時からだけど、私が興味を持てた人間。今はティアちゃんが、私の興味対象。……素直じゃないわね。大丈夫、安心して、やれるだけの事はしてみるわ」

「ごほん。まあ、俺からティオに言う事なんて、あまり無いけどよお。何回も伝えてるけど、この子を守ってやってくれ。それだけだ」
「お母さん、しばらくこの場所を離れます。きつとまた、ここへ戻ってきます。次にここへ戻る頃には、今よりも強くなって、戻って

きます。お母さんが好きだった、お父さんよりも強く……。だから、行ってきます！」

シンラ、カルマン、ティアナの順に、墓に眠るティオへと、旅立ちの言葉を贈る。

相変わらず、ティオは元気に笑いながら、手を振っているように見えた。

「行きます！」

ティアナ達は、サンバナ周辺地域を離れ、西の大地　デスクロウム火山地帯へ向かう。

12 他が為の使命（後書き）

「あの世の役者達2」

ソリ「ところで……デュアリス君は某狩りゲーでは、何の武器を使っているのかね？」

デュ「あ、私はランスとガンランスをメインにしています」

ソリ「ふむ……なるほどな。私はどんな状況にも対応できるように、片手剣をメインにしている。……というわけで、初心者なティアナ君には、扱いやすい片手剣が良いと思うのだが？」

ティ「えー、何で？ ハンマーとかいうのじゃ駄目なの？」

ソリ「駄目というわけではないが、ハンマーは少々扱いにくくないか？」

ティ「扱いにくいものにも、作中で最強のアルティロイドよりも強い、真の最強である私なら何を使っても勝てるわよ！」

デュ「いや……ゲームするのに実際の強さは……あはは」

テオ「 というわけで、みんながゲーム話で意気投合してから、かれこれ十二時間が経ちます。はあ……正直退屈です」

ロビ「ティオ ゲンキダセ」

テオ「ありがとう、ロビン。……あれ、そういえばだけど、この作

品で死んだ人は多数いると思うけど、セレナさんがいないのはなぜ
!?!」

ロビ「〜」

テオ「ロビン……吹けもしない口笛はやめようね」「…」

13 ゼロが生まれた日

六年前。

「どうだ、ゼロの様子は？」

城国 シヤングリキングダム。そこは薄暗く、筒状の入れ物に謎の液体の入ったカプセルのようなものが、所狭しと並べられた一室。よく見るとカプセルの中に入っているのは、液体だけではない。

人だ。いや人も含めた数々の動物が、そのカプセルの中に入っている。恐らくは、アルテロイドやキメラといった、生命体を造る為の部屋なのだろう。

「はい、とても順調にきています。この調子ならば、もうまもなく……. といつても宜しいかと」

一つのカプセルに、数人の学者の姿が見える。そしてそれを取り囲んでいる人間。城国を統治し、その力を使い、人々を常に弾圧、陵辱をしてきた存在。そう、城国王の姿も見える。

長きに渡り、城だけでなく世界を牛耳ってきた王だが、その容姿は非常に若い。その理由は、他人の肉体への寄生により、常に若い肉体へと乗り移ってきた為である。そして今の姿は、かつて風の騎士と称されたアルテロイド、ジュークの肉体を奪ったものだ。

ジュークという人間は、非常に線が細く、とても整った顔立ちをした若者だった。しかし今のジュークは、あまりにも老いている。王に乗っ取られた為による後遺症なのかはわからないが、綺麗な黄緑がかった髪は、既に多数の白髪が交じっている。

いや、それだけではない。顔つきも酷くやつれているのだ。これではまるで、余命幾ばくもない重病人のような顔である。頬骨が出っ張り、青白く、ガリガリになった肉体。何よりも、その見た目から生力を感じない。

だが、そんな疲れ切った深緑の王よりも、不思議な事がある。

それは、王がゼロと呼んだもの。

王や科学者達が見つめるカプセルには、何の個体も見えない。人間もいなければ、何かの動物もない。当然、植物らしきものもない。この部屋の中にならばどこにでもある、やや緑がかつた不思議な液体があるだけなのだ。

「……王様っ！」

「で、できたのか？」

「はい、無からの誕生です。おめでとうございます」

無からの誕生。王は、生命が誕生するのに必要な、母体というものを使用せずに、新しい生命を誕生させたのである。

誕生のコンセプトは、真の究極の生命体。アルティメットアルティロイドである。このゼロという存在は、今までのアルティロイドとは違う。最初の個体ティオティアナから始まり、最後の個体であるクリッパーまでは、元は人間だった存在を改造する事により、誕生させていたいわばC型アルティロイドである。コアティネット

元は普通の人間だった子供達から、それぞれに見合った改造内容の適任者を捜し出す。C型アルティロイドとして、集められたのは幼い日の、ティオ（ティアナ）、ジューク、ティード、デュアリス、ラティオ、リオ、クリッパーの七人である。余談だが、この子達の本名はもつと別にある。今の名前はあくまでも、改造コードのようなものなのだ。

C型アルティロイドでさえも、充分すぎるぐらいの戦闘能力を有している。それは過去の戦歴を見てもええ、ご理解頂けるだろう。ただ、C型アルティロイドの強さは、本来のアルティロイドが持つ戦闘能力の、およそ半分にしか満たないのである。

その大きな理由は、C型アルティロイドというのは、元々は備えていなかった能力を、上乘せした為である。普通の人間としては、実現不可能な身体能力を持つ、そしてそれを扱う。ある程度の制御がなければ、これを行う事は到底無理な話なのだ。

しかし、今までの既存のC型とは別の個体が、九年前に誕生

したのである。この時代より九年前、そう、第二次支配開放大戦である。当時存命していた零番目のC型アルティロイド。ティアナと呼ばれる個体は、その持てる能力の暴走開放を引き起こした後、静かに絶命をしている。

このティアナが持っていた能力というのが、命を司る能力、である。肉体改造における後遺症で、大半のアルティロイドは、遺伝子を後生に残す、という生命ならば誰もができたであろう能力が欠けてしまっていたのだ。だが、この零番目のティアナのみが、その肉体を母胎とし、新たな生命を誕生させるという力を持っていたのだ。

この九年前の第二次開放大戦の渦中、それまでの常識を覆してしまふ出来事が、水面下で起きていたのだ。それは、N型アルティロイドの誕生である。人間から、アルティロイドへの変化という、無理を生じさせて造った肉体ではない。生まれた瞬間からアルティロイドなのだ。いわば純血種となるアルティロイド。

予測でしかないのだが、N型アルティロイドは、C型アルティロイドと比べても、その能力は比べ物にならない程に強い。例えば三番目の個体「火の騎士ティード」を例に見るとする。このティードは、かつての幼少時から火の能力が使えたわけではない。元々なかつたところに、火の能力、というものを上書きしているに過ぎない。それ故に、その火の能力を使う際に、様々な制約があつたのである。更に例え話だが、このティードが使う中でも、最大級の必殺技がある。それはエクスプロージョンという技であり、火の能力を最大まで高めて剣に纏い、その膨大なエネルギーを一気に相手に叩きつける技である。だが、このエクスプロージョンは、その最大級の威力に見合った、高いエネルギー消費があつたのだ。それこそティードのエネルギーでは一発、あるいは二発放てるかというぐらいの代物だ。

しかしN型アルティロイドならば、恐らく五発以上は放つても、エネルギーが底を尽きる事がないだろう。何故ならば、N型にとつて火を扱うのは、呼吸をするのと同じ事だからなのだ。生き物はす

べからく呼吸をするが、一部のものを除いて、呼吸をする事に制約があるだろうか。呼吸とは、大して意識をしなくても行える行為ではないだろうか。もう一度言うが、N型にとって火を扱うとは、そういう事なのだ。

長く例える事となったが、この新たに誕生したゼロという個体は、上記のN型に該当するといっても過言ではないのである。いやN型を意図的に造り上げたU型のアルティロイドアルティメットといっても良いのではないだろうか。

「お前達、嚴重にチエツクを欠かすな」

学者達は、気合いの入っていないような声で、各々返事をする。最も、学者で体育会的な返事をする人は、少ないだろう。

王は薄暗い部屋から出て行くと、突然現れた太陽の光に目を痛める。

「ゼロ、か。いよいよ私の夢が実現するか……」

「王様の夢って何ですか？ キャハハハ！」

独特な甲高い笑い声、その正体は五番目のアルティロイドにして光の騎士であるリオだ。そして双子の弟であり、六番目のアルティロイド。闇の騎士クリッパの姿も伺える。

「リオ、控えろ。王に対して失礼だ」

リオとは違い、寡黙なクリッパ。王も疲れた目でクリッパを見ると、静かに頷いてみせる。

結局、話はそれで流れてしまう。口には出さなかったが、内心、リオはつまらなかつた。クリッパも立場上は止めてみせたが、王の夢、というものに、興味は持っていたのである。

「お前達……その後の経過はどうなのだ？」

王の問いに、クリッパが答える。

「はい、上々です。新しい肉体にも、大分慣れてきたところです」

「ふむ……。クローン体といえども、その肉体性能はかつてのオリジナルを超えている。大事に使え」

クローン体。リオとクリッパは、九年前の第二次解放大戦にて、

とある理由からティエダと共に、ティアナと戦っている。

圧倒的な戦闘力を有するティアナの前に、リオとクリッパの二人は敗北し、肉体的な死を迎えるところまで来ていた。

王はギリギリで、死亡寸前の二人を回収。以前より用意していた、二人のクローンボディへと移した。魂というものを、移動させるといふ魔法のような機械を、既に開発していた城国にとって、オリジナルに憑依している魂を、クローンに移す事は難しい事ではない。

最も難しい事は、本人達が魂を移動したという、シヨックラグへの対応。そしてクローンとはいえ、別の肉体に移動した際の、一種の違和感の克服に、とても長い年月をかける事になる。

その証拠にシヨックラグと違和感の克服に、費やした時間は九年間。それだけの時間を使っても、ようやく人並みの運動をするに至る。

「ただ、俺達も是非知りたいものがあります」

クリッパは普段から、特に深入りはしないタイプである。それが王に対するものならば、尚更の事である。

「何だ？ 今は気分が良い。答えてやろう」

「大した事ではないのですが、あの部屋で一体何をしておられるのですか？」

事実、大した事はない。それは城国に所属している、という条件ではある。

リオも、あの薄気味悪い部屋の事と、その中で王が熱心になっている事に、少なからず疑いに近い興味を持っている。その証拠に、普段口数が多い もとい五月蠅いといっても良いリオが、黙って王の言葉を待っているのだ。

「あそこにいるのはな、過去未来、全ての歴史を見ても、最高の破壊神だ」

「破壊神？ あの部屋で造っておられるものですか？」

「そう、ティアナという我が最大の誤算……その誤算を無きものにする。究極のアルティロイドだ」

究極のアルティロイド。この言葉に、クリッパーはムツとした表情を見せる。

およそ十五年前、アルティロイドの中で最強と呼ばれていた、火の騎士ティードの存在。クリッパーは、そんな最強の火の騎士を超えるアルティロイドとして造られた。数回に渡る戦闘の末、ティードとクリッパーの決着はつかずにいる。クリッパーという騎士は、常に最強という称号を、火の騎士から奪う事だけを望み、日々邁進してきたのである。また当時、王からの信頼も厚かった。

だがそんな王から、最高の破壊神、究極のアルティロイド、などという単語が出てきては、クリッパーとしては良い気はしないのは当然である。

「ふっふっふ、クリッパー。そんなにいきり立つな。究極のアルティロイドは対命の騎士専用なものだ。命の騎士が相手では、いかにお前といえども相手が悪かろう?」

「否定はしません。ですが、王が行けと命じられれば、俺は例え命の騎士が相手でも、全力でその首を狩りに行きましょう」

深緑の王は、この言葉に笑い声を上げた。今の身体の具合は、笑っただけでも響く程の悪さだ。それ故に、ここ最近の王は滅多に笑っ事がなかった。

「だからこそ、私はお前を頼りにしているのだ。その曲がる事のない忠誠心こそ、私は気に入っている」

「ありがとうございます」
クリッパーは深々と頭を下げてみせる。それと共に、リオも頭を上げる。

「今日はもう一人になりたい。私の護衛はここで良い」
クリッパーとリオの二人は、「はい」と返事をする、静かに王の後ろ姿を見送る。

「うっ、ゴホッ……ゴホッ……!」

玉座に倒れるように座り込んだ深緑の王は、そのまま激しい咳を

続ける。口元を手で押さえ、咳の度に痛む心臓を、鷲掴むように握る。手を見ると、大量の吐血が確認できる。

「ふん……ジュークめ。何を企んでおるのかは知らんが、ゼロが育てば貴様の野望も、全てはゼロになる」

再び激しい咳と吐血。それと共に襲ってくる激しい痛み。

王の、このような体調不良が現れ出したのは、第一次開放大戦の最中になる。いや正確には、第一次大戦のほんの少し後である。

第一次支配開放大戦時、反逆したアルティロイド、風の騎士ジュークは王を暗殺しようと企てる。その暗殺は成功したかに思われたが、殺せたかに思えた王の肉体は、王が造り上げた痛みを感じなく、治癒能力を高め、肉体の限界改造を施されたいわば人形だったのである。

その際に油断したジュークは、王による浸食行為を受け、その肉体と精神を乗っ取られてしまう。これによって深緑の王が誕生したのである。

では何故、ジュークの肉体を乗っ取った王が、これ程までに衰弱しているのか。それは再び、第一次開放大戦の渦中へと戻る。

大戦の中で、ジュークは自分の意志と、その思念を同じくする同士を集めていた。城国内部からの反逆者でもある。数では圧倒的不利なジューク達は、その体内に爆弾を飲み込み人間爆弾となる。特攻する事によって、城国内部の戦力の低下と混乱を狙ったのだ。この作戦による多くの被害者は出たものの、戦果としては多大な貢献をし、時代の裏舞台として一役買っていたのだ。

当然、ジュークの身体の中にも、これと同じ爆弾が入っている。第一次大戦から、約十年、身体の中に入り続けている爆弾は、今でもジュークの肉体を蝕み続けているのである。

「だが……この謎の衰弱は良い。問題なのは、何故私の魂が、この肉体から離れないのか、だ」

王は自分の魂を、他人の身体に憑依させる事ができるわけだが、勿論、抜け出す事も出来るのだ。それらの行動は、基本的には王の

判断により、好き勝手に行えるものだったが、今回の肉体だけは何故かできなかったのだ。

「まあ良い……ゼロが育てば良いのだ、ゼロが育てば……。こんな苦しみからも解放させられる……」

今にも死にそうな顔だが、野望に満ちた笑みを浮かべ、深緑の王は天を仰いだ。

そしてゼロという究極のアルティロイドが誕生してから、六年が経過。第二次開放大戦から見ると、十五年が経過したのである。

14 風の騎士の挑戦

「では、ゼロを解放します。宜しいですね？」
学者からの問いに、深緑の王は静かに頷く。

目の前にいるのは、見た目では普通の男の子。これといって特徴はない。

長すぎ短すぎないぐらいの、栗色の髪の毛。目は瞑っている為、詳しくはわからないが、やや垂れ目だろうか。体格も年相応な細身であり、小柄である。

纏う雰囲気も、例えば闇の騎士クリッパーのような、威圧感があるかといわれれば、全く無いといって良い。

本当に見た目は、ただの子供である。

しかし、この少年が王の造り上げた、究極のアルティロイドなのである。

「さあ、早く私に、我が子を見せてくれ……！」

学者は小さく静かに頷くと、少年の入ったカプセルを、開ける為の準備をする。電子盤の上で指を動かし、規則的にカタカタと鳴るすると圧迫されていた空気が、一気に外に漏れ出すように、甲高い音が響く。少年が浸かっていた緑色の液体が、吸い込まれるように排水されていく。

そして全ての工程を終え、カプセルの中には少年ただ一人になる。カプセルの中の少年は、ぴくりと動くと、呑気なあくびを一つ。

「……やあ、おはよう、王様」

室内には、蟻よりも小さいかもしれない、どよめきが出てくる。新たなアルティロイド、無からの創造は上手くいったのだ。

アルティロイドを造ろうとした時、大概は肉体の改造過程による、衝撃に耐えられず、その命を絶やしてしまう事が多い。知られていないだけで、一体何人の人間が、この事柄で命を奪われたのかは、知る由も無いのだろう。

「ゼロ……?」

「そうだよ、王様。僕は確かにゼロだ。このカプセルで生まれた瞬間から、僕は貴方にゼロとして育てられたのだからね」

ゼロという少年は、その幼い顔立ちとは裏腹に、あまりにも大人びた口調で、そう言ってみせた。

うつすらと笑い、その表情から読み取れるものはない。極めて無情といえる。何を考えているのかが、全くわからないところに、ゼロの不気味さを感じられるのだ。

「お前が私と会話をして、はじめて実感するよ。私は真の究極を造り上げたのだ、とな」

ゼロとは違い、深緑の王は無表情。しかし、その見た目の割には、隠しきれない歓喜が溢れ出す。対照的な二人の、外面と内面だ。

「……それより」

ゼロは辺りをキョロキョロと見回す。一通り見終わると、溜め息を吐き出し、悪態をついた。

「寒いんだけど……何か、僕用の着る物はないの?」

「私はお前を造るのに必死で、お前専用の法衣を用意していなかった。しばらくは適当な服を着ていてもらえるか?」

深緑の王は、近くにいた研究員風な男に手招きする。だがゼロは、その行動を止めさせた。

さすがにこれには、その場にいた全員が、呆気に取られた。何故ならば、城国では王は絶対の存在であり、神の存在に等しい。

王の好意を無下に扱うというのは、孫の代にまで罪が及ぶ程に重いのだ。そんな誰もが恐れる行為を、ゼロはあっけらかんとして、平気な顔をしてやってのけた。

「自分で取りに行くからいい。仲間にも一言だけ、挨拶をしておきたいしね」

「そうか。ところでゼロよ」

「わかつているよ。その男……風の騎士ジュークの呪いを、解いてほしいんでしょ?」

「話が早くて助かるな。全ての事を終わらせたら、玉座まで赴け」
ゼロは薄く笑うと、小さくコクリと頷いた。そしてそのまま、自分が文字通り生まれた部屋を、静かに後にする。

部屋から出ると、ゼロにとっては初めてとなる、光というものを経験する。ずっと暗い部屋の中にいて、動き出す時を待っていたゼロにとつて、この僅かな光でさえも、目が眩む程に不快な事だった。しばらく立ち続け、光に目が慣れると歩き出す。これも初めて歩く道なのだが、ゼロには親しんだ道のように、軽い足取りで歩く。

「キャハハハ！ 裸で歩き回る男の子、可愛いじゃない？」
すると、これまたゼロにとっては、初めてなのによく聞き知った笑い声が、耳に届いてくる。

ほとんど茶化し気味な笑い声に対して、ゼロは清らかすぎるくらいに、純粹な微笑を浮かべる。

「やあ、光の騎士リオ。はじめまして、かな？ そして闇の騎士

「俺の名を呼ぶな。貴様に名を呼ばれる筋合いはない！」

双子の騎士の片割れは、リオとは対照的に、険しい顔つきでゼロを見ている。むしろ敵意さえ感じさせる程だ。

しかし、そんな闇の騎士クリッパの威嚇にも、平然として笑みを止めない。

「そんなにカツカしないで。僕達は仲間なんですからね、仲良くいきましようよ」

「生意気ね、キャハハハ！」

「ふふ……。そうだ、僕が着れるような服はありませんか？ さすがに裸で歩き回りたくはないからね」

なんだかんだと、リオが先導する形で、ゼロを案内していく。それを少し後方から付いてくるクリッパは、変な気を起こしたら『いつでも首を刎る』という、覚悟を持っている。

クリッパは、ずっと前からゼロの存在に、良い気はしていない。かつては最強の火の騎士を、上回るように誕生した闇の騎士。しか

し、絶対の忠誠を誓っていた王自らに、それらを超える、究極のアルティロイドの存在を宣言された。

つまりは今現在、自身の目の前にいる、この少年こそが、最強を超える究極のアルティロイドなのだ。良い気分でいられるわけがない。

「ガキンちよ用の服は無いみたいね、だぼだぼしてるけど、それで我慢しなさいよね？ キヤハハハ！」

着衣などが収納してある部屋までやってくる。城国で暮らしている一般人から、兵士などの服もあり、数えきれない程の服がある。

ゼロのような、低身長の子供用の服があるにはあるのだが、戦闘もこなす事を想定すると、ゼロに合う服は限られてくる。仕方がなく、少し上のサイズに収まったのだ。

「……あまり良い気はしませんね。これ、かつての火の騎士が使っていた法衣の、子供版でしょう？」

「キヤハハハ！ 生意気言わないのつて。新品だから、別に本人が使っていたわけではないでしょ。多分、予備にあつたのを使わなかったんでしょ。当時の火の騎士 ティーダ兄様は、期待されていたんだから、ね」

笑みを絶やさなかったゼロが、その言葉を聞いて、やや気を悪くしたのか、むすつとした顔になる。

普通に見てもわかりやすい反応を、クリツパーは当然見逃すはずもなく、間髪入れずに言葉を放つ。

「どうした、笑い顔を崩さなかったゼロ様が、随分とわかりやすいじゃないか？」

「いえ、昔の物とはいえ……どうして究極のアルティロイドである僕が、下等な戦士の服なんかを着なくてはいけないのかなって。僕用の法衣の製作を、急務にさせないかね」

それに気を悪くしたのは、クリツパーの方だった。

「火の騎士は、貴様が思っている程に容易くはないぞ！」

明らかに苛立つクリツパーに対し、ゼロは笑顔に戻っていた。霧

困気も穏やかそのものである。

「ほう……事実をそのまま言っただけのつもりでしたが、闇の騎士さんを怒らせてしまったみたいですね。すみませんでした。しかし、そこまで推される騎士ならば、是非とも一度戦ってみたいですね」

不敵な笑みだった。言葉の割には、自信に満ち溢れている。いや、むしろ「自分が負けるどころか、苦戦するはずもない。そんな事はやる前から、目に見えているだろ」とでも言いたげである。

そんなわかりやすすぎる態度に、クリッパーは怒りを通り越して、ただ黙りこんでしまう。薄々、クリッパーも感じられたのだろう。

十五年前、火の騎士ティータと共に戦った、対ティータ戦。圧倒的な戦闘力を有していたティータを前に、何も出来ずに敗北を喫した。そんな圧倒的な力を、この目の前の小さな少年ゼロから、感じ取れたのだろう。

仮にもクリッパーの予想通りならば、自分にも、そして最強のアルティロイドであるティータをもつてしても、ゼロを相手に善戦する事もかなわない。

そんな悔しい現実に、クリッパーはただ無言で、力強い拳を握り、耐えるしかなかったのだ。

「そう悔しがらないください。火の騎士は元より、貴方も相次に強い。それは誰もが認める事実ですよ」

「……慰めのつもりか？ 俺はそこまで堕ちていないつもりだ」「慰めだなんて……事実を言ったままでですよ。僕は事実しか言わないんです」

クリッパーは、わざと聞こえるように舌打ちをする。その舌打ちの音を聞いて、ゼロも聞こえるように、クスリと笑う。

「ただ 現時点、究極にして最強なのは、この僕ですけどね。」

さて、王様を待たせすぎました。行きましようか？」

恐ろしい程だ。何が恐ろしいのかというと、クリッパーの放つ怒りそのものがだ。現にリオは、それを察知していた為に、何も言葉

を出せず、黙って傍観している事しかできないでいる。

ただ怒りの種類が、通常のそれとは違う。ネガティブな怒りではなく、ポジティブな怒りである。単純な例えを出せるのなら、絶対に強くなってやる、という気持ちを感じさせるのだ。

闇の騎士の最強という称号へのこだわりは、更に激しさを増したと見て良いだろう。標的は最強のアルティロイドであるティータと、究極のアルティロイドであるゼロなのだ。

険悪なムードを醸し出しつつも、ゼロ、リオ、クリッパーの三人は、深緑の王が待つ、玉座へと進んでいく。

真っ先に部屋の中へと入ったのは、他でもなくゼロである。入る際には、誰もが礼儀を重んじるものだが、ゼロに限っては例外というものだ。

権力よりも暴力という名の力が、最終的に相手を圧倒させる最良の手段である。それに賛同できるか否かは、議論すべきところではない。ただこの時、この時代に限り、絶対的に言える事なのだ。

「……遅かったではないか」

「申し訳ありません」

と、答えたのは、リオとクリッパーである。ゼロは何も言わない。

「ちよつと色々とおつてね……。さて、そろそろ始めようか、王様

？ 風の騎士ジュークの呪いを解くんでしょ」

「ああ、そうだ。お前を造り上げた、一つの理由なのだ。では、

早速始めてもらおうか、ゼロよ」

やはりゼロは、王が相手でも堂々としている。というよりも、礼儀を知らない。

しかし深緑の王は、そんな事程度の事は、全く気にもしていない。仮にも王である。その辺りの器量は、ある意味でも持ち合わせているという事だ。

ゼロはゆっくりと、深緑の王へと近付いていく。その光景を食い入るように見守る、リオとクリッパー。クリッパーに至っては、相

変わらずゼロを信用していないのか、何かあれば後ろからでも襲おうとする気迫を見せている。

「じゃあ、いくよ」

「うむ……」

深緑の王の額に、自ら手を触れるゼロ。耳が痛くなる程の静寂が漂う。

ゼロは精神体となり、深緑の王と風の騎士、二つの融合した精神世界へ入り込む。この間、王とゼロは、まるで死んだように動かなくなっている。

（さて、風の騎士ジュークの精神体はどこかな）

特に風景らしき風景もなく、ただひたすらに真っ白な世界。それが精神世界というわけでもない。精神世界は心の世界。その人の最も強い思いが、具現化する世界である。

真っ白な世界というのは、その人物が何も思っているものがない、というのが簡単な考え方である。ある意味では、無の境地と呼ばれるものなのかもしれない。

そんな白の世界の中、一人の男がゼロの前に現れる。

「誰だ、他人の世界に干渉してくるなんて……あまり感心できるものではないね」

それはこの世界の主、風の騎士ジュークである。精神世界のジュークは、数十年前と同じような容姿をしている。恐らくは、王に精神を乗っ取られてから、当の本人であるジュークの精神は、半分眠っているような状態にあったからだろう。

核となる王を自分の肉体に押し止める、という目的は根強く働いていたが、それ以外の部分は完全に機能していなかった。ジュークの時間は、乗っ取られた瞬間から、通常の時とは違う速度で動いていたのかもしれない。

「それはそれは失礼したね、風の騎士。でもこれは仕事なんだ、僕は僕のやるべき事をする為に、わざわざこんな所まで来たんだ」

「わかっている。王の魂を縛り付けている元凶である、僕を始末し

に來たのだろう？ 意識は眠っていたが、王を通して時代を見てきたつもりだ。……ゼロ、恐ろしいものを造ったものだな」

永い年月を眠っていても、ジュークの観察眼は衰えてはいない。変わらぬに冷静沈着だが、ゼロに内包された驚異を見抜いている。「さつすが！ アルティロイドの切れ者、風の騎士ジュークだね。話が早くて助かるよ。僕も他人の精神世界にいて、良い気はしないんだ。さつさと終わらせたい」

「……甘く見られたものだね。戦いに関してはブランクがあるが、容易く殺られるつもりはないよ？」

戦闘意志を、ゼロに当てていくジューク。逃げるつもりも、穏便に済ませるつもりもない。来る相手は拒まず、全てを迎撃してみせようとしている。

勝ち負けの問題ではない。それが風の騎士として、一生を全うしようと感じている、ジュークの戦い方なのである。

ジュークは久々となる愛剣、深緑の剣フルーティアを構える。ちなみにこれも精神世界の剣。本物ではない。

「どうした、君は構えないのかい？ 僕を始末しに來たんだ、武器の一つぐらいは持ってきたのだろう」

「武器？ ああ、剣とか槍とかの事ですか。そんな物は持ってきていませんよ」

「何、持ってきていない、だと！？ いくらなんでも……舐められたものだね」

そう答えたジュークの反応の中には、馬鹿にされた事に対する怒りの感情はない。むしろ相手は格上の存在、これは風の騎士としての挑戦である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4847o/>

アルティロイド 究極の生命体

2011年9月25日03時12分発行